山岳



Vol.90／1995

KAMOSHIKA

山岳テントの理想形、エスパースII誕生。

さらなる設営の簡素化、耐風性、居住性の向上、そして軽量であること。
8年間におよぶ試作、テストを繰り返して生まれた山岳テントのひとつの結論です。

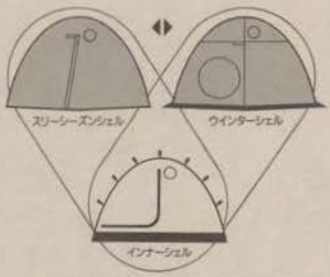


エスパースII・スリーシーズンセット(スリーシーズンシェル+インナー)
降雨がある季節、山域で使用する組み合わせです。アウターシェルの生地には耐水圧2000mm/㎡以上の防水加工が施され、雨、風をシャットアウトします。またスリーシーズンセットを冬期に使用する場合、アウターシェルは別売のウインターシェルに交換します。



エスパースII・ウインターシーズンセット(ウインターシェル+インナー)
低温下、降雪がある季節、山域で使用する組み合わせです。アウターシェルは防風、保温を目的とし、結露による凍結を防ぐため通気性があります。またウインターシーズンセットをスリーシーズンに使用する場合、アウターシェルは別売のスリーシーズンシェルに交換します。

山岳テントはフレームの組本数を増やせば、耐風性や居住性は向上します。しかしこれでは複雑なフレーム構造のため設営に時間を要し、重量、そして収納サイズまで増やすことになります。そこでエスパースIIはフライシートや内張りをテントの付属品でなく、テント本体の一部として一体化することに着目。プロトタイプによるテストを開始しました。そして8年間におよぶ厳しい自然条件のもとでのテストの結果、アウターシェルとインナーシェルにより構成された、全く新しい概念のテント、エスパースIIがここに誕生しました。



アウターシェルの交換により、オールシーズン使用可能(PAT.)。

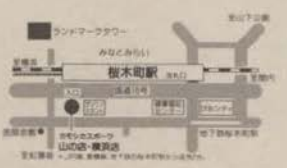
カモシカスポーツは登山家の信頼に応えます。

カモシカスポーツ

山の店・本店 ☎03(3371)4333
〒169 東京都新宿区高田馬場3-3-3

山の店・横浜店 ☎045(212)2044
〒231 横浜市中区桜木町3-11





●AM10:30～PM8:00(月～金)／AM10:30～PM7:00(土・日・祝)
●定休日／日曜日(4月・7月・8月・12月は定休日なし。他の月は最初と最後の日曜日は営業します)

第九十年（通巻一四八号）

山岳

一九九五年

山岳　一九九五年　目次

日本山岳会創立九十周年に想う……渡辺兵力……7

日本山岳会創立九十周年記念登山・マカルーへの道……重廣恒夫……23
チョモランマ北東稜からの初完登―日本大学エベレスト登山隊一九九五の記録……神崎忠男……35
エベレスト・サウスピラーの登頂……本郷三好……45
富山県山岳連盟・ガッシャーブルムⅠ峰遠征隊……佐伯尚幸……51
ニェンチンタングラ山群の未登峰　タンラ・ポ峰の登頂……黒川惠……55
五十歳以上のダウラギリⅠ峰登頂……渡邉玉枝……61
グレート・トランゴタワー東面　トランゴタワー東面の新ルートに挑んだ記録……渡辺朋幸……69

東西にみる山岳観の史的変遷を探る……筑木力……76
屋久島の世界自然遺産登録と環境保全―増大する登山者と地元の姿勢、開発と自然の調和は可能か―……吉村健児……92
女性懇談会をふり返って―戦後五十年、日本山岳会婦人部の歩み―……小倉董子・三枝礼子・熊谷とも子・山口節子・早川瑠璃子・穴田雪江・松永康子・伏見紀子・黒沢通子……98
旧制浪速高校山岳部の歩み―七年制高校の登山記録を中心として―……今西壽雄・徳永篤司……109
行雲とともに―高畑棟材伝―（下）……浅野孝一……118

図書紹介……146
『東西登山史考』（中島　寛）、『遙かなるチベット』（大森久雄）、『ヒラヤ文献目録』（田村俊介）、『南極探検日誌』・『南極点』・『北極点』（宇都木慎一）、『白川義員作品集・南極大陸』（羽田栄一）、『My Vertical World』（松沢節夫）、『山は魔術師』（岩瀬皓裕）、『日本アルプス登攀日記』（庄田元男）、『ヒマラヤはどこから来たか』（山本健一郎）、『早坂敬二郎遺稿集・長き尾根の果てに』（絹川祥夫）、会報「山」図書紹介一覧

＊

追　悼……173
広瀬　潔氏（大井正一）、月原俊二氏（吉村健児）、山本（高橋）敏三氏（川戸昭三）、辰沼廣吉氏（大田　敬）、権藤太郎氏（深田泰三）、寺村栄一氏（中村太郎）、佐久間惇一氏（五十嵐篤雄）、伊達忠雄氏（中世古隆司）、山下道雄氏（田中邦彦）、鴫原啓佑氏（村木潤次郎）、河野幾雄氏（金山淳一）、阿部國雄氏（中谷　充）、山口一孝氏（内山脩一）、石間信夫氏（安間　荘）、中河与一氏（織内信彦）、岡本龍行氏（山口耀久）、土肥正毅氏（中島信一）、佐藤富佐雄氏（金森繁三郎）、小塩丘平氏（小倉　厚）、名児耶達男氏（神谷恭平）、宮原利重氏（金子丞二）、笹川慶子氏（望月達夫）、清水弥栄治氏（佐藤誠二）、会報「山」訃報・追悼文一覧

＊

支部だより……210
会務報告（一九九四年六月～一九九五年五月）……226
山岳図書目録……A45
山岳地域における自然エネルギー利用発電の普及状況と今後の展望……森　武昭・鳥居　亮……A32
英文梗概……A21

写　真
海外登山の記録……32～33
追悼……176～177

表紙挿絵「岩と雪」
本文中カット
大谷一良

日本山岳会創立九十周年に想う

渡辺兵力

はじめに

本年は会の創立九十周年、年報・「山岳」も第九十年になった。そして敗戦を契機に近代日本の社会の秩序と動向がその軌道をかえてからも半世紀近くが経過しようとしている。たしかに会にとっても各会員にとっても今年は一つの節目に当る。この機会に各自の「山」のことを再考してみるのも有意義なことと思う。

日本で生まれ、故国の伝統的文化で育ちやがて「山」が好きになって、日本各地の山に登りだした会の先輩達の「山登り」(その目的と様式)は明治、大正、昭和、平成と年号がかわり、その間に社会全般にわたる思想、経済、技術、制度等の変遷過程のなかで必ずしも一様ではなかった。しかし種々の環境変化に耐え、設立時の精神を守りながら、夫々の登山を続けてきた九十年の足跡に我々は誇りをもつと共にこれからの会の歩み方にいささかの責任を感ずる。

会の過去は「山岳」で、年々の活動の詳細は会報・「山」を繙くことによって知ることができる。幸い、各十周年前後の年報には「回顧と展望」を扱った先輩会員の文章もある。今日、日本には数多くの山岳会があり夫々の目的を

もって活躍している。本会の会員が五千名を越えたといえ、日本の「山好き」の人のごく一部に過ぎない。けれども過去を振り返えると本会が我が国の登山活動の先達を務め、日本を代表する山岳会であったことは自負できる。

とはいえ、今日という時期は多様な価値観の出現に起因する各種の困難な問題をかかえ、その解決には何か新しい秩序原理を求めざるをえない状況にある。我々の登山とて夫々の時期の諸環境の制約の下で行われるのであるから今後の社会の動向と無縁ではない。登山を囲む環境の変化に当を得た対応をするには，会員各自が自分の登山観乃至登山者としてのアイデンティティーをもち、その上で会の歴史を踏まえて日本の登山活動を展望し、これからの会の役割を考えていく必要がある。このような考えから、九十周年の記念的実践の一端として会員諸兄姉の参考に役立てばと願い、以下、いささかの私見を述べてみようと思う。

一、登山とは・一つの理解

Ⅰ 何故、山に行くのか

㈠近代登山考

人間の歴史では「高い・深い」山々は近寄り難い空間と思い込んでいた時代が長く続いていたらしい。やがて歴史の進展と共にそれまでの恐怖感が薄らぎ「山」・自然に対して好奇・探究さらに観賞の心をもつようになった。この自然観の転換を経験してから、人間は各自の生活、信仰、そして科学や芸術の糧を得る目的の一つの手段として山地に入りそこを登った。これに対して我々は「山に登ること」自体を目的とした山登りをやっている。これを今日では登山といっている。

私たちはどうしてか「山」が好きで、自ら山に登るのが面白く、楽しいのである。何故「山好き」になったかの理由は情動的次元の問題であって論理的に説明しがたい。要するに経済の成長的発展を土台とした近代文明の文化諸環

境下で育った者としては、各自の生活上の余暇における数ある趣味、遊びの中から「山」を選び、それを登ることに熱中しているのである。私はこの「遊び」としての登山こそが近代的な登山と呼びうる行為だと了解してきた。

(ロ)登山の面白さ

多くの苦痛や困難そして危険さえ伴うことを承知の上で敢えて登山をする理由を一言でいえば「面白いから」ということになる。その面白さの中味を私は次のように理解してきた。

日本の伝統的文化環境では容易に経験できない、西欧文化出自の「自由」の精神と実践に近いものを登山行為の過程で体験でき、この舶来の「自由さ」が登山の最大の魅力だと思ってきた。数ある対人的・競技スポーツとちがって登山には特別の規則・ルールがない。この点が登山に自由さをもたらす基本要因である。登山者に守るべきものがあるとすれば、それは日常的社会生活上の文化的生活則だけである。登山活動では衣食住生活様式がついて廻るから普通の生活上のルールは守らねばならない。かくして、登山専用則がないから自分の登山の「計画と実践」について、これを自由に選ぶことができる。ここに登山における「自由」の核心がある。しかしこの自由は日本流の勝手気儘ではない。一種の不自由さを伴ったもので、さらに自由なるが故に必ず自己責任を伴う自由すなわち「責任ある自由」である。加えて自分の自由の保障に他者の自由を守る義務があるという条件が伴う。

山・自然は一見不動と受け取れるが、その懐に入ると常に「山」は可変的存在であると見るのが現実的である。登山者は常に「山」の変化に適応していかねばならない。これを誤れば自分と山との間の調和を失い、悪くすると危険におちいる。この適応の仕方の選択もまた登山者の自由である。私は予てから偉大な登山家とは幅広い適応能力をもつ人と考えていた。

第二に、自分にとって未知の世界を既知のものにできる喜びの体験が登山行為によって得られることが、もう一つの「山」の魅力・面白さだと思う。私を山に駆り立てる動機に未知・未踏の空間への強い憧れがあったことを否定できない。十八世紀からの西欧の探検的登山の発生は、それまでは未知・未踏であったアルプス山域を自分等の既知の

ものにしたいという人間性にとっての必然的な行動であったといえよう。近代登山史は世界各地の人類未踏の頂を目指す登山からはじまり人間未踏の登路の先行を競う登山へと移行した。しかし個々人にとっての未踏の山頂や登路は今日でも無数に存在している。それ故に登山という人間行為はこれからも後を絶たない。

Ⅱ　登山の目的と様式

㈠三つの目的（登頂・登降・歩行）

山に登りその頂に立つ、すなわち「登頂」を目的とする行動が登山であるという理解が一般的といえよう。しかし登頂を目的としない山登りは登山ではないという考えには賛成できない。登山という日本語表現通り、「登る」行動自体を目的とする山登りもある。この立場からすると登頂は一つの結果にすぎない。「登る」ことを目的とする登山をここでは登頂と区別して「登降」と呼ぶことにする。私はどちらかというと登降派であった。人間の「登る」行動をみると、足で登る・登行と手まで使って登る・登攀の二通りに分けられる。登山史は登行型から登攀型へと進展してきた。若い登山者はこの順を踏む場合が多い。最近、登攀目的専門化の結果フリークライムや凍結時の滝登りといったスタイルが派生した。第三は登頂、登降といささか目指すところがちがい、ひたすら山地を歩くことの楽しみを目的とした登山がある。これを「歩行」とした。いわゆるハイキング、トレッキングと呼ばれているのがこれである。西欧にも山地彷徨を楽しむ人が多い。

以上、登山計画の目的を三つ示したが、この区分は登り方の種類分けにも通ずる。普通は一人の登山者が三つとも実行することが多い。他方、目的設定は各自の「好み」ともいえるから自ずから一目的への専門化に進む傾向がある。さらにつけ加えると、今や名声と金の取得が目的ではないかと思える登山も散見される。

㈡登り方諸相

以前はさほどの違いがなかった登山様式が登山が盛んになるにつれて多彩になった。それだけ登り方を選択する巾

が広くなって登山が一層面白くなったともいえる。この様々な姿を(A)登山者と(B)対象の山との二つの側面から整理してみる。

(A)　登る者の立場から

日本の風土で育った初期の人々は登山専用の道具類を殆ど持たずに深山幽谷に足を運んだ。大正の終り頃から西欧アルプスでは普通に使われていた登山諸用具が輸入されてすぐに模倣の国産品が出廻り、登山活動に各種の道具類の携帯が不可欠という時代になった。こうした登山用の新しいハード技術の提供は、これを使う登山技術のソフト面の進歩を促し普及させた。その結果、①登山諸行動のスピード化、②登行・登攀活動の範囲（山域、登路、季節）の拡大、③登山の安全性の向上、などに大いに役立った。近年における科学的技術の一般的進歩の恩恵を受けて、登山用具類の技術的進歩は加速されたといってよい。登降に使う用具類だけでなく、軽量で便利な食品類、衣類、天幕などの性能が改良され、加えてカラフルなファッション化の傾向さえうかがえる。こうした登山技術の進歩が登山の普及、大衆化を促す強力な条件になってきている。

登山行動は食事や睡眠同様に他者に代ってもらえない単独の行動であるから、自分独りで行う「単独行」が原点といえよう。だが安全性を考慮して単独での山行はすすめられないという考え方もあった。しかし一切の判断と対応を自分の責任で行うことを体験する単独行は登山の「自由」を学ぶ基本的な登り方でもある。山行は通常何人かの仲間とパーティーを作って出かけることが多い。この場合リーダーとフォローアーとの人間関係が問題になる。リーダーは隊全体の状況を適確に判断して同行集団の意志を合理的に決める役割をもち、フォローアーはそれに上手に従う義務がある。個人主義の故郷である西欧ではリーダー・レスの登り方が増えてきたといわれるが、やはり原則としてリーダーありの様式を守るべきと思う。私は良き登山家になる第一歩は良きフォローアーになること、そして良きリーダーとは各隊員に「集団における自由」な振舞いができるように隊をリードする人と考えてきた。

ヒマラヤでの探検的登山時代（一九七〇年ごろまで）の登山では隊を組織的に編成し、極地法と称する漸進的な登

り方が主流であった。本会のマナスル行はこの様式を採用した日本での第一号である。その後アルパイン・スタイルと呼ばれる少人数で速く登山を終ろうという登り方が多くなりつつある。こうした登山様式の多様化の線上にパック・ツアー旅行に似たトレッキング方式が盛んになり、最近は登山家を公募して遠征隊を請負うかたちもでてきた。こうなると登山様式の商品化時代といえよう。

近代登山のごく初期には、山地で生活的登山をやっている人たちはその土地の「山」をよく知っているという考えで、目指す山地の土着の人を案内人として雇い同行する登り方が行われていた。これが山案内人・ガイドの誕生である。他方、西欧でも日本でも若い大学生が登山をやるようになってガイド・レスの登り方がはじまり、やがてそれが主流になった。ガイドは山の情報や技術をもった人であるが、今日は案内書・ガイドブックが普及して、「山」の情報は生きた人から動かないものに代ってきた。これも登山様式の変化の一面である。

次に「遠い・高い山」を目的とした海外遠征では案内人というより専ら荷担ぎ役としてのポーターを雇うことが不可避であった。その後外国隊に何回か同行して「高い山」での登山技法を習得し雪線以上の登山隊の行動に協力できる通称シェルパ（本来はチベット系の民族名）と呼ばれる人々が生まれた。今日のところはシェルパ同行の登山が多いが、そのうちシェルパ・レス様式が増えよう。

(B)　山の視点から

登山対象としての山も様々である。ここでは高低と遠近のちがいを目安に整理するが、勿論量的区分ではない。「高い山」とは雪線以上の山々を指す。そこは生物圏外の岩と氷雪の世界で、雪線下の「低い山」の方は緑一杯の生態系の所在する山々である。両者は異質な世界で登り方が大いに違う。「近い山」とは一両日の行程の山。「遠い山」とはより長旅を必要とする山である。日本の「山好き」の人々の多くは「低い・近い山」から登山の第一歩を踏みだし、次第に「山」の面白さにひかれて精進を重ね、やがて「遠い・高い山」を夢見て、そこに行きたい強い願いをもち、夢を実現すべく努力する。勿論、日本の山々で、充分満足した山登りのできることを知っている人も沢山いる。本来

山の高さや困難さだけで登山の価値を云々するのは当を得ない。

次に山の所在地の国の内外について触れておきたい。今日の感覚では国境を意識するのはいささか時代おくれかもしれないが、私は文化の視点を重視したい。海外の山行は私的な場合も、何等かの社会的協力を背景とした公的な性格をもつ登山でも、共に異なった環境（自然と文化）下の活動であって、行き先の土着の文化環境については十分に留意した対応をするのが登山者としての作法であると思うからである。

Ⅲ　登山の評価

登山の原点乃至本質的様式は単独の行為であるという認識に立つ限り、「山登り」（目的と様式）の評価は個々人の主観的なものと考えられる。「山」を終って自分の心に満足感がもてればそれを良い山行と評価してよい。ここにも登山の自由さがあるが、それ故に軽々しく他者の登山の可否を批判することは慎むべきと思う。登山者は沢山いて夫々多彩な登り方がされている。いい換えると登山にも登山界という社会的次元の側面がある。この登山界の先端をいく登山スタイル、例えばヒマラヤの巨峰での無酸素、単独、冬期の登山とか、幾つかの山の最難路を続けて短時間に登降するとか様々な様式が生まれて、その都度マスメディアで我々も知ることになる。これらは人間の様々な能力の限界に挑戦する目的設定の行為が、偶々登山の形式を求めたものと評価できる。本人が満足していればそれで良いと考えたい。以上が私の登山観の一端である。

二、　九十年の歩み

Ⅰ　明治・大正・昭和初期

(イ)山岳会の誕生

我々の会は日本博物学同志会という同好会的集団の中の数人の仲間を核として明治三十八年に生れた。当時、山地の博物に興味をもつ人々が採集より「山」そのものに魅せられたのか、山岳に関する情報交流の必要を痛感して「山」専門の会誌を作る相談をはじめていた。その同志の一人の小島烏水がアルパインクラブ会員W・ウェストンに出会い、氏の勧めで山岳会という名のクラブを結成した。会の設立目的を示す文章に「山岳関連の種々の自然現象について科学、文学、芸術、其他一切の研究をすること」を強く前面にかかげ、広い視野にたった「山」への関心を提唱した反響か、結成一年後には四百名近い会員を全国から迎えたという。母体の同志会が私的集団であったので山岳会は文字通りの寄り合い世帯らしく会務は若干の幹事が担当し、会誌発行の仕事を重視する立場で当初から編集者をおく体制でスタートした。会長、副会長、理事団をおき、会則を整備したのは創立から二十五年も経た昭和六年であった。

日本における近代登山は明治三十年代に入ってからといわれているが、まずは日本アルプス中心に、次第に対象山域が拡がっていき大正末期には大方の山が登頂されてしまった。この時期の登り方の主流を新開路・探検的登山ともいう。この頃の「山好き」の人々は西欧の登山思想とその実践をひたすら文献情報から学び、それを心の糧として日本的登山様式で各地の山々を登っていた。ところが一つのショックが日本の登山界を訪れた。当時西欧でも注目されたスイスのアイガー峰東山稜初登攀に成功した槙有恒の帰国（大正十年）、その後の故秩父宮のアルプスご登山前後の松方、浦松、松本、麻生、各務、藤木といった本会の諸先輩のスイス・アルプスでの大活躍である。これを機会に「高い山」に登る諸技術と諸作法が本格的に日本に入ってきた。日本の山でアルプスに少しでも近い状況を求めると積雪期の山であり、岩場となると槍・穂高・剱ということになる。丁度その頃に旧制の大学・高校の学生山岳部が相次いでスタートした。連中は、有名なマンメリーの「より困難な登路、登攀」主義を信奉し、アルプス出自の登山諸様式を真似て日本の登山様式としては新しいスタイルで登山界をリードした。こうした西欧流の学習と経験が熟した必然的指向として、学生山岳部育ちの若い人々の間にヒマラヤへの夢が膨らんできて、それを現実のものにしたのが立教大学のナンダコート峰初登頂の成功（昭和十年）である。

かくして、創立三十周年頃までの本会々員の登山の主流は伝統の日本流であり、会の外で各学校山岳部が次の時代の登山様式を学習していたといえる。一方、年報・「山岳」は西欧の登山情報の受け手として、さらに創刊来の編集方針ともいえる会員の山岳についての諸研究の発表の場の役割を果たしていた。

(ロ)公益団体への変身

日本山岳会は昭和十六年に、今日でも山岳会としては数少い社団法人の申請を行い、認可を得た。私的団体から公益的事業を行う義務と責任を負った法人格への変身である。法人化への理由として「(1)登山は吾帝国の国民的対外運動であり、(2)我国自然美の愛護を高唱・実践し、(3)進んで世界各国の同好会と友誼を厚くし、(4)銃後国民の体位向上を計る」の四点をあげ、「今後登山界の指導に当り健全なる登山気風を振興せしめんがためには本会として名実共に本邦登山諸団体の代表機関たらしめること緊要なり」という認識にたち、会の法人化に踏み切った。昭和十六年というと日中事変の最中で国を挙げて戦時体制下にあった時である。おそらく法人化は本会を守り存続するためには避けられない対応であったと思われる。

社団法人の申請には定款及び細則の作成が必要である。当時の定款は十数次の改定・正を経て今日に至っているが、会の根幹を示した総則（第一～五条）のうち、第一条・会名、第三条・目的、第五条・支部設置、の三項目は字句表現に若干の改定があるが内容には変更がない。第二条・事務所は移転毎に変更し、第四条・事業の項目は登山界の情勢を見て、申請・認可時の五項目が後に八項目に改定された。申請した五項目とは「一、機関雑誌『山岳』其他図書の刊行。二、登山の指導奨励に必要な研究会、講演会、講習会の開催。三、登山施設の改善促進、其他登山者の為適切なる事業。四、目的を同じくする他の団体との連絡。五、其他本会の目的を達するに必要なる事業」である。その後に追加された五項目は「3山岳遭難の予防とその対策に関する企画及指導、4自然保護運動の推進、5海外登山の企画および実施」である。3、4項の二点は今日の登山界にとっても大問題であり、5項は戦後の会の活動がこれに充分に応えた。会の創立三十～四十周年の間は日本は事実上の戦時的体制にあって、本会にとっても最悪の環境であっ

たと想像される。これに見事に対応して、この期にむしろ積極的に戦後の状況に適応できるように会を運営してきた諸先輩に心から敬意を表したい。

Ⅱ　戦後の足跡

㈠昭和前期・マナスル遠征まで

戦時中に法人化して終戦早々に体協に加盟することによって制度上本会の団体としての地位は保障された。戦災で失ったルームも新設されてクラブ・ライフも復活した。敗戦後の厳しい状況下で日本中が再建に努め、遂に「戦後は終った」と公表する余裕ができて、我々の目も国外に向けられようとした時、先頭を切っての行動が対自然活動としての二つの海外遠征計画であった。第一が本会の五十周年記念事業としてのマナスル遠征（一九五二～五六年）、第二が政府の南極観測事業の開始（一九五五年）である。この南極観測隊には多数の本会々員も参加している。

一九五〇年のアンナプルナ初登頂以来、本会のマナスル初登頂までの間に八千㍍以上の山が七峰登られた。世界の山岳会のうち七番目に発足した本会がヒマラヤの巨峰の初登頂でも七番目というのも面白い因縁である。山の情報もなく外貨事情も不自由であって偵察から成功までに四年もかかった容易でない遠征登山であったが、マナスルの成功が日本の登山界に与えた影響は非常に大きなものであった。

㈡昭和中期・エベレスト行まで

戦後の復興が進み、社会が安定してくるにしたがい登山人口も増え各地に山岳会が生れた。その中で先鋭的な登山を目指したいわゆる社会人登山家の人々がアルピニズム指向の激しい「山登り」を国の内外で試みるようになってきた。この動きのなかで会はヒマルチュリ遠征（一九五五年）を試みたが、会活動はいささか保守的な姿勢で次の計画への充電の時を送った。一九六〇年代で八千㍍級の大方の登頂が終り、ヒマラヤは次に新登路からの計画の時期に入る。そこで本会では南西壁からの登攀を含むエベレスト計画を練り、一九六九年の春と秋に偵察隊を出し、翌年の春

に本隊が挑戦した。南西壁計画は敗退した（八、〇五〇㍍まで）が東南稜からの第六登は成功した。この年には東海支部のマカルー遠征も見事に成功しており、二つの巨峰への遠征計画を実施しえて会の実力を示した。

(ハ)昭和後期・三国友好登山まで

定款第四条・二項「登山施設」の仕事の一つとして昭和三十七年に山岳総合研究所・上高地山荘が開設された。老朽化して昭和四十四年に一時閉鎖していたが、その再建業務やルーム移転問題等が錯綜し会務はしばらくは国内問題中心に動かざるをえなかった。七十周年（一九七五年）に当たる前後から各大学山岳部出の若い会員の間でヒマラヤでは新しい縦走登山様式の発想が練られ、それがナンダデヴィー双耳峰縦走計画として開花した。この計画と実施の方式は本会のそれまでの遠征計画とは少し違ったスタイルをとった。第一はインド山岳会との合同登山隊として許可をえて、日本で本会の男子隊として初めての外国との合同隊であったこと、さらに計画立案と諸準備の仕事を殆ど登山隊員の力でやった点である。幸いにしてナンダデヴィーは計画通り成功した。

その後、国際的政治、経済情勢に変化がおき、中国で自国内の山々に外国隊を受け入れようとする動きがでて、各国の登山界が注目し、日本でも各種の計画案と中国への働きかけがあった。ところが昭和五十四年の夏に中国登山協会から本会のチョモランマ計画への許可と協力の報が届いた。許可から一年内に計画実施を終わらねばならない極めて切迫した状況ではあったが、その年の秋に偵察隊をだし、翌一九八〇年の春に本隊を送って、エベレスト登山史の原点ともいえるチベット側（北面）からの二つの登路、すなわち東北稜（近年では北稜と呼ばれるノース・コル経由のルート）からの第三登と北壁からの初登頂に成功することができた。この計画は、(1)準備期間の短さと対中国関係の経緯もあって登山経費の多くをマスコミ企業の協力に依頼し、報道の専門家を登山隊に編入したこと、(2)登山隊の編成に当り一部隊員の公募方式をとったこと、(3)外国隊受け入れが中国側も初めてであり、我々の側も社会体制の異なる国で相手の公式の協力をえて登山をする経験がなかったこと、といった会の遠征として初めてのことが多かったが、成功した結果、日中両国のその後の登山の進展に大きな役割を果たしたと思われる。

一九八四年にはナンダデヴィー縦走の延長として、再び若い会員からの八千メートル級の稜線の縦走計画が始動し、遂にカンチェンジュンガ連峰の縦走を遂行した。また数年前から本会学生部会員を中心とした海外の未知の地域の「高い・静かな山」へ小さい遠征をほぼ毎年計画して実施するようになり、これは今日までつづいている。

八十周年の祝い（一九八五年）を終った頃に、色々な点で本会創立以来最も画期的ともいえる特異な登山様式で、再び世界最高峰に挑戦することになった。いわゆる「チョモランマ／サガルマータ、日本・中国・ネパール三国友好登山」への本会の協力である。この計画の発想は中国側からだされ、それにネパール側が同意し、計画実現への協力を中・ネ両国の信頼する日本山岳会に求めてきた経緯である。たしかにこの計画は我々の登山の理解をいささか越えていた。中・ネ両国が夫々の国家的行事と位置づけた計画を、両国からの強い要請に応えて会をあげて協力したという国際的な行事と評価される。地理的には東洋にあるが、お互いに異文化の三国の登山家が一つの目的を目指して対等の立場で氷雪の自然に立ち向ってほぼ計画通りに成功した。しかも最高峰の頂の景観が予定された五月五日に見事にリアルタイムのテレビ映像で茶の間に届いた。この隊に参加した会員の労に敬意を払いたい。

㈡平成に入って・二つの遠征と会員の動向

戦後の会主催の海外登山（八回）はその悉くが夫々の未知・未経験への挑戦であって、会の仕事として有意義であった。一九八九年には会の事業としている「登山の指導奨励」の一環として一般の海外登山計画を援助する目的の基金制度を創設した。さらに平成二～四年にかけて未踏峰として残っているうちで最高の難峰ナムチャバルワ（中国・チベット自治区、七、七八二メートル）に本会の登山としては初めての本格的な日中合同隊のかたちで登山を計画し、実施した。これで世界の大物の初登頂はほぼ終止符を打ったともいえる。アルプスと同様にヒマラヤでも新登路登攀の舞台の多くは「岩と氷」の壁であった。この意味で岳連の五十周年を記念する計画といわれる一九九三年の群馬岳連隊の冬期におけるサガルマータ南西壁の初登攀の成功は日本のヒマラヤ登山史上の快挙と評価できよう。これでヒマラヤの「壁」の時代が一つの節目を迎えたといえる。山岳は「線と面」で構成されている。急峻な面の次は長大な線即ち

「尾根」が残っている。こうして次にマカルーの東尾根登攀が計画された。この計画の実施が本年の九十周年記念事業の一つという扱いになり、登頂を目標として本会の若い会員の精鋭を送りだした。天候と積雪条件のため当初計画の尾根筋通りのルートは辿れなかったが、登頂は成功し、目的を果たすことができた。

以上、戦後の会の活動を海外登山中心に述べたが、いささか片寄った見方だと受け取られるかもしれない。海外登山に参加する会員はたしかに限られているが、会主催の全ての遠征計画の実現は多数の会員の実働的協力と金銭的協力があって実施されてきた実績をみると、気持ちの上では会主催に適わしいものであったといえる。定款四条五項の「海外登山の企画と実施」に則した仕事で、併せて日本の登山活動の夫々の時期の先頭を歩いてきたことが確認できると了解してよいと思う。

我々の会は設立以来、山が好きで自分の登山をやってきた人たちが、会の目的や仕事に協賛して入会し、育ててきた山岳会である。発会以来の伝統的特色の一つに、多方面で活躍されている実に様々な知識と経験をもつ会員で構成されている点があげられる。「山好きで山に登る」趣味をもつと共に「山」を考えたり、研究したり、「山」から色々のことを学ぶことができると考えている人々が作っている山岳会といえる。と同時に、日本の近代登山活動の先達を務めるという行動精神を設立の時から九十年間守ってきた。しかし本会は日本の登山界の中の一集団で、その登山界は社会・経済環境を土台として存在してきた。このような理解を前提として、九十年間の本会会員の数量的動向を通覧してみる。今年五月現在の会員は五、四二四名である。一山岳会としては日本最大の規模であろう。統計資料レベルで年々の会員数を捉えることはできないが、創立早々に四百名近い会員が九十年目に十倍以上になった経過をみると、昭和初期、一九三〇年頃に千名に達し、戦時中の一九四三年には二千名になった。創立後二十五年で千名、さらに十三年後に二千名といった増加である。戦後は七年目で三千名に達し、その後やや停滞気味であって、四千名になったのはその三十年後の一九八〇年である。一九八〇年代に入ってから急増して八年間で五千名を越え今日に至っても増えつつある。一般論としては会員数の増加は会の発展の指標と目されるが、本会の場合は必ずしもそうとは言い切

れない。とくにこの十年間の増加会員の年齢構成が中高年齢層に片寄り、会の将来を担う若い年齢層の入会が相対的に減ってきている傾向が問題視されている。過去の状況では本会の会員には他の山岳会にも属している者が入会するという傾向が主流であったといえると思うが、むしろこれが日本山岳会の特性を生かす条件の一つと考えられる。今後は会員の数量的側面だけでなく、年齢層や登山観といった質的側面の動向が会の将来に対して重視されるであろう。

Ⅲ　一つの展望と願い

㈠登山の行方

我々の登山は一スポーツであるからスポーツ一般と同様、少数であるが人間の能力の限界の向上、具体的には記録を求めて常に最高を追求する人々がおり、他方でスポーツ的行動に快楽を感じ、それを求める多数の者がいるといった人的構成をもつ。これからもこの点は大きく変わるまい。スポーツの振興・普及とは後者の人数が相対的に増加していくことであろう。これを登山界に当てると「高い山」派が前者、「低い山」派が後者といえ、二つの層に分化し、さらに後者に属する登山者層に新人が急増する現象が登山の大衆化といえないか。私見では「高い山」への登山が盛んになることだけが登山の振興とはいえないと思う。以前から登山界には先鋭的という用語が使われていたが、この反語は存在していない。先鋭的登山様式では「人と山」との間に常に緊張を求める登り方をせざるをえない。別の言い方をすると「人と山」との間が密接している。それに対して「人と山」との間にある距離をおいて登る様式もある。いい換えると「山」を観ながらの登り方である。これを昔は静観的登山と表現していた。古臭い考えだが、これからこの静観的登山をする人が次第に増えていく方向を希みたい。過去の価値観では判断しかねる事柄や行動が急増してきている今日、昔の「山」の経験しか持ち合わせていない者が将来を語るのは当を得ないが、これが老生の一つの願いである。

㈡会のことども

日本山岳会は自ら規定した定款上の「目的と事業」の遂行を、代々の会務担当の役員会員の手でかなり着実にやってきたと評価したい。にも拘わらず、現状では色々と厄介な問題に当面していると、本年度の総会席上で会長が、「登山活動の推進、環境問題への対応、支部問題、青年層会員の拡充・育成、中高年登山者対策」の五項目を指摘した。このうちの「登山活動の推進」という課題に関連して想うことは、現行の定款第三条・目的の項に「健全な登山の指導奨励をする」とあり、この「健全な」といった抽象的、超時代的な用語表現では事が済まなくなってきている今日の状況に問題があろう。この課題については会員各自に色々な意見もあろうが、私見では前述した「登山の理解」を土台とし、今日及び今後の登山を囲む環境の諸変化を考慮して、「望ましい登山像」を集約して会としての考え方を持つ必要があろう。本会が「望ましい登山」と考えた登山の指導と奨励を行う問題は、会長指摘の「青年層会員の拡充・育成」と「中高年登山者対策」にも結びつく。さらに「環境問題への対応」(定款第四条4項・自然保護運動の推進)と定款で提示した「山岳遭難の予防とその対策」の二つの仕事は、会務であると同時に会員各自の登山活動の実践の場合、登山者の守るべき作法としての課題でもある。

登山諸環境の変化のためか、最近の登山・山旅が昔よりいささか慌しいように思える。山での行動が忙しいと登山者は山と間をおいて付き合う機会が少なくなる。私の持論では「山」を知ることが山での人災的事故を予防するのに役立つと考えている。「遭難の予防」対策を具体的に行うのはむずかしいことだが、山行機会を多くし、「山」・自然から危険とそれに対処する術を学ぶ気持が、登山事故予防に役立つと思っている。前述したように登山関連の施設や用具といったハード面が進歩して論理的には登山の安全度は急増している筈である。たちおくれているのはそれを使いこなすソフト面の技法の方であろう。岩や氷の山の登攀のソフト的技術は学習によって上達するが、より知的な総合的な登山活動に関するノウ・ハウ的側面の習得は現場経験を重ねて自然から学ぶことが大切ではないかと思っている。最後に、山岳会としての本会の活動は各会員が各自の登山を大事に数多く経験することと、法人としての義務の大半を担う会務担当の会員各位の努力にかかっていることを改めて確認しておきたい。

本文関連の年譜

西　暦	年　号	記　　事	会員概数（人）
1905	明・38	10月14日設立	400
1906	明・39	「山岳」第1年第1号発行	
1921	大・10	槙　有恒，アイガー東尾根初登攀	900
1929	昭・4	ルーム開設（虎ノ門）	1,000
1930	昭・5	山日記，会報発行	
1931	昭・6	会長制施行，会則整備	
1941	昭・16	社団法人日本山岳会申請・認可	1,800
1946	昭・21	体協加盟，定款改訂協議	2,400
1949	昭・24	ルーム新設（お茶の水）	3,000
1952～56	昭・31	マナスル遠征	3,200
1959	昭・34	ヒマルチュリ遠征	
1962	昭・37	上高地「山研」開設	
1964	昭・39	ルーム移転（外苑コーポ）	
1967	昭・42	ルーム移転（神田）	
1969～70	昭・45	エベレスト遠征，マカルー遠征（東海支部）	
1973	昭・48	ルーム移転（湯島）	
1976	昭・51	ナンダデヴィー縦走	3,300
1978	昭・53	ルーム移転（現在地）	
1979～80	昭・55	チョモランマ遠征	3,600
1984	昭・59	カンチェンジュンガ縦走	4,000
1988	昭・63	三国友好登山	4,300
1990～93	平・5	ナムチャバルワ遠征	
1995	平・7	マカルー東尾根遠征	5,400

［日本山岳会90周年記念登山隊報告］

マカルー東稜への道

重廣恒夫

マカルーはチベットとネパールの国境線上の北緯二七度五三分二三秒、東経八七度〇五分二九秒に位置する標高八四六三㍍の世界第五位の高峰である。最初にマカルーをまぢかに見たのは一九二一年の英国の第一次エベレスト登山隊であった。

またマカルーの西麓を流れるバルン氷河に最初に足を踏み入れたのは一九五一年のシプトンとヒラリーであった。一九五三年エベレストの登頂に成功したヒラリーはその山頂から南東三〇㌔㍍に位置するマカルーを望見、登頂の可能性を探った。

そして一九五四年春にはアメリカ隊とニュージーランド隊が挑んだが、事故や天候に恵まれず、マカルーの頂上に手をかけただけで終わってしまった。

一九五五年、前年秋の偵察を行ったフランス隊はジャン・フランコ隊長以下十一名で編成され、北西面の最終キャンプからの波状攻撃で、登攀隊員全員が初登頂するという快挙を成し遂げた。

これは人類最初の八〇〇〇㍍峰登頂となったアンナプルナ以降、驚くべき進歩を見せたフランスの高所登山研究の成果であった。

以来、一九七〇年の日本山岳会東海支部の南東稜からの第二登に続いて、今日まで八つを越えるルートからその頂が踏まれていた。

しかし、これだけ玄人筋にはポピュラーになってしまったマカルーにも、唯一未踏のルートが存在した。ガンジス河につながるアルン河から派生したカルマ谷に落ち込む長大な尾根、それがいまだ登山者の触れたことの無い東稜であった。

一九二一年、エベレストの登路を求めてカルマ谷とカンシュン氷河を探ったマロリー達に望見されて以来、恐らく東稜は七十数年の間深い霧のベールに閉ざされていたのである。

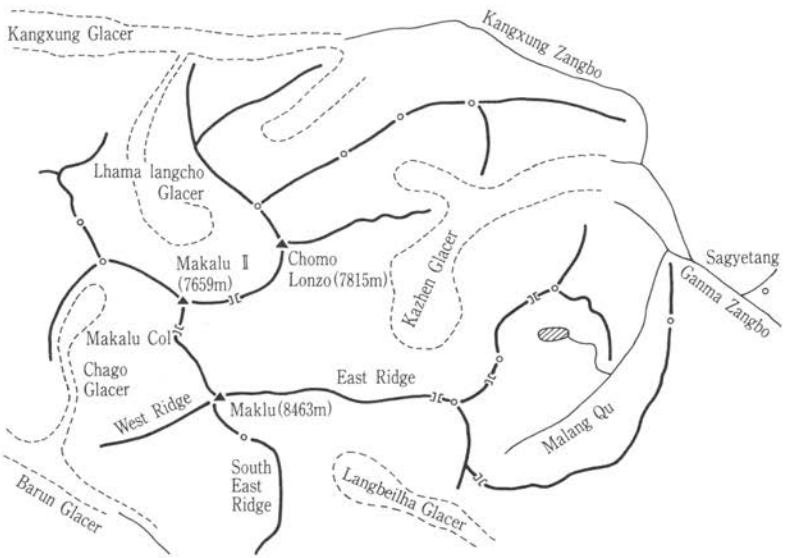
日本山岳会は一九七〇年のエベレスト登頂以来、インドの最高峰ナンダデビィでの縦走登山を成功させ、その後千載一遇のチャンスを得て一九八〇年プレモンスーンのチベット側からの、世界最高峰

マカルー登攀史

年	季節	国（隊）名	隊長	人数	概要
1954	post	フランス（偵察）	J・フランコ	19	マカルーⅡ登頂
1955	pre	フランス	J・フランコ	36	北西稜から初登頂
1970	pre	日本山岳会東海支部	伊藤洋平	43	南東稜初登攀
1971	pre	フランス	R・パラゴ	30	西稜初登攀
1975	post	ユーゴスラビア	A・クネイバ	29	南壁初登攀
1976	pre	チェコスロヴァキア	I・ギャルフィ	18	南西稜から登頂
1976	pre	スペイン	J・モントフォ	12	南東稜から登頂
1980	pre	アメリカ	J・ロスケリー	4	西稜第2登
1981	post	イギリス・ポーランド	A・マッキンタイア	4	北西稜から単独登頂
1982	pre	韓国	咸卓永	16	南東稜～盆地～東稜
1982	post	ポーランド・ブラジル	A・ビリエツキ	18	西稜左のリブ登頂
1982	post	山学同志会	湯田一男	9	無酸素登頂
1989	post	フランス	P・ベガン	6	南西新ルート登頂
1990	pre	アメリカ	K・キャルホーン	6	西稜から女性初登頂
1990	pre	高山研究所	原真	4	北西稜から登頂
1991	pre	スペイン	J・ボッシュ	7	北西稜から登頂
1991	post	ベルニナ山岳会	今村裕隆	6	北西稜から登頂
1993	pre	イタリア	O・フォーノ	13	北西稜から登頂

※登頂した記録を中心にまとめた。

マカルー周辺概念図



チョモランマの戦後初めての許可を取得した。隊員として参加した私が加藤保男隊員による北稜（当時の北東稜）の成功に続き三月十日、尾崎隆隊員と共に未踏のチョモランマ北壁から八八四八㍍の頂上に達したのは北京時間の午後九時であった。太陽がはるか地平線の彼方に沈み、周辺の山々が漆黒の闇に覆われようとした一瞬、目前のマカルーは一瞬空気を吹き込まれた炭火のようにあかくもえ、その巨大な輝きは朦朧とした意識のなかでも強烈な印象を残した。

一九七六年に成功したナンダデビィの東峰から西峰への縦走を、さらに高高度で実践すべく、一九八四年に行った世界第三位の高峰カンチェンジュンガの南峰から中央峰を経て主峰への縦走登山の成功は、さらなる極限追求の意欲をかきたてるものであった。

一九八七年十二月、翌年に実施される世界最高峰チョモランマを舞台として、チベットからネパールへ、ネパールからチベットへという交差縦走を成功させるべく行った事前のチョモランマ周辺の偵察飛行の際、ラサ空港を飛び立ったセスナサイテーションから眼下にひろがる広大なマカルー北面に目を奪われた。そしてかつて経験したことのない長大な稜線に登攀ルートを求めていた。

一九七三年のエベレスト南西壁の登山隊に参加した私は、その後チャンスを得て時代を代表する登山隊に参加し、ヒマラヤ登山の方法とルートファインディングなど、さまざまな経験と色々な考え方をもつ隊員との交歓を重ねることが出来た。

そして、一九八八年の日本・中国・ネパール三国友好登山に続く一九九〇年から一九九二年にかけての世界最高の未踏峰ナムチャバルワの中国・西蔵登山協会との合同登山などの実践から、次の目標を長大なマカルー東稜に定めた。

一九九三年十二月十八日、群馬県山岳連盟は世界最高峰のサガルマータ（エベレスト・八八四八㍍）の南西壁からの登頂に成功した。私自身はこの成功をもって「ヒマラヤ鉄の時代」は成熟期を迎え、今後は岩壁の時代からルートの複雑さによる、高度な技術と体力そしてそれらの総合力である耐久力を必要とする、長大な稜線を辿る時代に突入したことを実感し、中国・西蔵登山協会への登山許可の取得の可能性を探った。

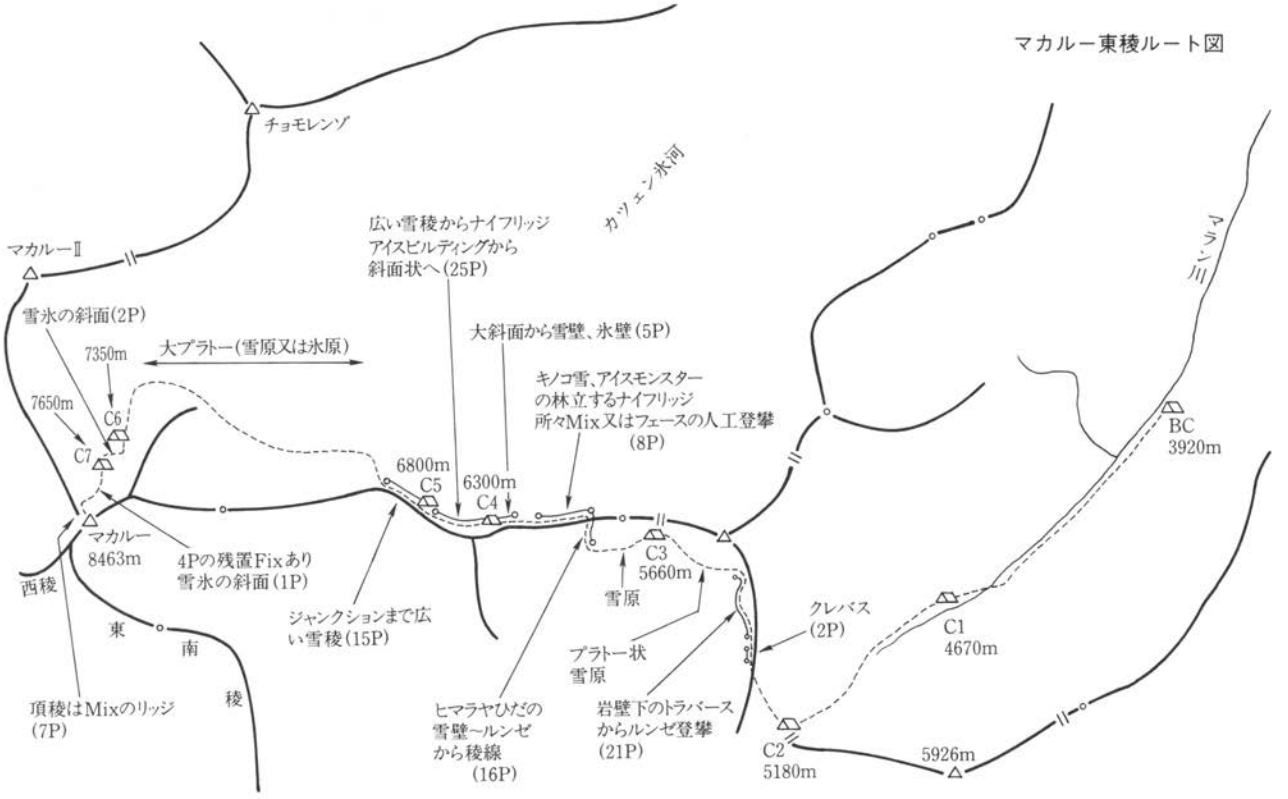
偵察隊報告

二月十五日北京入りした総隊長隊・先発隊は同日夜の中国登山協会による歓迎会出席、十六日、答礼を行い前中国登山協会首席の史占春さん達との旧交を温めた。

また午前中の中国登山協会交流部との会談で総隊長隊・偵察隊・報道隊の北京～ラサへの経費及び連絡官・通訳の派遣費用について協議、暫定費用三万US㌦にて決着した。変更事項としては現地業務をスムーズに行うため副連絡官として一九八八年日本・中国・ネパール三国友好登山隊の隊員として参加した、羅申が参加することが決まった。アナカンで送付した隊荷は二月十五日成都到着、登山隊の到着に併せてラサに到着の予定であることを確認。インマルサットに関しては現在北京空港にデポジットされており、四つの機関にたいして中国国内での使用許可の申請を行っているとのことで先発隊の携行は断念する。

二月十八日、予定どおりラサに到着。今回は飛行機からのナムチャバルワは雲がかかっており、余り良く見えなかったが七回目のチ

マカルー東稜ルート図


チョモレンゾ
カッシェン氷河
マカルーII
広い雪稜からナイフリッジ
アイスビルディングから
斜面状へ(25P)
雪氷の斜面(2P)
大プラトー(雪原又は氷原)
7350m
C6
7650m
C7
大斜面から雪壁、氷壁(5P)
キノコ雪、アイスモンスター
の林立するナイフリッジ
所々Mix又はフェースの人工登攀
(8P)
6800m
C5
6300m
C4
マカルー
8463m
4Pの残置Fixあり
雪氷の斜面(1P)
西稜
東
南
稜
ジャンクションまで広
い雪稜(15P)
C3
5660m
雪原
プラトー状
雪原
クレバス
(2P)
項稜はMixのリッジ
(7P)
ヒマラヤひだの
雪壁~ルンゼ
から稜線
(16P)
岩壁下のトラバース
からルンゼ登攀
(21P)
C2
5180m
5926m
C1
4670m
BC
3920m
ペルン

ベットとあって感慨深いものがあった。同日、午後より西蔵登山協会の高秘書長と会談。

二月十九日、偵察隊はラサ・デポの整理、および本日到着したアナカンの荷物の受け入れ、トラックへの積み込みを行った。午後には再び高秘書長と会談、偵察隊・総隊長隊・報道隊及び本隊の経費が一七万US$（うち一〇万US$は前回振り込み済み）になることを示唆され、計算書にて提示するよう要請、二十日中に決着をするようにした。夜は西蔵登山協会の主催で晩餐会が開催され全員が出席した。

二月二十日、西蔵登山協会常務副主席洛桑達瓦氏と会談、西蔵登山隊の八〇〇〇㍍峰十四座登頂支援物資の贈呈、偵察隊はラサ市内にて装備・ガソリン・石油・食料などの購入を行う。夜はマカルー登山隊から西蔵登山協会への答礼を行った。

二月二十一日、総隊長隊は偵察隊とともに八時十五分ラサホテルを出発、ラサからシガツェへの三本のルートのうち、ヤムドクツォーやニェンチェンカンサを見るべく南路に車を乗り入れた。この日は特に風が強く、高度をあげる途中でもしばしば砂塵に見舞われた。十一時四十五分、標高四八〇〇㍍のカンパ・ラに到着。強風の中ランドクルーザーから降り立った藤平会長が、タルチョーに歩みかけた途端に風速三〇㍍程の突風に見舞われ、帽子が飛ぶとともに身体が浮き上がり転倒、強打のためか左足の感覚が無いということで、とりあえずランクルに収容するとともに、意識の混濁がみられたので高度を下げるため、ルクズへの道を途中強風が巻き上げる砂塵のために何度か立ち往生しながらも三四〇〇㍍付近まで高度を下げた。

十六時三十分ギャンツェのホテルに入り、車中にて借用した酸素マスクからの酸素吸入を約一時間行った。十八時四十分、シガツェに到着、市内の人民病院に入り、当該部のレントゲン写真を撮った。結果は、左大腿骨基部の亀裂骨折ということで早い処置をすすめられた。二十時頃シガツェホテルに入った。

村井秘書長と協議の上、今後に関しては亀裂骨折・高度障害の応急処置のため二月二十二日ラサに戻り、人民解放軍の病院に入院、二十三日以降、ラサを出発し成都を経由して北京に到着するよう手配する。

二月二十二日、総隊長隊はラサへ、偵察隊はシガールへ向けて出発した。

本年は一九八八年以来の大雪ということで、まずシガールからチュダンへ入るのに途中ジョ・ラへの道路の除雪をシガールで待たなければならなかった。またザーシャンに到着したものの、ここからチュダンまでの道路も雪に閉ざされており、トラック、ジープを残して偵察隊の荷物のみをヤクで運びチュダンを経てユバに入った。ユバからの行動も深い雪のため隊を二分、山本・竹内・羅申が自分たちで荷物を背負い三月三日、BCに向かった。

しかしこの偵察隊もラッセルと悪天候に災いされて、ショウ・ラへのルート偵察に手間取り、峠を越えた後カンシュン河の出合い三七八〇㍍付近に到達したのみで八日、ユバに戻った。この間悪天候のため、マカルーが望見出来たのは一日のみであり、それもルート探索すら出来ない短時間の対面であった。

その後、偵察隊はシガールに戻りインマルサットを帯同した趙建軍と合流して、三月十日にはニェラムに下った。そして、ここでもニェラム～ザンムー間の道路が二月十四日以降閉ざされたままであることを知り愕然とした。十日にはラサと電話連絡が出来たので、西蔵登山協会を通じて西蔵自治区交通部に除雪の促進を要請し、十一日にニェラムの関係者間で会議がもたれ六日間で除雪することの努力をすると十二日、県長から説明を受けた。ただし十日の責任者の話では、二週間程度かかるだろうという見解のほうが現実的であった。従って今後の行動を

①ニェラム滞在の偵察隊は本隊を待つ事なく、先発隊として十三日、ニェラムを出発して途中シガールを経由し、チュダンを経て三月二十三日、ＢＣ到着の予定で行動する。

②先発隊はラサ・デポ及び北京経由で持ち込んだ隊荷をＢＣまで輸送する。

本隊の行動は

①三月二十日、ニェラム集結をめどとし、ストレートにシガールを経由してチュダンに入る。

②二十日以降、時間がかかるようであればポーターを使用してのザンムー～ニェラムの輸送を考える。

ただしこの場合人員・隊荷の移動はジープ・トラック単位で優先物質を運ぶこと。

とし、十日ニェラム滞在中ただ一回だけ連絡のとれたザンムーの谷川隊員に伝言とニェラムに滞在して本隊を迎える趙建軍に手紙を託した。

三月十三日、再び偵察隊メンバーでマカルーに向かう。十七日まではシガールでショウ・ラへの道路の除雪作業のため待機、三月二十日に最奥の村ロブに到着、何度かの荷上げを繰り返した後、二十二日より山本登攀隊長・竹内・羅申が深い雪に苦闘しながらベースキャンプに向けて出発した。同じ日、前日予想外に早くチュダンに到着した本隊の田辺・山本篤・谷川・パルテンバがロブを往復し、情報の交換、これからの予定について打ち合わせを行った。二十三日には重廣もロブを出発し途中四九〇〇㍍のショー・ラを越え、これから登ろうとするマカルーの東稜やチョモランマの東壁を見ながら進み、先発隊は三月三十日やっと標高三九二〇㍍のベースキャンプに到着した。マラン・チューという川をつめた果てにある雪の台地は、今まで登山隊の入ったことのない聖域で積雪はまだ一二〇㌢もあり、土を見ることが出来るのはいつの事か予測ができない。

日本を出発してから四十七日目でやっと処女ルートの懐に入ることが出来たので、感慨もひとしおだったが、予定より十日以上遅れているのでさっそくに上部のルート開拓を開始し、四月四日にＣ２を標高五一六〇㍍に建設した。

しかし約一三㌧の隊荷の輸送は多くのポーターと時間を要し、一時は四ケ所に中継基地をおいて荷物の移動を行い、最後のメンバーは四月十一日にやっとベースキャンプに到着するありさまであった。

入山までに非常な苦労をしたが、十二日に日本・中国・ネパールの隊員・シェルパによってベースキャンプ開村式がおこなわれ、十三日から上部への本格的な登山を開始した。十四日には標高五六六

○㍍の地点にC3を建設し、いよいよ長大な稜線の登攀が始まった。

ベースキャンプに入ってから約二週間が過ぎると、だんだんと気温も上昇しさしもの深い雪のベールも四〇㌢ほど融けて、周辺の木々の先端にも遅い春の息吹きを感じるようになった。十六日には一行がマカルー・ベースキャンプを訪問した、山と渓谷社の川崎社長チョモランマのベースキャンプにも足を延ばされ、つかの間の団欒を楽しんだ。

十七日には迫田・宮坂の読売取材団がベースキャンプに到着し、インマルサットも稼働し本格的な登山が始まった。

ベースキャンプまで

三月一日、ネパールルートからの本隊先発組四名（山本篤・田辺・谷川・荒井）が、関西空港からカトマンズに出港した。カトマンズでの彼らの仕事は、サーダーであるパルテンバ・シェルパと会い、現地調達物資（食糧、装備、燃料など）の手配、日本から船便で送り出した隊荷（約一二㌧）を、カルカッタからインド国内を経て、ネパールと中国の国境の町であるコダリまで無税通関で陸送することであった。現地のエージェントやサーダーの手助けを得て、これらの仕事を一週間で済ませ、本隊の残りのメンバーを待つことができた。

三月八日、本隊六名（渡辺・馬場・小野・松原・岡本・志賀）は、先発組とカトマンズにて合流し、サーダー以下十四名のシェルパと共に三月十日、国境の町であるコダリに入った。ところが、ここで得た道路情報は驚愕するものであった。中国側のザンムーからニェラムの間が、多量の雪のために通行止めになっていたのである。とりあえず、馬場・谷川の二名を情報収集と、偵察隊の重廣隊長と連絡をとるために、徒歩でニェラムに向かわせた。結果として、道路の開通は、十六日まで待たなければならなかった。その間、偵察隊の重廣隊長とは一度だけ連絡がつき、大雪と悪天候で、充分な偵察行動ができなかったことを知り、今後の日程の大幅な遅れを覚悟せざるを得なくなった。

シガールにて二日間の高所順応トレーニングを行い、三月二十一日、キャラバンの出発地であるチュダンに入り、重廣隊長の指揮下に入ることができた。しかしながらこの時点でも、先行している偵察隊はショウ・ラを越えることすらできないでいた。我々のキャラバンルートは、深い雪に閉ざされ、隊荷の輸送はヤクが利用できず、すべて民工（ポーター）の背に委ねなければならなかった。細く長いキャラバンを根気強く行ない、隊荷約一二㌧を総てベースキャンプに集結することができたのは四月十一日のことであった。翌十二日、隊員・シェルパ全員がベースキャンプに集い、盛大にベースキャンプ開きを実施し、本格的な登山活動に入った。

（この項・渡辺雄二記す）

C3～C5まで

C3からC4を経てC5までは今回の東稜ルートの中の核心部とも言える部分であった。作戦では各キャンプ間のルート工作に二日間をあてていたが、実際にはC3建設後にC4を建設したのが十四日後であり、さらにC4建設後にC5を建設したのは十五日目だった。これは我々の力量不足という側面も無視出来ないとは思うが、やはり「未知」と「危険」が大きく影響していたと思う。

C3が東稜上の六〇〇六メートルピーク先のコル付近のゆるやかな雪原の約五六六〇メートルに建設されたのは四月十四日であった。山本宗・谷川・荒井パーティーがまずC3に入り、上部へのルートを偵察、雪原をできるだけ利用して尾根を巻きながら、稜の最低コルに出るルートを探った。結局最低コルの南側のヒマラヤひだのフェースをルートとし五八五〇メートルのフェース中間部までルート工作を終了したが、フェースの上部には巨大なアイスブロックもあり、また襞と襞の間のルンゼそのものも常にスノーシャワー状の雪崩の危険があったため次のルート工作隊である田辺パーティーはこのルートを放棄し、もっとC3に近い地点から稜上に出るルートの可能性を探った。稜上へは比較的楽に出られたが、稜上は非常に不安定なナイフリッジのため極めて危険と判断し稜の直下をトラバース気味にルートを延ばした。しかし中々進まない上に、ルートの状態から荷上げには適さないと判断し、このルートも、四月十九日には放棄、翌日より再び最初のルートを延ばすことに決定した。

ヒマラヤひだのフェース内は大きな雪崩には遭遇しない様に思えたが尾根上に出て正直言って非常に驚いた。手の切れる様なナイフリッジにキノコ雪が張り出し、さらに稜上にはアイスモンスターが林立してまるでノコギリの様であった。さらに氷雪壁とミックス壁、さらに完全に岩のフェースまで観察出来た。

結局稜上に出てからは降雪による停滞もはさみ、一日1ピッチしか進まない日が四日も連続し、さらにその翌日は完全な岩のフェースを人工でだましだまし越えてやっと3ピッチ延ばすことが出来るという状態であった。

岩のフェースの後も、雪壁、そして稜直下のヒマラヤひだのあるフェースのトラバースを含め大斜面に出るまで24ピッチのフィックスを張った。C4はその上にあるセラックを越えた、標高約六三〇〇メートルの地点に四月二十八日に建設した。

C5へはC4のすぐ上の小さなアイスフォール状を越えて大斜面から再び尾根上に出る。暫くは比較的大きな尾根で何の心配もないが、11ピッチ目あたりより稜はC4下部のナイフリッジと同じ様相を呈してくる。最初、ルートは稜上を11ピッチ半延ばしたが、その後後半の半ピッチを放棄して11ピッチ目の終了点から稜上に沿ったルートではなく稜の左手側のフェースを大きくトラバースしてセラックの弱点を突いてその上の大斜面に出るルート採用した。そうすると稜上のアイスモンスターを回避出来る訳である。しかしフェースルートの上部にはアイスブロックがいくつもあり、その崩落にびくびくしながらのルート工作であり、また荷上げであった。それでも一応五月十三日には約六八〇〇メートルにC5を建設した。

しかし休養後に再びC5に上がると、ルートは休養日に崩落したアイスブロックによって約二〇〇メートルにわたって破壊されロープは跡形もなかった。これはたまたま休養日に起こってくれたお陰で誰も怪我をしなかったのが幸いであったが、すぐにルートの変更を決定しその日のうちに稜上の新ルートの開拓を行った。幸いにも距離も短く、以前放棄した11ピッチ目終了点から4ピッチでアイスビルディング上に出、そこから上部はC5まで大きな斜面状の尾根であったためにこの新ルートを正規のルートと決定した。

C3からC5へ至るルートは稜の状態そのものも非常に悪かった

訳だが、まず我々の登攀能力、そしてそれ以上に危険に対する勘の様なもの、又は危険をよむ力といったものの不安定さが試され、且つ暴露されたと言ってもよいと思われる。

（この項・山本宗彦記す）

最終ルート変更の決断

四月十三日より第二期を開始、この期でC5の建設とC6までのルートの開設を計画した。

A隊：C3建設、C4のルート工作、C4建設、C6のルート工作。山本宗彦・谷川・荒井

B隊：C3荷上げ、C4荷上げ、C5荷上げ　田辺・馬場・松原

C隊：B隊に同じ　山本篤・小野・竹内

D隊：C3荷上げ、C4荷上げ　渡辺・岡本

以上の予定であった。

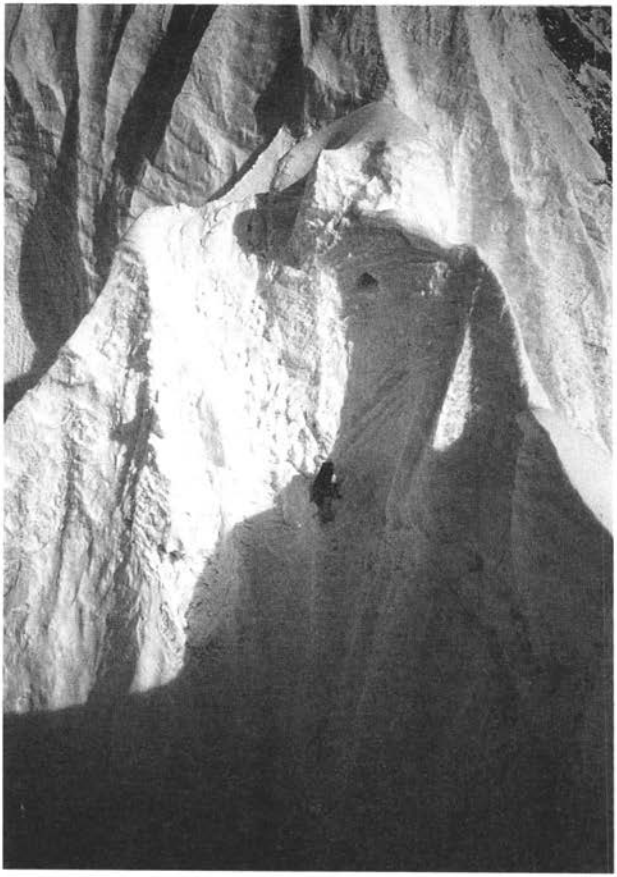
十三日、岡本がC1への荷上げ中、身体のだるさを訴えC1手前よりBC下山。

十五日、C2よりC3への荷上げに向かった竹内が身体の調子悪く五四七〇㍍付近より小野に付き添われてC2へ下山。山本登攀隊長・谷川隊員C4へのルート偵察。

十六日、A隊五八六〇㍍に到達。この日竹内は山本篤に付き添われてBCに下山。岡本は扁桃腺炎、竹内は風邪によるものでベースキャンプで加療する。

十七日、渡辺・山本篤がD隊としてC2入り。A隊・B隊・C隊休養。同日、シェルパ五名ずつがC1とC2に入る。

十八日、田辺・馬場・松原・小野がC4へのルート工作に従事、A隊の通過し



アイスビルディング手前のトラバース

たルートは雪崩の危険性があるとのことで稜線のルートに変更予定。

十九日、山本登攀隊長・田辺・松原・谷川C4ルート工作。ルート再変更の要望あり。馬場・小野・荒井C3からC2逆ボッカ、D隊C2よりC3へ荷上げ。

二十日、山本登攀隊長・田辺・谷川C4へのルート工作。馬場・小野・松原・荒井C3からC2逆ボッカ、D隊C2よりC3へ荷上げ。

二十一日、A隊C4へのルート工作五九六〇㍍に到達。B隊・C隊・D隊休養、岡本・羅申BCよりC2へ荷上げ、重廣・パルテンバC1入り。

二十二日、A隊C4へのルート工作、昨日より1ピッチ延ばした。B隊・C隊C3～C2逆ボッカ、D隊C3へ荷上げ、岡本・羅申荷上げ。重廣・パルテンバC2入り。

二十三日、B隊C4ルート工作。昨日の最高到達点より三〇㍍延ばした。A隊・C隊C3～C2逆ボッカ、D隊C3入り、岡本・羅申・竹内荷上げ。重廣・パルテンバC2より五三〇〇㍍に至りBCへ下山。

二十四日、悪天候のため、全キャンプ休養。

四月二十九日から三十日にかけてそれぞれのキャンプから、隊員・シェルパがベースキャンプに下山し第二期を終了した。

天候には比較的恵まれ悪天による停滞は一日しかなかったが、ルートの困難さと好天による暑さで隊員の体力の消耗は多大であった。

しかも、C2～C3に荷上げ中にルート上で五回の雪崩に遭遇したりしたが、全員が無事であった。またC1～C3間の荷上げも隊員・シェルパの頑張りで予定どおりの隊荷を集積することが出来た。

三月三十日の入山以来、三九二〇㍍のベースキャンプから順調に伸びていたルートも、C3からC4へのルート工作が十日間以上かかるなど、難しいルートに登山計画が予定より大幅に遅れていたが、モンスーン到来がまぢかとの認識もあり第三期（五月二日～二十二日）でマカルーの登山を終了する計画を立案する。

最終ステージでは登山隊員・シェルパを五月二日から、順次上部キャンプに移動させ、五日は悪天のため各キャンプで停滞、六日より大量降雪で埋まったフィックスを掘りおこしたり、雪崩で吹き飛ばされた支点を修復しながらC5に向かう。十一日には六六〇〇㍍の地点で難しい氷壁にルートを開拓。十二日以降は深いラッセルに苦しみながらルートを延ばす。

また十一日には隣の日大チョモランマ隊の北東稜からの初登攀の報を聞く。我々のマカルー東稜も予想以上に難しいルートであるが、天候の運・時の運を得て二十日頃にはアタックをかけたいと考える。

私はそれまでのベースキャンプ滞在から十三日にはマカルー東稜の全容が見わたせる五三〇〇㍍の地点に移動し、最後の一瞬に賭けた指揮をとる。途中十八日に山本パーティーが七二〇〇㍍のジャンクションピークへ到達し初めて登頂に到るルートを望見、岩稜を忠実に辿るのは技術的・時間的に難しいとの報告を受け、これまでの

ルート工作の進捗状況を勘案し、不本意ながら迂回ルートの採用を決断する。途中、頻発する雪崩にうたれやむなく数人のシェルパのリタイアも甘受しなければならなかった。そして幾度もの苦しい荷上げを繰り返した後、アタック隊員は十七日に六三〇〇㍍のC4を出発し、途中セラックの崩壊により、時間的な理由で余儀なくルート変更させられたが、十九日に七三五〇㍍の地点にC6を建設した。翌二十日、七六五〇㍍にC7を建設。そして五月二十一日、一次隊四名が八四六三㍍の頂上に到達、二十二日には二次隊四名も登頂に成功した。

マカルー東稜は予想以上に難しいルートであった。特に連日の雪崩、ルート崩壊の恐怖は登山隊員はもとより、私にとってもトランシーバーの切迫した交信を聞きながら「進むべきか」「退くべきか」、その選択に脅える毎日であった。

そして隊長とは、「起こり得る危険に耐えて指揮を継続することが出来るか、恐怖に耐えかねて登山の継続を放棄するか」の二者択一しかない立場だと再確認する毎日でもあった。

しかし「頂上に立ちたい」「立たせたい」というそれぞれの意欲は天候の運、時の運を得て、多くの隊員が世界第五位の頂上に到達する原動力となった。

そして、頂上に立った隊員たちのほとんどは「登頂」という二文字に満足しているはずであるが、私にとっては「完登」できなかった「心残りの山」ともなった。

しかし大きな喜びは、長期間寝食を共にしてきた隊員達は「マカルー登頂は一瞬の感動」であって「明日からの自分達の新たな目標に対しては、ほんのわずかな体験でしかない」ということを自覚し、さらなる精進を予感出来る事である。

登　頂

一九九五年五月二十二日、午前十一時十五分、私は八四六三㍍の世界第五位の高峰、マカルーの頂上に未踏の東稜から立つことが出来た。風はほとんどなく、はるか彼方に世界第三位のカンチェンジュンガ、後ろを振り返るとチョモランマを間近に望むことができた。カンチェンジュンガは一九八四年、私が二十四歳の時に挑戦した山であったが、その時はわずか三〇〇㍍を残し断腸の思いで八三〇〇㍍から下山した。しかしはるか彼方にありながらもその圧倒的なボリュームは素晴らしい迫力だった。それに比べてすぐ隣のチョモランマは七年前に登ることができたが、世界最高峰にも関わらず思ったより小さくて少々ガッカリだった。思い起こせば日本を出て九十七日目、登山を開始してからは五十二日目の登頂だった。

日本で準備を始めた頃から始まり、大雪のチベットでの偵察活動。そしていつ崩壊するとも知れぬ氷雪稜を恐怖と闘いながら登ったことなどが一瞬のうちに頭をよぎった。あえて命を危険にさらすことはない。しかし登りたい。何とか最善の方法を模索して一㍍でも頂上に近づくべく一歩一歩登っているうちに、とうとう最後は登頂への意志が自然の恩恵を得て成功をおさめたのだと思う。

東稜ルートは一言で言えば危険なルートだった。手の切れる様なナイフリッジとそこに張り出したキノコ雪の雪庇。立ち塞がるアイスモンスターや岩壁。垂直の氷雪壁のトラバース。雪崩、尾根の崩壊、雪庇のアイスモンスターの崩落、支点の破壊。トランシーバー

に飛び込んでくる緊急事態を告げる声。そういう中にあって、なぜこうまでして自分は登るのかを何度も問いかけた。それはマカルー東稜という個性にひかれ、その、自分を魅了した個性に対して自分の意志で全力を尽くすという行為に価値があると認めたからこそここまで来たのではなかったか。かつてラルフ・バーカーの書いた「最後の青い山」の序文の中でジョン・ハントは「努力の真の成果は頂上が山靴に踏みつけられる瞬間よりも、最後までやりとげたことの方に認められるべきではないか。本当の物差しは、生命のない山を征服するか否かにあるのではなく、クライマーが自分自身を征服することの成否にあるのだ」と述べているが、まさにそれを実践するために今ここに私達はいるのではないか。

十五年前に見た写真で感動を覚えた美しい岩稜。完登こそ逃がしたがそこを辿ることの出来た幸せを感じながら、頂上を後にした。

（この項・山本宗彦記す）

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会マカルー登山隊一九九五

活動期間　一九九五年二月十五日～六月十三日

目　的　マカルー東稜からの初登頂

隊の構成　実行委員長藤平正夫、副委員長中村純二、委員＝小倉茂暉・村井龍一・大倉昌身・重廣恒夫・橋本清・堀井昌子・伊丹紹泰・渡辺雄二・片岡泰彦・山本宗彦・大谷亮・山本篤・梶田正人・飯田肇

登山隊総隊長＝藤平正夫、隊長＝重廣恒夫、登攀隊長＝山本宗彦、隊員＝渡辺雄二・馬場博行・山本篤・小野岳・田辺治・松原尚之・谷川太郎・岡本憲・竹内岳洋・荒井俊彦、マネージャー兼通訳＝田久和義隆、医師＝志賀尚子、報道隊員＝迫田泰敏・宮坂永史

中国登山協会＝張江援（連絡官）・羅申（副連絡官）・趙建軍（通訳）

サーダー＝パルテンバ　シェルパ、クライミングシェルパ＝パヌルー　シェルパ他一一名

行動概要

2月15日偵察隊成田出発。3月1日中発隊出発。3月8日日本隊出発。3月30日BC建設。4月4日C2建設。4月14日C3建設。4月28日C4建設。5月13日C5建設。5月19日C6建設。5月20日C7建設、第一次アタック隊四名C7へ、四名C6へ。5月21日第一次アタック成功（田辺、山本篤、松原、荒井）、後二名はC7へ、二名はC6へ、第二次アタック隊四名C7へ。5月22日第二次アタック成功（山本宗、小野、谷川、竹内）、後四名はC6へ。5月29日BC撤収。5月31日全員チュダンへ、6月13日日本帰国

［註：本登山は日本山岳会海外登山基金からの一九九四年度助成金を受けて実施された。］

チョモランマ北東稜からの初完登

――日本大学エベレスト登山隊一九九五の記録――

神崎忠男

はじめに

一九九五年五月十一日、午前九時（日本時間午前十時、ネパール時間午前六時四十五分）未踏の北東稜ルートより、日本大学エベレスト登山隊は、エベレスト八八四八メートル（中国名チョモランマ／ネパール名サガルマータ）の登頂に成功した。

この計画は日本大学山岳部創立七十周年が出発点となり、日大山岳部OB会の桜門山岳会が中心となって検討を進め、理工学部、工学部（郡山）、歯学部、医学部、国際関係学部の各山岳部に呼びかけ全日本大学隊を編成した。

登山の意義を高めるためにも、登山隊は未踏の北東稜ルートからの登頂と、周辺地域での調査・研究を含めた学術調査を目的とした。今回の北東稜登山は過去世界各国より八隊が挑戦したものの、頂上までは登り切れず、エベレスト峰に残された唯一未踏のルートであった（編者注・北東稜の登攀史および呼称については『山岳』第八十八年＝一九九三年＝の一三三頁を参照）。

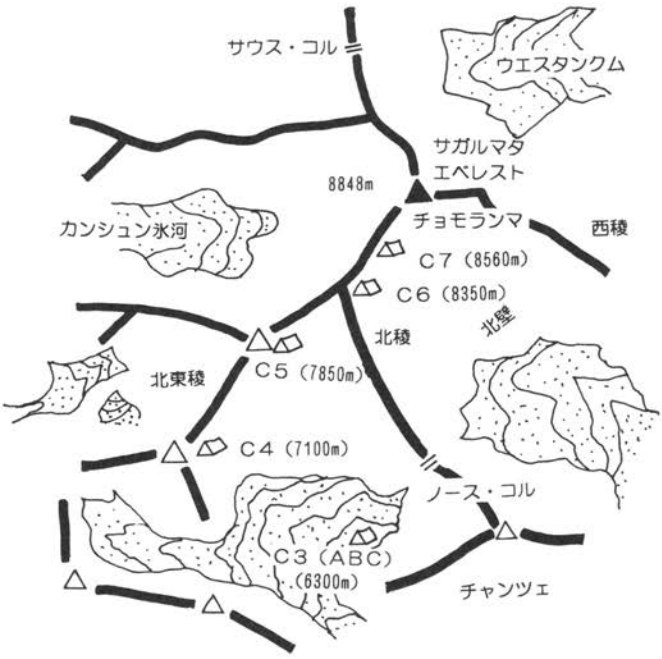
登山許可に関しては、最近は西蔵登山協会（TMA）に直接許可申請をする登山隊が増えてきたが、当隊は中国登山協会（CMA）の王富州首席の来日に合わせ許可を申請した。

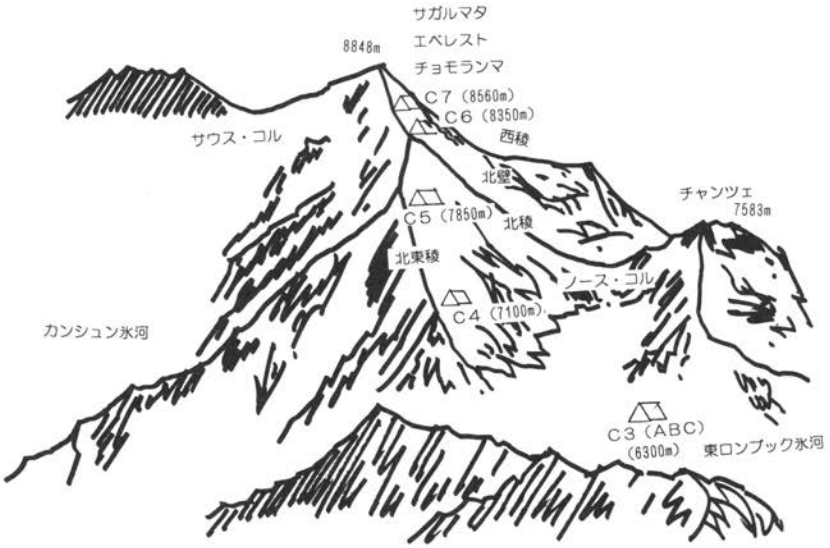
登山準備

共同装備の特別なものとしては、過去の記録からみた北東稜の第二ビナクルの下りに必要ということでアルミの梯子を設計、特注して持参した。またこれに北東稜の強風を予想して、耐風天幕三張りを特別に製作した。

酸素については、ロシア製四リットル酸素ボンベ（充塡圧三〇〇気圧、充塡済み重量四・五キログラム、空重量三・四キログラムのもの）を安全面から一六二本を携行することにし、それに重量五〇〇グラムのレギュレター二二個、三七〇グラムの酸素マスク二三個、睡眠用の四ツ又のディストリビューター（分配管）一六個をそれぞれロシアのZVEZDA社に

ルートおよびキャンプ配置図





発注した。価格はボンベ一本三八〇US$、マスク一個一〇〇$、レギュレター一個一八五$（送料別）であった。なお、ZVEZDA社からは試験的に空きボンベのリサイクル・システムが提案されており、これが軌道にのればユーザーにとっても有り難く、空きボンベの回収のためにも効果が上がるものと期待している。この酸素は、ロシア製ということで当初は品質や入手方法について心配されたが、別に問題になる様なところもなく、正しい扱い方をしていれば今までのフランス製、アメリカ製にくらべてシンプルで軽いことなどの点が極めてすぐれており、今後登山用酸素の主流となるものと思われる。

隊荷のBC集結総重量は約二〇トン、うちABCへの荷上げ重量は一〇トンに及んだ。

輸送面ではNHK及び共同通信社の報道関係の機材、学術隊の観測、測定機器など、取り扱いに注意を要する貨物も多くまた、中国入国時の通関の配慮など、気をつかうことが多かった。

プレ登山

隊員の選考及び高所順応トレーニングを行うため、一九九四年春にマッキンリーと秋にチョー・オユーで深瀬一男を隊長として本隊の隊員候補者を対象とする訓練登山を実施した。更に、チョモランマBCに入る前にエベレストの南側の暖かいところで、隊員を対象に三月二十一日から十五日間、古野登攀隊長をリーダーとする八名の隊員が順化のためプレ登山として、カラパタール登山を行った。

出発～BCへの入山

出発の間際になって、日大病院での健康チェックで神崎隊長の心臓病にドクター・ストップがかかり、急遽池田副隊長の参加を決めるなど慌ただしいなか、二月二十一日古野登攀隊長をリーダーとするプレ登山隊が先発隊として出発した。

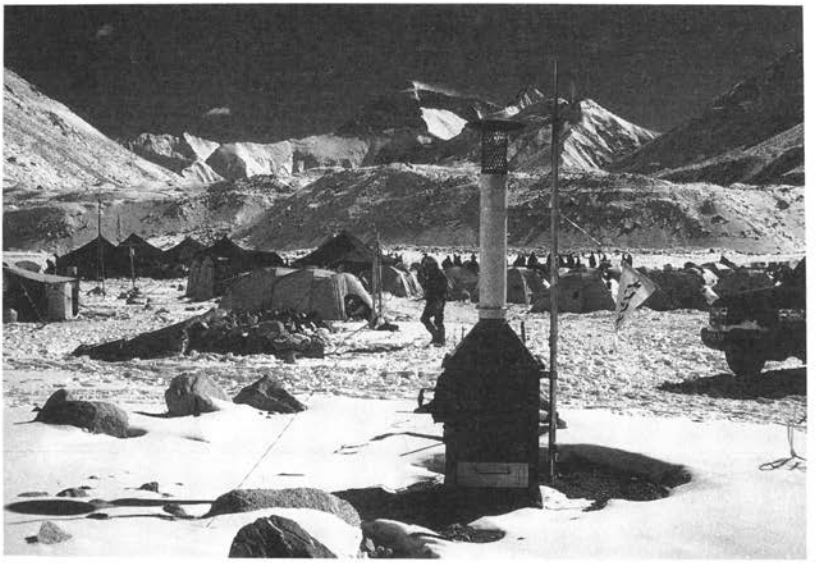
本隊は、手荷物、通関等の関係で北京ルートとカトマンズルートに分かれての出発となった。事前に隊荷の大部分はコンテナによる海上輸送で送り出していたものの、特にNHK、共同通信社、及び学術隊の精密機器が取り扱い要注意などの問題から隊員の手荷物として現地に運び込んだものも多かった。

入山にあたりカトマンズ空港の保税倉庫に保管されていた日本から空輸した荷物やロシアから空輸された酸素ボンベ等の隊荷をまとめてカトマンズを出発したものの、今年はネパールとチベットとの国境付近に残雪が多く、輸送路が開通しておらず、隊荷の入山が遅れた。とりあえず三月十五日、平山・池田・野本が偵察をかねて出発をしたものの焦りを感じる入山が続いた。三月二十二日北京ルート隊とカトマンズルート隊がシガールで合流、翌二十三日BCへ第一陣が入山、BCを建設した。

BC建設

三月のBCは昼間から一日中砂塵を含む強風が吹き、夜はマイナス二〇度と気温が低く、まだ冬そのものであり、設営、生活に苦戦を強いられた。

今回は登山隊員十四名、学術隊員六名、報道隊員NHK七名、共同通信社二名、そして連絡官を含めた中国人協力員四名とシェルパ三十名にキッチンボーイ五名の総勢約七十名がBCに集結し、三月二十五日BCは建設された。



ベースキャンプとベースキャンプに置かれた焼却炉

ＢＣ設営作業と同時にすでにＡＢＣへの荷上げ作戦、そして建設準備が開始されていた。

ＡＢＣへの荷上げにはヤクを利用、一頭あたり五〇㌔の荷を背負ってもらい、約五〇頭のヤクが四回にわたりＡＢＣへ向かった。延べ二百頭のヤクが総計一〇トンの荷をＡＢＣに上げた。

ＢＣ、ＡＢＣはかなり大きな規模のキャンプ村が設営されたので、環境問題にもそれなりの対策、対応をしなければならなかった。今回登山隊のゴミ対策として日本から軽量小型の組立式焼却炉を持参、ソーラーバッテリーを使い風を送って燃焼効果を高め、無煙の状態で、燃やせるものはすべて燃やすことにした。

未踏の北東稜へ

いよいよ北東稜登山が開始された。入山の遅れに合わせ、三月下旬は不安定な天候で降雪に加え、気温もマイナス三〇度と低く、二週間の計画の遅れをみたが、四月に入り徐々に天候が安定してきたので、登山行動も順調となっていった。

北東稜に取り付くという緊張感が伝わるなか、Ｃ４のキャンプ地に到着、荷上げのためのルート工作を終え、Ｃ４（七一〇〇㍍）に初めて隊員が泊まる日は、ＢＣでもかなりの強い風が吹き、北東稜上の天幕で何が起こるかわからない、風で天幕ごと飛ばされるのではないかと、その夜はＢＣでも寝付かれず、自分の天幕を抜け出してサロン天幕の無線機の前で寝ることにした。

Ｃ５のキャンプサイト確認のために古野、井本の二人の隊員が上部へ向かう。古野は登攀中にも酸素を使い、かなり順調なペースで高度を上げていく。古野から「Ｃ５のキャンプサイトを決めました。

引き返します」の通信を受け安心する。

C5へのルート工作、建設そして荷上げへと計画が進んでいくが、やはり高度の影響からか、若い隊員にとっては、バットレスの登攀では苦戦の色をかくし切れず、古野、井本のヒマラヤ経験者との間に体力の差が明確に出始めてきた。そして、若い隊員への高度の影響が古野、井本の二人の行動面にのしかかっていった。

北東稜のルートについて

（一）第4キャンプまで

①東ロンブク氷河　チャンツェ側のABC（六三五〇㍍）から、東ロンブク氷河を渡り、北東稜取り付き点まで約一時間三十分。途中小さなクレバスは数多くあるが、フィックスロープ、梯子が必要な程ではなかった。ただし、ガスに包まれるとルートを見失うため、この区間のみ赤旗を使用した。

②北東稜取付き　落石の危険は少ないが、降雪があると雪崩の心配がある北東稜末端側面から登攀活動を始めた。部分的に傾斜三〇度～六〇度の雪壁を登る。取付き点からの標高差約六〇〇㍍で北東稜上に出るが、東壁側（カンシュン側）に大きく張り出した雪庇のため、ABC側にルートを作る。トラバース気味に登ると、途中に過去の隊が作った雪洞が残っており、中には食料・燃料などが残置されていた。C4は、北東稜七一〇〇㍍の細い岩稜の上に建設した。雪の部分は雪庇であるために敬遠し、苦労しながらも何とか整地し、計六張りのテントを設営した。ABCからC4までは、約四～五時間。帰路は約二時間。隊員の足でも充分一日で往復できる距離である。

（二）第5キャンプまで

①第一バットレス　C4から緩斜面を15ピッチ、約二時間で第一バットレス取付きに到達する。我々は、東壁側に張り出す雪庇と岩稜部分の境にルートを採ったが、途中ABC側に落ちるルンゼの横断は、雪壁となっていて滑落の危険がある。岩稜は傾斜が緩く転んでも滑落の危険は少ない。ただし、スレート状の岩が積み重なった様な状態で歩きづらく、また疲れる所である。第一バットレスはABC側へトラバースし、雪壁から登り始めた。雪壁、ルンゼ、岩場と変化し、傾斜は五〇～六〇度であった。過去の隊のフィックスロープが数本残っていたが、それらは左右に別かれており、我々は中央から登って行った。雪壁を3ピッチ、ルンゼを2ピッチ、岩場を1ピッチで通過した。ルンゼの両側面と上部の岩場は、ザイル操作・登攀で落石が起こりやすく、注意が必要であった。

②第二バットレス　第一バットレスを通過し第二バットレスまでは、ガレ場を2ピッチ、その後東壁側に張り出した雪稜に移り3ピッチ。傾斜は登る程に強まるが、最大五〇度程度であろうか。第二バットレスの核心部分は短く、雪稜3ピッチの終了点からABC側の岩壁へトラバースし、浅いルンゼを脆い岩に注意しながら1ピッチ登れば、とたんに緩やかなガレ場のトラバースとなる。所々雪の付いた斜面があるが、大半はC4上の緩斜面同様に、歩きにくい岩場をABC側に大きく回り込みながら9ピッチ登ると第一ピナクルが目前に迫る雪原（標高七八五〇㍍）に至る。ここにC5を建設した。C4からC5までは七～八時間を要した。

（三）第6キャンプまで

①第一ピナクル　C5上部のピナクル帯は、北東稜の最大の核心部であった。C5から見上げる第一ピナクルは、単純に岩峰と呼ぶにはふさわしくないほど、異様に大きく北東稜に立ち塞がっていた。私の下手な形容で表現すれば、「門前の仁王」の様であった。カンシュン側東壁に大きく張り出した雪庇と岩稜の間の急斜面の雪稜を5ピッチで第一ピナクル基部に達する。ここからABC側に1ピッチトラバースし、雪と岩のミックスしている浅いルンゼ（傾斜六〇度）を直上して下部を抜け、上部は雪稜を忠実に辿り第一ピナクルのピークへと至った。基部からのピッチ数は16。過去の隊が残置したフィックスロープが何本かあった。C5から第一ピナクルまでは約三時間。標高差約三〇〇㍍である。

②第二ピナクル　準備段階で、過去にこのルートに挑んだ隊の報告書や隊員からの意見をきき、登攀ルート・登攀方法の検討を重ねたのが、第一ピナクルから第二ピナクル、またその先の北稜ルートとの合流点までであった。過去の報告書からは、「ピナクルの下降では梯子が必要」・「第二ピナクルの登りはかなりな垂壁」等、我々を不安にさせる情報しか見られなかった。

第一ピナクルからは、湾曲した細い岩稜に不安定な状態で雪が付いていた。ルートはABC側にしか採れず、積み重なった脆い岩場を通過して行く。雪面にスノーバーを打ち込んでも表面がクラストしたモナカの皮状で、効いている感じはしないが、騙しながらの岩稜下降。雪のトンネルを越えてルートを開き、大きなキノコ状の雪の下を回り込んで、第二ピナクルピーク（八二〇〇㍍）の雪壁の取付きへと到達する。雪壁は傾斜が一部八〇度、平均六〇度。ABC側の岩壁から支点を取り、2ピッチでピークへ達する。一～一時間半の登攀である。第二ピナクルは馬の背状で、八㍍程の水平道が続く。ピークから五㍍程先に進んだ右側、登攀ルートから約二㍍の位置に、一九八三年の英国隊隊員の遺体が、半身雪に埋もれた状態で確認された。その近くには、トロールのハーネスが落ちていて何とも無気味な光景であった。

③第6キャンプ　第二ピナクルの雪壁の登攀以降、過去の隊が残したフィックスロープは極端に目につかなくなり、登攀ルートの指示をABCに仰ぎながらのルート工作を続ける。下手にトラバースするよりも、岩峰を忠実に登った方が賢明と判断し、標高差二〇～五〇㍍の小岩峰をABC側から回り込んで、ルンゼを直上するとスノーピークへ達する。

スノーピークからは、ABC側の岩壁を1ピッチ下降し、スノーピークと第三ピナクルのコルへ向け、岩盤の様な大きな岩の上を1ピッチトラバースする。当初の計画では、このコルにC6を建設する予定であったが、目前にある北稜上の方が地形的に容易であり、風の影響もさほど変わらない様子であったため、C6の設営をコル（八四〇〇㍍）から北稜上（八三五〇㍍）へと変更した。コルから北稜合流点へは、コルへのルート同様岩盤状の岩棚を1ピッチ下降、岩壁を1ピッチ懸垂下降、その後雪面を1ピッチ登り返してC6へと到達した。第二ピナクルピークからC6までは、計16ピッチ。複雑な登下降の繰り返しで、慎重さを必要とした。

（「北東稜のルートについて」の項・井本記す）

天気予報

今回の天気予報については、現地のBCで、気象衛星「ノア」からのエベレスト周辺の雲の状況画像を受信し、また、ニューデリー、タシケントの天気図を気象ファクシミリで受信して判断材料とし、気象ロボット（データー・ロゴ）で観測した気象データを、海事衛星インマルサットを使って、東京の日本気象協会気象情報部へ送り、これを気象協会で三人の予報官が交替で担当、気象協会の数値予報とにらみ合わせ一週間先迄の気象概況の予測をしてもらった。これらの予報及び高層天気図（五〇〇HP・三〇〇HP）を、日大エベレスト登山隊事務局を経由して、インマルサットを利用してBCへ送信してもらった。

気象担当の永井隊員の現地での気象活動は、朝六時三十分（日本時間九時四十五分）上部キャンプABC及び各キャンプの天気状況を無線交信で集める。午前十時頃（ネパール時間七時四十五分）データー・ロボによるデータと共に東京へ送る。そしてこれらのローカルデータを参考として前記の様に天気の動きを考慮して登山地区の予報が作成されて送られてくる。それらを午後三時の定時交信でABCから各キャンプへ予報を流す。上部の行動もこの天気予報に基づいて決められる。

登頂計画について

ピナクル帯のルート工作、及びC6のキャンプサイトを確認することができたので最後の休養を兼ねて全員がBCに集結し、五月一日～五日まで五日間の休養をとった。そしてこの間BCでは登頂計画の細部が検討された。ヒマラヤ登山のタクティクス（作戦）の面からもBCでの休養は重要である。

そして、平山総隊長から古野登攀隊長と井本隊員の二名が登頂隊員として指名、発表され、神崎隊長から頂上で上げる日本大学旗と各国の国旗がアタック隊員に手渡された。

登頂隊員を送り出したBCでは、五月十二日の登頂日に合わせた天気予報の情報収集につとめた。その結果、十三日頃から天気がくずれる可能性も出てきたので、平山総隊長、神崎隊長、そしてABCの池田副隊長とでアタック日の再検討となり、結果的にアタック日は一日早めて五月十一日と決定された。

古野、井本の両隊員はABCで一日休養を取る予定を、休養日を無しとしてすぐにC4へ向かい五月十一日のアタック日に合わせてキャンプを進めていった。

登　頂

・五月十日（快晴）

［C6（八三五〇メートル）よりC7（八五六〇メートル）］

今シーズンでは他の登山隊に先がけ最初の頂上アタックとなるので頂上までのルートはすべて我々が工作することになった。C6から北稜ルートとの交差地点までは全く未知の領域である。C6を六人で午前八時に出発。トラバースぎみにフィックスを3ピッチ張ったところで北稜ルートの残置ロープを発見。稜線に出て再び北壁側に回り込み、午前十時C7の予定地に到達。第一ステップ直下の僅かなスペースに二人用のアタックテントを二張り設営。第二ステップのルート工作もこの日中に完了する。シェルパ二人をC6まで帰す。今日の夕焼けはひときわ美しい。めずらしく午後になっても雲がわかず（雲の上にいるからであろう）チョー・オユー、ギャチュ

ンカン等日没まで見渡せた。

・五月十一日（快晴のち雪）

［C7（八五六〇㍍）より登頂（八八四八㍍）、ABCへ下山］

午前二時起床。緊張のせいかほとんど寝た気がしない。シェルパも眠れなかったと言っている。酸素を隊員各一本、シェルパ各二本を背負ってヘッドランプを頼りに四時に出発。C7に収容能力がなくC6からアタックする二人のシェルパは三時三十分出発。

真っ暗な第一ステップを登り稜線へ。一九八八年のJAC隊のC7跡地を過ぎ、第二ステップへ。ここは下部一〇㍍と上部一〇㍍の二段に分かれ、上部には一九七五年に中国隊が設置した梯子がある。当初、この梯子がなくなっているとのアメリカ隊の未確認情報に振り回され各隊とも心配した。そのため日本からは組立式の特殊なアルミ梯子を持ち込んだが、結局、中国のかけた梯子が外れていただけで前日のうちに補修を終了した。三角雪田手前の稜線で夜が明け、二〇㍍の岩峰（貫田氏は第三ステップと呼ぶ）はリッジ通しに1ピッチフィックスし三角雪田へ。雪田は、四〇～六〇度程度の傾斜で1ピッチ固定ロープを張る。堅い雪壁から始まりやがてラッセルとなる。トップを歩くラクパ・ヌルはラッセルが始まって酸素の流量を二㍑から三㍑に切り換え気合が入る。北壁側の岩場に回り込み、一九九一年貫田氏が残置した切れそうな六㍉の固定ロープを2ピッチトラーバースする。さらにスラブ状のルンゼを2ピッチフィックスして直上すると頂上稜線に飛び出す。あとは傾斜の落ちた雪稜を十五分で登頂。頂上は、雪庇状の比較的広い場所で、昨年持ち上げられたプリズムのついた測量機器が備えてあった。

総隊長以下から祝福の言葉をいただく。各自が持っているカメラと共同通信社から預かったカメラ、そしてNHKから預かったビデオカメラで頂上からの展望をおさめ、石を拾っているうちアッという間に一時間も経ってしまった。この間、酸素を外して歩き回っているので危険でもある。日大山岳部部歌を歌いあわてて下降を開始。再びピナクル帯を越え、一気にABCまで下り十八時着。

東京を出発して、実に八十日目であった。

（「登頂」の項・古野　淳記す）

成功の要因

以下に成功の要因となった点をあげてみたい。

一、充分な酸素　ロシア製の軽量ボンベ一六二本を携帯した。これにより、八〇〇〇㍍を越える困難な稜線にもかかわらず、隊員、シェルパ共に安全に余裕をもって行動することができた。

二、優秀なシェルパの協力　本計画を成功させるためには、優秀なシェルパを確保することが必要な条件のひとつであった。そのために神崎隊長が前年十一月に、カトマンズに雇用契約のために飛び、サーダーとしてラクパ・テンジンとナワン・ヨンデンの二名を含む三十名のシェルパと雇用契約を交わした。この両名のコンビの活躍については、先年、群馬岳連による冬のサガルマータ南西壁隊で実証ずみであり、統率力のあるラクパ・テンジンと実行力のあるナワン・ヨンデンの組み合わせは、大所帯のシェルパ管理には欠かせない条件と考えていたからである。今回は、賃金体系の面でも、基本給料に加え上部キャンプで活躍した者には一回荷上げするといくらという請負方式によるボーナス制度を契約時に約束して意欲をもた

せることにしたことも成功の要因としてあげられる。

三、好天の予知等科学的なサポート　好天の予測、健康管理の面など学術班のサポートも大きく貢献した。日本気象協会の天気予報も力強いサポートとなり、見事好天をとらえることが出来た。

四、ロジスティック　ＡＢＣより先、北東稜上に展開された各キャンプへ荷上げされる物資は、池田副隊長と両サーダーによりうまく管理された。一方、ルートの保守も適切に整備され、第二ピナクルには軽量アルミ梯子がかけられた。これにより、上部にいた隊員も帰路を心配することなく、安心して行動することが出来た。

五、高度順化とタクティクス　ＢＣからの順化行動を一九九二年日本カザフスタン合同隊のカザフ隊員の行動をモデルに上部の行動を考えた。すなわち、高所での滞在を短期間とし、低所ＢＣで充分な休養をとることをパターン化した。ＡＢＣ以上の高所滞在は七日間とし、ＢＣでは前半三日間、後半四日間の休養を必ずとることとした。

あとがき

今回の登山では、実に多くの方々の協力を得た。文部省の関係では、スポーツ振興基金の助成をいただき、日本山岳会からも海外登山基金の助成金をはじめ、マカルー隊との間の協力も含めて、物心両面にわたり、力強いサポートをいただいた。また日本山岳会の会員でエベレストの経験者からも種々と助言をいただいたが、なかでも大宮、貫田氏からは貴重なアドバイスを受けた。

現地では、中国登山協会（ＣＭＡ）の絶大な協力を得た。とくにＣＭＡから派遣された楊世濤、金俊喜の両連絡官ならびに通訳として参加された夏廣詣氏からは、昼夜を問わず、親身になってお世話いただいた。また地元の西蔵登山協会にも種々お世話になったことを付記しておきたい。

これら諸々のお世話になった方々に対し、深甚な謝意を表して、この報告を終わりに致したい。

〈記録概要〉

隊の名称　日本大学エベレスト（珠穆朗瑪峰）登山隊一九九五

活動期間　一九九五年二月～五月

目　的　①チョモランマ（八八四八㍍）の北東稜からの初完登、②周辺地域に於ける学術調査

隊の構成　総隊長＝平山善吉（61）、隊長＝神崎忠男（55）、副隊長＝池田錦重（56）、登攀隊長＝古野淳（33）、隊員＝忍田剛（33）・井本重喜（32）・家口寛（26）・野本修（25）・田端宏好（25）・田村幸英（23）・原田智紀（21）、マネージャー＝原田義隆（59）、医師＝鈴木武樹（39）・大前義孝（26）、学術隊員＝永井澄明（62）・森山勇（55）・田中潔（38）・野口邦和（42）・神宮太（24）・唐元新（22・北京大学）

高所協力員　サーダー＝ラクパ・テンジン（55）・ナワン・ヨンデン（43）・ペンバ・ノルブ（46）、高所ポーター＝ダワ・ツェリ（24）・ラクパ・ヌル（31）他二十六名。

行動概要

2月21日古野以下八名成田発、2月22日隊員、シェルパ、カトマンズで合流。2月24日高度順化訓練のため空路ルクラへ。3月4日カラパタール登頂、3月8日ルクラよ

りカトマンズへ帰着。3月11日平山総隊長、池田副隊長、成田発カトマンズへ。同日神崎以下六名の北京ルート隊成田発北京へ、3月15日平山総隊長以下五名の先遣隊はカトマンズ出発。3月17日本隊カトマンズ発（ザンムーへ。3月20日カトマンズ隊、北京隊シガールで合流。3月22日BC建設。3月24日全隊員BC集結。3月28日先発隊ABCへ向け登山開始。3月31日ABCを六三五〇㍍に建設。4月2日ヤク荷上げ第一陣五十一頭BC発ABCへ。4月6日ヤク荷上げ第二陣と共に古野他八名BC発。4月9日ABCよりラピウ・ラオ面へ行動開始。4月11日ラピウ・ラに天幕設営。4月14日北東稜にC4建設（七〇〇〇㍍）。4月17日C5のキャンプサイトを確認の上4月19日全員BCへ下山。4月23日忍田、田村C4入り。4月25日C5建設（七八五〇㍍）。4月27日第一ピナクルに到達。4月29日第二ピナクルを越えてC6を確認、北稜ルートへの見通しをつける。5月1日～5日全隊員休養のためBCへ下山。5月2日アタックメンバー決定。5月5日支援トレッキング隊BC入り。5月6日アタック隊BC発。5月9日アタック隊C6建設（八三五〇㍍）。5月10日アタック隊C7建設（八五六〇㍍）。5月11日午前十時登頂成功。北東稜を経由してABC迄一気に下山。5月12日C5撤収。五月十三日C4撤収。アタック隊はBCへ帰着。5月12日、15日の両日ヤクによりBCへの荷下げを行う。5月16日BC撤収、ザンムーへ（通関）。5月18日カトマンズ帰着。5月22日本隊カトマンズ発帰国の途につく。5月23日本隊成田へ帰国。5月29日後発隊成田に帰国、全日程を終了した。

報告

- 「日本大学エベレスト登山仮報告書―ピナクルを越えて」（一九九五年六月二十五日、同登山隊刊）
- 『山と渓谷』七二一号（一九九五年八月号）「日本大学山岳部隊未踏の北東稜からエベレストに登頂」一〇頁～一三頁、「タクティクスの勝利」（古野淳）二三〇頁～二三三頁。

［註：本登山は日本山岳会海外登山基金からの一九九四年度助成金を受けて実施された。］

エベレスト・サウスピラーの登頂

本郷三好

はじめに

一九九四年五月八日午前十時二十分、愛知学院大学エベレスト登山隊は念願のエベレスト・サウスピラールートから隊員二人、シェルパ四人を、五月十三日、隊員一人、シェルパ三人の合計十人を頂上に送り、同ルート下降に成功した。

念願とは、湯浅道男総隊長が自ら手塩にかけて育てた若きクライマーを世界最高峰の頂に立たせたい、それも湯浅総隊長が二十一年前「今度来る時はこのルートを登ろう」といった最も難関なサウスピラールートからの登頂を目標に、半生をかけて指導してきたからである。実に二十一年目の実現であった。日本隊初の二ケタ登頂者を送りだした登山隊でもあった。単一大学初のエベレスト登頂でもあった。「夢」は必ず実現するということを実証した登山であった。以下は現地での活動を中心とした登山隊の報告である。

ベースキャンプまで

先発チームより十日遅れて本隊がルクラ入り、すでに四〇〇〇㍍の高さまで高度順化を終えた現役部員（クーンブ合宿チーム）の強くなった姿に圧倒された。僕達は常に初めて到達した高度に泊まらない、という原則をもとにヒマラヤ登山を行ってきた。先発チーム、現役チームはこのことを忠実に守ってすでに四〇〇〇㍍の順化をすませ、ルクラで休息中だった。

さて、ルクラからエベレストのベースキャンプへの道のりは、トレッカーの日程で約十日間だが、私たちは三週間を費やした。それは五四〇〇㍍というベースキャンプ以上での高さで登山活動を順調に行うことができる「からだ作り」と、ヒマラヤ初体験の現役チームが、高度という障害を的確に乗り越えていくという二つの目的からだった。

ナムチェでは五日間滞在して、四五〇〇㍍までの順化。パンボチェでは三日間滞在して五二〇〇㍍までの順化、そしてチュクンに入り

アイランド・ピークで六〇〇〇㍍の順化。パンボチェで三日休養してベースキャンプに入った。

これだけ慎重に順化を行ったつもりでも、ベースキャンプではちょっとした自己管理のミスから半数の隊員が不調を訴えた。咳を伴った喉の障害、発熱。高度順化は大胆に負荷をかけ、休息は繊細な気づかいをしなければならない。このバランスがちょっとした気のゆるみで崩れた結果であろう。

アイランド・ピークの順化トレーニングの意図はこの危険なアイスフォールの通過回数を少なくすることもあったが、最低三回はC1まで往復することにした。高所順応のためである。少しでも安全性を考えた意味で早朝行動の原則を厳守した。午前五時三十分出発。タイムリミットは午前十時とした。それにしても我々のシェルパは強い。一番若いダワツエリ（二三）は、十五㌔の荷上げを往復三時間四十分。私たちはどれだけ頑張っても四時間三十分だった（三回目の荷上げでやっとシェルパさんと同じスピードとなった）。



九連ラダーでアイスフォール帯を通過

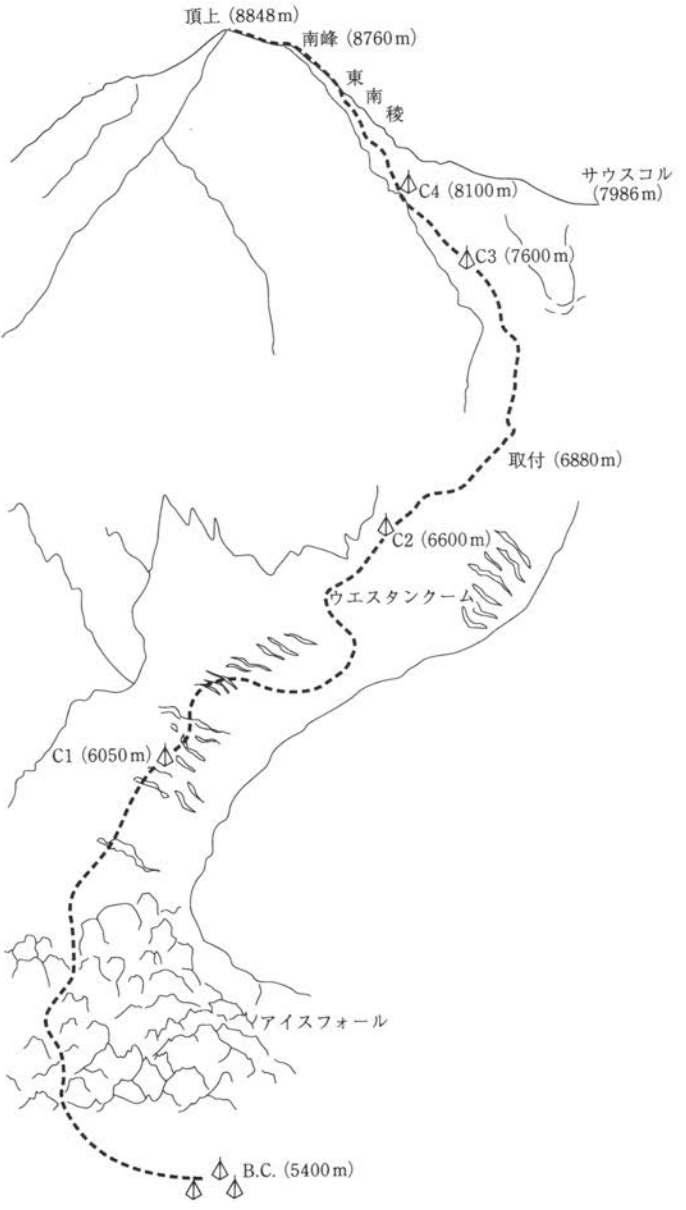
ウェスタンクーム前進基地へ

今シーズンは僕達を含めて四隊がこのウェスタンクームに入山することになっているが、ここまではまだ他の三隊はベースキャンプにも入山してきていない。どこからか僕達が三月下旬に入山する情報を手にしたのだろう。このウエスタンクームまでは僕達が作ったルートを使用するらしい。

前進基地となるC2までのウエスタンクームの通過には、今シーズンは一三台のハシゴを掛けた。エベレスト登山のこの間も早朝行動を厳守した。

サウスピラー大氷壁へ

C2～C3までは、結果的に標高差一〇〇〇㍍のキャンプ間になってしまった。ルート工作初日、鈴木、熱田と三人のシェルパの合計五人でC2をスタートした。六七〇〇㍍まではノーマルルートと同様セラック帯を登高する。南稜の末端付近は、傾斜の緩い雪壁なのでその地点を目指してどんどん登るが、途中上部からの落石の雨にあった。急いでトラバースし傾斜の強い氷壁の下のオーバーハングしたセラック帯の下に逃げ込んだ。九〇度近いこのセラックを


頂上（8848m）
南峰（8760m）
東南稜
サウスコル（7986m）
C4（8100m）
C3（7600m）
取付（6880m）
C2（6600m）
ウエスタンクーム
C1（6050m）
アイスフォール
B.C.（5400m）

越えるのはむずかしいが唯一落石から回避できるルートだと判断した。スノーシャワーに打たれ、全身雪まみれになり苦闘を続けて、午後四時までがんばったが結局2ピッチ（一〇〇㍍）固定できたにすぎなかった。マイナス二〇度を越えた気温の中でのこの一日はストレスとともに疲れた。翌日はチームを入れ替えてルート工作を行った。幸い前日の終了点から先は、多少傾斜が落ちたので10ピッチ延びた。しかし、まだ春の訪れを見せないこの壁の氷は固くシェルパ達のアイゼンは折れる一方だった。折れなかったのは唯一、わがカジタックスだけであった。

僕達はひとつのミスも許されないこの壁の工作には、荷上げは隊員もシェルパも一日行動、一日休養の短いローテーションで行うことを決めた。四ローテーション目でC3建設可能なスペースを岩稜と雪面との接点に確保することができた。高度七六〇〇㍍、ローツェフェースのC3は目の下の位置だった。僕達は頂上へ行くために荷上げを含めて高度差一一〇〇㍍の壁の登下降を最低三回くり返すことを決めた。そのことがこの先八〇〇〇㍍を越える高さで無酸素で安全に登下降ができることにつながると考えたからだ。ルート上の固定ロープの支点はすべて（スクリュー、ロックハーケン）三点、四点と強化した。

キャンプ4建設

氷壁は雪壁となり傾斜も少し落ちた。それでも岩稜とコンタクトラインを離れず忠実に辿った。ルート工作は二日間で終え、C4の位置も大岩壁の基部に設定をした。

隊員もようやくシェルパのスピードに追い付いてきた。七〇〇〇㍍を越えた高さでの順化はあり得ないといわれるが、わが隊員が、無酸素でシェルパのスピードとさほど差がなく荷上げができたのはC2、C3間の大氷壁での行動を大切にしたからではないかと思う。

C4へは、スノーバー、アンザイレン用八ミリロープ、固定ロープ（ダンライン）、三日分の高所食、そして、二㍑（二一〇気圧）の酸素ボンベを三〇本上げた。

アタック体勢完了そして休養に

アタックを残すのみとなった。ベースキャンプに下り、第一次登頂隊員はさらにディボチェ（三七〇〇㍍）まで下り休養をとることにした。ここまでの三〇日間は過酷であった。最低マイナス二六度～三〇度でのルート工作、荷上げ、気合いは充実していてもからだはやはり衰退しているからだ。思い切って緑が多く、暖かいディボチェを選んだ。なによりも標高が低いというところが決定の要因だった。三七〇〇㍍の休息地は快適だった。よく食べられ、よく寝られ、自分のからだがみるみる甦ってくるのが感じられるほどだった。と鈴木、高村、熱田は異口同音に語った。付き添う浜谷の助けを借りて三人は眠りに眠った。そして何よりも心の支えになったのは湯浅総隊長、寺西隊長と合流できたことだった。まったくの偶然だった。いろんなことをいっぱい話をしたそうだったが、唯一記憶に残っている会話は、「集中できるか?」「ハイ」「調子はどうだ?」「バッチリです!」「頂上にいる自分の姿をイメージしろ!」ただそれだけだった、という。

以下、鈴木の登頂日の行動記録を添えて、本報告の責めを果たすことにしたい。



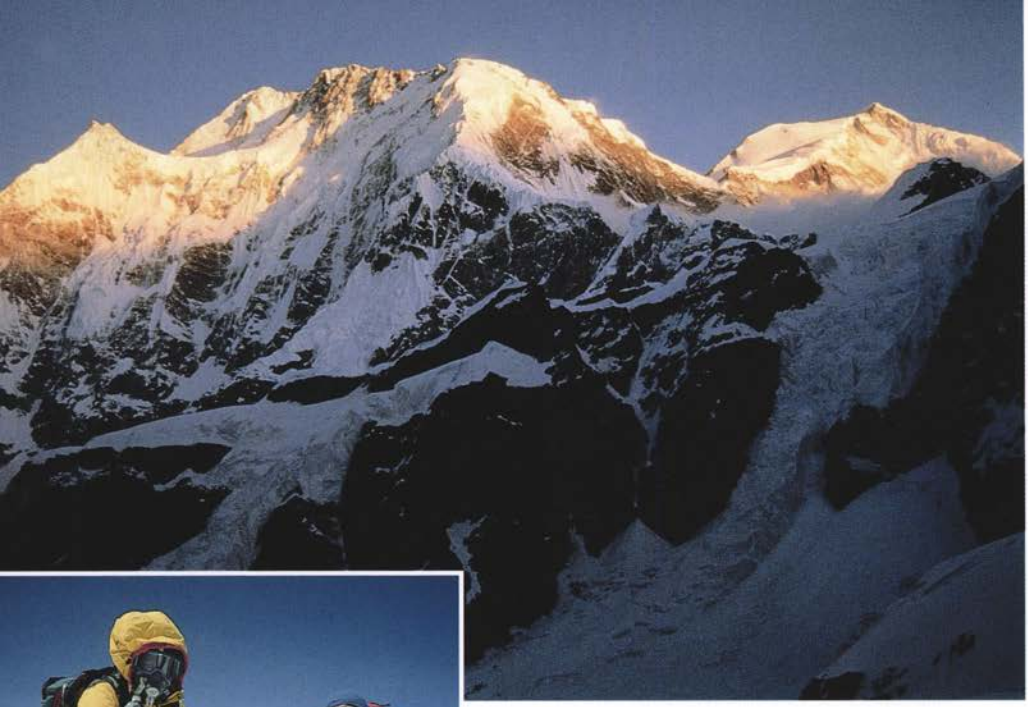
▲ザンブーから見るマカルー
Mt. Makalu seen from Zambu

▼マカルー東稜C4～C5間クレバスのスノーブリッジ上
On the snow bridge of Mt. Makalu East Ridge (C4～C5)





▲マカルー東稜C3～C4間のナイフリッジ
Knife ridge of Mt. Makalu East Ridge(C3～C4)



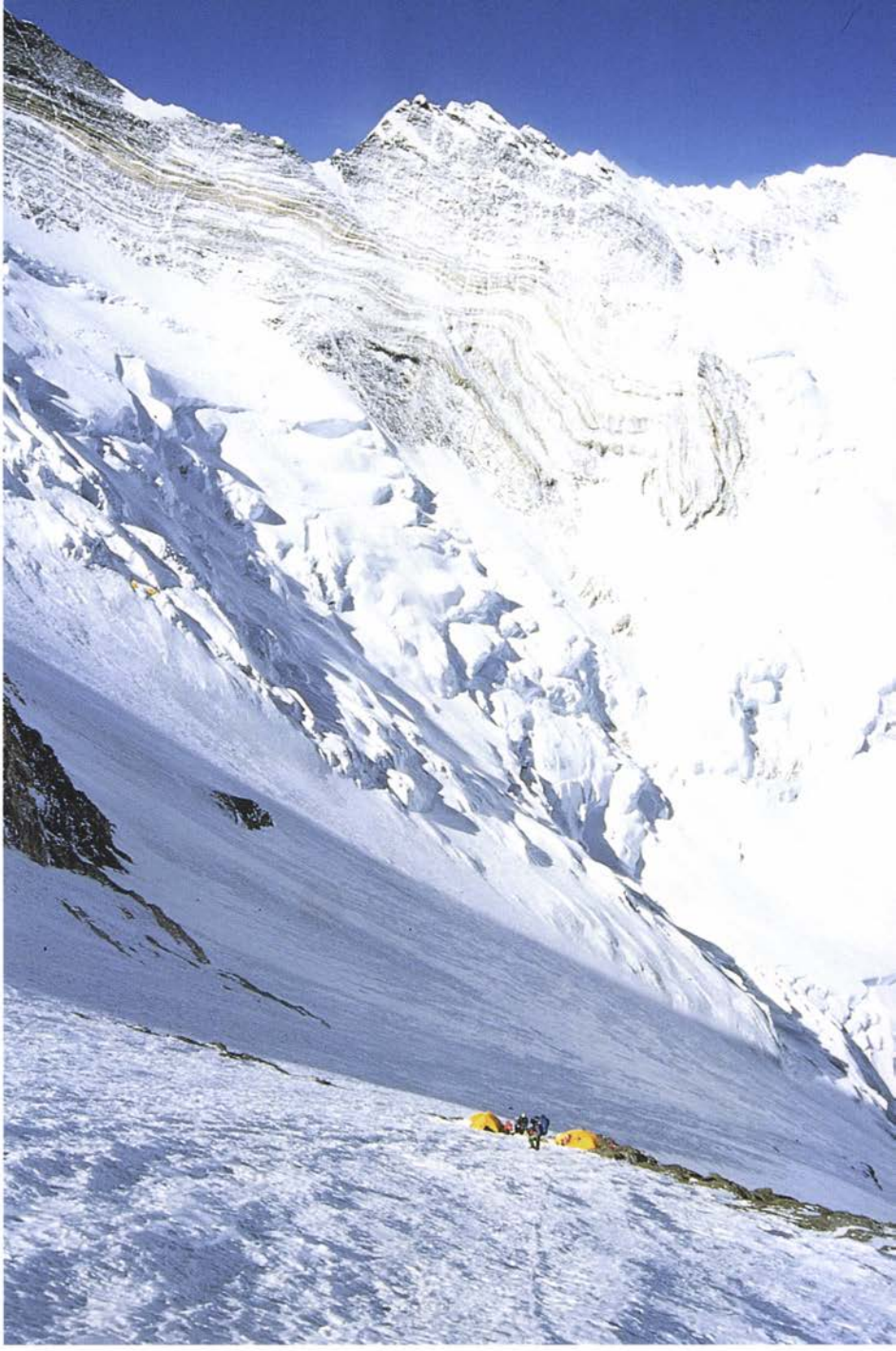


◀マカルー頂上で
On the Mt.Makalu Summit

▲5300mからのマカルー東稜とチョモロンゾ
East Ridge of Mt. Makalu and Mt. Chomo Lönzo seen from 5300m

▼マカルー頂上からのチョモランマ
Mt. Qomolangma seen from Mt. Makalu Summit





▲エベレストサウスピラーC3(下方)～C4間からのヌプツェ北面
North-face of Mt. Nuptse seen from Mt. Everest South-Pillar (C3～C4)



▲ロンブク僧院より見るチョモランマ北東稜
North-east Ridge of Mt. Qomolangma seen from Rongbuku Monastery

▼チョモランマ北東稜第2ピナクル
2nd Pinnacle of Mt. Qomolangma North-east Ridge





▲朝焼けのチョモランマ
Morning sunglow of Mt.Qomolangma

▼C2よりガッシャーブルムI峰北壁を望む
North-face of Mt.Gasherbrum I seen from Camp2





▲タンラ・ポ(右)6349mとニェンチンタングラ東峰(左)7046m
Right : Tangla Po (6349m), Left : East Peak of Nianqingtanggulashan (7046m)

▼ダウラギリI峰頂上へ
Ascent of Mt. Dhaulagiri I Summit





▲グレート・トランゴタワー
Mt. Great Trango Tower

登頂へ

八〇〇〇㍍を越えた世界。この高度、気の遠くなるような次元の世界を克服するには非常な注意力と集中力を発揮しなければならない。二人ともここまでは十二分に発揮してきた。あとは八八四八㍍まで持続させればいいのだ。熱田は初めての八〇〇〇㍍峰がエベレストということもあってか、プレッシャーだろう、少々下痢気味なようだ。

特別に緊張しているわけではなかったが眠れなかった。五月七日午後十一時シュラフから出て準備にかかる。この高さの世界では何事もスムーズに行えない。準備に二時間を費やし五月八日午前一時C4を出発する。昨日八三〇〇㍍付近までルート工作をしておいたので順調に高度を稼ぐ。固定ロープの終了点でアンザイレンをする。ヘッドランプの明りを頼りにガリーから雪壁へとくり返し「じわり、じわり」と攀じる。途中のテラスで二つの遺体（おそらく昨シーズン東南稜からスリップしたと思われる）を横目で眺めながら午前五時南峰下の八五〇〇㍍付近で東南稜と合流する。

傾斜のない稜線のモナカ状の雪のラッセルに苦労する。南峰の急登に差し掛かるまでのこの作業はとても苦しかった。南峰への岩と雪のミックスした岩稜を忠実にスタカットで攀じる。午前八時南峰に着く。休みたい気持ちを抑えてヒラリーステップの見えるところまで動く。最後の難関を早く自分の目で確かめたかった。

ヒラリーステップは思っていた通り岩が露出していた。五㍍程のチムニーを越えるのに三〇分程費やしたろうか、結局帰路を考えて一〇〇㍍固定ロープを張った。約一時間費やしヒラリーステップを越え、最後の頂上稜線を一歩一歩進む。まるで〝カタツムリ〟のようなゆっくりとしたピッチで。ついに稜線の最後のふくらみが近づいてきた。頂上のアルミのポールも見え最後の登路がはっきり認められた。頂上まであと二〇㍍、もう間違いなかった。あと何分かでエベレストの頂上に、世界の最高峰に自分が足跡を印すとは信じられないような気持ちになった。頭の中は真白な状態で頂上に足を踏み入れた、と同時にマスクをはずした。何よりも世界最高峰の自然の空気を早く味わいたかった。十分後に熱田が着く。多くのことを会話する必要もなかった。力いっぱい握手をし互いの顔を見ればそれで充分だった。

僕達が今シーズンのエベレストの頂上に立つ最初のパーティーである満足感と、今までのすべての遠征の中で最も幸福なこの瞬間と、この気分を何よりも誰よりも早く湯浅先生に伝えたい気持ちでいっぱいだった。

（「登頂へ」の項・鈴木清彦記す）

登頂後記

私も力一杯登山をした。しかし、エベレストという大きな山を登攀隊長自ら登頂する夢を果たすことはできなかった。しかし、とにかく、大学山岳部として初のエベレスト登頂、三つ目の八〇〇〇㍍峰登頂を完遂することができたことに満足したい。でも、私は生涯登り続けていきたい。五十七歳の大将（石川富康隊員の愛称）のエベレスト登頂という身近なお手本がある。そして胸を張っていま報告書にとり組んでいる。それは「本郷、君は凄いヨ！登攀隊員以外の支援隊トレッカーを含めて三十七人を無事故でキチンと指揮した

能力、そしてシェルパさんを隊員と同じ立場で登山をした人間性！本郷だから出来たんだヨ」という帰国第一声の橋本名誉総隊長と湯浅総隊長の言葉が深く胸にきざみこまれているからだ。

〈記録概要〉

隊の名称　愛知学院大学エベレスト登山隊一九九四

活動期間　一九九四年二月十五日～五月三十日

目　的　①エベレスト南稜（サウスピラー）ルートからの登頂、②環境保護活動

隊の構成　名誉総隊長＝橋本龍太郎（56）、総隊長＝湯浅道男（56）、登山隊長＝寺西申生、登攀隊長＝本郷三好（42）、登攀リーダー＝石川富康（57）・鈴木清彦（37）・浜谷光安（37）、登山隊員＝高村真司（33）・藤田元弘（33）・熱田渉（27）、健康管理隊員＝浜田好子、報道隊員＝石川保典、他に環境保護隊・学術隊員二六人。サーダー＝ラクパ・テンジン（55）・ペンパ・ヌルブ（43）、高所ポーター＝ニマ・ドルジェ（38）・ニマ・テンバ（37）・ナ・テンバ（40）・ダワ・タシ（30）ほか一一名、連絡官＝サガテ・アッチリー

行動概要　二月十五日～三月一日四隊に分かれカトマンズ入り。三月十一日～十七日環境保護活動・高度順化を兼ねてアイランドピークへ。三月二十八日BC（五四〇〇㍍）建設。四月二日C1（六〇五〇㍍）建設。四月七日C2（六六八〇㍍）建設。四月十八日C3（七六〇〇㍍）建設。四月二十三日C4（八一〇〇㍍）建設。四月八日隊員ディボチェで休養。五月八日隊員二名とシェルパ四名が登頂。五月十三日隊員一名とシェルパ三名が登頂。五月十七日BC撤収。五月三十日全隊員帰国。

富山県山岳連盟・ガッシャーブルムⅠ峰遠征隊

佐伯尚幸

一九七五年K6西峰の頂上直下より、チョゴリザ、左にブロード・ピーク、K2が圧倒的な高さで聳え立つのが見え、また、帰路、スカルドからのフライトでは、ナンガ・パルバットの北稜をぎりぎりの高度で越え、西壁の迫力に息をのんだ事を思い出す。

K6西峰の初登頂成らずの無念さと、次はあの山々との意欲が交差し、消化不良のまま遠征を終えた。

その後、八三年にナンガ・パルバット西壁、八八年にブロード・ピークの登頂に成功し、県岳連三つめの八千㍍峰に、ガッシャーブルムⅠ峰を選び、県内各会のメンバー十三名で組織し、ルートは未踏の北壁を選んだ。

本来、山登りは気の合った者同士、あるいはクラブのメンバーと共にやるのが理想ではないかと思っているが、八千㍍峰ともなれば資金や休暇の問題等解決しなければならないことが沢山あり、また、数年に一度遠征を企画し、参加するチャンスを提供することも連盟の使命であるかもしれない。

このことが、所属各クラブに経験者を生み、また、波及効果として、ヒマラヤへの機運を高めひいては、山岳への関心があらゆる層に受け入れられることを願うものである。

より困難である未踏ルートの北壁を選び、また、前回同様酸素補給なし、ハイアルティチュード・ポーター（H・A・P）なしとした。

最近、外国隊も含め、ルート工作から荷上げ、酸素補給までH・A・Pにたよっている遠征隊を見聞きするが、頂に立つために何でもあり、という登山は考え直すべきであり、その事は、個々の創造力を奪ってしまうことになり、又、そのために山へ持参する荷物量が増え過ぎ、それだけ山岳環境にも影響することにもなる。

ベースキャンプから上は、自分達のみの力で、というのが登山ではなかろうか。

近年、一部の隊はこの点で逆行してきているのではないだろうか。頂に立つために新しいルートを選ぶことは、過去の経験だけではなく、新しいオペレーションを創造していくことでもあり、これが事前の検討に熱が入り、ひいてはチームのレベルを上げ、結束を固めるとおもわれる。

隊は、六月十九日イスラマバードでのブリーフィングを終え、二十日早朝、バスでカラコルムヒマラヤの玄関口、スカルドへ向かい、ここで最後の準備を終え二十四日にはスカルドからジープ七台でアスコーレへ向かうも、道路決壊のため、アスコーレ手前のトンガルまで、しかし六年前のブロード・ピーク遠征の時はスカルドからアスコーレ迄四日がかりだったのが、この変わり様は感慨深い。

二十六日、いよいよキャラバンを開始するが六年の間にルートが整備され、渡渉する箇所が無くなっており、このパキスタンの変わり様は、ツーリズムへの関心の高さからきているのだろうか。

キャラバン途中の森林破壊の元凶である燃料の問題では、従来以上の進展は困難で、リエゾンオフィサーやサーダーとも語り合い、私達の考え方は理解されたとは思うが、現地の人達の習慣と文化そして宗教と一体となった価値観の前では、一遠征隊の交渉力では無力であり、息の長い啓蒙の努力と時間が必要であると思われる。

強烈な陽射しと乾燥に苦しめられながらの八日間で、バルトロ氷河を経てアブルッツィ氷河の真ん中のモレーン上に、ベースキャンプ（五一〇〇㍍）を設営したのが七月三日。

六日よりガッシャーブルム氷河上のアイスフォール帯をルート工作しながら高所順応を兼ねて荷上げ、C1（五九〇〇㍍）までは巨大なセラックやクレバスが多数あり非常に危険で、ヒドンクレバスには隊員は何回も転落したが、事前の訓練のおかげで幸い大きなけがはなかったものの、だいぶヒヤリとさせられた。

今振り返ってみると、頂上までの全ルートのうち、ベース・キャンプとC1の間が、いろんな意味で、今回の登山に一番影響した箇所だったように思う。

七月六日以降次々にアメリカ隊、スペイン隊、ボスニア隊、アングロ・アメリカン隊、イタリア隊、ブリティッシュ隊がベースキャンプに入り、国際色豊かなテント村が出現した。

C1迄は、Ⅰ峰、Ⅱ峰、Ⅲ峰ともルートは同じなので、この様なことになり青、赤、黄、緑など色とりどりのテントの数は一〇〇以上はあったであろう。

C2（六四〇〇㍍）までは大きなクレバスが幾つかある以外は雪原を歩くルートでガッシャーブルム・ラの手前に設営した。

北壁を変更、北クーロアールへ

ここからいよいよ北壁未踏ルートに取り付き、岸壁帯にルートを延ばすが岩が思ったよりもろく支点がなかなか取れない。さらに、懸垂氷河の崩壊など、非常に危険な場所に長時間さらされるなど、これ以上は無理と判断せざるを得なかったが、北壁未踏ルートからの登頂を最大の目標にしてきた我々は、危険を承知でこだわるか、通常ルートに切り替えて頂上に立つことを最優先するか、重大な岐路にたたされ早急な決断を迫られた。

日数的な余裕もない中、八月五日後ろ髪を引かれる思いで北クー



頂上よりチョゴリザを見る　氷河上にBCを置いた

ロアールにルートを変更、C3（七四〇〇㍍）からアタックすることに決め、八月八日C3予定地近くまで入り九日C3に三名入るも、以後十一日まで猛吹雪にみまわれ燃料・食料が残り少なく心配したが、十二日快晴に恵まれ極寒のなか早朝よりアタックを開始、ダイレクトにルートを取る。頂上直下七〇度の壁を乗り越え、十二時半まず谷口が、つづいて一時間半遅れて稲葉が、さらに一時間遅れて佐伯が頂上に立った。

この日アタックのメンバーは十五時間の行動でC3に帰着、C2からのサポートのメンバーは、不安定な雪上を十七時間の行動の後、夜九時にC2に帰着、頭が下がる。

以後撤収を繰り返し、ほとんどすべての装備をベースキャンプに下ろし、またベースの周辺の過去の隊のゴミも集め、燃えないもの（金属、ガラス）は持ち帰った。

我々規模の遠征隊であれば、過去の経験から三十名位のポーターで十分と思われたが、過去の隊の重量のある不燃物が相当多かったせいか、四十名のポーターが必要だった。

帰りのキャラバンはゴンドコロ峠を通り、ヒュースパン―セイシチョウから、フーシェにでて、ジープで一日で八月二十日スカルドに到着、ベースキャンプより四日間であった。

二十年前に何日もかかったフーシェからの道がたった一日になり、また当時雇ったポーターが、大サーダーになっていたり、あるいは、すでに亡くなっていたりと、感慨深いフーシェの地であった。

しかし、地元の人々はバイタリティーに溢れ、山へのアプローチの道を、またトレッカーのための峠の見晴らしの良い道造りなど、

人々を受け入れるための環境設備づくりに熱心だった。

六月二十四日このスカルドの町を出発して、約二カ月近い月日が流れていた。

なお、持ち帰ったごみはスカルドのK2モーテルに処理を依頼した。

私自身パキスタンの遠征を四回経験したことになるが、それぞれ思い出が深く、計画し実行し、それぞれ全員無事に遠征を終えることができたのは、今思えば奇跡にちかいことだったように思えてならない。

共にカラコルムに遠征した仲間の何人かはあの世へ逝き、現在のカラコルムの変わり様を語り合えないことを思うとき、痛烈な寂しさを感じる。

今後とも、山の良さや、ヒマラヤの良さを伝えながら、創造力ある山登りを続け、物質的な現実の生活と、わが心の旅を見つめ、考え、自然界での登山のなかからどんな価値を見いだせるかが今後の楽しみだ。

〈記録概要〉

隊の名称　一九九四年富山県山岳連盟ガッシャーブルムⅠ峰遠征隊

活動期間　一九九四年六月十一日～九月四日

目　的　ガッシャーブルムⅠ峰の北壁からの登頂

隊の構成　隊長＝佐伯尚幸、マネージャー＝中島眞、登攀隊長＝谷口守、登山隊員＝佐伯成司・松田靖彦・黒崎泰信・稲葉英樹・丸山政寿・川村泰臣・佐竹剛彦・高田賢一、医師＝田辺隆一、特派員＝川端睦夫

行動概要　六月十一日先発隊六名富山発、十五日本隊七名富山発。七月三日BC設営、十日C1設営、二十三日C2設営とC3へ新ルート工作、八月三日北クーロワールへルート変更、九日C3設営、十二日三名C3よりアタック、登頂。十三～十五日撤収、十六日BC撤収、九月四日全員帰国。

［註：本登山は日本山岳会海外登山基金からの一九九三年度の助成を受けて実施された。］

ニェンチンタングラ山群の未踏峰
タンラ・ポ峰の初登頂

黒川　恵

はじめに

かねてから、現役部員を中心として海外合宿を行いたいと考えていた。学生だけのペルー・アンデス合宿からもう十数年もたっていた。その間に山岳部を巣立ったOBたちはいくつかの遠征隊に参加していたが学生たちは国内合宿、それもいわゆる訓練合宿の繰り返しであった。それでも一部の学生はカラコルムやパミールに出かけてはいたが組織的なものではなかった。

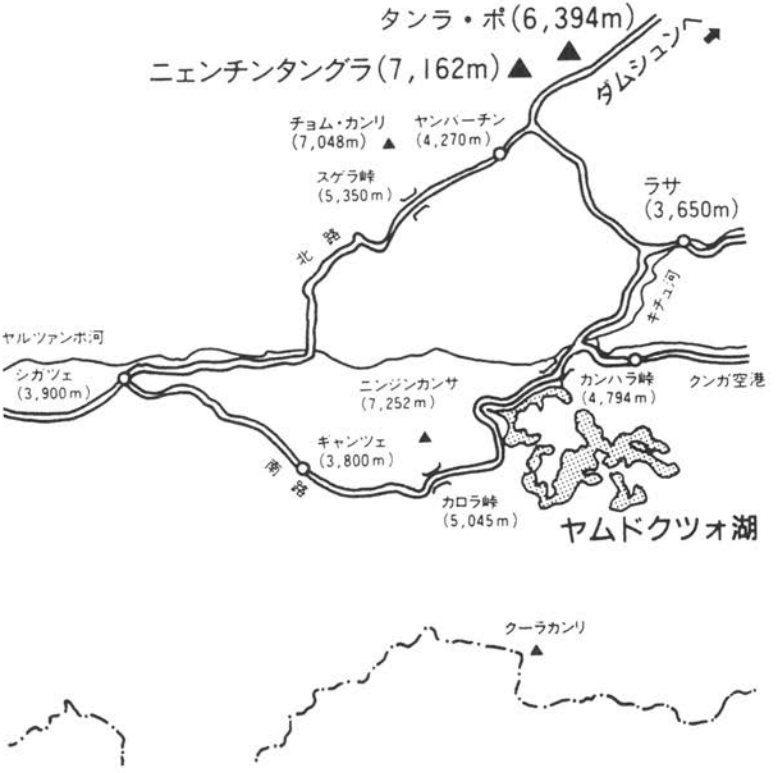
「大学山岳部衰退化」の波にもまれながらも平均的な体裁を保ってきたつもりの中大山岳部ではあるが、現役部員に明確な「目標」を与えてきたものではなかったようだ。

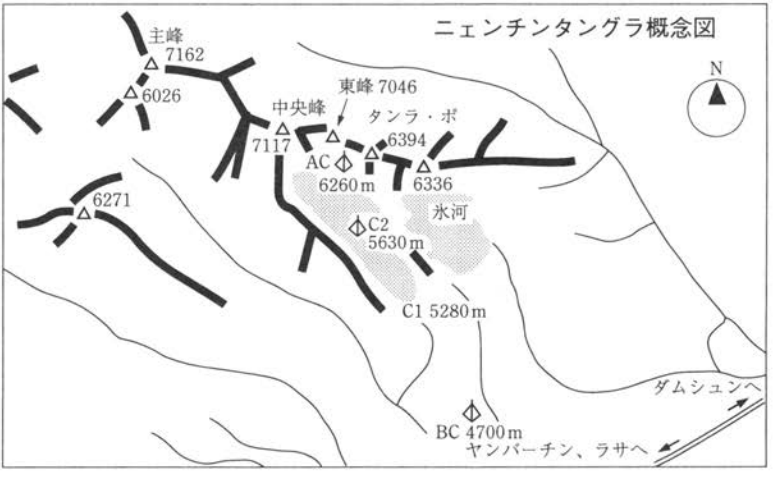
このチベット合宿の中心となった四年部員は入部当時から人数も多く、目標としての海外合宿計画は学生の側からごく自然に発生した。私たちの隊は昨年（一九九四年）二月にニェンチンタングラ山群の未踏峰を偵察し、今年の本隊出発につながったわけだが、山域の決定までは容易だった。アプローチが短く、一ヵ月間で完結できる山。あまり人の入っていない山。かっこ良くいえばパイオニア・ワークの結果として充実感の味わえる山。そんな山域としてラサから車で数時間のこのエリアが選ばれた。

しかし、広い山域の中から特定のピークとして、このタンラ・ポ（六三九四メートル）を選び出すのには金と時間を費やした。未踏峰で、独立峰で、学生の力で登頂できる山というのはそうめったにあるわけではない。昨年二月の十七日間の偵察期間中には、そんなピークを求めて、ずいぶんと車で走り回った。それでなくても山座固定があやふやな所なのだから登った後に山名が違っていたなんてこともある（この山も実はそうだった）。

そんなわけで、二十七日間の私たちのチベット合宿は一九九五年二月二十五日に始まった。

＜行動記録＞


タンラ・ポ(6,394m)
ニェンチンタングラ(7,162m)
ダムシュン
チョム・カンリ
(7,048m)
ヤンパーチン
(4,270m)
スゲラ峠
(5,350m)
ラサ
(3,650m)
北
ヤルツァンポ河
シカツェ
(3,900m)
ニンジンカンサ
(7,252m)
カンハラ峠
(4,794m)
クンガ空港
キチュ河
キャンツェ
(3,800m)
カロラ峠
(5,045m)
ヤムドクツォ湖
クーラカンリ


ニェンチンタングラ概念図
N
主峰
7162
6026
中央峰
7117
東峰 7046
タンラ・ポ
6394
AC
6260m
6336
6271
氷河
C2
5630m
C1 5280m
ダムシュンへ
BC 4700m
ヤンパーチン、ラサへ

二月二十五日、成田より上海経由、成都へ。
二十六日、成都より空路、ラサへ。
二十七日、チベット登山協会と打ち合わせ。
二十八日、ラサ滞在。
三月一日、ラサ出発。ランクル二台とトラック一台でヤンバーチンへ。河原へ設営。
二日（晴れ）、ヤンバーチン→BC→ヤンバーチン。順応のため、車で四七〇〇㍍のBC予定地（ババの家）往復。
三日（晴れ）、ヤンバーチン→BC。いよいよBC設営。ヤンバーチンから車で向かう。この日の朝の気温マイナス一八度。

私たちが「ババの家」と呼んでいるチベット放牧民の家の脇に張ったベースキャンプには、飽きることなく当主ババ氏とそのファミリーが押しかけてくる。ここは、タンラ・ポ峰の好展望地ではあるがニェンチンタングラ連峰のベースキャンプからは離れているため、外国人がやって来ることはまずない。だから、彼らにとっての私たちは、何から何まで珍しく、やることなすことがおかしな存在なのだ。

四日（晴れ）、BC→C1（五一八〇㍍）→BC。日本を出発してから八日目。ラサ（三六〇〇㍍）で三泊、ヤンバーチン（四二〇〇㍍）で二泊した身体はこの四七〇〇㍍のBCでも快調に動ける。C1予定地（五二八〇㍍）を往復する順応ハイキングは、結氷した河を渡りながら南面氷河舌端まで行くことができた。
五日（晴れ）、BC→C1。

昨日まで十頭だったはずのヤクが四頭しかいない。隊荷は四〇〇㌔あるというのに……。「馬でよいですか?」とチベット登山協会派遣の通訳ガイドのテンジンがきいてくる。「なんでもいいから早く行こう」というわけでババ・ファミリーの馬六頭を徴用し、C1へ出発。馬方として隊員の学生が手綱をとる。

途中、賃上げスト三回を計一二五元（たった一四〇〇円）でクリアし、ヤク工のごきげんをとりながらC1着。
六日（晴れ）、C1→五八三〇㍍デポ地→C1。

C1から結氷した河を渡り、タンラ・ポ南面氷河へ入る。のっけからガチガチの氷だ。氷河上の積雪はゼロ。ラッセルなし。アイゼンのツメの分だけ身長が延びた気分。クレバスは透明な氷に閉ざされてまるでガラス・テーブルの上を歩いているようだ。

下部氷河が上部へ立ちあがる斜面にも積雪はない。緩傾斜とはいえ、荷上げを考えフィックスを張り、五八〇〇㍍地点まで偵察してC1へもどる。
七日、休養停滞とする。変化の激しい天候。
八日（曇り）、C1→C2（五六三〇㍍）→C1。

五八三〇㍍地点までC2をあげたいが五六三〇㍍地点に荷をデポし、C1へもどる。順応しきれない者や、乾燥した寒気で気管支をやられる者が出てきた。
九日（うす曇り）、C1→C2→五八三〇㍍デポ地→五九〇〇㍍付近→C2。

前日のデポ地（五六三〇㍍）をC2とする。C1から移動し、設営の後、五九〇〇㍍付近までルート工作する。五八〇〇㍍から上部



ニェンチンタングラ山群タンラ・ポ峰頂上にて

はいきなり青氷のカチンカチンの斜面のトラバースから始まった。その上にはクレバスが待っていた。フィックス工作してC2へもどる。

十日（雪）休養停滞。あいかわらず天候は変わりやすい。雪まじりの強風が吹く一日となった。この日は中大と中大附属高OBたちの支援トレッキング隊がBCを訪れる日であったが無線の調子が悪く交信できなかった。

十一日（晴のち曇り）、C2→プラトー（六二六〇㍍）→ルート工作終了点→C2。

いつもより早目の八時二十五分（北京時間）出発。マイナス一四度C。九時三十分、五八三〇㍍デポ地通過。その上部、氷の斜面とクレバスをフィックスで渡り、傾斜のない尾根上に出る。ここから頂上直下のプラトーまでやっと氷ではない「雪上登高」となる。十三時プラトー着。

BCやC1、C2から見上げていた頂上はのっぺりした雪のドームとしか見えなかったが、目の前のそれは雪のプラトーから頂上まで続く氷の壁である。とりあえず、岩立、黒川の二人で取り付き、3ピッチ登る。上部は広がり始めたガスの中でまっ白。十七時三十分、下降開始。やはり、C2から一気に頂上までは遠かった。C2へもどる。

十二日（晴れのち曇り）、C2→C1→C2。

プラトーに上部キャンプ（AC）を出さないとC2からは頂上まで届かないことがわかったので、C1からAC用食糧とテントをC2まで荷上げする。また、上部でのフィックスロープが不足気味な

ので、五八〇〇㍍付近に張ったロープを回収し、上部用としてデポする。

十四日（雪のち曇り）天候悪く休養停滞。

十五日（晴れ）C2→AC（六二六〇㍍）。

いよいよ、先が見えてきた。ついにAC入りだ。五八三〇㍍地点で、國分の体調が悪いため岩立が付き添いC1へ下山。岩立は安全地帯まで國分をエスコートした後、ACへ登り返してきた。ACには五人そろった。

十六日（晴れ）AC→タンラ・ポ登頂→AC。

テントに当たり始めた太陽光線が頂上への氷壁にまわるまで待つ。残すところはわずか三〇〇㍍の氷の壁とリッジだと思うと余裕も出てくる。

十時三十分、岩立と黒川で取り付き、五日前にセットしたフィックスを3ピッチ登ると頂上へ続くナイフエッジとなる。リッジの向こう（ナムツォ湖）側は岩壁でいくらか氷の雪庇が張り出している。下降のことを考え、フィックスを張り続けながら行く。ワートホッグが残り二本になったところで頂上に出た。

そこだけが雪の斜面になっていた。

東側は荒漠たるチベット平原に、茶色の大地のうねりが続く。西側には少し高くニェンチンタングラ東峰が頭を出している。ほんのついさっきまでその左側ずっと奥に未踏のチョム・カンリ（七〇四八㍍）がピラミダルな山容を見せていたが、今は、白い雲の中だ。

十六時五分、黒川、岩立、田村、佐々木、山元の五人が頂上に集結した。

十七時二十五分、ACにもどる。

十七日（晴れ）AC→C2→C1。

登頂後のACの朝は快晴で明けた。C2へ下り、撤収。C1へ下山。各キャンプで出たゴミは、不燃物は持ち帰り、可燃物はその場で燃やした。「すべて持ち帰る」ことは立派だけど、その実践の困難なこと。そして、高所におけるゴミ処理は、ただ「美観の保全」でしかないのか、といった素朴な疑問を持ってしまったのは不勉強のなせるわざだが、誰かが明快に答えを出さなくてはならない。「なぜ、そこにゴミがあってはいけない」のか。

C1で國分と再会し、久し振りに全員そろった。

十八日（晴れ）C1→BC。

昨日BCへ無線で依頼したヤクとヤク工、テンジンが約束の時刻に上がってきた。C1を撤収してBCへ下る。ババ・ファミリーとリエゾン・オフィサーのペンバ氏が笑顔で出迎えてくれた。

おわりに

登山そのものは、変わりやすい天候に加え、冬期でもあり、ルートの三分の二以上が氷化している状態で、充実した「手と足」を使ったクライミングが楽しめた。

とはいえ、エベレストや、マカルーは、私たちの登った山のはるか西方、ひしめきあう巨峰たちの群れの中にある。

私たちのタンラ・ポは、たった六三九四㍍のちっぽけな山だったかもしれないが、緊急連絡用のランクル一台と運転手をBCに常駐させた他には代替要員や、シェルパなどの外注スタッフもいないちっちゃな学生隊にとっては、思いっきりフロンティア・スピリッ

トをぶつけることのできた山行でもあった。

そして、この登山は、現役部員たちにとって、将来の高所登山への第一歩となり、アルパイン・クライマーとしてのスタート地点に立つきっかけになるものであったと、私は信じたい。

〈記録概要〉

隊の名称　中央大学山岳部チベット遠征合宿タンラ・ポ登山隊

活動期間　一九九五年二月二十五日～三月二十三日

目　的　タンラ・ポ（六三九四㍍）初登頂

隊の構成　隊長＝黒川　惠（44）、登攀リーダー＝岩立実勇（25）、隊員＝田村明久（22）・佐々木英一（23）・山元宏彦（22）・國分浩樹（22）

行動概要　二月二十五日日本出発。三月三日BC建設（四七〇〇㍍）。五日C1建設（五二八〇㍍）。九日C2建設（五六三〇㍍）。十五日AC建設（六二六〇㍍）。十六日五名登頂。十七日AC、C2撤収、C1へ下山。十八日C1撤収、BCへ下山。十九日BC撤収、ラサへ下る。二十日ラサ滞在。二十一日成都へ。二十二日上海へ。二十三日全員帰国。

報　告　朝日新聞運動面（三月二十三日）。『岳人』（一九九五年四月号）。『山と渓谷』（一九九五年五月号）。『中央大学山岳部チベット遠征合宿1995タンラ・ポ峰初登頂報告書』（一九九五年六月）



五十歳以上のダウラギリⅠ峰登頂

渡邉玉枝

一九九一年秋にシルバータートル隊は初めての遠征を行い、チョー・オユー（八二〇一㍍）に登頂することができた。中高年の登山隊として、五十歳以上の隊員ばかりで編成したこの隊は、これまでのヒマラヤ遠征隊とはちょっと異なり、気張らず、楽しく、安全にをモットーとした隊である。初めての八〇〇〇㍍が思った以上に順調に終了した。それでは次は何処にしようか、女性的で優美なチョー・オユーから、男性的な迫力のあるダウラギリへと池田隊員らが候補の山をあげた。チョー・オユーではサーダーだったラクパ・テンジンさんは一九七〇年に同志社大隊と共にダウラギリに登っていた。そのテンジンさんが来日した折にどうでしょうと伺ってみる。「皆さんでも登れますよ、雪崩の危険も比較的少ないでしょう」とテンジンさんが請け合ってくれた。登山は三年後、九四年の秋と決まった。皆忙しい仕事を持ち、それほど気軽にヒマラヤに行ける環境ではない。三年後だとなんとか職場や家族も説得できるという読みであった。隊長は最年長の石川富康氏に決定し、準備が始まった。過去の登山隊の記録を調べてみると、意外と登頂率が悪い。成功はしても一隊一、二名の登頂者しか出していない事が分かった。これは手強い山だという事が次第に分かってきた。わが隊は全員登頂を目標とし、登山日数四十五日、荷上げやルート工作には経験豊富なシェルパを雇い、上部キャンプからは積極的に酸素を使用することにした。今流行のアルパイン・スタイルとは逆行した登山形式である。そして出発一カ月前になって急遽ＮＨＫが我々に同行、取材することが決まった。

カトマンズ〜ＢＣ

八月二十三日先発隊三名が出発、カトマンズにデポしてある装備、酸素等の整理点検と梱包に当たってもらう。本隊は八月二十七日名古屋と成田から出発した。香港で合流した本隊は二十七日夜八時過ぎカトマンズ空港に降り立ち、カトマンズのホテルで全員が勢揃い

した。

二十八日夜はシェルパさんたちとの顔合わせ夕食会。二十九日早朝、サーダー率いるキャラバン隊が出発した。私達はＮＨＫ同行の手続きかたがたネパール観光省登山局に出向き、そこで担当連絡官を紹介された。サビトリ・シュレスタさん、女性の連絡官だった。意外と早く手続きが終了したので、その日のうちにポカラまで飛ぶことになった。三十日、ポカラからジョムソンに向かう。わずか十五分でジョムソンの空港に降り立つが、この間の機上から待望のダウラギリが見えた。白く、スッキリとした山容、思わず皆の口から感動の声が漏れた。本当にあの山に登れるのだろうか。一際抜きんでたその姿は神々しいばかりに聳えていた。

八月三十一日隊員はマルファへと移動し、キャラバン隊を待ちながら、高度順化をすることにする。途中にあるシャン村には、日本から来て農業を指導している近藤亮先生の農場が在り、そこで見事なキャベツ畑や、色鮮やかなコスモス畑を見てからマルファ（二六七〇㍍）に入る。

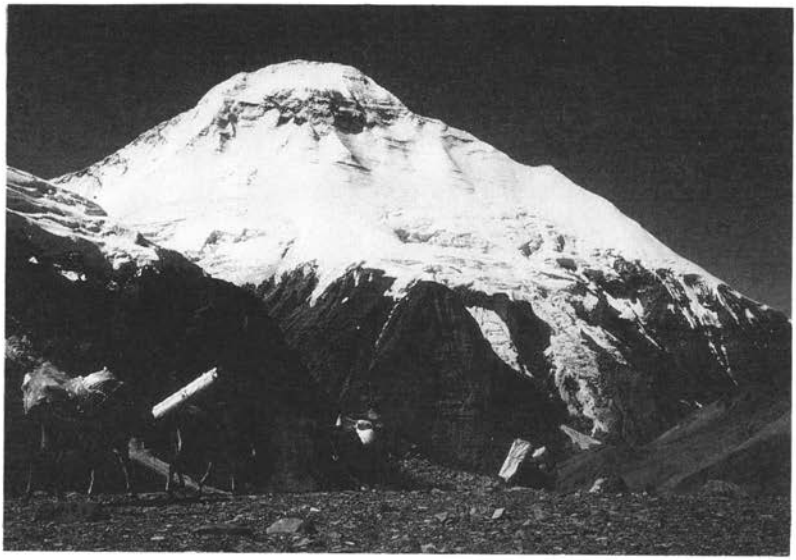
マルファは白壁の石積みの家々が軒を連らね、街路には山から切り出した板状の自然石が敷き詰められており、独特の雰囲気を持った村である。河口慧海がチベットへ潜入する途次立ち寄り、その滞在した家も現存しているという話であった。林檎畑、蕎麦畑、とうもろこし畑と日本で馴染みの作物が多い。

いよいよキャラバン隊がマルファに到着する九月三日、皆で村外れまで出迎えに行く。二時頃ようやく早いポーターが到着、しかし、ロバ隊はまだ二時間以上はかかるだろうと言う。四時半過ぎ頃、鈴音軽やかにミューレ（ロバ）の集団がやって来る。先頭集団は頭に赤い大きな飾りを付け、首には夫々大きな鈴をつけている。中に泥んこになったロバが泥だらけの荷物をつけてやってきた。途中、増水した流れに足を取られ、あわやというところをシェルパやロバ工に助けられたという。

九月四日、隊荷六㌧をロバ七十七頭、ロバ工十一人、ポーター四十五人に託し、リエゾンオフィサー二人（隊とＮＨＫ）と隊員七人、シェルパ十四人（ＮＨＫ三人）、コック、キッチンボーイの六人を加えた大キャラバン隊はヤクカルカを目指し、マルファを出発した。

ヤクカルカでの夕食後、サーダーが、明日は天候の良い内にヒドンバレーまで行ってはどうだろうと言ってきた。五〇〇〇㍍の峠を越えるこのコースは、天候の悪化によっては積雪もあり、そうなるとロバもポーターも立ち往生となってしまう。通常は二日をかけるこの行程を一日で突破することになった。

九月五日朝、パルスオキシメーターで皆の順化状態を測る。八〇から九〇前後、まあまあという数字だ。七時三十分ヤクカルカを出発。色とりどりの花々がキャラバンの私たちを楽しませてくれる。四七〇〇㍍までは登り一方、後は山の斜面を幾つもいくつもトラバース、四八〇〇㍍を越える高度で、前方に峠が見えてくる。タト・パス（五一〇〇㍍）だ。この峠から一九六〇年スイス隊が使用、不時着遭難したイエティ号の残骸を見ることができた。この峠前後から天候が急変、霙や雪が舞い始める。一時的なもので収まったが、薄着のポーター達は寒い思いをしてしまった。午後三時前にはヒドンバレー（四九〇〇㍍）に到着する。一気にヒドンバレーまで来た



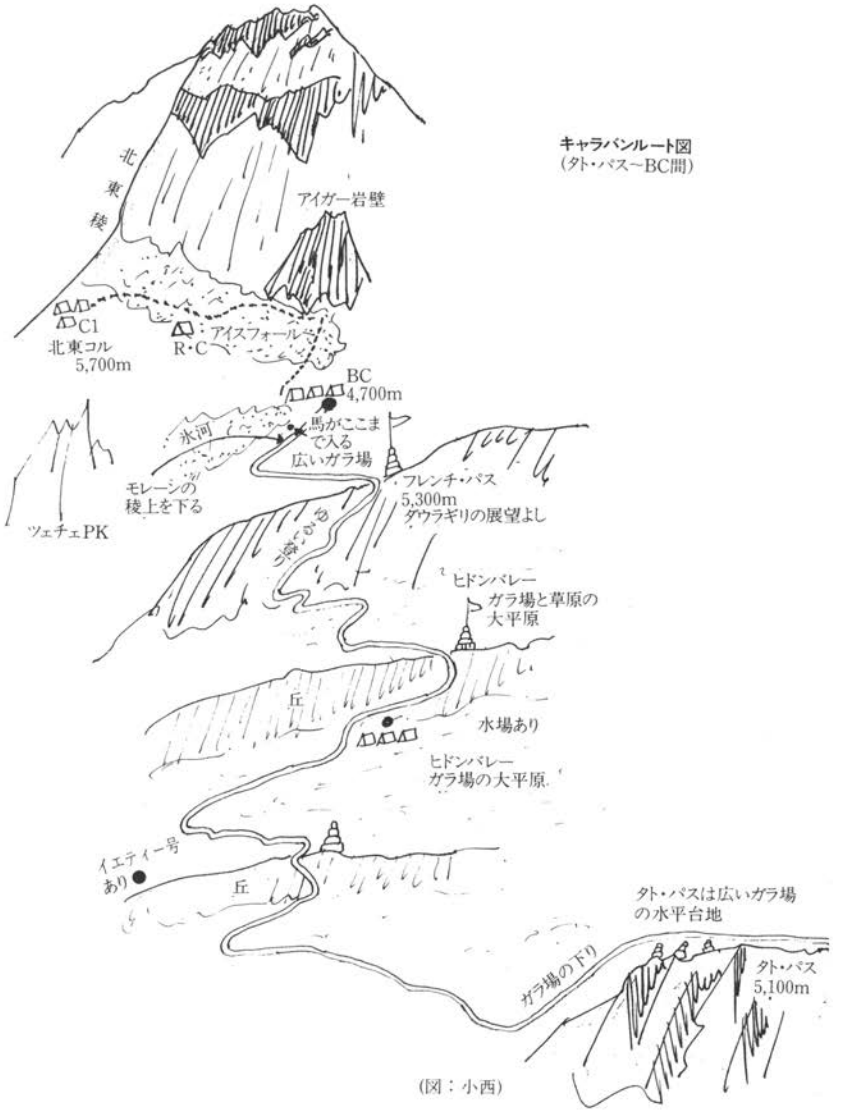
フレンチ・パスから望むダウラギリⅠ峰

せいか、何人か高山病の症状が出てきた。特に重い荷物を担いで頑張ったポーターの中に寒さで風邪を引いたのか、発熱する人も出た。ロバが途中の急斜面のトラバースで転がり、鼻筋からお腹まで、かなりの傷を負ったと言ってロバ工が薬を貰いに来た。隊員も一緒に手当てする。六日は調子の悪い人も何人かいるので停滞。

九月七日、ヒドンバレーから低い丘を越え、だらだらと水平の道をしばらく歩き、緩い上りにかかると直ぐにフレンチ・パス、ここからのダウラギリの眺めは素晴らしかった。下部に黒々としたアイガー岩壁、上部はすっきりと青空の中に引き締まった姿を聳やかしていた。

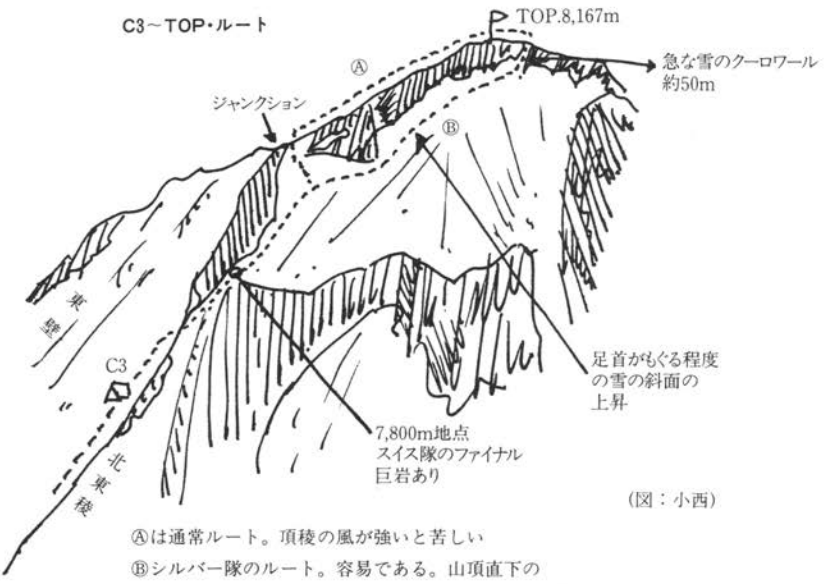
九月八日、出発して一時間余でBC地点四六五〇㍍に到着する。ここは、目の前にアイスフォールを隔てて、アイガー岩壁が迫り、その上に懸垂氷河、そして雪をたっぷりと戴いた山頂が、首がいたくなるような高さで聳えていた。BCにはすでにスイス隊、国際公募隊、岩手隊等が設営済みで、私たちの後アメリカ隊、ウクライナ隊、さらにフランス隊がやってきた。

岩手隊はBCにもう三週間おり、C1までのアイスフォール帯のルート工作を終了、九月十日にはC1入りして、しばらく下りてこないと言う。我々も岩手隊のルートを使わせてもらうことにした。九日荷物整理、十日はシェルパが荷上げを開始すると言うので隊員五名が個人装備の荷上げ方々アイスフォールの状態を見に行く。遠くから眺めていていたよりはるかに悪い。雪原に出るまでほとんどフィックスロープのベタ張り、三時間半で標高五一〇〇㍍のデポ地点に着く。



キャラバンルート図
(タト・パス～BC間)

(図：小西)



Ⓐは通常ルート。頂稜の風が強いと苦しい
Ⓑシルバー隊のルート。容易である。山頂直下の
急なクーロワールは下降時、フイックス１本が必要

十一日ＢＣ開き、昨夜からの断続していた雨もどうやら上がる。儀式はシェルパさんのお経で厳かに始まった。大きなケーキ、ツァンパの山にバターで象った供物、この山中でと思われるほど盛大な儀式で、最後のツァンパ撒きは大変な騒ぎだった。

ＢＣ到着以来昼近くなるとガスが出て次第に雨となるパターンの日が続く。シェルパはデポ・キャンプまでの荷上げ、隊員は五〇〇〇㍍までの順化行動をする。十五日夜の話で、隊員は九月十八日と十九日、二隊に分かれてデポ・キャンプ入り、二十日には全員Ｃ１に集結と決まった。

ＢＣ～頂上

十八日、先発隊出発の日は朝から雪まじりの雨となり、暫く様子を見るも雨は止みそうになく、行動中止となる。翌十九日も朝から雪となり、ＢＣを白一色にしてしまう。行動は中止、雪はかなり激しく一日中降り続いた。辺りに轟く雪崩の大音響、アイガー岩壁からもしきりに雪崩発生。

二十日、昨日までの降雪でデポ・キャンプとＣ１は一㍍近く積もったという交信が入る。ようやく晴れたが、今日は雪崩の危険が大きいのでもう一日待つことにする。昼食をとり終わった頃、岩手隊のリエゾンオフィサーがアクシデントと言いながらトランシーバーを片手に駆けてきた。岩手隊はＣ２からＣ３に向かう途中、表層雪崩に巻き込まれ、サーダーが滑落したと言う。私たちのテント場から現場が良く見える。四人で歩いていたというが、三人は確認できた。双眼鏡であとの一人を探していると、シェルパが肉眼でクレバスの下に一人いるのを見付けた。素晴らしい視力である。トラ

ンシーバーで指示を出し、所在を教えてあげる。午後一時過ぎから延々と、双眼鏡で確認する人、それをトランシーバーで上に伝える人と分担し、日没で暗くなるまで下からの誘導を続けた。上部では救援隊が七時過ぎに合流、C1には八時四十分に収容でき、そこで下から連絡を取ってあったアメリカ隊のドクターに診察してもらうことができたという。命に別状はないという交信に一同ほっとする。

二十一日、ようやく行動開始、六時十分頃から各自BCを出発する。アイスフォール帯も我が隊のシェルパがルートを変更し、だいぶ歩きやすくなっている。降雪中は間断なく落ちていたアイガー岩壁からの雪崩も今朝はおさまり、積雪は深いがそれ程歩きにくくはない。デポ・キャンプ五一〇〇㍍には十時五十分着。皆で昼食をとり寛いでいると、C1から、昨日雪崩にあった岩手隊が十二時頃下山してきた。我が隊からは昨日に引き続きシェルパが二名応援、滑落したサーダーは両腕や手に包帯、顔面は浮腫んでおり、肋骨も折れているかもしれない様子、でも助かって本当に良かった。お茶とラーメンで一休みして、一時頃背負われて下山して行った。

二十二日デポ・キャンプに一泊した隊員達はこの日ダイレクトにC1入りする者と、今日は荷上げだけして下でもう一泊する者とに別れた。夫々が自分に合わせた順化を行っている。デポ・キャンプからC1のある北東稜コルまでは縦横に走るクレバスを巧みに縫って行く。標高差六〇〇㍍、ヒドンクレバスには赤旗が立っていた。二十三日全員がC1五七〇〇㍍に集結した。周囲には岩手隊、アメリカ隊、スイス隊、国際隊のテントもあり賑やかである。C1からC2へは比較的傾斜も緩くクレバスの危険も少ない。コルから稜線に出ると、隣のアンナプルナ山塊、それにチベット側の山々が見渡せ、眼下にはカリガンダキの河原も見える素晴らしい展望である。

二十四日、北東稜の六六五〇㍍地点にC2が設営される。六四〇〇㍍には岩手隊のC2があり、その辺りから傾斜が強くなって、我々のキャンプ直下の2ピッチは五〇度近い傾斜となり、フィックスが張られた。二十四日、二十五日隊員は二組に別かれ、C2に個人装備の荷上げ方々順化行動をする。二十五日スイス隊と国際隊が七〇五〇㍍のキャンプからアタックをかけ、午後一時頃登頂に成功したとのニュースが入る。今季の第一登である。そしてこの日の夕方の交信で、シェルパのニマ・ドルジェとニマ・テンバはC2から七二〇〇㍍までロープを固定したと報告してくる。二十六日、二十七日も隊員は順化を兼ねてC2を往復。二十六日C2に登った隊員のところに、ニマ・ドルジェがフィックスを終えて下りてきた。七三〇〇㍍の雪稜を切ればキャンプが作れるので、そこに荷物をデポしてきたという。この位置では我々が当初予定していた所より低いが、ここを最終キャンプとしてアタックすることにした。C1に戻り、今後の予定が検討される。我々の登頂予定は十月五日から十月十日の間であった。しかしこの山域に何回か遠征している岩手隊によると、鶴の渡りの始まる前が天候は安定しているという。サーダーのペンパ・ノルブもラマ・カレンダーを持ち出して、「九月末日が一番良い」という。問題は荷上げと隊員の順化状態である。とにかく登頂日を繰り上げて十月一日となった。最終キャンプにはテント二張り、十人は入れるので、石川、小西、池田、根津、渡辺とシェルパ三人を第一次アタック隊とし、遠藤にはシェルパ二人が付いて第

二次アタックを考えることになった。

二十七日、三浦隊員がBCに下りるという。もっと上が狙える力はあるのに、割り切りの早いこの人は、僕はBCから皆の登頂を応援すると言いながら笑顔を残して下山していった。隊員の順化行動は六六五〇㍍のC2までとし、順化不足はC2、C3の睡眠用の酸素で補うことにした。

二十八日シェルパ五人が最後の荷上げでC2、C3へと登って行った。隊員は上部の態勢が整うのを待って一日休養。天候は二十日以来快晴が続いている。夕方の皆のパルスオキシメーターの数値は七〇から八〇前後であった。二十九日、快晴、気温零下一〇度、いよいよ山頂を目指してC1を出発する。今日はC2泊まりなので時間はたっぷりある。C2には十一時着、夜は睡眠用に酸素を毎分一㍑吸ったので良く眠れた。

三十日、快晴、気温零下一五度。七時にC2を出発。北東稜もこの辺りからは相当傾斜もきつくなり、C3までフィックスロープのベタ張りとなる。上を見ると稜線はすぐのようでもなかなか近づかない。下を見下ろすとC1までくっきりと見えている。七〇五〇㍍にはスイス隊と国際隊のテントがあり、それを過ぎ稜線に出ると更に上部の斜面にせり出すようにテントが一張り見える。先を行く石川隊長の歩みもゆっくりとしている。酸素が薄い。一歩、一歩喘ぎながらようやくC3に着く。ニマ・ドルジェ、ニマ・テンバの二人が斜面を削り、テント場造りに精出している。オンチュー君から熱いお茶を貰う。十二時五分だった。夕方五時には皆で食事も済ませ、酸素一㍑で眠りに入る。

十月一日、〇時十分頃根津さんの「十二時過ぎたよ」という声で起き上がる。早速コンロに火を付け湯を沸かす。一時三十分には食事を終了、ザックを外にだし、酸素のセットにかかる。出発は二時十五分、ニマ・ドルジェ、石川、根津、渡辺、オンチュー、池田、小西、ニマ・テンバの順、傾斜のきつい雪壁をライトの明かりを頼りに登る。酸素は毎分二㍑、シェルパさんは無酸素である。フィックスは岩稜の基部に一ケ所見ただけ、トップのドルジェが急な雪壁をすたすたと無酸素で上がったり、下りたり、その身軽さ、バランスの良さ、力強さには感心するばかりである。ルートは岩稜の下部を斜上して、次に雪壁を突き上げ、稜線に出るのかと思ったが、トップは明るくなった雪壁のトラバースを続けている。明るくなって始めて自分の現在地が確認できた。皆でひとしきりルートは上だ、いやこのままトラバースだと意見が出たが、ドルジェはルートを変えない。先に目をやると、頂上稜線に突き上げている大ルンゼにトレースが見える。スイス隊のトレースだ。ドルジェにはあのトレースが見えていたんだ。時々強風に足元の雪が流され足跡が消える。少し不安定な雪になってきたと思うと間もなく大ルンゼの下部に出た。急傾斜の雪壁をそのまま詰めると稜線に飛び出すという感じ、十時二十分だった。初めてダウラギリの南西側を見る。頂上はそこからほんの十分弱、緩やかな斜面の先にあった。一休みして山頂に向かう。風が強く、山頂は狭くて、八人の大勢ではゆっくりできない。記念撮影をし、感激に浸る間もなくルンゼ下り口まで来て、十一時四十分下降にかかる。1ピッチ懸垂で下り、後は慎重にコンテで下る。ルンゼを過ぎ大雪田に入ってから私の酸素が切れた。八〇〇〇

メートルを少し切った辺りだろうか。一瞬どうしようかと迷った。登りでは絶対に無理だけれど、下りならそれ程苦しいこともないだろうと、ここからは無酸素で降りた。もともと私の顔にはマスクが大きすぎて、しょっちゅう手を添えたりしていたから、その煩わしさを逃れた分薄い酸素も我慢できた。十四時三十分全員C3に戻り、一休みした後、隊長とシェルパさんをC3に残して、四人はC2まで下りた。途中登ってくる遠藤さんと出会う。この夜C3では隊長と遠藤さんが話し合った結果、天候の悪化と彼女の体力などを勘案して、第二次アタックは中止となった。

二日、C1に下りてきて初めてカランコロン（鶴）の渡りを見た。頂上には雪煙が舞い上がり、上昇気流に乗った鶴の群れは上層の風に翻弄されながら、賑やかな鳴き声とともにC1の上空を飛んでいった。気温も下がり始め、烈風と共にダウラギリの冬はもう直ぐそこまでやって来ていた。「カランコロン、カミング。マウンテン、フィニッシュ！」（鶴がやって来たら、山のシーズンはもう終りですよ）若いシェルパさんが旨いことを言っていた。

三日、昨日の内にC3、C2は撤収し、今日はC1を引き払って全員BCまで下山。クレバス帯もアイスフォール帯もここ二週間の間にずいぶん様子が変わっている。上部からブロックが崩壊しブルーアイスが散乱しているところ、クレバスが大きく開いてしまったところと、重荷には相変わらずスリルのある下りだった。そして三日の内にシェルパがポーターやロバの手配にマルファに下りて行った。隊員は四日、五日と荷物の整理、空き缶を潰して袋詰めしたり、燃えるごみを燃やしたりと、下山に備えてごみ整理、十月六日には早朝から長い長い道程をツクチェまで歩き通した。

〈記録概要〉

隊の名称　同人シルバータートル・ダウラギリⅠ峰登山隊

活動期間　一九九四年八月二十三日～十月十七日

目　的　五十歳以上の隊員でダウラギリ主峰を北東稜より登頂

隊の構成　隊長＝石川富康（57）、登山隊員＝遠藤京子（56）、小西政継（55）、渡辺玉枝（55）、池田錦重（55）、根津皖一（54）、三浦充哲（53）

行動概要　八月二十三日先発隊三名成田発、二十七日本隊名古屋、成田発、カトマンズで合流。二十九日早朝キャラバン隊陸路カトマンズ出発、隊員と若干名のシェルパ午後空路にて、ポカラ経由ジョムソンに発つ。九月三日マルファで合流。四日マルファ出発。八日BC建設、十七日C1建設、二十三日全員C1入り。二十四日C2建設、二十八日C3建設、二十九日第一次アタックメンバーがC1を出発。十月一日、石川、小西、池田、根津、渡辺とシェルパのニマ・ドルジェ、ニマ・テンバ、オンチューの計八名が登頂成功。第二次アタックの遠藤は十月一日夕方C3まで入るが、アタックは断念。六日BC撤収ツクチェに下る。九日隊員カトマンズ着、隊荷十二日夕方カトマンズ着、十七日隊員成田に帰国。

報　告

「岳人」一九九四年十二月号。「山と渓谷」一九九五年三月号。「NHK」一九九四年十一月十九日プライムイレブンにて放映。

グレート・トランゴタワー東面
トランゴタワー東面の新ルートに挑んだ記録

渡辺朋幸

はじめに

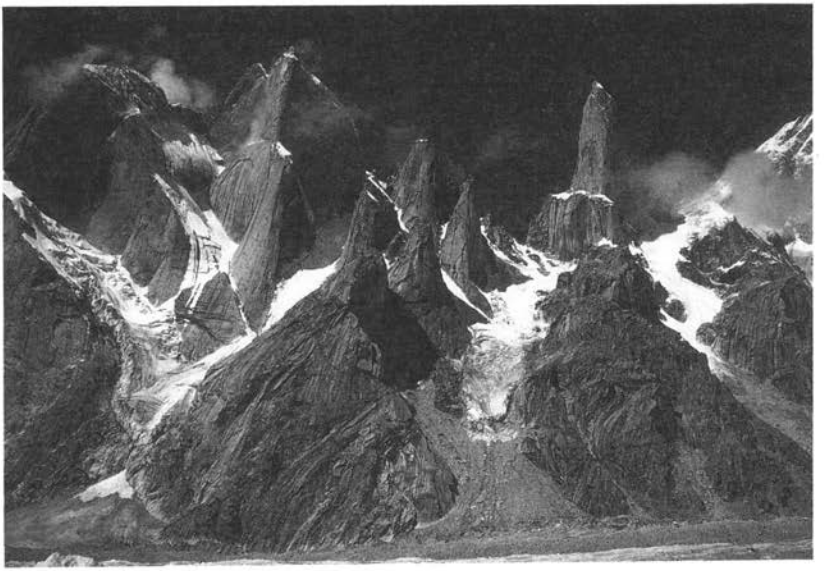
慶応大学山岳部は一九一五年の創部以来、国の内外にその足跡を残して来たが、このたび創部八十周年を迎えることとなり、海外遠征の気運が高まりつつあった。山岳部及びOB会である登高会では、この機会に若手OBと学生とからなる登山隊を海外に送る計画の実現に向けての検討がなされ、具体的な対象および期間等については若手OBに一任された。

これを受け、若手OBは対象および人選の検討に入ったものの、会社から長期休暇の取得が認められなかったり、参加希望者の登山に対する志向性の違いなどにより、具体案の作成までにはかなりの期間を要することとなった。その中で持ち上がった計画が、若手OBと学生の五名の登山隊員からなるトランゴタワーの登攀計画であった。

トランゴタワーは、パキスタン・カラコルムヒマラヤを流れるバルトロ氷河の舌端に位置する世界有数のビッグウォール（巨大岩壁）であり、その特異な山容はK2やガッシャーブルム峰登山隊によく望見されている。

トランゴタワーはいくつかの顕著な岩峰からなるが、その中でもグレート・トランゴタワー（東峰六二三一㍍）とネームレスタワー（六二三九㍍）が登攀対象として良く知られている。ビッグウォールルートとしてのグレート・トランゴタワー東峰の初登は、一九八四年のドーゼスらノルウェー隊により、北東ピラーからなされた。その後一九九〇年には日本隊が、翌年九一年にはスペイン隊がそれぞれ北東ピラーより東峰の肩まで完登している。

北東面に二本目のルートを拓いたのが、一九九二年のジョン・ミッデンドーフとイグザビエ・ボンガールの二名の天才的クライマーたちであった。彼らは下部ピラーの左（東面）から中央雪田へ



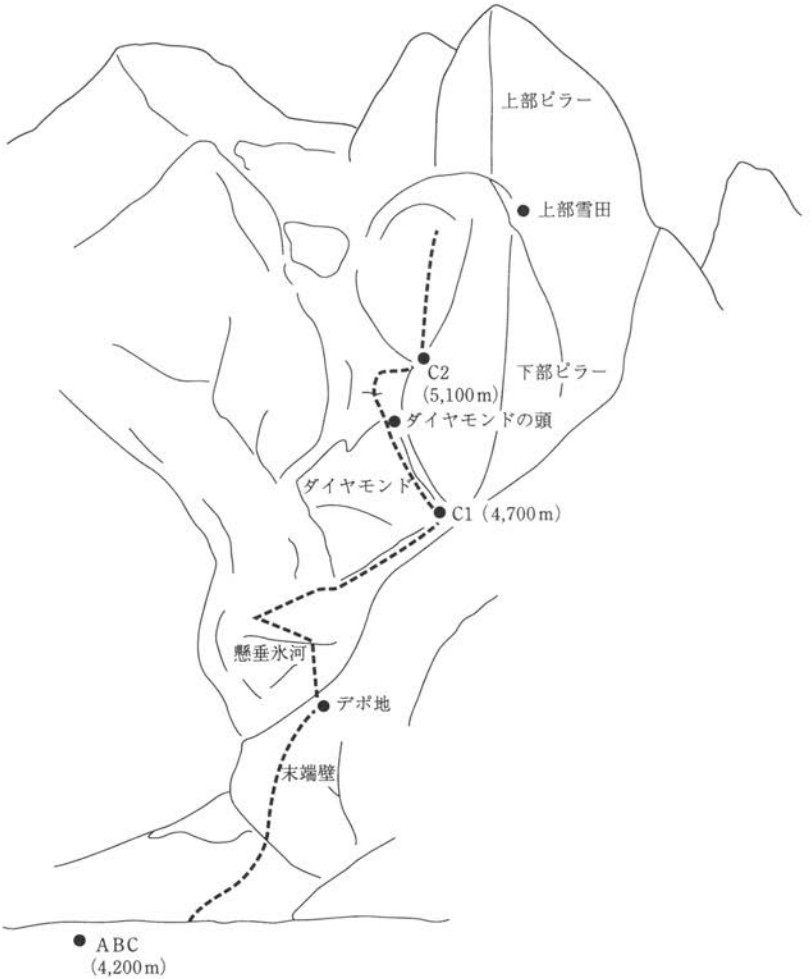
トランゴ東面全景　グレート・トランゴタワー（左）とネームレス・タワー（右）

抜け、上部ピラーの稜線をダイレクトにたどった。この新ルートは彼らにより〝グラン・ボヤージュ〟（Ⅶ　5・10A4＋　WI3）と命令されている。

私たち五名は、このグレート・トランゴタワー東峰に三本目のビッグウォールルートを拓くべく、今回の登攀対象にこの岩峰を選んだ。

ラワルピンディ／スカルドにて

一九九四年七月二十五日、渡辺、谷口、森上の先発隊三名を乗せたPIA七五三便は、予定より二時間遅れて成田を出発し、途中北京に立ち寄り、現地時間午後九時に無事イスラマバードに到着した。空港で現地の代理人であるナジール事務所のサルワール氏にお会いし、滞在先であるラワルピンディのフラッシュマンズ・ホテルまで送っていただく。初めてのパキスタンの夜は蒸し暑く、異国に来たことを実感する。翌日、観光省でパッキングリストに通関に必要なサインをもらい、外国人登録などを済ませる。二十七日、日本大使館への挨拶と通関手続きを済ませる。二十八日、この日初めてリエゾン・オフィサーのタヒル・マクブールに会う。その後ポーター等の保険の手続きや装備・食糧等の買い出しを行う。二十九日、後発隊の浜田、千葉の学生二名が成田を出発、無事イスラマに到達し隊員五名が顔を揃えた。翌三十日、当初観光省でブリーフィングを行う予定だったが、七月より土曜日が官公署の休日とされたため、翌日に持ち越しとなった。追加の食糧の買い出しおよび隊荷をスカルドへ送るための梱包と空港への運搬を行う。三十一日観光省でのブ



グレート・トランゴタワー概念図

リーフィングを済ませ、翌日リエゾンを含む私たち六名を乗せたPIA機はイスラマを後にし、約一時間のフライトで北方の街スカルドに到着した。空から見た魔の山〝ナンガ・パルバット〟は巨大な独立峰であり、八〇〇〇㍍のその雄姿はあらためてヒマラヤに来たことを実感させてくれた。

スカルドではコックのフセインに会い、コメや野菜などの現地食の買い出しを行う一方、デピュティ・コミッショナー等への挨拶を済ませる。また日本でパキスタン・エクスペディション社に注文しておいたEPIガスを受取るとともに、日本山岳会を通して信州大バインターブラック登山隊から戴いたデポ品の受取りへと走り回った。

現地購入品を含め、全ての隊荷を滞在先であるK2モーテルの中庭に集め、二五㌔になるよう再梱包をしたが、クラクラするような強烈な日差しのため、作業は遅れ気味となった。このあたりから隊員の何人かが体調を崩し、下痢にみまわれるようになった。

ジープによる移動とキャラバン

スカルドでポーターを二十五名程雇った後、私たちと隊荷を乗せた四台のジープは、八月四日K2モーテルを後にした。途中シガール村で更に五十名程のポーターを雇いながら一路トンゴル村を目指すも、今年は猛暑のため氷河の融けかたが激しく、川が氾濫しジープ道は所々で寸断されており、崩壊地に出会うたびにジープから荷物を下ろし、荷物をポーターに運ばせ、新たなジープに移し替えなければならなかった。この日、崩壊地を夜間通行中に落石が発生し、谷口の足に当たり負傷するという事故に見舞われた。翌日もジープを乗り継ぎ、ようやくトンゴル村に到着した。谷口の足は思わしくなかったため、ここでしばらく静養し、足の様子を見た後、付添いとして残した千葉とポーター二名は、本隊と別れてキャラバンを開始することに決定した。六日からキャラバンを開始するも、隊員が下痢気味で調子が思わしくないこと、加えて高度順化への不安もあったため、当初二ステージを一日で歩く計画であったが、一日一ステージに切り替えることに変更した。コロホン、ジョラ、スカンボンソック、パイユ、ウリビアホBCと滞在した後、キャラバン六日目の十一日にデュンゲ氷河上約四一〇〇㍍地点にベースキャンプ（BC）を建設した。翌十二日には遅れてキャラバンを開始した谷口、千葉及びポーター二名も無事BC入りした。この時点で計画より五日遅れとなる。

登攀ルートの決定とルート工作

八月十三日より壁の観察を開始するとともに、壁の末端約四二〇〇㍍付近にアドバンスドベースキャンプ（ABC）を建設する。十四日、登高会有志によるトレッキング隊がBCに到着、お互いの無事を確認しあった。翌日OB隊を見送った後、悪天が数日続いた。

悪天時はトランゴ東面の上部からひっきりなしに雪崩が発生し、懸垂氷河は雪崩の通り道となり、ここの通過には困難が予想された。また一転、朝日が当たると今度は北面上部より落石が頻発することも判明、先が思いやられる。悪天の合い間を見ながらABCへの荷上げと壁の様子を望遠鏡等で観察を繰り返したのち、グレート・

トランゴタワー東面、グラン・ボヤージュより更に左側に新ルートの可能性を見出した。壁の地図を作成し、ポイント毎に名称を付しながら、互いにルートに対するコンセンサスを図った。二十一日、森上、渡辺、千葉の三名で下部岩壁を登攀し、五本のロープをフィックスする。二十四日、前日デポ地に泊まった谷口、浜口の二名が懸垂氷河の様子を観察し、日が陰った昼すぎよりルート工作を開始、北東ピラーの下部2～3ピッチ付近までルートを伸ばし、悪天をはさみ二十九日に更に一本フィックス、三十日には森上、千葉が北東ピラーの側壁（アリババ・クーロアール）に四本のロープをフィックスした。三十一日には谷口、渡辺がクーロアールの四本のロープを回収し、更に2ピッチ、ルートを伸ばしたのち、ダイヤモンドでビバーク。

九月一日、クーロアールの側壁を3ピッチ登攀しダイヤモンドの頭に至る。ここから北東ピラーの取付き付近まで壁沿いに八本のロープをフィックスしながら懸垂下降を繰り返し、ＡＢＣへと戻った。二日、北東ピラーの取付き約四七〇〇㍍付近に森上、浜田がＣ1を建設。翌日、フィックスロープをたどりダイヤモンドの頭の上部雪壁に更に三本のロープをフィックスした。

盗難事故の発生

九月二日、メイルランナーがＢＣに着いたという浜田の連絡を受け、渡辺がＢＣへ戻ったところ、個人用テントに置いてあった貴重品がハイパロンの袋ごと無くなっているのに気付いた。隊員が他のテントに移したとも考えられたので、とりあえず全ての個人用テントその他を捜索するも見つからなかった。夕方、定時交信時にトランシーバーでＡＢＣとＣ1を繋ぎ交信したが誰も手を触れていないため盗難に遭ったことが判明した。他に盗まれたものがあるかどうか確認したところ、森上と千葉の個人用装備等、テントに置いておいた物も盗まれていたことが分かった。夜、辺りを捜索したが手掛かりはなく、翌日全員でＢＣ付近を捜索したが、やはり手掛かりは見つけられなかった。この日、リエゾンと協議した結果、盗難に遭った当事者三名はアスコーレ村の警察まで行き、被害届を提出しなければならないこととなる。被害額は邦貨換算で現金約二〇〇万円（ＴＣを含む）相当、物品約三〇万円相当にのぼった。これから本格的な登攀が開始されるという時に隊員三名が下山するというのは隊にとって大きな痛手となった。結局、この盗難事故によりアスコーレまで下りた森上、千葉の二名は六日間、スカルドまで下山し、日本との連絡や大使館、ナジール事務所との調整等を行った渡辺は、実に十三日間も登山活動から離れてしまうこととなった。

なお、森上と千葉がＢＣへ戻る途中、ＢＣの手前のパルトロ氷河上の石垣の上にパスポートやＴＣ等盗難物の一部を発見し、回収することが出来たのは不幸中の幸いだった。

登　攀

四日、ＢＣに残り登攀を託された谷口と浜田ではあったが、この時点でルートはとりあえずダイヤモンドの頭の上部雪壁までは確保されていたが、食糧・装備等の荷上げについては、必ずしもスムーズになされていたとは言えない状況だった。更に運悪く、悪天が数

日続いた。二名は九日、各自が持てる範囲の荷物を持ちながら一回目のゴーアップを開始、十一日に上部雪壁に更に四本のロープをフィックスし、東壁の末端約五一〇〇㍍地点に二人用ポータレッジを吊るし、ここをC2とした。翌日から二日間降雪に見舞われC2に停滞したのち、十四日にC2から1ピッチ登攀した時点で手持ちのロープ及び食糧がなくなり、BCへ一旦下ることとなった。なお九日に森上、千葉がBCへ帰着、十五日に渡辺がBCに戻り、また五名がBCに顔を揃えることが出来、再度仕切り直しとなった。十六日には気分転換を図るためBCで停滞することとし、この日山羊の処分を行った。コックとリエゾンは山羊の解体は慣れているらしく、その手さばきは鮮やかなもので一同感心しながらの手伝いとなった。

十七日、谷口、森上、浜田の三名が二度目のゴーアップを開始し、C1へ入る。十八日、三名がC2に入る。渡辺と千葉も荷上げのためにゴーアップを開始する。二名は主としてデポ地からC1を経由してC2までの荷上げを担当することとなり、精力的な荷上げを行った。二十日、浜田、森上2ピッチ目の登攀。この頃から数日間、時おり降雪に見舞われる。二十一日、C1で休養中の渡辺、千葉の二名が雪崩に遭う。C1はダイヤモンドの右側の岩棚に建設してあったが、度重なる雪崩によりアリババ・クーロアールが雪に埋まりつつあったこと、加えて今回大規模な雪崩が発生したため、クーロアールを越えて雪崩が襲来したものと思われる。C1のツェルトは大破したが、二名はメインロープに繋がれていなかったにもかかわらず、幸運にもツェルトの中で雪崩をやりすごすことが出来た。岩壁においては、いかなる場合でも自己確保を外してはならないということを再確認させられた。雪崩により千葉の片方の靴が流される。とりあえず安全を確認しながらABCへ下る。

二十二日、BCに下り、リエゾンの靴を受取りABCに戻る。二十三日、森上、谷口3ピッチ目を終了し、谷口、浜口で4ピッチ目へ。千葉は体調を崩し、しばらく休養する。二十四日、4ピッチ目終了。森上が3ピッチ目の終了点に二人用ポータレッジ設営。渡辺はC2入り。二十五日、浜田、森上で5ピッチ目を登攀するも墜落。二十七日、森上、浜田で5ピッチ目を終了し、6ピッチ目へ。谷口は4ピッチ目終了点に一人用ポータレッジ設営。渡辺、千葉が再度C2入り。二十八日、谷口、渡辺で6ピッチ目の登攀。私たちが選んだトランゴ東面の新ルートは、C2からの出だしの数ピッチがオーバーハングしているうえ、岩が脆かったせいもあり、思うように上部へルートが伸びなかった。C2付近に三つのポータレッジを設置し、ユマーリングの時間短縮を試みたが、東面で実際に登攀を開始する時期があまりにも遅れたため、結果的には時間切れとなり、6ピッチ目を終了した時点で壁の下降を決定した。最高到達点は約五三〇〇㍍であった。

盗難その後

十月十三日、観光省でブリーフィングの後、日本大使館へ行き、下山及び盗難の報告を行う。大使館には日本の登山本部から送っていただいた渡航証の発行に必要な書類が届いていたものの、翌日から二日間パキスタン官庁が休日となるため、内務省の出国許可が得

られず、森上、千葉の二名は遅れて帰国することとなった。十六日、渡辺、谷口、浜田の三名が、二十日に森上、千葉の二名が帰国。

帰国後しばらくしてからアルパインツアー社経由で日本の登山本部に盗難事件の犯人が逮捕されたという情報が入った。ナジール事務所の話では、犯人は複数でスカルドの刑務所に捕らえられているとのこと。早速盗難品の返還交渉をナジール氏にお願いすべく、公証人の認証を得た英文委任状を送る。現地では盗難品の返還につき紆余曲折はあったものの、無事全て日本へ返還されることに決まる。ナジール氏からのリストによれば、現金を含むほとんど全ての盗難品を発見、回収されたことが判明した。その後ナジール氏の来日の折に盗難品も帰国？　を果たした。こうして多くの方々にいろいろなご心配、ご迷惑をお掛けした登山隊の活動が全て終了することとなった。

〈記録概要〉

隊の名称　慶應義塾トランゴ登攀チーム一九九四

活動期間　一九九四年七月二十五日～十月二十日

目　的　グレート・トランゴタワー東峰（六二三一メートル）の東面新ルートからの登攀

隊の構成　隊長＝渡辺朋幸（32）、隊員＝谷口龍二（28）・森上和哲（26）・浜田豪（24）・千葉明夫（24）

行動概要　七月二十五日先発隊、二十九日後発隊成田発イスラマバード着。八月一日スカルド着。六日トンゴルよりキャラバン開始。十一日トランゴBC建設。十三日ABC建設。九月二日C1建設、BCにて盗難発覚。四日被害者三名とリエゾン、メイルランナーの五名でBCを下る。九日谷口・浜田一回目ゴーアップのためC1入り。森上、千葉BC帰着。十一日谷口・浜田C2建設し、C2入り。十四日C2より1ピッチ登攀ののちBCへ。十五日渡辺とリエゾンがBC帰着。十七日谷口・森上・浜田の三名がゴーアップのためC1入り。十八日登攀隊三名C2入り。渡辺・千葉が荷上げのためゴーアップ。二十日浜田・森上2ピッチ目の登攀。二十八日谷口・渡辺6ピッチ目の登攀終了後、時間切れのため登攀を断念。最高到達点は東面約五三〇〇メートル地点。二十九日下山活動開始。三十日C2撤収。十月四日ABC撤収。六日BC撤収。帰りのキャラバン開始。九日スカルド着。十二日ピンディ着。十六日渡辺・谷口・浜田の三名帰国。二十日森上・千葉が渡航証を手に帰国。

［註：本登山は日本山岳会海外登山基金からの一九九三年度の助成を受けて実施された。］

東西にみる山岳観の史的変遷を探る

筑木力

はじめに

人間は採集・狩猟・漁労の時代から現代に至るまで、季節ごとの生活において山岳と様々な深い関わり合いを続けてきているが、それらの中で最も古いものは宗教的関係である。遠い昔、山岳は聖なる場所と考えられ、それに近寄りたいと望む人々の好奇心や願望を抑制する働きをもっていた。山岳の中には死者の世界があるとする民間信仰があって、人々は高い山地に近づかないように気を遣ったと伝えられている。

しかしこれとは逆に、聖なる山岳を神々の居住地として尊崇する気持ちから、信心深い人達が次第にそうした聖域へと引き寄せられていったことも事実である。天に近い所で祈れば、神々は人間の願いをよく聞いてくださるものと信じられた。キリスト教の隆盛期には、アルプスやその他のヨーロッパの山間地に、路傍の小礼拝堂、キリストの木像、交差路の十字架、祈禱用の標柱などが設置され、また数多くの山々にも十字架が建てられた。そしてこの伝統は今日まで続いている。このように西洋では山岳の世界が、キリスト教の普及発展に大きな役割を果たしたのである。

一方東洋では、主として仏教が人々の間に山岳への崇拝心を発達させたといえる。スリランカにあるアダムズ・ピーク（二二四三㍍）は、仏教徒のほかにヒンズー教徒や回教徒にも共通する聖山であって、いつも多数の巡礼者が訪れる。山頂のえぐられた形をした岩は、アダムあるいは仏陀の足跡とされている。

そこで、人間が山に対して抱懐した山岳観を、神話の時代から十九世紀に至るまで通観して、日本、中国、インド、ヨーロッパを中心にとりあげ、その変遷の姿を探ってみることにする。

山岳と神話・民話との関わり

太古の昔、私たちの祖先にとって山とは何であったか。国土の七六パーセントを山域が占める日本では、人間が居住する集落の前側か横側か後側かに山があることが多い。しかもその山は高く聳えていて、外から眺めたときその集落の目印にもなった。集落の人々にとって山は燃料や建築用材や動物性食物の供給源でもあった。また彼らが営む農業を支える水源としての意義ももっていた。

ところがこうした親しみやすいイメージとは逆に、近寄りにくい印象も山は人々の心に与えた。草木が繁茂していて足を踏み入れにくい場所もあるし、思いがけなく動物が現われて人間を襲うこともある。山奥深くに入り込めば込むほどそれだけ険岨な地形が人の行動を阻んで、集落へ戻れなくなることも珍しくなかった。そのような山は畏怖感に満ちた場所であり、ふだん田畑で農業に従事する場合よりも緊張と警戒とを必要とする世界であった。私たちの祖先がそうした山を日常生活の場とは違った聖なる所と考えたのは、当然の道理であった。この意味で当時の人々が抱いた思想や信仰の中に、山岳が占める割合はまことに多大であったといえる。

そんな事情から、山や石そのものが神であるとか、山や石に神が宿るとか、あるいは山の峠にも神が住むとする考えが生まれ、広まっていったものと考えられる。つまり一つには、山麓に集落を営む農耕民たちが、山に対して霊異と畏怖の気持ちを抱くようになったこと、もう一つには、天空に向かって聳え立つ山の頂きは天に最も近く、神が天から天降るのにいちばん適している場所と感じとられたことが、その理由としてあげられる。

そして山が神の在す神聖な所であるという意識は日本だけに固有のものではなく、広く諸外国にもみられる現象であった。隣りの中国でも「山は産なり」といわれ、万物生成の根源地として賛美されていた。なかでも崑崙山は古い伝説に登場する神山として知られ、藐射山は「荘子」の逍遙篇において、不老不死の仙人が住む山といわれ畏敬されていた。西洋では、ギリシャ人にはオリンポス山、ヘブライ人にはツナイ山・ヘルモン山、アラビア人にはアララット山が、それぞれ神の啓示を人間が受ける聖なる山と考えられていた。しかし日本の場合は、前述したように、山がもつ近寄り難い神秘的な性格と多様な生産源としての恩恵的な性質とによって、その山の神聖感が構成され支持されているのがいっそう特徴的であった。そして近寄り難い神秘性から生ずる畏怖感を通して人々に感得された山の神は、やがて特定の山に特定の神が在すと考えられて特殊化され、人格化されて、いわゆる「自然神の人格神化」がそこに認められるに至った。こうして山の神に固有名詞が付けられ、そうした固有名詞をもつ山の神を祭るための社殿が造営されるようになった。

このようにして山の神の人格化が進むにつれて、山と山との間に恋愛関係が想定されるようになったのも自然の成り行きといえよう。「播磨風土記」に載る、畝火山と耳成山と香具山との間の妻争いの説話は、今でいう三角関係のトラブルである。また南部富士と呼ばれる岩手山と、その近くにある姫神山とはもともと夫婦の山であったが、早池峰山が姫神山を横取りしてから、この三山の仲が悪いといわれる。ほかにも近隣の山同士をその容姿から夫婦になぞらえた民話が全国各地に多い。けだしこのような説話は、山の神の

人格化とともに自然の有情化が起こって、山も人と同じように恋愛をするという考えを根拠にして成立したものということができるだろう。

「山の背くらべ」と題する伝説も目につく。山と山とがお互いに背丈を比べ合うという話である。九州の阿蘇山塊の主峰高岳は標高が一五九二㍍ある。その東南にある根子岳の標高は、現在は一四〇八㍍であるが昔はもっと高かったという。この根子岳がいつも高岳に向かって背くらべを挑むので、高岳は怒って金剛杖で根子岳の頭を打っていた。このため根子岳の頭は凸凹になり、現在のような格好になったと伝えられる。越中の立山も加賀の白山と背丈を比べ合ったことがある。立山は三〇一五㍍の高さをもち、慈興上人によって開基された。立山は白山と背くらべをしたところ、自分の方が草鞋一足分だけ低いことがわかり、それを悔しがった。それ以来立山に登る人は草鞋を持って登り、それを山頂に置いて帰ると、山の神が大きな御利益を登山者に授けるものと信じられた。

山の神が恋愛し、嫉妬し、背くらべをするという説話は、自然神の人格化といった考えを媒介にしてはじめて理解できる事柄である。

次に、インドではどうか。ギリシャ以外の文化的世界の「聖なる山」の中で、筆頭にあげられるのは仏教に出てくる須弥山である。この山は海中に存在して、世界の諸大陸を形成する巨大な円の中心点、つまり宇宙の中心をなし、その頂上には帝釈天が、中腹には四天王が住むものと想像された。またトランス・ヒマラヤの南側に位置するカイラス山（六七一四㍍）は、インド神話にもしばしば登場するが、ヒンズー教徒たちの間で万象を破壊し創造するシヴァ神の玉座と信じられ、今なお多くの巡礼者が訪れている。

その次に、ヨーロッパではどうか。古代ギリシャ人は、テッサリアのオリンポス山（二九一七㍍）を神山と崇めて信仰した。巨人のティタン族が神々を相手に世界制覇の戦争を始めたとき、巨人たちがこの山を城砦にして立てこもったとギリシャ人は考えた。その最高峰の頂上にある岩穴に、一つ目の巨人のキュクロプスたちが住み、岩壁の城砦に立てこもって辺り一帯を支配し、さらにその周辺の山々では、半人半馬のケンタウロスたちが駆けまわっていた。神々の本拠地はオリンポス山の頂上にあって、そこからゼウスが下界めがけて稲妻を投げ下ろしていた。

山岳はまた刑罰を受ける場所としても描かれた。ティタン神族のイアペトスの息子のプロメテウスは、人間が所有するのを禁止されていた天上の火を盗んで地上に運んだため、ゼウスの怒りにふれカフカスの岩場に鎖で縛り付けられた。そこへ毎日一羽の鷲が飛んできて彼の肝臓を啄んだが、夜の間に肝臓が再生した。やがてヘラクレスが現われて鷲を殺し、プロメテウスを鎖から釈放した。

一方、コリント湾の北側にあって、その南斜面にデルフォイの町を擁するパルナッソス山（二四八九㍍）を、太陽神アポロンと彼に仕える詩の女神ミューズたちの居住場所と、ギリシャ人は考えた。この山はギリシャの中央部に位置していたので、当時の世界の中心でもあった。「詩人の山」として人々はこの山を崇拝した。

神仙思想と道教にみる山岳観

神仙思想は中国古代の神秘思想である。その起源は山東省の神山信仰に端を発する。それは不老長寿の薬を求めて煉丹術を生み、太平道・五斗米道などに発展して道教の中にとり込まれた。そこに登場する仙人は道家の理想的人物とされ、人間界を離れて山中に住み、穀食を避けて不老不死の法を修め、神変自在の術を駆使する超人である。この神仙思想を中心とする中国古代の民間信仰を基盤として、それに道家・易・陰陽・五行・卜筮・讖緯・医学・占星などの説や巫の信仰を加え、仏教の体裁と組織にならってまとめたものが道教である。

道教では神仙になるための修行を仙道と呼び、その修行者を道士といった。そして道士が仙道について修行するには、必ず名山・高山を選んでそこに登らなければならないとされた。道教の山岳観は、葛洪（二八四～三六三）の書いた『抱朴子』という本で知ることができる。その「内篇巻十七　登渉」に、入山の心得が詳細に述べられているが、本田済の訳註（東洋文庫）に基づいてその概要を記す。

まず山に入るには入山の術が要る。この術を知らないで入山すれば、山神は禍をなし、妖魔鬼神が試す。病気にかかったり怪我をしたり、驚き・怖れ・不安に襲われたりする。大木が風もないのにひとりでに折れたり、岩石が原因もないのに自然に落ちたりする。虎や狼が傷つけ、渓水の毒にあたり、毒蛇に嚙まれて死ぬこともある。だから軽々しく山に入ってはいけない。

入山術の第一は呪文と禹歩である。呪文は入山当初に行う祭祀の際にも必要であって、左手で青龍（方角を意味する）上の草を取り、その半ばを折って逢星（方角を意味する）のもとにおき、明堂（方角を意味する）を経て陰中に入れ、呪文を三回となえると悪鬼妖魔は退散してしまうという。

禹歩は足の運び方の術である。はじめに右足を前に左足を後にして立ち、次に左足を前にし、次いで右足を前にし、左足を右足に従わせて併せる。これを一歩とする。次にまた右足を前にし、次いで左足を前にし、右足を左足に従わせて併せる。これを二歩とする。次にまた左足を前にし、次いで右足を前にし、左足を右足に従わせて併せる。これを三歩とする。この三つの歩を合わせ総称して禹歩という。しかし禹歩の足運びには、このほか幾つかのバリエーションがあるらしい。禹歩は登山の基本的な運歩術である。

入山術の第二は吉日と凶日とを知る術である。第三は方角を選ぶ術である。そして入山者が心得るべき術はこの三つだけでなく、ほかにもたくさんある。詳述は避けるが要するに不老長生の神仙となるためには、名山における修行が不可欠であり、神仙になるための仙薬をつくるには、名山の岩窟の中で人を避けて精進しなければならないと『抱朴子』では説いている。この神仙思想はわが国に伝えられて、万葉集や修験道教義にみられる世界観の形成に多様な影響を与えたといわれる。

日本における山岳信仰と修験道との関わり

わが国の山岳信仰を語る上で、山岳と修験道との歴史的な関わりを見逃すことはできない。重畳たる山岳は日本風土の根幹を形成し、古来から農耕・狩猟・漁労などの生業の違いを越えて住民から崇拝

されてきた。厳しさと親しみとを併せもつ山岳に対して、人々は宗教的な意味を付与し、それらを尊崇の対象として宗教儀礼を行ってきた。

修験道はこのような山岳信仰を中核におき、山岳での修行により体得すると信じられる超自然的な力（験力）を駆使する呪術・宗教的活動であって、外来宗教や民間習俗が相互に接触し混淆して、平安時代末期に成立したものである。

修験道の開祖とされる役小角は、大和の葛城の住人であった。「続日本紀」によると、天武天皇三年（六九九年）に、彼が妖言を放って民衆を惑わすとの中傷によって罪を受け、伊豆に流されたと伝えられる。葛城山（九六〇㍍）は当時の反支配勢力の拠点で呪術者の集団が居住していたらしい。彼らは仏教渡来以前の山岳信仰に基づいて山岳で修行し、神霊と交流して、鬼神・死霊・荒神などを操作し使役する能力を身につけて、呪術や託宣などを行い、神霊と合一するシャーマンであった。こうした聖・優婆塞・沙弥・禅師と呼ばれた在俗の山岳修行者が、後世の修験者や山伏の祖型であったと考えられる。これらの修行者たちは、奈良時代に陰陽道・道教・仏教などの外来宗教の影響を受けた。さらに平安時代になると天台と真言の密教が成立して、その修行の場が深山幽谷に求められ、頭陀抖擻（山中修行）が説かれた。その結果密教系の僧侶が山間に入り、競って験力を修めるようになり、古来の山岳信仰や山岳修行者の思想との融合を深めて、修験者と呼ばれるに至った。修験者は半信半俗で神仏混淆の様相を呈示し、独自に意味付けのされた衣裳を身にまとい、山岳の中で修行し、里に下って説教・念誦・加持祈禱を行って信者を獲得した。

修験道の本領は、実践を重んじ、祈禱や呪術によって民衆の現実的要求に応えることであった。修験者は火や水を象徴的に使い、印を結び呪文を唱え、荒ぶる霊を鎮め祀り操作した。修験道の行動様式は、仏教のそれを主としながら陰陽道や道教の儀礼・作法・教義を借用しているが、その内容の中核には日本固有の山岳信仰を基層とする独自の文化が横たわっている。

修験道においては、山岳を教義上では曼荼羅（宇宙）とし、天地合体の宇宙軸とみるが、現実には死霊・諸尊などの在往する霊界とみる。仏性をもつ修験者は山岳に入って崇拝対象――特に不動明王――と同化し、小宇宙と大宇宙の合体および降魔の力の体得を達成する。そのようにして修得した超自然力を行使し、庶民の要求に応えてその災厄の原因となる邪神悪霊の憑依や祟りを明らかにし、再び崇拝対象と同化し、その力かまたは眷属の力を操作して悪魔祓いを行い、除災・招福をはかる。これが修験道の儀礼である。入峰修行・供養法・神祭・正潅頂・験術・卜占・巫術・憑祈禱・加持・憑きもの落とし・調伏・符呪・まじない等の多様な儀礼は、交歓から同化へ、操作から除魔へと進む行動を誘発し刺激する動機として整理することができる。

因みに、登山口から山頂までの距離を何合目とする山岳距離の由来も、修験道にある。山の高低大小に関わりなく一合目から十合目までである。これは修行者が山岳に入って十界の苦修体験を得て妙境に到達しようとする苦行の境界を採って、山岳距離としたものである。その起因を記すと、一合目が地獄道の行、二合目が餓鬼道の行、

三合目が畜生道の行、四合目が修羅道の行、五合目が人道の行、六合目が天道の行、七合目が聲聞の行、八合目が縁覚の行、九合目が菩薩の行、十合目が佛地となる。

時代とともに変わる山岳観

（神話時代から十世紀ころまで）

一般的にいえば、古代ギリシャの市民たちは山を嫌悪していた。醜怪な人間だとか嫌らしい女王などと比較する対象を必要としたときにだけ、彼らは山を本能的に思い出した。

ローマの古典詩人たちも概して山を快く思ってはいなかった。彼らはほとんど山を描写しなかったし、たまに描くことがあっても、「激しい」「荒々しい」「険しい」「恐ろしい」といった陳腐な形容詞ばかりを使って、山岳を危険な荒涼たる場所と考えていた。

ヨーロッパのこうした状況と比べて、日本の事情はかなり違っている。わが国最古の文献で日本人と山岳との交渉が記述されているものに、「日本書紀」「古事記」「風土記」がある。

第十二代景行天皇の皇子、倭建命が伊吹山（一三七七メートル）の荒ぶる神を取り抑えに入った件りの叙述で、この山の神の化身を、「日本書紀」では大蛇としているが、「古事記」では巨大な白猪と述べている点に注目したい。これは当時における山の神の本体が、蛇または猪とする二つの見方があったものと思われる。蛇信仰はエジプトに起こって、東はインド、日本を含む極東、太平洋諸島を経てアメリカに至ったとされ、西はアフリカ、ギリシャからヨーロッパに達したといわれる。

蛇が世界各地の原始民族によって、祖霊・祖先神として崇拝・信仰された理由のうち、最も根源的・基本的要因は、外形が男根に似ている、脱皮して生命を更新する、一撃のもとに敵を倒すの三点に帰せられる。この三つの特徴を、生命源としての種の保持者、永遠の生命体、無敵の強さと敷衍することもできる。このような蛇の生態的特質に対する尊敬の念が、蛇を祖神にと崇めていったものと考えられる。

また林や森や野原の奥に延々と連なる山並みには、天地の間を届伸してうねる大蛇を、また人里隔てて独立する円錐形の峰には、ずっしりと塒を巻いて坐る巨大な祖神の姿を重ね合わせ、それぞれを祖霊のこもるところとして、山岳を信仰の対象としたのである。

これに対して山の神の本体を猪とするのは、易・五行に由来するものと思われる。この事は「易における『山』と、「十干・十二支の五行における『猪（亥）』」との組み合わせにより推理できる。この陰陽五行思想は五千年ほど前に古代中国に成立した哲学で、その内容は複雑難解であるため一々詳述できないが、要は「山」は十二支で戌亥（犬猪）ということ、そしてその「犬と猪」では猪が真正の「山」で、犬はそれに準ずる存在とされたと述べるだけに止めておく。

「風土記」は、和銅六年（七一三年）に天明天皇の詔により、諸国に命じて郡郷の名前の由来、地形、産物、伝説などを記述して撰進させた地誌であって、その中に山名も採集されその由来なども記載されている。

これらの文献に続いて「万葉集」が登場する。八世紀後半に

大伴家持（七一六～七八五）が編集したものといわれるが、それに収録された四千五百首ほどの歌の中に、山に関係する作品が二百首近くも採り入れられている。

「万葉集」に詠まれた山ではまず富士山をあげなければならない。万葉の昔、富士山（三七七六メートル）はつねに噴煙を上げ、ときに爆発を繰り返していたものと想像されるが、その秀麗な山容は昔も今も変わらない。富士山賛歌の代表として山部赤人の歌をあげる。

山部宿禰赤人、富士の山を望む一首　併せて短歌

天地の　分れし時ゆ　神さびて
高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を
天の原　振り放け見れば　渡る日の
影も隠ろひ　照る月の　光も見えず
白雲も　い行きはばかり　時じくそ
雪は降りける　語り継ぎ　言い継ぎ
行かむ
富士の高嶺は

反歌

田児の浦ゆ　うち出でて見れば　ま白にそ
富士の高嶺に　雪は降りける

まさに雄大、崇高、永遠、清浄を具備した気品に満ち溢れる絶唱である。

もう一首、大和三山を詠んだ歌をあげる。

天皇、香具山に登りて望国したまふ時の御製歌

大和には　群山あれど　とりよろふ
天の香具山　登り立ち　国見をすれば
国原は　煙立ち立つ　海原は
かまめ立ち立つ　うまし国そ
あきづ島　大和の国は

この歌は舒明天皇の作と伝えられる。天皇の国見歌だけあって、さすがに荘重な調べの中に王者の風格がそなわっている。

（十一世紀から十七世紀まで）

平安時代になると、山岳や自然に対する人々の見方が変わってくる。京都は奈良と同様に夏は暑く冬は寒いという内陸型気候の盆地であるが、春と秋は温和な気候に恵まれる。特に京都は奈良よりも気候の変化や四季の移り変わりが著しいし、また一日のうちでも朝、昼、夕、夜と気象が変化し、さらに南と北とでも気象が異なる。こうした複雑で変化に富む気候の中で暮らしていた平安時代の人々は、日常生活の営みの中から、鋭敏繊細な季節感覚を育てあげた。京都の地形は、盆地を囲んで東山・北山・西山と呼ばれる山々があり、南に開けた平野に向かって、加茂川・高瀬川・堀川・桂川などが市内を貫流している。これらの山々は大和より丸味を帯び水も豊かで、まさに「山紫水明」の地にふさわしかった。

平安朝の人々は、このような自然景観をある意味で技巧的に観照しようとした。美しい山水を生活の枠の中に融け込ませようとして、自分の屋敷内に山水を模した庭園を造ったりした。これはいわば山水の美しさを切り取って人間の側に引き寄せて、もてあそぶことであり、自然を人工化することでもあった。この点は、自然をあるがままに眺め、自然の生命に直接触れることによって、生活を創造し

ていった奈良朝時代の人々とは大変に異なるところである。平安時代には、日本各地の名所や景勝を詠み込んだ和歌が多いので、人々の風土体験が大きな広がりをもっていたような印象を受けるが、実際にはそれらの歌の多くは歌枕（歌を詠むための名所手引書）を座右において、それを頼りにして作者が詠んだものである。

ただし平安時代に目立つ傾向として、「源氏物語」を代表とする物語、「土佐日記」に始まる日記や紀行などのジャンルにおいて、散文が新しい展開をみせたことが指摘できる。その中では、「竹取物語」や「更級日記」に出てくる富士山の記述がよく知られている。因みに後者から引用する。「富士の山はこの国なり、……その山のさま、いと世に見えぬさまなり、さまことなる山のすがたの、紺青をぬりたるやうなるに、雪の消ゆる世もなくつもりたれば、色ときぬに白きあこめ着たらむやうに見えて、山のいただきの、少し平びたるより、煙はたちのぼる。夕ぐれは火のもえたつも見ゆ」。まことに絵画を見るかのような描写で、富士山がその当時に火を吐いていた状況が手に取るように読みとれる。

鎌倉時代になると、京都と東国を結ぶ交通路（東海道）が整備され、人々の往来も一段とにぎやかになったが、このころでもやはり富士山は火の山として畏敬の眼で仰がれた。十三世紀に書かれた「海道記」「東関紀行」「十六夜日記」には、箱根の山、足柄山や富士山の噴煙のことが言及されている。「富士の山を見れば、煙もたたず、……富士のけぶりのすゑも、朝夕たしかに見えしを、いつの年よりか絶えしと問へば、さだかに応ふる人だになし」とあって、この時代には富士山の噴煙はほとんど収まっていたと思われる。

ではここでもう一度ヨーロッパに目を移して、中世から近世に至る主要な山岳観について、その変遷の歴史を辿ってみよう。

遙か彼方（かなた）の地平に聳え立つアルプスの山々に、ほとんど同時代に登ろうとした最初の文学者は、イタリアの二大詩人、ダンテ（一二六五～一三二一）とペトラルカ（一三〇四～一三七四）であった。ダンテは四十六歳のときプラトー・アル・サリオ（一四〇〇㍍）に登り、その後も故郷の山々に登った。その中にはアペニン山脈のモンテ・ファルローネ（一六五四㍍）や、イスキア島の最高地点をなすモンテ・エポメオ（七八九㍍）も含まれている。この火山の頂上に彼は一人で泊まり、噴火口の縁（へり）で一夜を明かして感動的な日の出を迎えた。山は悪魔が住む恐ろしい場所であると考えた当時の社会通念を、彼はこのように自分自身の体験を通して打ち砕いたのであった。

ダンテの心は久しい以前から山々とつながっていた。少年時代から構想を育てていたといわれるライフ・ワーク「神曲」における、彼岸の三つの領域――地獄界、浄罪界、天国――を巡る想像上の旅では、罪深い魂が永遠の救済へと導かれる道程が寓意的に描かれている。詩人が暗い森の中をさ迷っているうちに、情熱の象徴である野獣三頭に出会って驚かされたとき、そこにローマの詩人ヴェルギリウス（前七〇～前一九）が現われ、九つの地獄の輪の深みを抜けて浄罪の山の上にと、詩人ダンテを案内する。それまで地獄の付属物とみられていた煉獄の火の代りに、ダンテは浄罪界を贖罪（しょくざい）の山と見立てたのである。

一方ペトラルカは、三十歳のころプロヴァンス地方にあるモン・

ヴェントー（一九一二メートル）に登った。この登山は彼の心にそれまで経験したことのない新しい感情を育み、それが彼の新たな世界観を形成する起因となった。彼はこの体験を熱狂的な文言に表現して家族に報告している。この山の登峰記は、ペトラルカが遺した数多い著作の中の書簡集に収められている。

ところでヨーロッパでは、天地創造のとき大地の表面がどんな状態であったかをめぐって、ユダヤ教とキリスト教の教父たちの間に長年に亘る論争が続いたことがある。この論戦に関連して、「山はもともと存在したものか、それとも後になって出てきたものか。もし後者とすればその原因は何だったのか」という問題が登場してきた。現代人がこの問題を見た限りでは、「創世記」の天地創造の光景の後に出現した世界は、われわれが今知っているような世界、つまり高い所もあれば低い所もあり、山も海もある世界と、基本的には同じ構造をもつものであっただろうと、当然ながら感じとる。しかし十七世紀における考え方はもっと複雑であった。「創世記」に始まる教説では、混沌から現われた原初の地球は、山もあれば谷もある現在の世界とほぼ同様であったと述べる。しかしギリシャやローマや、ユダヤ教、キリスト教の教父たちの間には、もう一つ別の伝統的な説があった。それによると地球はかつて滑らかな球体をなしていた。その後どこかの時点で山が出現して、人類の罪業の証拠として、大自然の美しい容姿に付着した痕とみなされた。ユダヤの伝承によると、山々はカインが犯した罪の結果現われてきたことになっている。さらにこの伝承よりもっと広く流布していた考え方は、アダムとイヴの罪が原因となって地球上のいろんな歪みが生じたとするもので、キリスト教徒もユダヤ教徒も等しくそれを信じていた。原初の地球は地形の表面が滑らかであったと考えた人たちは、そのほとんどが山の出現の原因をノアの大洪水に帰した。ノアの方舟がアララット山（五一二三メートル）の頂上に漂着するところまで、「創世記」には山に対する言及が一つもないことや、またモーセは四つの川のことを言っているのに、山のことには全然触れていないことが力説された。

このような論争は中世を通して続き、ルネサンス期にまで入り込んだ。山の起源をめぐる理論は、ときには論争の前面に出たり、ときには他の係争事項といっしょに議論された。そして遂に、森羅万象の中における山の起源と位置とについて、宗教改革最大の思想家二人が激しく論争を交わすことになった。カルヴァン（一五〇九～一五六四）とルター（一四八三～一五四六）である。二人は両極端な態度をとったが、それは心理的な要因によるところが大きかった。カルヴァンは長い間スイスの山岳地域で暮らした経験があったが、ルターは低地地方の人で、一回行った山越えにより忽ち山に対する恐怖の虜になった。カルヴァンは自然が美しくないなどという話を許せなかった。神の御手に成った大自然はあくまでも美しいはずであり、却初の自然の中に山々も存在していたと彼は考えた。原初の地球がノアの洪水によって幾らか損なわれたには違いないけれども、自然はその美しさを保っていると感じていた。

一方、ルターの考えは一貫して悲観的であった。アダムとイヴ、カインその他多くの人間が罪を犯したので、神は人類を地上から拭い去ろうとして大洪水をひき起こした。かつては平野があり沃土が

栄えた土地に、大洪水によって山が現われた。この点を特別に彼は強調した。しかも大洪水の後も人類は罪を犯し続けているので、そう遠くない将来に人類は滅亡し、世界も死滅してしまうだろう。世界の終末は一五六〇年ころになるだろう。自らはどんなに無垢であっても地球もまた人類の罪をかぶらなければならないだろうと彼は予言した。世界は堕落し、日に日に悪くなっていくとした悲観的な世界像を、彼はつくり上げたのであった。

文学の領域について一般的にいえば、ヨーロッパのルネサンス期の山岳観はステレオタイプ化していた。シェイクスピア（一五六四～一六一六）は、自分自身の目で山など見たことがないように思われる。彼の自然描写には山はたまにしか出てこないし、また出てきても型通りの形容表現を踏襲しているだけである。ミルトン（一六〇八～一六七四）も都会から離れたことがなかったので、彼が作った詩の中で歌う山の描写表現は、先人が残した文句をアレンジしたものに過ぎない。さらにバニヤン（一六二八～一六八八）の「天路歴程」に出てくる「想像上の山」とか「悔悟の谷」に至っては、まさに聖書的教訓のための道具でしかない。

だが十七世紀の末にかけて、注目すべき書物が宗教家の手により出版された。それはバーネット（一六三五～一七一五）が著わした「地球の聖なる理論」と題した本である。原本は入手不可能のため、本書を紹介・批評した「暗い山と栄光の山」（M・H・ニコルソン著）により、バーネットの山岳観の概要を探ってみる。

バーネットは、地球は神がアダムとイヴのため却初に創ったままの姿ではなく、道徳的世界と同様に物象的世界もまた人類堕落の刻印を止めているとする、教父たちの見解を尊重した。大洪水の前は地表は滑らかで規則正しく斉一であって、山も海もなかった。どこにも一点の皺も傷も裂け目もなくて、そこに人類の祖先が住んでいた。罪深い幾世代かの後で、神が一人の忠実な男とその家族以外の全人類を滅ぼそうとして大洪水を送ったとき、最初の大災厄が起こった。洪水は猛り狂い、波浪は砕け散った。荒ぶる深淵は一切を呑み込み、結果的に難を免れえたのは、このノア一家が乗った方舟だけであった。大洪水が引き、ノアがアララット山の頂上におり立ったとき目撃したのは、岩石と土塊の荒漠たる堆積だけであって、そのときそこに今日われわれが見るような山々が残っていたのである。以上が彼の見解の要約である。

この本を書く前のバーネットは、均衡と左右相称が最善であるとする伝統的観念の中に生きていた。彼の頭の中では山々は快い佇まいをしていた。遠くからアルプスを眺めたときでも、まだ彼は均衡と左右相称感覚の人間であった。ところが後年実際に親友とともにグランド・ツアー（十七・八世紀にイギリス貴族の子弟たちの間で流行したヨーロッパ大陸旅行）を試みた際、山々の真っ只中に立ってみると、彼が思い描いていた山のイメージは木っ端微塵に砕け散った。そこに彼が見たものは、混沌の中に投げ出された巨大な物塊と、脚下に大きな口を開いた虚ろな峡谷であった。頭上には暗雲が漂い、周辺には真夏であるのに堆（うずたか）い雪が積り、下方には雷鳴が轟（とどろ）いていた。この山中体験が、それまでの彼の山岳観を粉砕したのであった。

（十八世紀以降）

バーネットが著わした「地球の聖なる理論」は、彼と同時代および後世の文人や学者たちに大きな刺激を与えた。ワーズワース（一七七〇～一八五〇）とコールリッジ（一七七二～一八三四）もそうであった。またヨーロッパ大陸でもこの本はよく知られ、バーネットの理論は大陸への旅行者たちの精神をも支配し続けた。

ワーズワースの詩「ティンターン僧院」や「序曲」を読むと、彼が若い時代には自然に対して恐怖の念と賛嘆の思いとの間で、心が揺れ動いていたことがうかがえる。自分自身を顧みて、自ら愛するものを探し求める人間よりも、むしろ自ら恐れるものから逃げ出そうとする人間に近いと自分で思うような場合には、恐怖感が前面に立つことが多かったことが、その詩から読みとることができる。

「ティンターン僧院」［Tintern Abbey］から原文の一節を引用し、あわせてその翻訳を示す。

And so I dare to hope,
…when like a roe
I bounded o'er the mountains, by the sides
Of the deep rivers, and the lovely streams,
Wherever nature led : more like a man
Flying from something that he dreads than one
Who sought the thing he loved…

あえてそう望みたいもの
……あのときには、のろじかが
跳ぶように、自然の導くままに山を越え、
深い川や美しい流れに沿って歩いた。
愛するものを求める人よりも、
なにか恐ろしいものから逃れる人に
私は似ていた。……

ワーズワースは十九世紀の初めに湖畔地方（イングランドのカンブリア州にある英国随一の景勝地、国立公園、山と谷と湖が入り組んで変化に富む秀麗な景観を呈する）の山に登った。登りが急になればなるほど驚嘆の喘ぎが起こり、頂上に立つといまだかつて見たことのない広大な視界が俯瞰され、遙かに小さい森林や野原と、逆に大きな雲やその影を目撃して新鮮な感動を覚えた。このように彼は故郷の英国の小さな山々に対しては、安定感と永続感を味わったが、友人と一緒のグランド・ツアーの途中で初めてアルプスと出会ったころは、その巨大な急流の轟音（ごうおん）やその抗し難い猛威に接し、破壊と廃墟（はいきょ）と荒涼とを通して万象がひたぶるに解体の一途を辿っているかのような、暗い気持ちにとりつかれた。しかし円熟期には数多くの山岳賛歌をうたいあげ、山を世界で最も神聖な場所と見なした。山は山間に住む人々を様々な表情で見まもり、語りかけ、正しく導くと彼は考えた。

十九世紀における山岳観の成立には、数多くの根本的な変化が伴なった。それは教会的世界観から科学的世界観へと変革していった、思想革命の所産であった。山岳に対する人々の反応は文学や神学に受け継がれた伝統の影響を受けはしたが、さらにそれ以上に自分たちが住む世界に対して人間自身が抱いた認識によって、いっそう深く支配されるようになった。人々は自分たちが住む地球の構造と、地球がその一部分に過ぎない宇宙の構造とについての観念を、根本

的に変革しなければならなくなった。神学・哲学・地質学・天文学のすべてにおいて革命的な変化が起こったのである。そしてこの事から生まれた山岳思想の潮流は、やがて近代アルピニズムの形成発展へとつながっていく。

ここでこのような山岳観の形成確立に重要な役割を担った人物として、まずラスキン（一八一九～一九〇〇）をあげなければなるまい。彼は一八五六年に「近代画家論」を書き著わして、多くの学者や画家に決定的な影響を与えた。その第四巻に入っている「山水美論」は、山岳に対する彼の審美観を知る上で重要である。

こうした時代を背景として、ヨーロッパ・アルプスへの探検旅行は十八世紀末の開拓期から十九世紀の黄金期へと移り、イギリスの岳人たちを中心に登山熱が高まった。そして登山家と呼ばれた人たちの登山記録・紀行が次々と出版された。その中でチンダル（一八二〇～一八九三）の「アルプスの氷河」、「アルプスにおける習練の時間」や、ウインパー（一八四〇～一九一一）の「アルプス登攀記」は、わが国でも戦前から翻訳され親しまれている。また英国のアルパイン・クラブ創立期の会員たちが執筆した紀行文集が、「峰、峠、氷河」と題して刊行され、好評をもって迎えられた。これらの書物に共通してみられる特徴は、筆者たちの山岳に思いを寄せるひた向きな姿勢である。

こうした岳人たちの登山活動に少し先立ってかまたはほとんど同時代に、登山とまではいかなくても山岳地帯を旅行したりそこで生活したりして、アルプスの自然美を世間に紹介したのが、バイロン（一七八八～一八二四）やシェリー（一七九二～一八二二）の作った詩であり、またシモンヅ（一八四〇～一八九三）の著わした随筆である。バイロンは一八一六年のオーバーランド旅行で、劇詩「マンフレッド」を書き、オーバーランドの名を世間に有名にした。この詩の舞台はアルプスの高地であって、ユングフラウの山々が聳え、主人公のマンフレッドは一人で断崖の上に立っている。辺りには山峡の谷間や瀧が望見される。ここには大地と大気の精霊が住んでいて、雪崩や氷河、大海や山脈、暴風雨や稲妻などの音声が響き渡る。精霊たちがアリマネス神を讃えて歌う。次にその原文と翻訳を示す。

Hymn of the Spirits

Hail to our Master！—Prince of Earth and Air！

Who walks the clouds and waters——in his hand

The sceptre of the elements, which tear

Themselves to chaos at his high command！

He breatheth——and a tempest shakes the sea；

He speaketh——and the clouds reply in thunder；

He gazeth——from his glance the sunbeams flee；

He moveth——earthquakes rend the world asunder.

Beneath his footsteps the volcanoes rise；

His shadow is the Pestilence；…

精霊たちの賛歌

歓び迎えよわれらが主を、大地と空の王を。

彼は雲と波を歩み、その手に持つ天成の笏は命令により四大をも崩壊させる。

彼が息づけば嵐が海を揺らし、語れば雲は雷鳴で答え、見すえ

れば日の光もそのまなざしを避け、動けば大地は震え、世界は引き裂かれる。彼の踏み行くところに火山は起こり、その影の落ちる所は疫病となる。

またシェリーもシャモニーの谷でモンブラン（四八〇七メートル）を眺めて歌っている。雪をいただき静かに晴朗に、遙か高く無窮の空を貫くその盟主の姿に感動し、周囲の山々が臣下としてそれに仕えるかのような、荘厳な景観をたたえている。

次にシモンヅの随筆は「アルプスへの愛」と題する。名文家として令名高い著者が、多年に亘るアルプス山中の生活と体験を基にして書き綴った作品である。彼はアルプスと人間との関係を汎神論的自然観からみて思索するが、彼の本領はむしろ詩的感受性に支えられたアルプス観であるといえる。この本から二個所原文を引用し、その翻訳を示す。(1)は汎神論的山岳観が明示され、(2)は豊かな色彩感と音響感に満ち溢れる筆遣いで情景が描写されている。

（1） Here the mountains, immemorially the same, which were, which are, and which are to be, present a theatre on which the soul breathes freely and feels herself alone. Around her on all sides is God, and Nature, who is here the face of God and not the slave of man. The spirit of the world hath here not yet grown old. She is as young as on the first day; and the Alps are a symbol of the self-creating, self-sufficing, self-enjoying universe which lives for its own ends.

ここでは山々は太古の昔から変わらない。魂が自由に呼吸し、独り自分だけを感じる舞台がある。神と自然とがその魂の周りに存在する。自然は神の顔であって、人間の奴隷ではない。ここでは世界の精霊はまだ老い込んではいなくて、その最初の日のときのように若々しい。アルプスは自分自身のために生きる、自己創造的、自己充足的、自己享楽的宇宙の象徴なのである。

（2） Why do the slopes gleam with flowers, and the hillsides deck themselves with grass, and the inaccessible ledges of black rock bear their tufts of crimson primroses and flaunting tiger-lilies? Why, morning after morning, does the red dawn flush the pinnacles of Monte Rosa above cloud and mist unheeded?

Why does the torrent shout, the avalanche reply in thunder to the music of the sun, the trees and rocks and meadows cry their 'Holy, Holy, Holy'?

なぜ山々の斜面は花で輝き、丘陵は側面を草で飾り、黒い岩壁の近寄り難い岩棚は、深紅色のサクラソウときらびやかなオニユリの房を付けるのだろうか。なぜ朝な朝なに真っ赤な日の出が、雲や霧の上に聳えるモンテローザの峰々を、人知れず赤々と染めるのであろうか。

なぜ急流は叫び、雪崩は太陽の音楽に応えて雷鳴のように轟き、樹や岩や草原は、「聖なる、聖なる、聖なる」と叫ぶのであろうか。

翻ってわが国の江戸時代の状況はどうであったか。山崎安治はその著「日本登山史新稿」で、この点について次のように述べている。「……江戸時代にはすでに多くの人たちが、山の美しさ、すばらしさを知り、宗教的色彩を持たずに登山として楽しむ風潮が見えは

じめている。ここに登場する人びとは、医師であり、文人であり、画家であり、また学者であったということも、ヨーロッパにおける初期の登山の歴史と一脈通じるものがあり、しかもそれがまったく外来登山思潮の影響を受けていないだけに注目すべきものと思うのである」。つまり近世の登山が従来の宗教的色彩から脱皮して、近代登山と同様のものが生まれ始めていることを指摘している。

江戸時代に輩出した文人墨客により書かれた数多くの紀行文の中で、山岳・自然と文学・民俗との関わりといった視点からみると、松尾芭蕉（一六四四～一六九四）の「奥の細道」、菅江真澄（一七五四～一八二九）の「真澄遊覧記」、松浦武四郎（一八一八～一八八八）の日記・紀行が、光彩を放つ文化遺産としてあげられる。

「奥の細道」によると、松尾芭蕉は元禄二年（一六八九年）三月下旬に江戸を去り、まず日光に向かう。男体山は「かすみかかりて雪いまだ白し」といった状態であった。それから北へ向かい出羽三山を巡拝する。六月八日、月山（一九八〇㍍）に登ったときの様子を彼はこう記している。「……木綿注連、身に引きかけ、宝冠に頭を包み、強力という者に導かれて雲霧山気の中に氷雪踏んで登ること八里、さらに日月行道の雪関に入るかと怪しまれ、息絶え、身こごえて、頂上に至れば、日没して月顕わる。笹を敷き、篠を枕として、臥して明くるを待つ」。月山が日本有数の豪雪地帯であることは、当時も現在も変わらないが、このような強行踏破を可能にしたのは、芭蕉の宗教的感情と文学修行に対する情熱であったといえよう。

菅江真澄の「遊覧記」七十巻は、日本民俗学への貴重な遺産となった。彼の文章は柔軟な雅文調で色彩豊かな押絵が折り込まれている。富士山以外には高い山に登っていないが、北海道の有珠山に登っているのが注目される。また東北一帯の山地を歩き数多くの峠越えをしているが、こうした雪中の山地旅行からその特異な冬季紀行文が生まれた。

松浦武四郎は、「三航蝦夷日誌」「東西蝦夷山川地理取調日誌」「近世蝦夷人物誌」などの主要著作のほかに、合わせて二百巻に及ぶ著書を残したが、「知床日記」や「石狩日記」などの北海道（蝦夷）に関する著作は、わが国の紀行文学史上において特異な光彩を放っている。彼は十代の後半から毎年のように大旅行をし、富士山をはじめ修験道などで開山されている多くの山々に登頂した。北海道の数十の山々にも足跡を印したが、その中でも石狩岳（一九六二㍍）の初登頂（安政四年六月）や、厳冬期（安政五年二月）の後方羊蹄山（一八九三㍍）の登頂などが注目される。次に「石狩日記」から石狩岳登頂の記述を引用する。

「二日、積雪銀の如し、上る事一時ばかりにて山およそ半分と思はるが、朝日も昇りたまふに四方一面に靄にして何も見えがたし。山は屈曲たる樺木ばかりにて、枝はみな風に馴て怪しき様をなしぬ。暫時にして靄もやうやく吹拂しが……峰尖りて雲海の上に突き出す。またしばし上るや頂上に至りぬ……」

おおむね十八世紀以降の時代を通観すると、人々の山岳観を形成する文化的基盤として、ヨーロッパではキリスト教的世界観と汎神論的世界観が共存しながら、それが科学的世界観へと交代していったが、わが国では固有の民俗的宗教的信仰の中に、仏教的世界観や修験道思想などが融合しながらも、近世に至って宗教的色彩を離れ

た登山思想が芽生えていったという、歴史的事実を指摘できる。

まとめ

桑原武夫（一九〇四～一九八八）はその著書「登山の文化史」で、山の文学を「山を眺めた文学」「山の中を歩いている文学」と、「真に苦労して自ら山に攀じる者によってのみ生まれる文学」の三つに分けたが、山に対して人間が抱懐する山岳観についても同じことがいえる。つまり望観者の山岳観、逍遙者の山岳観、登攀者の山岳観の三つに分けられる。しかもこの三つのタイプの山岳観は、ある特定の時代を代表する特定の個人だけでなく、その時代の全体的な流れとしてもとらえられるし、あるいはまた一人の登山者が山の中で行動しているときでも、刻々と変わるその場所やその時点において、この三つの立場が入れ代って山岳への思いを確かめることもあるだろう。

さてすでに考察したように、東洋でも西洋でも、人々は太古の昔から現在まで、宗教・芸術・学問・スポーツなどの活動を通して山と付き合ってきた。また山は人間の生活と遊びに関与する場所として認識されてきた。世界各地で様々な時代に様々な民族の山岳観が形成された。民族性を父とし風土性を母として文化が生まれ、その文化を基盤として山岳観が育まれた。

今世紀に入ると、ヨーロッパの登山家の間に、「アルピニズム」と称する登山思想・活動が登場する。これは山を人間が征服する対象としてとらえ、常により困難な登攀を求めて山に挑戦する姿勢を貫く。登山とはスポーツである以上に人間と山との闘いであるとする独自の思想である。「アルピニズム」はわが国の登山界にも伝えられ、信奉者が輩出して思想と行動の両面において活躍している。そこで今までのこの形成発展の姿をとらえ、今後の見通しまで立てたいところであるが、それは機会を改めてまとめるつもりでいる。

◆参考文献

一、「図説百科　山岳の世界」（アルベルト・バウムガルトナー他著、西堀栄三郎・宮下啓三監修、大修館書店）
二、「山岳（全三巻）」（モーリス・エルゾーグ監修、藤島敏男・深田久弥他訳、朋文堂）
三、「山を読む事典」（徳久球雄編、東京堂出版）
四、「修験道辞典」（宮家準編、東京堂出版）
五、「コンサイス外国山名辞典」（吉沢一郎監修、三省堂編集所編、三省堂）
六、「コンサイス日本山名辞典」（徳久球雄、三省堂編集所編、三省堂）
七、「世界山岳百科事典」（岩間正夫編、山と渓谷社）
八、「広辞苑（第四版）」（新村出編、岩波書店）
九、「新潮現代国語辞典」（山田俊雄他編、新潮社）
一〇、「増補改訂　新潮世界文学辞典」（河盛好蔵他編、新潮社）
一一、「暗い山と栄光の山――無限性の美学の展開」（M・Hニコルソン著、小黒和子訳、国書刊行会）
一二、「古代山岳信仰の史的考察」（高瀬重雄著、角川書店）
一三、「入山術」（高瀬重雄著、あすの書房）

一四、「山と神と――山岳信仰と修験道の世界」（鈴木正崇著、淡交社）
一五、「万葉の山旅」（楠目高明著、草思社）
一六、「訓読日本書紀（上・中・下）」（黒板勝美編、岩波文庫）
一七、「古事記」（倉野憲司校注、岩波文庫）
一八、「改訂新訓万葉集（上・下）」（佐々木信綱編、岩波文庫）
一九、「抱朴子」（葛洪著、本田濟訳註、東洋文庫）
二〇、「神曲（上・中・下）」（ダンテ著、山川丙三郎訳、岩波文庫）
二一、「天路歴程（第一部・第二部）」（バニヤン著、竹友藻風訳、岩波文庫）
二二、「アルプスの氷河」（チンダル著、矢島祐利訳、岩波文庫）
二三、「アルプス紀行」（チンダル著、矢島祐利訳、岩波文庫）
二四、「アルプス登攀記（上・下）」（ウインパー著、浦松佐美太郎訳、岩波文庫）
二五、Byron：Poetical Works（Oxford University Press）
二六、J.A. Symonds：The Love of the Alps（翻刻版）（南雲堂）
二七、Wordsworth：Poetical Works（Oxford University Press）
二八、「自然と幻想――ワーズワースの詩の世界」（岩崎豊太郎著、こびあん書房）
二九、「おくの細道」（松尾芭蕉著、萩原恭男校注、岩波文庫）
三〇、「菅江真澄全集（全十三巻）」（宮本常一編、未来社）
三一、「松浦武四郎紀行集（上・中・下）」（吉田武三編、冨山房）
三二、「日本登山史新稿」（山崎安治著、白水社）
三三、「登山の文化史」（桑原武夫著、創元社）
三四、「山の神」（吉野裕子著、人文書院）

屋久島の世界自然遺産登録と環境保全

―増大する登山者と地元の姿勢、開発と自然の調和は可能か―

吉村健児

「屋久島の自然」が世界遺産条約の自然遺産の指定を受けてから島を訪れる人が増え、無策のまま放置すれば年間十数万人といわれる観光客によって、貴重な自然が更に破壊されかねない。

屋久島の人たち、鹿児島県も「環境文化村構想」などの施策を打ちだしているが、なお模索の段階にある。われわれ山を愛する者の屋久島への関心も強い。そこで日本山岳会の九州四支部が主催し、福岡支部が主管して、今年（一九九五年）五月二十七日から三日間の「屋久島自然観察山行」を実施することになった。

この山行は、山岳会の人々に「屋久島の偉大な自然」を知ってもらうこと、「美しい自然を子孫に残す方策」を考えてもらうこと、のほか、今回の観察登山が「理想的な登山マナーで登る」のモデルとなって、島の人たちが登山者を迎える参考になれば良い、ということまで考えた。募集人員は、当初、六十人を予定していたが、締切日までに二百人以上の申込みがあって、以後は、お断わりした。

屋久島は「月に三十五日雨が降る」というほど、雨がつきものである。この天候に配慮しながら無事故で、参加した全員が満足するような計画を立てるのは難しい。二百人が自然を傷めないで屋久島の最高峰、宮之浦岳（一九三五㍍）に登るのは難しい。また島の環境保全のシンボルとなっている「縄文杉」に大人数で登るのも、根を傷めるなど、問題があると考え、行程から外した。

縄文杉を計画から外しても、島には神代杉の森、多湿な気候に育てられた照葉樹林や、「やくしましゃくなげ」「さくらつつじ」の群落があり、豊富な水に恵まれた美しい渓谷、など、見るべきものは多い。また参加者の質問に答えてもらうために、多数の地元の人に参加してもらう、など実施計画も練り直した。

屋久島は東西約二十八㌔、南北約二十四㌔、周囲約百㌔の、ほぼ円形の島で、海岸から海抜百㍍までは亜熱帯、さらに五百㍍までは平均気温一七・三度で鹿児島と同じ、千㍍までは平均一四度で金沢

とほぼ同じ、千八百㍍から千九百㍍の山岳地帯では平均八度というように、札幌と同じ気候である。屋久島は、亜熱帯から亜寒帯までの特殊な環境をそなえているわけで、さらに宮之浦岳の頂上付近では年間一〇、〇〇〇㍉に及ぶ大量の降雨があり、島のいたる処に美しい渓谷と滝をつくって変化に富んだ景観を生みだし、また豊かな生命を育んできたのである。今回の山行に参加した方は、この豊かな自然に触れて実り多く、屋久島の見所は宮之浦岳と縄文杉だけではないことも、十分に解っていただけたことと思う。

水と自然を重視する屋久島憲章

登山の前日、二十七日は最初に宿舎の近く、安房の「屋久杉自然館」を見学し、続いて付属の研修別館で日下田紀三館長自身が撮影したスライドを使った「屋久島の自然」についての基調講演があった。さらに上屋久町、屋久町の町長、営林署、環境庁の担当官、観光協会、地元の自然保護団体役員、日本山岳会の会員二名によって屋久島の自然保護をテーマにパネルディスカッションを行なった。

直ちに解決策が出せるような生易しい問題ではない。難しい点が幾つもあることを参加者の全員が認識したことと思う。討議では結論が出なかったものの、「環境キップ制度」など、幾つかの示唆に富んだ意見が出されたようにも思う。

屋久島には上屋久町、屋久町という二つの町がある。「観光というパイを平等に分けよう」という意識はあるとしても、このような思惑とは別に、島の人たちには美しい自然を永く保存しようという気持ちは強い。このために両町共有の「屋久島憲章」を制定した。

［屋久島憲章］

① わたくしたちは、島づくりの指標として、いつでもおいしい水が飲め、人々が感動をえられるような、水環境の保全と創造につとめ、そのことによって屋久島の価値を問いつづけます。

② わたくしたちは、自然とのかかわりかたを身につけた子供たちが夢と希望を抱き、世界の子供たちにとって憧れであるような豊かな地域社会をつくります。

③ わたくしたちは、歴史と伝統を大切にし、自然資源と環境の恵みを活かし、その価値を損なうことのない、永続できる島づくりを進めます。

④ わたくしたちは、自然と人間が共生する豊かで個性的な情報を提供し、全世界の人々と交流を深めます。

この憲章は外部からのアドバイスによらず、島の人々の希望で作られたもので、島民の決意がよく現われているように思う。憲章を読むと「山」とか「海」という言葉は一度もでてこないが、「水」と「自然」という言葉のなかに、島の人々の夢と覚悟が融けこんで見事な文章となっている。

周囲百㌔の小さい島の亜熱帯から亜寒帯までの気候と、湿潤な環境が驚くべき多様な生物を育んでいることは、既に述べた。鹿児島県が発行している「屋久島の自然と文化」の資料（平成五年発行）によると、生物の多様性は次のとおりである。

屋久島の動物相（三二七種）

（内訳）哺乳類　一六　鳥類　一七六　両生類　八　爬虫類　一五
蝶類　七六　トンボ類　三六

屋久島の植物相　（二二八一種）

（内訳）固有種　四〇　分布南限種　一四九　分布北限種　二一

これらの動植物が、この憲章のとおり子孫に遺産として残されるよう望みたい。

自然と共生していた島の歴史

島の人々と自然のかかわりの歴史をみると、小杉谷の神代杉を伐採した戦後の一時期を除けば、自然の生態系に見合ったバランスのとれた関係をつくり出していた。農、林、漁業の複合した暮しを中心に、人々は山や野や森や川、海と親しみ、生活のかてを得、結果として、それが自然を含めた屋久島の「屋久島らしさ」を形づくってきた。代表的な例として、今も行なわれている「岳参り」に海、里、山の交流の歴史を見ることができる。

島の各集落は、最近まで、漁の信仰を体現した「トビウオ招き」を初夏に、山崇拝の信仰行事である「岳参り」を春秋の彼岸に行なっていた。「岳参り」は奥岳（聖なる山）への道行きであり、山頂までは二日ないし三日かかるので、村を代表する登山者は、海辺近くで斎戒沐浴して出発した。留守の人々は、村落の前にそびえる前山まで登るか、近い詣所という遙拝所で代表の若者たちを出迎えるのである。登山者は、塩や海藻など海の幸を持参し、山の神に豊漁や安全、一家安穏を祈る。そして山からシャクナゲを持ち帰り、山の霊気を里にもたらす。出迎えの人々はシャクナゲの小枝をもらい床の間に飾るのである。

海の行事「トビウオ招き」、山の行事「岳参り」など屋久島の自然や風土、気候や気象は、この土地の生活と密着しているが、良い風習は必ず残るものと思っている。

［屋久島文化村構想］

島民が作った屋久島憲章の延長線上にあるともいえるが、鹿児島県が主体となって作成した「屋久島環境文化村構想」と名付けられた屋久島の未来像を想定した、多角的プランがある。要約すると、

① 自然と共生する新しい地域づくりを目指して、世界の自然遺産を受け継ぐとともに、広く島外との連携、交流を図り、同時に地域の人々の暮しを豊かにしていく。

② 屋久島の山、森、川から海に至るまで、すべてが自然の博物館であるように育てる。

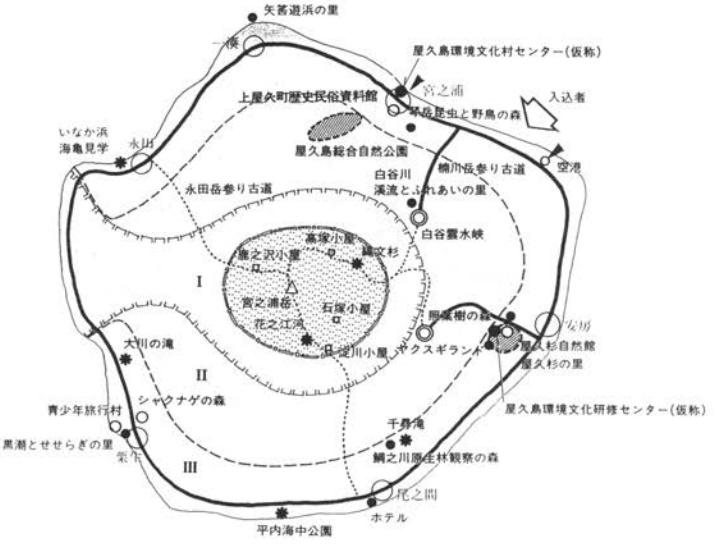
③ 環境保全と地域の活性化を両立させるため、島外との関係を密にして交流を図るとともに、世界に向けて情報を発信し、国際交流の輪を広げる。

④ あらゆる面から屋久島の再発見に努め、屋久島らしい個性的な地域づくりを進める。

⑤ 自然環境の保全のため生態系の維持、人と自然の関わりの歴史を考慮にいれた利用秩序の再生を重視する。具体的には、利用区域を区分して、その地域らしさを強調する利用計画を進める。

⑥ 環境文化村の実現には、生態系に影響を与えないために、科学的に緻密で長期の視点にたった対応を図る必要がある。このために百年単位で計画を考え、時間をかけて完成をめざす。

この環境文化村構想では、屋久島を図のように地域を三分割して、



持続性のある発展をもたらすことを考えている。

Ⅰ『保護ゾーン』　原生的な自然を信仰や畏敬の対象として奥岳を中心とした地域。

Ⅱ『ふれあいゾーン』　生態系を保全しながら、一定の枠内で人間の活動が行なわれる地域。

Ⅲ『生活ゾーン』　豊かな生活文化が育まれる前岳から集落、および県道周辺までの地域。

増え続ける観光客をどうするか

この構想の実現には問題が多すぎるようにも思える。まず長期にわたって自然環境を保存することと、年間十数万人に達し、更に年を追うごとに増大しつつある観光客、という現実を調和させることは、きわめて困難である。島民は、量の拡大による地域の活性化を図るのか、新たな観光の創造を目指して、質的な転換を図るのか、の選択を迫られている、といえよう。

ここで戦後、屋久島の産業構造がどのように変化し、人口の消長が如何であったか、を鹿児島県企画調整課の資料で見てみよう。

まず一九五〇年（昭和二十五年）には、林業を中心とする一次産業が八五％以上、二次、三次併せて一五％弱である。小杉谷にトロッコのレールが敷かれ、ディーゼルが走るようになったのが、一九三〇年代、谷周辺の屋久杉が伐採され、人口も二万人を突破、最盛期の一九六〇年（昭和三十五年）には二万四千人を越えた。

それ以後、小杉谷の杉は皆伐されるとともに、林業従事者は島を去り、一九七〇年（昭和四十五年）には、一次産業は四五％前後に減少、観光サービス業が三五％以上に成長したが、人口は一万五千

人に減少した。そして一九九〇年（平成二年）には、三次産業が五〇％を越え、林業などの一次産業は二五％を割る。人口も一万四千人と大正初期の人口と同じになった。島を豊かにすること、自然を残しながらの町興しと人口問題、関係ないようで、何か問題を抱えているようにも思える島の歴史である。

観光客を中心とする島外からの来訪者の推移を見ると、一九七〇年に空港ができて五万人を突破し、八〇年代後半には十万人近くになった。一九九〇年の観光客は十一万五千人を越えたとされている。このうち航空機の利用者は、島の住民を含めた数字だが四万五千人である。このような観光客の増加は、航空機のほか、鹿児島港から三時間というジェットフォイルの就航によるところが大きい。現在、屋久島への輸送キャパシティは年間二十万人以上とみられている。

深田さんが宮之浦岳へ登った頃

深田久弥さんの『日本百名山』では、宮之浦岳は百番目の掉尾を飾っているが、百名山のうち、最北端の利尻岳を最初に、最南端の宮之浦岳を最後に載せただけのことである。深田さんが宮之浦岳に登ったのは、比較的早く一九三九年（昭和十四年）のことである。鹿児島を夜たって翌日の午後遅く安房に着き、その日のうちにディーゼルで小杉谷に入り営林署の小屋で泊まった、と書いている。深田さんは「島では営林署が絶対である」とも書いている。当時、すでに杉の伐採は始まっていたと思われるが、まだ島を訪れる人は少なく、山中で聞いた鹿の声、素朴な浦辺の風景など、静かな島を懐かしんでいる。私も同感して読んだ記憶がある。

私が訪れたのは、深田さんが登ってから二十二年後の一九六一年（昭和三十六年）四月下旬から五月上旬にかけてのことであるが、島の状況は深田さんの頃と、ほとんど変わっていなかったように思われる。私の訪問は九州山岳連盟が主催した登山会であった。三百人以上が参加し、島では空前のことであると大歓迎を受けた。当時でも島へ渡るのは船便だけ、それも隔日の運行で、夜に鹿児島を出発、翌日に宮之浦の沖合に到着、ハシケに乗り換えて岸に到着する、という現在では想像も出来ない悠長な旅であった。この山行で、私は会長から総リーダーに指名され、全員を三班に分けて登山を開始したことも、良い思い出として残っている。

当時は未だ縄文杉は発見されていなかった。道路も舗装はなく、砂利道であった。子供たちの殆どが裸足で歩いていた。いまはない小杉谷の営林署の伐採作業の従業員宿舎の集落、そのために出来た小学校の校舎と校庭の風景、木材運搬用のトロッコや小型ディーゼル機関車、簡便な客車など、昨日のように鮮やかで、懐かしい。

奥岳という宮之浦岳、永田岳、黒味岳など花の江河付近から奥の白骨のような枯れ木が、神々しい姿で残り、まさに「天孫降臨」の神事は、この付近ではないかと、敬虔な気持ちを抱いたのを覚えている。奥山で目立ったのは杉の古株や倒木に子や孫の杉が寄生している姿であり、ウイルソン株の空洞化した姿は世にも不思議な世界だ、と驚いたことであった。

「月に三十五日雨が降る」という言葉も、そのとき聞いた。「島の人口は六万、内訳は人が二万、猿が二万、鹿が二万」というユーモアのある表現もあった。いま考えると、人と動物が共生している島

人の心のありようを、巧まずに表現した言葉のようにも思える。当時の島の人口は二万、いまは一万四千人に減ったが、逆に騒がしくなったのは、時代とはいえ、皮肉なことである。静かな島が、世界自然遺産の指定とともに、観光客が一層増え、近代設備のホテルや観光施設、道路の拡幅と、新しい林道が建設される、などの事態は矛盾としか言いようがない。

文化村構想は新しい自然破壊か

かつて「縄文杉」までのロープウェイを架設する計画があり、日本山岳会をはじめ、自然保護団体の反対で、中止に追いこんだ経験がある（註1）。同じような事態が、今後も起こる可能性は多い。

文化村構想では、島の東西南北の主な集落に、それぞれ観光スポットを設置し「パイを出来るだけ平等に分けよう」という構想があるように思える。例えば上屋久町には環境文化村センター、歴史民俗資料館、安房には屋久杉自然館、屋久杉の里、屋久町には温泉のほか自然公園、近くに平内海中公園、栗生には黒潮とせせらぎの里、青少年旅行村、永田には「いなか浜の海亀見学」である。

しかし、それでも島のなかでは、開発が遅れている西部地区に、新しく県道の建設を開始して、島の自然保護重視派の反発を呼んでいる。この西部林道地域は、国立公園の第一種特別保護区であり、自然原生保全地域、そして世界遺産指定地域でもある。

島で発刊されている季刊誌『生命の島』三十二号、三十三号に、中島成久氏は「屋久島の環境イメージ」として「ゾネーションに疑義あり」と、この林道建設を批判している。「島で最も原生のまま残された照葉樹林地域であり、海岸線も美しい。しかし、いまの土木技術では、これらの美しい森や、岩や、土を傷めないで県道を建設し、拡幅することは出来ない」とされているのが問題だ。

鹿児島県は「この林道建設をエコ・ロードにしようといっているが、地元に住む人間の生活道路としては、必要がない林道であり、観光道路に巨額の費用を投じ、生態系、景観に大きな犠牲を払わせる鹿児島県と、それを認めた環境庁も無責任だ」というのが、主な反対意見である。屋久杉自然館の日下田館長も「屋久島の価値は屋久杉だけではない」と言っている。

（註1）日本山岳会は一九八八年（昭和六十三年）、環境庁に「縄文杉の観光ロープウェイ計画の中止」を要望した。当時の環境庁の山内自然保護局長は、要望に応えてロープウェイ終点から縄文杉までの遊歩道建設を許可しなかったため、計画は中止に追い込まれた。

「環境キップ制度」が島の未来を握る

今後の課題としては、観光客を無制限に増やさないことが必要になってくると考えている。このためには交通機関の増便を無制限に行なわないことである。旅行会社の「縄文杉ツアー」などを歓迎するのも考えものだ。奥山地区への入山有料化と事前許可申請を骨子とした「環境キップ制度」が検討されているがこれも一つの方向だ。島の自然観察は「エコ・ツアー」の時代である。奥岳地区への過度の入山を抑制する対策が必要になってくる。これからの屋久島の発展は、百年後あるいは、その先の未来を目指して、新たな観光を創造し、質的な転換を図るべきである。

女性懇談会をふり返って

——戦後五十年、日本山岳会婦人部の歩み——

出席者
小倉　董子　穴田　雪江
三枝　礼子　松永　康子
熊谷とも子　伏見　紀子
山口　節子　黒沢　通子
早川瑠璃子（奈良原町子）
記録とまとめ

はじめに　現在、日本山岳会には女性会員も多数在籍しているが、戦前はごく限られており、ほとんどが戦後の入会者である。もちろん、登山そのものが多くの女性にとって身近なものとして意識されるようになったのも戦後のことだが…。

山岳会の中の女性の活動は、一九四八（S23）年の事業計画に、女子部担当村井米子として「女子のみの登山、集会その他の向上を図る」と記述された辺りから始まる。翌一九四九（S24）年の「会報」第一四六号に「婦人の入会歓迎」と題して―今の婦人部を充実するために今後新会員を募集することにいたしました。登山、ハイキング、スキーなど共に楽しむ実働性のある新人を歓迎します。申し込みは日本山岳会婦人部連絡係・菅原美与子―とある。

この婦人部が当時あった東京支部（一九六七＝S42＝年、首都圏部としての本部に統合）の婦人部として村井米子を頂点とし、青木ミヨ、今井喜美子、川森時子（左智子）、坂倉登喜子会員をはじめ多くの女性会員の努力によって、活発に活動するようになり、一九六七年・婦人懇談会、一九九一年・女性懇談会と名称を改めながら続いてきた。

今回は旧婦人懇談会の理事や委員を経験したメンバーが集まり、それぞれの時代の活動状況、思い出、エピソードなどを存分に語ってもらった。

（本稿は一九九五年一月二十日に収録、奈良原町子がとりまとめて、関係者の校閲をへたものである）

東京支部での活動

小倉　山岳会に女性会員が増えてきたのは昭和三十（一九五五）年代になってからですね。

早川　一九五六（S31）年にマナスルの初登頂があって、山岳会は非常に活気があった時代です。ルームは熱気にあふれていましたが、私は怖ぐて入れなかったから、お茶係り専門でした。

三枝　女性会員は集会に何となく出にくい雰囲気でしたよね。婦人部の組織も曖昧だったような気がします。

山口　一九五八（S33）年ころ、東京支部の中で婦人部が定着し、女性が活躍するようになりましたね。

穴田　小倉さんが一九五二（S27）年の国体に選手で出たのは山岳会とかかわりがあったんですか？

小倉　特別関係はありません。早稲田の関根吉郎先生から「国体へ出ろ」という話があって、武甲山で開かれた予選会に出かけたら、村井さん、今井さん、川森さん、坂倉さんたちがいらした。その頃は「ああ、幹ちゃん（故後藤幹次会員）の娘か、いいんじゃない」という感じで選ばれ、東京代表の選手として国体に出たわけです。おおらかな時代でした。

早川　当時の女性の集まり具合は？

三枝　一九五七～八（S32～33）年ころ、毎月座談会がありました。坂倉さんが中心で、八、九月は夏山報告会といった感じ。私は葉書を書く手伝いなどをしていました。毎月ですからテーマを考えるのが大変でしたが、十五人くらい集まり、顔見知りの人が増えてきました。

早川　一九四九（S24）年の山岳会の会報に「登山相談日に婦人の日」が設置されたとあります。女性会員が顔を合わせる機会がないので、相互の連絡と相談を兼ねてと、村井、今井、坂倉、青木さんたちが相談員になって。

小倉　戦後余り時間がたっていない情報の全くない時代ですから、女性も山へ行きたいけれど、どういう風に行ったらよいか分からないというので、要望があったのでしょうね。

三枝　私が入会した昭和三十年代ころから、次第に情報が増えてきました。それぞれの山岳会で技術を修得した人も多くなっていましたし。

山口　一九六〇（S35）年ころになると出席する女性が減ってきました。そこで冨田美知子（現・織田沢）さんと、東京周辺の女性会員の名簿を作って連絡をとり、集会を持ったことがありました。当日は五十人くらい集まったかしら。とにかくルームに入り切れないほどの出席者で、珍しく村井さん、佐藤テルさん、川森さん、坂倉さんが一堂に会したの。

三枝　一九六一（S36）年の東京支部忘年山行は奥武蔵武甲山で五十三名もの参加者がありましたが、大半が女性でした。

技術講習会と海外登山の始まり

小倉　東京支部の婦人懇談会からは、一九五三（S28）年の冬期富士講習会に堂本暁子、遠藤友美恵（現・高橋）、中山雅子、大谷操さんが参加しています。このころから女性もスキーだけではなく氷雪期の登山をするようになってきたようですね。

山口　その後東京支部では、組織だった技術指導が必要だということで、折井健一さん、山崎安治さんなどをリーダー格に、マナスル、ヒマルチュリなどのメンバーや学生部のOBたちが協力して、技術講習会が開かれるようになり、女性の参加が目立つようになりましたね。

　一九六二（S37）年十一月末から富士山で開かれた氷雪技術講習会は吉田口から歩いて五合目の芙蓉荘に泊まり、キックステップ、滑落停止、アイゼン歩行などを習

いました。夜はストーブを囲んで海外遠征をした講師の話を聞いたり、討論をしたりと、寝るのが惜しいような充実した講習会でした。

松永　私も技術講習会にはせっせと通った一人ですが、今井通子さんなんかも参加してましたね。

山口　みんな熱心だったわね。毎回女性の参加者が十名以上いたと思います。

松永　そんな講習会で育てていただき、どうやら自分たちで山へ行けるようになったころ、平沢亀一郎さんが婦人部に「台湾の山に行きませんか」と紹介してくださって。彼は戦前、台湾で稲作を教えていて大変喜ばれ、台湾の方から招待を受けていらしたんです。彼は八十歳だったから山は無理だけれど、途中まで一緒に行くからというので、行くことにしました。一九六四（S39）年十二月のことです。

熊谷　参加したのは？

松永　冨田（現・織田沢）、大貫菊子（現・芳野）、折井正子（現・大野）、私の四名です。

台湾ではガイドを使うけれど、日本の山登りの形式で、つまりキスリングを背負って自分の荷物は自分で持って玉山を縦走しようというわけ。テント、食料、装備など全部しょって行った！　まだ小屋がつぶれたままだったり、道も荒れていて、登山としての施設は整っていなかったですね。

伏見　費用はどのくらいかかったの。

松永　二十万円、すべて自費です。あの当時、台湾に行くと中国へは入れないと言われました。

穴田　そんな時代でしたね。

初代自然保護担当理事は女性

松永　あのころは東京支部のなかでも女性がヒマラヤへと、本当に盛り上がっていました。勉強もよくしたしね。だから周りの男性が協力してくれたのだと思います。山崎さん、村木潤次郎さん、その後は松永（敏郎）なども講習会を続けてくれて、若い女性が大勢育てられました。

早川　昔は女性会員が少なかったから〝得〟したことが多いですね。会長とか名誉会員などにもすぐ覚えていただけたし。

山口　槙さんが「女性の登山」と題してお話してくださったり、女性指導者研修会の講師を引き受けてくださったり。

伏見　三田さんには日印合同登山で終始お世話になりました。隊員は帰国したら真っ先に〝お礼参り〟（笑い）に伺って、とても喜んでくださったわね。

山口　松方さんに婦人懇談会の集会で「富士山と私」というテーマでお話していただき（『山岳』第六十四年（一九六九年）に掲載）、大量の録音テープを皆が交代で原稿に起こし、私がまとめたんです。その原稿を松方さんは電車の網棚に置き忘れてしまって！　当時はコピー機が普及していなかったから、もう一度書き直し…大変な努力をしました。

亡くなった方が多くなってしまったけれど、今西錦司、西堀栄三郎、加藤泰安、折井健一、深田久弥、小原勝郎さんなど、その他にも大勢の方が婦人懇談会には優しくしてくださいました。

小倉　戦前から活躍していた女性には、村井米子、佐藤テル、黒田初子、今井喜美子、川森左智子、坂倉登喜子さんなどがいますが、昔はガイドつきか、ご夫妻で歩いてい

らした。グループ登山は戦後のものですが、村井さんは文部省の登山研修所の運営委員をされたり、自然保護にも関心があったりで、対外的に女性の社会進出に貢献された方だと思うんです。

早川　山岳会の東京支部が本部に統合されて杉浦耀子（現・マレン）さんが初めて女性の理事（自然保護）に選出されています。このとき村井さんが、自然保護担当の評議員になっています。

文部省と共催の女性指導者研修会

小倉　私が理事のとき（一九六八～一九七〇年）、村井さんが「研修会が男性だけなのはおかしい、女性も参加できるようにしてほしい」と主張され、文部省が山岳会に相談してきました。それならというので、実績を作るために山岳会が準備して、一九六九（S44）年九月、立山で女性指導者のための研修会を開きました。文部省と共催の研修会です。

山口　当時婦人懇談会は少々活気がなくなっていたけれど、半年がかりのこの研修会の準備で随分まとまってきました。講師も槙さん、村井さん、リーダーは山崎さんはじめそうそうたるメンバーで、山岳会ならではの布陣でした。

小倉　全国からの参加者が四十三名と大盛会でしたよね。

山口　八月の豪雨の後で、山に入るのに富山地鉄の線路が飴のようにねじれて、タクシーかトラックに分乗するしかなかった。皆どうにか集まったけれど……。おかしかったのは、槙さんを穴田さんと三浦多美子（現・斉藤）さんが東京からエスコートしたでしょう。婦人懇談会でも大柄な二人に囲まれて、槙さんが見えなくなってしまった！

小倉　剱沢でルートを外れて遭難した外部の人があって、私達に救助を求めてきた。それで現場にいた神崎忠男さんたちに行ってもらって救助作業しているとき、村木リーダーのグループから「コースを変えて下る」という連絡があった。本部にいた私が「予定通り下りてください!!」と無線で言ったら、側で聞いていた槙さんが「先輩に命令するブーちゃんはすごいね。幹ちゃんは仏だが、娘は鬼だよ」ですって。

山口　この研修会がうまくいったので、翌年（一九七〇年）も立山で同様に実施しました。文部省が各教育委員会を通じて参加者を集めてね。

小倉　そう、文部省は女性用トイレやお風呂を作るなど、設備を整えてくれました。

山口　あの年の剱沢で台風にあって、どのテントもポールが折れたり、大変だった。山崎さんが「テントを死守せよ！」って。

小倉　この研修会では、若手を育てようという意識があったし、イベントをやるごとに女性会員は遠征だけでない実績をあげたと思います。

三枝　その後、一九七四（S49）年の夏は小倉さんと私、七五年と七六年は私が女性講師として参加しました。

伏見　こうして育った中から渡辺節子（旧・渡部）さんはエベレストへ行った！

小倉　それでも若手養成のつもりが関田美智子さんのように亡くなってしまったり、地方へ行ってしまう人がいたりで、残念な結果になっていますけど。

伏見　私が理事の時（一九七二～七三年）はルーム移転と山研問題。理事である以上

婦人懇談会だけでなく、全体の問題にも取り組んだつもりです。山研のトイレも設計変更して増やしてもらったし。山研の管理や人事にもいろいろ問題がありました。山岳会はエベレスト遠征があったから大変な時期だったんです。会長は三田さん、今西さん。その途中で私は一年間、三枝さんに理事代行をお願いして、インドへ行ってしまったんです。

小倉　私は七五、七八と山研理事、黒石恒さんが女性懇談会理事、常任評議員に山口節子さん、佐藤テルさんが評議員です。

早川　山岳会に女性が大勢いて目立った時期ですね。

小倉　山研については多難な問題があって、委員長の折井先輩に助けていただき、大改革しました。女性懇談会以外でも山岳会に活を入れる役目を果たしたと思っています。

女性懇談会と日印合同登山

小倉　日印合同登山はどういう経過で始まったんですか。山口さんが理事（一九六五～六六年）の時ですね。

山口　日本山岳会のエベレスト計画実現のため渡印された当時の副会長三田さんと、IMF（インド登山財団）のサリーンさんとの深い結び付きから生まれた話で、最初は六六（S41）年実施予定で準備していたのに、印パ紛争のため中止になってしまったんです。

伏見　三田さんから話があって、勉強会を始めていました。婦人部がよくまとまってガルワルの勉強をしたころです。とにかくインド熱があったのよ。東京オリンピックの時、テンジン・ノルゲイさんの娘やギャルツェン・ノルブさんの娘が来たり。インドから三田さんのほうに誘いがあって、それに乗ったんです。

　インドの女性もヒマラヤへ行く基礎ができていたからとても熱心でした。その頃はインド独自でエベレストに登っていたし、登山学校もあって、エベレストの頂上に立ったシェルパの何人かが先生になって、五～六〇〇〇㍍の山で訓練しているんですから。インディラ・ガンジー首相もヒマラヤ登山に熱心で、大いに理解があったので、資金的にも可能だったんでしょう。印・パ戦争などで、インドの女性も戦争に行かなくてはならないから、登山もインドにとって大切だったんだと思います。

　実際に行ったのは一九六八（S43）の第一回から三回、一九八一（S56）年にインドから来たので、結局日印合同登山は四回になります。

山口　女性だけというのはニュース性がありました。

伏見　女の人だけで行くのは、山岳会としてではないけれど、一九六〇（S35）年の穴田さんたちのデオ・ティバが初めてでしょう。

穴田　とにかくヒマラヤへ行きたい、行きたいで、ブッシュ山の会を作り、細川沙多子、浜中慶子（現・宗實）、岡部みち子、原欣子（現・赤尾）、杉浦耀子（現・マレン）、私の六名でバンジャブ・ヒマラヤのデオ・ティバ（六〇〇一㍍）へ登りました。外貨割当て申請の関係上、「インド・パンジャブ婦人親善隊」と名乗ってですが。

早川　同じ時期に「日本・ニュージーランド女子親善隊」として小倉さんたちがニュージーランドへ行っていますね。

小倉　一九六〇～六一年にかけて佐藤テル、川井耿子（旧・鈴木）、森宏子、田村協子（現・五百沢）、私の五人がニュージーランド全島を車で走り、ロールストン、ウォルター山、エグモントなどに登りました。ノーマン・ハーディーさんはじめニュージーランド山岳会の方たちに氷雪技術や山登りの楽しさを教えていただきました。

山口　ガルワルが中止になったとき、テルさんが「あなたたち、ニュージーランドに行きなさい」とハーディーさんに手紙を書いてくださった。それで一九六六～六七年ニュージーランドの夏、秋田しおみ（現・ウィルソン）、武田育子（現・羽賀）、岡部浩子（故）、私の四人でクック周辺のミナレッツ、マルテブランなどを登り、ホプキンスバレイの国際キャンプにも参加しました。みんな蜂蜜とアイスクリームでまるまる太って、真っ黒になって帰ってきました。

穴田　私たちの隊は五千ドルしか持ち出せなかった。一ドル三百六十円の時代ですものね。

黒沢　あのころは船で行ったんでしょう。

山口　貨客船で、これは楽しかったですね。

伏見　印パ戦争が終わって、またインドから合同登山をしませんかと言ってきた。そのころ宮崎英子（現・久野）さんが自分たちの会でインドを目指していたけれど、許可がもらえないで山岳会に入ってきたんです。私、折井さん、宮崎さんのクラブの三島蓉子さんを加えたメンバーで実施することになりました。

一九六八（S43）年四月にニューデリーへ集まって、インドの六人と日本からの四人です。カイラッシュ・ピーク（五六五六㍍）が第一目標で、同じくらいの高さの山も計画していましたが、技術的より何より頭でっかちで。結局、無名峰でシェルパの雪崩事故などもあり、カイラッシュ・ピークだけ登って帰ってきました。

カイラッシュ・ピークの登頂

山口　カイラッシュ・ピークについては後日談があります。一九八四（S59）年になってヒマラヤン・ジャーナル四〇号でエディターのカパディアさんが「ボンベイのチームで試登したが、六八年の合同登山隊は登頂していないのではないか？　登ったのは南側のチョプ・パス（四九三七㍍）だと思う」と書いたんです。これには合同隊を終始お世話くださった関口周也さんが写真一三〇枚と宮崎、三島の記録を合わせて登頂を証明してくださった。カパディアさんも登頂を認めてくれました。

小倉　合同登山はインドとのチームワークや文化的な違いなど、悩みもあったでしょう？

伏見　朝日新聞がスポンサーだったのですが、カイラッシュ・ピークの辺りは外国人が入ってはいけない地域だったから、通信もいけないと言われた。朝日からフィルムなどをもらって行ったのに、写真もダメとかで一切通信をしなかったんです。

穴田　すごく厳しいのよ。インナーラインの近くでしょ。

伏見　インドの交通手段はすべて軍隊のトラックを使わせてもらうなど、逆らうわけにもいかず、せめて私信の形ででも朝日に何か送ればよかったのですが、宮崎さんは性格的に生まじめだから、そう言われるとどうしようもなかった。それで、初めての女性合同登山だったのに、ほとんど世間に

は知られることなく終わってしまったんです。

穴田　個人的にはよかったでしょ。

小倉　個人では行けない時代でしたからね。しかも伏見さんは皆と一緒に帰ってこなかったのよね。山岳会ではわがまま者とか、大変だった。

伏見　残った山口さんたちにはご迷惑をかけました。今のように自由にゆける時代ではなかったから、一度海外へ出たらしばらくいたいじゃない!!　明治大学でもゴジュンバカンの遠征があって、女子も連れていこうか、という話も出たくらいだけれど、結局駄目。早くから行きたい行きたいと思っていたのに、合同登山で出られたのが二十七歳ですよ。

小倉　迷惑をかけられた山口さん、留守部隊はどうでした?

山口　山岳会でも問題になって、委員会を招集する騒ぎでした。それで「すぐ帰るように言いましょう」と言えば、「せっかく遊んでるんだから」って…。

小倉　優しいのよ。山岳会の何となくうやむやで、それがいいところでもあり、悪いところでもある。出かけている人たちは何時の時代もそれなりに楽しんでいるのだけれど、残っている人が大変な思いをしているわけですね。

伏見　顰蹙をかったけれど私はそのままインドにいて、山が終わってから一緒に登ったインドの人の家を訪ね歩いたりして親しくなり、帰国後も文通して交流が深くなっていました。インドから人が来る度に連絡もあったし。また行きたい、行きたいがこうじて、七三（S48）年十二月に一年間個人でインドに行きました。その時、一九七六（S51）年のカメット（七七五六㍍）のパーミッションをもらってきたんです。インナーラインの向こう側で簡単に入れない地域だから、また問題になったけれど…。

小倉　伏見さんのやることはみんな事を大きくするばかりだったけれど、今考えれば、やってよかったのよね。強引さとか熱意がないと何もできない。

山口　同じ時期に山岳会の男性も日印合同登山（ナンダ・デヴィ）の計画があって、ずいぶん嫌な思いをしたわね。

穴田　日本から二つの合同登山は許可しないということ?

山口　同じ地域、同じ時期なので、寄付を集めにくい、シェルパが不足する、などの関係だと思います。

小倉　山口さんと二人でナンダ・デヴィ委員会に呼び出されたわね。

山口　はっきり「やめろ」とは言わないけれど、インドは女子の合同登山は中止すると言っているとか。国際電話でサリーンさんに確認する一幕もありました。文部省の推薦や山岳協会の許可もなかなか取れず、苦労しました。同じ山岳会の中で助け合うどころか、情けなかったですね。

　でもカメット委員会は、委員長の今西錦司会長、望月達夫、織内信彦両副会長、西堀栄三郎、加藤泰安さんなど本当に協力的で、これは救いでした。

伏見　加藤さんに「募金ができない」と泣きついたら、今西会長に話すように知恵をつけてくださって、細川沙多子さんと新幹線で京都まで行きました。今西さんの名刺を持ってお願いに行くと、関西電力、松下電器、大阪ガスなど関西の大きな会社が快く寄付に応じてくださった。四手井綱英さ

ん、岩坪五郎さんが同行してくださって。婦人懇談会が初めてたくさんの寄付を集めることができたんです。

山口　東京では募金活動は一切しませんでしたよ。

穴田　そのお金が婦人懇談会の基金としてずーっと残っていた。そして、最後に山研のトイレになって…。

伏見　念願のカメットは、奈須文枝（現・麻生）、高本信子（故）、富田由紀子（現・麻生）、清水春美（現・大久保）、私で出かけたんですが、悪天候のため断念、アビ・ガミン（七三五五㍍）に登頂しました。それでもインドの新聞は毎日のように合同隊の行動を掲載してくれて、帰るとき一人一人に新聞の切抜きを四冊もくださった。サリーンさんは初めての合同隊が日本の我々で、二度目も成功したから、とてもよくしてくださったのよ。私がサリーンさんのお宅に居候したりで、娘のように特別扱いしてくださった、という事情もあったでしょうけれど。

それにしても日本では山岳会の遠征ではないといって、八十周年記念冊子の中の年譜にも載せてくれなかったのよ。

穴田　そう、女性の遠征なんて一つも載ってないわ。

熊谷　一九七〇年代は女性のヒマラヤ遠征が目立った時期です。一九七〇（S45）年の宮崎英子、田部井淳子さんたちのアンナプルナⅢ峰、七四（S49）年は黒石恒、佐藤京子（現・遠藤）、中世古直子さんたちのマナスルで八〇〇〇㍍峰登頂、翌七五（S50）年、ついに田部井さんが女性として世界初のエベレスト登頂者になりました。

山口　女性懇談会の場合は、カメットの次が一九八〇（S55）年のガルワル・ヒマラヤのケダルナート峰（六九四〇㍍）です。この計画を成功させるべく、同時進行で雪崩、高所、氷雪技術など各種のセミナーを活発に行っていました。

黒沢　指導をお願いしたのは、金坂一郎、川上隆、中島道郎ドクター、村井葵、雨宮節、神崎忠男、今井通子さんなど。松永敏郎さんには終始技術を中心に教えていただきました。

山口　インド登山財団のサリーンさんとのお付き合いも六八年の合同隊以来という長いものでしたから、そのご好意は並々ならないものがあり、問い合わせの手紙を出すと一週間以内に返事がきました。依頼しない資料までどんどん送ってくださって、海外委員会の鈴木郭之さんなど「婦人部、おかしいんじゃないの！」。国学院大学のバギラティⅡ計画など「発信しても梨のつぶてだ」と松永敏郎さんがぼやいていたんですから、申し訳ないように優遇されていたんです。カイラッシュ以来、IMFに伏見さんが礼を尽くしていたことも大きいと思います。

伏見　ケダルナートは結局登れずに手前のドームに登ったんでしたね。高本信子、清水春美、田中清子、富田由紀子、根本知子（現・山田）、小倉由美子（現・飯坂）、市村洋子（現・前田）、佐藤知恵子、ドクターの堀井昌子、それにカメットの時参加したインドのラマ・セン・グプタさんなど大人数でした。

山口　合同登山としての遠征はこれが最後になりましたが、翌一九八一（S56）年七月にインド女性三人（ミーナ・アガラワル、チャンドラ・エイトワル、ラマ・セン・グ

プタ）が日本に来て、穂高と立山、剱に登りました。三人ともカメットのメンバーです。穂高小屋、立山の研修所も印象深かったでしょうし、大阪では今西壽雄元会長のお宅に泊めていただくなど、山登りも楽しかったし、よい思い出を山ほど持って帰ったと思います。

小倉　その後、女性懇談会は迫力がなくなってきたので、田部井さんに理事になってもらい、遠征でもできれば…と期待したのですが。

早川　田部井さんが理事時代の一九八八（S63）年、IMF三十周年記念の年でもあり、日印合同の歴史を踏まえて、北インドヒマラヤのシヴァ峰（六一四二㍍）登山を計画しました。彼女が総隊長、隊員十二名、トレッキング隊九名の大所帯です。当地は三十年振りの大雨続きで難行しましたし、行方不明の報道に留守隊は振り回されたり、といろいろありましたが、田部井淳子、松田柳子、倉井登代、備前和子（現・斉藤）の四名が登頂しました。

この隊は、意思のある人は自由に参加でき、しかも自費というユニークな隊でしたが、隊員は皆自分の分をわきまえ、その能力、実力に合わせて仕事を分担、行動できた結果が登頂につながったのだと思っています。この時ありがたかったのは、大勢の男性会員のお声がかりで壮行会をしていただき、カンパ金も三十万円ほどいただきました。今でも感謝の気持ちで一杯です。

女性懇談会から二火会、山げら会へ

熊谷　一九八八年のシヴァ峰が女性懇談会としての最後の遠征となりました。

小倉　社会情勢が変わってきたんですね。なまじのお金を後援してもらって海外へ行くと、帰ってきてから面倒だし、束縛されるのは嫌だ、という若手の話を聞いた時はショックだった！

早川　旅行社のトレッキングでヒマラヤへ行けるんですからね。若い人は自由にやりたいのよ。

伏見　言葉は不自由だし、食べ物だって日本の物のほうがいいし、エアコンのない宿舎なんて若い人は耐えられないという。私なんかは寄付をいただいてやっと来たんだから、我慢しようと思うんですが、今の人は繁華街にあるホテルでなきゃって。向こうの人はお金を使わせないようにと公の宿舎を用意してくださるんですけど。七六（S51）年の合同登山でそうですよ。

三枝　その通りだと思います。今の若い人の考え方からいって。選択の幅が広くなってきているんです。

小倉　楽しみ方が違ってきてますよね。

三枝　ネパールヒマラヤでいうと、私たちの前（五〇年代）は大名登山、次の七〇年代前半までが登山道具を駆使した鉄の登山、それ以後は規模が小さく、小回りのきく少人数の短期決戦型の登山と、多様化してきましたね。八〇年代後半からはトレッキングが流行っていますし、登山スタイルの選択肢は増えているんです。だから自分の人生観にあったやり方をすればいいのだと思います。

小倉　時代とともに婦人懇談会も変わっていったのでしょう。話がちょっとそれますが、一九八三～八六（S58～61）年担当理事の梅野淑子さんは、現在中国滞在中で、今日は出席していませんが、一九八五年は山岳会の八十周年記念式典の年、女性登山

史年表作りと写真展を企画。準備委員の人たちの協力を得て、貴重な資料や記録を掘り起こしてくれました。それが基礎となって今回の座談会につながり、百年史に向かって、できるだけ正確な女性登山史年表作りをしよう、というきっかけを作ってくれました。

熊谷　一九八九年から九三年まで、結果的に女性懇談会最後の理事となった穴田さんは、関東中心になりがちな活動を全国に目を向け、女性会員の懇親山行を何回か実行しましたよね。

穴田　私が女性懇談会の幕引き（一九九三年）をした理事になるわけですが、女性懇談会の担当理事といっても、山岳会全体を考える中での立場でいなければ、と思いました。それで一九八八年に白神山域で山形、秋田支部との交流を深めるための山行を皮切りに、全国集会を一九八九年・伊吹山（京都・関西支部共催）、一九九〇年の尾瀬は自然保護をテーマにパネルディスカッション、一九九一年の秋田全国集会は白神山域の自然保護問題を地元側から聞く会としました。

早川　最後が一九九二年の奥多摩・御岳山でしたね。

穴田　女性登山史をテーマに、全国の支部女性会員に声をかけて開きました。大変意義があったと思います。でも、伝統ある山岳会とはいえ、組織も時代と共に変わって行かなければいけない部分もあるはずで、なぜ今女性だけで群れていなければならないのか？　山岳会の中で初めは女性が少なかったから、女性同士連絡を取り合って山へ行こう、というのはよく分かるんですが、今になってみると人数も多いし、女性だけで山岳会の中で固まっている意味はないと思ったんです。

早川　山岳会以外にもいろいろ女性の会もあるし、山岳会の中でも各委員会や同好会に自由に参加していますから、理事まで出して女性だけの集まりを持つ意味はなくなったのでしょうね。

穴田　だから理事になったときから、村井米子さんはじめ先輩方が山岳会の女性たちの集まりを始めてくださったことに感謝しつつ、解散した方がよいと思いました。

松永　婦人懇談会の集会を企画しても、毎回四、五人しか集まらないし、多くて十人程度ですから、やっていても空しいのよね。遠征隊なども外の人を頼まなければできないのでは意味がないと感じていました。

穴田　婦人懇談会が活気もなくだらだら続いているより、一人一人が生き生きとしてくることが望ましいと思うんです。予算があるから何かしなければ、というのは役所だけでいいんじゃない。（笑い）

　苦労して貯めたお金のこともあるから、遠征隊を出せればいいとも考えたけれど、若い人はそういうお金で行きたくないというし。ナムチャバルワの遠征に女性が参加するなら寄付してもと思ったけれど、積極的に参加したいという人もいないし。

熊谷　女性懇談会をなくさないでほしいという意見もあるようですが…。

小倉　山田二郎会長の時、私は常任評議員でしたが、組織改革の話が出てきたんです。山岳会の理事が各委員会の利益代表みたいになってしまって、組織がおかしくなっている…って。でもナムチャバルワの遠征で忙しく、組織替えはなかなか動き出さない。婦人懇談会はその組織改革を先取りし、二

火会や山げら会という同好会形式にしたわけですよね。

松永　誰かに連れていってもらうのではなく、自分で計画を立てて動くことが大切だし、望ましいことだと思うんです。

小倉　松永さんが母親代わりになって活動している二火会は、なかなか企画も新鮮で、いいムードですよね。

松永　若手が交代で企画を担当し、女性会員だけでなく男性会員も参加し、和気あいあいクラブライフを楽しんでいます。

黒沢　山げら会はクロスカントリー愛好者が集まり、自然発生的に誕生した会ですが、地方女性会員も加わり、自由に楽しく交流しています。

穴田　婦人懇談会のお金のことだけれど、時期がちょうど山研の改築とぶつかったので、山研なら高齢になった私たちも利用するから、山研に寄付するのがいいと考えました。先輩方や理事をされた方など大勢に相談して、最終的に決めたんです。

小倉　私は山研委員の立場で、女性懇談会の基金を山研に寄付いただけるのなら、設計段階でトイレ、化粧室など、広いスペースとゆったりした雰囲気にしてほしいとお願いしました。

黒沢　現在の山研はくつろげる感じで、なかなか素敵です。

小倉　最近は山岳会の各委員会、同好会などあらゆる場面で女性会員が活躍しています。婦人懇談会がなくなったら、女性から理事が出にくくなるのでは、という意見が一部の方から出たようですが、男性の意識も変わってきているのではないでしょうか。日本はまだまだ男性社会を引きずっているようですが、山岳会は男性、女性を比較的意識せずに、自然体でそれぞれの才能を生かし、人生をエンジョイできる、数少ない素晴らしい場だと思います。百周年を元気で迎えたいですね。

ともあれ次代へのバトンタッチだけはしっかりしたいものです。



出席者略歴

小倉　董子　一九五一（S26）年入会　一九六八～七〇理事、七五～七八年常務理事、八七～九〇年常任評議員　旧・後藤

三枝　礼子　一九五五（S30）年入会　一九七四年理事（代理）

熊谷とも子　一九五六（S31）年入会　女性懇談会委員　旧・谷

山口　節子　一九五六（S31）年入会　一九六五～六六、七一理事（代理）、七九～八〇年理事、八五～八六年常任評議員

早川瑠璃子　一九五八（S33）年入会　一九八七～八八年女性懇談会委員長　旧・磯崎

穴田　雪江　一九五八（S33）年入会　一九八九～九二年理事　旧・奥川

松永　康子　一九六一（S36）年入会　女性懇談会委員、二火会代表者　旧・黒沢

伏見　紀子　一九六二（S37）年入会　一九七二～七三年理事　旧・須田

黒沢　通子　一九六四（S39）年入会　女性懇談会委員　旧・川井

（カットは日本山岳会女子ガルワルヒマラヤ登山隊計画書より）

旧制浪速高校山岳部の歩み

——七年制高校の登山記録を中心として——

今西壽雄
徳永篤司

前言

旧制高校が戦後の学制改革によって廃止されたのは昭和二十五年（一九五〇年）でありますから、最後の卒業生ですら平成七年の現在ほぼ六十三歳を迎えようとしており、地球上から姿を消しつつある天然記念物的存在となりつつあります。従って今後旧制高校のこの分野での記録をまとめる事は不可能に近いと考えられます。又その一方でこれら旧制高校がわが国のアルピニズムの流れの中で果たしてきた役割は決して少ないものではありません。このような状況を考えますと、今日それらの記録を遺しておくこともあながち無駄なことではないかも知れません。

最も古い第一、第三高等学校などの創設が明治十九年（一八八六年）であり、それに続く所謂ナンバー・スクールの後で大正時代後半に松本、大阪、弘前、松江などの旧制高校が全国に設置されましたが、その他に中学と高校を結ぶ一貫教育を目指して同じ大正後半に作られた七年制高校として、東京（国立および公立）、成城、成蹊、武蔵、富山、甲南、浪速など八つの高校がありました。浪速高校（以下浪高と略す）は昭和元年（一九二六年）に尋常科（中学部）、翌昭和二年に高等科が開設され、昭和二十五年三月に最後の卒業生を新制に送ってその幕を閉めましたから、僅かに二十一期生を世に送ったにすぎない短命の高校であった訳であります。

第六高等学校山岳部部史の「終焉」の項には、「昭和二十五年三月、学制改革により第六高等学校は消える。それと共に大正十三年に発足したこの部は二十八年間の輝かしい歴史を閉じる。日本の登山界が戦後新しい時代を迎えて、山を海外に求めて幾多の遠征を行い多彩な成果を挙げ始めたとき、われわれの部は母校と運命を共にして終焉する。」と書き残されております。

このたび、山岳編集委員会より依頼されました旧制浪高山岳部の歩みと云う標題に就いては、本校の歴史は短く、開校より閉校まで僅かに二十数年であり、これまでに本欄に登場した法政、関西学院、北大などに比べますとまことにささやかな記録であることを申し添えなければなりません。

しかしながら、今にして考えますと、この七年制高校のシステムは慶応、北大予科や学習院などと共に、一つの学校で続けて登山活動を行なえる絶好の環境であったと思われます。ちなみに、甲南高校は伊藤愿、田口一郎、二郎、伊藤新一、文三氏などの存在によって、東京高校は小川登喜男、熊沢誠義氏、富山高校は藤平正夫氏、成蹊高

校は成瀬岩雄、渡辺兵力、高木正孝氏など、学習院もまた松方三郎、加藤泰安、船橋明賢氏など、そして八高は伊藤洋平氏などの人々の存在によって登山史より除外出来ない高校であると考えられます。

本文は浪高山岳部が活動を開始した所謂スポーツアルピニズムの初期以降、平たく云えばキスリング、ピッケルが背負子、杖に代わって登場した時代以後の記録を主に



第23回山岳史懇談会「旧制浪速高等学校の山」で語る今西，徳永両氏（左から2人目，3人目）

関西学生山岳連盟（以下関西学連と略す）報告より引用しました。昭和四年に創設され、翌年第一号を世に問うた関西学連報告は加盟各校の報告を全てこの報告に集めるとの不文律があったと云われています。

戦前（昭和十年頃）の登山

昭和二年の高校創設とともに旅行部として発足し、黒坂教員を部長に、古林兆一、平岡信男、前田秀雄、土肥集、田村禎造、土山以佐美、錦田直一、川北公夫などで六甲ロックガーデン、道場の不動、百丈岩での岩登り、針ノ木―鹿島槍、燕―槍、穂高合宿、赤倉、関温泉でのスキー合宿、関西学生スキー選手権大会（昭和三年＝一九二八年）への参加が始まりでした。昭和三年春には中学生であった坂谷信次、新谷五郎が大阪医大（後の阪大）の細野スキー合宿（水野祥太郎、小林義郎等）に参加し、この頃から細野のガイド丸山与兵衛とその家が根拠地となり、その後木村寿夫教官が今日まで本会の顧問となっております。

昭和五年（一九三〇年）に初めての冬山登山を行い、与兵衛をガイドに盛岡英治郎、坂谷、新谷が白馬岳に登っており、昭和七年より夏の荒沢（坂谷、小林勘治郎、盛岡）、翌八年夏よりカクネ里（近藤彰、中村英碩、小林勘、今西壽雄、ガイド丸山繁）、荒沢（盛岡、河原章、小林信治ＯＢ）の試登が開始されています。また、昭和七年（一九三二年）細野村が黒菱小屋を建設した際、関西大学、大阪薬専、大阪高校に混じって浪高も寄附に応じています。同じ頃、遠見小屋の建設には関西学院が下川又寛を援助しています。

今西壽雄が浪速高校に入学した昭和九年（一九三四年）、旅行部は山岳スキー部と改称されましたがその頃、登山界は大学山岳部を中心としたアルピニズムの黎明期を迎えようとしていました。関西学連の主な加盟校は京大、三高、同志社、大阪商大、大阪医大、大高、大阪薬専、神戸商大、甲南高校、八高、浪高、富山高校などでありました。今西は市岡中学時代には登山部に所属しなかったために近郊の山歩き位の経験しかなく、また浪高に入学した後も柔道の試合に駆り出されたりして山岳スキー部とかけ持ちの状態でした。当時の登山部は



旧制浪速高校山岳部の集まりで（昭和五十六年頃）
前列左より徳永篤司、平岡信夫、古林兆一、木村寿夫、雫石鑛吉、新谷五郎、小林勘次郎、後列左から二人目より田島汎、丸山庄司、今西壽雄、谷口千之、吉田達三、沢井一治、伊藤俊夫の各氏（於　徳永奥地宅）

夏山はあっても冬期はスキー合宿が主で、神鍋の関西学生スキー大会などに駆り出されていて、なかなか本格的に登山に取り組むと云う状態ではありませんでした。しかし彼を取り囲む環境は、わが国に於けるアルピニズムの台頭と関西学連の競合し且つ親睦的な気運を背景にしていました。彼にとって幸運であったのは浪高山岳部に既に在籍していて登山歴も古かった盛岡英治郎（昭六年理甲卒―阪大工―労働省、故人）、中村英碩（昭九年文乙卒―京大農―農林省―東京農大教授、故人）の存在でありました。この二人は七年制高校を優に十年近くかけると云う、正に学問を捨てて山に打ち込んだ人として高名でありました。

盛岡は昭和七年（一九三二年）十二月に与兵衛を連れて白馬大雪渓からの白馬登頂に成功し、また同八年三月、中村、与兵衛と共に杓子主稜を完登し、昭和十年（一九三五年）春には与兵衛、丸山静雄を連れ、白馬大雪渓を経て黒部側の清水本谷を往復しており（岳連報告第六号）、この記録は、昭和五年（一九三〇年）冬に立教の堀田彌一氏らがガイド松沢嘉一郎らと行った白馬―祖母谷と共に、信州と黒部を結ぶ初めてのルートであると記録されています。彼は白馬周辺での多くのパイオニアワークの後、同志社の岩田市之助、入江保太らと共に小長白頭山、金剛山、赴戦高原（岳連報告第七号）に遠征し、阪大に進んでも独自の山行を続けました。中村が組織の力で山行をすると云うタイプであったのに比べると、グループと云うよりは個人的な山行を多く行いました。しかし最初に荒沢奥壁に着目し、浪高山岳部を荒沢に向かわせたのは彼でした。

中村は昭和八年（一九三三年）春、盛岡との杓子主稜のあと、大川沢源流（岳連報告第六号）、春の鹿島槍北壁（岳連報告第六号）、その後、京大としての内蒙古（岳連報告第八号）など、多くの重要な山行を今西とのペアで行なっています。彼の永年の夢であったカクネ里奥壁の積雪期初登は今西の能力に目を付けた彼が今西を積極的に山に導いて達成されたものと思われますが、後に阪大、京大が達成した春雪崩を使っての黒部十字峡谷の横断と云う計画は彼の長年の夢であり、ユニークな発想に依るも

のでした。

今西と同じ頃、多くの仲間が山岳部に入りました。同級生の吉田達三、谷口千之、そして小林勘治郎、新谷五郎、河原章と云った人たちでした。

学連報告などによるこの時代の記録は次のとおりであります。

昭和七年（一九三二年）冬　白馬大雪渓　…盛岡、小林信、与兵衛

〃八年（一九三三年）春　杓子主稜…盛岡、中村、与兵衛

〃　〃　春　杓子沢…盛岡、与兵衛

〃　〃　春　白馬鑓南稜　…盛岡、与兵衛

昭和九年（一九三四年）夏　白馬沢より白馬岳　…中村、近藤

〃　〃　夏　荒沢試登…中村、今西、他に二十人以上北アルプス縦走

〃　〃　春　小蓮華尾根　…近藤、小林勘、今西、丸山静雄

〃　〃　春　杓子双子尾根　…盛岡、与兵衛

〃　〃　冬　白馬大雪渓　…盛岡、今西、与兵衛

昭和十年（一九三五年）春　カクネ奥壁初登　…中村、今西（谷口、吉田）

〃　〃　夏　荒沢奥壁の初登、南稜―今西、木村三郎　北稜―小林勘（OB）、松井啓一、他に大島直義、佐谷健吉、七里清二、松林一民、小林信次（OB）、丸山政治（ガイド）

昭和十一年（一九三六年）春　カクネ里の遭難（後記）

カクネ里の遭難とその後

昭和十一年（一九三六年）三月、カクネ里より天狗尾根を登行中の浪高パーティーの内、松井啓一、松林一民の両名が転落し、松井は幸い一命を取り止めましたが松林は遭難の翌日に死亡しました。メンバーは両名のほか、佐谷健吉、七里清二、小野一夫の計五名で、救援パーティーは今西、小林義郎、木村三郎、滝一郎、木村教官でした。この時遠見―カクネ里に展開していた関西学院のパーティー（リーダー水野）は計画を中止して救援に駆けつけ、同じ時荒沢を目指してカクネにいた東京商大の小谷部全助氏のパーティーは事故の経過を見て計画を続行したと記録されております。

山岳部の全盛期と遭難は皮肉にも表裏一体の因果関係を持つと云われています。昭和十年前後の盛岡、中村、今西などの鹿島槍、荒沢の登山は時と処を得て浪高史上一つの全盛期を迎えることは出来ましたが、当時の部員の個々の山歴や高校生の年齢、体力などを考えると、些か背伸びの感無きにしも非ずと反省されています。

しかしカクネ里遭難の後、昭和十三年（一九三八年）の冬には中村OBを含む松嶋与三、大原英治郎、前田庸、三宅俊夫ら六名のパーティーが大遠見BCよりの五竜岳の往復を行い、つづいて同十四年（一九三九年）春よりは中村OBの指導の下に春雪崩を使っての黒部十字峡、白竜峡の横断と云う大計画を目指し、黒部別山を中心とする偵察行（中村、大島明義、前田、三宅）、同八月には棒小屋沢、黒部川合流点の偵察行（大島、前田、三宅）、翌十五年（一九四〇年）春には棒小屋沢の稜線上にキャンプを張って十字峡への雪崩の観測を行なっ

ています（中村、大島、前田、三宅）。この黒部十字峡の横断計画は、敗戦直後、細野の与兵衛宅にて中村より詳しい説明を受けた阪大山岳部によって昭和三十一年春に達成されています（「山岳」第五十三年―一九五八年）。

同じ頃、関西学院は早月尾根（昭和十二年＝一九三七年＝十二月）で、松本高校は前穂東壁（昭和十五年＝一九四〇年＝三月）で、北大はペテガリ岳（昭和十四年十二月）で大きな遭難を起こしていますが、浪高を含むこれら学校山岳部のその後の後退は、しかし時代の戦時体制への傾斜と無関係ではありませんでした。

この頃三高―京大を軸とする朝鮮、満蒙、樺太地域への遠征が始まり、中村、今西は京大隊として内蒙古（昭和十三年＝一九三八年＝七月…関西学連報告第八号）、盛岡は同志社大の入江保太と小長白山脈、金剛山（関西学連報告第七号）へ、国内では佐谷が昭和十五年三月、伊藤新三（甲南ＯＢ）と荒沢南稜の初登に成功しています。

鈴木信、中村、今西の共著で書かれている関西岳連報告第八号「国外遠征―京大」の前文は戦後の京都大学学士山岳会の行動を考える上で興味深いので抄録します。

「（前略）私達が何故山の無い蒙古まで出かけたか？　私達の仲間は全て登山家であったが、登山の傍ら遠征に興味を持っており、内地のバリエーションに飽き足りなくなり千島、樺太そして冬の白頭山へと進むにつれ次第に登山的色彩が少なくなり遠征のたびに登山への関心が無くなってしまった。（中略）探検と登山は決して近似的なものでは無い、しかし共に自然を対象としている点に共通点を見出す事が出来る。登山において鍛練された体験を武器として探検にのぞむ事の有利な点は論を待たない。（後略）」

昭和十八年（一九四三年）七月、学徒出陣令によって学生達は次々に戦場に駆り出され、関西学連も解散の憂き目に遭いました。今西、新谷は満州に出征して敗戦を迎え三年に及ぶシベリアでの抑留生活を余儀なくされ、滝は南洋群島ミレー島にて敗戦を迎え、戦艦大和と運命を共にした弟英男とともに七里兄弟は戦死し、佐谷は海軍航空隊において終戦を迎えています。

戦時中の登山部のこと

浪高のキャンパスには何時の頃からかは判らないけれども一戸建ての山小屋風の部室があり、校舎の建つ丘の名に因んで待兼山荘と呼ばれていました。そのルームには畳十帖ほどの囲炉裏を囲む土間と八帖敷き位の和室があり、焚火の匂いに混じってテントやキスリングのかおりが立ちこめていました。放課後になると高校生部員に混じって尋常科の部員もこの小屋に集まり、グループ毎に近くの丘や箕面の滝辺りまでクロスカントリーに出かけたり、ストックを両手に校庭を走ったりしていました。土曜ともなりますと倉庫から装備を取り出して、幾つものパーティーが比良や鈴鹿、六甲などに出かけて行き、月曜からはその山行の話に花が咲くと云うのが日常になっていました。

部員の行動は極めて自由で、夏山しか行かない者、近畿の山だけを専門に歩く者、スキー専門の部員も結構いて、岩登りや冬山などの専門的な話は余り巾を利かさない雰囲気でした。

徳永が尋常科（中学部）に入学した昭和十五年当時の課外活動には登山部と云うのは無く、スキーと夏の水泳がセットされていましたが、その後夏山を始めるようになってこの規則は立ち消えとなり、高等科に混じって放課後はクロスカントリーやスキー競技の為の訓練、夏冬の休暇にはスキー合宿と夏山登山が行われていました。毎年年末の学期末テストが終わると全学を挙げてのスキー合宿が細野で行われ、総勢八十人を越える生徒が自由参加し、学校側は自称スキーマニアの広島定男教官、山岳スキー部担当の雫石鉱吉（尋）、木村教官（高）を派遣し、夜は補習授業も行うと云う半ば公式行事と云う扱いでした。スキー合宿が終わってから部の冬山訓練が始まり、前後して東京、大阪から集まって来たOB連が現役と一緒に八方尾根に出かけて雪営や登山をすると云う習慣が終戦直前の学徒出陣まで続けられました。リーダーが部員をしごこうと思っても大学生の先輩が荷物を持ってやったり、さっさと雪営を手伝ってしまうので部内の空気は至極穏やかで自由でありました。春にも小規模のスキー合宿があり、その時に小遠見や猿倉で雪洞訓練などが行われました。

昭和十五年の暮れ、快晴に恵まれて唐松岳に登った一行七名（七里秀夫、沢井一治、浦野尚三、富田正典、山林一、家田千尋、木村教官）が豪雪のため食料、装備のない六日間を小屋で過ごし、尋常科より参加した山林、家田の二名は新学期の開始に遅れるといういわゆる唐松籠城事件が起こったのもこの頃でした。

初めて冬の細野を訪れたときのことを徳永は「細野スキークラブ六十年史」に次のように書いています。「昭和十六年の暮、尋常科の一行に混って一番列車を待っていた信濃大町のフォームは吹き抜ける風が肌を刺し、雪も無いのにこの寒さではと云う不安に駆られた。列車が青木湖の峠を越えると窓外は忽ち白一色の世界に変り、やがて眼の前にまぶしいばかりの銀世界が展り広げられた。黒煙を吐き、あえぎ乍ら登る列車が雪に覆われた針葉樹の山すそを回ると、いきなり朝日に輝く白銀の後立山の峰々が姿を現わした。

それは生れて始めて見る鮮やかな光景であった。信濃四谷駅には『白馬登山口』と書かれた標識が立っていて、丸山与兵衛、勇など、その後の長い付き合いの始まった細野村の人々との出会いがあり、そしてその何年もの後に悪戦苦闘する事になる白馬岳の主稜、三合尾根、平川沢二本松尾根や鹿島槍がずらりと並んで出迎えていた。駅から細野への長い雪道―その道を一体何度通ったことだろう。細野への途で村人に〝お帰り〟と云われて嬉しくなったこと、豪雪で不通になったことを駅で知らされ、吹雪の中をリングワンダーしながら死にもの狂いで引き返した時のこと、連日の降雪に計画を諦め、駅まで引き揚げてからの好天にあわてて引き返し、細野を素通りしてそのまま完登した白馬主稜のことなど、私の記憶に残る細野は全て雪深い昔の夢であった。」

［当時の記録］

昭和十六年（一九四一年）　夏　尋常科

八方尾根―カクネ里、洞窟尾根など　雫石教官、家田、徳永、加藤幹太、小川八郎、ガイド丸山宗夫。高等科　黒部上廊下　前田、三宅、大原、小島、中西、沢井

〃　〃　冬　スキー
合宿の後八方尾根にて雪営訓練、神鍋スキー競技
昭和十七年（一九四二年）夏　尋常科
白馬―五竜　家田、徳永、加藤。高等科
鳥帽子―蔵助平―剣　沢井、渡辺（喜）、渡辺（修）、伊藤
〃　〃　冬　スキー
合宿の後八方尾根にて雪営訓練、神鍋スキー競技
昭和十八年（一九四三年）春　遠見―唐松（高、尋合同）沢井、渡辺、伊藤、山林、家田、ＯＢ七里、中西
〃　〃　夏　北ア縦走　高等科のみ
昭和十九年（一九四四年）冬　八方尾根キャンプ　高等科計七名
昭和二十年（一九四五年）春　黒菱小屋合宿　家田、徳永、加藤
昭和十六年（一九四一年）より修業年限の短縮により高校三年が二年半、次いで二年となり、またインターハイの禁止や、食料、旅行制限のため、この頃より主に個人的な山行にならざるを得なかったけれども敗戦の年の夏、冬を除いて合宿は続行されました。

敗戦直後の部活動

敗戦後の混乱期にかかわらず部活動が停滞なく続行されたのは、修業年限が再び三年に延長されたこと、十名近くの部員が集まったこと、それに復員してきた佐谷健吉ＯＢとのコンタクトが取れたこと等が幸いしました。

佐谷は積雪期の荒沢南稜の完登の後、東大の千島、カムチャツカなどの計画に関与し、明日にもカルカッタ行きのチケットを手に入れる状態の中で戦争になったせいか復員して直ぐにＪＡＣ関西支部や、「岳人」の編集の仕事に進んで参加していました。浪高の戦後の登山活動の模様は「山岳」第四九年（一九五四年）の〝戦後十年の歩み―大阪大学山岳部〟に次のように述べられていますので追加、抜粋します。

「浪高山岳部を再建する手始めとして、昭和二十一年十月、戦没者ＯＢ慰霊祭を遠見尾根にて行いました。私達は戦争に依って多くのものを失いました。それらの中には山や、山に依って結ばれた友情や、そしてそれまで自分を支えていた人生観や世界観と云ったものまで含まれていました。戦没した人々は遠い外地にあって、かつての日、魂を奪われたこの安曇野を望む地に骨を埋めることを云い遺して倒れました。われわれは先ずそれらの人々の霊を慰める事より始めなければなりません。昭和二十一年十月の暮れ、その日東西より集った新旧部員達は、折りから朱実の真っ赤に色づいた懐かしい遠見尾根の石ころ道を辿りました。荒れ果てた小屋の上には鮮かな秋の空が広がっていました。戦後その時まで、私達はこのような美しい空や山を見ることを忘れていました。

その夜、部を再建する為の討議が行われました。幸いにも装備と部員は辛うじて温存することが出来ました。これを足がかりにするにしても、しかし敗戦によって都会も農村も登山環境は全て一変していました。予想し得る様々な摩擦を避け、不時の事故に対応出来、しかも交通、食料などの難問に対処するための根拠地ということになると自ずから制限があり、先輩達の残し

てくれた経験の上に乗ると云う事から当然のように『後立山連峰及びその東面』と云う目標が導かれました。ここならば自分の庭の如く動く自信がありました。

慰霊祭の翌朝、私達は新しい希望に燃えて平川沢を遡行し、新雪の二本松尾根を登りました（註一）。それまでにも二、三の山行はありましたが、戦後ずっと漫然とした山行を繰り返していた私たちに登山の目的意識を与えてくれたのはこの時からでした。しかしその年の冬山は荒天の猿倉台地を連日連夜に亘って苦闘しながら与えられた只一回のチャンスを逃すという惨憺たる結果に終りました（佐谷ＯＢ、徳永、家田、加藤、細見一仁、竹中淳、小沢逞夫、築山善己、田島凡、神川喜代男、森太郎など計十名）。無雪期には穂高周辺にも幾度かの山行を試みました（註二）。

（註一）　平川沢二本松尾根の戦後初登　昭和二十一年（一九四六年）十月　佐谷ＯＢ、徳永、家田、加藤。

（註二）　明神最南峰東壁、下又白奥壁の完登　昭和二十一年（一九四六年）夏及び翌昭和二十二年（一九四七年）夏　佐谷ＯＢ、徳永、家田、加藤。中又白奥壁の初登、昭和二十三年（一九四八年）十月　佐谷ＯＢ、松丸秀夫（弘前高校ＯＢ）、徳永。

昭和二十二年（一九四七年）十二月末、鹿島槍北壁を目指して大遠見にテントを伸ばしたまま、遠見小屋での停滞を余儀なくされていた私達は漸くあせり始めていました。同じ頃早稲田はベテガリ、明治は畳岩、そしてこの同じ大遠見には関西学院が計画を進めていました。マンパワーを戦力として、学生山岳界には極地法の風が吹き荒れていました。元来ポーラーシステムと云い、ラッシュアタックと云い、異質的な登山環境に依って採用されるべきこの二つの方法論が対立的に取り上げられる理由は無いと私達は考えていました。しかし、昭和二十三年（一九四八年）十一月に富士山でＪＡＣの企画で行われた関東、関西学連合同登山での討論では、この二つの方法論を巡って議論が伯仲しました。関東からは関根、谷口、村山、松丸氏など、関西からは岸田、舟橋氏と云った錚々たる方々が参加し、関西側の世話人は佐谷、徳永でした。

こうした情勢のなかでの厳冬期の鹿島槍北壁の成功（註三）は舞台を浪高山岳部の原点に戻しての計画であったということと、遠見小屋より北壁、荒沢を経て一気に鹿島村に帰投する連続六十時間に及ぶラッシュアタックの優位性を実証出来たと云う点で意義を持つものでありました。この余勢を駆って、続く春には長年の懸案の一つであった白馬三合尾根の積雪期初登に成功しました（註四）。しかし浪高山岳部再建の為に戦後に計画された後立山連峰とその東面と云う課題は、学制改革による旧制高校の廃止に伴ってここに終わりを告げ、白馬主稜、後立山の縦走、黒部渓谷の横断などの懸案は後を継いだ大阪大学山岳部の手に委ねることになりました。

大阪大学山岳部は昭和二十四年、ＪＡＣ関西支部長であった工学部教授の篠田軍治を中心に徳永、家田、加藤、細見、田島などの浪高山岳部の残党や、大島輝夫（東京高校）、大久保勝己（松本高校）、松久博（松江高校）などが集まり、それまで各学部毎に行なわれていた山岳部を初めて全学統一して組織されました。

（註三）　鹿島槍北壁　昭和二十三年（一

九四八年）一月　メンバー佐谷、徳永、サポート、竹中、築山、森。

（註四）白馬三合尾根　昭和二十三年三月　メンバー佐谷、中西久雄、徳永、サポート神川、築山、竹中、森、中島。」

（以上徳永記）

白馬三合尾根のあと、佐谷は自衛隊に転出し、入れかわりに今西がシベリアから帰って来ました。不動岩での懇親会に現われた今西は岩登りをしようと云い出して皆を驚かせましたが、その翌年ＡＡＣＫのアンナプルナ登山隊の隊長を務めて更に皆を驚かせました。そして一九五六年のＪＡＣマナスル第三次隊には偶然にも今西と徳永が共に参加しました。

この記録は二十四年と云う余りにも短かった浪高と云う一つの旧制高校山岳部を弔い、また高校時代と変わらぬ愛情を持ち続けながら若くして山や戦場や病に倒れた方々への鎮魂碑であり、このささやかな報告はその為に書かれました。

（本稿は一九九四年十二月八日開催された第二十三回山岳史懇談会「旧制浪速高等学校の山」での講演をもとに今西・徳永両氏に執筆をいただいたものです。）



行雲とともに—高畑棟材伝—（下）

浅野孝一

霧の旅会

高畑の年譜を見ながら二十代から三十代にかけての行動を推測してみる。

高畑が「霧の旅会」に入会したのは、大正十五年（一九二六）、岩井三郎の紹介であった。神谷恭と同時の入会であった。会員ナンバーは神谷が九一番、高畑は九二番であった。

高畑三十歳の時である。

「霧の旅会」は大正八年（一九一九）五月東京府立工芸学校教諭松井幹雄によって創立された山岳会である。創立にかかわったのは山崎金次郎、田澤昌介、田尻春男、松井の四名であった。機関誌『霧の旅』は大正八年（一九一九）創刊号発行以来、最終号第五十四号にいたるまで毎年発行された。

霧の旅会の会報『霧の旅』第一年第一号が発行されたのは大正八年（一九一九）五月であった。

大正九年（一九二〇）三月二十八日発行の『霧の旅』第四号になると会員も多くなり、中村正五郎、小池新二、久野政雄、石川成三、さらに鶴岡元之助、松本善二、神奈川甚吉、加藤留五郎、岩井三郎、山崎金次郎、吉原貞一、上原一挙、山本復一郎、定方金蔵、北出箕吉、金子龍次、田口三郎助、吹原不二雄、大町周一郎、岩科小一郎、加藤秀夫、中村介一、野口末延等が入会し、岩井三郎の紹介で大正十五年（一九二六）神谷恭、高畑棟材が入会をする。

それと前後して尾崎喜八、荒井道太郎、河田楨等が入会した。又日本山岳会の長老木暮理太郎、武田久吉を顧問に迎え、ますます霧の旅会は発展していった。

ところでそれまでの日本の山岳界を概観してみる。日本山岳会が創立されたのは、明治三十八年（一九〇五）十月十四日、翌年四月山岳会の機関誌『山岳』が創刊された。松井幹雄は大正八年（一九



佐藤ナツ
(「墓畔の草」より)



高畑棟材
(「行雲とともに」より)

一九）一月入会した。会員番号は六九八番であった。

明治末期より大正期には各地に社会人による山岳団体の誕生を見るようになった。即ち明治四十年（一九〇七）越中山岳会、明治四十一年（一九〇八）に飛騨山岳会、同四十二年（一九〇九）十二月北尾鐐之助を中心に名古屋愛山会、同四十三年（一九一〇）十一月塚本永堯などにより神戸草鞋会(のちの関西徒歩会)、同四十四年（一九一一）夏には河野齢蔵、矢沢米三郎、八木貞助等によって信濃山岳会、大正二年（一九一三）山梨山岳会、同三年（一九一四）日本アルコウ会、同八年（一九一九）に霧の旅会、同十一年（一九二二）本多月光によって野歩路会等が創立された。

明治、大正期を通じての日本山岳会の発展は、南、北のアルプスの高山岳を中心に行なわれ、田部重治、木暮理太郎、小島烏水、冠松次郎等によって高峰が次々に登られていった。それ等の登山には明治初期に来日した外国人、ガウランド、W・ウェストン等の名前を思い出す。

明治期の日本の登山は、まさに未知の登山と探検の時代であった。その当時の日本アルプス—当時の言葉で云えば飛騨山脈、木曽山脈、赤石山脈の峰々は登りつくされ、峰から峰への縦走、冬期登山、そして大正期に移入されたアルピニズムの旗のもとに、近代登山思潮が大学山岳部等の若人によって実行されつつあり、登山行為は経済的にめぐまれた人達による長期間に渉るものであったから、一般大衆の実行は仲々できぬものであった。

中でも木暮理太郎、田部重治による奥秩父縦走などは高山岳から中級山岳への移行、武田久吉の甲武相、丹沢山塊の登山は東京近郊

の山々への低山逍遙の指向の登山を考えさせるものがあり、ようやく登山が一般大衆向きなものになってきた。

『山岳』を編集していた、木暮理太郎によって、「奥上州号」、「尾瀬号」、「秩父号」、「奥上州第二号」の特集が発行され、大島亮吉、高畑棟材をはじめ多くの新人の書き手による文章が発表された。

この流行によって発展したのは関東地方においては『霧の旅』『山嶺』『霧藻』の会報を発表した山岳会であった。

昭和四十八年（一九七三）「小島烏水、木暮理太郎、岡野金次郎、生誕百年記念展」での目録『近代登山の先駆者たち』の小冊子の中では「木暮先生と霧の旅」と題して山崎金次郎は

「……、霧の旅会が創立されたのは、大正八年の春でありまして、それぞれ専門の職域に活躍している、若い自然愛好の同志が相まって、低山散策、浅谷跋渉の紀行物語りなどを話し合うグループを作りました。当時、築地の歌舞伎座の筋向う、万年橋の袂にありました東京府立工芸学校（震災後、東京劇場となりました）を根拠地として、同校へ勤めておりました故松井幹雄君を中心に、これも故人になりました田沢昌介、田尻春男の両君に私の四人が発起人となり、霧の旅会を結成、同時に松本善二氏（現日本山岳会名誉会員）、石川孟範（故人）、加藤留五郎（故人）氏などが馳せ参じて幹事となり、会誌『霧の旅』を発刊することになり、また毎秋、同校講堂にて大会および講演会を催すことになりました。

そして、日本山岳会の大先輩の武田久吉博士を名誉会員にお願いして、いろいろ御指導を仰ぎ、次第に会員が増加してまいりました時、例の大震災に遭い、同校も罹災して水道橋の前に移転しましたので、自然に大会も同所で行うようになりました。」

と記している。

そして会は会員の文筆活動により発展してゆくのであった。会員河田楨は『一日二日山の旅』を発刊した。これは大正十二年（一九二三）五月に初版が出て以来毎年増冊を重ねるベストセラーとなり、さらにその続編と云うべき『静かなる山の旅』が出版された。いずれにしても、この二冊の本が都会に住む山岳愛好家に与えた影響は多大なものがあった。

その様な時に『大菩薩連嶺』が自彊館書店より発行された。これは『霧の旅』会報第十七・十八・十九号の大菩薩特集号が原本で、松井幹雄編著となっている。内容については会報との間にいくつかの相違点があるが、当時の登山動向をうかがい知ることができる。登山界は高山指向から低山に移ってきたのであった。

その松井が昭和八年（一九三三）六月一日突然死去する。死因は急性盲腸炎であった。松井は明治三十年（一八九七）七月一日に生れ、東京府立工芸学校卒業後、大正六年（一九一七）同校の教諭となり、同八年（一九一九）霧の旅会創立に参加し、昭和七年（一九三二）日本山岳会の幹事となった。

会報『霧の旅』は、第一年第一号はわずか六冊のみであった。会員が増加するにともない会報のバックナンバーの希望もふえてきたので昭和三年（一九二八）に一・二号の再版が作られた。

会報の頁数や体裁は異なっているが、第十二号から会報の大きさは横巾一五・七糎、縦二二・八糎のいわゆるA5版となり、頁数も

約八十頁になった。表紙も第十三年第三十七号より題字は尾崎喜八、図案は塚本閑治となりこのスタイルは、最終刊の第十九年第五十四号「木暮先生追悼」号に至るまで変化はなかった。

「木暮先生追悼」号は総頁数一八二頁、最終刊にふさわしい大冊である。巻末の会員名簿には名誉会員武田久吉、発起人の山崎金次郎、田澤昌介、田尻春男、最後は会員番号一五四番の宮本三郎、現会員三十九名の氏名、住所、勤務先が掲載されている。昭和十九年（一九四四）太平洋戦争も末期、日本の敗戦も眼前にせまり、山登りどころではなく、物資不足の時によくもかかる大冊の会報が出来たものと感心させられる。

会員名簿の中に当然存在しなくてはならぬ高畑棟材の名が無いのは残念である。この頃高畑はすでに肺結核のため病院に入院していた事が、高力幸太郎宛ての便りによって判明している。

霧の旅会の事務所は松井が死去するまでは、松井の自宅の東京市外杉並町馬橋四三七番地であったが、死去後東京市淀橋区諏訪町一七七番地野口末延方に移り、最終号発行時には、東京都四谷区坂町一六番地柴山登茂次方になっている。

実際上の霧の旅会の活動は第十九年第五十三号、昭和十四年（一九三九）七月をもって終っている。その号に「時代と共に」を書いた柴山登茂次は

「霧の旅が創立されてから幾年になることだらうと思って指折ってみた。今年―即ち昭和十四年三月を以て満二十年になってゐる。当時紅顔の美青年いまはもう初老に達してゐる譯である。さぞかし感慨深いものがあらうと思ふ。抑も霧の旅の誕生を見た大正八年と謂へば我が山岳界は既に探険時代を脱し漸く一般的に登山が親しまれて来た時であるが、然し、今日の如く登山が所謂大衆的となるまでは登山者の数も極めて少なく、其の登山知識も甚だ低かった。其頃霧の旅は登山者から殆んど顧みられてゐなかった低山趣味を提唱し、其の普及を計ると共に登山知識の涵養に之努めたものである。霧の旅が我が山岳界に与へた感化の甚だ大であったことは当時を知る登山者は必ずや認めてゐることと思ふ。

今や山岳趣味は各地方に燎原の火の如く燃えひろがり蕩々として止るところを知らぬ隆生を見た。而してその登山思潮に於ても昔日のそれとは余程変って来たかに感取される。その中には歓ぶべき現象もあれば、悲しむべき事実も認められる。が兎もあれ、霧の旅は過去二十年間に為すべき事は為して来た。而してその使命は充分に果し得てゐると信ずる。最近霧の旅の不振を嘲ふ者あるも夫等の人は本会の歴史を知らず、事理を解せぬが為と思ふ。

……がそれも之も時代である。せめては若き日の愉しくも又懐しい思ひ出に友よしばし憩うではないか　了」

そして霧の旅会会員図書刊行目録と霧の旅総目録自第一年第一号至第十九年第五十三号の目次が記載されている。

高畑と霧の旅会の関係について考えてみる。高畑が会報『霧の旅』に文章を発表したのは、第八年第二十三号からで「奈良井雑記㈠」、第九年第二十五号「第二山の湯特集」号に「山の湯の印象㈡濁川温泉」。第九年第二十六号に「奈良井雑記㈡」。第十年第二十八号「十年記念特輯号」に木曽殿越と奈良井川水源地の短文とスケッチ。第

十一年第三十一号に「春の愛鷹連山」。第十一年第三十三号に「むねたか随筆」。第十二年第三十五号に「タウゲの語原に就て」等を寄稿をしており、それ等の文章は著書『山を行く』や『行雲とともに』に再録されている。

高畑は昭和元年（一九二六）六月五日、細川侯能舞台控室での霧の旅会講演会に出席、昭和二年（一九二七）七月二十二日病気のため安田銀行は休職となり、十月二十八日退職する。十一月には病気療養のため湯ケ原温泉富士屋旅館に滞在した。昭和五年（一九三〇）一月十二日幹事会で幹事に推挙され、この年六月『山を行く』が出版される。そして山岳雑誌『山小屋』の編集主幹になり、幹事を辞任する。

『霧の旅』は第十五年四十三号から荒井道太郎が編輯し、高畑は陣場山麓の二色鉱泉への滞在が始まる。この事は昭和十年（一九三五）十二月十七日付高力幸太郎宛ての絵ハガキによって知ることができる。そしてこの年高畑棟材、長尾宏也の二名が霧の旅会から除籍される。共に山を通じての友人どうし、どんな思いで荒井は二名に通知を出したのであろうか。勿論非は二名にあったと考えられる。高畑について考えてみると、その経歴から一個所に定住できぬ高畑個人の性格的欠陥がそうさせたものと推測するしかない。

しかし、霧の旅会と共に歩んだ高畑の足跡は今日にも続いているものと私は考えてみたい。

『山を行く』

高畑棟材の初めての著書は『山を行く』である。昭和五年（一九三〇）六月十二日印刷、同年六月十五日発行となっている。発行所は東京市麹町区大手町永楽ビル朋文堂である。『山を行く』は朋文堂にとって初めての刊行本であった。

当時大衆向けの案内書としては大正十三年（一九二四）自彊館書店より発行された河田槙著『一日二日山の旅』があった。河田槙は高畑と共に同時代を歩んだ人で、二人共霧の旅会に属していた。

河田は明治二十三年（一八九〇）三月三十日、東京市牛込区袋町に地理学者河田黙（タカシ）の長男として生れた。高畑より三年はやく生を享けている。早稲田実業学校を卒業して三菱銀行に勤務した。大正十年（一九二一）霧の旅会に入会している。高畑と二冊の共著を出版している。昭和四十六年（一九七一）八月九日死去、八十二歳であった。

河田は我が国に於ける低山趣味、現在の言葉でいう所のハイキングの教祖ということもできる。その低山趣味を広くわかりやすく、実行し山に於ける考証、古文書地誌等を加味して紀行文を発表したのは高畑の功績という事が考えられる。河田の父河田黙は明治初期内務省地理局に勤務し、関東周辺の山岳を調査し『武蔵通志』等をあらわした。

『山を行く』は菊版五〇六頁に渉る大冊で、定価は二円五十銭であった。その自序には

「やむにやまれぬ心から聖地巡礼の旅を重ねゆく人達の、あの敬虔・眞摯なる心をわが心とし、わが愛する山、わが愛する渓谷を逍ひあるくこと茲に二十餘年。限りなき山への思慕は、七歳の正月父に連れられ初めて伊豆國日金山の頂に立ちし時より今に至

るまで、少しも變るところがないのである。……巻中の數篇は嘗て『山岳』『霧の旅』『霧藻』『道陸神』（註1）等に掲げたものであるが、今茲に訂補再録するにあたり、著者の意の存するところを諒とせられ、大いなる好意を示されし日本山岳會、霧の旅會、霧藻會（安田山岳部）、横濱徒歩々々會に対し、深く感謝の意を表する。……快く秘藏の寫眞を貸與せられし吹原不二雄氏、岩井三郎氏、神谷恭氏、木暮理太郎氏、松井幹雄氏、武田久吉氏、辻本滿丸氏、鳥山悌成氏、山口成一氏、日原川上流の山澤名に就いて懇切に示教せられし長谷川長次郎氏、……尚ほまた常に助言を賜り且つ貴重な資料を恵與せられし親友神谷恭氏に對しては、特に厚く感謝の意を表するものである」

と切々とした謝辞をのべている。

田部重治は序において

「友人、高畑君は其の意味に於て、珍らしい登山家である。君の登山は山や自然を其自身のために愛する趣味から出立し、二十年の歴史を持ってゐるにも拘らず、君の山に對する趣味は、益々深まらうとしてゐる。君の得意な方面は、前人未踏の地を蹈み、それに關する新しい記録を聲高く世に布告するたぐひのものでなくて、寧ろ豊かな情操を以て、趣味の山を面白く展開するところにも意外の美を見出し、そこに無上の感興を覺ゆるたぐひのものである。眞に山を愛する人間に取って興味深きは、斯くの如き態度と斯くの如き態度から生じた文章とでなければならない。」

と書く。又木暮理太郎は

「山に親しむ人に取りては、山の記文を読むことは、作者の誰たるを問はず、山の何山たるに論なく既知の人にはそれが過去の懐しい憶ひ出を語るよき話し相手となり、未知の人には希望に輝く未來の憧れの旅へのよき道連れとなるのが常であろうと思ふ。實際私の経験では、今迄に可なり多くの人の記文を耽讀したのであるが、失望したことは未だ一度もないといふてよい。勿論中には読んで厭はしく感じた二三のものもあるにはあったけれども、それらは總て作者の體驗に基づいたものではなく、所謂糊と鋏との産物であった為に外ならないのである。私は主観の高調された作に依りて、作者のみが知る主観的環境へグングン引張られて行くことは、たとへ夫が自分には寧ろ苦痛を感ぜしむるものであっても、喜んで追随することを辭しないと共に、また作者の客観から導かれて自由に到達した自己の主観的環境を楽しむことも、決して平凡とは思はないのである。

友人高畑君は山に親しむ人であり、又趣味の豊かな人である。其著『山を行く』一巻は、恐らく世の同好者を共鳴せしむるに足るものがあらう。少くとも私は、私と同じやうな考を抱かれる山岳愛好家の好侶伴たることを信じて疑はない。」

と記している。この両大家はそれぞれの序に於いてよく高畑の特徴をとらえているということができる。

『山を行く』を読んでみて私は次の様なことを感じている。即ちこの本の持つ不思議さというか当時としては珍しい山々の事が語られていることであると思う。紀行文というには余りにも内容は濃い。大島亮吉や尾崎喜八の文章のように山岳美をうたう所はないが、きわめて土俗的な素朴さを読みとることができる。勿論高畑に外国の

山岳の知識がなかったということではない。高畑の紀行文の底辺を流れている近代登山に対する思惟を見落すことはできない。その点をおさえおさえた所に高畑の山歩きの考え方を読みとることができる。いうなれば木暮理太郎の思想の流れが、霧の旅会をパイプとして高畑等の体に伝わったのではないかと思われる。ここで高畑等と複数で表現したのは霧の旅会の多数の会員の事を忘れることができないからだ。

大正期に入って学校山岳部の若人達によって欧州的な山登りや思想が、アラインゲーンとかディフィカルト・バリエーションルートの開拓という方向に向っている中で、樹林帯から渓谷の山旅を選んだ田部や木暮達の山歩きが提唱された。さらに冠松次郎のように日本アルプスの黒部渓谷にその人生をかけてゆく人も出てきた。

一方学校山岳部とは別の途を歩む山岳会として関西に起ったR・C・Cの存在を忘れることは出来ない。岩登りを新たに移入した藤木九三をリーダーとして六甲山、仁川、道場等に数多くのトレーニングの場所を開拓し、穂高滝谷に於ける初登攀があった。或いは槍ケ岳北鎌尾根に於ける初トレースに関しての名誉が学習院と早稲田のパーティーによって争われた。そして関東に於いても尖鋭な山岳会として登歩渓流会、日本登高会等の誕生を見るに到った。より高みを目ざす登山者。山村や峠あるいは山裾への漂泊の旅を求める者。アルピニズムをとるか、静観的なきわめて内省的な山歩きをするかとの論争にあけ暮れた時もあったが、高畑即ち霧の旅会派は後者を選んだ。

高畑の『山を行く』は又その主流から離れ、あえて独り飛騨山脈、木曽山脈、赤石山脈にふれず、関東周辺の山々を取り上げているところに特徴があると思う。著書の目次をみる。

「春の愛鷹連山」「初夏の両神山」「晩春の神流川上流へ」「五月の金峰山」「秋の三峠山」「富士五湖と裾野めぐり」「武尊山」等の紀行文に加え「上毛三山」「浅間山と其の附近」「奥多摩の山水」「奥秩父の山」「西上州の山」「房総半島の山」「道志山塊」「山水帖」等々に区分され私達の知らなかった山々を解説をしている。

本文最後に付録として「神流川雑藁」が含まれている。高畑は余り知られていない日本の山の、あらゆる古文書を調べつくして今日によみがえさせてくれる。そのよき例が『山を行く』の付録として取りあつかわれている「神流川雑藁」だ。これは高畑が見た上州神流川上流の正徳図をもとにして神流川上流域の山名と沢名を考証したもので、高畑の最も得意とする分野である。その渉猟した文献は、『上野國志』『上野名跡志』『利根川圖志』『新篇武藏風土記稿』『六十五大川流域誌』『日本名勝地誌』『信府統記』『武藏演路』『武藏通志』『上野鑛泉誌』（註2）及び『山岳』の各号であった。

本文の「春の愛鷹連山」から「武尊山」までは紀行文であるが、地名、山名となると得意の考証をはじめる。これは先輩木暮理太郎の紀行文を模範とする所がある。

例えば『山岳』第十六年第三号「奥上州」号所載の木暮の「皇海（スカイ）山紀行」に皇海山の山名の由来変遷についてカウガイヤマ→カウガイサン→皇開山→皇海山→スカイサンの変化を述べ、元の笄山について

「郡村誌に據ると更にそれが慥だ。同書利根郡平川村の山の部に

笄山。勢多郡ニテ之ヲサク山ト云。下野上野両國ニ跨リ、高峻ニシテ高不詳。村ノ東南ニ聳ヘ、南邊利根村ニ属ス。峻ニシテ登路ナシ。樹木栂椴ヲ生ズ。山脈南方ニ於テハ下野國足尾山庚申山ニ連リ、東方ハ日光山ニ連ル。」

と郡村誌を引用している。高畑も右にならってか「初夏の兩神山」では山名などについて

「秩父山塊の主脈を離れ、秩父盆地を前にして獨立高聳してゐる兩神山（リヤウカミヤマ）は、また八日見山とも龍頭山（リユウカミ）（龍神山）とも稱へられ、古來彼の三峯と同じく信仰の山として知られ『新篇武藏風土記稿』『日本山嶽志』『山岳』其の他に多くの文献が顯れて居る。

今茲に大正五年十月發行の雜誌『山岳』秩父號（第十一年第一號）に掲載された河田羆氏著『武藏通志』（山岳篇）を見ると

兩神山（リヤウカミヤマ）　一名八日見山（ヤウカミ）

秩父郡兩神村（薄村・小森村）にあり、北は三田川村……」

と引用して紀行文を書いており、やや高畑の著書を読む者にとって、若干のわずらわしさを感じさせぬものでもない。その事は地名ばかりでなく地形地質についての説明にも詳細をきわめる。又寺社についても数多くの文献等の引用がある。例えば高水三山の常福院所蔵の「高水山縁起」や、惣岳山の青渭神社についても過分の説明を行っている。

高畑の紀行文として書かれた文章の中には、自ずと歩いてゆく道が示されて來てあたかも読む者をして歩いて行くかのような記述がされている。時には地名に関する考証を織りなし読む人を一気に現地の山中に引き込むの感がある。

この本の内容の特徴は、あまり今まで知られていない山々を取りあげていることだ。西上州の山、房総半島の山、道志山塊、「山水帖」の中の八溝山や、栃木の大平山・晃石山・岩舟山・三毳山などがそれだ。

道志山塊は今日に於ても一般的なものでなく、篤志家向きのおもかげが多い。当時にあってこの山塊を取りあげたものは少なく、高畑の低山趣味のレパートリーの底辺の広さを知るによい資料と云えるかも知れない。この道志山塊について高畑は

「……桂川の本流と道志川とに聳え立つ道志山塊は、一日二日の山旅に御誂向の山々を連ねてゐるので近頃多くの登山者を見かけるやうになったのは嬉しい。

此の山塊の盟主は御正體（ミサウタイ）山（山中湖圖幅參照。△一六八一・九米）であって、その堂大な山容は之を遠望する者の登高心を煽らずに措かないであろう。然し他の山塊、即ち御坂、丹澤、大菩薩連嶺等に比して此の山塊一帯の標高が低いためいづれの山も山頂若しくは山頂近くまでボサや茅戸に蔽はれてゐるから、夏季の登山は之を避け、早春か晩秋若しくは初冬の頃登るならば、夏と違って非常に楽に登れる。空氣飽くまで清澄な冬の日殘雪を蹈んで登高する氣分は又格別である。」

と。

道志山塊の山々として、御正体山、鹿留山、石割山、御座入山、九鬼山、鞍岳山（倉岳山）、雛鶴峠の伝説、朝日山（赤鞍ヶ岳）、加入道、大群山、石老山の山々をとりあげている。特に鞍岳山、石老山、九鬼山は高畑との因縁は深い。

晩年といっても高畑四十歳の後半は札金峠のすぐ下にあった札金鉱泉での滞在が続いていた。ここから高力や佐々木隆等の山の友人達にいくつかの便りを出している。そのうちの一枚を紹介する。東京市杉並区東田町一ノ三四川崎精雄宛てで、その文面表には水彩画「馬立西方の尾根より見たる九鬼山」、文面は

「欝陶しい日がつづきますが倍々御元気のことと存じます。

いただいた本は三回くりかへして読み、また来泊した友人にも貸してやりましたが友人は仄ぐらい豆ランプの下で一気に読通し気がついたら夜明一寸前だったそうです。先達はまたはるばると猫啼渕から旅信いただき有難う存じます。好晴に恵まれ、よりよい収穫が有ったことと存じます。御序での節遠山さんへ呉々も宜しくお傳へ下さい。私、本日いよいよ当地を引挙げますが、滞在中皆様から受けた御好意をしみじみ感謝して居ります。

帰京すればさっそく就職口を探す予定です。不順の折柄御自愛第一に。草々　山梨県南都留郡壬生村田野倉札金鉱泉内高畑棟材

（一八年）六月十六日」

と長かった札金滞在の終る日をつげている。

さらに本の内容は大菩薩連嶺、丹沢山塊、そして著者の最も愛着をもっている「高尾山より三頭山まで」と続く。

私が、初めて『山を行く』を読んだ時、目次の中で眼に付いたのは西上州の項だ。「初夏の雨神山」や「晩春の神流川上流へ」を読んで知った西上州の山々は、私にとって長い間のあこがれの山域であった。

『山を行く』を読んでいた当時はもとより私の三十年代後半に到るまで西上州はまったく未知の山々であった。しかしこの本を読んで以来西上州地域はあこがれの山となった。荒船山、稲含山、赤久縄山、東・西御荷鉾山の名を知るが、そこへ行くべき方法もルートも知らなかった。長じて尾崎喜八を知り『山の絵本』を読み、『雲と草原』を読み、「神流川紀行」の文章に出合う。その中の一節「父不見御荷鉾も見えず神流川　星ばかりなる万場の泊」を読み、星ばかりなる万場の泊り場を何処か詮索するうち、万場は私から遠ざかるような気がしてしまった。

赤久縄山をアカグナヤマと読むのも高畑のこの本から学んだ。その紀行の「赤久縄山頂から富士を拝めるのは嬉しい。」の一節が印象に残った。

私が初めて赤久縄山の頂をふんだのは昭和四十年代のはじめ、その頃の赤久縄山の山頂には一等三角点の櫓が残っていた。背を没すほどの雑草が茂っていた。とても富士山を拝むどころではなかった。しかし初冬から春にかけて登山すると奥秩父山脈の上に八合目あたりから上部の富士山を見た時は嬉しかった。

高畑の文章は常に実証にもとづき、あらゆる文献資料をふまえて書き綴られている。だから或る意味から見るとやや老成されたけむったさがただよっている。大島亮吉や尾崎喜八とは異なった風景をえがき出していた。文章に軽快さはないが足元を見つめながらこつこつと登ってゆく感覚を身にうけながら読み進めてゆく。その文章の中に高畑をとりまく多くの友人達の姿を見ることができる。それ等の友人の山歩きやあるいは引用している古文書をたくみに活用して、山々を立体的に浮き立たせている。従来の紀行文や案内書に

ない山歩きの面白味を読む人に与えてくれる。そのよき例題として「西上州の山」の序文を読んでみる。

「近年漸く或る一部の登山家の間に注目されてきたものに、秩父裏とも云ふべき、西上州の一角を占めてゐる荒船山（最高點京塚山、剣ヶ峰ともいふ　標高△一四二一・五米）・黒瀧山（八七〇米）・稲含山（△一三七〇米）・赤久縄山（△一五二一・三米）・西御荷鉾山（△一二八六・二米）・東御荷鉾山（△一二四六米）等がある。

深山幽谷の趣を味はふには少々物足らぬかも知れないが、黒瀧山を除いては、孰れも山頂からの眺望に恵まれてゐるし、近頃まで流行の圏外に捨置かれてあっただけに、未だ心無い登山者によって山を荒らされてないから、單身なり、同好者を誘ふなりして出懸けたならば、『低山探勝』の愉しさを心ゆくまで味はふことが出来るであろう。

因みに御荷鉾山附近は輝片岩・角閃片岩・石英片岩・石墨千枚岩・晶質石灰岩等の所謂三株（御荷鉾）層から成り、神流川支流の三波川流域に最も良く發達した三波川層と相俟って、地質學上から觀ても亦有名である。」

と高畑は荒船山、黒滝山、稲含山、赤久縄山、御荷鉾山等を紹介している。

中でも「稲含山」については考証ずきの著者、高畑棟材の面目躍如たるものがある。少し長いが『山を行く』の中に引用している神谷恭からの手紙を孫引してみると

「……左に神谷氏から頂いた詳細な旅信の大半を掲げ、以て私の記文の足らざる處を補ふこととする。茲に改めて同氏の御好意を感謝する次第である。

……稲含山は地圖にも明示されてある通り地面を圍む數多の岩壁（山麓の高倉にて三枚巌と稱へて居ます）は實に立派なものです。山頂に在る稲含神社は昔は可なり結構な建物だったそうですが火災のため烏有に歸し今はトタン屋根の極めて殺風景な社殿でした。然し毎年五月八日の大祭には近村の若い男女が參詣するので、狭い境内は人を以って埋められ賽銭のみでも百圓からあがるそうです。そして當日は大神楽も催されるとか大した賑ひらしく察せられます。

三角點は神社の前から東南に峙立つ大きな岩峰の上に在って其岩を『龍ノ巌』と申して居ます。昔或獵師が山頂に來ると南の方白髪岩（栗山川の源頭、地圖に下仁田町と三角點より南に曳く村界尾根との間に在る澤のツメに當る處に在る岩）の上に莫迦に光って見えるものがあったので近寄り見れば一人の白衣を纏ふた姫が居て『吾は一ノ宮に鎮座する明神にして此度同地を妹に譲り此山中に隠れ度く姿を現はしたる次第なれば山頂に社を建立せよ』とか何とか御託宣があって忽ちかき消す如くに御姿を見失ひし由村民より聞及びました。右の言葉と上野國志の祭神とを照合する時現在一ノ宮に在る貫前神社（高畑註。國幣中社貫前神社は全國一ノ宮七社〔上野・武藏・駿河・伊豆・若狭・美作・肥後〕の第一社であって祭神は經津主命）と稲含神社との間に何か連絡があるやうに感ぜられます。……稲含の三等三角點（一三七〇米）は僅に二坪に足らぬ位の猫額地です。兩神方面は赤久縄山に妨げ

られますが三國から小倉山・八ヶ岳・荒船・浅間から上毛の平野を圍む山々は一眸の裡に在ります。

稲含の山容はちょっと本社ケ丸に似て南へ續く尾根傳ひも良く似て居ますがもっともっと急傾斜で嶮くて困難の程度が遙に多いやうに覺えて居ります。山屋（万場の旅館）の主人は息子さんと二人で杖植峠から往復されたそうで尾根傳ひは仲々骨が折れるが私（神谷）のとった鮎川の谷へ這入るより楽でせうと謙遜して居りましたが實際地圖で見た通り杖植峠までは随分長い尾根傳ひと昇降とを繰返すのと鮎川へ降る嶮と赤久縄山へ取付く隈笹もぐりとを比較する時いづれとも手を擧げられないやうです。……」

と神谷恭から高畑宛ての手紙の一部を紹介している。

事実この当時高畑はこの山へ登っていなかった。それ故神谷の書翰を引用してその前後を山名の考証にあて稲含山についての記述をまとめている。現在の人達には考えられない長文の手紙の内容は詳細をきわめたもので、当時の山仲間の間の友情のあり方がほのぼのとして伝わってくる。引用した手紙に対して高畑から神谷恭宛ての手紙が残っている。響き合う二人の肉声を聞くようである。日付は昭和三年（一九二八）十一月二日である。

「……黒瀧山の不動堂から見た稲含山の姿は可なり人目を惹きますので私はいつか一度この山に杖を曳きたいと思ひ乍らも其儘になってしまって居りましたが、いくら行程の都合上とはいへ再度ならずある谷へ足を向け乍ら稲含山だけを繼子扱ひにしてやさしい言葉もかけてやりませんでしたことを何となく濟まなく存じて居りましたが、今度私の敬愛する神谷さんがあの山に足跡を印されたと承りほっとした様な心持で居ります。あの西上州方面に關しては私の貧しい記憶によっても既に木暮松本両氏、岩井兄、河田氏一行、吉岡氏、戸沢氏及び故大島君などの御歴々が杖を曳いて居られますが行程の都合上からか皆申合せたやうに稲含山だけは割愛して居られます。併し林義郷の『上野國志』義之巻（第一巻、第二巻といふ代りに國志は義之巻、礼の巻などいふて居ります）を繙きますと、

稲含山　栗山村ノ深山ノ頂上ニアリ

祭神

一説ニ抜鉾大神第二ノ鎭坐ノ地ナリコノ処ヨリ今ノ一宮ノ地ニ遷坐シ玉フトモ云本地ハ彌勒菩薩ト税民ノ説ナリ。按ニ三代實録元慶四年五月廿五日戊寅授上野國正六位上稲裏地神從五位下勲十二等豈此神社耶。

と出てゐます故随分古くから知られてゐる山と思ひます但し右のうち三代実録云々は上野国志が贔屓の引倒しをやったものでして上野名跡志の編著富田永世の言ふ如く

後上野志、名跡考ニ稲裏地の神ヲ甘楽郡ノ稲包山（即チ稲含山）トイヒシハ誤ナリ。云々（名跡考とは上野名跡考のこと、高畑）が正しく義郷は奥上州（上越境）の稲包山とこの西上州（甘楽郡）の稲含山とを明かに混同して居ります。それは扱置あの辺の山は一帯に丘陵性のなだらかさを多分にもって居ますので高山性深山性の趣きを味ふことは出来ませんが古くからその山名が顯はれ（古図書に）てゐることに徴じて慥かに稲含山は荒船、黒瀧なみに取扱はるべきだと愚考して居ります。

赤久縄から西御荷鉾へかけての尾根通りは所謂秩父の裏口を眺めるには誠に適当な観望台の一つと思ひます。兩神山の怪奇な姿、上州並に両神流川上流地、本多林學博士の激賞する中津川渓谷並に此川を育くむ上武信境の山々、は新篇武藏風土記稿に載せてある程の大袈裟な嶮山怪谷ではありますまいが慥かに瞻る者の遊志を煽る種ですネ。

……今月末（廿四日頃？）に会員麻生氏の欧州アルペンの幻燈入講演会が三會堂に開かれる由ですから、その時には親しく西御荷鉾附近の近況に就いて承り度今から楽しみにして居ります。先頃木暮さんから来年（？）になったら第二奥上州号を出す予定故いくら長くても亦考証ものでも一向差支えないから何か寄稿せよとのことに付、例の神流川水源地古絵図（本年六月十日霧の旅会十周年記念展覧会出品ノモノ）を基調として一文を草しつつありますが古書渉猟（あさり）の必要上まめに上野圖書館へ足を運んでカビ臭い寫本をひっくり返して悦（えつ）に入って居ります。神谷さんも御差支へなくば先日の稲含、赤久縄、西御荷鉾行を會員通信欄でなく本欄か止むを得ずんバ雑録欄へ御掲げなさいませんか、岩井兄の「霧の旅。会員通信」、山岳第二秩父号の戸澤氏の「両神、父不見、西御荷鉾」、河田氏の「静かなる旅を行きつつ」の中の或項など皆親しみ多く読めますが稲含山から西御荷鉾へかけての鮎川に面する方のことが一つも書いてありません故、之は是非神谷さんの御發表に待ちたいと希って居ります。古記録としては前記の上野国志が稍信ずるに足りますが時偶、前記の三代實録式の附會が無きにしも非ずで困ります、鮎川の古記録としては上野国志に、

鮎川、鮎川ハ御荷鉾（ミカボ）一名日野山中ヨリ出平井古城ノ東ヲ流レ山名村ニテ蕪川（現今ノ鏑川、高畑）ニ合スト後上野志ニ云ヘリ。上野名跡考ニ郡ノ間ヲ流レハ間川（アヒ）ニヤト云。

と出てゐます。御荷鉾山を一名日野山といふとは国志の編著は何に據ったか知りませんが之は北麓日野村の称呼であろうことは想像に難くありません。頂戴したヱハガキの叶山は峡中の一異彩でして木暮さんも『面白い山だ、目立つ山だ』と語られたことがあります。

……尚ほ霧の旅会に於ける處女講演の『秋川べりより多摩川へ』を拝聴できなかった事は返す返すも残念でありました。そしてあの当時かの可愛いい澄ちゃんの重患に心痛め乍らも多くの會員の期待に沿うべく敢然として小集会へ出席なされし御行動は洵に敬服のほか無之私ハ全く強く心を搏たれた次第でございます。曽て東京朝日新聞社で木暮、小島、槇三氏の山岳講演会開催の発表ありし時その日は日本山岳會の小集会当日のこととて木暮さんのみは断然東京朝日の乞ひをはねつけて愛する會（日本山岳会）へ出席された事実を、其処に多少の相違の点がありますが共に『會を愛するがために』といふ美しい精神には変りない処と思ひ只いま敬服いたして居ります。

……今月十八日は故大塚君（日本山岳会員たりし）の一周忌ですから墓参のため栃木町へ赴き事情許すならば萬葉集で夙に著名な安蘇（アソ）山郡のうちの二ツ三ツをあるいてみるつもりで居ります。」

手紙の中にある「例の神流川水源地古絵図を基調として一文云々」とある文章は『山を行く』の掉尾をかざっている「神流川雑藁」の

ことである。

『山を行く』の初版は昭和五年（一九三〇）六月十五日、同年六月二十日再版、六月二十五日三版と版を重ね、昭和八年（一九三三）六月一日には定価一円の普及版も出版され早くも同年七月十五日には普及版第三版が発行されている。そして洛陽の紙価を高めて行った。

私は今、高畑棟材伝を書いていて、一つの疑懼をもちつづけている。それは霧の旅会やそれにまつわる人達のことを針小棒大的な記述をしていることであるが、大正末期から昭和一桁代は日本の山岳界の黄金時代ではなかったとしても霧の旅会の行動は称賛されるべきものがあったと考えられる。そして丹沢の谷や一ノ倉岳の岩壁ルートが開拓されたのはこの時期であった。

それに対しての霧の旅会の活躍は誇大妄想的であるとの批評である。日本山岳（登山）史に於ける低山趣味というものは、余りにもマクロ的な視点であるとのことであるが、そこに日本山岳界の流れにあって再考されるものがあると私は確信したからである。

それから約四十年たち敗戦後高度成長期から安定期になると、世の中の中高年代は山に対して興味をもちはじめた。一九七〇年代に入ると多くの人達が山歩きをはじめた。一九六〇年代は年若い二十代が主であったが、急に五十・六十代の人達によって山々の頂は満ちあふれんばかりになった。一九一〇年代にまかれた種がようやく実りはじめたわけで、その方向は何処へ向ってゆくのか知れぬものがある。

私は現在、土日ばかりか平日にかけての山歩きを楽しんでる人達に、低山歩き＝ハイキングの歴史的回顧を試みてみたいと思う。しかし現在の楽しさに夢中の人達にとってそのよって来たるルーツを知ろうと思う人は少ない。

しかし少数の人達でもよい、かつて低山歩きに憂き身をやつした人達のいた事を知ってくれればと考えている。

（註1）「道陸神」＝横浜徒歩々々会の会報。

（註2）「上野国志」＝毛呂義郷（一七二三～一七九二）が、安永三年（一七七四）著わした上野国の歴史地誌、全十五巻。「上野名跡志」＝富田永世（一七七七～一八一九）が著わした地誌。富田は上州秩父郡大田村の商人。他に『北武蔵名跡志』『秩父誌略』等の著作がある。「利根川図志」＝下総布川の医師、赤松宗旦が著わした利根川流域の地誌。「六十五大川流域誌」＝明治二十一年（一八八八）内務省土木局の刊行本。「日本名勝地誌」＝野崎左文著、明治三十三年（一九〇〇）刊、日本国内の名勝が国郡別に記載。「信府統記」＝松本藩主水野忠恒が、家臣鈴木重武、三井弘篤に命じて作成させた松本地方の地誌。全三十二巻。「武蔵演路」＝安永九年（一七八〇）大橋方長（八右衛門）が著わした武蔵の地誌。内容は豊島、荏原、橘樹、綴喜、久良岐、多摩、入間、高麗、秩父、比企、横見、足立、葛飾郡が含まれているが、北部六郡が欠けている。「上野鉱泉誌」＝高橋周植編、明治二十五年（一八九二）七月博文館刊行。

『東京附近の山々』『奥秩父と其附近』

『山を行く』が出版され、意外の売れゆきで朋文堂は出版界への第一歩を印したと考えられる。『山を行く』が出版された翌年の六年（一九三一）六月、『東京附近の山々』、同八年『奥秩父と其附近』

があい次ぎ高畑と河田楨との共著によって出版された。

この年の前後、高畑の年譜をくってみると、昭和六年（一九三一）十一月、朋文堂社主新島章男によって『山小屋』が創刊された。新島は「『山小屋』の発刊に際して」の中で

「多年の希望であった山の雑誌を愈々発行する事となって私は非常に嬉しい。初めて生れ出る愛児は、男か女か、丈夫であろうか、評判は如何であろうか、なかなか心配でもあるが、又何となく氣の浮き立つ様な愉快なものである。……

創刊號は五千部印刷し、本日迄の申込者累計四千四百五十七名並びに霧藻會員、各山岳會其他に贈呈致しました。」

と述べている。

創刊号五千部は非売品として雑誌『山小屋』申込者全員に無料にて配布した。第二号より有料とした。定価は一冊十五銭であった。

雑誌編集者として高畑棟材が迎えられた。

創刊号の表紙は富田通雄のスケッチ、執筆者に河野齢藏、田部重治、田中冬二、丸山東美男、今井四郎、荒井道太郎、植草彦次郎、岩科小一郎等の名を見ることができる。この号に高畑はむねたかの名で「秩父の秋」短歌四首。「秩父にて」短歌三首。「峠の赤蜻蛉」の詩を発表している。

『山小屋』の発行と同じ頃河田楨との共著『東京附近の山々』『奥秩父と其附近』が発行され、『山を行く』についで洛陽の紙価を高めた。

昭和十年（一九三五）これほど手塩にかけて育成した雑誌から手を引く事となり、とりあえず新島章男が編集業務をうけつぎ、第二代目の編集長として甲斐伊之助がむかえられた。

高畑の生来の性格からか、一つの物事に執着する時間は短かく、何等かの理由により熱中している事柄をほうり出す癖があった。それは一種の故郷喪失者的なもので、死去するまでそれは続く。その一連の現象として、霧の旅会からの脱落、『山小屋』編輯からの脱落、そして東京から離れ、陣馬山麓二色鉱泉あるいは九鬼山麓の札金鉱泉への逃避という過程を見ることができる。

話を出版のことに戻す。『東京附近の山々』の出版は昭和六年（一九三一）六月二十日で、定価は一円。本の大きさは横十一センチ縦十七センチのポケット版。装幀は丈夫なクロース装となっている。総頁二八四頁、カバーがつき、口絵に丸山東美男のえがく「武甲山より大山まで」の油絵のパノラマと、装幀者富田通雄のスケッチ二葉、写真は「武尊牧場より望める武尊連峯・塚本閤治」「大岳山と御前山（三頭山より）・岩井三郎」「藤野木村の朝・高畑棟材」がのっている。

内容は「奥多摩の山水」「尾瀬と奥日光」「上越境の山々」「神津牧場と其附近」「中央沿線の山々」「御坂山塊」「丹澤山塊」「上毛三山」「浅間山」「武尊山」「愛鷹山」「富士山」「後記」「参考記録」となっている。又本文の中に富田通雄のスケッチが十四葉挿入され、「大獄・御前・三頭山附近」「上越境の山」「尾瀬沼附近」の地図が巻末に折込まれている。

朋文堂社主新島章男は「後記」の中で

「『理想的な山のガイドブックを出版したい』とは山好きの本屋である私の念願の一つでありました。

本書著作者の一人高畑さんとは、同じ霧藻會の會員である關係から一面識はありましたが、親しく相語らふ機會もなく時は過ぎました。慥か一昨年の早春の頃であったと憶ひます、霧藻會の小集會が終ってから二人は、未だうす寒い静かな舗道を散歩し乍ら、夜の更くるも覺えず語らひ続けました。私は高畑さんの純情と趣味の高尚にして豊かな事に心惹かれ、關東の山ならば、殆んど足跡の至らざる所なく、而も非常に詳細に知悉して居られる事に驚異の眼を見開き、其後はお互に十年の知己を感じ合ふ様になりました。

山のガイドブックも此人ならば、必ずよいものが出來ると信じ、直ちに之が起稿を御願したのでした。其後一年有餘、愈々脱稿したものは、案内書と云ふよりは、寧ろ著者二十年山歩きの紀行文集と云ってよいもの、即ち昨年新緑の頃上梓の『山を行く』でした。幸に江湖の好評を博しましたが、重ねて最初の念願であった本書の編纂を御願した次第であります。

河田さんと相知る様になったのも此頃でした。三菱銀行の應接室で、あの痩軀、優しい聲色、牆を持たない心、―と、心の談合は即座に本書共纂の概諾を得ました。其後も屢々會見しますが何時も渝る事なき眞情に敬慕してゐる次第です。

『一日二日山の旅』の河田さん、『山を行く』の高畑さん、關東の山の兩雄の握手によって倍々よき本の出來る事に喜びを感じます。」

と本出版のいきさつ、高畑、河田との出合いを述べている。

問題はこの本の内容における二人の役割分担のことである。一応共著という型式をとっているが、いろいろの事情を斟酌してみると大半あるいはもっと大胆な推測を加えてみると、文章のほとんどを高畑が執筆したものではないかと考えられる。それは両者の著書を読み比べてみればわかってくる。河田の『一日二日山の旅』や『静かなる山の旅』を読んでみても、高畑のように古文献等の引用、考証癖はない。何かというと高畑みたいに木暮、武田や『山岳』の助けをかりることもない。文章を読んでいても高畑のとの違いを知ることができる。

それはともかくこの二冊は売れに売れた。そして朋文堂は発展して行くのであった。

『奥秩父と其附近』のアウトラインを記してみる。前著と同じく三六版二六九頁。利用者に対するサービスとして索引(山・峠・澤・温泉)がつけられた。装幀は富田通雄、口絵として、草光信成の水彩画「日原上流の原生林(唐松谷大崩より)」と「武州雲取小屋」、富田のスケッチ多数と「國師ヶ岳△より見たる金峯山(中景左、鐵山重なる)と朝日岳(中景右)(遠景左方は甲斐駒ヶ岳方面、右方は八ヶ岳)・河田楨」「東澤を渡る・河田楨」「瑞牆山頂より俯瞰せるヤスリ岩・河田楨」「天狗棚山より(近景より順次熊澤山、親不知、大菩薩岳)・稲垣徹治」の写真四枚がある。折込み地図が三葉巻末にある。

「目次」は「奥秩父」「日原川渓谷」「大菩薩・小金澤連嶺」「八ヶ岳」に大別されており、各登山コースは詳細に案内されている。発行者新島章男は「後記」にて

「私は曩に刊行せる平賀文男氏著『南アルプスと其渓谷』並に

河田楨・高畑棟材兩氏共著『東京附近の山々』の姉妹篇として、『奥秩父と其附近』に關する限り最も良き案内書であるてふ自信を以て、本書を世に送る事を光榮に思ふ。」

と記していて、『近畿の山と谷』『九州の山々』『東北の山々』が同型として出版された。これ等の出版の売れゆきの良かった秘密はそのサブタイトル「時間記録と費用概算」にあったものと考えられる。

私が持っている『奥秩父と其附近』は昭和六年（一九三一）九月五日発行の五版である。初版は同年八月二十八日であったからすごいスピードで発売された。確かな事は云えないが、まだまだ版を重ねたものと推測できる。

『行雲とともに』

『行雲とともに』が出版されたのは昭和九年（一九三四）九月二十日であった。造本はすこぶる凝ったもので和紙引きのケースに入り、装幀は紺色の布、背に高畑の筆により和紙に「行雲とともに」と書かれた行書が別刷紙として添付されてある。本は上製本とナンバー入りの特製本が同時出版された。上製本は定価一円三十銭、総頁二四〇頁、フランス装となっている。特製本は定価二円、製本数は三〇〇冊であった。装幀・挿絵は高畑が行っている。特製本の表見返しには高畑自作の藏書票「暁の富士」が、裏見返しには「山女魚」図柄の蔵書票―EX・LIBRIS―がはられている。上製本には二枚の蔵書票がじかに印刷されている。巻頭に著者近影（昭和九年八月十七日撮影）とあるポートレートがある。高畑三十七歳の写真である。

本の表見返しには未発表の散文詩「お六櫛」の自筆原稿が印刷されている。

裏見返しは、高畑が大正初期書家千葉青藍に師事していた頃の筆跡で、「秋湖」の落款を見ることができる。

本の自序に

「緑ふかみゆく馬込の丘を逍ひつつ、青澄める空を仰ぎ、草の香を聞き、流水の歌を聴けば、みすず刈る信濃の國の、美はしさ極みなきあの木曽渓谷を、小男鹿の如く跳ね廻りし日の、ひたぶるに懐しきかな。されど、ひとたび忘却の彼方へ消え去りし幻影は、捉へんとすれども己に痕なく、唯その日その時、慈母のふところに抱かれて甘へるが如く、その地の自然と融け合ひて、限りある人生を哀しみ、限りなき永遠を慕ひしことのみ染々と想はるるなり。

懐しの木曽及び愛する東京近郊に於ける山旅日記に、折に觸れて『自然』より學び得し考證随筆の幾篇かを添へし此の書こそは、いと微さき著者の旅情を窺ふよすがなれ。」

とある。

目次を追って高畑の心のゆくえを追ってみる。

「谷久保澤點描」は多摩川の上流、西多摩郡沢井のヤクボ沢の奥に住む村上寛逸を訪ねての憶ひ出と、住人高野八郎との友情について語られている。

「大平（おほびら）の春をたづねて」は桂川北岸の山ふところにある大平の集落にあった鉱泉宿に一泊した時のことが書かれている。釣洋燈のある一夜、あまり自分自身のことを書かぬ高畑は珍らしく母の憶い出

をかたる。

「日原游行覺書」は昭和六年（一九三一）八月二十七日、前日日原に一泊した高畑が土地の青年小林平治の案内で、日原・鞘口クビレ・鷹巣山・絹笠・氷川へ下った記録で、考証嗅のないもので平治青年との会話をまじえての美しい散文である。

さらに内容は詩「きがらしの濟んだ葉煙草」となる。この詩には友人田中冬二の影響がうかがわれる。いわゆる当時流行した徴象詩である。そして対の頁に詩「庄川を憶ふ」がのっている。

次の文章は「日光の山」「日光斷想」そして「でうけんばう其他」になっていて、共に高畑の青少年時代の山での憶い出について語られている。

「箱根路に拾ふ」は「歩くことの好きな私たち二人」が箱根で会った薄幸の姉弟の事がかかれていて、その私達二人の女性の名は奈都子と書かれている。若くして死別した佐藤ナツと解してもよい。山中であったエピソードとして読みすごすことのできないものであった。

「冬の低山あるき」は短いが、冬の低山歩きの楽しさをのべている。

この本の六一頁から始まる「木曽の落葉」は『行雲とともに』の主題とも云うべきものである。これは高畑が大正十二年（一九二三）木曽谷に遊んだ時の憶い出がえがかれている。内容は「奈良井雑記より」（一、木曽の古名・沿革　二、鳥居峠　三、天照山　四、權岳衞峠のことども　五、駒ケ嶽山脈三十六峯）、「木曽詩抄」「奈良井附近の山」（一、高遠山より峠山へ　二、三澤山を越えて笹尾ノ峯へ）、「黄蘗を煮る家（詩）」「神谷峠に遊ぶ」等々が集録されている。

「木曽の落葉」の一連の初出は『霧の旅』第八年二十三号及第九年二十六号であった。しかし『行雲とともに』には三、駒への登路、五、木曽谷詠草（十章）、八、木曽に於ける町村名の起因、九、水誌（河川之部）が省かれている。雑誌発表の後記には

「……當然水誌中に含まれるべき澤、瀑布、湖沼の名稱其の他に關することは、他日に譲り『樹の名、草の名』は冗長散漫の惧なきにしも非ざる故、之が掲載を見合せることとした。又方言、風習、民謡民話や、地方色鮮かな年中行事等に就いて書くべき材料も少しは集めて置いたが、綴れば之は『寸情風土記』といったやうなものの範圍に属して終ふこと故、夫等は總て割愛し『奈良井雑記』も一先づ此邊で擱筆する。」

と結んでいる。

高畑の文章の特種性の一つに発表時と再出する文章には見ちがえかと驚くほどの改作が行なわれる。『山を行く』の文中でもしばしばあったが、『行雲とともに』の特に「木曽の落葉」では、そのタイトルまでにも改変がくわえられている。初出九章を五章に組変え、又前文も『霧の旅』発表の時は

「幼いものではあるが是れは、みすゞ苅るてふ信濃の國木曽谷の片ほとりなる奈良井と云ふ寒村に、春以來の不健康な體と、愛する者を亡ってから幾間（いくばく）をも閲せぬ悲哀の心とを抱いて、再びめぐり來し年（大正十三年）の孟夏の初めから仲秋の末かけて、僅か二た月餘りのうちに、惶しく見聞したところの、乏しい旅の、貧しい印象記録と云った如うなものの一部である。」

とあるものを『行雲とともに』では

「私が初めて木曽を訪れたのは、明治四十五年の七月下旬であった。折しも木曽御嶽三ノ池の辺で一登山者から、聖上の御病篤しと聞き、私たち年少登山者の一行は、どんなにか小さい胸を痛めたことであらう。想へば、明治が大正と改元されるに、もう間もない日のことであった。其の後しばらく此の地を顧る遑が無かったのであるが、不圖としたいたづきの豫後静養のために、大正十二年、幾山河を越えて再び此の地を訪れたのである。その時は初夏の頃から初冬へかけて約半年の朝夕を、信濃國西筑摩郡の奈良井といふ古驛に在って送迎し、更に、あくる年の晩春から仲秋へかけて悠々自適して居った。併し、こんな絶好の機會に恵まれながら、心を全く静養の一途に傾けてゐたので、遂に山らしい山へも登ることなしに歸京してしまった。今から思へば洵に意氣地のないことであったが、それでも出來るだけ見聞を廣めて置かうと努力した結果、多少の収穫は有った。それらは私の手帳を餘白の無いまでに埋めてくれた。私は其の中から、比較的興味有るものの幾篇かを拾ひ集めて一括し、これに『木曽の落葉』といふ總括的標題を附けた。」

と改変し発表している。しかしこの前文も又『霧の旅』第九年二十三号の「奈良井雑記」と共に書き直されているが、煩雑になるので略する。これは文献学的な試みをしたのではなく、当時の高畑の生活面に於ける不幸の連続がもたらした心のみだれがあったとも考えられる。

『行雲とともに』の中の「奈良井附近の山」は、大正十二年（一九二三）の初夏から初冬にかけての季節であった。奈良井宿からの登山記は「奈良井附近の山」の中にえがかれている。それによると十月十七日高遠山から峠山、十八日には三澤山から笹尾ノ峰である。

「神谷峠に遊ぶ」は、権兵衛街道にある神谷峠、姥神峠に関する紀行と附近の山々や山人の生活について述べる。神谷峠については

「因に神谷より神谷峠（約一一六〇米）を経て、薮原に到るの捷路は、荒廢の結果久しく廢滅に帰しゐたりしものなるが、明治初年に上松町在住の神谷薫翁（本會會員なる神谷恭氏の御祖父）が、莫大の私財を投じて再工を劃り、遂に再び現在の如き峠路を完成せられしものなりと聞く。」

と記録している。

「寅さの死」「熊吉爺さんから聽いた話」「或る旅人宿の悲劇」等々は秋から初冬にかけての思ひ出がえがき出されている。

「象潟神祠碑」は高畑が秋田藩の林政家賀藤景琴の『北歸録』を読み、その中に記されていた「象潟神祠碑銘並序」を読み、元禄二年（一六八九）六月、松尾芭蕉が『奥の細道』にこの地出羽国象潟を訪ずれた時の文章

「江上に御陵あり、神功后宮の御墓といふ。寺を干滿珠寺といふ。此處に行幸ありし事、いまだ聞かず、如何なる事にや。」

の芭蕉の疑問に対し『北歸録』中の碑文の写しをみて、

「實は養蠶の祖神の豊岡姫を祀ったものであることを……」

と考証したものである。

「『なかのりさん』に就いて」は、木曽節の歌詞「なかのりさん」についての考証である。高畑の考証の方法は必ずその出典を明らか

にしている事で、伝聞とか孫引がないという事が云える。「なかのりさん」について二説ある事を説明し、最後に筏のりであることを結論づけていく。即ち

「馬に乗りたや木曽路の旅は、さんぼこうじのなかのりに

という歌詞もあること故、その『なかのり』から導かれたものに相違あるまいと憶斷したのである。何故なれば、この『さんぼこうじ』（三寶荒神）といふのは即ち原則（？）として、三箇の連結された鞍（座席）を置いた、俗に言ふ「荒神乗り」のことであって、其の中央の鞍に乗る者を指して『なかのり』（仲乗り）さんと謂ったからである。

然るに、去る昭和二年に、東京帝大司書官の植松安氏（註。現臺北大學教授）が『慶長七年、木曽御勘定並に請取り渡帳』といふ古記録から、偶々

米七十五石右樽かり申候仲乗り給に渡す手形有り此人數七十五人但し一人に付一石宛内二十六人は夏川の仲乗り四十九人は冬川の仲乗り

といふのを發見された故、より確實な證據の擧がらぬ限り、これが『なかのりさん』の語意を明らかにすべき最も有力な記録であらうと思はれる。……

是れに由って之を觀るに、元來が木曽川を中心として發祥した民謡であってみれば、『なかのり』即ち『仲乗り』は筏乗りと解釋するのが妥當らしく思はれる。」

と明解な文章を残している。

「タウゲ（峠）の語原一説」は峠の語原の一つとして従来アイヌ語説がとらえられているのに対し、蒙古語であると説明する。

『霧の旅』第十一年三十三号の雑録「むねたか随筆「渓流に棲む魚」は「渓流の魚」と改題され発表されている。ヤマメ・イワナ・アカウオ・オイカワ・カジカ・ゴリ・アブラメ等々の魚の名稱を民族学的考察を加えたもので、出典文献として当時発行された各種新聞、雑誌の記事及木村巽齋（註1）の『兼葭堂雑録』等によって説明したものである。

次の「しらくち」は山地に実るしらくちについての木曽地方での見聞録、又シラクチ酒、植物学上からの説明、大槻文彦著『大言海』などからの引用をも加えている。

『行雲とともに』の特製本は現在古本屋で高価な本として取引きされているそうである。

（註1）木村巽齋（一七三六～一八〇二）、名は孔恭、本名は兼葭堂、巽齋は号。江戸期の本草学者、大阪の人。

『山麓通信』

『行雲とともに』が出版されたのは昭和九年（一九三四）九月二十日、その「あとがき」の住所は大森馬込村となっているが、馬込村での生活にでもあきたのであろうか高畑は『行雲とともに』の印税をふところに、なじみの深い甲武相の陣場山麓栃谷に居を移したものと考えられる。高畑三十九歳のときである。

神奈川県津久井郡沢井村栃谷の二色鉱泉、大木政次郎方に腰をすえたのは昭和十年（一九三五）のはじめ、以来栃谷生活は昭和十四年（一九三九）まで続く。

奥高尾山岳会会報『奥高尾』や千代田山岳会会報『かやと』に発表した文章、栃谷隠栖時代の見聞集が『山麓通信』の主題となっている。すべてが甲武相の山々の間に伝わった物語であり、高畑の身のまわりの小話が集められてあって、登山の記録はのせてない。

『山麓通信』の発行は昭和十一年（一九三六）六月十九日、初版千部が印刷されている。発行所は東京市京橋区銀座二ノ四昭森社、発行者は森谷均である。定価は一円五十銭、装幀は秋朱之介、表紙、裏表紙、扉に陣場山のスケッチがえがかれている。そして「ある日の著者・御器谷勝二」「高尾見晴台より南アルプス（右端）富士・大群山（左端）を見る・東章」「陣馬頂上（南郷の頭より）・加藤元一」「連行峯より陣場山を望む・岩瀬圭一」の四枚の写真が巻頭をかざっている。厚いケース入りのしゃれた造りの本である。

『山麓通信』の「序に代へて」で

「風に追はれる浮雲のやうに何處といふあてもなく都會を脱け出した私が、武相二國に跨る陣場山の麓、相模國津久井郡澤井村の栃谷（とちや）といふ山間部落に隠棲してから早くも二星霜を閲した。

いったい何の為めにこんな山の中へ來たのであらうか。來ざるを得なかったのであらうか。理由は山ほどある。然しその理由はいづれ改めて公けにする機會もあるであらうから茲ではすべて割愛した。」

と謎めいた序文の中から私は高畑が何を求めているかを知ることはできない。二星霜の言葉の意味を年譜の上に拾ってみる。昭和九年（一九三四）の『行雲とともに』の発行のあと、昭和十年（一九三五）金星堂より現代随筆全集の一冊として『僕の手帳』が出版され、まずまずの生活は保障され経済的にめぐまれた時期ではないかと推察されるが、私達第三者の窺い知ることのできない心の鬱屈があったのではないだろうか。高畑は「序に代へて」の中でさらに

「……よしやそれが遠い昔の夢物語のやうな儚いものであっても聞書の形式で漏れなく書き取っておいた。また、此の附近の山や渓谷に少しでも關係の有る事柄は貧しいながらも随想や紀行の形式で書き綴っておいた。

陣場山とそれを繞る山麓地帯の自然と人生を、あらゆる角度から眺めて見よう。また、一切の理窟を抜きにして、此の地方の有の侭なる自然と人生を、私もまた有の儘なる心象に従って報告しようと思ひ此の筆を執った。読者はそれを先づ念頭に置いて此の本を味はっていただきたい。

初めからさういふ心構へで筆を進めてゐる間に、私は思はず微笑むことが屢々に有った。といふのは、いつも額に八の字を寄せ、鹿爪らしい顔をして、山名や地名の考證等に憂身を俏してゐる私のうちにも、案外このやうなごやかな氣分で筆を執れる半面の有ることを知ったからだ。」

『山麓通信』の出版に関し面白い手紙があるので紹介してみる。本の印税支払に関するもので、昭森社森谷均と高畑との間に若干のトラブルがあった事が文面から読みとることができる。当時の出版事情の一端をうかがい知る事ができる。その手紙は二〇〇字詰の原稿用紙三枚に書かれている。

『山麓通信』の印税の件はすでに秋分からお傳えして交渉済とばかり考へてゐました。これは出版者としての私の大變な手落ち

でした。あしからずお許し下さい。

大變失禮ですが更めて出版契約書二通入れましたからこれで成るべく御承認願ひ上ます。すなわち文面の通り印税八分、著者への本の寄贈総部數の一分といふことにして居ります。

どうも事後承諾を強いるやうで大變心苦しいのですが一應御覧下すって御返事下されば幸ひです、なほ印税支拂は文面の通りですと來月から三ケ月分割拂ひといふことに成りますが、之について御意見をお伺ひ致します。この案は大体宇野浩二氏案なのですが、只今のところ皆さんに之で御辛棒願って居りますけれどとにかく、あなたの御意見も伺っておきたいのです。

なほ総部數の一分に當る本の分お届けする場合は定價の七割でお願ひして居ります。

どうも最初にすべき話があとになったので大變申上げにくく成りました。あしからず。」

これは『山麓通信』の印税とその支払について高畑から昭森社森谷均へ出した便りの返事であることがわかる。又出版人森谷均の人格のにじみ出た文面であると思う。

この事は何かの行き違いから契約書なしで出版が進み、高畑から出版内容に付き問い合わせに対する返事であることがわかる。宛名は神奈川県津久井郡吉野局内高畑棟材になっている。

高畑が『山麓通信』の印税問題を提起した理由は、先に出版した金星堂の「現代随筆全集」のことで、全集第十巻に「僕の手帳」等三篇が収録されていたが全般の販売が思わしくなく、印税の入手が皆無となってしまった。多分あわてた高畑が昭森社の印税の率及び支払方法について照会したものと考えられる。

高畑が集載されているのは第十巻目で、その執筆者達は、岡本綺堂、平山蘆江、村松梢風、田中貢太郎、長谷川伸、白石實三、西川一草亭、内田魯庵、斉藤昌三、永見徳太郎、有坂與太郎、鏑木清方、高畑の十三名であった。

高畑は「しらくち」「僕の手帳」「谷の宿」の三篇をのせている。「しらくち」は『行雲とともに』、「谷の宿」は『山麓通信』に収録されているので、「僕の手帳」はこの随筆全集のために書き下ろされたものと思われる。

随筆集は布で装幀され、中川一政の植物文様が金パクでおされた、仲々立派な本であった。

それはさておき『山麓通信』を読んでみて、文章の行間に、かつて妻子と別れた高畑に一つの安堵のできる生活が戻ってきたようである。それに加えかつての山の友人達との親交が戻ってきた。新しい年下の山の友人も多くできてきたことが行間から読みとることができる。高畑の心の中には雑木の山々が入り込み、読書や執筆、思索にあきると陣場山につながる山々を散策したり、夜はうすぐらい電灯の下で村の人達と対談した。そして鉱泉に浴みする楽しみを、商業誌でない小冊子の『奥高尾』や『かやと』に寄稿するのであった。

時々おとずれてくる山仲間との低山逍遙、寄贈された本を読む楽しさは、一刻であったが非情な生活をくぐりぬけ、人には言えない苦悩をもってこの山麓の里にもぐり込んだ時の淋しさは徐々にではあったが、薄れゆく様子がこの本の中に語られているような気がす

る。『山麓通信』の中で高畑は語る。

「……または荒井兄から贈られたハンス・モルゲンターレルの『山ノ』、田部さんから贈られた『山の思慕』、尾崎氏から贈られた『山の繪本』若しくは我が敬愛する友明石譲壽兄の名譯になるロバアト・バアトンの『憂鬱症の解剖』とか言ったやうな良書を読み耽ったりするのは、……」

とか、又「『山住み日記』より」の一項目「山の本と友情」の中では

「久しく山の本に飢ゑてゐた私が、先づ伊藤禱一氏から田部さんの『山と溪谷』『心の行方を追うて』續いて荒井道太郎・神谷量平兩君連名で『風車小屋だより』『バスク牧歌調』其他を贈って來られ、其の後、田部さんから『山への思慕』、荒井兄から『山ノ』、尾崎喜八氏から『山の繪本』、小宮良太郎氏から歌集『山稜』、田村榮氏から歌集『群蜻』(蘚社友合著)等それぞれ著者、(又は譯者)署名の美しい本を贈って來られたことは、近頃珍らしい幸福であった。……」

と友人達への親しみの文章を残している。

その頃しばしば高畑のもとに訪ずれた人に高力幸太郎がいた。昭和十一年(一九三六)六月五日、高力宛てのハガキがある。

「……小著の書名・内容は上の通り決定六月一日から組版に取掛ったさうです、挿繪の寫眞を至急送れと申して來ましたので貴兄から頂いたのも二、三枚加へましたが、若し採用されましたら何卒よろしくお願ひ致します。尚、小著は去二十九日の読賣新聞に他書と共に近刊予告の廣告が出たそうでが、御多忙中まことに恐縮ですが、同日のヨミウリ新聞一部(同日でなければ三十日か三十一日)御送り下さいませんでせうか。乍勝手御好意に甘えて御願申上ます。不順の折柄御自愛下さい。」

この文章はハガキの左三分の一に、右には「南郷ノ頭より陣場山の頂上」と記して、陣場山のスケッチがえがかれ、その絵の上に『山麓通信』の目次が書かれている。ハガキには二十篇とあるが、実際に出版された『山麓通信』には三篇が追加され二十三篇が収録されている。

便りの中にあった様に、扉をかざる写真には高力の写真は使用されなかった。本の内容には栃谷の里をめぐる高畑の若い友人達の姿が浮き彫りにされている。「自序に代へて」の最後の部分には

「折に觸れ、興に乘じて書き貯めておいた閒書や随想や紀行の一部が、このやうに一つの書物に纏められるやうになったのは、全く昭森社森谷均氏の好意に他ならない。また、本書の出版にいろいろ骨折って下さった秋朱之介、三浦逸雄の兩氏、常に助言を惜しまれなかった明石譲壽・荒井道太郎の兩兄、動植物其他に關する照會に對していつも懇切な回答を寄せられた高力幸太郎兄、貴重な寫眞を快く貸與された御器谷勝二氏、東章氏、岩瀬主一氏、加藤元一氏、等に茲で改めて感謝の意を表する」

と記している。

追記

『山麓通信』におさめられた作品のほとんどは書き下ろしと考えられるが、初出本が判明したのもあった。「栃の落葉」は『かやと』

の四・五・六号に、「中山峡谷とその附近」は『かやと』一号、「高原への思慕」は帝国大学新聞第六二八号に掲載されたものであった。

『山の子供達』

昭和十三年（一九三八）七月八日付の高力宛て、高畑からのハガキには

「こんな国境線入りのハガキで失礼、それに相変らずの悪筆も御容赦下さい。

戦争話や洪水話に此土地でも一喜一憂のところ、私へは荒井兄からビッグニュースが飛込み嬉しさ限りありませんでした。それは今度、同兄が編輯を引受けた『ハイキング』の校正完了の第七十三號に玉稿『再び「トッケ」に就いて附峠の語原のこと』といふ長篇が掲げられるそうで私も迚も楽しみにして居る次第です。文中漢字につけてある片假名の振假名が都合上平假名に改められたことを高力さんへ呉々も宜しく御諒承願ひたいとのことでしたから右傳言を御取次いたします、『ハイキング』の編輯は非常に氣骨が折れ此の處早朝から夜中の一、二時頃までブッ通しの執務だと今からもう悲鳴（？）を揚げてゐるやうです。お序での折で宜しいですから大いに鞭撻してやって下さい、私も原稿を頼まれたので20×20約五十枚といふ〝山の子供〟の一人を素材としたものを投稿することにしました。無論未發表のものでして元々『続山麓通信』のための取って置きの原稿でした。心友ＡＲＡＩが『ハイキング』の編輯にたづさはってゐる限り今後も大いに支援するつもりです。このまま晴れとほしてくれればいいと思ひます。祈御自愛！」

『山の子供達』に関する初めての消息であると考えられる。

昭和十四年（一九三九）には長かった栃谷生活ともわかれて、目黒区に住居を移し、第二利根ボーリングに勤務した。

『山の子供達』は、昭和十五年（一九四〇）十月三日発行、定価一円五十銭、総頁二三四頁、装幀は渡邊英男、フランス装であった。その後記には

「……私は唯いつその静かな山村生活にさよならするかわからぬままに、今こそ此の虔ましくも美はしい山村の牧歌をうたひ且つその山村に起居した間に得た多くの素材から、主として子供中心のものを覺書として纏めて置きたかったが爲に他ならない。だから、この書物に出て來る人達は勿論實在の人物であり、また私の最も愛する人達だ。その殆ど全部が實在の人物なるが故に、書中ではすべて假名を用ひたことを許して戴きたい」

と述べている。

内容の「勘太の巻」は栃谷の集落の子供、門倉勘太の物語で、学校を卒業して立川にある富士飛行機製作所の工員として入所する前後、勘太をめぐる友人達のこと、父栄三、母おちか、弟次郎作、そして十八歳で死去するお敬のことなどが物語の中心となってゆく。「お敬の臨終」にかつての恋人佐藤ナツのおもかげをだぶらしてみるのは考えすぎであろうか。この「勘太の巻」は「あとがき」に書いてある通り、荒井道太郎編集による「ハイキング」第七十四号（昭和十三年八月号）から第七十六号にかけて三回の連載となったものである。

「座談會の巻」は高畑のハイキング私見が述べられ、十五歳前後の少年達の山村生活と山歩きの事が、子供達の各種の発言としてとりあげられている。それ故に子供達の座談にしては内容がやや高級になり、子供達の素朴さが失われているのは、物語としては失敗に属するものと云うことができるが、高畑の山に対する考えを知るうえで貴重な文章であるということができる。

「師弟の巻」は山村にまつわる出征兵士などを、山の分校の近藤恒太郎先生の見聞記としたものであるが、近藤先生の中に高畑の分身を見出すことができる。「幸福になった敏ッペ」の中で

「……わづか二十三歳の若さで逝ったおとわ—お里坊を産むと人替りに産褥熱で脆くも逝ったおとわの薄倖を憫れみ、……」

と書いているのも、やはり佐藤ナツへの思いがこめられているのではないかと考えられる。

以上の三篇には刻々とせまる戦時下の山村の模様が、軍需工場に職場を移す少年や、支那大陸で戦死する山村の青年達のことなどがえがかれ、くらい時代の読み物となっているが、勘太を主役とする山村の少年の物語は読んでみて楽しい。それも陣場山の山麓を背景とした風物詩が随所に交りまぜられているからだ。仄聞ではあるがこの勘太物語は東宝映画によって映画化される予定であったが、敗戦によって中止されたと聞いた事があった。

しかし高畑の語る山村のことは「山荘だより」の中の数篇の話の中に、その真髄を求めることができる。何となくとぼけた、人をくった語りの中に漂々としてこの山村に生活している高畑の気持のはけ口があったかもしれない。

「奥様と毛蟲」は軽いタッチの小話。「流星」はかつて木曽谷を歩いた頃に見聞した老人の若かりし頃の思い出話、この話の内容については「或る行商人から聞いた話」とか『行雲とともに』の中の物語の中にも類似の文章を見ることができる。

高畑棟材に一番関係のあった山は、陣場山であろう。

陣場山の南麓栃谷川にそって、ひなびた湯宿二色鉱泉があった。高畑は昭和十二年（一九三七）頃より約二年間ここに住み着いた。都会に於ける経済的破綻、故郷喪失、山間漂泊の心が、ここ二色鉱泉大木政次郎宅の居ごこちよさに、又奥高尾山岳会の若い人達との交友がおちつかせたのかも知れない。それに高畑の欠点でもあり長所でもあった物事に執着せぬものがあった。めぐまれた著者、編輯者としての予定された仕事をもすてさせてしまったのだ。

高畑は『山の子供達』の「後記」に

「……本書の成るに際し、當時窮乏に喘いでゐた私のためにはるばる東京から數百枚の原稿用紙を贈って下すった田畑芙路子さんを始め、常に美はしい友情を示された荒井道太郎兄、上梓にあたり種々の點で助力を仰いだ高須茂氏其の他の方々に、心から感謝する次第である。」

とむすんでいる。

このあと高畑の足跡は、昭和十七年（一九四二）二月二十五日発行された『榾火』の中の「逃げた峠」の文章を最後として山岳界から消える。

『榾火』は山小屋随筆集のサブタイトルをつけた二一二頁の本である。発行所は朋文堂、定価一円であった。執筆者は小島烏水を始

め三十八名の登山家、文筆家の文集であって「あとがき」に「この一巻は山岳雑誌『山小屋』第一二〇號――即ち創刊以來滿十ケ年――を記念して、編んだものである。現在の『山小屋』は、山岳雑誌中でも最も深い内容を狙った編輯方針をとってゐるのであるが、これはかつての『山小屋』のもってゐた山岳雑誌界の文藝春秋的なよさを示す特徴の一斑として、読者から親しまれてゐた（焚火欄）の氣分を生かすやうに努めて編んだものである。」と編者の高須茂は書いている。転載と書下ろしによって作られた本であるが、高畑の「逃げた峠」は新しく書かれたものである事が、高須から高畑への手紙によって確認することができた。

あとがき

私にはその生前にお会いしたかった二名の方がいました。木暮理太郎と高畑棟材のお二方でした。

私の山歩きの前半のごく少しの時期ですがお二方と共に山を歩いていたわけとなります。しかしついにそのお姿におめにかかることなく、著書を通じてしかそのおもかげを感じるしかありませんでした。

それは木洩日（こもれび）が小さな沢の水面にはねかえった光の漂いのようなもので、一瞬のことでありましたが、私の心の中に残ってゆきました。

高畑棟材さんの著書を読みはじめたのは十代の終り太平洋戦争のはげしい時でした。その頃には他に大島亮吉さんや尾崎喜八さんの紀行にものめり込んだものでしたが、異質の内容の高畑さんの著書に私はだんだん近づいてゆきました。

戦争が終って世の中が落ちつくにつれて、山に於ける考証という事に興味をおぼえるようになりました。そして『山を行く』に次いで読んだのが『行雲とともに』でした。

三十歳代後半、ようやく西上州の山域に足をふみ入れる事ができるようになりました。父不見山に登り、赤久縄山頂にたどり着くことができました。

私は高畑棟材という人の事を、しきりに考えながら山を歩きました。著書から受けた印象が実に強烈であったからでした。四十歳代の山行の大半を西上州山域につぎ込みました。そして『山と渓谷』四一二号に「地域総合ガイド・西上州の山々」の特集を組んでもらいました。

ある時、雑誌『新ハイキング』を通じて神谷量平さんにお会いすることができました。そこで親しく高畑さんに関する話を聞くことができました。

それと前後して高力幸太郎さんにめぐり会う事ができました。陣場山麓栃谷時代の高畑さんについての生活の実態を親しくうかがうことができました。その死去にいたる晩年の生活をも知ることができました。

又、偶然にも私の勤め先での健康診断の時、献体のことを順天堂病院から派遣された内科医に話をしてみたら、高畑さんの献体の調査をしてくれました。そして私は高畑さんの墓所である駒込の吉祥寺を知ることができました。

高畑さんゆかりの山、高尾山や陣場山にも幾度か登りました。あ

る時陣場山麓の大木さん宅を訪ねたところ留守でしたが、宿の廊下の一隅の反古の中から一束の手紙の束を拾いました。その中には今まで知られなかった栃谷時代の高畑さん宛てのハガキ・手紙がまじっていて、高畑さんのかくれた一時期の消息を知ることができました。

神谷宅へおうかがいしたり、高力宅を訪ね徐々でありましたが、高畑さんの実像が私の眼の前に浮かんできました。思えばその頃私は会社勤めをしていた時ですから、かれこれ二十年前の事になると思っています。

高円寺、阿佐ヶ谷、本郷農学部前、神田神保町の山の古本のありそうな古書店めぐりをしました。高畑さんの著書、それにまつわる古書を購入しました。その数は四十冊ほどで今日私の本棚の一隅を占領しています。

昭和五十年代、高尾山麓妙音谷の佐藤家へおじゃました事がありました。そして裏山にある佐藤ナツさんの墓参もしました。その帰路高尾山口にあった熊沢敦子さん宅へおじゃまして佐藤ナツ追悼の小冊子を拝借しました。又高畑家の戸籍謄本等も送っていただきました。又の日八王子の佐藤文男宅へおじゃまし佐藤さんが編集した佐藤家に関する小冊子をいただきました。小名路にある旅館花屋を訪ねた事もありました。

高力さんからは「奥高尾山岳会」の会報を拝借したりして、高畑さんをめぐる数々の人脈を知りました。

そうこうしている中、山と渓谷社から私は『知的登山のススメ』と『低山逍遙の真髄』の二冊を出版しました。この二冊の著書の底辺には大正期から昭和初期にかけての低山派の岳人達、又山の考証をされた木暮理太郎、武田久吉、高畑棟材、数々の紀行文を発表された大島亮吉、河田楨、尾崎喜八等々の活動を中心として書いてみました。

読書の対象として面白いのは伝記であり、自伝、書翰集、又その人達の残してくれた紀行集であると考えています。

伝記で一番興味のあるのは、書かれている人物のマイナー面にあると思われます。それが自伝の場合にはマイナー面が巧みに隠れされてしまっております。しかし第三者の書く伝記には容赦なくその事実がほり起こされてゆきます。

御承知の通り伝記には紀年体と編年体があります。高畑さんの伝記を書くに当って色々の方法を考えてみました。

伝記を書くにあたり第一級の資料は本人の日記です。それを傍証するための書翰集とか家族の証言を得られれば最高の伝記が成立するものと考えています。高畑さんの場合はその日記に相当するものはありませんが、幸いにして多くのハガキ、書翰が残っていました。それに四冊の著書があり、その中に生活のことが語られてありました。又高畑さんの属していた、日本山岳会、安田山岳会、霧の旅会の年報、会報から時々刻々の行動を知ることができました。

前述しましたが、一番の収穫は二色鉱泉のゴミの中から拾ってきた高畑宛ての書翰類でした。それに神谷、高力、佐々木隆さん宛ての手紙によって高畑さんに関する各項目を組立ててみました。

高畑さんと一時期行動を共にしていた日本山岳会の「土曜会」（註1）の方達に会いましたが、高畑さんに対しての好意のある回答が

あったのは故・野口末延さんからでした。よく桜新町の野口宅に『山岳』を借覧に来た高畑さんのことを語ってくれました。他の人々はすでにこの件に関しては忘却のかなたとなっていたようでした。

当時、『岳人』の編集長であった、高須茂さんにいたっては罵詈雑言、私まで悪者にされてしまいました。昭和十六年（一九四一）の高畑さん宛の鞠躬如とした内容の手紙を見た時のおどろきは忘れることができません。

そういう雰囲気の中で、高畑さんに対して暖かな眼を向けていた人に神谷量平さんがいました。

自伝に於けるマイナー面について書いてみたいと思います。私は若い頃、シュリーマンの自伝『古代への情熱』を読んで感激しました。一九九四年トルコを旅行して、トロイの遺跡を見ました。そして現地に残されたシュリーマンの暴挙の数々を見てきました。そこでは自伝に書かれてないマイナー面を知りました。

伝記というものは、本人が書かなかったことを傍証や他の文献から堀りおこしてゆく所に価値があり、諧虐的な面白さがあるものと考えられます。

私は、「行雲とともに―高畑棟材伝―」を書くにあたって、森鷗外の『澁江抽斎』を参考にしました。鷗外は文献考証家であった「弘前医官澁江氏蔵書記」という朱印から澁江抽斎の伝記を書いています。それは探偵小説が事件を解決してゆくような方法で澁江抽斎の人物をえがいています。私にはとてもそのような考えも知識もありませんが、私なりに最大の努力をしてみました。

私は高畑さんの著書を通じて『新篇武蔵風土記稿』『多摩郡村誌』『武蔵通志』（山岳篇）を知ったのでした。又私の山との距離もそれ等の文献を知ることにより、加速度をつけはじめてゆきました。そして今も続いています。

最後に桂倶楽部の事について記してみます。『山岳』にのっていました沼井鉄太郎（註2）さんの追悼文の中にその存在を知りました。川崎精雄、望月達夫さんに桂倶楽部についてお聞きした処、早速望月さんより沼井さんが雑誌『アルプ』所載の「蛇尾谷物語」にそのいきさつがあるとのお知らせをいただきました。沼井さんは

「ところで、蛇尾谷の物語をするに当って私として無視できないのは桂くらぶのことである。それは私の手記によると一九二一年九月二十四日の発会となっている。これに就ては故高畑棟材氏が山岳二十三年二号（一九二八）の『大塚泰亮君を憶ふ』という追悼記中に、『桂倶樂部。それは沼井、岩永、別宮、百瀬（慎）、大塚その他の諸兄によって結ばれたところの友愛に充ちた麗しい山のあつまりであった。』」

と記しています。そして文章の中に「私の従弟棟材君は」とあるのを見ると沼井さんとは親戚関係にあったことがわかりました。そのメンバーは、沼井鉄太郎、岩永良三・信雄、高畑棟材・良材、大塚泰亮、永美益夫、木下国助、別宮貞俊（註3）、安芸皎一等でありました。メンバー達は大蛇尾川や三ッ峠山の屏風岩の試登をしています。このグループは高畑さんにとっては異質のものであったのではないかと推定しています。非常にユニークなくらぶで、高畑さんの明るさが反映された時代でもあったかもとも考えられる。しかし「数年にして発展的自然的に解消し」てしまったと沼井さんは記し

ています。

少し、個人的回想を述べてしまいましたが、私は書き終えてホットしています。

熊沢敦子さん、そのお子様の勅使川原黎子さん、新島淳良さん、神谷量平さん、高力幸太郎さん、川崎精雄さん、望月達夫さん、田村栄さん、横山厚夫さん、山村正光さんから手紙等をいただきました。その他大勢の山の仲間からも激励の手紙や電話をいただきました。ありがとうございました。

（註1）土曜会＝毎週土曜日の午後、野口末延、神谷恭等霧の旅のメンバーらがクラブルームに集まり、談話会を開催した。

（註2）沼井鉄太郎（一八九六～一九五九）＝東北大卒、尾瀬至仏山に登りはじめてその記録を発表した。又「台湾登山小史」「日本山岳会五十年史」等を『山岳』に発表した。

（註3）岩永信雄（一八九五～一九七九）＝初期の黒部の開拓者、「黒部川より立山川への旅」を『山岳』第二十一年二号に発表した。別宮貞俊（一八九三～一九五八）＝第八代目の日本山岳会会長をつとめた。又住友電気工業株式会社の初代社長となった。

—終—

・参考文献

『山を行く』（高畑棟材・朋文堂）、『行雲とともに』（高畑棟材・朋文堂）、『山の子供達』（高畑棟材・朋文堂）、『山麓通信』（高畑棟材・昭森社）、『東京附近の山々』（高畑・河田・朋文堂）、『奥秩父と其の附近』（高畑・河田・朋文堂）、『樽火』（朋文堂）、『大菩薩連嶺』（松井幹雄・自彊館書店）、『霧の旅』（松井幹雄・朋文堂）、『山の繪本』（尾崎喜八・朋文堂）、『雲と草原』（尾崎喜八・朋文堂）、『西上州の山』（野口冬人・朋文堂）、『一日二日山の旅』（河田楨・自彊館書店）、『山』（大島亮吉・岩波書店）、『山と渓谷』（田部重治・第一書房）、『新篇武蔵風土記稿』、『多摩郡村誌』（日本山岳会）、『武蔵通志（山岳篇）』（日本山岳会）、『世界山岳百科事典』（山と渓谷社）、『日本山岳文学史』（瓜生卓造・東京新聞出版局）、『中里介山伝』（杵木田龍善・読売新聞社）、『墓畔の草』（私家版）。

雑誌『山小屋』、『アルプ』、『岳人』、『山と渓谷』、『ハイキング』、『新ハイキング』、『霧藻』（安田山岳会）、『霧の旅』（霧の旅会）、『山岳』（日本山岳会）、『奥高尾』（奥高尾山岳会）、『山書研究』（日本山書の会）。

（誌面の関係で年譜は略す）

図書紹介

田口二郎著『東西登山史考』

岩波書店　一九九五年五月刊
変型文庫判（同時代ライブラリー）
二四七ページ　定価九五〇円

今年は戦後五十年目という節目の年にあたるため、いろいろな分野で過去を振り返り、検証しようとする動きが盛んだが、わが国の近代登山もスタートして既に一世紀が経過した。世界の登山の本流とも言うべきアルプス登山となると、その歴史は二世紀になる。登山の行く末を見定める上で、足下を見つめ直してみる好機である。本書は、そのための絶好のテキストといえる。ちなみに本書では、アルプス登山のスタートを一七八六年のモンブラン登頂に置き、わが国の近代登山の出発点は、志賀重昂「日本風景論」の刊行（一八九四年）と小島烏水の槍ヶ岳登頂（一九〇二年）との中間点である一九〇〇年頃としている。

本書は、登ること自体を目的とした趣味の登山という人間行為（＝文化）が、どのように生成、波及、発展してきたかを、ヨーロッパアルプス、日本の山岳、ヒマラヤを対象として考察したエッセイの労作である。

第一部「アルピニズムの流れ」、第二部「三人の日本人登山家」、の二部から成っているが、第一部が概説、第二部が槇有恒、松方三郎、今西錦司の三人をとりあげたケーススタディになっている。第二部の三篇は、以前「山岳」に掲載されたことがあり、人物評論としても秀逸だった。随所に散りばめられた著者の登山観、登山史観にも豊富な経験と深い洞察に裏付けられた説得力があり、それを敷衍して、山崎安治さんや深田久弥さんとはひと味違った「田口二郎登山史」を書いてもらいたいという期待を抱いた会員の方も多かったはずだ。今回、完成した本書を通読して、まず感じたのは、第一部と第二部がよく嚙みあって、第二部も書下ろしのように新鮮な印象を受けたことだ。

これまで書かれるべくして誰もが敬遠してきた難しいテーマに真正面から取り組み、足場をしっかりと現代においた上で、内外の文献を渉猟し、スケールの大きな一書にまとめあげた努力に敬意を表したい。文章も明快で歯切れがよい。翻訳書を別にすれば、本書が著者にとって初めての著作とは信じがたい位だが、八十二歳にしてこれだけの労作を仕上げた著者の意欲、気力、志の高さに感服せざるをえない。

本書は、題名が「史考」となっているように、いわゆる登山通史ではない。登山家列伝とも違う。「あとがき」のなかで「登山が変容し、また伝播するエネルギーをもつのは、ひとことで言えば、人間のもつ未知を既知に変えようとの好奇心・達成心・遊戯心・他との競争心・模倣心であろう。これらの要素こそ、登山を新生させ、

拡大させるのである」と述べているが、著者の関心は、登山史に内在するダイナミズムとそれを生み出す力である。登山の技術、登り方、流儀、あるいは組織の背後にある人間の主体的側面に焦点を合わせ、登山の変化を見つめたところに、本書の特色がある。もうひとつの特色は、日本の近代登山の発展を世界の流れのなかで捉え、その特異性を客観的に明らかにしようとしたことである。日本よりも百年早くスタートした欧州アルプスの登山については、その流れを詳述するよりも、ひとつのモデルとして日本型登山の姿を映し出す鏡の役割をさせている。

経済、産業、社会の発展段階の相異や構造の違いが登山にも大きな影響を及ぼすことは言うまでもないだろう。装備や用具、山へ登る人の数、主たる担い手、動機などがどう変化してきたかを考えれば、一目瞭然である。一方、自然条件の違いは登山の中身に決定的な意味をもつ。高度はせいぜい森林限界を超すぐらい、「深山幽谷」が舞台の日本の山には、氷河の上の氷雪と岩の世界で発達した欧州アルプスの登山とは異質の登山文化が生まれるのは当然である。何よりも自然観が異なるからだ。けっして価値の高低の問題ではない。こういった認識を踏まえて、明治から大正時代にかけて、日本の伝統登山の基礎が作られていく過程を描く著者の目は冴えている。「登山思想の外発性とアルプス渇仰、氷河願望の由来」、「深山幽谷故に発達した渓谷登りと縦走」、「わらじの果たした役割」、「登山と望山の両立」、「山人の技術と生活術の貢献」、「明治の探検登山の行き止まり」、「静観思想による山の再認識」、「西洋と共通の個人の自律とリーダーレス登山」等、興味深い指摘が多い。

日本型登山を考える上で、著者のもうひとつの視点は、日本に入ってきた欧州生まれのアルピニズムが日本の登山や登山家にどんな影響を与えたかということである。この点についての観察の深さが本書を類書に較べて一段と際立たせている。

わが国における近代登山、あるいはアルピニズムは、一九二二（大正十）年にアイガー東尾根を初登攀した槙有恒氏の帰朝とともに始まり、登山界を席巻したとされる。しかし、著者の見方によれば、この新しい波は、それ以前の、いわゆる伝統登山を蹴散らしたのではなく、その堅牢な潮流の上に乗って発展したことになる。その意味では、本書を、初期の段階で、アルピニズムに疑問をもって立ち止まった二人の登山家、大島亮吉、今西錦司氏の登山観を述べることから書き始めているのが象徴的だ。著者は両名の一世代後の登山家である。また、登山はもとより仕事でも生活でも豊富な国際経験をもつ国際人である。しかし、というより、それだからこそ、著者は、大島、今西両氏と同じ疑問をもって立ち止まり、彼らが抱いたであろう屈折感や矛盾、煩悶を共有したと言っていいだろう。それが本書の底流になっている登山者の心や物の見方、考え方への関心につながっているし、第二部の三篇の人物論の下敷きになっている。

著者は、「あとがき」のなかで、「三人の山の世界を検討するうちに、いずれも重層的にできていること、どの層も彼らが心身で体験した登山を反映していること、その登山自体が歴史的、地理的、文化的に成立した客観的地盤をもつことを教えられた。一人の登山家が体内に多くの登山をもっているということである。さらに、この多様さは、登山が歴史的に変容すること、したがって一人で何代も

の登山を経験しうること……。一人の登山家の体内にさまざまな登山を植え付け、他と共存させることが可能であることもわかった。」と述べているが、ここに著者の問題意識が集約されている。従って、最初に「第二部」を読んでから次に「第一部」を読むと、著者の「史考」の原点をよりよく理解できるかもしれない。いずれにせよ、啓発されることが多い本だ。そればりでなく、小島烏水の書評のなかに烏水と大島、板倉たちとの世代間の断絶を感じる話やマナスルの登山許可を京大が日本山岳会に委譲する際に「死せる大島、生ける今西を走らす」と思った話等、面白いエピソードも沢山盛り込まれていて飽きさせない。特に現役で活躍している若い人たちに読んでもらいたい。

最後に若干の注文をつけさせていただくと、ひとつは、全体の構成のなかで、「第一部」の「Ⅲ現代登山の流れ」に統一を欠く点や、突っ込み不足がみられ、残念に思ったことである。

例えば、著者は、道具と技術の統一と普及、情報の蓄積、マスメディアを通じての伝播等によって登山の大衆化が進み、「かくして、わが国の近代登山史に見られたアルピニズムと伝統登山との葛藤は、登山史の進展そのものによって、根本的に解消されたのである」と述べているが、そんな簡単に言い切っていい問題であろうか？更には流儀の問題である。著者は、ヨーロッパ登山の流れを描くにあたって、流儀という概念をキーワードに使っている。「流儀は登山のリスクのとり方とそれに対応する装備と技術のあり方によって特色づけられる」という立場から、イギリスの選良主義、ガイドから登山者への技術移転、ガイドレス登山やリーダーの必要性をめぐる議論等を展開しているのは卓見である。しかし、ヒマラヤ登山の流儀の問題はどう考えればいいのだろうか？　一九五〇、六〇年代のいわゆるヒマラヤ黄金時代には戦前からの各国の流儀をひきずっていたものが、その後、技術の統一化と普遍化によって各人が自分の責任でリスクをとる選択の幅がひろがるとともに意味をもたなくなった、というのが著者の考えのようだが、果たしてそう云えるだろうか？　酸素の使い方にしても高所順応の方法にしても、また組織の問題やシェルパの使い方の問題にしても、流儀との関連で検討すべき課題が沢山あるように思う。また、一九八〇年以降のスタント化の動きについては、日本山岳会も関連するが、全体の文脈からすれば、もっと突込んだ批判があってもよかったと思った。しかし、これらの問題は、著者に要望することというよりは、若い世代の登山者に渡された宿題と見るべきかもしれない。

もうひとつ気になったのは、文中に出てくる人名、山名、書名の表示である。人については生年、死亡年を付けてある場合とそうでない場合がバラバラである。山の高度も違うものが統一されずそのままになっている例が散見される。文献も、幾つかの本には発行所、発行年が入っているが、重要なかなりのものにその記載がない。外国の文献で翻訳のあるものはそれを明記してほしかったし、原題、発行年も、文中に入れないとすれば、巻末に文献リストをつける方法もあった。啓蒙の意味あいが強い好著だけに残念な気がする。

（中島　寛）

根深　誠著
『遥かなるチベット』

山と溪谷社　一九九四年十月刊
A5判　三二〇ページ
定価　二六〇〇円

河口慧海の足跡を追って、という傍題が示すように、慧海がネパールからチベットに入った謎の経路を現地にさぐった紀行である。

一九〇〇年（明治三十三年）、慧海は、単身、ネパール奥地からチベットへ足を踏み入れた。日本人初のヒマラヤ経験である。その行動は宗教上の信念から発したものではあったが、その探検的精神は近代のものであり、日本離れしていて、慧海が日本の生んだ稀有の探検家であることは、日本よりもむしろ欧米で認められている。慧海の行動は時代の常識を越えていたし、またその一部には謎を秘めているところがあるから、慧海の業績が正当に評価されるのには長い年月が必要だった。当時は、あの幸徳秋水も慧海を中傷する記事を書いていたという。もっとも、その著作『チベット旅行記』が文庫本化されているいまも、慧海の名を知らず、あるいはエカイとも読めずに、団体を組んでヒマラヤの山中を歩いている人が多いことを思えば、はたして理解の程度は深まったといえるのかどうか。

ネパールからチベットへの入国は当時厳しく止められていたから、慧海も旅行記の中でその経路を明らかにしていない。周辺の風物の記述も普遍的な描写で、具体性に欠けるところがあるのだが、それを読みときながら現在のヒマラヤ山中にその行程の謎を追う旅は、慧海に関心を抱く者ならば、だれもが実際にやってみたい夢の一つである。著者は一九九二年、その夢を実行に移す。ヒマラヤの氷雪の高峰に登り、それと関連してネパールの山村にもつよい興味を抱いて知識と経験とをたくわえている著者は、さらに日本での豊かな山村生活の経験も併せ持っていて、この謎ときの実行者（探偵）としては最もふさわしいといえる。

「歩いて旅すること自体が論証」だという著者は、カリガンダキの谷の奥のローマンタンや、辺境の地トルボの荒涼とした風景の中に厳しい旅をつづけるのだが、その旅は新鮮な驚きと喜びに満ちている。慧海が、辺境の、苛酷な自然条件の中に入りながら、つねに暖かい眼差しを持ち、単純な好奇的・猟奇的な視点を持たなかったのと同じに、著者のヒマラヤ山中の風物に接する眼も、視野が広く、明るく澄んでいる。

核心部トルボ地方への入域許可がおりない時、強引に入域を突破しようとする著者にネパールの友人が語る。「ムスタンがまだ外国人の立入り禁止区域だった頃、無許可で入域して本を書いた日本人がいる。これがもし逆の立場ならどうなるか、日本に外国人立入り禁止区域があり、私がそこへ入ろうとしたら、あなたはどうするか。」

著者は「モハンの忠告に従わないわけにはいかなかった。世話になっていながら、その忠告を無視するのは仁義に外れる。私は意を撤回した。」

この本が気持よく読めるのは、著者のこうした姿勢がつねに底に

流れているからであろう。さらに、筆の運びは滑らかで、豊かな表現に満ち、ことに山地の風物を描く文章は爽やかである。

——周囲の穏やかな自然の造型美を眺めながら、秋の陽射しを受けて、私は馬上で眠くなっていた。ジャビアンは大声でチベットの牧童歌をうたっていたが、余韻嫋々たるその旋律がまた、周囲の風景に相応しく、私の眠気に拍車をかけるのだった。

——翌朝、冷え込みが厳しく風景は凍てついていた。陽があたると、あちこちから「パチパチ」と線香花火がはじけるときのような澄んだ音が聞こえてくる。霜柱が氷解する音である。

——風景は澄み渡り、輝いていた。眼下に広がる小麦畑では濃緑色の穂が風に波打ち、まっさかりの菜の花畑は黄橙色の光彩を放っていた。ソバ畑も一面にうす紅色の花を咲かせている。

——出発までのその間、私は日溜まりの草地に座ってぼんやり周囲の風景を眺めて過ごす。緑の草地に覆われた斜面が幾重にもうねって連なり、背後に赤褐色にそばだつ岩山がある。さらにその向こうの谷間の奥には、小さな氷河を山頂部に戴く山並みが見える。澄明なせせらぎと野鳥の啼き声が聞こえ、乾いた朝の涼風が耳もとをかすめていった。西空に半月がかかっていた。

こうしたこまやかな描写を随所にちりばめながら、旅は核心部へ近づいてゆく。慧海が辿ったのはトルボと呼ばれる地方。

——トルボはヒマラヤ地域の中でも特に素朴で、文明の進歩から置き去りにされたような地域である。北側はチベットとの国境に接し、南側はヒマラヤの峻険な氷雪嶺に包囲されている。この地域にいたる容易な経路は絶無である。どの経路をたどるにせよ、五〇〇〇メートル級の峰をいくつか越えなければならないし、または峡谷を通過しなければならない。

そしてこのトルボ地方の旅の終局で、著者は慧海の記述と符合する峠と湖に出会い、謎のルートを確定するのである。

——私は目的を達成して気分が昂揚していた。かつてヒマラヤでの初登頂を経験したこともあったが、それにも増して、それは嬉しいことであった、と著者は述べている。

もう二十年も前、私もカリガンダキの谷にそって何日かの旅をしたことがある。カグベニとかマルファ、トゥクチェなどと、あの山峡の美しい集落の名やその周辺の風物の描写、あるいは豊富に挿入された写真（著者と川崎博カメラマンとの共作）など、ページをめくっていると、望郷の念にも似た、なつかしいおもいが胸をみたした。

しかしその一方、時代が急速に変っていて、ネパールの奥地やチベットにも、環境破壊と観光汚染が広がっていることを知らされて心は重かった。著者は、ＮＨＫＴＶの例の「ヤラセ事件」のあおりをまともにくらって出鼻をくじかれるのだが、その舞台ムスタンでは、入域禁止がとけても住民は喜ばない。なぜなら「カトマンズの旅行代理店がすべてを取り仕切って、高額の特別入域料を徴収しても地元にはなんの利益ももたらさない」からという現地住民の話を伝えている。ラサの空港での欧米人によるすさまじい順番争いや、チベット山中の美しい湖での鉱毒汚染も報告されている。

ヒマラヤは、氷雪の山への遠征やトレッキングがますます盛んである。しかし、現地住民やそこの独自の文化とのふれあいという点

になると、その大半はきわめて心貧しい状態にあるのではなかろうか。著者の旅は、資金に乏しく、決して恵まれたものではなかったようだが、その点では実に豊饒な内容を持っている。ヒマラヤ山地の旅をすでに経験した人も、これからそれをめざす人にとっても、そこから汲みとることのできるものは多い。そして、ヨーロッパの名だたる探検家たちの傑出した記録とはまた趣のちがった、穏やかなヒマラヤの探検的紀行が生まれたことを喜びたい。

髙村光雲・光太郎などとの接点を含め、晩年の慧海についての跡づけがおこなわれているのもありがたい。巻末付録に、著者と川喜多二郎、江本嘉伸両氏による座談会がある。

（大森久雄）

薬師義美編

『ヒマラヤ文献目録』

白水社　増訂第三版　一九九四年刊

A4変型判　一三二〇ページ　五八〇〇〇円

この文献目録がはじめて出版されたのは、一九七二年末のことで、五〇〇部限定の私家本という型をとっている。

増訂第二版は白水社から一九八三年の春に出版され、欧文図書は三、七五二点（初版一、九一六点）、邦文図書は八五五点（初版二五六点）が収録されている。

今回の増訂第三版では欧文図書は七、六〇一点、邦文図書は一、七九七点で合計九、三九八点が収録されている。合計収録数を初版と比べると約四・三倍にふくれ上がっている。よくぞ一万点に近い関係図書を収録したと感嘆させられる。

目次に目を移すと、本書はパート1とパート2に分かれている。パート1は「欧文図書」で冒頭にはビブリオグラフィ（文献目録）が一四七点収録されている。

例えば、

X46 The Himalayan Club 1944. The Himalayan Club library. Classified catalogue of books, with alphabetical index of authors……

あるいは、

X56 Itō Toshio & Akio, Katayama (ed.) A Comprehensive Bibliography on Loulan and Lop-nor for 1979-1988……

といった具合である。

次は本書の圧巻でもある欧文図書が、アルファベット順に編著者名が見出しに挙げられ、発行年、書名、発行地、発行所、サイズ（cm）、ページ、図版、地図、概要ないし解説等が順次続く。翻訳本があるものは、邦文も含め、それぞれの国の言語で記載されている。

一例を挙げると、五三四ページには、

N122 Nicolson, Nigel 1975

a) The Himalayas. (The world wild places). (Time-Life Book). London, Time-Life. 4to, 184 p., over 100 ills., maps. London, Silver, 1978. (Lib. bdg.)

b) Der Himalaya. (Die Wildnisse der Welt).

(Time-Life Bücher). Übers. von J. Abel.
Amsterdam, Time-Life, 1975. 26×23, 184 p., 100 ills., 3 maps./5 th ed., 1979.

c) El Himalaya, Zonas salvajes del mundo. Salvat, Time-Life, 1975. 26×23, 184 p., ills., maps.

d)『ヒマラヤ―未踏の大自然』金井弘夫監訳, タイム・ライフ・ブックス, 1976, 25.5×22, 184 p., 96 ills., 2 maps.

となっている。

欧文図書は三三ページから八〇八ページまで続いている。

次に「地図」の項目がある。

1. Himalaya General & Central Asia
2. The Pamirs
3. Tibet, Xinjiang, Qinghai & Yunnan
4. Hindu Kush (Afghanistan & Pakistan)
5. Karakorum & Nanga Parbat
6. Indian Himalaya (Kashmir, Ladakh~Garhwal)
7. Nepal
8. Mount Everest/Qomolangma/Sagarmatha
9. Sikkim & Bhutan

に分類されていて、八〇九ページ~八二四ページの間に各々の地域の地図が収録されているのだが、この九項目の地域が即ち本目録に収録されている図書の対象地域である。

パート2は「邦文図書」で、欧文書と同じく、編著者があいうえお順に見出しになっている。邦文図書の項目の特長は一ページ、縦二列組みになっていて左側は邦文、右側には同じ分量の英文の翻訳が付けられていることである。

例えば、九六二ページには小生の本で恐縮だが、

JT66 田村俊介編著
『パミール―シルクロードの城塞』ベースボール・マガジン社, 昭和51年, A5, 204頁.
1974年のレーニン峰登頂（新潟大・大阪外大合同）の記録, パミールの概念, 探検史などを収録.

と左欄にあり、同ページの右欄には、

Tamura, Shunsuke (ed.) 1976
The Pamirs. Fortress of the Silk Road.
Tokyo, Baseball-magazine-sha, 21×15, 204 p., 32 p. col.-ills., 16 p. b/w ills., maps. Account of the ascent of Peak Lenin in 1974 by the Niigata and Osaka Foreign Language Univs' Alpine Clubs joint expd., containing a general survey of the Pamirs, history of exploration, and others.

となっている。

次に「邦訳書」が収録されているが、ここには「欧文図書」の項目で収録されなかった邦訳図書が集められている。

パート2の邦文図書はこれで終り、次に「ロシア語図書」が筆者（田村）の編で八三点収録されている。見出しはロシア語表示の編著者名でローマ字によるトランスクリプションが付いている。各図書の解説は英語でなされている。第二版本まではロシア語図書はなく、第三版で新たに付け加えられたものである。

さて最後に索引であるが、

邦訳書著者別一覧
邦文図書名一覧
欧文図書名一覧
総合索引

の順になっているのだが、最後の総合索引は編者の力作で、本書の特色がよく表れている。

見出しの中でも太字で示されている項目の例を挙げると、K項では、

K2 (Chogori), Kailas, Kangchenjunga, Karakorum, Kashmir, Kashmir & Jammu, Kashmir & Ladakh, Kathmandu, Kuen Lun, Kumaon & Garhwal

などである。

この内の例えばKathmandu の項の見出しは

general, archaeological excavations, architecture & environment, cultural heritage, development & planning, experiences & life, flora, folk-tales, guide-book, Hanuman Dhoka, monuments, Newars poetry, photo-book, preservation of physical environment & cultural heritage, religious life, socioeconomic ecology, temples, travel-guide, visit.

などが立ててあり、カトマンドゥーに関する広範囲な情報が得られるようになっている。

編著薬師義美氏は一九三六年生れ、本会の会員である。主要著書には「遙かなるヒマラヤ」「神々の白い峰」など、訳書にはフレッシュフィールドの「カンチェンジュンガ一周」、フーカー「ヒマラヤ紀行」、デシデリ「チベットの報告」などがある。ヒマラヤ文献学の世界的権威である。

本書の「追加・訂正」の小冊子（一六九頁）が一年後の九五年十月に私家版で刊行された。

（田村俊介）

スコット著　中田　修訳

『南極探検日誌』

一九八六年十二月刊　菊判　四五四ページ

アムンセン著　中田　修訳

『南極点』

一九九〇年八月刊　菊判　三八三ページ

ピアリー著　中田　修訳

『北極点』

一九九三年十月刊　菊判　二九二ページ
ドルフィンプレス刊
発売　オセアニア出版各巻六〇〇〇円

文学に古典があるように、極地文献にも古典がある。時代は変っても、人が生きることには変りがない。その時代時代に、探検家は

自らの意志と情熱で未知なる部分を探り拓いた。現代は純然たる探検は存在しない。探るべき未知の部分を失い、地理的探検はすでに過去のものとなった。行動の方法論や新しいアイデアで探検的行為をしなければならなくなった。だが、自然や気象条件そのものは変ってはいない。対処法が変わり、情報を先取りできる分だけ安全性が高められただけである。

二十世紀初頭は残された空白部への挑戦の時代であった。中央アジアではスタインやヘディンらが競って活躍し、地図の空白部を埋めていった。極地では、南北両極点への初到達が試みられていた。人間の叡智と情熱、あくなき探求心が苛酷な自然を克服していったのである。

スコットとアムンセンの南極点争いを、争いであるかどうかを確認する以前に、そのまま歴史的事実として受け入れ、少年少女を対象にした冒険譚の一節として認識された。ピアリーの北極点も同様で、認識はそこでとどまり詳細な内実を知ることはなかった。彼らの著述の一部分しか伝わらず、皮相的にしかとらえられなかったのだ。

極地探検文献の古典ともいうべき三つの記録――すなわち、ピアリーの『北極点』、アムンセンの『南極点』、それにスコットの『南極探検日誌』――が一人の訳者の手により全訳された。極点初到達から八十年以上を経た現在、当時の記録をそのままの形で読めるのである。

スコットはディスカバリー号による第一次探検で八二度一七分に達した。当時のイギリスは国力を誇り、地理的探検に国家の威信をかけていた。テラ・ノバ号による第二次探検の報告二巻本のうちの第一巻が全訳された。出発から帰還まで丸四年をかけているが、第一巻に編まれたスコットの日誌は、メルボルン出航から遭難直前までの一年四ケ月にわたる行動が克明に綴られている。家族あての便りが随所に盛りこまれている。探検隊の日々の記録からスコットの人間的な面が浮き彫りにされる。スコットはアムンセンとよく比較されるが、それぞれ性格が全く異なる隊であった。スコットの目的は南極点到達の他に、広範囲の科学調査があった。悪天候に苦しめられた末全員遭難死したが、岩石などの採集標本を最後まで放棄しなかった。科学調査は縮小されることなく予定どおり忠実に進められた。八ケ月後、遺体とともに日誌が発見され、南進隊の全容が明らかにされた。アムンセンと比較してスコット隊の遭難の原因や欠点を指摘することはたやすい。だが、興味本位の極点レースという観点からだけではスコット隊の真の姿は見えてこない。

付録に第二巻の目次がある。チェリー・ガラードの日記や北部班（キャンベル隊）の記録が収められている。北部班の記録はぜひ読んでみたいもののひとつである。

アムンセンは北極点めざしていたが、ピアリーに先を越されると急遽目標を南極点に変え、スコットと競合することになった。アムンセンは南極点到達を最優先させた。科学調査もしたが、スコット隊に比べるとわずかなものである。作戦どおり全てが順調に進んで極点に初到達した。復路は好天に恵まれ快調に帰還した。隊は明るさに満ちユーモアにあふれていた。成功の後に書かれたせいか筆が滑らかで弾む気持ちが伝わってくる。スコットの遺書とは対照的で

ある。

アムンセンの肖像写真を見ると、眼光鋭く獲物を射るような眼をしている。生死を賭した探検を成功させるにはそれだけの気迫が必要だったのだ。年齢より老けて見えるのは多くの修羅場をくぐりぬけてきたためだろう。極地探検の凄まじさが想像される。『南極点』に表われている明るさとユーモアは、アムンセンの自己透徹の厳しさから生じたものに違いない。フラムハイムからは隊員たちの鼻歌が聞こえてきそうな気配さえある。

アムンセンもスコットも自己の信ずるところを疑うことなく実践し、それぞれの業績を残した。スコットは隊員と自らの死とひきかえに、人間の勇気と尊厳を知らしめ、アムンセンは極地探検家としての名声をさらに高めた。だが、十八年後の一九二八年、飛行船で北極に向かったノビレの遭難救出のため、捜索に出たまま再び帰らなかった。アムンセンの死もまた劇的なものであった。

ピアリーは北極探検に全てを捧げた人である。北極に関わりはじめて、北極点に初到達するまで実に二十三年の歳月を費やした。この間ピアリーは世間の嘲笑や資金面での苦労に耐え抜いた。さまざまな障害にうち勝つ精神力と忍耐力、勇敢さを備えていた。北極点到達への努力はこうした能力に裏打ちされていたのである。帰還後思わぬ敵が待っていた。クックとの論争である。科学的審査の結果、ピアリーの初到達が認められた。ピアリーは極地探検にエスキモーの生活様式を採用した。エスキモーをメンバーに加え、獲物を活用して壊血病を防いだ。豊かな経験の蓄積がもたらした勝利といえる。到達の翌年『北極点』が出版された。本書はその全訳である。口絵写真が九十六点もある。詳細な地図二葉とともに内容理解の大きな助けとなっている。

三書とも可能な配慮は全て成されている。巻末索引はこの種の本には不可欠である。「アムンセン」と「ピアリー」には略年譜が付されている。いずれも充実した付録である。「スコット」以外には、訳注がその頁の左下隅にあり、いちいち巻末を繰る手間が省けすぐに読めるので理解しやすい。

訳者は全訳の動機を次のように述べている。「自分が興味をもっている分野の基本文献がしっかりした形で翻訳されていなければならない。そのために時間をかけてでも翻訳に取り組んだ。それに外国語の読める人でも文献を読まずに言及する場合が感じられる。原文献を見る人もいるまいという安易さがあると疑わざるを得ない。そのために誰が読んでも確かめられる翻訳を作る必要を感じた」と。この考え方は一貫している。『南極点』ではノルウェー語の原著書だけでなく、ドイツ語版、英語版にまであたり、誤りや欠落部を補っている。ていねいで誠実な訳は読む者を魅了する。翻訳について訳者はまた次のように語る。「読みやすい訳には警戒心がわく。スラスラ訳しているのにはごまかしが感じられる。異なる言語だから読みにくいところがあって当然。意味の通じる範囲で原文の表現を直訳するように努めた」と。だが読みにくさは全く感じられない。声を出して読めばそのことはすぐに納得される。

訳者が全訳を思いたって「スコット」が出版されるまでの期間、さらに三書が揃うのには相当な時間が費やされた。長い歳月にわたって北極に関わったピアリーの執念が思い起こされる。長い時間

をかけて翻訳されたのである。誰も手をつけていなかった極地探検の三大古典文献の全訳こそ探検の名に値するといえよう。極地探検家の著書を通じて訳者は訳者自身の作品を完成させたのである。採算を度外視した出版社（者）の英断にも拍手を送りたい。こうした誠実で価値ある出版が、本当の文化を育て築きあげていくのである。

（オセアニア出版の電話は〇四五-八四五-六四六六）

（宇都木慎一）

『白川義員作品集・南極大陸』

小学館　一九九四年刊行　A三判　全二巻　各三九〇〇円（各巻カラー一二八ページ、解説四四ページ、地図四ページ、総一七一ページ、ケース入り）

『山岳』に『白川義員作品集―南極大陸』の図書紹介の原稿依頼を受けたとき、さいわい著者の取材活動を描いたNHKのドキュメンタリー番組「南極・白い大地―写真家白川義員前人未踏の旅路」が放映され、しかもこの番組が私の仕事上関係している日本映画テレビ技術協会の九三年度技術賞にエントリーされた。たまたま同協会では審査委員をつとめていたので、この番組をつぶさに拝見。凍てつくなか仕事に賭ける白川氏の活躍ぶりを軸として「南極の全貌」を捉えた撮影技術が高く評価され、担当したカメラマンは技術賞を受賞した。

このテレビ番組から白川氏の仕事に賭ける執念に強烈なインパクトを受けた。また後日東京・有楽町、アート・フォーラム写真展「南極大陸」が開催され、会場で本物の大型プリントに接する機会もあったので、気安く原稿依頼を引き受けた。

しかし、いざ上下二巻の大型写真集を手にとって見ると文章ではとても言い尽くしがたい映像のもつ迫力にとまどった。私事で恐縮だが、幾度か山岳雑誌などで主に写真集の新刊紹介の原稿を書いてきたが、この作品集に関する限り、一体どのような切り口でこの大作を紹介したらよいのやら頁をめくる毎に作品に圧倒され思うように文章がはかどらない。

著者の白川氏について今さら紹介するまでもあるまい。ひと口で言えば、山岳、聖地、大陸をテーマに壮大なスケールの仕事をしている世界的にも名を馳せている作家である。

作品集『アルプス』や『ヒマラヤ』のような山岳写真をはじめ、『新約聖書の世界』、『アメリカ大陸』や『中国大陸』の作品集、これまで出版された多くの作品集は数々の「賞」を受賞、なかでも聖書関係の作品集はASMP（全米写真家協会）の最高写真家賞を受けている。もちろん過去に発表した『アルプス』『ヒマラヤ』なども評価の対象となった。

さて、白川義員作品集『南極大陸』上下二巻の出版に当り、その計画は今から二十一年前に始まったと言う。以来実現に向かって南極に基地を持つ各国への取材許可の申請や交渉など撮影以前のさまざまな困難を乗り越えて、ついに九三年二月、撮影日数三百三十日。

その間の総飛行距離約十二万キロ（赤道上の三周分）に及ぶ。そして白川氏はついに人類史上初めて南極大陸を一周するという偉業をなしとげた。

南極は原始の自然がそのまま今日に残る地球上唯一の大陸、白川氏は南極と言う絶対の「原初の風景」（原初は氏の造語で原始ではない）と「超絶の天然の姿」を神々の世界として捉える。終始一貫したこのような理念で「南極大陸」を撮影、この作品集は作者のライフワークである「地球再発見による人間性回復へ」シリーズの第八作目として上梓されたものである。

上巻『超絶の天然』はまず序文にWWF名誉総裁・エディンバラ公、そしてエベレスト第一登頂者・ヒラリー卿が「氏の写真集がきっかけとなり、世界中の人々がこの偉大な大陸を賛美し尊重することでしょう」と絶賛している。

目次は「氷雪茫々―南極半島―」「氷上可憐―皇帝ペンギン―」「氷峰屹立―エルスワース山群―」の三部作にわかれ、全作品は八十四点にまとめられ、それぞれテーマごとに編集されている。

南極は白だけの世界と思いきや、ブルーに輝く氷の色、黒い岩、赤く染まる空など、実に多彩な色があり、光線状態によっては限りなく原色に近いことを発見する。

極限下の凍てつくなか、緻密に計算された撮影によって捉えた氷の断崖や巨大な浮氷塊など、それらの映像は、まさに氷雪茫々でありまた荘厳神秘である。ある時にはぞっとするほどの戦慄感と大自然の創った素晴らしいほどの「美」の存在感を認識させられる。

「氷上可憐」では皇帝ペンギンのコロニーを本格的に撮影、その生態を克明に捉え、ペンギンの可憐な表情は過酷な世界にぬくもりを与えてくれる。

カメラはついに南極大陸の最高峰ヴィンソン・マッシフに挑み、登頂を果たす。「氷峰屹立」はエルスワース山群の氷壁の峰々を鋭く捉え、ヒマラヤとでは異質な大自然の厳しい表情を見せる。

それぞれテーマごとに書かれた作品解説や巻末に記述されている南極の権威者・鳥居鉄也氏らの文章は南極への理解をいっそう深めさせてくれる。

「近い将来、必ずや人類共通のかけがえのない貴重な映像となることであろう」と渡邊義雄日本写真家協会名誉会長の序文「壮挙を祝う」ではじまる下巻は題して『永遠の時空』。

目次は上巻と同様三部のテーマにわけ「大陸鳥瞰―南極大陸一周―」「氷雪脊稜―南極横断山脈―」「極光夢幻―太陽・月・オーロラ―」で構成され、全八十九点の作品でまとめている。

「大陸鳥瞰」では南緯六六度三三分の南極圏線上で捉えた「南極圏線上の太陽」は史上初めて撮影されたもの。天文学的に計算して算出された六六度三三分が現実に正解で、事実であることを歴史上初めて写真で証明されたもので、実に貴重な映像記録である。また四十五分の長時間露光で移動する太陽を撮影した「光と線」や「南極圏線上の二十四時間太陽」などの作品群はまさに地球上に輝く太陽のドラマである。

「氷雪脊稜」で見る「南極点の太陽」、超魚眼レンズで捉えたセレモニーポール周辺の「南極点二十四時間」など白川氏ならではの優れた表現方法と卓抜した撮影技術によるものである。いずれもこれ

まで見たこともない稀有な映像だけに、たんに作品としてのみにとどまらず地球科学のマクロ的見地からもはかり知れない意義をもつものであろう。

南極と言えばオーロラ、極地の夜空に舞う神秘な空間、幻想の世界へと誘ってくれるが現実の撮影は決して生易しいものではない。ともあれ「体感温度零下一〇〇度」という極寒の原始でのカメラワークは驚きであり、またプロ根性にも頭が下がる思いである。

「南極大陸」の作品集がどのようにして撮影されたか、巻末に記されている「取材紀行」や「撮影ノート」から知ることができる。これらの記事は「南極大陸」と言う超大作を撮った背景や技術的処理について克明に記されているので是非読んで欲しい。

所詮、プロ写真家としての自分に対する厳しさ、仕事に賭ける執念、比類なき取材力、抜群なカメラワークと優れた表現力、さらに「地球再発見による人間性回復へ」と言う確固たる信念がなければ、決してこのような大作は生まれまい。

「あとがき」―「南極大陸の現在と未来」については「南極の鮮烈、荘厳、神秘な原初の風景の中に身を置くことによって、また南極の森羅万象に凄絶な感動と深遠な畏れを持ち、偉大な精神の存在を感得して、自然に畏敬の念を抱き、精神革命を起こしてくれる人間が現れることのほうが、人類にとって、南極観測よりもよほど重要であることは言をまたない」と語っている。

一九九五年六月二十二日、作品集『南極大陸』の功績が認められ第二十七回日本芸術大賞を受けた。この賞は（財）新潮文芸振興会によってもうけられたもので、これまで主に絵画、彫刻などに与えられたが写真家としては浜谷浩氏に次いで二人目。そして七月二十四日には「作品集の出版と受賞を祝う会」が都内のホテルで開かれ、南極大陸一周と言う前人未到の壮挙を全うした作者、白川氏の労をねぎらった。

六九年に発刊した作品集『アルプス』からスタートして以来「原初の風景」を撮り続けること四半世紀、そして「地球再発見による人間性回復へ」をモットーして常に前進を続ける氏の不屈の精神がここに実を結ぶ。

そして、この受賞を節目に地球上に残された「原初の風景」がある限り氏は再び未到の旅路を続けることであろう。

（羽田栄治）

イエジ・ククチカ著（Jerzy Kukuczka）
A. Wielochowski 訳

『My Vertical World』

The Mountaineers, Seatle 1992
一八九ページ　二四・五×一六㌢

八〇〇〇㍍峰十四座を駆け抜けるように八年間で踏破したイエジ・ククチカの自伝的登頂記である。各年代ごとにスーパークライマーが生まれるが、アルパインスタイル、新ルート、冬期などの手法で十四座をトレースしたクライマーは彼以後、出現していない。

メスナーによる献辞 'You are not second. You are great.' が巻頭にしるされている。

ククチカは十七歳の一九六五年九月に友人に連れられて岩登りをし、そのエキサイティングな世界に魅入られた。それ以来毎週末、暗い現実を逃れてシレジア地方の山で緑と自由の雰囲気にひたり「垂直の世界」にのめり込むことになったと、序文で告白している。彼の所属するクラブのメンバーとともにアラスカ、アルプス、ヒンズークシュの遠征に加わるようになるが高所障害や凍傷で挫折感を味わうことが多かったと言う。一九七七年、ナンガパルバットのラキオト壁の頂上直下まで迫る体験をする。この時、八〇〇〇㍍峰はフツーの人でも登れるんだと自分に言いきかせる。同時にジャイアンツへの挑戦を心に決め、それを達成しただけのこと、垂直への挑戦には終りがないと、十四座めのシシャパンマの登頂を終えた際に語っている。

煙突塗装のアルバイトで資金を稼ぎ、公設市場でカンヅメを買い集めて遠征隊を組織してヒマラヤに向かう。K2国際隊に参加して、自分たちの装備や服装がポーターに支給されるものより劣っていると気がつく貧乏ぶりだ。

一九七九年十月、初めての八〇〇〇㍍峰・ローツェ北西壁の無酸素登頂を果たして意気揚々の帰途、ナムチェバザール近くでメスナーに出会う。つゆ払い役のシェルパが先行して「メスナーご一行の到着」をふれまわる。装備と服装の立派さに圧倒され、ひそかに羨望を感ずる。一九八一年マカルー遠征の際、再び二人は出会う。内気でひかえめなククチカは、あえて会話に加わらないのだがメスナーとの登頂競争を意識しはじめる。彼は登頂のスタイルと質にこだわりはじめる。新ルート指向、冬期登頂とアルパインスタイルに一層傾斜していく。ノーマルルートからの登頂は今や意味がないとまで言い切る。先行しているメスナーを意識してのことだ。新ルートへの情熱は登頂の回数を重ねるごとにつのっていく。ヨーロッパのスポンサーもつくようになり、遠征の回数も多くなっていく。年一回のペースが二回になり、一九八五年のシーズンは一月にダウラギリを登頂後、足の凍傷をおして豪雪のフレンチ・コルを単独で越えてチョ・オユー隊に合流して二月に登頂。六月にナンガ・パルバットの南東ピラーの新ルートを。十一月にローツェ南壁を八一〇〇㍍まで。明けて八六年一月にカンチェンジュンガ冬期初登という異常なまでの執念とスタミナである。

ルート工作が完了してからチームに加わったとか、ククチカの遠征は必ず死者が出るなどの批判があったが耳を貸さない。また、パミッションなしでブロードピークに登ってしまったり、二座分の登山料を払えないので事後に許可をとることにしてガッシャーブルムI峰に登頂してしまうなどセコイ手法もあえて辞さない。

一九八七年九月のシシャパンマ西稜新ルートからの登頂で十四座の完登をしたが、下山時の決意のとおり高峰への冒険はとどまることはない。一九八九年六月、ポーランド隊が三度退けられているローツェ南壁に出掛ける。

彼としては八五年以来二度目の挑戦である。その年の春、メスナーが率いる国際隊が失敗しており、それがククチカの挑戦に火をつけたのだろうと、永年のパートナーだったクリストフ・ビエリスキー

は語る（あとがき）。

周囲の発言に耳を貸さずに出発し、頂上直下で非業の最期をとげる。四十一歳の死である。

決断力と異常なまでの意志の強さ、突進型のクライマーであったことがどの遠征でも感じとれる。良い意味での頑固さが輝かしい成功のカギであったろうとビエリスキーは回想する。家庭を大切にする男でもあった。

メスナーは五十歳を過ぎて極地踏破に熱中している。ダグ・スコットは回想録を書いている。筆者が敬愛してやまないボードマンとタスカーは三十歳を過ぎたばかりでエベレストから還らぬ人になってしまった。植村氏は志なかばで逝ってしまった。クライマーや冒険者の死ぬ人とサバイバルする人の違いはどこにあるのだろう。ヒマラヤ高峰の体験のない筆者にははかり知れないことだが……。

本書は八九年のローツェ遠征直前に書き上げられたものであるという。ポーランド語からの英訳のためか、ククチカの山へ向かう気持のありようや感動がいまひとつ伝わってこないもどかしさもあるが、超スーパーぶりと熱気に圧倒される。これからヒマラヤのジャイアンツを目指す若い人たち、また八〇〇〇㍍に血をわかせ、いれあげた人たちに読んでいただき、大いに興奮し感慨にふけっていただきたい好著である。

（松沢節夫）

田淵行男著

『山は魔術師』

ブルーガイドセンター　一九九五年三月刊
B5判　二一九ページ　四五〇〇円

著者の田淵行男は、難病のパーキンソン病と長年闘い続けた末、一九八九（平成元）年五月、巨木が倒れるごとくこの世を去った。八十四歳であった。

その全生涯については、近藤信行氏が、雑誌「山と渓谷」に〝田淵行男―安曇野のナチュラリスト〟と題して、二十回にわたり連載、その足跡を余すところなく伝えている。詳しく知りたい方はこれを読んで頂くとして、ここではその中から著者が写真家としてデビューする迄を拾い出してみよう。

田淵行男は、明治三十八年六月、鳥取県日野郡黒坂村に生まれた。東京の錦城中学を経て大正十三年四月、東京高等師範学校博物科に入学、昭和三年同校卒業後、富山県立射水中学校の教諭となる。その後、東京府立第二高女、独協中学等に転ずるが、昭和十六年迄教師生活を送った。この間、休みの時には生徒達と共に数多くの山に登り、そして写真を撮った。山から戻るとその写真を整理し、レイアウトから編集まで一人で行い「山のアルバム」と名付け記録集として大切に保存していた。

教師をやめてからは、写真館を経営したり、教材のセールスマン

をして生計を立てていたが、昭和二十年に一つの転機が訪れた。東京本郷に居を構えていた著者の家が、強制疎開の指定を受け取り壊されることとなった。地方への転居を余儀なくされた。やっと知人を頼っての移転先が、信州安曇野牧村であった。そして結局生涯この地で過ごすことになる。

その頃の安曇野は豊かな自然に恵まれ、その自然に生きる生物を研究の対象とする者にとっては、まさに格好のフィールドといえた。蝶の宝庫でもあった。

牧村では、教材用のスライド作成や蝶の写生画が生活の糧となった。暇を見つけては安曇野を縦横に歩き廻り、すぐ西に聳える北アルプスの山々にも良く登った。やっと入手した貴重なフィルムを大切に使って写真を撮り続けた。

表面的には終戦をはさんで、この前後十年位が著者の苦難の時代といえよう。しかしそれはまさに雌伏の時、蓄積の時であり、充塞を図りながらウォーミングアップを重ねていた時代といえる。

写真家として写真界に初登場したのは、アサヒカメラ臨時増刊「山岳写真傑作集」の発刊であった。そのきっかけとなったのは、田淵自身が自著「山のアルバム」(講談社刊)の〝あとがき〟に書いている通り、一つの偶然な出合いから始まった。それによると、日映時代の同僚K氏に、長年山行のたびに作っている〝山のアルバム〟を見せたところ、これは面白い、しばらく貸して欲しい、といって持ち帰った。K氏から何人かの手を経て「アサヒカメラ」編集長津村秀夫氏の目にとまり、同誌にこの中の作品が掲載された。これらの写真は、社内の目の肥えた人々にも新鮮な印象を与え評判となった。これが〝傑作集〟誕生の大きな要因となった。

この時田淵は四十六歳であった。いまさら新人というには年を取り過ぎた感がしないでもないが、そのデビューは華々しく、衝撃的なものであったという。

その後の活躍は周知の通り、疾風怒涛のごとく、長年ために蓄めたエネルギーを爆発させ、また恐ろしいまでの執念をもって、新しいテーマに次々と取り組み、重厚な作品集として纏められ発表されていく。

前置きが長くなってしまった。『山は魔術師』であるが、この本は、副題に〝私の山岳写真〟とあるように、当初昭和三十九年に出版された「私の山岳写真」(東京中日新聞社刊)の続篇として企画された。本文は、昭和四十年一月から雑誌「岳人」に十二回連載したものに手を加えたものである。三十年も前から続篇を出版することを念頭に置き、雑誌にのせた文章に丹念に加筆推敲を重ねていったのである。しかし機は熟さなかったということであろう。とうとう著者の生前には日の目を見ることは出来なかった。

著者が亡くなった後、編集を託された人々の協力によってようやく刊行にこぎ着けることができた。この辺の事情は、本書の〝あとがき〟や〝この本の出来るまで〟に書いてあるので詳しいことは省略するが、ただ著者が初めに意図していたものとは少し違う本に仕上がったようだ。それは、著者は前著「私の山岳写真」に倣い、本書も山岳写真の実技と理念を解説し、そこに模範的な作例をつける、ということを考えていたようであるが、編集をまかされた人達は、原案の作例写真の代わりに、田淵の〝作品〟を掲載することにした

のである。

従ってこの本は、〝田淵行男山岳写真傑作選〟という写真集と、〝続・私の山岳写真〟という技術論と、属性の異なるものを組合せて造った本となった、結果的には大成功であったと思う。それは技術論は煎じ詰めれば著者が自分の〝作品〟を説明し、解析しているということにつながり、写真を見る上で大変参考になるはずであるし、一方、現在著者の〝写真集〟を入手することは大変困難になっている為である。

この〝写真集〟に載せられた作品は、一度旧著に発表されたものも含まれるが、印刷技術の進歩によるものか、又は別の理由があるのか、素人の私には分らないが、とにかく鮮明なこと、透明感溢れたものであることには驚かされた。これだけで、この本が出版された価値は充分にあると思われる。

写真は全部モノクロで六七葉。テーマ別に分けられている。しかしここではテーマに拘泥されず素直に観照したい。特に著者が常々書いている特別な思いとしてのその山岳観〝静かな山〟〝人工の入らない純粋な山〟〝裸の山〟〝山の個性〟等々をどう表現しているのか、ということを念頭に置いて観るのも一つの方法であろう。

それにしても、著者は山を観るとき、いったい幾つの眼を持っているのであろうか。科学者の眼、登山家の眼、写真家としての眼、芸術家の眼、詩人の眼、などなど数えあげればまだあるだろうが、それらの眼の全てを駆使して山を見つめ、山をよく観、堂々と山と取組み、格闘し、その山の特徴と個性とその時一番良い処を引き出し作品として人に伝える。山ばかりでなく廻りの空気迄全て写し込んでしまう。この写真集を見ている時、ふと〝動かざること山のごとし〟という言葉が何故か口をついて出たが、ひたすら情緒的なものを排し、山の核心を突き、山の存在感を求め、息苦しい迄に山の本質をこれほど見事にカメラによって描き出した作家は、田淵行男をもって絶後とは云わないが、空前であることは間違いないだろう。

この著者にとって遺著ともなる三十三冊目の本書が、第一作と同じ〝山岳写真傑作集〟という内容を持ったということも何かの因縁であろうか。

（岩瀬皓祐）

W・ウェストン手記　三井嘉雄訳

『日本アルプス登攀日記』

平凡社　一九九五年二月刊

（東洋文庫）箱付

三一八ページ　二七八一円

AC所蔵・在日三年間に及ぶウェストン日記の詳訳

幕末明治の開国以来、日本は外国人の演ずる数多くのスポーツに接してこれらを積極的に導入した。横浜などの居留地で盛んにプレーされたテニス、来航した外国軍艦の乗組員などが打ち合ったベース・ボール、根岸の競馬場で主として日本馬を駆って競ったホース・レース、神戸の六甲で外国人商社マンを中心にして展開さ

れたゴルフなど多くの事例を容易に挙げることができる。しかしながらこの中にあって、近代スポーツ登山はウェストン一人のみの力によって日本に伝えられたという意味で誠に特徴的である。彼以前にもサトウやガウランドやミルンなど多くの外国人が実際に日本で登山活動をしているが、その行為は主として日本における英国人社会の中でのみ語り合われ伝えられていたものである。ウェストンは自らの著書を通じそして日本人との交流を通じてスポーツ登山を日本に伝えたのだ。

今般三井嘉雄氏の労訳によってこのウェストンの手書きの『日記』が訳刊されたのは誠に喜ばしいことであり、同氏の長きにわたる苦心に深く敬意を表したい。このウェストンの『日記』にメモされている内容は既にウェストンの主著などに整理され文章として修飾されて採用されており、またさきに『山岳』に連載された「ウェストン年譜」にも活用されているものではあるが、このようにして一本にまとめられた状態で内容をあらためて吟味してみると、①三シーズンにわたる山旅の骨子と②主著などにはあまり見られない日本人についての人間味あふれる嘆きや不満や酷評—が記述されていて、後者をウェストンの日本観と対照してみると誠に興味深いところがある。ただし内容そのものはあくまで私的な日記であって公刊を前提とした文章とはなっておらず、ストーリーとして首尾一貫して整理されてはいないために一般的には退屈な作品として受けとられるかも知れない。以下に主として②に関する私の読後感を述べたい。

本書の中には人には見せない日記ならではの記述がいくつか示されている。日本の奥地をこよなく愛したウェストンが、その奥地で日本人から受けた心ない仕打ちや、彼らの動向を赤裸々に筆記しこれを嘆き悲しむとともに、その人間性を厳しく観察しているものである。例えば清蔵と嘉門次の案内でフランセス夫人と槍ケ岳に登り赤沢の岩小屋で野宿した時に、錆びた缶や不潔な紙片や古草鞋などが散乱しているのを見て「日本人は上品なもの優雅なものを好むのに時によって列車の中や宿をすっかり汚したりするのは如何なものか」と嘆き、同様に大天井岳付近の二ノ俣小屋で宿泊者の不潔な置土産が散っているのにあきれて「日本の二流の人々は家を離れると何故このようにだらしなくなるのか」としている。また大町の対山館で佐伯平蔵や人夫たちにガイド料やチップを支払ったのにもかかわらず彼らが勝手に飲食した代金がウェストンへの宿泊代に加算されているのを見て「平蔵も他の三人の人夫もその振舞いには遺憾な処が多過ぎる。彼らは頑丈なだけで怠け者で配慮が足りない」と酷評している。田舎の旅宿に対する不満も相当なもので、御嶽登山の根拠地福島では益田屋と蔦屋でことわられ、水明楼では宿泊八十銭と食事代二十銭を提示されて交渉が不調に終わり、漸く俵屋に迎え入れられたとして苦労した記述が見られ、また松本で宿泊した飯田屋は接待が粗末で料金は法外なもの、すなわち本人は二円五十銭、清蔵と嘉門次は一円五十銭もの高額であって、風呂は熱過ぎて入れない、悪臭がひどく一晩中駅の騒音で眠れないとこぼしている。

ここで挙げた諸例は彼の主著ではその一部は紹介されてはいるものの、その表現は抑制されているように思われる。これに対して日記の筆はみずからが受けた仕打ちへの不平不満や、日本人に対するどうしようもない嫌悪感が何の修飾もなく顔を見せている。まさに

ウェストンの日本人観の一面がまざまざとそしてたくまずしてふき出しているように思われる。

日本の奥地には「君子の国」としての日本の古き良き風習が残されているとする考えはウェストンの著書・論文の全般に一貫する一つの主テーマである。近代化され西欧風となった海岸線などの日本の先進地域には、日本伝統の美学は全く残されていないのに対し、そこから奥まった内陸部にやって来ると、古き良き日本の伝統をいまだに色濃く残す田舎の姿を目にすることができる、とする思想である。田舎日本ではまったく人間ずれしていない生まれつきの単純さと素朴の美徳をあわせもった人間性を観察できる、これこそが真の意味で日本古来の「君子の国」すなわち紳士の郷土という日本独自の名称をささげるのにふさわしいところだと彼は説く。

開国以来しきりに近代化への道を歩みつつあった明治日本には、産業技術の西欧化や法制度の整備など新しい動きが各分野において見られたのであるが、この中においてなお古き良き日本の人情や生活が残されていた。この新しい局面と旧い様相とがともに存在する日本の中で、ウェストンがことのほか心を寄せたのは旧の世界であった。彼は日本人の生活の実感を最も具体的にそして端的に物語るとともに、組織された国力の真の姿が見られるのは日本の奥地をおいて他にはない、として西洋の模倣でしかない都会の整備された道路を通り過ぎ、細やかな山道を踏んで田舎にわけ入り、世界でも有数な賢く働き者で親切な農夫が勤しむ畑や農地を観察しなければ日本の最も魅力的な部分を堪能することはできないだろうと指摘するのである。

『日記』の中でもウェストンは「日本人の大多数は農業に従事し保守的で、いかなる変革にも疑問を持つ。先祖がしてきたことを継続するのを好む。田舎生活を知らずに日本を学ぼうとするのは見込みのないやり方だ。日本の田舎と都会ではその実態は区別される」と主張している。ウェストンの著述の中で展開されているこの日本観、すなわち田舎礼讃論の中にあって彼が実地に奥地で経験し遭遇した前述の日本人について人間味あふれる嘆きや不満や酷評は対照的で興味を覚える。

『日記』の日曜日などの記述をたどってみると、山旅の途中であっても教会の礼拝に参加したり、あるいは宗教関係者との交流などが多く見られ、キリスト者としての世界での交際を深めている様子をうかがうことができる（『日記』に頻出する宣教師名を説明する訳注は誠に行届いており訳者の調査力に敬意を表する）など。例えば妙義山を登った後、軽井沢で宿泊して英国教会の朝の日曜礼拝に参加、その後日本聖公会南東京地方部主教セシル・ヘンリー・ボーフラワーの講演を聞いている。またその次の日曜日にも島々で祈禱書を読んで休んでいる。ウェストンを山好きの変わった宣教師と評する俗説を否定する材料となるものだ。ウェストンの来日の動機については必ずしも明確ではないが、聖職者としてキリスト教の伝道に従事するとの意欲にもとづくものと見るのが一般的に見て妥当なところであろう。異国に侵略や圧力を導く宗教者も勿論多く見られたもののここでは海外伝道の持つ重要性に注目しておきたい。ウェストンのもう一つの課題は来日によってスイス・アルプスなどでは果たし得なくなった山岳への憧憬を満たすことであり、山地に住む上

條嘉門次や根本清蔵などと交流を深めることであった。前後三回にわたる在日によって自らの意欲と課題を満たしたのである。

ウェストンの第一回目の来日時には熊本、神戸、大阪におけるイギリス人教会の教務に携わること、第三回のそれには横浜のクライスト・チャーチでイギリス人会衆の礼拝を主牧することがそれぞれの担務であった。いずれも日本人を相手とする伝道活動にくらべてはるかに容易な仕事であった。これに対し第二回目の来日の時は横浜の聖アンデレ教会において日本伝道の最前線にあって、三年間を著しく困難に満ちた聖職活動に従事した。新婚の妻フランセスも日本人会衆の中で活動し夫ウェストンを助けている。この結果同教会の信徒数は一〇一名から一五五名に増加した。横浜の居留地外の寿町に日本人宣教のための教会（後の聖アンデレ教会）が初めて設立されたのは明治二十五年であるが、この当時横浜は種々雑多な人種が混在する中で様々な西欧文明が無秩序に導入され、悪徳と退廃と偶像崇拝の横行する植民地都市であったとされている。当時、日本人宣教のために派遣された英国聖公会のA・C・ショウ（S・P・G）は、このような横浜の町に限られた伝道戦力を注ぐことは愚かなことだとしている。ウェストンはこの聖アンデレ教会の新会堂を日ノ出町に完成させる事業に貢献している。ウェストン夫妻はこの時、毎年夏になると南アルプスなどを訪れ困難な横浜伝道の精神的肉体的緊張を解きほぐし、都会での大変な心労を要する仕事から心身を解放したのである。ウェストンの奥地指向は今日でいうストレス解消のための山旅であったともいえるようだ。

ウェストンの目立ちたがり屋としての性格は良く知られているところであって、ロンドン日本協会、英国山岳会、同地理学協会などの組織に属してその機関誌に積極的に寄稿し自己主張に努めていた。もっとも日本アジア協会の一員でもありながら一九一二年に同会例会で「日本アルプス」と題して講演はしたが同会「紀要」には掲げられるには至らなかったという例も見られる。『日記』の中でも『鳳凰山の大変な評判以来（鳳凰山オベリスクへの初登頂）、槍ヶ岳の東南やせ尾根征服はまことに最高で、私が日本アルプスでなした中で、真のスポーツ登山であったといえる。外国人も日本人もだれ一人しなかったものを今私が登った」、「有明、燕岳登山は、他の外国人はまだだれも行ったことがないからこそ価値がある」などと外国人初登山をしきりに強調しているのは微笑ましいことだ。

『日記』の中には地名や日本人名など多くの固有名詞がローマ字で示されている。これを正確に漢字に転換表記するのはなかなかの苦労があったものと認められる。従来刊行されている主著の訳書に示されている漢字表記が今般の三井氏の訳業によって正しく修訂されているのには敬意を表する。例えば御嶽頂上小屋の主人栂（とち）山金太郎（既訳では栃山）、島々の清水屋の主人加藤惣吉（同前宗吉）、四谷の宿の主人松沢貞逸（同前定一）、白骨温泉の斉藤志津馬（同前静馬）などである。

『日記』を読み進むと、ウェストンの主著には記述されていない文章を時に目にして興味深い。例えば常念坊伝説を語るところでは盗伐の関係者の人名や具体的地名などが掲げられていて、百年程度前のこと、有峰の人で田中屋という高山の商人、槍ヶ岳の山稜を谷越えで松本へ、そして雄氷峠を越えて東京へとなっている。『日本

アルプス』ではここまで具体的には伝えられていない。また妙義山の鏡岩からの下降で新しい絹のロープを二回にわたり使った時のことだが、この絹のロープには「多くの日本人の興味をかった。駅で列車を待っていても皆不思議そうな顔をした人だかりができた」とある。このくだりは主著には示されていないもので、訳者の注によればこのロープは五十五フィートの長さを持つとのことである。ただし一章として挿入されている「朝鮮への旅(明治二十七年秋)」については本訳書の書名である『日本アルプス登攀日記』の主題からいささかはずれていて奇異の念をおぼえるが、この中で日清戦役直前における日本軍の不法な軍事行動を加害者として見つめている記述は注目される。キリスト者ウェストンは、この時日本軍に砲撃され一二〇〇名の清国将兵を乗せたまま沈没した輸送船の残骸を仁川で見て「不幸な人たちを葬った残酷な殺人者に対する裁きがあってほしい」と述べている。農民出身者からなる日本軍隊の精強さを強調し讃美するウェストンの後年の論調(『極東の遊歩場』を参照)とはそぐわない記述であって奇妙な感を受ける。

私の読後感は以上をもって終える。『日記』の中の登山記についての感想がまことにすくなかったと思うのだが、冒頭に述べたようにこれらは殆んど彼の主著に活用されているので、それらを参照されればよいと考え、ここでは私の所感をまとめた次第である。

なお本訳書の訳者解説によれば、『日記』を所蔵する英国山岳会は当初訳者の電子式コピーによる複写要請に対して資料保護のためとしてこれに応ぜず、その後訳者の更なる懇願の結果、漸くこの方式によるコピーが認められたという。確かに電子式コピーは資料を圧迫してしまうので資料保護の観点からは好ましいものではないが、それならばいささか高い費用を要するものの写真撮影によるコピーを早期に認めればよかったのではないかとの感想を持たざるを得ない。日英間に由縁のあるこのような文献の積極的な公開を、この際英国山岳会に望んで置きたい。

また最近の日本におけるウェストン研究は、いささかミクロの分野に視点を置き過ぎているように思われる。彼は最終的にイギリスに帰った後も日本に関する執筆を続けている。その研究はイギリスにおける当時のジャパノロジストたちの日本観と有機的に関連していると思われるし、比較的長期にわたる在日中に広範な現地に踏み込んだ動的な日本観の一つとして見ることもできよう。この分野におけるウェストンの位置づけはそれ程高位にあるとは考えにくいが、それでもその研究を跡づけて総括してみるのも興味があると思われる。骨太の論考が世に問われるのを期待したい。

(庄田元男)

木崎甲子郎著

『ヒマラヤはどこから来たか』

中央公論社　一九九四年六月刊

中公新書　一七三ページ　六八〇円

花の咲いている季節に山にいくのは憂鬱である。

先日も横山厚夫氏夫妻のお供をしたが、横山夫人の植物の知識に改めて驚嘆した。色とりどりに咲き乱れる花の名前を教えてくださるのだが、この年齢になると教わるはしから忘れてしまい、家に帰り着いたときには全部忘れていた。これでは今度お目にかかった時いかにも具合が悪いので思案した。高山植物の名なんて、植物学者が精を出して勝手に、この百年か二百年のあいだにつけただけで、当の花のほうが○○コザクラとか○○スミレなどという名で呼ばれることを了承したわけではあるまい。今度花の名前に詳しい人と一緒になったら、本人？　の承諾も得ていない名前を、せっせと覚えても始まらないでしょうと言えば良い。そう気が付いたら呪縛から解き放たれて、お花畑を歩いていても劣等感に捕われることがなくなった。

それにくらべて物事の変化を理論的に説明した読み物は、その変化のプロセスさえ理解すれば、固有名詞を覚えなくても理解できるので有り難い。

ヒマラヤの高いところに海の痕跡があり、化石が発見されるということを知ったのはずいぶん昔、マナスルの隊員のだれかの話を聞いたり、トニー・ハーゲンの「ネパール」を読んだりして得た知識だったと思う。しかしそれはそれだけの知識として頭の片隅にしまい込まれたままで、なぜそうなったということを知ろうともせず放ってあった。前述のとおり植物学の方の道をすっかりあきらめたので、すすめられるままにこの本を読んで見たところ、文科系の学生であった私にもヒマラヤがどうしてできたか、およそのことは理解できた。

ところでこの本を語るとき「テチス協会」の活動に触れないわけにはいくまい。私はこの本を読んではじめて知ったのだが、ヒマラヤの研究を目的として一九六五年ごろに北大の人達を中心に札幌に設立され、一九七四年には「ネパール・ヒマラヤの地質」を刊行、「秩父宮学術賞」を受賞している。そして一九八〇年には「ネパール・ヒマラヤ地殻変動調査」をテーマに文部省から海外学術調査費を受けることになった。この成果は「上昇するヒマラヤ」という報告にまとめられているが、その活動の副産物としてこの本が誕生したのはヒマラヤに興味をいだく者にとって幸いであった。

インドが南極大陸から分離して、次第に北に移動してユーラシア大陸に衝突し、その間にあった「テチス海」が持ち上げられてヒマラヤ山脈を形成したということをこの本を読んではじめて知ったが、「テチス協会」の名はこの海の名をとったものである。

と言うような解説をすると、私と同じ固有名詞恐怖症の方はもう読む気を無くすかもしれないが、テチス海とかゴンドワナ大陸と言った固有名詞を無理に覚えなくてもこの本は理解できるから有り難い。

年代とか地層などの名称は花の名前と同じ単なる符号なのだから、素人は覚えようと無駄な努力はせずに、南の方から椰子の実みたいに流れて来た大陸が北の陸地にぶつかり、その下に潜り込んで押し上げ、ヒマラヤ山脈を形成したと言う粗筋を理解できれば良かろう。この本のサブ・タイトル「貝と岩が語る造山運動」が本書の構成を教えてくれるが、実際の観測、観察の結果からヒマラヤの造山運動を説き明かしてくれるので、素人にも分かりやすく面白い。

ただ私の読んだ限りでは、何の予備知識もない読者は第四章の「ゴンドワナ大陸とヒマラヤ」、とその次の「ヒマラヤの芽生えはチベットから」を先に読んでおよその事を頭にいれておいたほうが全体の理解が早いように思う。ネパールへトレッキングに行こうとしている方などは、このあたりだけでも拾い読みしておくと、現地で何か感じることがあるのではなかろうか。私の専門の経済学の分野では特にそうだが、専門家は後追いでなぜこうなったかの説明をしてくれるが、この先どうなるかは専門家と言えどもよく分からない。だから、素人がいろいろ想像を逞しくして、エベレストが何時になったら一万メートルを越えるだろうかとか、それでも無酸素で登れるだろうかなどと想像してみるのも面白いだろう。

それにヒマラヤ山脈のためモンスーンがさえぎられ、日本もとばっちりを受けて梅雨になるなど、この本を読むまで私は少しも知らずにいたけれど、これでにわかにヒマラヤの造山運動が身近に感じられるようになり、梅雨が来るたびにこの本のことを思い出すことだろう。

さまざまな事象を繋ぎあわせ一つの結論を導き出すのは、大変楽しい知的な作業であり、それもヒマラヤを眺めながらとあってはうらやましい限りである。この本は各章ごとにそのような知的作業の香りが感じられ、それがこの本の魅力となっていて、推理小説などよりはるかに面白い。そしてこのような作業にあたっては、人間の脳味噌ほど優れたものはないということを改めて認識させられた。というのはコンピューター・シミュレーションの章だけは、歯切れが悪いと言うか限定条件がつき過ぎて、私にはほかの章にくらべて迫力がなく魅力に乏しいように感じられたからである。締切りに追われ、うなされて見た夢の中で、これだけ優れた人達が集まっているのだから、長年の間に培われた直感にたよれば、コンピューター・シミュレーションなどせずとも、よい結論が出るよと泰安さんがつぶやいていた。

コンピューター嫌いのたわごとと聞き流して頂ければ幸いである。

（山本健一郎）

早坂敬二郎遺稿集

『長き尾根の果てに』

早坂真寿見・東京農業大学山岳会　一九九五年一月刊

A4変型判　一四七ページ

近年、彼ほど愛された登山家は数少ない。往々にして優れたクライマーは極めて強く個性的であり、だからまた誰からも愛されるというわけにはいかない。しかし、彼、早坂敬二郎ほど誰からも慕われ、信頼され、良き我が山の仲間として遇された者はいないのではないか。

惜しみても余り有る登山家であった。そのことは初めのページを開くと、すぐに読む者に伝わってくる。織内大先輩の序文は、彼へ

の期待と、今はそれが叶わない無念さに溢れ、彼を知る者にしみじみと哀悼の意を感じさせるものだ。それは原氏の彼の足跡を記す文にもよく表われている。

年代順に配された『長き尾根の果てに』と題されたこの遺稿集は、彼の登山家としての思想の成長を追いながら、その時々に深く関わった友人達の思い出と、彼と共有した時代が語られる。同時代を生きた仲間達の追悼はいずれも愛情の溢れたものであり、早坂の残した遺稿がより理解できるように配置されている。次いで彼の山登りのあり方、指導者としての力量、農大とJACにおける早坂像—彼のダンディズムも含めて座談会の記録という形で語られる。そして山の仲間と家族の慈愛に満ちた追悼の言葉へと続いていく。このような構成は、誠に心の行き届いたものであり、編集委員の方々によって、温かい愛情あふれる追悼集になった。彼は本当に良い山の友を持っていたと、今さらに思う。

しかし、ここでは何と言っても、早坂本人の遺稿が重要である。彼の遺した文章をまず読んでみよう。

「日高行」と題された巻頭の文は、六八年の大学三年当時、雄大で山深い山域からの影響もあって少し感傷的すぎるかもしれない。後に彼は農大の山登り等と組織の山登りについて議論をするようになるのだが、ここには若者特有の感性にふさわしい山への憧憬と素直な心情の吐露があり、やはりこれが彼の山の原点なのかもしれない。

本間氏宛の便りと「ネパール放浪記」には、次に飛躍を試みようと苦悩する（カトマンズはそのことにふさわしい場所であったはずだ）彼をみることができる。やはり手紙は、時に本当の自分を書き綴るのによい手段なのであろう。孤独と純粋さへの渇仰に葛藤しながら感動し、そして彼の視線は決して温かさを失わない。これがそうなのだと彼の一文を引用してもいいのだが、どの一行をとってもそうなのだ。「俺は何かを書くために山に登るんじゃない」（本間氏の「高校の頃」）と言う彼がこれだけの文を残したのだ。私達の前に遺された文章には、全体に山行の記録においてさえ浪漫的と言っていい若い心の高揚がある。

七十年代に入ると、農大の山登りといった組織論が姿をあらわす。それは初めて農大の仲間と登ったシックルムーン峰に失敗し、その中から立ち上がろうとするところから生まれたようだ。その仲間との山登りというものについては、八四年の部会報に書かれた文章—ここで彼は過去と来るべき自らの登山について概観する—に、彼の意気ごみを記すことで、はっきりと自覚する。

日高での山への憧れから始まって、放浪と苦悶の中からヒマラヤの試登を経て、いよいよ早坂の「山」と対峙する。「私の山登りの系譜は『仲間と登る』というところにあると思う」という文章が、何よりこの当時の彼を雄弁に語る。この後、彼はこれを基底として大きく一歩、更に一歩と進んで行く。そしてコンロン七〇〇〇メートル峰の初登頂を果たして、完璧な成功をもたらすことになる。登頂報告の中で、今後の展開と題された文章に、彼の登山観が力強くしるされる。ナンガパルバット・ルパール壁中央側稜の試登を経て、更なる発展と実践をするべく、この遺稿集の書名ともなった「長き尾根の果てに」夢の実現を試みる。

この頃、農大山岳部は他大学の雌伏を尻目に、若手ＯＢも含め、追随を許さないほどの充実した活動を行っていた。そういった裏付けがあったればこそ、コンロンの七〇〇〇㍍から八〇〇〇㍍へと、高さと困難さを求めて突き進む。ナンガパルバット一九八九年の報告書の中でも「農大の山登り―とはチームで行う登山を基本とする。個々人の創造性がある一定の方向性のもとに編成、組織されると単なる個人の集合体を超えた有機体となる。そして、チームの目的遂行の過程で各々が自らの創造性を高めて実践すれば、その相乗効果によって限り無い可能性をひらくことができる。それが、われわれの山登りの基本姿勢である」と宣言して、ラキオトの東南稜に挑む。しかし馬場隊員を落雷で失うという悲劇のうちにこの山は終る。「大きな代償を払ってしまったけれども、今回のナンガパルバットは私たちに進むべき方向を再確認させてくれた」（桜井氏への便り）として、強力なメンバーを抱える、いわば早坂組とも呼べる若手隊員とともに、早くも九一年に再起をかけてブロードピークに挑むのである。この登山を前に彼は右足首を骨折、私達の心配をよそに、彼の敢闘精神はひるむことを知らずカラコルムに向かって行った。八〇〇〇㍍峰での「完全な登山」。これがブロードピークであり、早坂が目指したものである。そしてそれはみごとに実行された。「ブロードピーク登頂記」に報告されているとおり、ｆｉｘロープを回収する余力を持ちながら、後続の他隊のために残置する程の、余裕ある登頂であった。彼自身はこのことに疑問を投げかけているが、成功に驕ることなく、謙虚に山登りを続けなければとも思う。しかし一方、下山後に馬場氏を偲んで、ナンガパルバットのＢＣに赴き、そこで、かつて自らが挑んだルパール壁に、サンナビキバーティーの登攀を眼前にして「山登りはこうでなければいけない。本来、山登りとはこういうものをいうんだ」とつぶやくことになる。彼は「農大の登山スタイルを基本としつつも、それにこだわるのではなく、それぞれの自由な発想で山登りをするために、さまざまな方法を試みる」こと、自己満足や排他的、閉鎖的で独善におちいることなく「身も心も燃えたぎるような情熱をもって山登りをしたいものだ。」と改めて認識し、次に向かおうとしていた。この熱い思い―トウィンズなのかエベレストだったのか―を実現させようとしていた。しかし、彼はこれ以後、彼の山を語る言葉を残していない。死が語ることをとどめてしまったのだ。

このように読み進めてくると、早坂は極めて個性的で強い登山家であったことが分かる。それなのに誰からも〝敬二郎〟〝早坂さん〟と上下なく愛された。そしてめんどうみのいい、やさしい男でもあった。それは七五年の南米チンボラソの登山が後輩の追悼のためであったということによく表われている。そのような兄―ジロー兄ちゃんは、妹―小林さんにも家族にも自慢の男であったろう。

重ねて言うがこの一冊は、いわゆる追悼集にみられる悲しみと涙の物語ではなく、彼への温かい愛情にあふれている。それは彼を知る者達が、そして何より編集者が彼を深く愛していたから、生まれたものだ。

「良き登山家とは、生きている登山家である。」イギリスのクライミングを支えて、八五年天寿をまっとうしたドン・ホイランズのこの言葉こそ、彼にふさわしいもののはずであった。

しかし、惜しんでも、くやんでも彼は山で死んだ。

（追記）彼を失ってから五年、彼の仲間は、いま、トウィンズに挑んでいる（一九九五年十月十六日に登頂した）。彼のいない空虚を埋めて、彼の仲間は帰ってくるだろう。そして早坂の志は、生きて続いているのだということを、誰もがまた、あらためて知ることになるだろう。

（絹川祥夫）

会報「山」図書紹介一覧―一九九四年度―

●四月号（五八七号）

市川静子・岡田敏夫・岡部純正・川越はじめ・廣澤和嘉共著『日本300名山ガイド東日本編』（新ハイキング社）

岩科小一郎著／藤本一美編『山ことば辞典』（百水社）

京都山友会編『京都ふるさと登山50選』（京都新聞社）

長宗清司著『琵琶湖周辺の山』（ナカニシヤ出版）

山村正光著『中央本線各駅登山』（山と溪谷社）

日本山岳会東海支部編『東海山岳　六号』

●五月号（五八八号）

大西宏遺稿集『遠く高く』（悠々社）

大内尚樹編『秘境の山旅』（白山書房）

渡辺兵力著『自然流スキー考』（茗渓堂）

日本山岳会越後支部編『越後山岳　第9号』（日本山岳会越後支部）

Johanna Merz (ed.)　"THE ALPINE JOURNAL 1993"

"Berg '94 Alpenvereinsjahrbuch"

市川静子・岡田敏夫・岡部純正・川越はじめ・廣澤和嘉共著『日本300名山ガイド西日本編』（新ハイキング社）

●六月号（五八九号）

神奈川ヒマラヤ登山隊一九九二編『スパンティーク全員登頂』

川上隆・松永敏郎他著『一九九二年　桑頂抗沙峰登山隊報告』

脇坂順一著『八十歳はまだ現役』（山と溪谷社）

下越山岳会編『飯豊』会報第五号

諏訪多栄蔵著／雁部貞夫・薬師義美編『ヒマラヤ山河誌』（ナカニシヤ出版）

Ramesh Raj Kunwar "FIRE OF HIMAL"

●八月号（五九一号）

『二〇万分の一地勢図基準自然地名集』（財・日本地図センター）

牛丸工著『内野常次郎小伝・上高地の常さん』（日本山書の会）

ピアリー著／中田修訳『北極点』（オセアニア出版）

神奈川新聞社編集局編／著『丹沢　ブナは訴える』（神奈川新聞社）

Nicholas O'Connell "BEYOND RISK Conversations with Climbers"

加藤久晴著『傷だらけの百名山』（リベルタ出版）

Alan Kearney "MOUNTAINEERING IN PATAGONIA"

Walt Unsworth "ENCYCLOPAEDIA OF MOUNTAINEERING"

●九月号（五九二号）

芦安村編『芦安村誌』（山梨県芦安村）

江本嘉伸著『西蔵漂泊上・下』(山と溪谷社)
史占春主編／成都地図出版社・中国登山協会協同編集『中国登山指南』
金子民雄編『フランシス（フランク）・キングドン―ウオード』(小林書店)
James Lucas "HITLER'S MOUNTAIN TROOPS"
William L. Putnam "GREEN COGNAC"

●十月号（五九三号）
上野英世著『森を楽しむ』(淡交社)
Steve Dean "HANDS OF A CLIMBER a Life of Colin Virkus"
益田幸郎・益田晴子著『カナディアンロッキー・ハイキング案内』(山と溪谷社)
山形大学・コーボルト会シルクロード学術登山隊編『コーボルト―コクセル峰初登頂特集―』
Stacy Allison "BEYOND THE LIMITS A Woman's Triumph on Everest"
七時雨の自然と語らう会編『七時雨（ななしぐれ）の風』(白山書房)

●十一月号（五九四号）
大森弘一郎写真集『空撮ヒマラヤ』(山と溪谷社)
東北大学山の会編『チベット高原の盟主ニェンチェンタンラ』
Jack Ede "MOUNTAIN MEN OF MILFORD"
根深誠著『遙かなるチベット―河口慧海の足跡を追って』(山と溪谷社)
泉康子著『いまだ下山せず―ドキュメント　山岳遭難捜索』(宝島社)

●十二月号（五九五号）
立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊一九九三報告書『白き咆哮』
白川義員作品集『南極大陸　上巻―超絶の天然―』(小学館)
Helmut Dumler & Willi P. Burkhardt "THE HIGH MOUNTAINS OF THE ALPS VOL.1 The Four-Thousand-Metre-Peaks"
Aamir Ali (ed.) "ENVIRONMENTAL PROTECTION OF THE HIMALAYA"

●一月号（五九六号）
日本山岳会京都支部編著『山城三十山』(ナカニシヤ出版)
ロバート・スワン著／三方洋子訳『北極を歩く』(図書出版社)
沢野ひとし著『休息の山』(山と溪谷社)
Frith Maier "TREKKING IN RUSSIA & CENTRAL ASIA"

●二月号（五九七号）
薬師義美著『新版・ヒマラヤ文献目録』(白水社)
『アーバンクボタ三十三号　特集・八ケ岳』(株式会社クボタ)
石田稔郎著『韓国の自然と山』(韓国登山同好会)

●三月号（五九八号）
日下田紀三著『屋久島　森・水・山』(八重岳書房)
山ぼうしの会編『レクイエム・小林基子さん』
Walt Unsworth "HOLD THE HEIGHTS"
小倉厚著『周辺的登山学・山のエッセイ』(近代文藝社)

追悼

広瀬　潔氏（一八九六～一九九四）

広瀬潔氏は父広瀬市三郎氏が麻布御用邸で林広太郎伯爵と兄弟の如く育ったため、一八九六（明治二十九）年十二月八日そこで生まれ、七歳迄は内親王の御相手として育ったと云う。後本郷湯島に移り、大正四年錦城中学卒、同五年九月造士館第七高等学校（鹿児島）入学、同八年三月同英法志望科卒、東京帝国大学法学部入学、十一年卒、この卒論を書くために尾瀬長蔵小屋に半年こもったのが山スキー人生の始まりになったと云う。

卒業と共に三井銀行横浜支店調査係に入り鎌倉に住み、横浜山岳会で小島烏水、高倉テル氏等と相知り、一九二五（大正十四）年日本山岳会員となる（会員番号九三二）。結婚して大正十五年長女滋子、昭和三年長男洋一、同七年次女澄子が生まれ、同十六年京都支店に転勤、今西、西堀、森本氏等と面識を持った。

一九三二（昭和七）年第一回地球観測年のため富士山頂に臨時に気象観測所が設けられる事となり、明治時代から既に冬富士越冬観測を行った野中至氏の影響で富士山にも登るようになった。この頃から山の気象に興味を持ち、中央気象台長岡田武松、予報課長藤原咲平氏等の教示を仰ぐ様になった。富士山頂の観測には一年間の予算しかなく、中止の危機にあったが、三井銀行調査係であった広瀬潔氏が三井報恩会に働きかけ、七千円の寄附援助が得られ、そのお陰で富士山測候所として通年観測が行なわれるようになった。

昭和十二年頃長野電鉄の経営が危機に頻した時、志賀高原等の観光開発に協力、以後知床、男鹿半島、白山、比良、日南、秋芳洞等色々な観光開発にも関係している。同時にニセコ、栗駒、尾瀬、立山、比良、等色々なスキー場の設計にも関係している。昭和九年室戸台風の時、富士山測候所に視察に行き、台風の被害が中腹の方が山頂よりずっと大きい事を発見、同十四年三月には深田久弥氏と二人で富士山頂よりスキー滑降の記録を作った。

昭和二十六年気象庁山岳部では山の気象遭難多発に応じ山の気象シンポジウムを行なったところ、百六十名を超える登山者が集まり、山の気象研究会を作らざるを得なくなった。マナスルブームも起こり、気象庁には山の気象に該当する部門が無いため、公務外だと云う非難が起こり、その世話は非常な負担となった。丁度部外者の広瀬潔氏がアマチュアとして、退職後でもあり、同氏宅を貸して下さる事となった。

この家は大正十二年の大震災後、父市三郎氏が今の代々木四丁目一七番地に建てたもので、氏は第一銀行に勤め乍ら、日本山草会員として、高山植物の栽培をしていた。昭和二十三年京都より戻った潔氏は軽井沢より土壌と共に移植した白樺を植え、白樺山荘と名づけて山男を泊める様な事もやっていた。そこで山の気象研究会では、ここの二階で幹事会や月例会を開かせて頂く事になり、気象庁内部

の非難をうまくかわす事が出来た。同三十一年には潔氏御自ら会長となり、山の気象の全盛時代が花開いたのである。白樺山荘は会員にとって思い出の家として、今でも新宿副都心に接して建っており、長男洋一氏が後を継いでおられる。古い登山家でここに泊った人も多いそうだ。明治以来の古いスキー、アイゼンや尨大な遺品、山岳書もあったのだが、今回洋一氏によって、上越市レルヒ記念館、富士山測候所御殿場事務所、沼田市尾瀬特別記念館、日本山岳会等に保存される事となった。白樺林は今も残っており、初代のは一本しかないが、三十三年皇太子妃に献上されたものもあったと云う。

氏は昭和三十一年から六十一年迄実に三十年間に亘って山の気象研究会会長として、気象学者ではないものの、豊富な経験と年の功によって、兎角自意識の強い会員をうまくまとめてくれ、喋り出したら止まらない雄弁とユーモアは十五分の予定を一時間にしても苦しくなく、最も生き甲斐を感じられた時でもあったろう。氏は毎朝朝食前に四㌔以上歩いていたそうで、九十二歳迄は自力で気象庁の集会に出られ、神保町の寿司屋で懇談会をやる時も皆と同じ速さで歩くので、皆びっくりしていた。会は平成三年三月十三日、第二十七回秩父宮記念学術賞を受けたが、是も氏に負う所が少くない。この外全日本山岳連盟理事、文部省登山研修所講師、日本観光学会評議員、雪氷学会理事、北海道庁観光嘱託、長野県スキー場雪崩審査員、白蟻研究会員等、せい一杯老年を生き尽くした人として、来世でも忙しい事であろう。

一九七五（昭和五十）年日本山岳会永年会員、一九八八（昭和六十三）年同名誉会員となる。

一九九四（平成六）年五月二日永眠、九十七歳。

なお本文は広瀬洋一氏と松村潤会員の御協力に依るものである。

（大井正一）

月原俊二氏（一九〇六～一九九五）

月原さんの訃報を知ったのは一九九五年一月二十五日の朝の九時頃でした。前日食物を喉につまらせ、処置が遅れたためだとの事であった。年を取ると思いもかけないことで命を落すものだ。時々顔を合わせて昔話でもしたいものだと思っていた矢先のことであった。葬儀の時間に出席出来ないので早速に花を準備して御線香を供えに伺いました。

月原さんは生存中は〝月さん〟と云う愛称で皆に親しまれ、九州では日本山岳会会員では最も古く、一九三三（昭和八）年入会（紹介者角田吉夫、竹内亮）、会員番号は一番若い番号の一四三六番でした。私が月原さんと顔見知りになったのは、私が八幡製鉄所山岳部に入部した頃（昭和二十二年）からだと思います。あの当時は前線から復員して帰ったばかりの四十歳前の元気盛りの頃で、従軍中の苦労話など聞かされた記憶があります。一九四二（昭和十七）年の日本山岳会会報一一八号に月原さんが戦地フィリピンの前線より当時の山岳会事務局に送った手紙が「会員通信」欄のトップ記事としてフィリピンの山の風景のスケッチまで掲載されています。最近

こんな記事を読みますと戦時中の岳人の心意気がうかがわれ、私など多少は兵役に服務したものとしては心ひかれる文面であります。文面の一部を紹介します。「藤木部長（故藤木九三名誉会員）を迎えての英彦山↓犬ヶ岳↓宇の島間の大縦走鍛錬行軍、日本山岳写真展の開催。第四回冬季特別錬成会（伯耆大山）等々、真実の姿を偲ぶ事が出来ます。さて小生ピリピン・ブンド（フィリピンの山）の一つにも登はんすることが出来ました。登はんと云うより、ジャングル山岳戦参加であって、のんびりした自由登高でなく、其処には敵巨砲ひねもす夜もすがら炸裂する第一線の血と汗と油の登高です。…（中略）末筆ながら新体制下のＪＡＣ会員各位の活発なる行動をピリピンの一角より遙かに御願ひしつつ。パアラム（さようなら）」と云う戦地より送り届けられた手紙の一節であります。

終戦後は一九四六（昭和二十一）年春に無事に帰国されました。戦後の登山する余裕などない四十七年早春の三月には九州山岳連盟で積雪期の屋久島登山を世話されて、マネージャーとして大活躍をされたことも昨日の出来事のように想い出されます。四八（昭和二十三）年には第三回の国民体育大会が福岡県が担当県となり、はじめて登山部門が正規種目として登場した為に、北九州では中枢メンバーである橋本三八氏や藤崎定雄氏、末松大助氏などと共に行事計画の立案から実施に至る細目まで再びマネージャー役を引き受けて活躍して戴きました。この頃から日本山岳会と山岳連盟との関係が複雑になり御苦労をしていた様子が目に浮かびます。四八（昭和二十三）年十一月下旬には日本山岳会主催の冬期登山講習会が富士山で行われた時も御一緒して私共の練習ぶりを撮影していただきました。その時のスナップ写真が山岳雑誌「岳人」の表紙として使用され、私共もそのモデルとして登場することが出来て、よい想い出となっています。四九（昭和二十四）年の三月には北部九州地区の日本山岳会員の山スキーの講習会を白馬の八方尾根で黒菱小屋を合宿所にして行い、月原さんの指導よろしきを得て可成り技術の上達が出来たように思いました。伯耆大山をホームゲレンデとして練習して来た私共には八方のスケールの大きなコースは大変に勉強になりましたが、当時としては月原さんが九州では最先端をゆくスキー技術の持ち主であると思いました。引き続いて志賀高原に廻り熊の湯に於て林間滑降の醍醐味がわかるようになったのも月原さんの御指導のお蔭だと思っています。

月原さんは写真撮影が上手で、若い時は登山に関係した作品が主体でしたが、晩年になり、体の無理がきかなくなってからはカメラが主体となりＤＰＥの店をはじめられた。一九八七（昭和六十二）年には日報連報道写真コンテストでの全国大会に九州山口から唯一人入賞されたのですが八十歳になってからでも奮闘され、死ぬまでカメラは離さないと頑張っていました。

若い頃から登山とスキーをはじめられ一九二九（昭和四）年に北九州では最も古い戸畑山岳会を設立され、三二（昭和七）年には九州で最古で唯一の登山具とスキー用具の専門店「幸山荘」を開店され当時の数少ない岳人の間では名前が通っていました。好日山荘の経営をなさっていた故西岡一雄会員や故海野治良会員などとも親密な間柄で私達も紹介していただいて大阪や東京で御世話になりました。又一九五七（昭和三十二）年七月に日本山岳会北部九州支部（現

在の福岡支部の前身）創設に当っても中心的な仕事をやって下さいました。一九八四（昭和五十九）年には永年会員になられたので是非に東京へ御連れしたいと思い、その準備を致しましたが固く辞退されるので、北九州でささやかな御祝いの席に招待致しました。是非に支部報に一文を寄稿して下さいと御願いした支部報第三号「交々の思い出」が、月原さんの最後の文章になりましたが、親しく会話を交えたのもそれが最後の機会だったように思います。父親を亡くしたような淋しさを覚えるものであり、どうか静かにお眠り下さい。合掌

（吉村健児）

山本（高橋）敏三氏（一九一〇～一九九四）

「ぴんさんが亡くなった」訃報が届いて、はやいもので一年がたとうとしている。あの阪神大震災が起こり、氏が愛してやまなかった芦屋ロックガーデンも、大きな被害を受け、懐かしい岩場もかなり崩落してしまった。

我々仲間内では「ぴんさん」、六甲の山では「ひげのおじさん」と敬愛を持って親しまれていた彼も過去の人になった。

氏の山への関わりは十代からのものらしく、戦前戦後を通じ七十年もの長いもので、私は戦後、一九五三（昭和二十八）年に縁あって氏の主催しておられた「アルパインクラブ雪線社」に入会指導を受けたので、せいぜい四十数年のお付き合いにかかわらず追悼文を書けとおはちが回ってきた。

「雪線社」というクラブは、当地大阪の岳人の間でも、駄洒落ではなく知る人は知るが知らない人は知らないという感じで、この際、氏がライフワークとして育てられた「雪線社」のことなど述べてみます（以下敬称略）。

一九二七（昭和二）年四月社会人山岳会「アルパインクラブ雪線社」山本部長主管で誕生。

あの昭和大恐慌の時代によくできたものと思う。

しばらくは部員が集まらず、一進一退を繰り返したようだが、一九二九（昭和四）年一月乗鞍、同年四月槍ヶ岳、一九三〇（昭和五）年一月白馬・杓子尾根厳冬期初登頂、一九三三（昭和八）年十二月雪線社報告第一集発行、一九三五（昭和十）年四月雪線社創立を記念して芦屋ロックガーデン・山祭（これは戦時中をのぞき毎年行われた）、同年十二月雪線社報告第二集発行。雪線社報告は一九七五（昭和五十）年四月第七集まで発行された。

三七（昭和十二）年頃より中核となる会員の応召が続いたが、後に関西登高会を作った梶本徳次郎、五九（昭和三十四）年ベルーアンデス（初登）の竹田吉文ら他多数が新たに加わり、四一（昭和十六）年太平洋戦争が始まるまでは、北アルプスを中心とした高踏的山行が行われたようです。

当時のことを山本部長が生前よくいっていたこと（あえて関西弁で）

「そらな山いって強力雇うやろ、ほなな、うちの連中強力より余

追　悼
OBITUARY



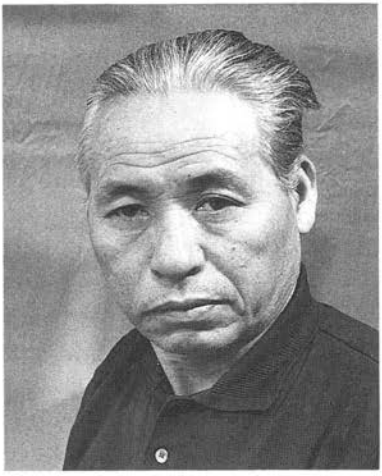
名誉会員
広　瀬　　潔氏
HIROSE Kiyoshi
(Hon. Mem.)
(1896～1994)



名誉会員
辰　沼　廣　吉氏
TATSUNUMA Hirokichi
(Hon. Mem.)
(1916～1995)



山　本　敏　三氏
YAMAMOTO Toshizō
(1910～1994)



月　原　俊　二氏
TSUKIHARA Shunji
(1906～1995)



権　藤　太　郎氏
GONDŌ Tarō
(1917～1995)



寺　村　栄　一氏
TERAMURA Eiichi
(1911～1994)



伊　達　忠　雄氏
DATE Tadao
(1906～1995)



佐久間　惇　一氏
SAKUMA Junichi
(1914～1993)



鴫　原　啓　佑氏
SHIGIHARA Keisuke
(1927～1995)



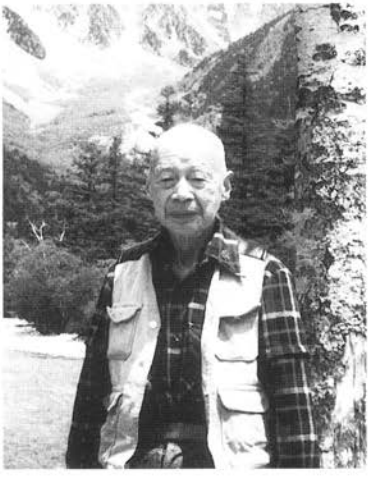
山　下　道　生氏
YAMASHITA Michio
(1913～1995)



石　間　信　夫氏
ISHIMA Nobuo
(1914～1995)



河　野　幾　雄氏
KŌNO Ikuo
(1910～1994)



宮　原　利　重氏
MIYAHARA Toshishige
(1908～1995)



佐　藤　富佐雄氏
SATŌ Fusao
(1928～1994)

計荷物担ぎよんね、雪線社やゆうたら強力逃げよってな……」

一九三九（昭和十四）年一月冬合宿、岳沢をベースに、社会人山岳会としては初めてであろうポーラメソッド（極地法）によりジャンダルム飛騨尾根をアタック、登攀に成功。

昭和六年の満州事変勃発から昭和二十年太平洋戦争終結まで雪線社の奪われた若き尊い生命は十数名に及んだと聞く。

戦後の再建には少人数ではあるが新しい部員の参加があり、一九四七（昭和二十二）年一月御嶽にて登山合宿、昭和二十年代は雪線社再起の時代で、冬山合宿には、木曽御嶽（二十八年）、大山交互縦走（二十九年）、御在所藤内壁での氷壁登攀訓練、曽爾倶留尊山のルート開拓（当時山麓の集落は電気も来ていなかったが、今では登山道が整備され入山者多く入山料とる始末）など、活動が活発になるに従い、若い新人も増え、ようやく「雪線社」再建が見えてきた。

五九（昭和三十四）年頃からは大きな山行に山本部長の参加がみられなくなった。しかし若い部員ががんばって、海外では、栗林直子のマナスル遠征隊参加、七六（昭和五十一）年五・六月アラスカ・マッキンレーの南峰登頂。

国内でも六四（昭和三十九）年厳冬期の御嶽・継母岳西面、七六（昭和五十一）年笠ヶ岳・穴毛谷登攀と槍縦走。以上主なものを拾ってみた。

私が山本部長との最後になったそれらしい山行は、七五（昭和五十）年八月黒部川下廊下を下ったことです。その日はまだ関電歩道が開通しておらず、通行止めのところを、一本のザイルとピッケルを頼りに名剣温泉へ到着、古いことですが懐かしい思い出です。

山本氏イクォール「雪線社」、山に願いをかけて八十有余年、氏は何時も

「山へ行ったら絶対無事に帰るこっちゃ」

「自分で降りられないような岩登りはするな」

創設以来七十年近く部員に遭難者の無かったこと、今さらに思う次第。

一周忌を迎え改めて合掌

山本敏三氏は一九三四年日本山岳会に入会、会員番号一五二六。紹介者は津田周二、中村勝郎。一九八四年永年会員。

（川戸昭三）

辰沼廣吉氏（一九一六～一九九五）

辰沼と私の出会いは、一九三六（昭和十一）年慶応医学部三四会山岳部が体育会山岳部と合併して、数人の医学部生がはじめて三田のルームへやって来た時に始まる。彼はそれ迄、石川七郎さんについて可成り登っていた様子だが、その記録は定かでない。新顔のくせに一向人見知りをしない男で、すぐ我々の仲間に融け込み、その夏の涸沢合宿に参加した。同期の連中に少しも引けをとらないしっかりした足取りに見えた。

この合宿では初めてラジオと超短波無電のテストを試みたが、そ

れをすべて辰沼が引き受けてくれた。メカに弱い文科系の我々にとって有り難かった。

それ以来、剱や穂高における冬、春の高処露営と登攀（四回）のすべてに同行した。夏の剱岳三ノ窓や小黒部谷、槍ヶ岳北鎌尾根等、彼と共に歩いた小人数の山行も忘れ難い。常に良き相談相手であり、心強いロープメイトであり、気の置けない相棒だった。この様に私が卒業するまで本科の三年間、彼との山行が多かったことは仕合せだったと今でも思っている。

一九三八（昭和十三）年の冬、西穂高の稜線上に幕営を進めたが、近年稀な荒天続きで幾日も閉じ込められた。

足の揃った同じ年頃の、張り切り盛りの学生七人が十数日間露営の苦楽を共にするとお互いに見栄も欲得もかなぐり捨てておのずから心の通いと連帯感を意識する。その中に辰沼も私も居た。河野之保君もいた。

日程がおくれて燃料と食糧を切り詰めた。ベーコンも菓子も底をついた。単調な分量の少ない食事はつらかった。天幕の話題はいきおい食物の事ばかり。「芋羊羹でもよい、腹一杯食べたい。」と口走る者も現われた。

そんな時辰沼は出発以来汗と脂にまみれた着のみ着のままで独り黙然と煙草をふかし続けて居た。ある時彼は思いついた様にやおら身を乗り出して一席物真似を始めた。

「栗鹿の子」をさも大事そうに掌に載せて舌舐めずりして見せる。そしてゆっくり一粒ずつつまんで口に入れる。最後にあんこ玉を頬張って舌鼓を打つ。指についたあんこをペロペロ舐める。それで終り。一同大笑い。

辰沼はにこりともせず今度は食糧係を突っついて「おい菓子を出せ」と強くせびる。人一倍の喰いしん坊振りだ。

彼は落語の真似がうまい。それというのも父君が落語好きでよく自宅に噺家を呼んで一席楽しまれたそうで、その傍で廣吉少年はおとなしく聞いて居た。それがすっかり身についたのであろう。

仕草や語りばかりではない。江戸落語独特のおどけやユーモア、その底にながれる義理人情がいとも自然に彼の身に浸みこんでいる様だ。

戦時中、彼は海軍、私は陸軍で暫く会うことは無かった。戦後、やや落ちついた一九五〇（昭和二十五）年五月、彼は学生一名を連れて東京から、私はひとり大阪から、富山駅で落ち合って剱へ向かった。別山乗越の小屋ではたまたま来合わせた芦峅寺の佐伯利雄ガイドと久闊を叙したりして感懐深い山行だった。

戦争で二度と登ることはあるまいと諦めていた剱に、それも辰沼と一緒に登れて嬉しかった。しかし頂上に立った時は心なしか心底から素直に喜べない一抹の寂しさを覚えた。それは戦禍に果てた亡き友への負い目のせいか。心に穴があいた思いだった。辰沼も同じ心境だったのではなかろうか。

その後彼は三回にわたる日本山岳会のマナスル遠征隊にすべて参加した。その間彼は登山者として又医師として、特に高処医療に、登攀用酸素の用法、管理に全力を傾けた。その様子は不参加の私には遺憾ながら語れない。

下って一九六八（昭和四十三）年、彼は乞われてメキシコ・オリ

ンピックの医療班として出張、その帰途飛行機内で突然発病した。極めて憂うべき容態だったそうだが、帰国後荻窪病院での手術は幸いにも成功して一命を取り止めた。しかし後遺症が残り、以後の日常生活に大きなハンディを抱え込んでしまった。山登りも出来なくなった。

ここで彼は将来果たして良心的な医業を完うし得るや否やの重大な判断の岐路に立った。父君の代から地元日本橋界隈で殊の外信望の篤かった辰沼医院の存立にもかかわる。加えて医師として、一個の人間として最も充実した五十余歳の身を今後如何に処すべきか。その時の彼の判断の迷いと苦悩は並大抵ではなかったであろう。考えに考え、悩みに悩みぬいた末、彼は遂に医業を退くことに決めた。凄い決心である。

或る会合で、事情をよく知らない一人の友が「どうして医者をやめたんだ?」と案じ顔で尋ねた。彼は平然と「あんまり評判が悪いので」と一言、「ワッハッハ」と笑い飛ばした。皆呆気にとられて連られ笑いをした。私は胸の痛む思いだった。

その後も彼は入退院を繰り返した。或る時「入院中の作品だ」と言って、彼一流の諧謔を水墨の一筆画に託して

「お迎えも　廻れ右して　お邪魔虫」

「気にかかる　医者と坊主の　立ち話」

の二句を書き添えたはがきをくれた。

医業を離れて療養生活二十七年。その間些かも弱音を吐かず愚痴もこぼさず、常にユーモアを失わなかった彼。その間心静かに想いを水墨画に託した彼。その心境は諦観の境地に立つ高僧のそれに通ずる様に思われる。

これも終始温かく懸命の介護を尽くされた奥様のお陰。その奥様の御先祖と深い関わりのあった良寛和尚にもどこか似ている様だ。

或る時、槙さんとの対談（登高会報三十五号「槙さんの思い出」所載）でいけしゃあしゃあと「私の先祖は石川五右衛門と聞いているのですよ。」と言ってのけるあたり、まさに「ウー助」（普通部時代からの彼の渾名）の面目躍如たりである。

「お前なんかに追悼文を書かれたくない。」「いや、それはこちらの言うことだ。何を書くか分からないのはお前の方だ。」そんな減らず口を利き合う仲だったのに。

そうだ。今頃彼はあの風雪狂う西穂高の天幕場へ飛んで、先立った仲間四人に迎えられているのではなかろうか。河野君と私は取り残されてしまった。

謹んで醫伯院雪山廣仁居士の御前にこの一文を捧げるものである。

略　歴

一九一六（大正五）年一月一日　東京に生まれる。慶応義塾幼稚舎、同普通部を経て大学医学部へ進む

一九四一（昭和十六）年　七月日本山岳会入会。会員番号一九五三（紹介者三田幸夫、早川義郎）。十一月繰り上げ卒業。海軍短期現役軍医中尉任官、戦時中ラバウルに駐留。一九四六（昭和二十一）年帰還

一九五〇（昭和二十五）年～一九五一年および一九五五（昭和三十）

年～一九五八年、一九六一（昭和三十七）年～一九六七年　日本山岳会理事
一九五三（昭和二十八）年、一九五四（同二十九）年、一九五六（同三十一）年　日本山岳会マナスル遠征隊に参加
一九六八（昭和四十三）年　日本山岳会評議員
一九六八（昭和四十三）年　メキシコ・オリンピックに医療担当医として出張、その帰途機内で発病、帰国後、荻窪病院にて手術に成功、一命を取り止める。以後後遺症のため医業を退き療養生活を送る
一九六九（昭和四十四）年～一九八八（同六十三）年　日本山岳会医療委員長
一九八八（昭和六十三）年　日本山岳会名誉会員に推挙される
一九九一（平成三）年　日本山岳会永年会員
一九九五（平成七）年二月十二日　没。享年七十九歳

（太田　敬）

権藤太郎氏（一九一七～一九九五）

一九九五（平成七）年三月二十九日、権藤太郎先輩の訃報を聞きおどろきと、何故との気持ちで一杯でした。療養中とは聞いていましたが今年の年賀状には、二月には元気になりみんなと会えることを楽しみにしているとのことでしたのに。

先輩は私の中学校の先輩でもあり、弟の故二郎君とは同期で山岳部員として一緒に山に登った仲間でした。戦後まもない山の本等も少なかった時、先輩宅で山の本を読ませて戴いたのが最初の出会いでした。

先輩は、つくし山岳会の会員として若い頃から九州の山は勿論本州の山々にも登られ、一九四八（昭和二十三）年二月の九州山岳連盟屋久島登山隊や、関西登高会の北アルプス縦走等に参加されていました。勤務先の九州電力株式会社の山岳部でもリーダーとして九州の山を広く登られ、冬の伯耆大山にはよくスキーに行かれていました。

九州電力を勇退されてからは、若い頃の夢であった海外の山々に登られたり、考古学に見識が深かったため国内外の史跡等に熱い情熱を燃やされ足を運ばれておられました。

一九八七（昭和六十二）年、日本山岳会福岡支部再起の折には、支部長の重職を心よく引き受けて戴き若い者の意見をよく聞かれながら、間違った方向に行きそうな時は遠慮会釈なく意見を出され方向修正され若い者の指導に当ってこられました。支部再起には色々な問題がありましたが、前述のように自分の考えをはっきり出して処理され、再起の基礎作りに貢献して戴きました事は会員一同納得の行くところであります。又、福岡支部の仕事の重要課題の一つとして〝九州の山々〟の戦後版を作ろうと提案され、その第一段階として戦後の九州登山史年報作製にご尽力を賜りました。未完成ですが九州登山史年報が印刷物となって出来上がった時の先輩の喜びのお顔は今も忘れられないものです。

先輩は何時も自分は高山病にはかからないと自慢していらっしゃいましたが、ナムチャバルワのベースキャンプまでのトレッキングに参加された時、何故かラサに着かれた時体調を崩された事が大変気になっておられた様でした。その後、動脈瘤と云う病気にかかられ入院、退院がありましたが元気な時には私達と一緒に酒を飲み（ビール一本に制限されてはいました）、福岡の山仲間で自分が一番口の悪いことを自慢されながら私達を叱り飛ばされていたお姿が目に浮かびます。

常に若い者にはっぱを掛け自分の出来なかった事をどんどんやってくれと云われた事を忘れず、貴重な先輩をなくしましたが先輩の分まで頑張らなければならないと思っているところです。

天国で今頃好きなパイプをふかしながら相変わらず口うるさく、山の仲間と楽しい酒を飲み続けておられることでしょう。

先輩のご冥福をお祈り申し上げます。

（権藤太郎氏は一九四一年入会。会員番号二〇三七、紹介者は加藤数功、吉村毅。一九九一年永年会員。）

（深田泰三）

寺村栄一氏（一九一一～一九九四）

寺村さんは、数年前にころんで足を怪我されてから身体が弱り案じられていたが、一九九四年十一月二十六日、帰天された。享年八十三歳。葬儀は、日本聖公会東京聖三一教会においてとり行われた。

寺村さんが亡くなられて、日本のワンダーフォーゲル運動は精神的支柱を失う。

私は、一九四九年に立教大学に入学、同時に体育会山岳部に入部する。同じ時に旧制中学以来の友人宮野潤三君は、文化会ワンダーフォーゲル部に入る。彼は後に主将を務める。山岳部は毎日ハードトレーニング。私は、大学では午後からは授業はないのかな、と思う始末。夏山は、自分の体重を優に超えるキスリングで徳本峠越え。島々の入口には、大雨のため「通行禁止」の標識があったのに、ああ。

ワンゲルはといえば、北軽井沢照月湖畔にある寺村さんの別荘で夏合宿。宮野君の話では、周囲のやぶ山を歩き、浅間隠から眺めた浅間山は印象的だったね。雲泥の違いとはこのことである。

私は、体育館の地下に山岳部とワンゲルと隣り合わせにあった部室に、お見えになった寺村さんを宮野君から紹介され、「この方が寺村さん」、強い印象があったことを覚えている。

寺村さん曰く、ワンデルングを日本語的に表現すれば、遍歴が一番適切である。青年は青年で、壮年者もその年齢に応じて人生を瞑想しつつ諸国を廻り歩く、ことこそワンダーフォーゲルの真髄であると思う。登山のエキスパートに尋ねて見ると、自分は後立山と剱岳以外の山は知らないという人がいる。スポーツとしての登山はこれでいいのであろう。私は、山岳部の大先輩に「寺村さん、知っていますか」と尋ねたところ「知らないね」であった。もっとも半世紀以上も前のエピソードである。話を戻そう。しかし、われわれワ

ンダーフォーゲルはもっと広く深い精神運動であらねばならない。このように登山とワンデルングの間に明確な一線を画しておられた。寺村さんにとって立教のワンゲルは、体育会でなく文化会の所属でなければならなかった。

寺村さんは、一九三〇年に立教大学に入学される。「山岳部に入りたかったが、その頃の山岳部はヒマラヤ登攀の準備でそのトレーニングは、静かな山歩きを考えていた私としては、目標違いの感が深かったので入部を断念し有志と近郊の山々を歩きまわった。このことがワンダーフォーゲル部創立のきっかけとなった。立教では学内公認団体の最少人数は三十名であったが、シーズンオフの運動部員の体力づくりも兼ねて、後にオリンピック選手になる水泳部の根上さん、ラグビー、相撲、ホッケー、またボーイスカウトのお歴々が集まった。現役のバリバリの連中が名を連ねたので、体育会の方も、学友会の方もスムーズに行き、学校の公認団体となることができた」。

初代部長となった、仏文の河盛好蔵教授も、立教大学には由緒ある山岳部があって、かずかずの輝かしい登攀成績をあげていたが、あれは専門家の山登りしか入る事の出来ない部で、その訓練も大変だというので、のん気に近郊の楽な山や峠へ日曜日に遠足にゆくようなグループを作ろうというので、ワンダーフォーゲルが生まれたのではないかと思う、といわれている。

ひときわ個性的な人たちを集め、看板教授を部長に持ってきた、寺村さんの求心力と指導力がものいって、日本の大学の中に初めてワンダーフォーゲル部が誕生したのである。

ワンデルングの対象となったのは、未だ開発されず、俗化されていなかった、奥多摩、与瀬、奥武蔵方面へ、中央線、西武、小田急等を利用して出かけた。今ハイキングコースとして知られている所の大部分を開拓したことになる。面白い話が残っている。第一回のワンデルングで、「破産寸前」といわれた武蔵野鉄道から、社長直々に乗客誘致に貢献したとの感謝状を貰ったとのことである。

ワンゲルOBの高松太郎氏が、学徒出陣を前にしてこういっておられる。「青春を一番謳歌する時に、今、死ねといわれて戦争に引っぱって行かれたんですよ。ぼく達の心理は非常に複雑でしたね。（中略）立教のワンダーフォーゲルに入った喜びは、寺村先輩と一緒にワンデルングした山の想い出、この想い出は、もう死んでもいいという満足感をもたらすものであった」。

寺村さんは、一九三八年全日本学生ワンダーフォーゲル連盟が設立されると、OBとして評議員になる。同連盟OB会が設立されて会長に就任。一九八七年日本ワンダーフォーゲル会を設立、会長就任。ワンダーフォーゲル運動が日本にもたらされてから六十年。戦時中中断され、戦後復活されてからでも三十年余りになる。学生としてこの運動に情熱を燃やした者が、若い人に引き継ぎ、単に学生間の運動にとどまらず、高校生にも、あるいは社会人の方々も含めて、ワンダーフォーゲル運動、ワンダーフォーゲル精神の啓蒙発展を図ることが急務である、との寺村さんの年来の主張が具体的に結晶されたのである。

日本ワンダーフォーゲル会会報「ワンダーフォーゲル」は、故寺村栄一会長追悼号を発行、親交のあった理事長の吉田晴彦氏を始め

多くのワンダラーが、功績を讃え、人柄をそれぞれに偲んでいる。

寺村さんの人生は、ワンダーフォーゲルと共にあった。ワンダーフォーゲルの精神そのものであった。

仙ノ倉山に建てられていた指導標の誤りで、三井鉱山と東芝の人が疲労凍死する事故があった。東芝の山岳部員であり、広告宣伝課長であった寺村さんは、立教の現役宮野君たちを動員して、琺瑯引きの指導標を各地の登山道に建てられる。現在も上信国境辺りで「マツダランプ」の広告入りのを見かけるのがそれである。

私は、港区白金台の寺村さんのお住まいに伺って奥様からお話を聴くことができた。お宅は鬱蒼とした木立に囲まれ、冷房も暖房もない。自然がそのまま残されている。書斎には、日本山岳会の『山岳』、山の本、天文関係、茶道全集、源氏物語等々、銀座百店は製本済み。寺村さんは、お酒を嗜まないので、丸善で本を買い栄太郎で一休みというのがコースだったようである。

寺村さんは、八歳の頃から叔父につれられて山歩きを始め、旧制市岡中学山岳部、立教ではワンダーフォーゲル、東芝山岳部。北海道、東北、関東甲信越、特に谷川連峰、北アルプス、台湾の山、等、全国の有名な山は一通り登る。寺村さんの山は、広範囲に渡り、足を悪くするまで歩かれた息の長さが特徴であった。

一九四一年、東芝の先輩西堀栄三郎氏と、縁あって槇有恒氏の紹介で、中学生の頃から夢であった日本山岳会に入会する。会員番号二〇四一番、一九九一年に日本山岳会永年会員。

（中村太郎）

佐久間惇一氏（一九一四～一九九三）

佐久間さんの飯豊の初旅は小林島、人夫兼ガイドを伴い飯豊川の支流孫左エ門沢を遡行オオイン尾根から北股岳―御西岳―大日岳―烏帽子山―ヨモギ沢下り湯ノ平に至る。このルートは猟師の踏跡が部分的にある程度で殆んど薮こぎの連続であった。以来飯豊の開拓期に佐久間さんの残された足跡は驚嘆すべきものであった（下越山岳会会報による）。

戦後、登山を通じて飯豊川流域の狩猟に拘わる山村民俗、山岳信仰に興味を持たれ徹底的な調査と研究を始められた。

一九六一（昭三十六）年四月、新潟県文化財調査報告民俗篇、赤谷狩猟習俗調査報告書は既に消え去ろうとしている赤谷マタギの猟法、山言葉、用具、日常の生活等克明にまとめられた貴重な報告書で、岳人にも非常に興味をそそる稀少価値の高いものである。

一九六四（昭三十九）年三月発行された二王子山麓民俗誌は既に失われた山村行事等克明に調べあげておられる。登山のかたわら執筆に多忙な日々を送られていたが晩年は軽い糖尿病と心臓に負担をかけてはならないとドクターストップで山の方は遠のき、新発田市の郷土研究に専念されておられた。

一九九三（平五）年十二月四日日本山岳会年次晩餐会に出席、帰りの電車の時間の都合で長岡市の室賀氏宅に泊めてもらい翌五日は山岳指導員研修会に出席、夕方帰宅したら家内が、あたふたとん

できて「佐久間さんが亡くなられました」と涙ながらに訴えた。あまり突然なので驚き、予想もしていなかっただけにショックだった。その儘の姿で急遽佐久間さんのお宅へお別れに行った。声をかけたら「よう」と目を覚ますのではないかと錯覚をおこすような安らかな眠りであった。

佐久間さんの葬儀は一九九三（平五）年十二月七日菩提寺である新発田市福勝寺で営まれた。関係者三百余名の臨席の半分は山岳関係者でその代表として拙ない弔辞を奉呈したのでその一部を追悼文とします。

（前段省略）

終戦間もない物資、食糧欠乏時代の一九四六（昭二十一）年新潟市の藤島玄さんから新潟鉄工所登山とスキー部の会報飯豊特集号が届きました。その中のメモ紙に「君は新発田なら諏訪前の佐久間惇一さんを訪ねなさい。飯豊に関しては新発田の第一人者です」と書いてありました。早速そのメモを持って佐久間さんのお宅を訪れたのが初対面で、以来四十八年のながい間ご家族同様のお付き合いをさせていただきました。

山登りでは焼峰山のウジノ沢で一緒に滝壺に落ちたこと、厳冬期の蒜場山、烏帽子山はワラ靴にワカンジキでした。冬の二王子岳では吹雪にあい、ホワイトアウトの中二人で雪庇から転落、リングワンデルングを繰り返し一日中彷徨い歩いたことなど、佐久間さんとご一緒した山旅が走馬灯のように頭の中をかすめて行きます。

一九六二（昭三十七）年新潟県山岳協会設立にあたり緻密な才能で会則等の作成に尽力され、一九六四（昭三十九）年六月新潟国体登山部門の会場を飯豊連峰に開催することができました。会期中は総務部長としてご活躍され、全国の岳人に非常に好評で今でも古い岳人達の語り草になっており佐久間さんのご人徳が偲ばれます。

最後になりましたが長い間の闘病生活のなか奥様はじめご家族の献身的なご看病にも拘らず薬石効なく逝かねばならなかった佐久間さんの心境をお察しするに余りあります。どうぞ菩薩の掌にいだかれ安らかにお眠り下さい。合掌

戒名　實相院惇恵浄信居士

略　歴

一九一四（大三）年十月三十日　新発田町諏訪前にて出生
一九三二（昭七）年三月　新潟県立新発田商業学校卒業
一九四六（昭二十一）年六月　日本山岳会入会、会員番号二三二五番、越後支部番号一九番。紹介者は藤島源太郎、星光一
一九四八（昭二十三）年　㈶民俗学研究所同人参加
一九五〇（昭二十五）～一九六五（昭四十）年　下越山岳会会長
一九六六（昭四十一）年一月　下越山岳会名誉会長
一九九〇（平二）年十二月　日本山岳会越後支部名誉会員に推薦
一九九一（平三）年十一月　教育文化功労による文部大臣表彰
一九九三（平五）年十二月五日　肺癌にて逝去

主な山歴（飯豊山塊のみ記す）

一九三三（昭八）年八月　孫左エ門沢入―北股岳―大日岳―烏帽子山―ヨモギ沢―湯ノ平

一九三六（昭十一）年六月　飯豊川遡行―御西岳―飯豊本山―弥平四郎
一九三六（昭十一）年八月　飯豊川支流清十郎沢入―北股岳―扇地紙―梶川下―ヌクミ平
一九三七（昭十二）年　弥平四郎―中ノ越―松ノ木穴沢下り―実川
ビンガグチ―飯豊本山
一九三八（昭十三）年五月　川入―大石川東俣―杁差岳―大日岳―檜山沢下り
一九四六（昭二十一）年十一月　実川―水晶峰
一九四八（昭二十三）年五月　大熊沢―杁差岳往路下山
一九五〇（昭二十五）年八月　飯豊川支流北股川完全遡行―北股岳
一九五五（昭三十）年五月　飯豊川支流ヨモギ沢入―大日岳

著書は二王子山麓民俗誌、狩猟の民俗他沢山あるが直接山と関係ないので割愛する。

（五十嵐篤雄）

伊達忠雄氏（一九〇六～一九九五）

一九六一年の東海支部設立総会には戦前から活躍されていた古い会員も何名か出席されていた。当然のことながら、彼ら大先輩は一人また一人と他界され、残った先輩の中で一番長老であった伊達さんも残念ながら帰らぬ人となった。

伊達さんは大柄で見るからに頑健そのものの体躯で人目を惹いた。そしてその体格通りの登山で、広いコンパスで足が速く、その上強かった。しかし話すと温厚でジェントリーな印象だった。このことは私だけでなく、今回この追悼を書くためにお会いした伊達さんの山の関係者に共通した感想であった。

一九〇六（明治三十九）年現在の三重県鈴鹿市に生まれた伊達さんは県内一の名門校津中学を卒業後慶応大学の予科に進み、山岳部に入って本格的な登山を始められた。このあたりの事情については、もはや七十年も前のこととて慶応山岳部でも在籍されたことは判明したが、その登山については分からず、ご家族も山のことはまったく分からないとのことであった。

大学卒業後、資産家の息子であった伊達さんは生活の心配は全く無かったが、津市の住友保険代理店に勤務されていた。その一九二八（昭三）年三月、津市近郊の経ヶ峰に登山された時、偶然頂上で詩人で教員の故名古健也氏と出会い、話しているうちに同じ津中の先輩後輩であることが判り、意気投合して津にも山岳会を作ろうと「津峠の会」を設立した。

この会は現在も続く息の長い山岳会で日本山岳会でも活躍された故川北壮太郎氏も会長を務められたことがある会で、伊達さんは長くその会長を務められ、戦中も終戦直後の生活困難な時期も絶やすことなく会を運営された。

一九四八（昭和二十三）年には三重県山岳連盟を創立され、五一年に行われた第五回国民体育大会登山部門の「鈴鹿国体」では運営委員長を務められ、引き続き長期にわたって会長を務められて、三

重県登山界に大きな功績を残された。

会長在任中は山岳連盟主催の会合にはほとんど出席され、若い岳人と一緒に寝袋にくるまって寝ることも度々あり、歴代の会長の中でもっとも熱心な会長であったという。

伊達さんは鈴鹿、私は名古屋と地理的にもまた年齢的にも離れているので、山について突っ込んだ話をしたことがなく、その意味では私が伊達さんの追悼文を書くのははばかられるが、伊達さんが一九五〇年に津峠の会の会報に寄せられた「名古健也先生と私」の中の一節に、

「先生は、遊戯的登山も、静観的登山も共に山を愛する心より出た行為であって、その行動において、積極的か、消極的かの違いがあるだけで、両方とも登山であって、決して何れが是でも、何れが否でもないという見解をとっておられた。私もこの御説には賛成で、今でもこれは常に正しいと思っている。私は先生が、どちらかといえば、遊戯的登山の方が、静観的登山よりも景気が良くて、だれも彼もが、遊戯的登山者であることを見せたがる中を、敢然と自分は静観的登山者であることを掲げて、自分の信ずる道にまい進せられた偉大なる正直さに頭をたれるのである。」

現在ではこうした話は久しく聞かないが、当時の風潮の一端がうかがわれ、若き日の伊達さんの山に対する姿勢が表れていると思う。

一九七九（昭和五十四）年脳血栓で倒れられてからは山からは遠ざかられ、もともとの強い体力と持ち前の熱心さでリハビリにも取り組まれて、一人で散歩に出かけるほどに回復されたが、寄る年波には勝てず、帰らぬ人となった。

略　歴

一九〇六（明治三十九）年四月二十五日生まれ、三重県津中学校、慶応大学卒業
一九四三（昭十八）年～一九七四（昭四十九）年　特定郵便局鈴鹿市箕田郵便局局長、元津峠の会会長、元三重県山岳連盟会長、岩稜会顧問
一九四六（昭二十一）年日本山岳会入会、会員番号二四八一。紹介者塚本繁松・垣内政彦
一九九五年二月二日病没

（中世古隆司）

山下道雄氏（一九一三～一九九五）

神戸の多くの古い山仲間にとって何らかの形でお世話になった先輩であり又著名な郷土史家であった山下道雄さんが阪神大震災の前日、旅先の和歌山県の旅宿で急逝されました。一月十八日がお通夜であったと聞いたので、始めはあの書庫の中に棲まいがあるような元町の事務所で地震の為に亡くなられたと思い込んでいた私は明石の朝霧町のお宅に伺って初めて紀州の石造遺跡調査中に旅宿で亡くなられた事を知った次第です。

氏は中学のときから山岳部に所属し、昭和四年槍・穂高縦走途中

での小槍登攀とか、御嶽スキーの時何となく頂上迄登ってしまったとか、後年あの慎重居士の意外な少年時代の挿話として伝えられたものでありました。その後神戸ハイキングクラブ（後のアイスアックスクラブ）に所属し前後九年間の軍隊生活を挟んで近畿中国での山スキーとか、天幕生活での冬山登山とかで青年時代を過ごされたように年譜に記されています。以後津田周二氏を中心にした兵庫岳連の創設時には地道に書記の役を務められました。氏との出会いは一九五〇（昭和二十五）年夏山前、新緑の裏六甲水無谷の野営地で私共のグループと山下さんのグループが偶然隣り合わせに天幕を張った時、お互いに夏山の計画とか近代的な登山活動への抱負等を夜遅く迄語りあった時でした。以後氏を中心にした社会人主体の団体岳窓会が四季を通じての活動を広げていったのは氏の温厚なお人柄とどんな時でも先頭に立って身体で後輩を指導されるところにあったと思うのです。

その後一九六〇（昭和三十五）年頃迄は剱岳池の谷奥壁、剱尾根、早月尾根での四季を通じての生活など、岳窓会の先鋭的な登山活動が続けられたのですが、一九六二（昭和三十七）年著書『新しい六甲山』発刊以後は石造遺跡の探求、播磨赤松氏の歴史研究などに打ち込まれて話題は峠から峠へ史跡を訪ねての山旅に移っていったようです。以来山行は知床山脈で岩魚を釣って暮らした話の他にはこれといった話題はなく、一九七〇（昭和四十五）年からは神戸史談会に所属して郷土史家としての山下さんに変わって今に至っています。

神戸元町の事務所は私の何十年来なじみになっている床屋に近かったので、毎月一回は必ず御機嫌伺いとか云うことでお邪魔させて頂いたのですが亡くなられて今後は元町へ行く事もなくなり、従って氏を中心にした山友達との交友もなくなって行くのではないかと年と共に淋しくなって行くように思われるのです。生前御迷惑ばかりお掛けしてあまりお役に立っていなかった事ばかりが思い出されて、あの飾り気のない温顔に接する事も出来ないとやり切れない気持になる事がある。

謹んで御冥福をお祈りする以外に何もなす事がない。残念な事である。

略　歴

一九一三（大正二）年　十月三十日明石市に生まれる。
一九三二（昭和七）年　兵庫県立第一商業学校卒業。同年神戸ハイキングクラブ（後アイスアックスクラブ）同人
一九三四（昭和九）年から一九四一（同十六）年迄に軍歴通算九年間
一九五〇（昭和二十五）年より神戸岳窓会代表
一九五二（昭和二十七）年　元町運送店主
一九五三（昭和二十八）年　日本山岳会入会（会員番号四〇九七、紹介者は島田真之介、津田周二）
一九七〇（昭和四十五）年　神戸史談会会員、兵庫県山岳連盟参与
一九七二（昭和四十七）年　神戸市スポーツ功労章
一九九五（平成七）年一月十六日逝去（享年八十三歳）

（田中邦彦）

鳴原啓佑氏（一九二七～一九九五）

一九九五年一月二十一日、鳴原啓佑君は日本山岳会副会長在職のまま亡くなってしまった。これは山岳会にとって大きな損失であったが、私にとっても永年の友を失ったという耐えきれないような悲しみであった。どうせ人間何時かは必ず死ぬ定めであるが彼の場合にはもう少し苛酷な事情があった。一九六〇年代初期、商社マンとしてインド在勤中に現地で背負いこんだとしか思えないメラノーマ（悪性黒色腫）が眼球に発症して急遽帰国、右眼球の摘出手術を受けたという経過がある。その時も当然死を覚悟したはずであるが、なんとか無事二十余年を経て、再び肝臓に転移しているのが発見された。そして凡そ十年の間に二回の大手術を受けることになって、何時も爆弾を抱えているような状態であった。しかしその事を少しも苦にせず、山岳会の雑事もこなして明るく頑張り通したのである。これは洋子夫人始め周囲の人達の行き届いた配慮と励ましがあったからこそであるが、彼のもって生まれたしぶとさによる効果も決して小さくはなかった。私が今年の年賀状に「石に噛りついてもよい。頑張って生きて欲しい」と書き送ったのはそのような事情による。

鳴原君は少年時代どのような機縁で山登りが好きになったかは分からないが、敗戦の翌年一九四六（昭和二十一）年早大入学と同時に山岳部に入部、途中新学制への移行の為在学年数が若干不規則であったが一九五一（昭和二十六）年政経学部を卒業している。食糧がない、職がない、金がないという無い無いづくしの敗戦直後で街には心の荒んだ浮浪者が溢れていた時代、山登りを志すというのは少し奇妙なことであったかも知れないが、この間山岳部の合宿には殆ど洩れなく参加し一九四八（昭和二十三）年ペテガリ岳の遠征には最年少の隊員として参加した。この時も食糧は不足、山登りの腕前も下手糞という有り様、彼は足の指に凍傷を負うという始末であったが、ひょうきんで人懐っこく、決して弱音を上げない性格は仲間全員の認める処となった。卒業の前年は山岳部の代表委員を務めたがいわゆる号令型のリーダーというよりは土台を固める脇役的な手堅さが身上であった。岩井産業に勤めていたが、私との結びつきが強くなったのは一九五二（昭和二十七）年アコンカグアの計画以降ではなかったろうか。威勢よく出発した隊員達を東京駅で見送った後、なんとも面白くない気持ちであった私を行きつけの焼鳥屋にさそってくれて無暗に酒を飲んだことを覚えている。この計画では二人とも落第坊主であったが、お互いに山岳部のやり方をもう少し変えて行きたいと考えていた。

その後の日本山岳会のマナスル登山で私や日下田は参加することができたが、鳴原君は新米の商社マンとして将来を考えると厳しい選択をせまられていたようだ。マナスルが終わって私が山岳部の監督になると彼は進んで女子部のコーチを買って出て、暫く部を離れて細かい事情が分からなくなっていた私を助けてくれたり、不得意な部分を引き受けてくれた。少し話が前後するが一九五五（昭和三十）年正月、畳岩尾根の偵察を指導していて偶々ナイロンザイル事

件の切っ掛けとなった岩稜会の遭難に出合った。生存していた石原、沢田両氏を前穂の上まで引き上げザイルの切れ端を収容したのは鳴原、日下田の両名であったことは事件後の大騒ぎに比べて案外知られていない。

一九五九（昭和三十四）年、先輩近藤等夫妻の媒酌によって山岳部の後輩であった藤居洋子と結婚し、六二年にはインド勤務となりニューデリーに駐在した。昔の仲間の中には三十代も半ばを過ぎると、自分の職業に対する自覚と興味が芽生え、少しずつ山登りとは縁が遠くなる人が多い。そのまま離れてしまう人と、関心だけは人一倍で、常に情報を求めて勉強する人に分かれるが、鳴原君はまさに後者のタイプであった。そしてインドでも日本山岳会のヒマラヤ問題に巻きこまれるのである。当時、槙、松方、日高、三田さんら長老を中心に、若い我々が事務方を務めるヒマラヤ委員会があったが、次の目標として、K2、カンチェンジュンガなどが検討されたが絞り切れず、一九六三年八月、三田さんにネパール、インドに出張して頂いたことがあった。約一ヶ月近いこの旅行の途中、ニューデリーでは鳴原邸に泊まられ、鳴原と同じく現地にいた石島氏（慶応OB）の二人が三田さんをサポートし、最終的には一九六六年エベレストの登山許可を取得したのである。しかしこの計画はネパールの一時的鎖国で消滅、一九七〇年の計画に引き継がれることになった。そして暫く後、冒頭にのべたメラノーマの事件が起きるのである。この事があってから鳴原君の人生観は少し変わったのかも知れない。あくせく仕事一途に生きる猛烈サラリーマンとしての肩の力が抜けて、残された人生を豊かに生きることを考えたようだ。しかしこの類いの甘っちょろい人生論を交したことは一度もない。今にして思い当るのである。生来の世話好きと如才のなさに一層の磨きがかかるのは稍晩年に入ってであろうが彼が先輩や仲間達に示した心配り・優しさは一寸類がなかったのではなかろうか。私などはその恩恵に浴するばかりであったことを銘記しておきたい。

岩井産業は合併して日商岩井となり、最後は褐炭液化事業のプロジェクトに幹部として出向していたが、その頃から再び山岳会に顔を出し、役員として雑事に参加するようになっていた。ここでも彼の性格は遺憾なく発揮され多くの友人達に信頼されていたことは申し述べるまでもない。退職後は、洋子夫人の応援で軽井沢に「B・B・あさま」を経営し、人柄通りの仕事振りであった。決して苦労が無かった訳でもなかろうし、営業成績がよかったかどうかも分からないが、大勢の友人達を自分の仕事を通じて喜ばすことができたとすれば彼としては本望であったであろう。その間の事情は病に対しても、人生に対しても決して負けない明るく上品な御夫婦の物語としてNHKから放映されている。

最後に付け加えたいのは、彼の死の迎え方である。偶々、昔からの山仲間であった日大医学部の熊谷先生が身近におられたお陰でもあるが、自宅に病室を設け洋子夫人の介護を受けながら終りに臨んだ。直前には親しい友人達家族にも別れを告げてまさに大往生というべき幸せな最期であった。私は兄の死と重なったため最期を見舞うことはできなかったがようやく落合の火葬場で安らかな死顔を拝むことができた。今もその時の記憶が蘇り、五十年来の友を失った悲しみの大きさを嚙みしめている。

主な会歴

一九五四年入会。会員番号四一八六。紹介者は藍田務、金子實。
一九八〇年～八一年　監事
一九八三年～八四年　評議員
一九八五年～八八年　常務理事
一九九三年～九五年　副会長

（村木潤次郎）

河野幾雄氏（一九一〇～一九九四）

河野君と慶応大学山岳部時代一緒に登っていた仲間はもう少くなり、谷口現吉君は三年前、河野君は昨年夏、辰沼廣吉君はこの冬と次々と亡くなり淋しくなった。

彼は医学部だったので、長い山登りで学業をサボるのは仲々困難だったが、彼なりに厳しい登山もやり彼なりに満足していた。

即ち、三月の前穂高や明神岳、二月谷口君と私とで八ヶ岳縦走した時には夏沢峠から赤岳までのサポート隊の一員に加わったり、また次の冬には西穂高尾根に雪中露営し西穂高を往復する当時としては厳しい計画に参加するなどしている。

また河野君にはこんなこともあった。カンチェンジュンガ東北稜から頂上を目指し死力を尽くしたがまたも不成功に終ったバウエルの一九三一年の報告書「ウム・デン・カンチ」が丸善から届いたのが昭和八年六月末だった。あいにく夏休み直前だったので、その報告書を各章毎にばらばらにして、分担して休み中に読む計画を立てた。彼も医学部でドイツ語ならと六名の中に加えた。そして九月になってから連日、担当者から解説してもらった。彼も勿論立派にやりとげた。後日譚になるが本郷常幸先輩が目を通し、文章を統一して薄い本に仕上げ、関係者だけに分けた。慶応の木曜会はこれを契機に始まった。

卒業後彼は軍医として中支に派遣されていたが、終戦後無事帰国、横浜済生会病院に二十年も勤務、副院長で退き、河野医院を蒲田に開いた。

これから彼の彼らしい登山人生が始まる。日帰り登山、一泊登山が数多くなり、その時は近所の医者同士相互に連絡し合い、患者には迷惑かけないと胸を張り、山では別人になり誰が見ても医者には見えなかった。

また、奥秩父の見にくい所にあった木暮理太郎先生のブロンズが金山平（私とは無関係）へ移築された。そのブロンズは上高地のウェストン像と同じく、屏風岩の初登攀者で後年のキャラバンシューズの発案者である佐藤久一朗先輩の作品であり、それをはめ込む大きな台石は大谷石の大旦那渡辺宏之先輩の寄付であり、それを韮崎駅から現場まで運ぶ大仕事は山梨支部長の三井松男先輩で、この三人の慶応山岳部先輩達の行為努力で完成したのだ。五月の碑前祭には長岡からでも参加しないかと、強い誘いで遙々参加してみると大先輩の顔も見え、地元、山村正光氏らの温い心尽くしに感激、以後十五年も参加しているが、これも河野君の親切心の賜と感謝している。

有志閑談会も同様、自分も出席するから出て来いよ、と誘ってくれる。地方にいると仲々御輿が上がらぬことを医者だから見通していたのだろう。

また、三水会の出席もかなりだったと言うし、特に土曜会即ち神谷バーの常連で心酔していたし、赤シャツクラブで真紅なセーターではしゃいでいたし、一転してあんころ会の仲間にもなり陽気に山登りに興じていた。彼のずば抜けた親切心と博い話題から気楽に交わってもらえる雰囲気をいつも醸していた。

それで最後には山岳会の評議員に推され、出席率は良かったが、出しゃばることはなかった由で、役員会も彼にとっては山行きの一環と感じていたようだ。とにかく医院をやめてからの彼は山を自分のペースで歩き、自分の生涯をエンジョイしていた。それだけに一年間の闘病生活は辛かったと思われる。

また三田幸夫大先輩との関係も濃い。三田さんは流石に巨人、年をとられてからも若い者と一緒に山や自然の中に入っておられた。鎌倉、伊豆、丹沢あたりの山歩きを金坂一郎、太田敬氏らの運転で島田巽氏、小原夫妻、織内信彦氏、辰沼ドクターらと楽しんでおられたが、後で河野君も加わった。三田さんは安心だっただろうし、河野君は光栄だったに違いない。

昨年の八月、暑い真盛りに弟の之保君が北岳に登り、やれやれと帰宅したその翌日、病床の幾雄君は心不全であの世へ旅立ったと言う。恐らく兄弟並んで頂上からあの山、この山と眺め廻していたに違いないと想い、慰めにしている。

八十四歳七カ月、美しいフィナーレであった。御冥福を祈る。

（河野幾雄氏は一九五七年入会。会員番号四六〇一。紹介者は太田敬、辰沼廣吉両氏）

（金山淳二）

阿部國雄氏（一九一四～一九九四）

支部会員がお爺ちゃんと親しみを込めてお呼びしていた、阿部國雄氏が一九九四年九月二十九日逝去されました。一九一四（大正三）年生まれですから享年八十歳でした。一九五七（昭和三十二）年、岩手支部創立の十五年も前に日本山岳会に入会されており会員番号は四六二九番でした。当時四十代であった阿部さんは岩手大学農学部の営農工作室の技術職員として勤務されていた関係で同大におられ、後に初代の岩手支部長になられた笠原潤二郎氏と上島昭吉氏が紹介者になっています。

阿部さんの若い時の山行についてはご自身で語ることが少なかったので私どもはよく知りません。岩手山の初登山は彼の十五・六歳の七月で、その後兵役に服されていた期間とそれに続く病気療養の十年を除いて山岳会入会迄に四十回位登っていた事を入会申込書に記載しておられます。どこの登山口を降りた時かは聞き漏らしましたが、岩手山の帰り田圃の水を飲みながら姥屋敷から鬼越峠を降って観武ヶ原をふらふら歩きながら盛岡の家に帰った話をしてました。当時はバスもあまりなかったので帰りは盛岡迄は歩いたものの

ようでした。

岩手大学に勤める前は日本専売公社の職員で一九四九（昭和二十四）年に転職されています。岩手大学の職員の人たちと山行きを共にされることも多く職員・ＯＢで結成された岩手大学山の会の有力なメンバーでした。農学部の営農工作室の金属加工の技術職であった関係でピッケルやアイゼンを自作されていたことも語りつがれております。

一九七二年に笠原支部長のもとに岩手支部が発足してからは支部の行事には毎回参加されていました。山を歩きながら、時に県内のあまり知られていない山や沢の状況や昔の山登りの事、山の心得を遠慮勝ちに話してくださいました。支部の最長老でしたから重みのある教えになっていました。山にはかならず剪定鋏を持って来られて、邪魔な枝や蔓を切りながら歩いていました、それは小枝が年々繁茂して藪になり登山道が隠れないようにとの配慮でした。盛岡周辺の三角点もないような小さい山々もくまなく登っていて、それぞれに愛情を持っておられ、若い会員に山の見方を暗示してくれました。その意味で岩手の山の先達でした。これ等の山を愛して度々来てくださった、今西錦司さんや望月達夫さんとも山行を共にして親交を深めておられました。その時代に岩手の山に来られる他支部の人達にとっては岩手支部の代表の様に映っていたようです。

洒脱な阿部さんの面目が発揮されるのはお酒を飲んだときで、純粋に近い盛岡弁にかえって多弁になって愉快でした。一九八四年九月今西錦司さんと北上山地の御大堂山にご一緒の時でしたが、四日間で五つの山を登った最後の日に山頂でのアトラクションで見せた一人芝居は傑作でした。若き日に芝居をやった阿部さんの面目躍如としたものでした。若い山仲間が山で結婚式を挙げたときは神官役を務めたりしています。

亡くなられる数年前に奥様の病状が重くなり、二人暮らしが不自由になって、ご子息の居られる東京に移られていてご家族に見守られて逝去されました。あらためてご冥福を祈念いたします。

（中谷　充）

山口一孝氏（一九一二～一九九四）

「ボーヤが亡くなった」と小松原一郎会員から連絡がきたのは、稲穂が重そうに頭を垂れた十月初旬だった。子供の頃の綽名が一生通用するのも珍しいが、これも彼の持ち味だと思う。

一まわりも若い私が旧制成城高校尋常科に入り、先輩方と山登りを始めた頃、彼は既に厚生技官として活躍していた。栂池にある母校の山小屋太極荘は一九三五（昭和十）年完成、今も六十年の風雪に耐えて健在だが、その建設地選定の苦労話等を通じ、「山口ボーヤ」の令名は我々にまで達していた。日支事変も長引き、軍医官として大陸にいた彼と初めて会ったのは、戦後何年か経ってからの後記の催しであった。

母校ではお得意の全人教育の一環か、夏休みに入るとすぐ「一般募集」と称し、学年に応じたコースの登山（例、白馬以北幕営、後

立山縦走、表銀座等々、夫々上級生とOBが付添う）があった。私もこれで山に入ったが、戦後復活し、ボーヤから一緒に行こうと言われた。いかざなるまいと、小原庄助さんの心境で数日の休みをとり、若い教師二名と十五人位の少年達とで白馬大雪渓から頂上経由、大池から栂池へと歩いた。天狗原での食虫植物の説明、親子ほど年の違う子供達相手に、大きな蕗の葉に目鼻口と穴をあけお面にしたお化けゴッコ、沼沢地での水合戦で多勢に無勢奮闘むなしく、全身ずぶ濡れになった事など、ボーヤらしく懐かしい思い出である。この反面、薬学博士の科学者らしく生真面目で一途な点があり、アインシュタインを彷彿させる風貌で文字通り口角泡をとばし、議論好きで物事を曖昧にしない潔癖な所もあった。

彼の母校への功績の一つに太極荘建設がある。下級生を指導し乍ら広範囲に候補地を探し、最終的に栂池と言うすばらしい所に落ちついた。吹雪の止んだ朝、白馬三山から八方、遠見、五龍から鹿島槍の双耳峰まで、白一色の安曇野には蟻の行列の様な黒いSLと、ご存じの景観が楽しめた。これ以後部活動の過半数は、小屋を根拠地としないまでも、後立山主向になったのは止むを得なかったかと思う。戦火の拡大につれ、山岳部が文部省命令で跋渉班とかわった頃もやっていた事は同じだった。なけなしの食糧をかき集め南股に幕営、不帰の裾の方を這いずりまわっていた時、バンドが手首からぬけて既に入手不能の山内のピッケルが虚空を切って下のブッシュに没入、必死に探したが出てこなかった時のK君の顔。学徒出陣で海軍に入る前、見納めのつもりで仲間と太極荘にとまり、さるおがせの付いた小さな薪を一本、記念に失敬してきた思い出など、すべてボーヤ達諸先輩のおかげである。

もう一つは、成城スキーの確立に寄与された事である。一九三〇（昭和五）年学校当局と共にハンネス・シュナイダー先生の招聘、一九六二（昭和三十七）年のクルッケンハウザー教授招聘と、関係者の方々と共に実現に努力された。おかげで昭和十年代の合宿では、天候不良で行動しない時のスキー練習でホッケだ、前傾だ、ヤレ深雪時のドッペルシュヴングと耳にタコが出来るほどいわれた。空身ではなんとかなっても、凸状の煙突の様におっ立った片桐特大キスリングを背負うと、転倒せずに無事おりるだけで精一杯だった。

当会については一九五八（昭和三十三）年入会（会員番号四六四五、紹介者は木村碩志、新井清）、間もなく科学技術庁から印度及び欧州各国に約四ヵ月出張を命ぜられた。この間スイスで休暇も含め二ヵ月のスキー放浪の旅は、彼にとって生涯忘れられない経験だった様で、その時のグラウビュンデンの岳友フロリアン氏に招かれて再訪した記事が、「山」四九二号六頁にのっている。ご家族の話ではかなりの投稿魔だった様で、夫人（八年後輩の山仲間O氏の妹）を亡くしてから移った湯河原で書いた「『魔の山』とスキー」（「山」五三六号）は、人生晩年の諦観をうたったアダジオにも思える。

一九八一（昭和五十六）年末、永い間太極荘の管理をお願いしていた郷津長平氏（かつて愛用した「山日記」に、冬もOKの名ガイドとして登録）が亡くなり、シーズンオフの四月に本葬が行われた。故人を偲んでボーヤ他多数太極荘に登り、春スキーを楽しんだ折、私にJAC入会を勧め、その後は守門山行、羅臼記念山行、スキー合宿等お伴をした。本稿をかく様になった訳も、彼との間に多数先

輩はいるが、当会会員でないと具合悪いからであろう。戦中戦後にかけては海外など夢の話で、外貨割当ての要もなかったが、技術面では各校間の連絡もあり、旧制府立高校の勝田甫氏など研究実践の最右翼だったし、これも未入会だった海野治良氏を招き、ザイル捌きを教わったりしていた。新制になって機も熟し、一九七四（昭和四十九）年にはジャヌー登頂に成功、入会する者も出てきた。

ボーヤの思い出はつきないが、割当ての紙数も一杯の様だ。ご冥福を祈り乍ら拙文を終わる。合掌

ご参考までに、旧七年制高校については、『山岳』本号に今西、徳永両先輩がふれて居られる。

（内山脩一）

石間信夫氏（一九一四～一九九五）

一九一四年九月二十六日生
一九九五年一月七日没　享年八十一歳
山行回数　二六四五回
登頂山数　一六二一峰

石間信夫さんの山の生涯を墓碑銘風に印すならこの数字が全てを物語っているといってよいでしょう。

石間さんは島田市で生まれ、静岡中学を経て一九三二年四月早稲田大学商科に入学、三五年同大卒業と同時に阪神電鉄㈱に入社しました。三九年十一月旧陸軍に召集され中国戦線で苦難の数年を送りました。宜昌作戦で負傷し四二年に除隊、帰国。敗色濃い四四年、本土決戦に備えた軍に再召集され、塹壕掘りの指揮をさせられたが敗戦によって隊は解散、四五年八月郷里の静岡に戻りました。

戦後は地元の銀行に勤めましたが仕事に後半生をかけるという気にはならなかったようです。

石間さんの幼年時代は第一次世界大戦の真只中にありまた青春時代の大部分を日中戦争―太平洋戦争の狂気と混乱の中で過ごしたことになります。三十一歳で長い束縛から解放されこれまでうっ積していた山への思いが一気に吹き出したかのように、石間さんは登山に熱中しました。

石間さんが登山の楽しみを知ったのは、静岡中学時代、叔父上に連れられて安倍奥の山々へ行ったことであったと聞いております。静岡近郊にはたくさんの山々がありますので自転車と徒歩での日帰り登山の対象にこと欠くことはなかったことでしょう。

復員後の石間さんの登山は山行回数もさることながら登り方においても徹底しておりました。それはいかなる藪山であろうとあらゆるルート、尾根・沢そして道なき道を沢漕ぎ・藪漕ぎし執拗に歩き通して頂に達するというものです。今まで自分の通ったことのないルート、登ったことのない山を目標に次から次へと挑戦していくのです。登山の範囲も静岡県から近県の山々へ、菌糸が繁殖していくように石間さんの足跡も着実に延びてゆきました。日本山岳会に入会した一九五七年以後、山仲間の環の拡大とともに石間さんの登山は全国に、また海外にも広がっていきました。

こうした山行は二六四五回、幼少期と兵役期を除いた六十年間ほぼ毎週一回山に行っていたことになります。登ったピークの数は重複したものは除いて一六二一峰。痩身短躯ながら秘めたエネルギーはすさまじいものがありました。

これらの山行記録は数十冊の大学ノートに克明にルートの見取図とともに記され、さらに原稿用紙に浄書、仮綴製本の形で遺されています。また石間さんが辿ったルートは、古い陸地測量部の五万分の一地形図に赤線で詳しく記入されており、その網目模様の細密さに驚嘆しない人はありません。

登頂山数では故今西錦司名誉会員（元会長）と双璧をなしておりました。石間さんは「今西さんのは全国区だけど、俺のは数は多いが地方区だからなぁ」と笑っていました。

石間さんは生前、薮漕殿只管登山居士（只管はひたすらの意味）と称していましたがむべなるかなと思います。西方浄土でもせっせと登り続けていることでしょう。

（石間信夫氏は一九五七年入会、会員番号四六六六。紹介者は神谷恭・牧野衛両氏。静岡支部名誉顧問）

（安間　荘）

中河与一氏（一八九七～一九九四）

中河与一さんが、一九九四（平成六）年十二月十二日なくなられたことは、新聞が記事としてのせていたから、多くの会員の眼にとまったことだと思う。同時に、作家として著名な中河さんが、日本山岳会の会員だったということを、知らなかった人も多かったのではないかと思う。

一八九七（明治三十）年生れ、没年が九十七歳は本会の二番めくらいに高齢の会員だったのではないだろうか。

一九六二（昭和三十七）年に村井米子、折井健一両氏の紹介で入会（会員番号五四〇〇）されており既に三十二年の会員歴を有っていた。紹介者も故人となっているし、とくに中河さんと昵懇だったと思われる会員も見当たらないため、たった一回だけ小さな山歩きを共にした縁から、年次晩餐会などで顔を合わせれば同じテーブルに席をとって話相手になったり、また近刊の著書を贈られたりした関係もあって、筆者に故人を偲ぶの記を書くお鉢が廻ってきた。必ずしも適任だと思っていない。

私はその方のことは審らかにしないが、九十七歳と言えば文壇人としてもたぶん最長老の一人に数えられるであろう。小説や戯曲を書く人やそれを生業とする人を作家と呼ぶのだそうだから、中河さんは歴とした作家である。代表作として、いろんな意味で話題になるのが昭和十三年に発表した小説「天の夕顔」であった。この小説は永井荷風の激賞を受け、さらに英独仏その他数ヶ国語に翻訳され、ベストセラーにもなり、フランスではカミュの注目するところとなり、とくに評判になったということである。のちに少しふれてみたい。

日本山岳会には創設者小島烏水さんの人脈からであろうか、創立

間もなく、有名な文芸人、作家と呼ばれる会員が何人かいた。たとえば小山内薫、前田曙山、田山花袋、島崎藤村、河井酔茗、吉江喬松、野口米次郎などにすぐ気がつく。いずれも当時一級の作家文人と言われた人達である。ついでながら言うと、会員のなかには劇団人の伊井蓉峰、河合武雄、井上正夫、喜多村緑郎など新派の大御所がずらり顔を並べているのみならず歌舞伎俳優の名もちらほらと見えている。

さて中河与一さんは、氏の書いたものによれば「山に登り出したのは昭和二十九年五十七歳の時からで、それまで毎年のように海ばかりに行っていた」（「海に来る秋」）ようであり、また「未開の風土」という文章のなかでは「昭和二十三年から山に趣味をもち二―三千Mの山に毎年登り既に六十三以上になった」と述べられている。

五十七歳から始めた山歩きだから、ハードな登山をやったとは思われないし、一九八〇（昭和五十五）年十月、北八ッのヒュッテ・アルビレオに一泊して八子ヶ峰の尾根歩きを共にしたとき、氏はたしか八十三歳で、考えてみるまでもなく、いまの私はその時の氏と同年になる。だからその行動や足どりも万事弱弱しかった。しかし柔和な面差しや謙虚なそして口数少く遠慮勝ちに話される姿勢には、はじめてのおつきあいであったけれども、私は少からぬ好感をもった。そのときは、中河さんのお宅のあった成城から、事務局の杉山都子さんと一緒に、橋本清君の車に乗せてもらって山麓までを往復した。ヒュッテ・アルビレオでは高橋聰、西村政晃、今村千秋、絹川祥夫その他の元気一杯な豪傑連と歓談を楽しんだ。中河さんも若い連中の宴のなかにとけこみ、秋深まる山小屋の夜を堪能しておられたようだ。

このときの紀行文や、北海道支部の十勝岳山行に参加した紀行その他、海のエッセイ数篇をまとめた『海の旅山の旅』がある。誤植が目立つことを除けば好著と言ってよいだろう。その「あとがき」に「僕は海岸の町で成長したから、海の無限を喜び、その明るさと恐怖とを愛したが、五十六歳、初めて山に登り、山の神秘と、そこが要求する忍耐を学んだ」と書いているのを拝見していて私はふと論語に「知者ハ水ヲ楽シミ、仁者ハ山ヲ楽シム」とあるのを思い出した。中河さんが海を好んだいきさつがこの本の半分を占めているその海と、そして後半、山を愛するようになった動から静への変化、氏にとっては先行している海から学んだ動のフィロソフィーに五十七歳ではじめた山が如何なる影響を与えたか、というような話を生前に聴く会合が一度くらい会の中に持たれていてもよかったのではないか。惜しいことをしたように思う。

「あの人」と「わたくし」で終始していく代表作「天の夕顔」は、愛と恋心と倫理とを三本の柱とした随想的な物語である。この二人はストイックなまでの関係を続けたあと何事もなく長い悲恋のストーリーを終わるのであるけれども、読み終えたあと、どちらかと言えば爽やかな印象が残っていたように覚えている。そして山好きの読者の興味をひくのは「天の夕顔」には北アルプスの鷲羽岳連峰が最終の舞台として設定されていることである。中河さんはきめ細かく、この辺の山々を描写しているのみならず、最後は主人公である「わたくし」をして、越中の大多和峠から有峰を経て春の薬師岳の雪の深い山頂にまで立たせている。この小説が書かれたのは、中

河さんが山へ登りだした時からみると、はるか以前のことであるから、おそらく踏みこんだことはもちろん、見たこともない山々のことをあのように美しく、生なましく書き上げられる力は、やはり作家なのだなあと読後ただただ感嘆するばかりであった。

最後にお目にかかったのは五年ばかり前、箱根のハイキングの帰り、晩年住ま居を移されていた小田原の板橋に近いバス停で、降車する私たちと、偶然それを待っていた中河さんとのスレ違いだったが、寄って行きませんかと言われるお誘いを、こちらは大勢いるためそうもいかず遠慮した。

なおさきに亡くなられている夫人中河幹子さんは歌人としてひろく知られていた。御冥福をお祈りします。

（織内信彦）

岡本龍行氏（一九三五～一九九四）

岡本龍行が新人としてわれわれの獨標登高会に入ってきたのは、一九五二年の秋、彼がまだ高校二年生のときであった。入会して二年ほどのあいだの彼は、北アルプスなどよりも南アルプスの山々の登頂や縦走を、一人でやるのを好む傾向がつよかった。

そんな彼に大きな転機をもたらしたのは、先輩に指導された三ッ峠での岩登り訓練であった。それまでは山の尾根ばかり見つめていた眼が、岩に向けられ、谷の深部に惹かれるようになる。山を見る眼が変ってくると、好む山の範囲も拡がってくる。自分の適性にめざめてからの彼の進歩は著しかった。

私が岡本と同行した最初の登攀らしい登攀は、八ヶ岳の広河原沢奥壁の第二ルンゼであった。今なら広河原沢の奥壁など大したルートとも思えないが、当時未開拓の要素の多かった八ヶ岳では、それはわれわれにとって一ノ倉の難ルートにも勝る課題だった。病後の体でへばりがちだったその山行が、しかし無類に愉しかったのは、懸案の登攀を果たしたという満足感のほかに、一緒だった岡本の無邪気で明るい性格に負うところが大きかったと思う。私の岩登りのフォームの悪さを揶揄する彼の声や表情には、頼りにならない先輩へのはげましと親愛がこもっていて、それが元気の回復剤のように私に作用してうれしかったのを、よく覚えている。

山登りの人種と限らず、人間のタイプにはお喋り好きな陽気な性格と、口数の少ないおとなしい性格の二つがあるが、山での岡本は明らかに前者のタイプに属していた。山ではすぐはしゃぐ傾向のある私もまた前者の組だが、ただ岡本は私と違って芯が緻密で、山行の全般にわたって遺漏がなかった。人を惹きつけ信頼されるリーダーの資質を若いときから備えていたと言っていい。

一九五五年九月、岡本は後立山の不帰三峰A尾根を初登攀した。これは、その数日前に行われた私ほか二名の二峰東壁末端からの初登攀とともに、その後数年におよぶ、われわれの仲間の不帰研究の端緒になった。

岡本龍行の山歴を語るうえで逸することができないのは、なんといっても南アルプスの三峰川上流の谷の開拓であろう。仙丈岳の西

面に属する、兎台谷、岳沢、三軒岩小舎沢などの谷々が、まだ未知の困難を秘めて残されていた。自分のホーム・グラウンドである南アルプスの、この未開拓の領域に寄せる彼の愛着は並々ならぬものがあった。速攻的な入谷の繰り返しで、これらの谷のルートにつぎつぎと彼の足跡が印されていった。なかでも、とりわけ困難とされる岳沢の積雪期の登攀は、彼の三峰川研究の掉尾を飾る大きな成果であった。この当時、彼は会のチーフ・リーダーを務めており、会員を自分の方向にぐんぐんリードして行く熱と力に溢れていた。岡本龍行の山の生涯で最も輝いていたのは、おそらくこの時期であったろう。

私が岡本と行を共にした山行には、一月の穂高や、鹿島槍の北壁を狙って雨のために失敗した遠見尾根などがあるが、とりわけ思い出が深いのは、一九五九年二月の甲斐駒摩利支天中央壁の登攀だった。南山稜と南西稜のあいだに拡がるあの大きな岩壁の核心部は、まだだれの手にも触れられていなかった。それを二月の積雪期にぶっつけ本番で狙うことにしたのだ。はたして登攀可能なルートが見つかるかどうかは、現場に行くまでは判らなかったが、問題の壁の基部にそってその中央部あたりまで来て、見あげる頭上の岩壁に一本のチムニーを発見したときの喜び！　三人で首尾よくそのチムニーを登って、上のバンドでビバークし、明くる日、摩利支天の頭に抜けて、甲斐駒の雪の頂上に立った。一度で積雪期に初登攀を果たした、あれは岡本にとっても快心の山行であったろう。

岡本のことでは、いまでも旧い仲間のあいだで語られるエピソードがある。食糧のことだ。岡本には山の食糧について一家言があり、いちじ、ばかに乾パンに凝ったことがある。彼がリーダーの山行では乾パンばかり食わされると、こぼす会員が少なくなかった。この乾パンの時期はかなり長く続いた。八ヶ岳の天幕生活では、やたらとオートミールばかり食わされて、つくづく米のごはんが恋しかった。摩利支天のときは、ヒットビーという携行食糧で、彼の主張で二日間の登攀をそれだけで通した。岡本の人間性には独創的な要素がいろいろとあったが、山の食い物のことでも彼は充分にユニークだった。

人との付合いでは陽気な反面、登山については、彼には頑固で厳しいプリンシプルがあった。そのころ使われはじめた埋込みボルトという岩登りの新兵器の使用を、邪道として彼はまったく認めなかった。また、一つの壁を登攀しても、彼の登山観からすれば、壁だけを登って山の頂上を踏まなければ、それは登攀を完成したことにはならなかった。壁が山の一部にすぎない以上、一部だけで済ますのは許されず、頂上は必ず踏まなくてはならない。そういう点で、彼は登山の古典派であり正統派であった。彼をふくむ三人のパーティーで八ヶ岳の立場川奥壁の悪い氷雪のルンゼを登ったときも、縦走路の途中から中岳のコルに向かわず、疲れているのにわざわざ赤岳に登頂したのは、どんな登攀でもおろそかにしない彼の大原則を私が尊重してのことだったと言える。

岡本が日本山岳会に入って、富士山で雪上における制動確保の講習を受けたのは、一九六三年のころだったろうか。自分が学んだ技術を獨標の仲間にも修得させるため、会員の多くを動かして富士山で研修会が行われたことがある。むだのないロープ操作で実技の模

範を示す岡本には、熟練した教師の印象があった。人を指導する熱心な姿勢が身についていた。

岡本が東海大学の山岳部の指導にあたることになるのは、同山岳部の八ヶ岳における遭難で救助活動に関わったのが縁だったと聞いているが、それからは獨標登高会、日本山岳会に籍を置きながら、東海大山岳部の監督として、長く部の育成に力を注ぐことになる。山にたいする彼の信念とまじめさが、山岳部を正しく指導し、よい部員を育てたであろうことは想像に難くない。一九六八年に山岳部を率いてヒンドゥークシュのティリチ・ミールに遠征し、同峰の登頂は成らなかったが、近傍のシャー・フラディ（五一四三㍍）に初登頂して、彼には貴重な体験であったはずだ。

今から五年ほど前、五十代のなかごろから、彼は体の不調を覚えるようになった。肝臓癌と知らされて、近づいてくる死への不安はあったはずだが、友人との付合いのうえでは、本来の明るさの裏にそれを隠している風があった。人に気持の負担をかけまいとする彼の心遣いだったと思う。

昨年の九月、私が三峰川に行くことを知ると、前に彼が「岳人」誌に書いた三峰川の記事をコピーして送ってくれた。無事に山行を終え、一カ月ほどして、三峰川の写真を持って入院中の彼を見舞うと、彼はすでに命の末端でベッドの上に横たわっていた。動きのままならぬ口で私に、お世話になってありがとうございました、と別れの挨拶を言い、彼の片方の目尻にうかんだ一滴の泪を、私は忘れることができない。翌、九月十五日に岡本龍行は死んだ。五十九歳であった。

（岡本龍行氏は一九六三年日本山岳会入会、会員番号五五一五。紹介者は折井健一、串田孫一）

（山口耀久）

（編者註：本稿は、岡本龍行氏について会員の中に追悼文をお願いすべき適当な人が見付からなかったため、生前交友の深かった獨標登高会設立者の山口耀久氏に執筆をお願いしたものです。）

土肥正毅氏（一九三八～一九九四）

一九九四年八月十日、エチオピアから分離独立して間もない、アフリカの小国、エリトリアで土肥正毅君は帰らぬ人となった。

第二次世界大戦後の混迷する世相の中で日本山岳会が果たしたマナスル登頂の快挙は、多くの人びとに活力と希望を与え、登山への関心が一段と高まった。その余韻が強く残る一九五七年四月、私たちは期待と不安を胸に、明治大学体育会山岳部に入部した。

当時、山岳部への入部希望者は多く、部室に入れないほどの新人の中で、土肥正毅君はひときわ存在感があった。富山県立山町出身の彼は、田舎者丸出しの独特の風貌で、人なつこく、ものおじしない天真爛漫な性格から、ただでさえ怖い上級生に対しても平気で打ち解ける特技があり、新人の中でも別格だった。

新人にとって最初の登竜門、夏山合宿ではやや小柄に見えたドンちゃん（土肥正毅のニックネーム）が〝まずバテるだろう〟と同僚

は期待していたのだが、悪戦苦闘する新人を尻目に、まるで強力（ごうりき）のごとくノシノシと歩き通してしまった。とにかくボッカに関しては右に出る者がいなかった。

二年後の一九六〇年、明治大学創立八十周年記念事業のアラスカ・マッキンレー峰への登山隊に、なみいる学生の中から選抜され、皆の羨望の的となったが、卓越した馬力からしても当然の結果であり、いち早くＭＡＣの中核にのしあがっていた。

一九七〇年、日本山岳会が総力を挙げて挑んだエベレスト。その隊員に選ばれるべく多くの仲間は努力したものだが、夢のまた夢であったエベレスト登山隊の栄えある隊員に彼はすんなり選ばれてしまった。

「無我夢中で南無阿弥陀仏をとなえながら登り降りしたあのアイスフォール（氷瀑）、何もいらないから濃い空気だけが欲しかった七〇〇〇㍍での生活、同僚やシェルパの死にうちのめされた空しい日々もあった。南壁からの登頂は失敗したものの、東南稜からの登頂は五月十一日と十二日に成された。エベレストは世界一の山である。なくならない限り登り続けられるであろう。」（京葉商業高等学校機関紙「京葉」第二十三号＝昭和四十八年二月発行＝より抜粋）。

さらに十年後の一九八〇年には故植村直己君が率いる冬期エベレスト登山隊に副隊長として参加。その年の夏には南米大陸最高峰のアコンカグアに挑んでいる。

京葉商業高等学校の教諭（昭和六十二年四月教頭に就任）であった彼は、毎年何回か世界のへき地を歩きまわり、すでに五十回余り一人旅している。一九八二年夏にはヨーロッパ列車の旅と称して二十三か国二万一千㌔㍍（ロートル）も列車に乗ったと自慢していた。こうした多彩な体験を機会あるごとに生徒等に聞かせ、常に新しい世界を求めチャレンジしていたに違いない。

一九九四年の炉辺会（明大山岳部ＯＢ会）総会に何年ぶりかで顔を出し、懇親会ではすっかり上機嫌になって、学生時代のドンちゃんのおはこ〝あのオッハンいいはった。何んやね。インドへ行ったとき、ヒマラヤ山に腰をかけ、インド洋で顔あらった。フンフン!!〟を独特の節まわしで心ゆくまで歌った。あんなに陽気に浮かれ、はしゃいだことは学生時代以来だったかも知れない。

股下の短いズボンの尻に、野球のミットのような大きなツギをあて、鳥打帽子をかぶった個性的なスタイルで、夢中で山登りをしていた青春時代を彷彿させた、あの晩の仕ぐさが最後になるとは……。人生のはかなさを痛感し、残念でならない。

略　歴

一九三八（昭和十三）年六月十七日　富山県立山町日中上野で出生。
一九五七（昭和三十二）年四月　明治大学文学部入学。同校体育会山岳部に在籍
一九六〇（昭和三十五）年　明治大学マッキンレー登山隊に参加
一九六二（昭和三十七）年　同大学卒業
一九六三（昭和三十八）年　日本山岳会入会。会員番号五五五五。紹介者大塚博美・高橋進
一九六五（昭和四十）年　明治大学体育会山岳部監督
一九七〇（昭和四十五）年　日本山岳会エベレスト登山隊に参加

一九八〇（昭和五十五）年　日本冬期エベレスト登山隊に副隊長として参加
一九九四（平成六）年八月十日　エリトリア国デハラック島で熱射病により岩場から転落し死亡。享年五十六歳

（中島信一）

佐藤富佐雄氏（一九二八～一九九四）

私が佐藤富佐雄さんと初めてお会いしたのは、昭和三十年代の終り頃だったか、県職員研修所で一か月間一緒に受講したときである。当時氏はまだＪＡＣに入会されていなかったかも知れないし、氏が遊佐町職員であること以外何も知らず、まして山登りされる方とは思ってもいなかった。隣町でありながら、山岳会相互の交流が不足していた故もあったと思う。

氏は一九五五（昭和三十）年鳥海山の遭難救助現場に、遊佐町職員（当時住民課）として登ってこられたことがあり、そこで本会会員の畠中六左エ門氏と初めて出合ったことが、氏の山への開眼ともなっているようである。その後本格的に山に傾倒するようになったのは三十歳位からで、一九五八（昭和三十三）年高松宮殿下の鳥海春山スキーに、やはり町職員として随行したのがきっかけと思われる。その準備山行も含め、以後鳥海の冬山に精通された故畠中善哉氏、故斎藤清吉氏（共に会員で著名な岳人）や前記畠中氏に同行するようになり、ますます冬山の魅力にもとりつかれ、役場の同僚を伴って頻繁に山行を重ねるようになった。だが役場の課長就任以後は、多忙のため山登りの機会にはあまり恵まれず、その分スキークラブ会長に推されてからは、スキー検定に挑む等小柄ながら山とスキーへの情熱はとどまるところがなかった。

町村合併により現在の遊佐町が発足したとき、旧村に以前あった山岳会は、鳥海山岳会と鳥海スキークラブに組織替えされたが、頭に鳥海の名をつけたのは氏の発案であり、遊佐町の鳥海山であることをアピールしようとした、行政マンらしい氏の配意であった。

鳥海山吹浦口三合目駒止に、町内岳人が愛用しているこぶし山荘がある。これは酒田営林署から払い下げをうけた元造林小屋であるが、山荘の附近にはマンサクやコブシが咲き、残雪にカラマツの新芽が映え、渓流の音もきこえ、秋は鳥海の紅葉を一望できる位置にあり、彼は「人間は自然の子、自然を丸呑みできるこの小屋は最高だ」と度々泊っては、岳友との酒宴を楽しみにしていた。支部晩餐会が年間行事として定着する前、忘年会をかねて「庄内で鮭を食べる会」を吹浦で数回開いたことがあり、今は亡き長老の面々も参加するので、準備その他で氏の細かい気配りに随分助けられたらしい。

氏は県立酒田商業学校を卒業後、志を抱いて中国に渡ったが、間もなく敗戦を迎え故郷遊佐町に引揚げ町職員となった。在職中能吏として信頼厚く、建設・企画・総務の各主要課長を歴任し、一九八六（昭和六十一）年五十七歳で退職された。すぐ町商工会事務局長や体育協会長に就任され、一九九三（平成五）年退職された。その後間もなく体の異常に気付かれたが、病状が進行しており、翌九四

（平成六）年四月二十一日県立日本海病院で肺癌のため死去された。享年六十六歳。日本山岳会には一九六四年十二月入会、会員番号五八四三であった（紹介者神谷恭、村井米子両氏）。

氏の生涯は同僚に慕われ、町民からも信頼され、力一杯活躍した見事な人生であった。私は故人について、冒頭にも述べたようにあまりにも知らない面が多いので、ご遺族や、岳友畠中六左エ門氏、岳友で町職員の村上良一氏からお話を伺ってこの追悼文をまとめさせてもらった。

（金森繁三郎）

小塩丘平氏（一九三四～一九九五）

小塩氏の本会への入会の動機は深田久弥氏との邂逅であった。銀行マンで転勤族であった彼は当時、北海道の帯広に在勤し、帯広山岳会に入っていた。その折、既に前年『日本百名山』を発表していた深田さんとニペソツ登山を共にしたのが機縁となった。その時「なぜニペソツほどの山を百名山に加えなかったのか」と深田さんを困らせたという。ともあれよほどの感激だったのか深田さんとの山頂での握手の写真を死ぬまで大切に保存していたし、一九八七（昭和六十二）年六月二十五日付の日本経済新聞の文化欄にも載せている。

一九六五（昭和四十）年十月入会、会員番号五九九四、当然、前述の深田さんの紹介、そしてもう一人の紹介者は北海道在住の平野明氏であった。

小塩氏は一九三四（昭和九）年一月、長野県の飯田市に生れた。都立立川高校（第四回生）を経て、早稲田大学政治経済学部に進み、一九五七（昭和三十二）年卒業と同時に商工中金に入庫した。

立川高校在校中は天文班に属し、天体観測を学び、後年、山頂や山小屋での星座の説明は有名であり、彼の山男へのロマンはこんなところに根ざしているかも知れない。

早大時代は、とくに山岳部に籍をおいたわけではないが、学生時代の終り頃から登山を始め、商工中金に入庫してからもそれが続いていたようだ。今、昭和三十三年の『山日記』（日本山岳会編）を見ると、赤ペンでアルプス北部や南部がなぞってあることからも知れるが、登山が彼の終生の友となった。社会人となってからは業務の関係で、八王子、帯広、前橋、上野、佐賀と日本各地に転勤、それが絶好の機会として周囲の山々を歩きまわった。

そのひとつとして前述の帯広在勤の折、深田さんとの出会いとなったのであるが、その時持っていた『わが山山』の初版本には深田さんのサインが残っている。

温厚篤実の彼はＪＡＣではあまり目立たない存在であったかも知れないが、年次晩餐会をはじめ種々の行事には積極的に参加し、クラブライフを楽しみながら友交の輪を広げていた。

私と小塩氏との本格的な交流は一九七九（昭和五十四）年の彼の「深田クラブ」への入会からである。深田クラブとは、深田さんの百名山にこだわりはもつが、世にいう「百名山病患者」をつくるところではない。もっと視野を広く、深田さんの全人格（文学も含め

て）を敬愛、研究するカルチャークラブである。

深田クラブでの彼はその優しい人柄と包容力から人望厚く、さらに有能だったので、クラブの要ともいうべき事務局長を務め、クラブの運営に手腕をふるったが、私的なクラブのことになるが、クラブ発展に尽したその功績はまことに大きい。

一九八二（昭和五十七）年、勤務先が永代信用金庫になるが、山への情熱は変わらなかった。この頃よりかつて早稲田のグリークラブにいたというもち前の美声と音楽的才能から武蔵野市合唱団の幹事役にもなり、さらに多忙となって、深田クラブ事務局長は辞任したが、終生役員として残り、山で美声を発揮した。

私は彼と多くの山に同行したが、最も印象に残っている登山は、クラブ十周年記念の台湾の玉山と昨年の二十周年記念のハワイ島のマウナケアである。いずれの山でも酒とコーラスと星の話で同行者たちを魅了した。とくにマウナケアは死のわずか半年ほど前であったがそこには死の影は微塵もなく、瓢々と四千㍍の高所を歩く彼の姿が、今でも私の脳裏に焼きついて離れない。

小塩氏の登山に対する姿勢は深田久弥そのものであった。徹底して競技志向型の登山を嫌った。心から山を愛し、自然をいつくしむ真の岳人であったと思う。少し引用は長くなるが、彼の山に対する考え方を示すものとして八九（平成元）年二月二日の日本工業新聞に次のような随想を寄せている。

「……おのれの登った山の数だけ誇る人や、百名山完登まであといくつ…とばかり、百名山以外の山にはあまり関心も示さず、ワキ目もふらず、鉢巻きスタイルでガンバル人達がいる。これも一つの登り方ではあろうが、何か高度成長期の日本経済を支えてきた仕事オンリーの日本人特有のガンバリズムが趣味の世界に入りこんできているようで、ゆとりのなさが感じられ、あまり好感がもてない。〝山登り屋の山知らず〟にはなりたくないものだ。どうしてももう少し『遊び心』に発した余裕のある楽しみ方、味わい方ができないものかと思う。

山に対してサムシング・グット（何か良いもの）を求める気持ち、ロマンを追い求める心をもって登って欲しい。」

彼は本当の人生の達人だった。冥福を祈ってやまない。

（小倉　厚）

名児耶達男氏（一九一六～一九九四）

旧臘（一九九四年）十五日、土曜会のレギュラーとして貴重な存在であった名児耶達男兄が逝去されました。名前の通り辰年生まれの享年七十八歳でした。彼とは新ハイキングクラブ以来四十年余の古い山友、酒友で、彼の住まいが三軒茶屋、私が用賀と地の利もよく、阿武隈川流域を好んで歩いた、阿武隈党の一味として親交を重ねていました。

三軒茶屋には、山の遭難記で著名な春日俊吉老がいて、二人揃って酒道の「くんとう」を受けたのも忘れられません。

山の会の帰途渋谷から、満員の玉川電車の吊り革にぶらさがりな

がら、山談義を楽しんだものでした。

当時彼はある光学会社の元で、双眼鏡の組立調整を業としていましたが、齢を重ね視力の衰えを私に訴えるようになったので、いっそうちの会社に来ないか、ということになり、亡父神谷　恭（その名に因んで神谷バー、土曜会創始者の一人）の会社で机を並べる仲に発展していきました。

当時会社では、私が開発したあるシステムが、客先での現地工事や立ち会い試運転を必要とした為、彼とコンビを組んで国内各地をよく回って歩きました。私達はこれを「地方巡業」と称して、そんな仕事を山やらしく楽しんでこなしていました。

あるとき冬の北陸での仕事を終え、宿のおかみのプレゼント、篭いっぱいの松葉ガニをさかなに、寝台車に腰をかけ首を曲げながら夢中で冷や酒をやっていた為、二人とも首筋をいため、ひどい目にあったのも話の種でした。当時の三等寝台は、その位上下がせまかったのです。酒のグラスは洗面所からの無断拝借、カニは竹篭のヒゴでせせってたべましたが、忘れられない珍味でした。

彼と二人だけの山行では、上信越国境の佐武流山が思い出される。初冬の頃と記憶しているが、赤湯の小屋へ一泊して頂上を目ざしたが、積雪と悪天候のためもう一歩のところで退却した。当時秘境とされていたあの山域へは、彼が計画してくれたお陰ではいれたと感謝しています。

彼はまた文才もあり、若い頃はよく新ハイキング誌に紀行文を発表された。

彼も私も齢のわりには酒量は過ぎる位だった。山行や旅行のときポケット瓶なぞ、ついぞ買ったことはなく、二人のザックにはいつもボトルがはいっていたものです。

そんな酒量が、すこし早すぎた彼の死に関係したのなら、のみ仲間として内心忸怩たるものがあります。

私は父の事業を継承したので、入会は父の死後で彼より十年おくれましたが、彼との四十年余の交友は、因縁浅からぬものがありました。ここに土曜会の皆様と共に、謹んでご冥福を祈り、そして山男らしい戒名、賢山達道居士の霊に合掌します。

（名児耶達男氏は一九六六年入会、会員番号六〇七五。紹介者は神谷恭、松本熊次郎両氏。）

（神谷恭平）

宮原利重氏（一九〇八～一九九五）

早朝のまだ四時前だと云うのに、隣りに休んでおられる宮原さんが、暗闇の中で身支度を始められたので、私は慌てて、「まだ早いのでゆっくり休んで下さい」と云った所、「年寄りは支度に手間がとれるので、皆さんに迷惑を掛けない様に」と云われ、すっかり身支度を終えて、又布団に入られた。一九八九年十月末の、大山で行われた全国支部懇談会の折の皆生温泉での朝の事である。この事ほど宮原さんの人柄を如実に物語っている事はないのではあるまいか。常に、同行の人々に迷惑を掛けないようにと心掛けておられた。

宮原さんと、私の出合いは、一九八〇年十一月初めの、南アルプスの仙丈岳山行であった。この時の仙丈岳は快晴であったが、強風と、十月末に降った雪も有り大変な寒さだった。頂上での昼食の折、手がかじかんで困っておられた。軍手のみだったので、毛の手袋を貸してあげたり、おにぎりを出してあげたりした事に始まる。この事が有って以来、たったこれだけの事だったのに、大変恩に感じられて、若輩者の私を何かと可愛がり親しみおつき合い頂いた。その後も支部の山行や、全国支部懇談会に同行させて頂いた。

十何年前の十一月初旬の、別所温泉の独鈷山での事だった。前夜は、宮原さん経営の、信州田沢温泉、「ますや旅館」で当時の奥原支部長はじめ支部員一同大変な歓待を受けての山行だった為、持参した水では足りずに誰とはなしに水を所望する者続出、すると宮原さんが、「二年ほど前の富山の霊水です」と水筒を出された所、さすがの支部のモサ連中も尻込みしているのに、自分は平気で満足気に水を呑んでおられたのが印象的だった。

又、一九九二年十月末に行われた福岡支部担当で行われた英彦山での全国支部懇談会の帰途、博多で一泊した折の事だ。当時建設中だった福岡ドームや、福岡タワーからの玄界灘を見せたくて、信濃支部から参加した四名の人達と歩き廻った。タワーを出た所で宮原さんから「わしがタクシー代を出しやすからタクシーに乗りやしょう」と云われて、はっとした。考えてみれば、早朝から小雨の英彦山に登り、その後バスで福岡市へ移動した後、休む間も無しの強行スケジュールだったのだ。高校時代迄九州で育った私が、ついあちこちと見せてあげたい気持が先走りしての事だったが、いやな顔一つせずにつき合って下さった。私の自己満足で先輩への思いやりのなさを反省させられた。

又宮原さんと云えば、ウェストン祭も忘れる事の出来ない行事であった。本会に入会される前からの常連で、二十何回か徳本峠を越えられたと聞いている。三年前ご一緒した折、峠直下の最後の水場で、「この水を呑むのも峠越えの一つの楽しみです」とにこにこしながら話されたあの顔がそのまま今でも私の脳裏に鮮やかに残っている。近年は、長女で会員の岳子さん、孫で同じく会員の敬子さん、外の皆さんと峠越えを楽しんでおられた。

宮原さんは、山を始められたのは比較的晩年になってからの様であったが、実に中味の濃い充実した山旅を楽しんでおられた。

その一つとして、一九八二年、信濃支部の明治生れの男女四人でのネパールのトレッキングを十五日間楽しまれた。全員七十歳を過ぎての事である。私など、まだまだ山をゆったり楽しむ事が出来ず、せかせかと先を急ぐ癖が有り、山と、又自然とゆったりと一体になっておられた先輩を見習いたい。

一月十六日の朝、岳子さんから電話が有り、前日、父利重さんが亡くなられたとの事、前年十月、氷ノ山での全国支部懇談会に参加された事を聞いていたので、まさか、との気持でご自宅へ伺った所、あのいつもの温厚な顔で今にも何か話されそうな感じで永遠の眠りについておられた。

「誠信の交わり」と云う言葉が有るが、この言葉が実に似合うのが宮原利重さんではなかろうか。誠信とは、実意と云うことであって、互いに欺かず、争わず、真実をもって交わることである。宮原

さんの生き方はこの言葉通りの生き方であった。

十六有余年のおつき合いであったが、私には種々と学ぶ事の多い年月であった。

この様な立派な生き方を貫かれた方なので仕事の事、又地域社会の中でも多大な貢献をなさった事であろうが、あくまで山を通じてのおつき合いだったので、この事については触れず、宮原利重さんとの山を通じての憶い出を記して、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

一九九五年一月十五日逝去。日本山岳会には一九七九年八月入会、会員番号八六一九。紹介者は百瀬一茂、奥原教永両氏。

（金子丞二）

笹川慶子氏（一九三五～一九九四）

笹川君の亡くなった一九九四（平成六）年八月三日は炎暑の一日だった。もっとも、その年の夏は異常な猛暑が続き、療養中の私なども体調を大いに崩して同君の葬儀には参じられなかった。

同君は九三（平成五）年三月、郡山で胃癌の手術を受けたが、五月の南会津山の会の春の集会には何としても参加したいと思っていたらしく、実妹夫妻に伴われて出席した。更に九月には小康を得て実妹夫妻と安達太良山に登り、十月の南会津山の会秋の集会（大桃の民宿）へは再入院の直後だったにも拘わらず、無理を押して参加した。

その会で私は、かなり痩せていた同君と会って心をいためた。そして沼山峠から秋色の尾瀬ヶ原大江湿原まで行き、同行の十数人は長蔵小屋まで足を伸ばしたが、笹川君と一緒に歩いていた私は、少しでも同君を疲れさせまいとして、手前のヤナギランの丘で停止させ、新たに建てられた武田久吉翁の記念碑に黙礼して踵を返した。この時が同君と歩いた最後になろうとは、思いもかけなかった。

同年十二月のＪＡＣ年次晩餐会にも同君は無理を覚悟で出席したらしい。しかも、その翌日は三ッ峠山へ登りたいと言って、早川瑠璃子、江花俊和、平野彰君ら数名で実行している。猪苗代では好きなスキーまでやった。

九三（平成五）年十二月暮から翌年四日まで中西章君らのグループと四国の四万十川流域を歩き、九四（平成六）年一月には野沢温泉へスキーに行ったが、この頃は食欲がまったく衰えていたようだ。

三月のＪＡＣアルパインスキー同好会のことは略歴にも書いたが、同君はスキーで下ることができぬ程衰弱していたという。その会の翌日、容体急変して救急車で入院し、その後は入退院を繰り返していたが、七月からはずっと入院した儘となり、遂に八月三日午後三時に永眠した。

笹川君の病状の経過をやや詳しく書いた嫌いはあるが、いかに同君が無謀とも思える程、山にのめり込んでいたか、また山の友人との付合いをいかに大切にしていたかを見てみたかったからである。たしかに同君の山は、元気であった頃も同様に密度の濃いものであり、特に友人に対しては誰彼のへだてなく親切の限りを尽くしたと

言えよう。

笹川君は一九八〇年七月に本会に入会して福島支部では自然保護委員をつとめ、ＪＡＣの自然保護集会や全国集会には積極的に参加し、また東北ブロックの山行には支部を代表してよく出席した。さらに支部の春秋の山行や新年総会にも殆んど欠席することがなかった。

同君はまた出身校山岳部ＯＧ会である「みのわ会」でも長く会長として同会の発展に尽くした。その創立二十五周年には『みのわ（特集あぶくま）』という記念誌を発行したが（一九八三年三月）、南会津山の会の会員の何人かがその製作に喜んで力を貸した。阿武隈の地味な山々をよく一冊に纏めたものとして、今日でもなお価値が少なくない。

笹川君が南会津山の会へ入会したのは一九七八年十月で、創立二十周年記念の集会が二岐温泉で開かれた時である。同会には創立会員である小滝清次郎、目黒実、古市義孝、大内善一、佐藤光、田村豊幸諸氏その他をはじめ、会員がふえるに従って川崎精雄、佐藤利右衛門、佐藤敏彦、佐藤勉、山田哲郎、成瀬岩雄、笠原藤七、成田安弘氏等の個性豊かで山歴も多い数多くの会員が含まれていた。会長もなく会則もない融通無碍（むげ）の会で会員数五十余名、会津地区と東京周辺地区とほぼ半数の会員で占め、また全体の半数位がＪＡＣ会員でもあった。こういう会に入ったため、笹川君の交友範囲は大いにひろがり、同君がそうした人々から得たものは極めて大きかったと思う。同君が南会津山の会に特に深く且つ情熱を燃やすようになったのも頷けるし、その行動によってもよく分かる。

私が知り合ったのは同君が南会津山の会へ入会してからだから、約十五年ぐらいでしかなかったが、その間阿武隈や奥会津、越後境の、人にあまり知られていない山々へ三十数回同行の機会があった。同君の友情には感謝の他はない。今となっては、よい山の憶い出ばかりが眼前に彷彿するが、もうここに述べる紙幅はなくなった。深い哀悼の意を表して筆をおく。

略　歴

一九三五（昭和十）年十一月十九日、郡山市に誕生
一九五四（昭和二十九）年　安積女子高校を卒業、在学中山岳部員として活躍
一九五六（昭和三十一）年　安積女子高校山岳部ＯＧ会の「みのわ会」を結成、長くその会長をつとめた
一九七八（昭和五十三）年十月、創立後ほぼ二十年を経た南会津山の会入会
一九八〇（昭和五十五）年七月、日本山岳会入会（会員番号八八一二、紹介者は中嶋正夫、川又恒一両氏）
一九九二（平成四）年七月、早川瑠璃子夫妻、江花、平野君らの五人で、カナダ山岳会ステファニック・ジョージ夫妻の招きでカナダの山のトレッキング
一九九三（平成五）年三月、郡山市の太田病院で胃癌の手術を受ける
一九九四（平成六）年三月、猫魔ヶ岳付近でのＪＡＣアルパインスキー同好会の世話役を同僚と共に引受け、その直後から

衰弱が進み、体調急変する
同　年　八月三日午後三時逝去、六日郡山市で葬儀が行なわれた
（望月達夫）

清水弥栄治氏（一九三九～一九九四）

清水とは、高校の時から気があった。互いに裕福ではなかったし、学年は違っても同じ歳だったことにもよるが、何よりも女の子にもてなかったからかもしれない。高校では一学年の違いは天と地の違いである山岳部だったので、私は先輩として威張っていたが、卒業してからは、先輩後輩というよりは同じ歳の兄弟のようになってしまった。兄弟というのは不思議なもので、彼奴はどうしているだろうと気になると、向こうでもそう感じるとみえ、顔を見せたり電話がきたりと、何となく心が通じていた。

大学のとき、夏休みにポロシャツに短パン、ゴム草履姿できて「これから蔵王に行こう」という。先輩に山はそんな格好で行くものではないと教えられていたので、「何だその格好は」というと、「暑いときに、わざわざ暑い格好をしなくてもいいだろう」と私の分の短パンを出した。二人ポロシャツ、短パンにゴム草履姿で宝沢を歩いていった。これが涼しくてなんとも調子がよい。それからは短パン、ゴム草履を愛用するようになったが、ついに後藤幹次先輩に見つけられ、「何だその格好は、破門だ」と叱られてしまった。それでも涼しさには勝てず、いまでも短パン、ゴム草履を続けている。いいものである。

またあるとき、岩魚釣りの道具を一式作れという。どうしたんだと聞くと、お前が岩魚釣りは面白いというから、俺もやってみるという。それからだいぶ岩魚釣りに凝ったようだが、あまり上達はしなかったようである。それでも下手の横好きで、いろんなところに釣りに行っていたようである。

こんな付き合いが四十年以上続いたが、その清水がもういないというのは、どうしようもなく淋しい。心から冥福を祈っている。

略　歴

一九三九（昭和十四）年十二月二十一日　山形県東置賜郡赤湯町（現在南陽市）に生まれる
一九六四（昭和三十九）年三月　北海道酪農学園大学卒業。蔵王ロープウェイ株式会社に勤務
この間、山形県立山形東高等学校山岳部、山形こだま会、山中山岳会に所属し登山活動を行う。十勝を中心とした北海道の山々、国体選手としての九州祖母・傾・久住山などのほか、韓国の雪嶽山、ヨーロッパアルプスなどに足跡を残す。
また、蔵王の冬山案内図・夏山案内図の作成、スキーコース・ゲレンデなどの緑化に努めた功績は大きい
一九九〇（平成二）年四月　日本山岳会入会、会員番号一〇六六三
入会以前にも支部行事等に指導協力を受けていたが、

請われて山形支部強化のため入会。全国支部懇談会、後藤幹治元支部長の追悼集会、海外遠征の素地作り等に尽力した

一九九四（平成六）六月五日　山形大学医学部付属病院で死去

（佐藤誠二）

会報「山」訃報　追悼文一覧

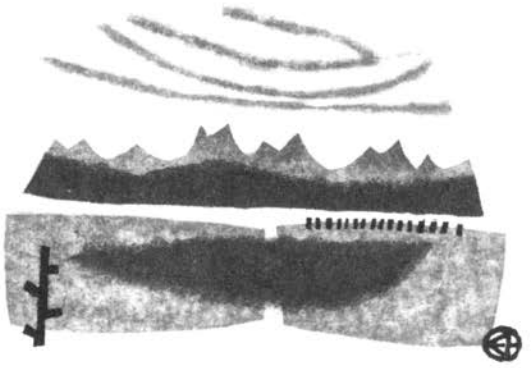
一九九四年八月号（五九一号）
追悼　名誉会員廣瀬潔氏（中村純二）

十一月号（五九四号）
追悼　河野幾雄君を思い巡らす（金山淳二）

一九九五年一月号（五九六号）
村上守君のこと（望月達夫）
追悼　笹川慶子さんの踏み跡（中嶋正夫）

二月号（五九七号）
訃報　鴫原副会長死去

四月号（五九九号）
追悼　辰沼廣吉さん（山田二郎）、鴫原啓佑さん（日下田実）



支部だより

北海道支部

平成七年六月五日、元北海道支部長の名誉会員・橋本誠二先生が亡くなった。橋本先生は、その前の支部長・大塚武氏が日高の山で不慮の遭難死をされた後を受けて、支部長を引き受けられ、多事多難な支部の活動を無理をせずゆっくりと、しかし確実に活性化し、今日の支部の基礎をつくられた。御冥福をお祈りする。

平成六年度以降の支部行事（一部昨年の報告と重複）をお知らせする。

六年四月二十一日支部総会。五月二十九日：簾舞林道で自然観察会。六月十一日～十二日：北見山脈の天塩岳登山。七月十六日～十七日：北大雪の武利岳登山。快晴に恵まれ余り訪れることのない頂を踏んだ。十月一日～二日：日高ピセナイ山。千㍍余りの山だが快晴で、日高山脈の北は幌尻岳から南は楽古岳まで見事な展望を堪能した。十二月十日：支部晩餐会。新入会員を交え、楽しい一夜を過ごし、後は例によって二次会へ。翌七年二月十八日～十九日：十勝岳連峰の上ホロカメットク山と三段山に分かれて氷雪登山とスキー。アイゼンを着けて上ホロへ登った会員は少数だったが、支部山行でピッケル・アイゼンを使用する冬の登攀は初めてだった。当日は厳寒期にもかかわらず暖かく、シーデポーで素手でアイゼンをはける程だったため冬の十勝岳とは思えない悪雪でスキーに苦労した。三月九日：海外登山研究会。三輪会員の子息のアマダブラム登攀と、遊座会員のボルネオ島キナバル山。キナバルでは山登りだけではなく、熱帯雨林の自然に関する話も興味を引いた。

四月二十二日：支部総会。本年度は支部役員の交代年度だが、支部長以下ほとんど留任し、一部の補充に止めた。五月二十七日～二十八日：芦別岳。すばらしい天気に恵まれ、ユーフレ沢本谷雪渓を登り、頂上から道内のほとんどの高山を見ることができた。六月四日：昨年好評だった自然観察会を盤の沢林道で行う予定だったが、残念ながら雨で順延。七月：支部会報『ヌプリ』の発行。支部総会の結果と行事予定を会員に早く知らせるため、従来より発行を早めた。七月二十一日～二十三日：二泊三日で道南の大千軒岳と砂原岳。大千軒岳は晴れ、橙色のエゾカンゾウ（ニッコウキスゲ）の群落が見事だった。翌日の砂原岳も登るにつれて霧が切れて駒ケ岳は全貌を現し、函館の会員のお世話で、参加者は全員道南の山を楽しんだ。八月十四日～十六日：始めに述べた大塚元支部長の十三回忌。大塚氏の御遺族と有志とで日高山脈神威岳へ追悼登山の予定だったが、八月上旬の大雨で道路決壊、入山できなかった。ニシュオマナイ沢を入れる所まで行って十三回忌のお参りをし、翌日は襟裳岬をまわって中札内の坂本直行記念館と山岳館を訪れ、御遺族は十七日帰京された。（以下予定）十月七日～八日：恒例のお月見山行は北大雪の武華岳。十月十日：雨で延期になった自然観察会を野幌森林公園で行う。十一月十一日：ＪＡＣ九十周年・北海道地区記念行事と

祝賀会。十二月九日：支部晩餐会。翌年二月二十四日～二十五日：ムイネ山スキー・ツアーとイグルー講習会。また期日は未定だが、海外登山報告会も予定している。今年も、海外へでかけた人が多かったので楽しみである。

いつも述べるように、北海道は広い道内に二百人近い会員が分散している。支部山行はできるだけ道内各地で、多様な形で行い、海外登山報告会や自然観察会など色々な行事を通して、支部会員の様々な要望に応えていきたい。その点で今年の二月の上ホロ、五月の芦別岳雪渓や、七月の大千軒岳など新しい試みは成功だったと思う。

（野田四郎）

■岩手支部

平成六年度の総会も山行と切り離して四月三日盛岡市上田公民館で行なった。十八人の参加。支部長から来年の平成七年に予定されている九十周年記念東北ブロック式典については岩手支部が担当を依頼された場合には引き受ける事もある旨説明があった。その後は懇親会で長老の小西喜助会員のクマ談義が中心であった。

五月七日春の例会安代町安比高原ペンションアンズ村。例会山行は小雨の中を細野部落から鍋越林道を入って残雪を辿って高倉山。一等三角点の周囲には雪がなく標石が出ていた。高橋俊彦会員の松川温泉峡雲荘で休憩して解散。十三人参加。幹事は立花幹雄・小口洋右。

五月二十一日全国支部長会議に集まった東北各支部長の話し合いで九十周年記念東北ブロック式典を盛岡で七年九月に実施と決定。

七月九日支部委員会盛岡市上田公民館。九十周年記念東北ブロック式典の具体的な要項を決定した。

八月二十六日～二十九日夏の例会山行。上高地・北穂・奥穂・前穂・上高地。例会は横尾山荘。七人参加、幹事中谷。この行事は学生時代に北アを歩き廻った人の思い出のために、また近在の山々を歩いたがまだ登っていない会員のために新企画として実施した。好評であったのでしばらくは続ける予定である。

九月十日東北地区支部長・事務担当者会議で記念式典の要綱の了承が得られた。参加予定を五十人と提案したが百人位にするよう各支部協力するとの事であった。

十月一日秋の例会岩泉町安家かむら旅館。本年は松茸の大豊作で皆大満足。翌二日例会山行。一等三角点の峠ノ神山が目標であったが台風で道路が崩れ亀が森に登って解散。十六人参加、幹事山崎成一・刈屋俊彦。

平成七年の会報「山」三月号に東北ブロック式典の要綱を発表した。

この年度は県外の会員との交流が例年より多かった。主なものは諏訪弘会員が訪台交流登山に参加、山岳スキー同好会や山げらの会会員の来県、ユリの会アンナプルナに諏訪、阿部陽子の参加などである。

上野幸人会員がクラブ山ぼっこ隊でダウラギリⅠ峰を登頂し、同隊は岩手日報体育賞を受賞した。山岳関係としては小野寺正英会員がK2に登って以来のことである。

（中谷　充）

秋田支部

当支部における平成六年度の活動状況は、経験豊かな新入会員も加わって一段と充実した組織内容となった。

支部山行については、これまでと同様、他の山岳会と重籍している会員を考慮の上、県内の比較的登られていない〝ふるさとの山〟を選び出し、親睦を重点とした楽しい山行作りに専念している。

春は十二名の参加者を得て、六月五日に県南部の一等三角点の山・烏帽子山と姫神山。夏は一宿泊りで奥森吉の秘境・桃洞と姫ヶ岳を延べ四十五名をもって八月六～七日に実施。秋には道のない一等三角点のヤブ山・高森と隣接する鳳凰山を登り、いずれも小さな山ゆえにハシゴ登山が可能であり、これまで以上に楽しみを倍増している。

特別事業としては、台湾の名峰・南湖大山と太平山の友好登山を十一名の参加者を得て、十一月十二日から十日間の日程で実施し、これまでの交流を更に深めあい、今日まで積み上げてきた無形の民間交流の成果を形のあるものへと強めている。

本会総会に先だって開かれた支部総会は、二十二名の出席のもとに開催、会計・事業・予算案などが審議され、懇談会も併せて行った。

東北地区集会（宮城・七ッ森集会）には三名のみの参加となってしまったが、本会の年次晩餐会には七名が出席、共に親交を深めあった。

支部報「秋田山岳」は三回発行し、通算二十九号。会員の自由投稿も考慮しているが、現在の予算内では支部関連の記事のみで満杯となっている。

その他としては、台湾・林夫妻の招待、関連団体の各種会議などに出席するなど。

会員数も退会者なしの六十三名と増加し、二十歳台の登山者なきぞ悲しきの当支部ではあるが、中高年を主軸とした楽しき山登りを最大の目標としている。

（佐々木民秀）

山形支部

支部の総員は五十名を越える。この中で、常時支部の行事に参加するのは、十五・六名前後であるが、なるべく多くの会員が参加できることを心掛けて山行をはじめ行事の計画を組んでいる。

平成六年度は、支部総会ではじまった。どの地域からも便利なようにと選んだ朝日村の保養施設「かたくり荘」で、二十一名が出席し四月二十一日開かれた。形どおりの事業報告、予算決算と七年度の事業計画を話し合った。

登山は、六月五日の神室（かむろ）山地の火打岳に九名が参加した。まずまずの好天も幸いして、参加者の多くの歳には不釣合とも思える山も楽しく過ごすことができた。

同じ六月二十六日には、蔵王国定公園の中の蛤岳（山形神室岳）周辺で清掃登山を行った。清掃登山は、支部行事に毎年組み入れられてはいるが、最近の山は断然綺麗になったというのが実感である。この行事には四名の参加があった。

前記の、火打岳に我々が登っていたその日になくなった清水弥栄治会員の追悼登山が、八月二十一日に八名の会員が集まって蔵王山で行われた。この日の集合場所刈田駐車場は、風雨はげしく行動もままならず、山小屋での追悼集会に切り替え、誰からも愛された故人の冥福を祈った。

九月二十四日から二十六日まで二泊三日で上高地の山研に十二名が出かけた。ここから徳本峠、焼岳、西穂高岳などに登り全員久しぶりの上高地周辺を満喫した。

十月十五日・十六日には、十一名が参加して、ここ二・三年恒例となっている鳥海山清吉新道の散策山行が行われた。この日は前夜の天気まつりの効き目もなく、あいにくの雨となったが、山形支部創始者の一人斉藤清吉翁が苦労して開いた登山道で、雨に開いた大量の茸をいただき翁をしのんだ。

平成六年を締めくくる支部年次晩餐会は、温海岳の麓温海温泉で十二月十日開かれ、十八名の大宴会となったが、翌日は雪道と凍りついた山道に足を取られつつも頂上から、真っ白に輝く鳥海山、月山、朝日連峰などを望むことができた。

平成七年に入り、三月四日・五日には、蔵王山中腹の山形山岳会小屋をお借りして、蔵王の樹氷林を滑る会が十五名集まって行われた。蔵王ならではの樹氷の林を縫って滑る醍醐味は格別である。

また、平成六年五月二十八日・二十九日の青森支部設立記念の戸来山登山には三名、宮城県支部主催の東北地区集会・七ツ森には、七名が参加している。また、全国支部懇談会・氷ノ山には、一名ではあるが参加している。

そのほか、本部主催の支部長会議、各種委員会には、その都度出席をしている。

いずれにしても、当支部の構成員ほとんどが、年齢が高く、他の山岳会との二重加入が多く、これらとの調整が一つの課題とはなっている。ただ会員も暫時多くなりつつあり、わかい層に期待はしなければならないが、年配者なりの山行は、今後とも進めて行かなければならないのが現状と踏まえている。

最後ではあるが、この年は二人の支部会員が死去されている。前述の清水弥栄治氏と佐藤富佐雄氏である。佐藤富佐雄氏は、当時日本山岳会が主管して行われた鳥海山の国民体育大会を機に入会され、地元役員として働かれ、以後一途に鳥海にこだわって支部に貢献された支部の長老である。会員番号は五八四三である。ご冥福を祈る。

（梅津　博）

■福島支部

前回（一九九三年「山岳」）に報告した事業実施項目のくりかえしで変りばえしないが、昨年来の行事をふりかえって支部のうごきをおつたえすることにする。

順不同になるが平成七年五月二十七日、福島市内「杉妻会館」において平成七年度定時総会を開催した。出席者は中嶋支部長以下二十一名、議事は平成六年度事業報告、会計決算、新年度事業計画、同会計予算を含む六議案を審議して原案どおり決定した。

今年度は任期満了に伴う役員改選の時期になっており、中嶋現支

部長が高齢を理由に辞意をもらしておられたこともあり、後任人事について総会に先だつ役員会において審議を重ねた経緯があった。総会にはこの結果を次のとおり報告。

①支部長は佐久間高男氏（現監事、会員番号四三〇一）、②副支部長、常任委員は再選、③委員は、死亡・病気による欠員四人を新たに補充、④監事は、一人が支部長となったこと、一人は高齢により辞任されたことにより委員から一人ふりかえ、一人を新たに選任する、とする執行部案を計り異議なく了承された（役員名簿は省略）。

今回の改選による新支部長佐久間高男氏（六十八歳）は、支部の各種会議、行事等にはもれなく出席して運営に参画、会員から親しまれ信望厚いお人柄である。また、中嶋正夫前支部長は顧問におむかえし大所高所からのご指導をお願いすることになった。

次に恒例の諸行事については次のとおりである。

一、諸会議・行事

1、定時総会、役員会…各一回

2、夏山、秋山小集会、そばを食う会…各一回

3、スキーツアー（安達太良、西吾妻）…各一回

4、東北ブロック内集会への参加

ア、青森支部創立記念式典、山行（八甲田、戸来岳）

イ、東北地区秋山集会（宮城支部当番、七ッ森）

5、本部行事（支部長会議、年次晩餐会）への参加

これら諸会議・行事への出席延べ人員は一三二人である。

その他、前回の報告時における課題として、会員の山岳への知識・技術の修得研鑽については、大谷司常任委員ほか一人があたることを申し上げていたが、只今のところは大谷氏が中心となって支部事業とは切りはなして、冬期氷雪技術研修を適時企画実施することにしていて適宜参加を呼びかけている。

おわりに平成六年四月から平成七年六月までの間に三人の会員を失ったことを申し上げたい。六十代男性二人、五十代女性一人、死亡の原因はいずれも日本人の死因上位にランクされる疾患と伺っている。天寿と言うには早すぎる年代の訃報は、いかにも辛く口惜しい限りである。

・長尾幸七さんは、同名であったご父君も会員（二一八〇）であられた。二代目の会員であった。六十八歳。

・笹川慶子さんは、福島県立安積女子高校山岳部から社会人になるや同校ＯＧ有志で「みのわ山岳会」を創られた。本会に入会後は山行集会の企画をされたりして積極的に支部事業を盛り上げてきた。本部自然保護委員会のメンバーをつとめ、県内山岳の環境保護にも大きな関心をよせて活躍されていた。五十八歳。

・赤沼　節さんは本県山岳連盟会長の現職で本県山岳界の要。特に本年は国体当番県として山岳協議運営に大きなかかわりをもっておりその影響は計りしれないものがある。六十六歳。

戦後、食にも衣にもこと欠く時期を耐えて登り重ねてきたこの五十年は貴重な年月と言わなければならない。会員諸氏の健康を心からねがって福島支部からの報告をおわりたい。

（安藤　治）

越後支部

［越後支部長就任のごあいさつ　五十嵐篤雄］

前佐藤支部長は十七年の長期にわたり尽瘁され、支部活動に多大な功績を納められてきましたが、かねてよりご家庭のご都合ということで辞意をもらしておられました。お引き留めも無理と存じ委員会はこれを承認いたしました。今後はその豊かな才能と豊富な経験を活かして頂きたく支部名誉会員に推薦申しあげた次第です。

人格識見にすぐれ温厚篤実なる佐藤先輩には遠く及びませんが諸先輩の敷かれたレールの上をできるだけ誤りなく歩むことしかありません。しかしながら私は性愚鈍しかも齢七十に近く到底ご期待に添えるとは思いませんが幸い優れた室賀、小林両副会長はじめ支部会員皆様のご介助により大過なきを期したい所存です。何卒ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

［越後支部行事他］

支部定期総会は毎年曜日に関係なく七月二十五日に定着していたが会員の出席率が悪いので七月八日（土）とし翌九日親睦登山とした。

会場も宿泊できる新発田市滝谷地内農村婦人の家で行った。支部会員二八一名、出席三九名、委任一四五名、計一八四名で総会は成立した。

議題の支部長会議、本部通常総会の報告、当支部平成六年度事業及び会計報告、平成七年度事業計画及び予算案は原案通り可決された。人事は越後支部名誉会員佐藤一栄、支部長五十嵐篤雄、副支部長室賀輝男、同小林智明、主事（事務処理担当）田辺信行。委員四二名を二〇名に削減する、が承認され総会終了後和やかな懇親会となる。

九日、俎倉山（八五六・六㍍）の親睦登山は合憎の雨、入山したのは九名だけであった。雨と濃霧の中で昼食、三角点を確認し、下山するころは土砂降りになるが冗句の旨い人がおり笑いながらたのしい下山であった。

七月二十五日　越後支部恒例の高頭祭を挙行。高頭仁兵衛翁が十三歳のとき初めて登られた弥彦山に昭和二十五年石台に翁のレリーフの寿像を建立して以来、翁がこよなく愛した御酒を献じ、ありし日の翁を偲ぶ。

高頭祭終了後、山顚御神廟に詣で安全登山祈願を行なう。室賀副支部長のカムチャツカ半島トルバチェク峰登頂の講演を行なった後、全員たいまつに点火、暗くなった山道を弥彦神社まで下った。

八月二十六日～二十七日　日本山岳会創立九十周年中部ブロック記念式典に十五名、二十七日記念登山、編笠山十一名、仙丈岳四名参加。

十二月九日支部年次晩餐会を行なう予定である。（五十嵐篤雄）

山梨支部

本会創立九十周年中部ブロック記念式典が八月二十六日より三日間、山梨県甲府市を主会場に開催されました。八十周年の記念行事

は、それぞれ各支部ごとに行われたわけですが、今回の九十周年は、本部の指示もあり、越後・信濃・静岡・山梨の四支部合同で開催することにいたしました。中部ブロックの名称も全国を八つのブロックに分けての一つとして命名されたものと思います。

式典は本部より村木潤次郎会長始め、小倉茂暉評議員、中川常務理事の出席を戴き、「南アルプスの山岳環境と登山の将来像」のテーマをかかげてフォーラムを開催いたしました。総勢八十名を越える出席を得て、盛況裡に記念式典を終了し、懇親会に移りました。詳細については後日冊子を作る予定ですのでごらん戴きたいと思います。懇親会は四支部長の挨拶に始まりなごやかのうちに終えることができました。翌日は記念山行として、日帰りの八ヶ岳編笠山のコースと一泊二日の南アルプス仙丈岳コースの二班に分かれそれぞれ実地踏査と登山を行い無事終了することが出来ました。初めての四支部の合同行事でしたがもともと日本山岳会の会員同士のことゆえ何もさしつかえることもなく誠になごやかのうちに心よく交流を深め会合はますますの親交を約束しながら解散いたしました。

さて本年の四月の定期総会には山梨支部に在籍の高名な山岳写真家・風見武秀氏による「世界の山」のスライドを拝見いたしました。さすがにみごとな山岳写真のスライドには大変な感動を受けました。続いて総会に移り議事は四月の深田祭、五月の木暮祭と定着して参りましたが、もっぱら九十周年の記念行事の計画で終始いたしました。毎月定例の委員会を甲府市内の会員宅「田原屋」で開催していますが今年は九十周年が終るまでは他の行事は手につかない始末で、やっと無事終了出来ましたので、平常の支部行事の秋の山行を具体化の予定です。

先年の秋の全国支部懇談会に続いて今回の九十周年記念、山梨支部にとっては大きな行事が続きましたので、事務局始め支部員には大変な御苦労をおかけいたしましたが、お陰様で、支部会員の相互の信頼と友情を深めますます支部の充実を計ることが出来ました。

（古屋学而）

■静岡支部

日本山岳会静岡支部平成七年度通常総会が五月九日（火）午後六時三十分より、静岡市珠賀美神社集会所に於いて、支部会員二十五名の出席を得て開催された。

三期務められた安間荘支部長が退任され、替わって大石惇新支部長を選出し、新年度の計画に従ってスタートが切られた。

年間行事は一月新年宴会、五月通常総会、十二月忘年会、春と秋の年二回懇親山行、年七回第二火曜日夜の支部会が年間行事の大要である。

年間行事の本年度の春季懇親山行は、静岡県の中央部藤枝市の奥「檜峠から菩提山を経て滝の谷峠へ」と決定した。

五月二十八日藤枝バイパス谷稲葉インター出口に午前九時、十六名が集合しそれぞれの車に分乗して滝の谷の水車小屋に向かった。滝の谷峠から逆に菩提山に登る人達を残して登り口の檜峠に三台の車に分乗し出発。

檜峠は菩提山の南鞍部にあり、島田市伊久美川から藤枝市瀬戸川

へ越えるゆるやかな峠で、明るい山畑や茶畑の中に民家が散在し、いかにも峠の部落らしい雰囲気が漂っている。

檜峠附近は新茶の最盛期も過ぎたため、茶摘みの人々はまばらである。

伊久美川を始め、大井川中流、瀬戸川流域の眺めは捨てがたい。開濶な眺望は多少得られるが、いかにも物静かで雑木の中に所どころ黒木を混じえ、四三二㍍の峠から六七七㍍の菩提山を起こしている。西南から東北へ延びる長い頂稜はいかにも静岡の山らしさがあり、峠から一時間後には植林の中に二等三角点を見つける事が出来る。小休止した後、さらに歩くこと六、七分で小さな祠のある狭い頂上に到着、滝の谷峠から登って来たグループが到着、記念撮影と昼食を取る事にした。

菩提山の頂上から滝の谷峠までは滑りやすい急な下りで、三々五々下って行くが、足の早いグループは水車小屋まで歩いて行く。バーベキュー会場の水車小屋まで滝の谷峠から一時間の距離である。

陽射しが強いので木陰に陣どり、刺身、バーベキュー、酒、ビール、焼酎なんでもあり盛上がった懇親会が延々と続く。

秋季は「長者岳から天子岳へ」の一泊二日の懇親山行と決まり、秋季山行を楽しみに夕刻解散した。

八月二十六日JAC創立九十周年記念式典の中部ブロック式典とフォーラム、翌二十七日は八ヶ岳・編笠山懇親山行に静岡支部からも参加し、盛会裡に終了する事が出来た。

特にフォーラム「南アルプスの山岳環境の保全と登山の望ましい将来像について」は中部ブロックとしての特長ある提言や意見が多く出され内容のあるものであった。

（水野公男）

東海支部

昨年行われた「わかしゃち国体山岳競技」は、愛知県奥三河の鳳来町、設楽町、東栄町を舞台に実施されたが、多くの支部員が運営役員、協議役員として協力し無事終了した。ようやく残務整理も終わり、ホッとしているところである。

平成七年四月現在の会勢は、支部員、支部友あわせて三百三十九名（うち支部友百十三名）で構成され、一昨年、新たに支部専用のルームを得られたこともあって大いにクラブライフが楽しまれている。

本支部では、近年になって未組織の中高年登山愛好者を積極的に受け入れる方針のもとに支部友制度を拡充し、それらの人たちの組織化と安全登山のための技術と知識の向上に努めている。これが現在の支部活動の活況につながり、結果として各種事業を実施できる原動力となっている。

支部費は年間三千円で、支部友会費も同額である。年四回、平均三二頁ほどの支部報を発行し、活動方針と活動報告、行事案内、会員相互の情報交換などに努めている。しかし一方で、この支部報印刷費、郵送費だけで徴収した会費と支部還元金のほとんどが消えてしまい、財務の強化が今後の課題となっている。

支部活動は近年ますます活発化している。

その一例を記せば、本年を初年度とする「環太平洋一周環境調査登山隊」は、向こう二年半の間にカムチャツカ半島のクリュチェフスカヤを手はじめに、北米、南米、南極大陸、ニューギニアなどの三十数座の山に登り、各山の高度別の天然水や空気の採取、山麓での各種調査活動を通して、地球温暖化や酸性雨問題にメスを入れようというものである。ほかに、本年八月には実年者十二名による登山隊をインドヒマラヤのストック・カンリ（六一六三㍍）に派遣した。さらに平成八年夏季にはカラコルムのウルタルⅡ峰（七三八八㍍）に登山隊を送り出す予定である。ついで、K2の新ルート登攀計画も俎上に上っている。

また、年間十五回ほどの例会山行、夏山登山、山菜を楽しむ会、キノコ狩り、アユを食う会、一水会（雑談会）など盛りだくさんの行事を実施してきたが、常に二十名ほどの参加をえている。忘年会、新年懇親会、壮行会ともなれば六十名から百四十名ほどの参加者でにぎわう。

文化面では、支部ルームに図書室が設置され、蔵書数、内容ともに次第に充実してきた。あわせて昨秋、本部から重複図書の多数の寄託を受けたことにより一層の充実をみた。その他、八月には絵画展、十一月には山岳写真展を開催した。また登山教室として、愛知県労働協会主催の登山講習会、朝日カルチャーセンターの山岳講習会なども担当し、一般登山者の登山知識向上にも寄与できたものと考えている。

出版物では、支部の活動報告書『東海山岳六号』、初登頂となったクラウン峰登山隊の報告書『The Crown 日中友好皇冠峰登山隊1993報告』をそれぞれ昨春に発行し、随想・随筆集『名古屋からの山なみ』の改定版も昨秋発行することができた。

ついで本年、『名古屋周辺　山旅徹底ガイド』上、下巻を中日新聞本社から上梓した。これは当支部の主な活動山域である静岡県西部、長野県南西部、岐阜県美濃地方、それに愛知県、三重県内の二百三十座余りの山の登山ガイド書である。取材登山を通して支部員、支部友共通の話題を作ること、印税が支部財政の強化につながることなどを期待したものである。そして現在、来春の上梓を目指して『東海山岳七号』の編集に取り組んでいる。

また、支部初の取り組みとして十月二十一日、二十二日に「第一回伊吹山播隆祭」を岐阜県揖斐郡春日村笹又で盛大に執り行うことができた。播隆上人は諸国浪々の修業の末、伊吹山の池ケ谷峰（カワト）ではじめて定住の地を得たことは衆知のことで、この地にある一心寺は上人開基の寺である。そのため今も一帯には上人の遺物、遺跡が多くあり、各地の播隆祭にならい上人の遺徳を偲ぶ行事となった。

このように年間を通し、目白押しの催事を行っているのが本支部の近況である。なお、平成八年一月二十日には本会創立九十周年記念行事の一環として、東海地区晩餐会、記念山行等を計画しているので、多くの会員諸兄姉の参加を期待している。（安藤忠夫）

■岐阜支部

岐阜支部は、昭和四十六年に今西錦司先生（元日本山岳会会長）

の呼びかけにより創立し、今年二十四周年を迎えている。

現在、会員・会友あわせて一五二人、高木倚男支部長をチーフに、委員一三人がサブリーダーとなって、支部活動を運営している。

委員会を年に十回ほど開催し、支部活動の年間事業計画や事業を具体的に企画し、懇親山行、現地小集会山行、山岳講演会、登山報告会、新年会、そして会報「岐阜山岳」の発行など精力的に活動している。

平成六年度の主な事業は、次のとおりであった。

四月　支部総会

四月　春季懇親山行　毘沙門岳　好天に恵まれ、頂上は一㍍あまりの積雪におおわれていて、乗鞍岳、御嶽、白山、そして荒島岳など残雪をいただいた三六〇度の山並が美しかった（四六人参加）。

五月　京都支部合同懇親山行　西ノ水　青葉・若葉のなかの小径を、ウグイスやホトトギスの鳴き声を聞きながら登って、京都支部との懇親を深めた（三六人参加）。

十月　秋季懇親登山　大洞山　岐阜県山岳連盟発行の「ぎふ百山」「続・ぎふ百山」にも選ばれていないヤブ山で、難儀しての登山であった（三二人参加）。

十一月　秋季現地小集会山行　北山　澄みきった青空のもと、紅葉をウオッチングし、落葉を踏みしめての登山であった（二十七人参加）。

十一月　山岳講演会　講師・重廣恒夫氏　演題「ひとすじに求めヒマラヤの高峰に挑む」

十二月　登山報告会　講師・藤井洋氏　日本山岳会会員の藤井洋氏（岐阜大学工学部教授）が、岐阜大学学術登山隊長として、世界七、〇〇〇㍍級の未登峰九座の一つ、中国・麒麟峰（七〇九〇㍍）に挑戦し、一九九四年七月十九日から二十六日にかけ、隊員十人全員が初登頂に成功し、快挙であった。

（清水芳彦）

■京都支部

京都祇園の円山公園に妖艶な枝垂れ桜があります。その枝垂れ桜の下で、根深誠氏を交えてお花見の席を設けました。

根深氏には四月十二日に行われた京都支部総会の折に、はるばる弘前から来ていただき、「河口慧海チベットへの潜入ルート及び白神山地」というテーマで講演をしていただきました。遠来の根深氏と京都の山ヤ連中が美しい桜の下で、河口慧海の辿った遙かなルートをなぞり、ヒマラヤを又、白神山地の美しいブナ林を語り合いました。

その楽しい宴の底に流れていたものは、まだ見ぬ遠い地への憧憬であり、労苦を厭わない宗教者への感歎であり、美しい手つかずの森への愛着であり、それら時も空間をも越え得る豊かな想像力だと思われます。そして、その想像力と情熱は、おそらく日本山岳会を支えているもののひとつなのでしょう。

去る七月九、十日に岐阜支部と合同で行った、日本山岳会創立九十周年記念式典には百余名の参加があり、会員各々の山への情熱の一端を垣間見ることができました（記念式典で講演していただいた伊谷純一郎先生の「今西錦司先生の山行、サル研究をめぐって」は、

支部報の号外として発行する予定です）。

京都支部も来年に設立十周年を迎えます。会員数二百五十余名、九五年度の事業予定三十数件（毎月の月例山行、山水会、岩登り講習会、沢登り、山スキー、スケッチ山行、又、本年からは新たに写真山行も行う予定です）、会報年四回発行と活発な活動を行っています。大所帯故の悩みも有りますが、来たるべき十周年をバネにさらなる飛躍を企てています。

なお、九四年十一月五、六日に行われた、今西錦司先生記念碑完成披露会には全国から多数の御出席を賜りありがとうございました。予想以上の人数となり不都合も有ったと思われますが、改めて誌面を借りて御礼申し上げます。

（野村誠人）

石川支部

昭和二十二年に発足して以来、石川支部も今年で四十八周年になりました。平成六年度の活動報告は以下の通りです。

四月九～十日　平成六年度定期総会（白峰）、参加者十二名
五月二十六日　役員会（支部長宅）、参加者六名
六月五日　新緑登山集会（大門山）、参加者八名
六月二十五～二十六日　焼岳登山いで湯集会、参加者十二名
八月二十～二十一日　上高地山研集会、参加者十一名
十月二十九～三十日　第三回北陸三支部合同登山集会（奈良岳・奥三方山）、参加者二十七名
十一月二十六～二十七日　山祭り集会（白峰）、参加者十三名

以上の中で最も印象深いのは、十月に行われた第三回北陸三支部合同登山集会でした。各支部の年間活動の中で、年に一度は一緒に山に登り親睦を深めようと始まった三支部（富山・福井・石川）持ち回りの合同登山。今回は少々アプローチが長いものの、絶好の晴天に恵まれ当初の予定の奥三方山を通り越し奈良岳まで足を延ばして、犀奥（金沢を流れる犀川の最上流部）の紅葉を満喫した一日でした。今後も出来る限り継続していきたいと考えております。

会員の高齢化・年齢層の空洞化の声は日本山岳会のみらなず、他の山岳団体からも聞かれるのですが、少しでも支部活動の機会を増やし人のつながりが、仲間のつながりへと発展していくように努力しなければと考えております。山行例会に留まらず隔月室内例会の実施、長い間休刊している支部報の再発刊等々、役員だけが努力するのでは無く会員の皆が、自然と山を愛する仲間として積み上げて行きたいと思います。

平成七年度の日本山岳会創立九十周年記念式典の開催に向けての準備や、石川支部創立五十周年を間近に控え、やりたいことと出来ることを、試行錯誤しております。

（中川博人）

福井支部

福井支部の会員は、支部役員三名のうち、だれが最もえらいのかという問題で、日ごろ頭を悩ましている。常識で考えれば、支部長がトップであることに異論はないだろう。ところがその常識はまた別の常識によって覆えされることになる。

福井支部（支部長中村義）は、一昨年福井県山岳連盟に加わったのであるが、その時点での連盟会長は、当支部事務局長の宮本数男であった。ここに中村さんと宮本さんどちらがえらいのか、という問題の発生をみたのである。

更にこの問題は平成七年に入って、一段と混迷を深めることになった。というのは、当支部副支部長の関孝治が、新しく県山岳連盟会長に就任することによって生じてきた問題で、中村さん、宮本さん、関さん、の関係は、三すくみの様相を見せるに至ったのである（その上、宮本氏は日本山岳会本部の評議員でもある）。

何事についても、トップのリーダーシップが最も重要視される山岳会にあって、支部会員は時と場合に応じてのトップの入れ替りを、ひとつの約束事として受けとめている。

平成六年度の福井支部では、海外の山に目を向けた変化のある山行が計画され、その一方で、福井県内の個性豊かな山への登山も実行された。支部誕生から四年、着実な歩みを示している、とはいえるだろう。

・海外登山

キナバル二名（平成五年十二月二十九日～六年一月五日）

JAC訪台登山参加　合歓山一名、雪山三名（平成六年四月十八日～四月二十三日）

玉山二名（平成六年十二月十二日～十六日）

キリマンジャロ三名（平成七年一月十四日～二十八日）

・国内と福井県内の登山

北海道の山四名（平成六年七月十三日～十七日）

烏帽子岳～赤牛岳三名（八月十三日～十六日）

大山～那岐山三名、氷ノ山二名（全国支部懸談会、十月十五日～十六日）

奥三方岳九名（北陸三県合同登山、十月二十九日～三十日）

県内の山　延べ十一山二十四名

講演会の後援　講師　重広恒夫氏（七月二十二日）

（増永迪男）

関西支部

関西支部六十周年の総会は、阪神・淡路大震災の為、例年より約一ケ月遅れで、五月十一日に開催した。

会員総数四二七名（退会者四名、入会者一五名　九五年三月末現在）であった。

関西支部会員の動向は、会員は減少傾向にあり、震災の影響の一時的な事であってほしいと願っている。本年度七月末現在で、十六名（死亡六名、退会十名）の退会者があった。理由としては、病気によるもの、震災で家を失い各地へ引越された方々、病気・高齢の為登山が出来なくなった人、或いは転勤等で引越された人であるが、やはり震災の影響が大きい。

昨年度における関西支部の会合は二十三回であった（震災直後の新年会・例会山行は中止している）。一昨年度に比べ七回増えており、その内容はスケッチ講習会、山スキー講習会などである。

「山岳」第八十八年（一九九三年）での報告通り、関西支部運営方針に沿って、

㈠会員相互の親睦の為、より多くの交流事業を催すこと。

㈡財政の安定の為、支部費を徴収することとし昨年度の納入率は八九％であった（一昨年度は八八％）。この二項については順調にすべり出していると考えている。

㈢本年の総会では関西支部ルーム開設準備会の発足が提案された。震災の影響もあって、本年度中に会合を持つ予定である。

関西支部においても、本年度最大のテーマは、やはり日本山岳会九十周年事業の計画である。山陰支部と関西支部合同で、一九九六年一月二十七日～二十八日を予定して企画中である。この記念集会の方針は阿部支部長から提案され、先日会合が持たれた。

㈠日時　一月二十七～二十八日。

㈡参加費　一万円程度。

㈢行事　講演会・報告会・討論会など山陰支部と合同で検討中である。

第一回の会合では、今西壽雄と語るＰＡＲＴⅡということで、「日本の登山の現状と今後」について、パネルディスカッションにしてはどうかという案が出ている。

（三品武彦）

阪神・淡路大震災義援金へのお礼

この度、阪神大震災の被害に対し、各地の皆様から暖かい義援金をいただき、誠にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

会員の被災者の中には、家屋の倒壊など多大の被害があり、関西支部の多くの方々が被災し、支部としても動きにくい状況にあったのですが、今回の義援金は、公的な被災地区に在住の関西支部会員の支部費に充当することによって、被災会員の負担をいくらかでも軽減できるのではないかとの結論に達し、そのように使用させていただく事と致しました。

これによって皆様のご厚志が、幾らかでも被災会員に伝わればと念願しております。

最後になりましたが、ご厚志をお寄せいただいた方々に、深い感謝を捧げると共に、そのご健勝を祈り、ここにご報告させていただきます。

関西支部　支部長　阿部和行

山陰支部

平成七年度総会は、本部より小倉理事をゲストに迎え盛大に開催し次の事業を主に活動することとした。

一　県境尾根の踏査完遂

創立四十周年を記念して『山陰の百山』を刊行したが、次の五十周年を目標に中国山地を境に接する西から島根県、広島県、岡山県、兵庫県の県境尾根を踏査すること。

二　創立五十周年（一九九九年）記念事業の企画立案

海外の山を中心に記念登山を行う。

三　その他

山陰支部活動の記録の充実、山陰支部友の会（会員数百五十名）の育成、自然保護活動への取り組み強化などを目標に活動を開始し

た。

県境尾根の踏査については、海抜〇(メートル)から標高一、二〇〇～五〇〇(メートル)の尾根を踏査することとなり、群生する根曲竹や会員の山行日程調整等困難をきわめているが、残雪期の春を待って完遂したいものと考えている。

創立五十周年の記念事業立案については、海外の山研究委員会を中心に遠征希望地のアンケートを行い今年度末までには具体的にしたい。

その他山陰支部友の会育成ということで恒例となっている県外遠征を六月二日から五日において長野県の蓼科、霧ヶ峰、美ヶ原方面で行い、あいにくの雨の山行となったが日本百名山の蓼科山、車山、王ヶ頭の三座を登り当初の目的を果たした。

梅雨明けの八月には剱岳から雲ノ平方面に会員と友の会有志により山行を行っている。また、大山山麓において会員が経営する伯耆国山岳美術館（館長吉川明秀）では、日本山岳会の収蔵画をお借りして、マカルー遠征隊支援活動の一助として日本山岳会収蔵画展を開催し多くの愛好者に喜ばれた。

支部活動の記録の充実と自然保護活動への積極的な取り組みについても月例会（毎月第二金曜日開催）において協議を進め取り組んでいる。

日本山岳会創立九十周年記念ブロック別式典は、阪神大震災で開催が危ぶまれていたが、一九九六年一月に関西支部と合同で行うこととし、十一月に大山で行う紅葉狩り山行を機会に合同会議を行い具体化を図ることとしている。

以上、高齢化の進む会員数三十六名の弱小支部であるが会員相互の連帯と山に対する情熱をバネに支部活動の充実を図って行きたいと考えている。

（吉川暢一）

■熊本支部

昨年度は二名の新入会員があり、支部会員数は四十一名になりました。それでも九州四支部中最小です。会員数が多ければ良いというものでもありませんが、年毎に高齢化が進んでゆくのは些か寂しい気がします。しかし今年度のマカルー東稜登山隊に、当支部の馬場博行会員が隊員として参加しました。四十七歳と最年長ながら良く頑張ってくれたようです。このことが支部の活性化に大きな力を与えてくれました。また隊員派遣に当っては、九州各支部から力強いバックアップをいただきました。これがお互いの連帯を強める機運の一つになったのではないかと喜んでいる次第です。

それでは熊本支部のこの一年の動きについてお知らせします。平成六年度支部総会は四月二十四日、熊本市のホルン山小屋に会員十七名が集まり開催されました。役員改選では本田支部長、和仁古副支部長が夫々再選されました。夏季例会（ビールパーティー）は八月二十一日、十九名が熊本市のホルン山小屋に集まり生ビールのジョッキで乾杯の後、神谷会員の八ミリビデオ作品「阿蘇高岳」「五葉岳」と「春よ山を彩る花よ」を鑑賞。年齢を感じさせない会員の活発な夏山報告もあり盛会でした。秋季例会は十一月三、四日、宮崎支部創立十周年、九州四支部合同会議、第十回宮崎ウェストン祭

と併せて、宮崎県高千穂町五ヶ所で実施。熊本支部から本田支部長ほか八名が参加し、本部の中村副会長ご夫妻と共に筒ヶ岳（一二九六㍍）にも登りました。続いて十一月五、六日には京都市で今西錦司先生記念碑完成祝賀会（京都支部主催）があり、故人とゆかりのある本田支部長と西沢元支部長が出席しました。折からの雨を衝いて、直谷の奥に設置された自然石に嵌め込まれたレリーフを訪ね、故人の遺徳を偲びました。十二月三日の年次晩餐会（東京・新高輪プリンスホテル）には、支部から過去最高の四名（本田、西沢、門脇、馬場（博））が出席し、全国から集まった会員の皆さんと交歓しました。明けて平成七年一月八日は恒例の支部新年晩餐会で、熊本市の熊本厚生年金会館に二十二名が参集して盛会でした。当夜は二十年来「山の花」を撮り続けている広永会員の作品展示もあり、興を添えました。三月四日には同じ熊本厚生年金会館でマカルー登山隊馬場博行隊員壮行会を開き、遙々福岡から駆けつけた吉村支部長はじめ二十二名が参集して激励しました。春季例会は三月十八、十九日に大分県宇目町の木浦鉱山まで長駆して、藤河内渓谷から春浅い夏木山（一三八六㍍）に登り、余勢を駆ってアップダウンのはげしい鋸切尾根を縦走しました。遠距離のため参加者は七名と少数でしたが、大崩山群に精通した広吉会員の好リードで、七十八歳の和仁古副会長も元気で完登しました。この時は、かつて大分での自然保護集会の際、中村純二副会長も訪れた木浦鉱山の民宿「梅路」に宿泊しましたが、猪鍋、シカ刺し、カッポ酒そしてオーナーの奥さんの美声で民謡「宇目の唄けんか」も聞くことができて楽しい一夜でした。

本年は日本山岳会創立九十周年で、祝賀行事も目白押しですが、熊本支部は再来年の一九九七年に創立四十周年を迎えるので、記念誌の編集、祝賀会、記念登山の実施など、そろそろ準備にかからなくてはと思案しているところです。

（本田誠也）

■宮崎支部

標高一〇〇〇㍍。フォレストピア六峰街道沿いにある飯干緑地広場の縁に、二㍍間隔に穴を掘りサクラの苗木五十本を手際よく植え込む。

平成七年三月十二日、第十回諸塚山開きを記念し、諸塚村花であるサクラを選んでの日本山岳会宮崎支部寄贈の植樹である。

十一年前、日本山岳会宮崎支部誕生と同時に三つの目標を立てた。

・宮崎ウェストン祭開催。
・宮崎百山選定登山と宮崎百山小冊子刊行。
・諸塚山（一三四一・六㍍）山開き（第三回朝日森林文化賞受賞記念と日本山岳会宮崎支部宮崎百山選定記念）である。

宮崎支部は「ディスカバーふるさと」を合い言葉に、登山活動のメインをこの三つの目標に向け終始した。

諸塚村は、面積一八七・五九平方㌔㍍。ほとんどが山地で、人口二千七百三十一人（平成七年六月一日現在）の山村である。過疎化の進む中で、村民一人ひとりが「森林理想郷」の実現にかける情熱に燃えている。

平成二年には、諸塚村国土保全森林作業隊を発隊させ活躍するな

ど、自然保護と森林づくりに取り組む姿勢と実践は他の追随を許さない。山村に生きる人たちの宿命とはいえ、人並みの努力と掛け声だけでは森林文化賞の受賞は無かったことだろう。

今回のサクラの記念植樹は、ただ単に十回目の山開きの節目を飾るだけのものではない。

村人たちの自然愛護へのひたむきなさまに感動しまた、山開きごとに大勢の宮崎支部員が八重平公民館に宿泊しながら、地域の人たちとの交流の中で味わう「人情の美しさ」にほだされた側面も大きい。

何か形あるもので、村人たちのそれらに報いることができたらというささやかな心情の表現がサクラの植樹であった。

昭和六十一年三月二十三日、諸塚山は朝から雪が降りだした。試行錯誤のなか、第一回目の諸塚山開きである。村外から九十五人、村民を含めて二百二十七人の参加だった。

「日本一早い山開き」と銘打ってのイベントは、自然の美しさと村人たちの人情の美しさとあいまって、回を重ねるごとに参加者は増え続けた。昨年は千三百人、今回は予想だにしなかった千八百人もの参加で大にぎわいだった。

地方の時代と言われて久しい。だが、もはや形骸（けいがい）化したのだろうか。過疎が続く地域の活性化に少しでも役立とう。山麓に、登山による人害をもたらせてはならない。山里の人たちに山を守ってくださる感謝と交流を深めつつ、山登りの賛同と理解を深めたい…。このようなことは、素朴で気負いのない一登山者としてまた、ディスカバーふるさとへの出発点であり原点とはいえないだろうか。

「人は、自然を傷つけながら生きている。そのことを思いながら山に登ってほしい…」。

甲斐重勝諸塚村村長は、第十回山開きの前夜祭歓迎あいさつの最後をこう結んだ。印象的であり、しみじみと考えさせられた。

この後、思いもしなかった感謝状と記念品が日本山岳会宮崎支部に贈呈された。村長の声は透き通り力強かった。「第一回山開き以来積極的に努力支援され今日の隆盛に導くとともに地域活性化の促進に尽力された功績は誠に顕著であります…」。素直にお受けしたものの、どうも落ち着かない。むしろ「感謝状」は私たちから村人たちに贈るべきなのではないのか。全く逆ではないか。このことに気付いて、私たちは襟を正した。

婦人部の人たちの、しいたけをメインにした手づくりのメニューに地酒のふるまい。中央公民館に集う二百人もの宴（うたげ）の費用はすべて村の負担だった。せめてものお返しにと思い、宮崎支部員一同がこぞってエーデルワイスの歌を元気いっぱいステージで歌った。

森の桃源郷を目指す諸塚の、自然の美しさに加え村人たちの人情の美しさに触れての十年だった。年ごとの再会で高千穂町のウェストン祭、諸塚村の諸塚山開きで出会った地域の人たちとの交流のきずなは、記念樹のサクラの成長に負けないくらい大きなものになってゆくことだろう。十年、二十年先に、サクラの樹を囲み花をめでながら森林理想郷を語り合う夢が今、膨らむ。

（大谷　優）

会務報告

一九九四（平成六）年六月～一九九五（平成七）年五月

一九九四年度役員・評議員・支部長

会　　長　藤平正夫
副 会 長　鴨原啓佑・中村純二
常務理事　小倉茂晫・大倉昌身・大森弘一郎・村井龍一
理　　事　山口俊輔・片岡泰彦・南川金一・松浦祥次郎・伊藤　敞・水野勉・南井英弘・堀井昌子・渡邊雄二・溝口洋三・中川　武・山本宗彦・大谷　亮
監　　事　中島伊平・川崎　巌
常任評議員　斎藤惇生・湯浅道男・西村政晃・宮下秀樹・神崎忠男・重廣恒夫
評 議 員　西丸震哉・村木潤次郎・徳久球雄・鈴木郭之・國見利夫・田部井淳子・廣江　研・山田二郎・小須田喜夫・松田雄一・平林克敏・田中弘美・梅木秀徳・宮本数男
支 部 長　野田四郎（北海道）・松島静吾（青森）・中谷　充（岩手）・岡田光行（秋田）・大橋克也（山形）・西郡光昭（宮城）・中嶋正夫（福島）・佐藤一栄（越後）・田中弘美（信濃）・古屋学而（山梨）・安間　荘（静岡）・尾上　昇（東海）・高木碕男（岐阜）・斎藤惇生（京都）・木戸繁良（富山）・増江俊三（石川）・中村義（福井）・阿部和行（関西）・吉川暢一（山陰）・吉村健児（福岡）・梅木秀徳（東九州）・本田誠也（熊本）・魚本定良（宮崎）

理事会は会長、理事、監事、常任評議員によって構成される。

◇**六月理事会**　一九九四年六月九日　本会会議室
出席者二十二名
▽審議事項
一、第二回日本山岳耐久レース「長谷川恒男カップ」（十月八、九日開催）の名儀後援について
二、八十二文化財団からウェストンの写真転載許可について
三、小倉厚会員著書「周辺的登山学」に、会報の本人執筆の掲載文の転載許可について
四、東海支部長交替（湯浅道男氏から尾上昇氏へ）、支部会則の一部変更（五月二十五日支部総会）について　四議案とも承認
【報告事項】
一、マカルー登山隊員六名（荒井俊彦・岡本　憲・谷川太郎・馬場博行・山本　篤・渡辺雄二）内定、ほかに四名候補を夏合宿後に決定する
二、百年史について
三、山研の不動産取得税について
会報「山」五九一号参照

◇**七月理事会**　七月十三日　本会会議室
出席者　二十名
▽審議事項
一、桜門山岳会エベレスト一九九五登山隊に「九四五〇型パソコン」貸出し
二、悠々社から「雪の谷・山の声」に山岳掲載文の転載許可について
三、群馬県山岳連盟からサガルマータ南西壁冬期初登攀を記念して「映画と講演会」を開催するので、名儀後援の要請

［報告事項］
一、マカルー峰登山隊一九九五は七月五日から事務所を開設
二、募金委員会（事務局長石橋正美／局員井野千枝子）は趣意書、計画書、募金振替書の作成を開始
三、七月十六日にルームのリフォームを開始、事務局は一〇四号室に移転する
会報「山」五九二号参照

◇八月理事会　休会

◇九月理事会　九月八日　本会会議室
出席者　二十二名
▽審議事項
一、プラスチック・ブーツに関する広報ポスター作成について　日本勤労者山岳連盟、日本山岳協会、日本山岳会、ヒマラヤ協会の連名で、使用メンテナンスについてポスターを作成、配布する
二、岩橋崇至写真展「ロッキーと日本の山々」と題して九月二十七日～十月二日に新宿三越で開催の後援依頼について
三、日本コロンビアから「北安曇野」ビデオ制作に槙元会長の写真使用の依頼について
四、青年部委員に沢田喜生、高野正道、岡本憲、谷川太郎、荒井俊彦、野口健の六名の追加承認について
五、マカルー峰登山隊第二次隊員選考　松原尚之、竹内洋岳の二名を追加、残り二名は未定。選考委員会は、実行委員会委員長・藤平正夫、副委員長・鳴原啓佑・同中村純二、登山隊長・重廣恒夫、登攀隊長・山本宗彦、事務局長・大倉昌身・事務局員・村井龍一、同・渡辺雄二
［報告事項］
一、ルーム・リフォーム、八月二十七日に完成、同日引越しをした
二、富山岳連、ＪＡＣ富山支部合同のガッシャーブルム登山隊の三名が八月十二日に登頂した
会報「山」五九四号参照

◇十月理事会　十月十二日　本会会議室
出席者　二十三名
▽審議事項
一、会報「山」の広告の活性化について
二、創立九十周年記念事業委員会の構成について（会報五九五号参照）
三、マカルー実行委員会顧問に橋本龍太郎会員の就任について
四、山研管理人について　島田満、田端光子両氏は一九八二年から勤務していたが、九四年度限りで退職の申し出があり、本会から感謝状、慰労金を贈呈した。後任は未定
五、マカルー峰登山隊員第三次選考で小野岳を内定、残り一名は未定
［報告事項］
一、マカルー峰登山隊関連　中国に登山料ほかとして一千万円、国内費用として百万円を仮払いした
二、海外登山基金助成登山隊結果について
①マッキンリー気象観測機器設置登山隊は六月二十五日登頂、同月三十日帰国　②富山県山岳連盟ガッシャーブルム遠征隊は八月十二日三名が登頂　③慶応義塾トランゴ登攀チームは未完登　④山学同志会チベット遠征隊は、遠征延期のため、九月二十六日に全額返還された
三、一〇四号室会議室（三室）に四十名分の会議用机を配置した
四、全国支部懇談会（関西支部主管）は十月十五～十六日、兵庫県ハチ高原、氷ノ山で開催する

五、海外中高年登山隊の情報①エベレスト還暦登山を目指していた宮原会員は八七〇〇㍍まで、貫田宗男会員は登頂　②シルバータートル・ダウラギリ主峰登山隊（隊長石川富康）は五名が登頂した
会報「山」五九五号参照

◇十一月理事会　十一月十日　本会会議室
出席者二十名
議事に先立ち、学習院輔仁会山岳部ＧＡＣネパール・一九九四ドルジェラクパ峰登山隊高野隊長から、本会にお礼と帰国の挨拶があった
▽審議事項
一、石川テレビから「金沢アウトドアズ・フェスティバル」への名義後援依頼の要請があった
二、フジテレビから十一月十七日放映予定の「生か死か大冒険」に、一九八〇年チョモランマ登山隊加藤保男会員の写真使用の要請があった
三、青年部ヒマラヤ登山、シータ・チュチュラ峰登山隊一九九五の都岳連推薦状取得の依頼
四、マカルー峰登山隊に田辺治を追加決定したい
五、本年度名誉会員に中澤眞二会員（会員番号六二三）、蔡禮楽会員（同四〇七一）、孫慶錫会員（同七七七五）を推薦したい
六、十月二十八日、中村副会長、小倉、大倉各理事立ち会いの下に、中島、川崎両監事による監査が行われ、結果はすべて適正であった
［報告事項］
一、全国支部懇談会は十月十五、十六日にハチ高原で百二十五名参加。
二、年次晩餐会は十二月三日、新高輪プリンスホテルで開催、イベントはマッキンリー気象観測登山隊報告会、アルパインフォトクラブ主管の写真展
三、今西錦司先生記念碑完成披露会、本年六月に完成、十一月五、六日に披露パーティーを行った
四、山研の四～十月末の宿泊者は、会員三百九十九人、非会員四百四十二人、子供三十四人計八百七十五人で、昨年度の七百九十五人を上回った。収入は二百八十四万七千八百円、昨年より三十九万四千二百八十円増となった
五、十一月四～六日に韓国仁川でＵＩＡＡ傘下のアジア山岳連盟の会合があった。参加国は日本、中国、韓国、台湾、ネパールの五カ国、日本からは日山協と藤平会長が出席
六、故広瀬潔名誉会員からレルヒ中佐の通訳・山口参謀中佐が使用したスキー板の寄贈を受け、故人の遺言により上越市立スキー発祥記念資料館に寄託した
七、本会組織の見直し第一案を提示した
会報「山」五九六号参照

◇十二月理事会　十二月八日　本会会議室
出席者　二十一名
▽審議事項
一、写真掲載依頼について
二、同好会「ＳＵＮ燦会」（スケッチの会）について
三、来春の青年・海外・高所で実施するキルギス登山隊の後援について
四、一九九六年度に青年・高所・海外合同でムスターグ・アタ登山隊を出す予定、名儀使用許可の願い
［報告事項］
一、「ＳＳＦスポーツ・エード」基金の申し込みについて
二、募金について

三、マカルー峰登山隊について
四、年次晩餐会（十二月三日）は五百四十五名出席、会に先立ち支部長会議を開催、二十三名が出席
会報「山」五九七号参照

◇一九九五年一月理事会　一月十九日　本会会議室
出席者　二十四名
一、「白頭山写真展」（岩橋崇至会員）の名儀後援について
二、一橋大学「アカルボラジ峰登山隊一九九五／一九九六」ミャンマー北部五八八一mの登山への名儀後援について
三、海外登山基金の申込みは十一隊、次の三隊を助成対象とする
①一九九五西蔵・日中友好GⅡ峰登山隊（五十万円）
②日本山岳会マカルー峰登山隊一九九五（百万円）
③日本大学エベレスト北東稜登山隊一九九五（五十万円）
四、入会金・年会費改定について
五、マカルー峰登山隊、田久井義隆（通訳・無線）、志賀尚子（医師）の二名を隊員に追加、また支援トレッキング隊を計画している
［報告事項］
一、マカルー・九十周年募金について
二、日本大学エベレスト登山隊とJACマカルー峰登山隊は同時進行であり、両峰の距離が二十キロで、ノア衛星による相互通信連絡が可能なので共同利用をすすめたい
会報「山」五九八号参照

◇二月理事会　二月九日　本会会議室
出席者　二十四名
議事に先立ち一月二十一日逝去された鳴原副会長夫人洋子さんから、故人への生前の好誼と葬儀に関してお礼の挨拶があり、九十周年に十万円の募金をいただいた
▽審議事項
一、HAT—Jの国際交流青少年環境体験登山一九九五に名儀後援の要請があった
二、九十周年記念委員会の件
三、山岳研究所管理人に、内田二葉さんが決まった
四、会費・入会金改定の件
五、平成七年度総会議案の件
六、「山の自然学クラブ」の発足について
［報告事項］
一、二月八日マカルー峰登山隊壮行会を実施、二百四十名が出席した
二、組織見直し案については臨時理事会で検討する
会報「山」五九九号参照

◇臨時理事会　二月二十三日　本会会議室
出席者　十六名
［報告事項］
一、阪神大震災に対する義援金について
▽審議事項
一、日本山岳会組織見直し試案について
会報「山」五九九号

◇三月理事会　三月十六日　本会会議室
出席者　十七名
▽審議事項
一、秩父宮記念博物館より、貸出し展示品などの期間一年延長の件

二、伯耆国山岳博物館より本会収蔵絵画の貸し出し要請の件
三、エベレスト・ウイメンズ・サミット一九九五の名儀後援の件
四、平成七年度総会提出議案の件
五、日本山岳会一九九六K2登山隊（青年部）への名儀後援の件
六、マカルー峰登山隊に伴う理事の担当代行の件
［報告事項］
一、支部名の英語名をBRANCH（ブランチ）に統一する
会報「山」六〇〇号参照

◇評議員会　四月十一日
出席者　十五名
▽議事
一、平成七年通常総会提出議案の件
［報告事項］
一、役員人事　ほか
会報「山」六〇一号参照

◇四月理事会　四月十三日　本会会議室
出席者　十八名
▽審議事項
一、山岳名著復刻版・会報合本の販売促進について
二、植村記念財団からエベレスト登山二十五周年として記念展開催のため、展示資料の借用申し入れあり、大町・松本山岳博物館に紹介し対応する
三、春山と雪崩シンポジウムの名儀後援要請の件
四、通常総会提出議案の件　ほか
会報「山」六〇一号参照

◇五月理事会　五月十一日　本会会議室
出席者　十七名
▽審議事項
一、支部長交替の件
宮城支部＝西郡光昭→柴崎徹　静岡支部＝安間荘→大石惇　宮崎支部＝魚本定良→大谷優　山形支部は五月十四日の支部総会で大橋克也→梅津博に交替の予定
［報告事項］
一、マカルー登山隊一九九五の件
二、日大エベレスト北東稜隊が十一日に登頂
三、九十周年合同募金の現況
企業募金　七十一社　一千七百七十八万円
会員募金　延べ一千十六名　一千四百六十八万二千六百三円
四、鳥海山イヌワシ調査班の成果　ほか
会報「山」六〇二号参照

◇支部長会議　五月二十日　東京グリーンテル水道橋
出席者　三十六名
▽議事
一、支部長交替の件（五月理事会報告参照）
二、通常総会について
三、支部報告　その他

◇平成七年度通常総会　五月二十日　東京グリーンホテル水道橋
出席者　二千五百十三名（委任状を含む）
▽総会次第
一、会長挨拶
二、会務報告

三、平成六年度事業報告および収支決算、財産目録承認の件
四、平成七年度事業計画（案）および収支予算（案）承認の件
五、平成七年度役員および評議員改選の件
次のとおり決定
会　長　村木潤次郎（新任）
副会長　宮下秀樹（新任）、斎藤惇生（新任）、中村純二（再任）
常務理事　大屋悌二（新任）、吉永英明（新任）、中川　武（再任）、大谷　亮（再任）
理　事　松浦祥次郎、伊藤　敵、水野　勉、南井英弘、堀井昌子、渡辺雄二、溝口洋三、山本宗彦（以上再任）、田邊　寿、宇田川芳伸、熊崎和宏、大蔵喜福（以上新任）
監　事　川崎　巌（再任）、石橋正美（新任）
常任評議員　神崎忠男、重廣恒夫（以上再任）、小倉茂暉、大森弘一郎、村井龍一、大倉昌身（以上新任）
評議員　小須田喜夫、松田雄一、田中弘美、梅木秀徳、宮本数男（以上再任）、藤平正夫、穴田雪江、山口俊輔、長尾悌夫、中村太郎、吉田　宏、長坂　博、田邊　史、竹内哲夫（以上新任）
六、定款改正の件（入会金、会費の値上げ、来年度から予定）
七、細則改訂の件
八、組織見直しの件
九、平成七年度除籍対象者の件
十、その他
なお、会務報告で会員総数は五千四百二十四名、内訳は名誉会員十八名（うち永年会員十名）、永年会員三十五名、終身会員九十一名、通常会員五千二百八十名、となっている。平成六年度の新入会員は二百四十八名、復活会員十二名、物故会員四十七名、退会者四十四名、除籍者四十名である。
総会終了後、新役員の紹介、村木新会長の挨拶に続き、懇親会が行なわれた。
会報「山」六〇二号参照

◇主なる行事と集会
▽平成六年四月十日　高川山
新入会員歓迎さくらハイク
▽四月十四日　ルーム
学生部総会
▽平成六年四月～七年三月　上高地ほか
山の自然学現地講座（計九回実施・自然保護専門）
▽平成六年四月九～十日　八甲田
八甲田スキー（指導）
▽四月十四日　ルーム
クラウン峰報告会（青年）
▽四月十七日　丹沢
丹沢自然観察山行（自然保護）
▽五月～七月　ネパールその他
山の自然学講座　(1)山の空撮ウォッチ（北ア上空）　(2)石楠花植林（ネパール）　(3)木曽駒ヶ岳気象観測（自然保護専門）
▽五月～平成七年三月　蔵前工業会館ほか
山の自然学都内講座（計八回・自然保護専門）
▽五月十九日　ルーム
マッキンリー打合わせ（青年）
▽五月二十一日　JAビル

通常総会
▽五月二十一日　JAビル
支部長会議
▽五月二十七～二十九日　八甲田
第十八回若葉会山行（二十八～二十九日・集会）
▽六月一日　ルーム
マッキンリー隊壮行会（青年、学生、科学）
▽六月五日　上高地
第四八回ウェストン祭（信濃支部）
▽六月十一日　小仏の関
第一回古典の道を歩く（図書）
▽六月十一～十二日　谷川岳
谷川岳合宿（青年、学生）
▽六月十五日　奥多摩
定点観測（自然保護）
▽六月十八～十九日　湯河原
湯河原幕岩集会（学生）
▽六月二十一日　新宿
中国登山協会来日歓迎会（海外）
▽六月二十三日　ルーム
加盟校大学山岳部監督会議（青年、学生）
▽六月二十五日　八ヶ岳
撮影会（フィルムビデオ）
▽六月二十七日　ルーム
若葉会山行写真交換会（集会）
▽七月六日　ルーム
エベレスト南稜報告会（青年）
▽七月十四日　ルーム
マッキンリー報告会、納会（学生）
▽七月十五日　ルーム
青年部ＯＢ会（青年）
▽七月十七日　八甲田
撮影会（フィルムビデオ）
▽九月三日　ルーム
ビールパーティー（集会）
▽九月七日　ルーム
ムスターグ・アタ峰からトムール峰へ（青年）
▽九月十七～十八日　山梨県
自然保護全国集会（自然保護）
▽十月一～二日　木曽駒
探索山行「氷河地形を科学する」（科学）
▽十月五日　ルーム
キルギスタン山域検討会（青年）
▽十月十四日　日光
撮影会（フィルムビデオ）
▽十月十五～十六日　氷ノ山
全国支部懇談会
▽十月二十一日　ルーム
第二回山の本シリーズ（図書）
▽十月二十二～二十三日　小川山

小川山クライミング集会（青年・学生）
▽十月二十二日　ルーム
新入会員懇談会（総務）
▽十一月二日　ルーム
ダウラギリ峰北東稜報告会（青年、学生）
▽十一月四～六日　韓国
アジア山岳連盟第一回総会（海外）
▽十一月二十日　三省堂文化ホール
写真展（フィルムビデオ）
▽十一月二十日　皇居
マラソン大会（学生）
▽十一月二十九日　ルーム
加盟校大学山岳部監督会議（青年、学生）
▽十二月三日　新高輪プリンスホテル
年次晩餐会（総務）
▽十二月三日　新高輪プリンスホテル
支部長会議（総務）
▽十二月三日　晩餐会会場
写真展（フィルムビデオ）
▽十二月四日　鎌倉
懇親山行（集会）
▽十二月七日　ルーム
ドルジェ・ラクパ峰西稜報告会（青年）
▽十二月八日　ルーム
第二十三回山岳史懇談会（図書）
▽平成七年一月十一日　ルーム
遭難対策とレスキューを考える（青年、遭難対策）
▽一月十四～十五日　八方尾根
八方スキー集会（集会）
▽一月十九日　ルーム
冬山報告会、納会（学生）
▽一月二十八日　渋谷
チベット登山協会来日歓迎会（海外）
▽二月一日　ルーム
ギャジカン峰報告会（青年）
▽二月四～五日　城ケ崎
城ケ崎集会（学生）
▽二月八日　メトロポリタンホテル
マカルー登山隊一九九五壮行会（集会）
▽二月十七日　ルーム
映写会（フィルムビデオ）
▽二月二十五～二十六日　グリーンホテル
青年登山懇談会（総務）
▽三月四～六日　日光白根
山スキー講習会（指導）
▽三月七日　ルーム
第二十六回山岳図書を語る夕べ（図書）
▽三月十八日　ルーム
オリエンテーション
▽三月十八～十九日　志賀草津

山スキー講習会（指導）

◇研究会・講演会

▽平成六年四月十四日　ルーム
レスキュー研究会（遭難対策）
▽五月十九日　ルーム
レスキュー研究会（遭難対策）
▽六月十八～十九日　上高地
現地講演会「自然エネルギー利用実用化の現状」（科学）
▽六月二十九日、七月二十七日、九月一日、十月六日　ルーム
レスキュー研究会（遭難対策）
▽十一月十一日　ルーム
講演会「サガルマータ南西壁冬期初登攀一九九三」（高所登山）
▽十一月十一日　ルーム
高所登山研究委員会（高所登山）
▽平成七年一月十一日　ルーム
「遭難とレスキューを考える」（遭難対策、青年）
▽一月二十三日　ルーム
レスキュー研究会（遭難対策）
▽一月二十五日　ルーム
講演会「山の高さの測定」（科学）
▽一月二十八日　原宿
西蔵登山研究会（高所登山）
▽三月一日　ルーム
レスキュー研究会（遭難対策）

◇シンポジウム

▽平成六年四月十六日　秦野
自然保護シンポジウム
▽五月二十七～二十八日　千葉
日本登山医学研究会主催「第十四回日本登山医学シンポジウム」の後援（医療）
▽十一月十九日　青山学院
シンポジウム「登山と疲労」（科学、医療）

◇登山施設、その他登山のための適切な事業

▽上高地山岳研究所の資料室、展示室、宿泊施設等の活用
▽山に関する貴重なフィルム、スライド、テープ、アルバム等の補修および複製その他、貴重な資料の収集、整備、管理
▽サンビューハイツの四番町一〇四号室の借り入れ
▽本会会室リフォーム

◇山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導

◇自然保護活動の推進

◇機関紙等の発行

▽「山岳」第八十九年（一九九四年）の発行
▽会報「山」第五八七～五九八号の発行

◇国内および海外山岳団体との連絡、情報交換

▽国内関係団体（日山協、都岳連、ＨＡＴ―Ｊその他）との密接な連絡
▽海外登山団体との交流

◇海外登山

▽平成六年四月十八～二十三日　台湾親善交流登山
▽六月四～三十日　第五次マッキンリー気象観測機器設置登山隊派遣
▽平成七年二月十五日　日本山岳会マカルー登山隊一九九五出発

三月五日　青年部シータ・チュチュラ峰登山隊出発

◇その他トピック

▽名誉会員

中澤眞二（会員番号六二三）、蔡　禮楽（同四〇七一）、孫　慶錫（同七七五）の三氏に平成六年度年次晩餐会席上で名誉会員章が贈呈された。

◇物故会員

一九九四年六月～一九九五年五月に逝去された左記の会員に対して謹んで哀悼の意を表します（一部は一九九四年六月以前も含む。掲載順は可能なかぎり逝去月日順にした）。

氏　名	会員番号	逝去年月
水野祐尚	九二九〇	一九九四年四月
永井俊三	一四五三	同　年五月
岩瀬　浩	七一九八	同　年五月
岡　博三	九五二六	同　年六月
清水弥栄治	一〇六六二	同　年六月
中井修二	一〇六二七	同　年六月
柴田巖太郎	六四九四	同　年七月
笹川慶子	八八一二	同　年八月
河野幾雄	四六〇一	同　年八月
土肥正毅	五五五五	同　年八月
柿花道子	八九四三	同　年八月
福永次男	八三五五	同　年九月
岡本龍行	五五一五	同　年九月
長尾幸七	八九五八	同　年九月
山本敏三	一五二六	同　年九月
山口一孝	四六四五	同　年九月
大西雄一	六六二四	同　年十月
門倉　賢	六九〇五	同　年十一月
中島　茂	一一二一九	同　年十一月
杉山晴信	五四一一	同　年十一月
山田明吉	一九四八	同　年十一月
寺村栄一	二〇四一	同　年十一月
小川雅庸	九四四八	同　年十二月
中河与一	五四〇〇	同　年十二月
名児耶達男	六〇七五	同　年十二月
小松善弥	二二六八	同　年十二月
石間信夫	四六六六	一九九五年一月
宮原利重	八六一九	同　年一月
増本　茂	一四〇五	同　年一月
鳴原啓佑	四一八六	同　年一月
月原俊二	一四三六	同　年一月
伊達忠雄	二四八一	同　年二月
鈴木一弘	七〇一五	同　年二月
村井喜一	四九三九	同　年二月
辰沼廣吉	一九五三	同　年二月
宿屋昭二	一〇五三三	同　年二月
布施徳馬	七六四三	同　年三月
加藤悦宏	一一八三五	同　年三月
小塩丘平	五九九四	同　年三月
松下肇	五八六七	同　年三月

権藤太郎	二〇三七	同年三月	
宮城恭一	八八六三	同年四月	
田村眞知子	一一六六五	同年五月	
赤沼　簡	四二〇一	同年五月	
谷口治郎	九六九四	同年五月	

小渚水 一一八五
牧 一一八五四

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. 90 **Issued December 1995**

CONTENTS

Thoughts on the Anniversary of the Japanese Alpine Club
……WATANABE, Hyohriki… (7)※
The Way to Mt.Makalu-The 90th Anniversary of the Japanese Alpine Club
……SHIGEHIRO, Tsuneo… (23)※
From North-east Ridge (The Perfect Ascent) to Mt.Qomolangma
The Records of Nihon University Expedition 1995 ……KANZAKI, Tadao… (35)※
The Ascent of South Pillar (Mr. Everest) ……HONGOH, Mitsuyosi… (45)※
Japan Toyama Mt.Gasherbrum I Expedition ……SAEKI, Hisayuki… (51)
The First Ascent of Mt.Tangla Po in Nianqingtanggulashanmai
……KUROKAWA, Satoshi … (55)
The Ascent of Mt.Daulagiri I by Member of 50 years and Over
……WATANABE Tamae… (61)
The Reports of Challenged New Face of Mt.Great Trango Tower
……WATANABE, Tomoyuki… (69)
The Exploration of Historical Changes Concerning Some Peoples' Outlooks
on the Mountains in the East and the West……CHIKUGI, Tsuyoshi… (76)
Registration of World Nature Heritage, Yaku Island and Environmental
Conservation……YOSHIMURA, Kenji… (92)
Look back over the JAC Women Party's 50 Years Since World War Ⅱ
…… (98)
The History of Old Naniwa High School's Alpine Club
……IMANISHI, Toshio and TOKUNAGA, Atsushi… (109)
The Life of Munetaka TAKAHATA—Part Ⅱ ……ASANO, Koh'ichi… (118)
Book Review……Koh'ichi… (146)
Obituary…… (173)
Reports from Branches…… (210)
JAC's Notes …… (226)
Catalogue of Mountain Books…… (A45)
Present States and Future Developments of Practical Use of Electric Power
Generation System Utilizing Natural Energy Sourse in a Mountain Area
……MORI, Takeaki and TORII, Akira… (A32)

※English abstract attached

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Tokyo, Chiyoda-ku, Yonban-cho, 5-4

Office Bearers and Committee

1995 (May1995-April1996)

President : MURAKI Junjiroh

Vice Presidents : MIYASHITA Hideki, SAITOH Atsuo
NAKAMURA Junji

Honorary Secretary : OHYA Teiji

Honorary Editor : TANABE Hisashi

Honorary Librarian : MIZUNO Tsutomu

Honorary Treasurer : YOSHINAGA Hideaki

Auditor : KAWASAKI Iwao, ISHIBASHI Masami

Committee

HORII Masako
ITO Takashi
KUMASAKI Kazuhiro
MATSUURA Shohjiroh
MINAMII Hidehiro
MIZOGUCHI Yohzoh
MIZUNO Tsutomu
NAKAGAWA Takeshi
OHKURA Yoshitomi
OHTANI Ryoh
OHYA Teiji
TANABE Hisashi
UDAGAWA Yoshinobu
WATANABE Yuhji
YOSHINAGA Hideaki

Council

ANADA Yukie
FUJIHIRA Masao
KANZAKI Tadao
KOSUDA Yoshio
MATSUDA Yuichi
MIYAMOTO Kazuo
MURAI Ryuichi
NAGAO Yoshio
NAGASAKA Hiroshi
NAKAMURA Taroh
OGURA Shigeki
OHKURA Masami
OHMORI Kohichiroh
SHIGEHIRO Tsuneo
TAKEUCHI Tetsuo
TANABE Hiroshi

Chairmen of Branches

Hokkaido : NODA Shiroh
Aomori : MATSUSHIMA Seigo
Iwate : NAKAYA Mitsuru
Akita : OKADA Mitsuyuki
Yamagata : UMEZU Hiroshi
Miyagi : SHIBAZAKI Tohru
Fukushima : SAKUMA Takao
Echigo : IGARASHI Tokuo
Shinano : TANAKA Hiromi
Yamanashi : FURUYA Gakuji
Shizuoka : OHISHI Atsushi
Tohkai : ONOE Noboru
Gifu : TAKAGI Sakio
Kyoto : SAITOH Atsuo
Toyama : KIDO Shigeyoshi
Ishikawa : MASUE Shunzoh
Fukui : NAKAMURA Tadashi
Kansai : ABE Kazuyuki
San-in : KIKKAWA Yohichi
Fukuoka : YOSHIMURA Kenji
Higashi Kyushu : UMEKI Hidenori
Kumamoto : HONDA Seiya
Miyazaki : OHTANI Masaru

FOR 90TH ANNIVERSARY OF J.A.C.

Hyoriki WATANABE

INTRODUCTION

The Japanese Alpine Club was established in 1905, and therefore, celebrates its 90 th anniversary this year. Although there have been many changes in our society and economy during the past 90 years, our organization has proudly maintained the spirit with which the group was first founded ;to cherish the club itself, to continue to climb, and to seek a responsible path into the future.

1. MOUNTAINEERING-MY INTERPRETATIONS

Mountaineering is the sport of mountain climbing. Due to the developments in our modern civilization, we have a multitude of choices of social and physical activities and hobbies. Within these options, some choose to climb mountains, and they do so enthusiastically because it is not only interesting, but fun. We, Japanese, believe we can actually experience the spirit of "freedom" through mountaineering and turn a world of intangibles into a world of tangibles, thus allowing us to appreciate a realization of our human nature.

I think there are three parts to mountaineering, the act of climbing, the journey of the climb, and the destination. Reaching the summit of the mountain is not always the sole purpose of mountaineering. Most people may assume that the purpose of mountaineering is to reach the top of a mountain, but for me, the better reason would be for the journey itself. Throughout the history of mountaineering, there have been many transitions of mountain climbing styles, from walking, to hiking, to climbing.

Presently, there are a variety of reasons why people climb mountains, and likewise, the variety of methods of climbing have increased. The main reasons for the increases in the methods are due in large part to the technological development and improvement of equipment and the development of infrastructure en route to mountainous areas. In the past, when exploratory mountaineering was performed in the Himalayas, the polar method used to be the method of choice. However, after the first climbs to the Himalayas, the climbing of unexplored routes became popular, and with it, came the Alpine method. Recently, climbers are challenging not only themselves, but the limits of human ability, by climbing alone and without oxygen. In addition, like mountaineering, trekking has gained in popularity. It is a climber's choice to decide the methods. The most important determination of good mountaineering is whether one feels satisfaction after the climb. Because of the subjective nature in determining a good climb, I cannot agree to attaching a number score to evaluated the value of the climb, as is done in other sports.

2. FOOTSTEPS OF 90 YEAR OF THE Japanese Alpine Club

Ⅰ. 1905-1940

Originally, our organization was called *Nihon Hakubutsu Doushikai*, (Japanese Natural History Club) an informal club. It began with people, interested in mountaineering, who wished to make a magazine about mountaineering. At the same time, Mr. W. Weston, a member of the Alpine Club, was in Japan and at his advice, we started the Japanese Alpine Club. Until 1920, Japanese people who loved mountaineering people actively climbed Japanese peaks using the Japanese mountain climbing style. But after 1921 when Mr. Aritsune Maki, one of our club members, successfully climbed the east ridge of Eiger in the Swiss Alps, mountaineering club members at Japanese universities started to imitate a western Alps style and began to climb mountains which had similar conditions to those of the Alps in winter.

For the first 35 years, the Japanese Alpine Club was a private club but in 1941 was incorporated as the coporate Body, the Japanese Alpine Club.

Ⅱ. 1940-1995

From post World War Ⅱ, in 1945, to the present, the Japanese Alpine Club has been represented on 9 expeditions to the Himalayas. In 1956, JAC climbed Manaslu in 1959, Himaru Chuli in 1970, Everest, for the sixth time in 1976, Nanda Devi was traversed in 1980, Chomo Lungma in 1984, Kangchenjunga in 1988, Chomo Lungma/Sagarmatha, in a joint effort by a team from Japan, China and Nepal in 1992, Nanga Parbat, in a Japan/China effort and in 1995, for the first time, the east ridge of Makalu. Since the first ascent in 1950 of Annapurna, a Himalayan peak over 8,000 meters high, climber after climber has challenged this mountain. The accomplishment of Manaslu was the 7 th for JAC and the establishment of our club is the 7 th of the Alpine Club affiliates in the world. It sounds like more than a coincidence to me;lucky number 7 !

3. LOOKING FORWARD AND BEYOND

A recent phenomenon in the general field of sports is when one cannot conceive of the human body accomplishing physical feats beyond what was already been accomplished, alone athlete appears from nowhere to break all existing records. Mountaineering, too, is a sport, and has experienced this same phenomenon. Climbers, today, continue to challenge the limits of their physical ability and, with the popularity of mountaineering spreading, so will the specialization with which climbers will use to reach peaks. To play our part in society, the Japanese Alpine Club has plans to promote the concept of "healthy mountaineering", the specifics of which will be discussed and decided in the near future. JAC currently has approximately 5,500 members;however, the number of younger generation has been declining. This decline reflects the same tendency reflected in the Japanese population and JAC plans to recruit young people who can lead the club into the

21st century and beyond.

Finally, as a result of the advances made in the fields of science and technology, conditions for safe mountaineering have been greatly improved, however, it cannot be assumed that the mental conditions and preparation of climbers have always improved, compared to the past. Case in point is the increasing number of careless accidents and the pollution found in mountain ranges. These are important issues which our club will address in the future, and hopefully resolve.

A PASSAGE TO MT. MAKALU BY EAST RIDGE

Tsuneo SHIGEHIRO

Mt. Makalu (8,463 m high), the 5 th highest peak in the world, is situated in lat.27° 53'23"N. and long. 87° 05'29"E. on the Nepal-Tibet border. The British Mt. Everest Expedition Team in 1921 was the first men who saw Mt. Makalu nearby.

Shipton and Hillary were the first men to go to Barun glacier, which runs West at the foot of Mr. Makalu. Hillary, the first summiter of Mt. Everest in 1952, at that time saw Mt. Makalu 30 kilometers away in the southeast from Everest.

An American Team and New Zealand Team took on the challenge of Mt. Makalu, but no one was able to reach the summit, as the teams had to with draw under compulsion due to accidents and bad weather.

In 1995, Jan Franco, the French team captain, and 11 members made a reconnoiter climb in Autumn 1954, and achieved the first ascent of Mt. Makalu from the final camp on the Northwest face of Mt. Makalu.

This success was the fruit of France's high altitude climbing studies, which made remarkable progress from the first ascent of Mt. Annapurna. Mt. Annapurna was scaled by a French team in 1950 and was the first ascent of an 8,000 m class peak in human history.

Next, in 1970 the Tohkai Branch of the Japanese Alpine Club succeeded in climbing Mt. Makalu for only the second time by the Southeast Ridge. Since then Mt. Makalu has been climbed by over 8 variational routes.

Mt. Makalu has become popular amongst expert climbers, but there is one route no one ever goes up. The East Ridge is very long, and falls into the Karma Valley, which is derived from the Arun River, and connected to the Ganges River.

In 1921 Mallory and his team saw the East Ridge in the distance, while they were looking for an ascent route up Mt. Everest, from the Karma Valley or Kangshung Glacier. Since then the East Ridge has been hidden in a veil of thick mist for over seventy years.

After their success in climbing Mt. Everest in 1970, the Japanese Alpine Club succeeded

in traversing the Nanda Devi mountain-range, India's highest mountains.

After that the Alpine Club was lucky enough to get permission to climb the world's highest mountain, Mt. Qomolangma (the Chinese name for Mount Everest), from its Tibetan side during the pre-monsoon season in 1980. It was the first expedition after the World War Ⅱ. At that expedition Mr. Yasuo Katoh achieved the first ascent of the North Ridge (it was called "Northeast ridge" in those days) of Mt. Everest. After that Mr. Takashi Ozaki and I reached the 8,848 m peak by the North Ridge at 9 p.m. (Beijing local time) on May 10 th. The sun had already set deeply below the horizon and all the Himalayan Mountains were becoming dark. In that situation I saw Mt. Makalu shining like a piece of burning charcoal. Though I was very tired, I was deeply impressed by the huge and brilliant Makalu.

We successfully managed to traverse the Nanda Devi mountain range from the East to the West peak in 1976. Moreover we made another super high altitude climb in 1984, successively tackling Mt. Kangchenjunga from the South Peak to the Main Peak via the Center Peak, the 3 rd highest mountain in the world. This success awoke the extreme adventurous spirit in us more.

We were planning to traverse Mt. Everest crossing at the top of the mountain from Tibet to Nepal, and from Nepal to Tibet. In Dec. 1987 when I flew out by a Cessna plane from Lhasa (Gonggar) airport to reconnoiter Mt. Qomolungma, the North face of Mt. Makalu dazzled my eyes. I made up my mind to climb to the summit through this East Ridge.

In 1973 I joined the Mt. Everest Expedition which aimed to climb the mountain by the Southwest face. After that expedition, I took part in various epoch-making expeditions, so I could study the way of climbing in the Himalayas and route finding skills and so on.

And I also had the chance of making the acquintance of the climbers who had various experiences and thoughts of the mountains.

And after participating in "Japan, China, Nepal friendship mountaineering in 1988", I took part in the Namchabarwa Expedition : the world's highest unclimbed mountain, from 1990～1992. Through these experience, I set a next goal to climb Mt. Makalu by that long east ridge.

On Dec. 18 th, 1993, the first ascent of Mt. Sagarmatha's (Mt. Everest in Nepalese : 8,848 m) South-West Face was completed by the Gunma Mountaineering Association. In my opinion, "The Iron Age of the Himalayas" had arrived at its puberty by this great achievement. Now we have reached the stage where we mountainners are using a mixture of mental and physical skills and techniques as routes become more complicated. Because of this we asked the China-Tibet Mountaineering Association to permit the climing of Makalu by East Ridge.

On Oct. 6 th, 1993, we got the long-awaited for permission to climb Mt. Makalu from the Tibetan side. We started preparing for the first step to reach the summit which nobody had ever climbed. After a long preparation, the former climbing team left Japan on Feb. 15 th,

1995. The caravan route was covered with deep snow, so reconnoiters could not take any satisfactory action. After all this they had to descent to Nyalam which is located near the boarder of Nepal. On March 15 th they departed from Xegar, the town at the foot of the mountain, and built the base camp at 3,920 m on March 30 th.

The climbing was challenging as we didn't know the most difficult point of the route, because no one had ever reached the East Ridge of Mt. Makalu, and it was much more complicated than we expected. Because of an avalanche, we couldn't continue on our chosen route. Every day our members began to seriously wonder over the radio whether we should continue climbing or not, because of the danger we faced. We were worried about our saftey on the mountain. Every day we fell into a dilemma.

On April 4 th, we built Camp 2 at the point of 5,180 m, and on April 14 th, we built Camp 3 : Advanced Camp at 5,650 m. On April 28 th, after great hardship we built Camp 4. On May 13 th, we built Camp 5 at 6,820 m.

And on May 19 th, we built Camp 6 (7,350 m), and lastly on May 20 th, we built Camp 7 at 7,650 m, and there we made final preparations for the summit.

"We are eager to reach the summit""we want our team to stand on the top" Thanks to good weather condition and good fortune, eight members successfully climbed up to the peak of the 5 th highest mountain in the world on May 21 st and 22 nd.

We climbed up avoiding the top ridge. This was a matter of regret for me because we did not achieve the perfect climb, but the success of climing to the top deeply impressed the other members. We recognize that our success was a fulfillment of one of the challenges we had set ourselves in mountain climbing, and now serves us as a starting point for our continued devotion to mountaineering.

THE NORTHEAST RIDGE OF MT. EVEREST (Qomolangma) BY NIHOM UNIVERSITY MT. EVEREST EXPEDITION 1995

Introduction

There have been 8 failed attempts on the Northeast Ridge of Mt. Everest, starting with the British expedition led by Chris Bonington in 1982.

Our Nihon University Mountaineering Club and the club's alumni association determined to mount an all-out effort to climb this long route, the last remaining major unclimbed route on Mt. Everest, in 1995, on the occasion of the 70 th anniversary of the club's founding.

The plan, including preparatory climbs, was as follows.

First, in May, 1994, we sent an expedition, to climb Mt. McKinley (6,194 m) in Alaska.

Second, in the fall of that year, we sent an expedition to Cho Oyu (8,216 m).

The Northeast Ridge expedition in spring of this year was organized based on the successes of the preparatory expeditions. In addition to the climb of the Northeast Ridge, the expedition planned scientific studies around the north side of Mt. Everest. With these dual objectives in mind architecture Prof. Zenkichi Hirayama was named the expedition's General Leader. The expedition under him included 13 climbers, 6 scientists, 2 Chinese liaison officers, a interpreter and 31 Sherpas.

Activity

February 21, an advance party departed for high altitude training on the south side of Mt. Everest. March 11, the main group departed from Japan. Just before this departure all of Tibet was hit by a heavy snowstorm; the road between Kodari and Zangmu was blocked by avalanches. Nevertheless, after a delay of one week, the expedition members with 20 tons of supplies were able to travel by way of Xegur, and on March 25 established Base Camp at 5,150 m, on the Rongbuk Glacier. Our yaks had to make 4 round-trips to transport 10 tons of supplies to Advance Base Camp (Camp 3) at 6,352 m. March 28 the first load of supplies was sent up on the yaks, 10 days behind schedule. April 8, in somewhat stabilized weather we carried the second set of loads up to the site of ABC, and established the camp there on the moraine of the East Rongbuk Glacier. The next day a party under Team Leader Kiyoshi Furuno departed from ABC to start establishing the route. They traversed the headwall of the glacier just short of the Raphu La, started up a steep snow slope called Bill's Buttress, and fixed the rope to directly below the planned site of Camp 4 before returning.

April 14, Furuno, 2 other Japanese climbers and 6 Sherpas established Camp 4 on a rocky ridge at 7,100 m. April 15 Furuno, Shigeki Imoto and 4 Sherpas left Camp 4 to extend the route. That day they fixed the rope to the bottom of the 1 st Buttress at 7,560 m. April 16 they climbed a steep snow-choked gully up the 1 st Buttress and extended the route to 7,620 m. April 17 they climbed a shallow gully up the 2 nd Buttress. Near the top, where the slope became a bit less steep, they contoured around the north side on a talus slope mixed with snow, arriving the site of Camp 5 (7,850 m) at a flat snowy ridge just short of the 1 st Pinnacle.

April 25, Takeshi Oshida, Yukihide Tamura and 3 Sherpas climbed back up to the snowy ridge and established Camp 5. April 26 this same group extended the route about 1/3 of the way up the 1 st Pinnacle, and descended to Camp 4. The same day Furuno entered Camp 5 with another 3 Sherpas. April 27 the climbers started up at 9 a.m. in severe cold and strong wind, climbed straight up a shallow 60-degree gully on mixed rock and snow up the 1 st Pinnacle, then faithfully followed the crest of a snowy ridge, reaching the summit of the 1 st Pinnacle (8,170 m) at 3 p.m. April 28 they passed the 1 st Pinnacle, followed a route along the boundary between a knife-edged snow ridge and a dangerous rocky slope, and finally climbed an 80 degree hard snow wall to the summit of the 2 nd Pinnacle at 8,250 m.

April 29 a group under Imoto enterned Camp 5 to take over from Furuno's group. Imoto and 3 Sherpas passed the 1 st Pinnacle and the 2 nd Pinnacle, and headed for the 8,400 m high 3 rd Pinnacle. They passed the col between the 2 nd and 3 rd Pinnacles, rounded the rocky 3 rd Pinnacle on the north side, traversed a band directly below it, entered an inclined gully and climbed straight up it, arriving at a snow peak above the 3 rd Pinnacle. From here the ridge line became somewhat indistinct. The group decided to locate Camp 6 in a col just before Junction Peak, and descended to ABC.

This completed the extension of the route through the crux section of the Northeast Ridge.

At this point the Japanese expedition members descended to Base Camp, and the Sherpas to ABC, to rest. Supporting climbers and Sherpas then took over the job of stocking the camps with supplies and checking to make sure that they were adequately supplied.

May 6, after adequate rest Furuno and Imoto entered ABC. The original plan was to have 2 summit parties assault the summit on separate days, but with the weather stabilizing and with the forecast sent to us from Japan calling for continued good weather, we decided to combine the 2 parties into one consisting of Furuno, Imoto, Lhakpa Nuru and Dawa Theri were selected as the summit party. Another 8 Sherpas were sent to establish Camp 6, and the last camp, Camp 7, above 8,500 m.

The Summit Assault

May 7, the summit party climed up to Camp 4, and May 8 to Camp 5.

All through April, strong wind had raged around Camp 5, but on May 9 was warm with weak wind. Furuno, Imoto and 10 Sherpas hooked up to oxygen, departed at 8 a.m., advanced up a broad snow ridge, and started up the 1 st Pinnacle. They contoured around a rock face on the ABC side of the 1st Pinacle, entered a snow gully and followed it up the 1 st Pinnacle. They climbed a delicate snow ridge between the 1 st Pinnacle and the 2 nd Pinnacle, then climbed 30 m up the hard 80 degree snow wall of the 2 nd Pinnacle. This was where the 1992 Japan-Kazakhstan Joint Expedition had bivouacked, and only 5 meters from the spot where the corpses from the 1982 British expedition were found buried in snow.

The route up the 3 rd Pinnacle was complicated, involving a series of ascents and descents. The climbers descended about 50 m, contouring to avoid the col in front of the gigantic 4 th Pinnacle (Junction Peak) which loomed up ahead. At 8,350 m on the upper part of the North Ridge they cut a platform out of the snow surface and established Camp 6. It was decided, with the approval of ABC, to add Nima Dorje and Pasang Kami to the summit party.

May 10 dawned clear. From Camp 6 to the point of confluence with the North Ridge, the route was unknown territory. The 12 peoples in Camp 6 departed at 8 a.m., and fixed 3 pitches of rope, traversing along the slope, before discovering leftover rope from the North Ridge route. They gained the top of the ridge, then contoured along the northern slope

again, and established Camp 7 at 8,560 m, at the base of the 1 st Step. As soon as the tent were pitched, 6 Sherpas descended to ABC. They extended the route to the 2 nd Step (8,650 m), and found that the Chinese ladder that had supposedly disappeared was still there although it was lying on the ground. Instead of using the special aluminum collapsible ladder that they had brought, they reinstalled the Chinese ladder, then extended the route upward. Since there was room for only 4 people in Camp 7, it was decided that 2 Sherpas would have to start their summit assault from Camp 6.

May 11 again dawned clear and calm but the early clear weather was followed by light snowfall. The climbers got up at 2 a.m., and they started up at 4 a.m. by the light of headlamps. The 2 Sherpas in Camp 6 had started up at 3 : 30. They climbed the 1 st Step in the darkness and continued toward the 2 nd Step. The step has 2 parts, the lower 10 m and the upper 10 m. Having reinstalled the Chinese ladder up the upper part, they passed the 2nd Step easily.

Dawn broke just before the triangular snowfield. The snowfield started as a hard snow wall but eventually the climbers had to break trail through softer snow. They rounded some rocks on the North Face side, then, following rope left from the fall 1991 Japanese expedition that looked like it was ready to break, traversed for 2 pitches. Then they climbed 2 pitches up a rock slab gully, and, fixing rope, climbed straight up onto the summit ridge. A 15 minute climb up the snow ridge, less steep than what they had been climbing on, brought them to the summit. The summit was relatively broad, like a cornice;a surveying device with optics, that had been carried up the year before for survey work, was still standing. The time was 7 : 15 a.m.

After 1 hour on the summit, the group started down, raced back through the Pinnacles, and descended all the way to ABC that day, arriving at 6 : 15 p.m., just before the sun set.

(Translated from Japanese by Harold Solomon)

[Climbing party]

Tadao Kanzaki (55), Leader, Kaneshige Ikeda (56), Deputy leader, Kiyoshi Furuno (33), Climbing team leader, Takeshi Oshida (33), Shigeki Imoto (32), Hiroshi Ieguchi (26), Osamu Nomoto (25), Hiroyoshi Tabata (25), Hideyuki Tamura (23), Tomonori Harada (21), Yoshitaka Harada (59), Manager, Takeki Suzuki (39), Medical doctor, Yoshitaka Ohomae (28), Medical doctor.

[Editor's note]

Lhakupa Nuru's climb with our expedition was his 6 th ascent of Mt. Everest. In the fall, he jointed a post monsoon attepmt on the Northeast ridge with a South Korean expedition. On September 10, he was caught in an avalanche approaching Bill's Buttress and died. We pray for the peace of his soul.

THE ALPINE CLUP OF AICHI GAKUIN UNIV.
MT. EVEREST EXPEDITION, 1994
Michio YUASA

[1] Prologue

Spring in 1994. We send the expedition to Mt. Everest organized and conducted by Hon. Hashimoto Ryutaro (Patron) and Prof. Dr. Yuasa Michio (General Leader). The expedition had the following three objectives :

(1) To clime Mt. Everest through the South Pillar route.
- 7 Japanese climbers and 17 Nepalese climbers led by Teranishi Nobuo (Leader), Hongo Mitsuyoshi (Climbing Leader) and Lhakpa Tenzing (Sirder).

(2) To do Medical Research and Dental Clinic Service.
- 15 Japanese dentist members and 3 Nepalese members led by Prof. Dr. Ohno Norikazu and Dr. R.T. Basnyat.

(3) To do activities of Environmental protection.
- 12 Japanese members led by Dr. Nishio Nobuyoshi.

[2] Mountaineering; Diary of Events.

January

4 : Hashimoto, Honourable Leader and Yuasa, General Leader, arrive at Kathmandu for final briefing.

February

15 : Hongo, Takamura and Atsuta, three members of the Climbing Party four members of the Environmental Conservation Party arrive at Kathmandu from Nagoya via Hong Kong by air.

22 : Fujita arrives in Kathmandu.

26 : Suzuki and Hamatani arrive in Kathmandu.

March

1 : Ishikawa was the last member of the Climbing Party to arrive in Kathmandu.

11 : Horie, Miyano and Sugama, three members of the Environmental Conservation Party, who arrived earlier, reach the summit of Island Peak (Only two out of 18 parties succeeded in the spring of this year).

17 : The Climbing Party attempted to climb the summit of Island Peak for environmental conservation and acclimation purposes, but had to withdraw because of strong wind.

23 : Ishikawa, Suzuki, Takamura and Atsuta arrive at the Base Camp.

26 : Fujita arrives at the Base Camp.

28 : Hongo arrives at the Base Camp. The Base Camp (5,400 m) was set up.

30 : Hamada arrives at the Base Camp.

April

2 : Camp 1 (6,050 m) was set up.

7 : Camp 2 (6,680 m) was set up.

18 : Camp 3 (7,600 m) was set up.

23 : Camp 4 (8,100 m) was set up.

25～May

2 : Suzuki, Takamura and Atsuta take a rest at Deboche.

30 : Nishio, leader of the Environmental Conservation Party and three members of the Science Party arrive at the Base Camp.

May

2 : Yuasa, General Leader, arrives at Lobuche for final discussion on attack. Yuasa had a discussion with Teranishi, Leader, Hongo, Leader of the Climbing Party, and Sirder all night long.

3 : Teranishi, Leader, Ishikawa, a reporter for the Chunichi Shimbun, three supporting members and Hamatani arrive at the Base Camp.

4 : Suzuki and Atsuta leave the Base Camp and arrive at Camp 2.

5 : Strong wind forced Suzuki and Atsuta to stay at Camp 2. Takamura leaves the Base Camp and arrives at Camp 2.

6 : Suzuki and Atsuta arrive at Camp 3.

7 : Suzuki and Atsuta arrive at Camp 4.

8 : Suzuki Atsuta and four Sherpas reach the summit at 10 : 20. Ishikawa arrives at Camp 1. Takamura, who was in poor condition, left Camp 2.

9 : Suzuki and Atsuta arrive at Camp 2 from Camp 4. Ishikawa arrives at Camp 2. Fujita leaves the Base Camp and arrives at Camp 2.

10 : Suzuki and Atsuta arrive at the Base Camp from Camp 2. Ishikawa and Fujita arrive at Camp 3.

11 : Ishikawa and Fujita arrive at Camp 4. Fujita returns to Camp 2.

12 : Ishikawa was forced to stand still because of strong wind.

13 : Ishikawa and three Sherpas reach the summit at 8 : 30, and return to Camp 4.

14 : Ishikawa arrives at Camp 2 from Camp 4.

15 : Ishikawa arrives at the Base Camp from Camp 2.

17 : The Base Camp was removed.

30 : All members of the Expedition arrive at their home.

In conclusion, our three major objectives had been accomplished without any victims as follows :

(1) 3 Japanese climbers (including 57 years old climber) and 7 Nepalese climbers reached the Summit through the climbing route of South Pillar.

(2) Dental research and service team also obtained very good results.

(3) Mainly, 60 Oxygen cylinders and around 20,000 pieces of batteries, neglected by the Past Expeditions at over the Base Camp, had been taken out and send to Japan.

山岳地域における自然エネルギー利用発電の普及状況と今後の展望

森　武昭
鳥居　亮

1. まえがき

商用電源の届かない山小屋などでは，自然と調和した枯渇することのないクリーンエネルギー源である風力・太陽光・超ミニ水力などの自然エネルギー利用発電システムが非常に有効である。著者らは，この長所に着目し，北アルプス穂高岳山荘で，1982（昭和57）年から風力発電，1984（昭和59）年から太陽光発電の実用化試験を行ったのを皮切りに，数多くの山小屋で自然エネルギー利用発電の実用化試験や技術支援・助言などを行って多くの成果をあげてきている[1)2)3)]。また，1989（平成元）年からは，数百ワット程度の超ミニ規模の水力発電の実用化でも成果をあげ，大きな威力を発揮することを明らかにした[3)]。これらの業績が評価されて，著者らの研究グループは，日本山岳会などの推薦を得て，平成６年度（第31回）秩父宮記念学術賞を受賞する栄に浴している[4)]。

そこで，本稿では，著者らが調査した現時点における自然エネルギー利用発電の普及状況を示すとともに，前報[3)]以後の動きとして，太陽電池の増設のモデル的ケースである丹沢尊仏山荘での実例と奥秩父三条ノ湯での超ミニ水力発電の検討結果について述べる。そして，最後に自然エネルギー実用化の今後の展望を述べることにする。

2. 自然エネルギー利用発電の普及状況

著者らが，1994（平成６）年10月現在でメーカーや山小屋などに問い合わせるなどして把握した自然エネルギーを何らかの形で利用した発電システムの普及状況をまとめると次の通りである。

（１）　発電方式による内訳

風力発電：９ケ所（略称：風），太陽光発電：93ケ所（略称：光），水力発電：13ケ所（略称：水）。

（２）　地域別の内訳

北アルプス：37ケ所，八ケ岳：19ケ所，南アルプス：９ケ所，富士山・奥秩父：各８ケ所，北海道：５ケ所，尾瀬：４ケ所，秋田・谷川連峰・丹沢・箱根・上信越：各２ケ所，栗駒・鳥海・飯豊・吾妻・那須・越後三山・奥多摩・中央アルプス・白山・石鎚・阿蘇・屋久：各１ケ所，計112ケ所。

（３）　地域別の明細

北アルプス（37ケ所）

立山・剱・黒部・薬師（５ケ所）：大日小屋（光），スゴ乗越小屋（光），薬師沢小屋（光），五色ガ原（光），早月小屋（光）

白馬・後立山連峰（11ケ所）：白馬山荘（光・風），白馬尻荘（水），天狗山荘（光・風），

白馬尻小屋（水），唐松岳頂上山荘（光），風吹山荘（光），冷池山荘（光），五竜山荘（光），白馬大池山荘（光），種池山荘（光），大沢小屋（光）

表銀座・常念山脈（４ケ所）：蝶ケ岳ヒュッテ（光），燕山荘（光），大天荘（光），餓鬼岳小屋（光）

裏銀座・雲ノ平・笠ケ岳（５ケ所）：双六小屋（光），笠ケ岳山荘（光），高天原山荘（光），烏帽子小屋（光），野口五郎小屋（光）

上高地・槍・穂高（11ケ所）：穂高岳山荘（風・光），槍沢ロッジ（水），徳沢園（光），槍ケ岳山荘（光），槍平小屋（水），白出小屋（水），山のひだや（光），徳沢ロッジ（光），岳沢ヒュッテ（光），南岳小屋（光），徳本峠小屋（光）

蒲田川・平湯・乗鞍（１ケ所）：乗鞍頂上小屋（光）

八ケ岳（19ケ所）

八ケ岳（10ケ所）：赤岳鉱泉（光），本沢温泉（光），赤岳頂上小屋（光），しらびそ小屋（光），赤岳天望荘（光），硫黄岳山荘（光），山びこ荘（光），行者小屋（光），キレット小屋（光），美濃戸山荘（光）

北八ケ岳・蓼科山（９ケ所）：黒百合ヒュッテ（光），縞枯山荘（光），高見石小屋（光），麦草ヒュッテ（光），唐沢鉱泉（光），青苔荘（光），蓼科山荘（光），根石山荘（光），白駒荘（光）

南アルプス（９ケ所）：仙水小屋（水），大門沢小屋（水），北岳肩ノ小屋（光），薬師岳小屋（風），駒ケ岳七丈小屋（風），早川尾根小屋（風），南御室小屋（風），荒川小屋（光），百間洞山ノ家（光）

富士山（８ケ所）：大陽館（光），東富士山荘（光），蓬来館（光），花小屋（光），富士山頂（光），五合目（光），太子館（光），九合目小屋（光）

奥秩父（８ケ所）：三条ノ湯（水），介山荘（光），福ちゃん荘（光），武蔵高校ヒュッテ（光），甲武信小屋（光），大弛小屋（光），雁坂小屋（光），十文字小屋（光）

北海道（５ケ所）：愛山渓温泉（水），豊富温泉スキー場（風），新得山スキーロッジ（風），野中温泉別館（水），手稲パラダイスヒュッテ（光）

尾瀬（４ケ所）：東電小屋（光），温泉小屋（光），尾瀬小屋（光），竜宮小屋（光）

秋田（２ケ所）：孫六温泉（水），太平山宿泊所（光）

谷川連峰（２ケ所）：平標山ノ家（光），蓬ヒュッテ（光）

丹沢（２ケ所）：尊仏山荘（光），鍋割山荘（光）

箱根（２ケ所）：金時茶屋（光），金太郎茶屋（光）

上信越（２ケ所）：カヤの平キャンプ場（水），小谷温泉休憩舎（光）

栗駒（１ケ所）：栗駒キャンプセンター（水）

鳥海（１ケ所）：御浜小屋（光）

飯豊（１ケ所）：湯ノ平山荘（光）

吾妻（１ケ所）：吾妻小舎（光）

那須（１ケ所）：三斗小屋温泉（光）

越後三山（１ケ所）：八海山千本檜小屋（光）

奥多摩（１ケ所）：大岳山荘（光）
中央アルプス（１ケ所）：越百小屋（光）
白山（１ケ所）：室堂平（光）
石鎚（１ケ所）：笹ガ峰丸山荘（光）
阿蘇（１ケ所）：俵山峠展望休憩所（光）
屋久（１ケ所）：屋久杉ランド休憩所（光）

なお、南極あすか観測拠点（風）や兵庫県大江山（風）のように，山小屋以外でも，無線中継所，アメダス，エネルギー資料館，博物館，青少年の家などで自然エネルギーが利用されている。

これらの調査結果から次のような点が明らかとなっている。

① 前報の1989（平成元）年７月の調査結果では50数ケ所の山小屋であったので，この６年間で約倍に増加したことになる。
② 風力発電は、強風・風向対策や設計・管理の困難性などのため，運転を断念する小屋も生じており，自然エネルギー利用の中では技術的に最も難しく，普及は進まないのが現状である。
③ 太陽光発電は，技術的に容易で，適地も多く，普及が最も進んでいる。また，設備規模を任意に選定できるので，太陽電池を増設している小屋もかなり含んでいる（第３章参照）。
④ 水力発電は，適地が少ないが常時安定して発電できるというメリットは大きく，水量と落差が確保できる中腹や麓の小屋で実現できる可能性を含んでいると思われる（第４章参照）。
⑤ 地域別では，北アルプスや八ケ岳のような登山者の多い地域での実用化が進んでいる。

ところで，前報で述べたように，発生電力量で比較すると，水力発電の設備容量は太陽光発電の５～６倍，風力発電の約10倍に対応する[2]。この点を考慮して，太陽光発電に換算して１kW 以上の設備を有している山小屋などを列挙すると次の通りである。

（１） 風力

豊富温泉スキー場（4.5kW），新得山スキーロッジ（2.5kW），穂高岳山荘（2.3kW）

（２） 太陽光

白馬山荘（70kW），東電小屋（9.4kW），屋久杉ランド休憩所（5.3kW），穂高岳山荘（3.35kW），俵山峠展望休憩所（2.65kW），徳沢園（2.35kW），赤岳鉱泉（2.06kW），本沢温泉（1.91kW），大陽館（1.8kW），赤岳頂上小屋（1.65kW），槍岳山荘（1.51kW），介山荘（1.44kW），蝶ケ岳ヒュッテ（1.28kW），黒百合ヒュッテ（1.15kW），縞枯山荘（1.1kW），温泉小屋（１kW），尊仏山荘（１kW）

（３） 水力

愛山渓温泉（15kW 青少年の家とヒュッテの共用），カヤの平キャンプ場（3.3kW），孫六温泉（２kW），栗駒キャンプセンター（１kW），仙水小屋（700W），三条ノ湯（400W），

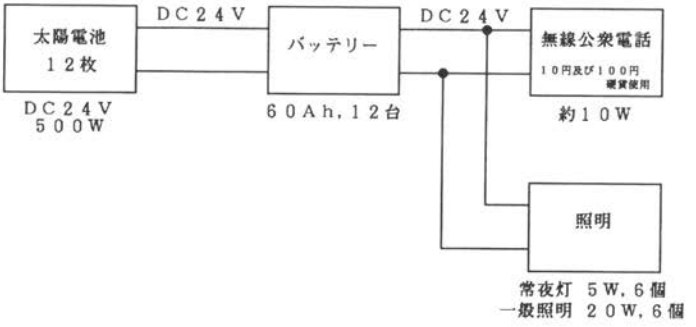


図１　太陽光発電システムの構成（増設前）

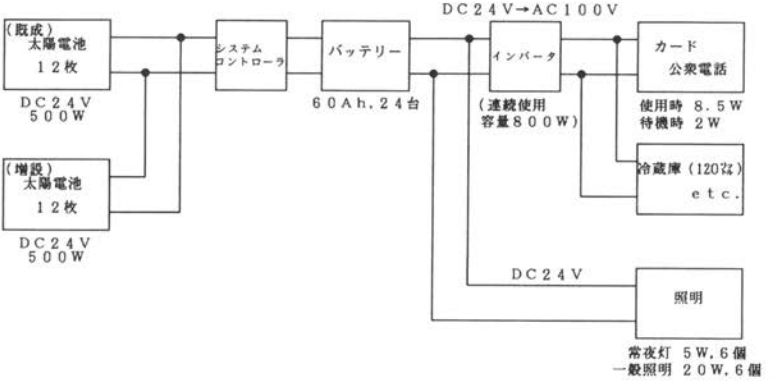


図２　太陽光発電システムの構成（増設後）

槍沢ロッジ（400W），白馬尻荘（350W），白馬尻小屋（250W），槍平小屋（200W）

このように，規模的な面から見ると，水力発電は実用化している13ケ所中10ケ所が上記の項に該当しており，威力の大きさを示している。また，太陽光発電も1989（平成元）年度の前回調査では4ケ所しか該当しておらず，その後の増設などにより，設備規模を大きくした山小屋が多いことを裏付けている。

3. 丹沢尊仏山荘における太陽電池の増設に関して

同山荘では，1986（昭和61）年4月に，主としてNTTの無線公衆電話（直流24V）の電源として太陽光発電システムを設置した。そのシステム構成は図1の通りである。負荷は直流のみ，バッテリーの過充電・過放電防止も小屋従業員が朝夕チェックする方式とし，極めて簡単なシステムでスタートした。

ところが，1994（平成6）年になって，NTTからの要請で公衆電話をカード専用機（交流100Vを使用）に切り換えるに際して，太陽光発電システムを全面的に見直し，電話の他に，冷蔵庫または冷凍庫の使用を可能にするように，太陽電池を増設することにした。そして，交流負荷を使用するためインバータを購入するとともに，バッテリーの過充電・過放電防止のためのシステムコントローラを導入することにした。システム設計の基本は次の通りである（図2参照）。

① 使用負荷

常夜灯　5W×12h×6個＝360Wh

照　明　20W×6h×6個＝720Wh

電　話　8.5W×1h＋2W×15h≒40Wh

冷蔵庫（120^{W}_{kg}）1日平均使用電力＝1200Wh

計　2320Wh≒24V×100Ah

負荷力率，インバータ効率を考慮した必要電気容量は，

100Ah÷0.8＝125Ah/DAY

② 太陽電池システム

年間平均日射量　4.49（推定）　太陽電池動作電流　2.95A　安全係数　0.85

125Ah÷(2.95×0.85×4.49)≒12

システムの電圧が24Vなので，太陽電池パネル（12V）は，24枚必要となる。既設のものが12枚あるので，増設分は12枚となる。

③ バッテリー容量

連続補償不日射日を4日とし，バッテリー効率0.8，安全係数0.9として，

125Ah/DAY×4日÷(0.8×0.9)≒700Ah

60Ahのバッテリー（12V）を24V系で用いるので，

700÷60×2≒24台

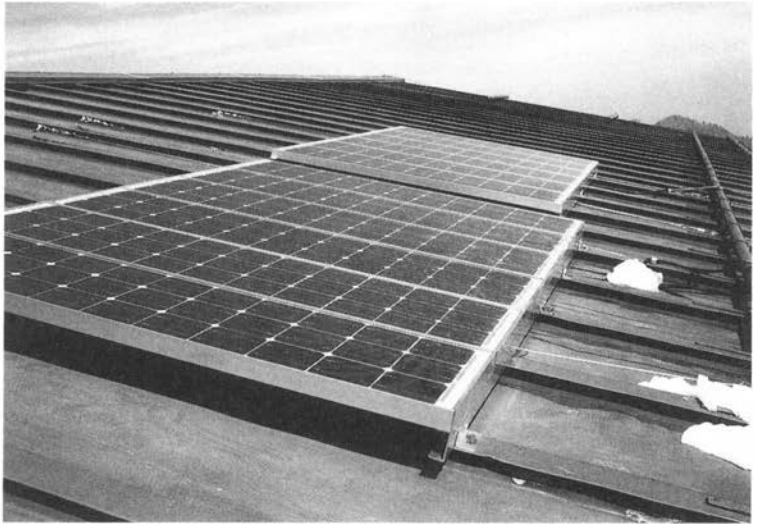
（注）連続補償不日射日を5日とすれば，比例換算により30台となる。

④ その他

バッテリーの充電状態に余裕のある場合には，短時間使用の電子レンジ（500W），

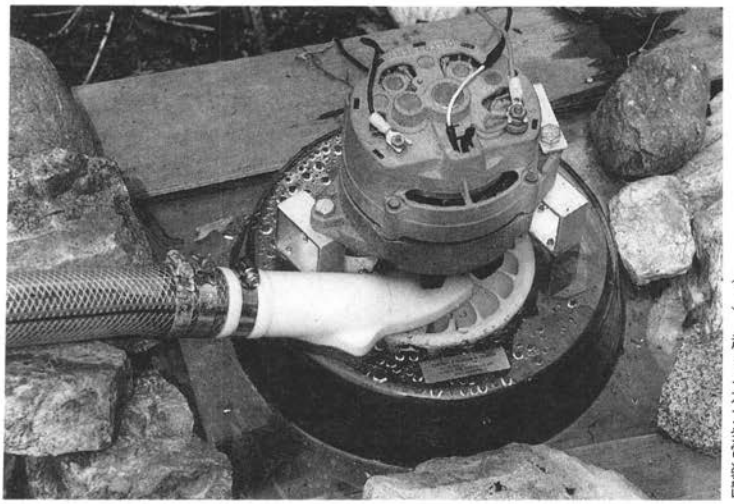


（a） 既設分



（b） 増設分

図3 太陽電池の設置

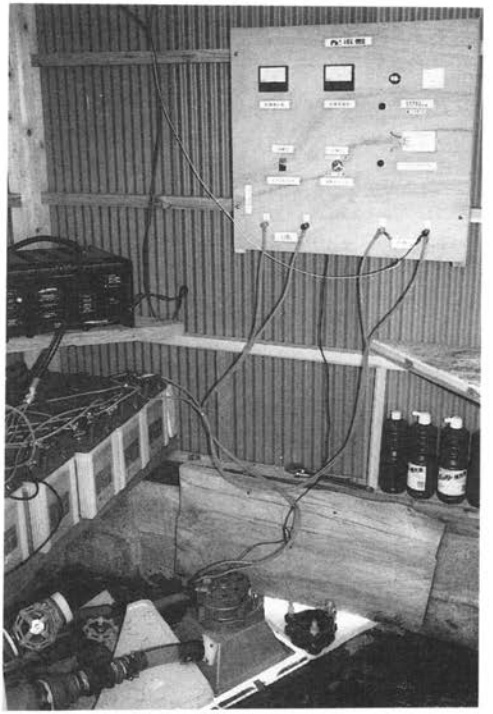


（a） 超ミニ水力発電装置

テレビ（100～120W），ビデオ（24W）などの使用が可能である。また，炊飯器やポットの保温使用は十分使用可能である。

この方針に沿って，同山荘では1995（平成7）年3月に増設工事をほぼ完了した。この増設における特徴としては次のような点をあげることができる。

（1） 既設のものは，発電効率を重視して，図3（a）のような太陽電池の南面設置角を15°，30°，45°と季節によって変えられるようにした。しかし，今回増設した太陽電池12枚は，図3（b）のように屋根の上に直接設置している。これは，発電効率を若干犠牲にしても，風圧などに対する弱点を克服するとともに，景観を重視したためである。従って，屋根の上の太陽電池を登山者は全く見ることができない。なお，これによる発電効率の低下は定量的に



（b） 水力発電システム

図4 三条ノ湯の超ミニ水力発電

は検討していないが，5～20％ 程度と予想される。

（2） 負荷は既設の設備を有効に利用することとし，直流で用いるもの（常夜灯と一般照明）とインバータを介して交流で用いるもの（公衆電話，冷蔵庫など）と両方利用できるようにしている。また，インバータは将来を見込んで大きめの容量のもの（連続使用容量：800W）を導入した。

（3） 設備の荷揚げ及び設置工事は，業者任せでは工事費がかさむため，今回は同山荘に関係したボランティアの人々によって行った。従って，全体の費用は非常に安く済ませることができた。山小屋では，このような設備を設置する場合，平地に比べて非常にコストがかかるのが常であるが，このようなボランティアを確保して費用を軽減していくことは，非常に重要なことで，他の山小屋でもこれを一つのモデルケースとしてはどうかと思っている。

以上のように，太陽電池の増設は，技術的には容易であり，既設の設備と将来計画，経済性などを十分に考慮にいれて，それぞれの山小屋にあった合理的なシステムを構築することと，工事費をいかに軽減するかが重要な点である。

4. 奥秩父三条ノ湯における超ミニ水力発電に関して

著者らは，1990（平成2）年から超ミニ水力発電の実用化研究に本格的に取り組んだ。この研究では，数百ワット程度の発電を可能にするカナダの Energy Systems & Design 社製の超ミニ水力発電装置（図4参照）が大きな威力を発揮した。ここでは，著者らの勤務する大学内で行った実験結果と奥秩父三条ノ湯で行った実用化試験の結果から明らかになった点について述べる。

実験のブロック図を図5に示す。大学内における実験（落差:約20m）では，流量Q，

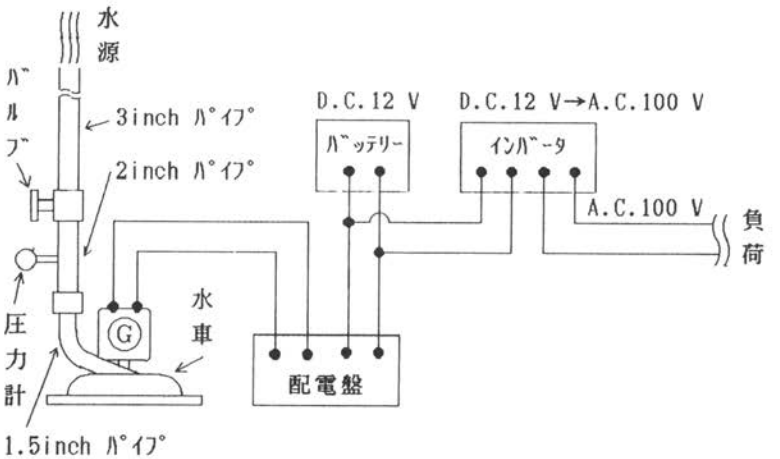
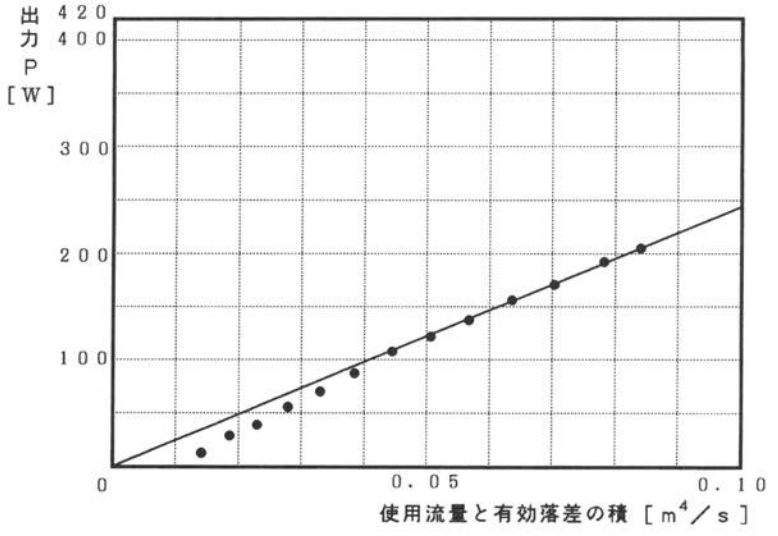
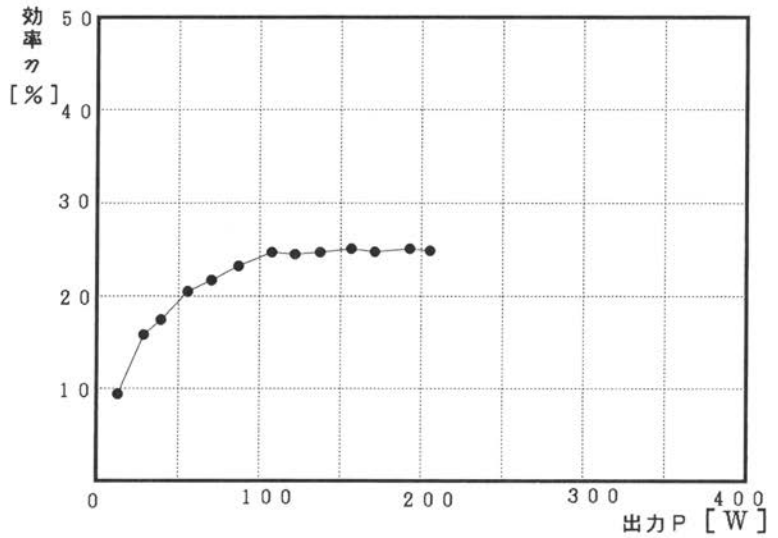


図5 水力発電システムの概略図



（a） 出力特性



（b） 効率

図6 超ミニ水力発電装置の実験結果

有効落差H（水圧から換算），電流I，電圧V，回転数Nを測定した。そして，QHと発電量IVの関係及び理論的に求めた発電量から算出した効率を図6に示す。実測による最大出力は199Wで，そのときの有効落差は17.2m，流量4.83ﾘｯﾄﾙ／秒，回転数1900rpmであった。この結果より，約200Wの発電量が得られ，その時の効率は24.5％であることが明らかとなった。なお，発電量は発電装置の水の取り入れ口に取り付けたノズルの影響を受けるが，図6は最も大きい出力が得られた3/4インチについての結果である。

次に，現地三条ノ湯では取水口から発電機までの約170mを3インチパイプで導水している。その落差は約24mである。そこで，最大出力を求めたところ210Wであった（Q≒5ﾘｯﾄﾙ／秒，H≒18m）。従って，大学内で行った結果よりQ，Hともに若干大きいため，出力も約5％大きい結果となっている。

ところで，著者らは，この発電装置と同じ会社製の新型製品を2年前に購入して同様の実験を行ったところ，出力408W（Q≒6.45ﾘｯﾄﾙ／秒，H≒19.5m），効率45％という結果を得ることができた。しかし，これらのカナダ製水車の羽根はプラスチックでできており，機械的強度が必ずしも十分でないため，高出力の長時間使用では破損するに至っており，この種の発電装置の常時発電量は，200～250W程度が限界のようである。この点は今後さらに検討し，必要な改善策を講じることにより，400W程度の発電に耐えられるようにしたいと考えている。いずれにせよ，三条ノ湯では，前述した200Wの発電を常時得ることによって，次のような負荷（定格容量の計；2783W）をまかなっている。

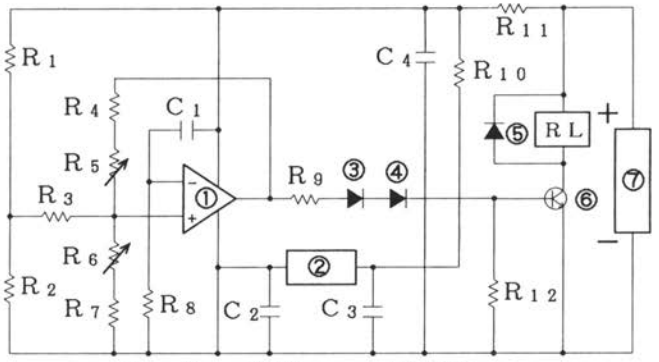
照明；204W　洗濯機；350W　冷蔵庫；80W　テレビ；53W

炊飯器；910W　電気ポット；700W　ビデオデッキ；35W

CDラジカセ；15W　ボイラー；96W　ポンプ；340W

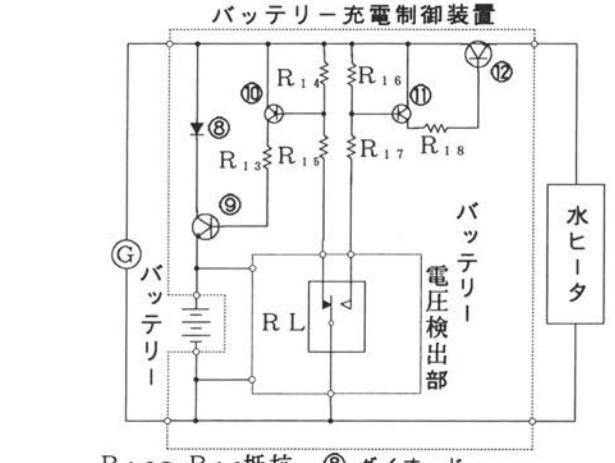
ただし，インバータの容量は1200Wであり，例えば炊飯器は照明負荷を用いない昼間に使用するなどの時間による負荷調整を行うことによって設備の有効利用に努めている。

今までの実績で，常時200W程度の発電量では，発電機のブラッシ部分のカーボンを取り替えた以外はトラブルはなく，今日に至っており，同小屋のほとんど全部の電気をまかなっている。ところで，バッテリーの過充電・過放電防止として，太陽光発電では図2に示したシステムコントローラを用いている。これは，バッテリーが過充電となったときには，太陽電池を切り離して開放状態とし，充電を停止する。また，バッテリーがある電圧以下（過放電）になったら太陽電池を元のように接続して復帰するようなシステムになっている。ところが，水力発電では，バッテリーが過充電になっても開放にするわけにはいかない。そこで，著者らは，図7のような装置を試作し，過充電になった場合，自動的に発電機の負荷を水ヒータに切り替え，発電機の負荷が一定になるようにした。この装置を用いた実測結果の一例を図8に示す。この例ではバッテリーは設定した13.8～12.5Vの範囲で充放電を繰り返すようになっている。なお，過充電設定電圧は14.2±0.8V，過放電設定電圧は12.3±0.8Vで調整できるようになっている。



R1～R12 抵抗　　② IC
C1～C4コンデンサ　　③～⑤ ダイオード
RLリレー　　⑥ トランジスタ
① オペアンプ　　⑦ バッテリー

（a） 電圧検出部



R13～R18抵抗　　⑧ ダイオード
G 水力発電装置　　⑨⑫ パワートランジスタ
RL リレー　　⑩⑪ トランジスタ

（b） 動作部

図7　水力発電用バッテリー保護装置

5. 自然エネルギー利用発電の今後の展望

山小屋のような山岳地域にある施設では，自然エネルギーを利用した発電システムの実用化の意義は大きい。そこで，本章では現状の問題点と今後の展望について述べる。

（1） 風力発電は，風の制御技術（強風対策を含む）など技術的にかなり難しい面があり，山小屋で実用化するには限界があり，むしろ南極や島，半島などで本格的規模で電力会社などが技術力を駆使して実用化しているのが現状である。

（2） 太陽光発電は，技術的な課題はほとんどクリアされている。最近では，一般家庭でも施設の費用の50％ を国が補助し，余剰電力を電力会社に売電する制度もスタートしている（バッテリーの使用は不可）。今後このような制度により，平地でも幅広く普及すれば，さらにコストダウンが進むことを期待できる。従って，稜線の山小屋などでは，ますます有効な発電手段となるであろう。なお，稜線の山小屋では，強風のために太陽電池が飛ばされる例が一件だけであるが報告されている。設置にあたっては，第3章でも述べたように，発電効率を少々犠牲にしても十分な強風対策と周囲環境との調和に配慮することが重要である。

（3） 小規模の水力発電は，山腹の水量と落差が確保できる山小屋では大きな威力を発揮している。水力発電は常時安定した電力が得られるので，200W 程度の発電でも定員百名程度の規模の山小屋では必要とする全電力をまかなうことができる。従って，適

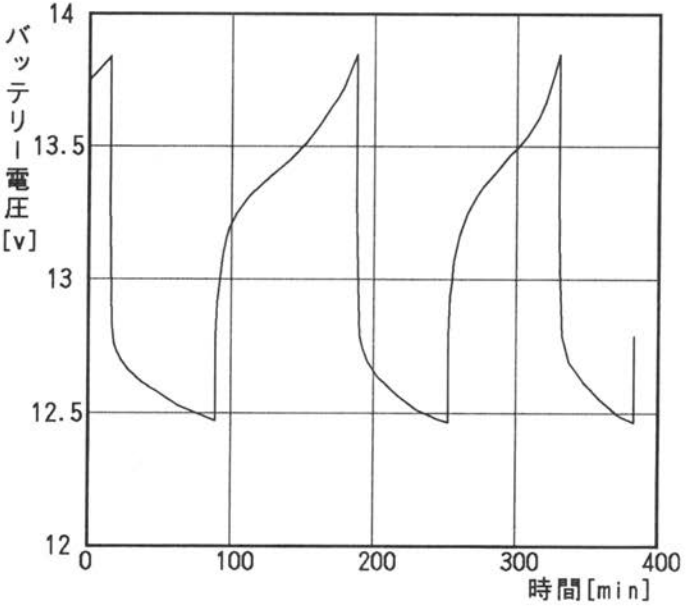


図8 水力発電用バッテリー保護装置の特性

地さえ得られれば，今後さらに普及する可能性を含んでいる。この小規模水力発電は，例えば上高地のような自然の豊かな山岳地域と商用配電が届いている一般施設の接点となる地域で適地が多いものと思われる。なお，日本山岳会の上高地山岳研究所でも実用化研究を進める話が現在検討されている[5]。

著者らは，自然エネルギー利用発電システムの実用化を商用電源の届かない山岳地域で展開してきたが，太陽光発電に期待されているように，これからのエネルギー政策全体を検討する上でも非常に大きな意義をもっていると思われる。特に，沢筋の水を利用した数kW程度の発電では，利用した水をそのまま元の沢へ戻すために，自然環境への影響も極めて少なく，今後大いに積極的に利用していくことが肝要であると思われる。

6. まとめ

本稿では次のような点を明らかにした。

① 自然エネルギーを利用した発電システムは，わが国では1994（平成6）年10月現在で112の山小屋で実用化されおり，1989（平成元）年度の調査に比べて倍増している。

② 設備規模でも，太陽電池に換算して1kW以上の施設が非常に多くなっている。特に，太陽電池を増設する山小屋が目立っている。

③ 太陽光発電は，既設の設備と将来計画，経済性などを考慮して，それぞれの山小屋にあった合理的なシステムを構築することと，工事費をいかに軽減するかが重要な点である。

④ 水力発電は，数百ワット程度のものでも，常時安定した発電を可能とするため大きな威力を発揮する。また，システムの信頼度を向上するためのバッテリー保護装置の開発も行った。

⑤ 自然エネルギー利用は山岳地域だけでなく，エネルギー政策全般を検討する上でも非常に大きな意義を有しているといえる。

終わりに，本研究を進めるにあたってご協力いただきました丹沢尊仏山荘，奥秩父三条ノ湯をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。

参考文献

1) 鳥居・森他：「山岳地域における自然エネルギー利用（風力・太陽光ハイブリッド）」日本太陽エネルギー学会誌 Vol.11，No.4，p.35-41（昭60-7）

2) 鳥居・森他：「山岳地帯における自然エネルギー利用の実用化に向けて」山岳（JAC年報）Vol.80，p.31-48（昭60-12）

3) 鳥居・森・木村：「山小屋における自然エネルギー利用の現状と今後の課題」山岳（JAC年報）Vol.84，p.46-56（平元-12）

4) 鳥居・森：「秩父宮記念学術賞を受賞して」山（JAC会報）No.600，p.9（平7-5）

5) 坂本正智：「山研改築委員会報告（山研と自然エネルギー）」山（JAC会報）No.562，p.3（平4-3）

山岳図書目録

「山岳図書目録」について

日本山岳会図書委員会

「山岳第八十九年」に掲載した「山岳図書目録」は，幸い会員諸氏から好評を得ることができました。「便利だ」「こんなに山の本が出ているとは知らなかった」「よく調べがつきましたね」などと，支持の声をありがたく耳にすることができました。

本年も継続掲載しますので，ご利用下さい。山の本以外に自然環境のものも拾ってある場合がありますし，昨年分でもれていたものも収録してあります。また締切時間の都合で，一部に収録できなかったものがありますが，お気づきの点はお知らせ下さるよう，よろしくお願い致します。

- 記載は，日本で出版された日本語（または外国語）の図書と，外国で出版された英語，ドイツ語，フランス語の図書です。
- 日本語のものは，発行年月日が1994年のもの，英語ほかの外国語のものは1991年から1994年のものです。
- 記載は整理番号，書名，著者名，発行所，定価，判型，発行地の順です。
- 定価，判型は，日本語図書のみ記載しました。判型が数字で表示されているものの単位はmmです。
- 記載の配列は，和書が書名の五十音順，洋書は書名のアルファベット順です。
- 整理番号のうち，Nは日本語，Eは英語，Dはドイツ語，Fはフランス語です。N94とは，日本語図書，1994年発行の意味です。
- このリスト作成は，図書委員会の有志が担当しました。

山岳図書目録——日本語　1994年

No.	書　名	著　者	発行所	定価	判型
N94-001	アークティク・オデッセイ—遙かなる極北の記憶	星野道夫	新潮社	¥4800	B4変
N94-002	アウトドア観察図鑑　第1巻	フランソワ・クロザ／絵 フロランス・ヴェリラック／文	北隆館	¥2300	330
N94-003	アウトドア救急ハンドブック	小濱啓次／監	小学館	¥1000	B6
N94-004	アウトドア基本図鑑	甲斐崎圭／監	家の光協会	¥1800	A5
N94-005	アウトドアクッキング—子どもと作る	熊沢正子	大月書店	¥1500	AB変

N94-006	アウトドアズ・マーケティングの歩きかた	中村　達	エスクァイア・マガジン・ジャパン	¥2200	A5
N94-007	秋田県田沢湖町駒ヶ岳山麓イヌワシ調査報告書	イヌワシ研究会	日本自然保護協会	¥7000	A4
N94-008	あきた探鳥ガイド	㈶日本野鳥の会秋田県支部／編	無明舎	¥1600	四六判
N94-009	秋田マタギ聞書	武藤鉄城	慶友社	¥3914	A5
N94-010	アジアハイウエー2—褐色のインド亜大陸　バングラデシュ・インド	NHKアジアハイウエー・プロジェクト	日本放送出版協会	¥1800	B6
N94-011	アジアハイウエー3—コーランが聞こえる道	NHKアジアハイウエー・プロジェクト	日本放送出版協会	¥1800	B6
N94-012	芦安村誌	芦安村／編	芦安村		B5
N94-013	安曇野・花と清流の旅	山本建三	講談社	¥1500	A5
N94-014	アフリカ旅物語　北東部編	田中真知	凱風社	¥1900	B6
N94-015	AMAZŌNIA　Ⅱ地球を愛する55人	ピラーラ基金／編	フェア・ウインド出版館ブック・クラブ／発売	¥3800	A4
N94-016	アムンセン　南極点	ローアル・アムンセン／著　中田　修　訳	オセアニア出版	¥6000	A5
N94-017	歩く地図S13　木曽・高山・上高地	あるっく社	山と溪谷社／発売	¥ 980	B6
N94-018	アンセル・アダムズ傑作写真選	アンセル・アダムズ	岩崎美術社	¥1400	120×170
N94-019	イカロスの飛行—わが心の祖国・ギリシア	ケヴィン・アンドリュース／著　松永太郎／訳	図書出版社	¥2575	四六判
N94-020	泉靖一伝—アンデスから済州島へ	藤本英夫	平凡社	¥2700	四六判
N94-021	伊豆半島	登山地図編集部	日地出版	¥ 980	四六判
N94-022	いちにの山歩—山を楽しみ　自然に学ぶ	小野木三郎	地人書館	¥1648	B6
N94-023	いつかブナの森へ	倉本冨士男／著・絵	講談社	¥1300	B5変
N94-024	いで湯の山旅—日本アルプス編	桑子　登	山と溪谷社	¥1800	A5
N94-025	愛しき山河よ	福島泰樹／短歌　望月久／写真	山と溪谷社	¥3000	B5
N94-026	伊那谷のこころふるさとの四季	小松谷雄	ほおずき書籍	¥1800	A5
N94-027	伊那谷の動物たち	松山義雄	同時代社	¥1800	B6
N94-028	イヌワシ	須藤一成	平凡社	¥4500	A5変横 ＊写真集
N94-029	命の山　高尾山	酒井喜久子	朝日ソノラマ	¥1800	A5
N94-030	いまだ下山せず！—ドキュメント山岳遭難捜索	泉　康子	宝島社	¥1700	四六判
N94-031	今西壽雄と語る—対談集	日本山岳会関西支部／編	日本山岳会関西支部		B5

N94-032	今西錦司全集5　人間以前の社会・人間社会の形成	今西錦司	講談社	¥4900	四六判 ＊増補版
N94-033	今西錦司全集6　御崎馬の社会調査・村と人	今西錦司	講談社	¥4900	四六判 ＊増補版
N94-034	今西錦司全集7　ニホンザルの自然社会・ゴリラ	今西錦司	講談社	¥4900	四六判 ＊増補版
N94-035	今西錦司全集8　日本山岳研究	今西錦司	講談社	¥4900	四六判 ＊増補版
N94-036	今西錦司全集9　私の自然観・自然と山と・そこに山がある	今西錦司	講談社	¥4900	四六判 ＊増補版
N94-037	今西錦司全集　別巻	今西錦司・斎藤清明／著	講談社	¥4600	四六判 ＊増補版
N94-038	イリオモテヤマネコ—亜熱帯の島に野生猫を追う	横塚眞己人	ブロンズ新社	¥3200	182×227 ＊写真集
N94-039	岩魚の谷・山女魚の渓—画文集	笠木　実	白日社	¥3090	A5
N94-040	ウェストンの信濃路探訪—山々への賛歌	田畑真一	センチュリー	¥1500	四六判
N94-041	植村直己の冒険学校	植村直己	文藝春秋	¥ 680	文庫判
N94-042	ウォーク中山道東海道—東海版	与呉日出夫	七賢出版㈱中部事業部	¥1400	四六判
N94-043	美しき甲斐の山　名峰50座の四季	上野　巌	山梨日日新聞出版局	¥4200	AB変
N94-044	海と山の展望—随筆集	山本鵬人	海風社	¥1200	四六判
N94-045	海山のあいだ	池内　紀	マガジンハウス	¥1200	四六判
N94-046	裏磐梯自然ハンドブック—ブナ帯に神秘の湖沼を訪ねる	富田国男	自由国民社	¥1300	新書判
N94-047	運命の海に出会って	レイチェル・カーソン，マーティー・ジェザー／著　山口和代／訳	ほるぷ出版	¥1300	四六判
N94-048	永遠のスイス登山鉄道	池田光雅／文・写真	東京書籍	¥1700	A5
N94-049	永別　皇冠峰—1992年クラウン峰挑戦の記録	日本ヒマラヤ協会／著	日本ヒマラヤ協会	¥2800	B5
N94-050	エヴェレスト	ジョージ・リー・マロリー／著　田中純夫／訳	日本山岳会越後支部	¥1500	B6
N94-051	エヴェレストの麓での医療活動—1993-1994の記録	日本登山医学研究会／編	日本登山医学研究会		B5
N94-052	ACC 紫蘭会　モロッコ・アトラス山行	紫蘭会／編・著	紫蘭会		270
N94-053	エゾモモンガ—アッカムイの森に生きる	目黒誠一	講談社	¥1500	B6変
N94-054	エゾリス　オトフケの森の物語	矢部志朗	講談社	¥1500	180×200 ＊写真集
N94-055	越中紀行文集—越中資料集成10	橋本竜也	桂書房	¥1751	A5

N94-056	絵でみる富士山大地図	同朋舎出版／編	同朋舎出版	¥2980	360×280
N94-057	オアシスにスティービー・ワンダーが聞こえる	藤井　浩	長征社	¥1545	四六判
N94-058	追いかけて，イリオモテヤマネコ	横塚眞己人／文・写真	宝島社	¥1500	B6
N94-059	近江富士百景	八田正文	サンライズ印刷出版部	¥2900	A4 ＊写真集
N94-060	大台ケ原　原生林	稲川米雄	東方出版	¥3090	B4変 ＊写真集
N94-061	大谷探検隊と本多恵隆	本多隆成	平凡社	¥2400	四六判
N94-062	大町山岳博物館総合案内	千里文化財団出版部／編	大町山岳博物館	¥ 700	B5
N94-063	大峰・台高—特選コース	山岳図書編集部	山と渓谷社	¥1100	四六判 ＊改訂版
N94-064	大峯の山と谷—奥吉野ガイドエッセイ	小島誠孝	山と渓谷社	¥1400	A5 ＊改訂新版
N94-065	オーデュボンの自然誌	スコットR．サンダース／編　西郷容子／訳	宝島社	¥2200	四六判
N94-066	奥多摩	渡辺千昭	東京新聞出版局	¥ 950	B6
N94-067	奥多摩丘陵・自然ふれあい散歩道	多摩市文化振興財団／編・著	多摩市文化振興財団	¥1000	A5
N94-068	奥多摩讃花	安原修次	ほおずき書籍	¥2800	A5
N94-069	奥多摩大菩薩	寺田政晴	日地出版	¥1100	四六判
N94-070	奥多摩見て歩き—奥多摩の自然を楽しむ山歩き11	日本野鳥の会奥多摩支部／編	幹書房	¥ 900	A5
N94-071	奥秩父・西端・わが町の山々	矢崎茂男	近代文芸社	¥1500	四六判
N94-072	奥飛騨山河	山本建三	日本カメラ社	¥3600	B4 ＊写真集
N94-073	奥武蔵秩父	登山図編集部／編	日地出版	¥1100	四六判
N94-074	教えて登って三十余年	柴田　満	光陽出版	¥1800	四六判
N94-075	尾瀬	日地出版／編	日地出版	¥1100	四六判
N94-076	尾瀬	JTB 出版局他／編	JTB日本交通公社出版事業局	¥ 930	四六判
N94-077	尾瀬（改訂版）	山岳図書編集部／編	山と渓谷社	¥1100	四六判
N94-078	尾瀬四季	新井幸人	時事通信社	¥2200	菊判変 ＊写真集
N94-079	尾瀬自然ハンドブック—保護と適切な利用のために	河内輝明／編	自由国民社	¥1300	B6 ＊改訂新版
N94-080	尾瀬の自然	近藤篤弘・近藤陽子／著	成美堂出版	¥1300	A6
N94-081	尾瀬の素顔	新井幸人	マガジンハウス	¥1200	四六変
N94-082	小田原が生んだ辻村伊助と辻村農園	松浦正郎	箱根博物会	¥1500	A5
N94-083	大人の男のこだわり野遊び術	本山賢司・細田　充・真木　隆／著	山と渓谷社	¥1800	A5
N94-084	温泉と山遊び—沿線別	浅野孝一	学習研究社	¥ 980	B6
N94-085	温泉のはなし	白水晴雄	技法堂出版	¥1854	四六判
N94-086	御嶽山	上野ミチオ	近代文芸社	¥1500	四六判

N94-087	女ひとりの快適山歩き	石井昭子	山と溪谷社	￥ 980	新書判
N94-088	開村120年のあゆみ—長野県安曇村	安曇村／編	安曇村		300
N94-089	かがやく峰 Kongur—日本コングール登山隊報告書	京都カラコルムクラブ／著	京都カラコルムクラブ	¥3500	A4
N94-090	家族で歩く熊本のハイキングコース	熊本日日新聞社情報文化センター／編・制作	熊本日日新聞社	¥1700	A5
N94-091	神奈川ゆったり20選	グリーンタフ／編	七賢出版	¥1400	B6
N94-092	カナディアンロッキーハイキング案内	益田幸郎・益田晴子	山と溪谷社	¥3900	B5
N94-093	上高地	富山愛子	東方出版(大阪)	¥3800	B4変 ＊写真集
N94-094	上高地・安曇野・黒部	ブルーガイドパック編集部／編	実業之日本社	￥ 900	四六判
N94-095	上高地自然ハンドブック—壮大な山岳美を楽しむために	百瀬斐敏／編	自由国民社	¥1300	B6 ＊改訂新版
N94-096	上高地・乗鞍	小林俊樹	日地出版	¥1100	四六判
N94-097	上高地・松本・黒部・白馬山麓	地図の本編集部／編	日地出版	￥ 810	B6
N94-098	神の乙女　クマリ	ビジャイ・マッラ／著 寺田鎮子／訳	新宿書房	¥2600	四六判
N94-099	カメラスケッチ　八幡平散歩	坂東右近	熊谷印刷出版部	¥2000	190×250 ＊写真集
N94-100	ガラパゴス自然紀行—三〇〇万年の進化を語る生きものたち	福岡自然研究会	葦書房	¥3200	200×200
N94-101	落葉松	丹地保堯／写真　串田孫一／詩・文	アトリエ風信	¥2060	B6変
N94-102	川の思想—郡上八幡清流カレッジ講演集	山と溪谷社	山と溪谷社	¥1500	B6
N94-103	環境を読む	五百沢智也	岩波書店	¥1500	B6
N94-104	韓国の自然と山—その魅力を語る	石田稔郎	韓国登山同好会	¥2500	B6
N94-105	関東周辺の沢'94	白山書房／編	白山書房	¥1950	四六判
N94-106	カントリーサイドを保全する	ブリン・グリーン／著 小倉武一／訳	食料・農業政策研究センター	¥5700	A5
N94-107	樹—出会いの一瞬	津田洋甫	光村推古書院	¥1000	170×190 ＊写真集
N94-108	樹々　三頭山	牛尾征治	のんぶる舎	¥2800	A4変 ＊写真集
N94-109	傷だらけの百名山	加藤久晴	リベルタ出版	¥1900	B6
N94-110	木曽・伊那	日本交通公社出版事業局／編	日本交通公社出版事業局	￥ 930	四六判
N94-111	北アルプス	山岳図書編集部／編	山と溪谷社	¥1200	四六判
N94-112	北アルプスの溪を釣る—大イワナの躍る魚止滝へ	植野　稔	山と溪谷社	¥2500	B5
N94-113	北鎌輪舞曲	金田博秋	奥三河書房	¥2300	A5

N94-114	北の分水嶺を歩く—襟裳岬から宗谷岬へ北海道主脈縦断	工藤英一	山と溪谷社	¥1700	B6
N94-115	北の山旅，釣り歩き	根深　誠	無明舎出版	¥1800	B6
N94-116	木と森の山旅—森林遊学のすすめ	西口親雄	八坂書房	¥2600	B6
N94-117	きのこ	本郷次雄／監・解説　伊沢正名／写真	山と溪谷社	¥2400	四六判
N94-118	九州山地に生きる	朝日新聞西部本社／編	葦書房	¥1500	四六判
N94-119	九州の野の花　秋—色で見分ける	佐藤武之／編・著	西日本新聞社	¥3000	A5
N94-120	九州フィールドノート—九州の自然と遊ぶアウトドアブック	九州フィールドノート編集部／編	鉱脈社	¥2000	B5
N94-121	九州脊梁の山山	吉川　満	葦書房	¥2300	A5
N94-122	休息の山	沢野ひとし	山と溪谷社	¥2000	A5
N94-123	驚異の地底王国シャンバラ	日本探検協会／編・著	広済堂出版	¥ 850	四六判
N94-124	巨樹を見に行く	梅原猛・C.W.ニコル・西岡常一・宮崎駿・岩波洋造／著　吉田繁／写真	講談社	¥1500	A5
N94-125	煌めきの氷壁—大山天狗沢事故報告・追悼集	福山山岳会／編	福山山岳会	非売品	A4
N94-126	京都大学山岳部報告（No. 17）— 1983-85 年ブータン・ヒマラヤ登山特集	伊藤宏範他／編	京都大学山岳部	¥3000	B5
N94-127	霧の南アルプス	窪田　精	新日本出版社	¥2900	四六判
N94-128	木を見て森を知る	岡田喜秋	講談社	¥1400	B6
N94-129	近畿の山—日帰り沢登り	中庄谷直・吉岡　章／著	ナカニシヤ出版	¥2000	四六判
N94-130	銀嶺	柳沢和子	短歌研究社	¥2500	A5 ＊歌集
N94-131	空撮登山ガイド（新版）No.4：尾瀬・日光・那須	花畑日尚・瀬尾　央	山と溪谷社	¥1700	B5
N94-132	空撮登山ガイド（新版）No.5：東京周辺の山々	渡辺千昭・瀬尾　央	山と溪谷社	¥1700	B5
N94-133	空撮登山ガイド（新版）No.9：槍・穂高・常念岳	内田　修	山と溪谷社	¥1700	B5
N94-134	空撮登山ガイド（新版）No.10：中央アルプス・八ケ岳	津田祐次・内田　修	山と溪谷社	¥1700	B5
N94-135	空撮登山ガイド（新版）No.11：南アルプス	今野　岳・内田　修・瀬尾　央	山と溪谷社	¥1700	B5
N94-136	空撮ヒマラヤ—壮大なる世界の屋根を空から見る	大森弘一郎	山と溪谷社	¥4200	240×280 ＊写真集
N94-137	熊野古道 3　中辺路と大辺路	上方史蹟散策の会／編	向陽書房	¥1950	210×180
N94-138	熊本の野鳥探訪	大田真也	海鳥社	¥1700	四六判

N94-139	くまもと野の花	「くまもと野の花」編集委員会／編・著	熊本日日新聞社／発行　同情報文化センター／発売	¥3000	A5
N94-140	雲取山のてっぺんから—信ちゃんの山荘日記	新井信太郎	けやき出版	¥1800	A5
N94-141	雲の平と裏銀座—俳句・詩・写真でつづる北アルプス	前川整洋	日本図書刊行会　近代文芸社／発売	¥1800	四六判
N94-142	栗駒山—花と樹木の詩	佐藤　貢	宝文堂	¥1300	180×190　＊写真集
N94-143	グリズリー—アラスカの王者ヒグマの生態	久田雅夫	毎日新聞社	¥3400	220×310　＊写真集
N94-144	車椅子はパスポート—素晴らしい地球旅行の挑戦者たち	アリソン・ウォルシュ／編　おそどまさこ／日本語版責任編集　森実真弓／訳	山と溪谷社	¥2900	A5
N94-145	黒滝山—関東の仙境	あさを社／編	あさを社	¥1000	四六判
N94-146	黒部の山賊—アルプスの怪（新版）	伊藤正一	実業之日本社	¥1200	B6
N94-147	渓谷を訪ねて	塚本義次	七賢出版	¥1500	四六判
N94-148	京阪神さわやかハイキング	大阪府社会体育研究所・山の会／編	七賢出版	¥1400	四六判
N94-149	京阪神ベストハイク—渓谷を訪ねて	塚本義次／編	七賢出版	¥1400	四六判
N94-150	京阪神ワンデイ・ハイク—特選一日コース	山岳図書編集部／編	山と溪谷社	¥1600	四六判
N94-151	ケイビング—入門とガイド	近藤純夫／編	山と溪谷社	¥2300	A5
N94-152	渓峰閑話	西尾寿一	ナカニシヤ出版	¥1800	B5
N94-153	現代チベットの歩み	A.T.グルンフェルド／著　八巻佳子／訳	東方書店	¥3800	A5
N94-154	厳冬のサガルマータ—究極の挑戦　南西壁	スポーツニッポン新聞社／編	毎日新聞社	¥3000	230×303
N94-155	原風景文集　山の篇	立松和平	随想舎	¥1854	四六判
N94-156	源流の呼ぶ声	西野喜与衛	白山書房	¥1800	四六判
N94-157	公園自然観察ガイド—東京編	自遊社／著	山と溪谷社	¥1400	A5
N94-158	高山植物	北隆館／編	北隆館	¥1600	四六判
N94-159	高知の登山＆ハイキング	山崎清憲	高知新聞社	¥1900	A5
N94-160	9つの森の教え	峠　隆一	築地書館	¥1030	四六判
N94-161	心に野性を	リック・バス／著　片岡真由美／訳	白水社	¥1800	B6変
N94-162	コーボルト　コクセル峰初登頂特集	山形大学コーボルト会／著	山形大学コーボルト会		A4
N94-163	こんなとき　こんな結び方—続アウトドアロープワーク	羽根田治／文　久保田鉄／絵	山と溪谷社	¥ 980	新書判

N94-164	最新多摩あるくマップ—自然と文化と歴史を楽しむ57コース	けやき出版／編	けやき出版	¥1300	A5
N94-165	埼玉うきうき20選	埼玉県生態系保護協会／編・著	七賢出版	¥1400	B6
N94-166	埼玉の山を歩く	石井光造	さきたま出版会	¥1500	B6
N94-167	相模の低山	守屋龍男	けやき出版	¥1100	B6
N94-168	札幌・小樽ゆったりハイキング	菅原靖彦	北海道新聞社	¥1800	四六判
N94-169	サトパント峰登頂—富山山想会創立40周年記念インドヒマラヤ登山報告書	木戸繁良／編	富山山想会	非売品	B5
N94-170	里山の博物誌—虫の目，人の目，タヌキの目	盛口　満	木魂社	¥1456	四六判
N94-171	里山トラスト	山田国広／編・著	北斗出版	¥2500	A5
N94-172	佐貫亦男のアルプへ五十年—郵便バスを乗り継いで	佐貫亦男	山と溪谷社	¥1700	四六判
N94-173	佐貫亦男の旅の回想—アルプスとドイツを旅して	佐貫亦男	グリーンアロー出版社	¥1200	四六判
N94-174	砂漠の文化—中央アジアと東西交渉	松田壽男	岩波書店	¥ 850 ＊同時代ライブラリー	DL判
N94-175	サハラてくてく記—リヤカーマン＝アフリカ大陸横断11,000キロ	永瀬忠志	山と溪谷社	¥1700	四六判
N94-176	沢の生活—半分主義の田舎暮らし	秋元幸久	連合出版	¥1700	四六判
N94-177	山岳　第89年	日本山岳会／編	日本山岳会	¥3500	A5
N94-178	山岳年鑑'94	山と溪谷社／編	山と溪谷社	¥3600	B5
N94-179	山岳写真の完成	日本山岳写真協会／編・執筆協力	日本カメラ社	¥2500	AB判
N94-180	山岳ワンダーランド	新井康弘	光村印刷	¥1000	170×190 ＊写真集
N94-181	山景画集—立山・剣岳，ヒマラヤ，アルプス	橋本　廣	橋本　廣	¥2884	A5変
N94-182	山菜	北隆館／編	北隆館	¥1800	新書判
N94-183	山菜	金田初代／文　金田洋一郎／写真	西東社	¥1500	DL判
N94-184	山菜採り・きのこ狩りの本—週末に楽しむ	Weekend Naturing Club	大栄出版	¥1300	四六判
N94-185	山村が壊れるその前に—あぶない日本の緑と森	山村経済研究所／編	日本経済評論社	¥1854	四六判
N94-186	山稜紀行—白山立山穂高	村上留雄	文一総合出版	¥2000	A4変 ＊写真集
N94-187	C.W.ニコルの森の時間	C.W.ニコル／著　森洋子／訳	読売新聞社	¥1500	四六判

N94-188	シェルパ斉藤の行きあたりばっ旅—抱腹絶倒の日本全国ザック旅日記	斉藤政喜	小学館	¥1300	四六判
N94-189	志賀重昂—回想と資料(生誕百三十年記念誌)	戸田博子／編	戸田博子		270
N94-190	四季上高地	栗田貞多男	クレオ	¥1000	150×150 *写真集
N94-191	四季軽井沢	小泉正夫	クレオ	¥1000	150×150 *写真集
N94-192	四季志賀高原	林三樹生	クレオ	¥1000	150×150 *写真集
N94-193	四季白馬	川井靖元	クレオ	¥1000	150×150 *写真集
N94-194	詩人の山—わたしの詞華集	田中清光	恒文社	¥1800	四六判
N94-195	静かな山—スケッチ帖	石井光造／絵・文	白山書房	¥1800	A5
N94-196	静内川—自然観察記録集	浜田良平	光村印刷	¥1500	200×220
N94-197	自然観察ハンドブック	日本自然保護協会／編・監	平凡社	¥2060	B6
N94-198	自然誌—ネイチャーライティング	高田　宏	徳間書店	¥1500	四六判
N94-199	自然との共生をめざして	岡島成行／編・著	ぎょうせい	¥3000	A5
N94-200	自然に抱かれて—ある夫婦のアウトドア・ライフ	鈴木　元	文理閣	¥1500	四六判
N94-201	自然のポケットから—フィールド発見紀行	本山賢司／文・絵	平凡社	¥1750	A5
N94-202	自然保護という思想	沼田　真	岩波書店	¥ 620	新書判
N94-203	自然保護レンジャーになるには	自然保護レンジャー研究会／編	ぺりかん社	¥1200	B6
N94-204	自然林の復元	近田文弘他／共編	文一総合出版	¥5500	270
N94-205	湿原生態系—生き物たちの命のゆりかご	辻井達一・中須賀常雄・諸喜田茂充／著	講談社	¥ 740	新書判
N94-206	湿原を旅する	新庄久志／文　稗田一俊／写真	岩波書店	¥1700	B5
N94-207	実戦的お天気入門—とってもわかりやすい気象入門	阿陪光南	山海堂	¥1800	A5
N94-208	自灯明：自伝抄	岡本康夫	岡本康夫		A5
N94-209	信濃川彩時記	新潟日報特別取材班／著	恒文社	¥2300	A5判
N94-210	指標生物—自然をみるものさし	日本自然保護協会／編・監	平凡社	¥2060	四六判
N94-211	シベリア大冒険—東京っ子100人,緑の大地を行く	ハバロフスク自然探検隊／編	東京新聞出版局	¥1500	A5
N94-212	写真紀行　ウェットランド	島田興生	日本社会党機関紙局	¥ 700	A5
N94-213	シャヤーズ峰	長崎北稜会ヒンドゥークシュ登山隊／編	長崎北稜会ヒンドゥークシュ登山隊		A4
N94-214	獣医さんのモンゴル騎行	野沢延行	山と渓谷社	¥2200	A5

N94-215	周辺的登山学—山のエッセイ	小倉　厚	日本図書刊行会	¥1800	四六判
N94-216	週末に楽しむ山歩きの本—準備・計画から思い出づくりまで	樋口　等／編・著	大栄出版	¥1400	B6
N94-217	週末に楽しむアウトドアの本—道具遊びから本格キャンプまで	石川義治	大栄出版	¥1400	B6
N94-218	週末は森に棲んで	荒川じんぺい	講談社	¥1700	四六版
N94-219	熟年　スイス　スキー紀行—ツェルマットで滑る	加藤行樹	日本図書刊行会 近代文芸社／発売	¥1300	B6
N94-220	首都圏自然散歩	武村岳男	山と溪谷社	¥2000	A5
N94-221	上信越の山	山岳図書編集部／編	山と溪谷社	¥1500	四六判
N94-222	少年に還る森	荒川じんぺい	河出書房新社	¥1600	四六判
N94-223	縄文杉の木陰にて—屋久島通信	山尾三省	新宿書房	¥1900	四六判 ＊増補新版
N94-224	諸国名山案内第1巻 北海道	梅沢　俊	山と溪谷社	¥2200	260
N94-225	諸国名山案内第2巻 東北	石橋睦美	山と溪谷社	¥2200	260
N94-226	諸国名山案内第3巻 関東	花畑日尚	山と溪谷社	¥2200	260
N94-227	諸国名山案内第4巻 上信越	磯貝　猛	山と溪谷社	¥2200	260
N94-228	諸国名山案内第5巻 南ア・中ア・八ガ岳	今野岳志	山と溪谷社	¥2200	260
N94-229	諸国名山案内第6巻 中部	三枝輝雄	山と溪谷社	¥2200	260
N94-230	諸国名山案内第7巻 近畿・中国・四国	吉田昭市	山と溪谷社	¥2200	260
N94-231	諸国名山案内第8巻 九州	足利武三	山と溪谷社	¥2200	260
N94-232	白神山地—ブナ原生林を行く	江川正幸	朝日新聞社	¥4000	270
N94-233	白神山地—ブナの森から	鳴　祐三／文・写真	国土社	¥2800	B5
N94-234	白神山地・ブナの森	斉藤弘也	時事通信社	¥2200	菊判変 ＊写真集
N94-235	シリア縦断紀行1	G.ベル／著　田隅恒生／訳	平凡社	¥2678	B6変 ＊東洋文庫
N94-236	シルク・ルートの白い石 AQ TASH（7016m）	日印合同・広島山岳会ヒマラヤ登山隊1993／編	日印合同・広島山岳会ヒマラヤ登山隊1993	¥4000	A4
N94-237	シルクロード自転車西遊記	地球と話す会ツール・ド・シルクロード編集委員会／編	日中出版	¥1800	A5
N94-238	シルクロードの伝説—説話で辿る二千年の旅	甘粛人民出版社／編　浜田英作／訳・解説	サイマル出版会	¥2100	B6
N94-239	シルクロードは熱風怒涛	小池啓納・小園長治／著	マガジンハウス	¥1300	四六判

N94-240	白き咆哮—立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊 1993 報告書	立教大学チョモロンゾ委員会／編	立教大学チョモロンゾ委員会	非売品	B5
N94-241	信州すみずみ紀行	高田　宏	新潮社	¥1700	A5変
N94-242	信州のキノコ	小山昇平／解説　小沢良行／写真	信濃毎日新聞社	¥2800	四六
N94-243	信州の高原・湖沼百選	長野県観光連盟	第一法規出版	¥1000	四六判
N94-244	信州の花・植物群落百選	長野県観光連盟	第一法規出版	¥1000	四六判
N94-245	新　シルクロード百科	長澤和俊	雄山閣出版	¥3800	四六判
N94-246	人生登山七十年	宮沢正憲	日本図書刊行会近代文芸社／発売	¥1500	B6
N94-247	シンフォニー　大地の詩	津田洋甫	光村推古書院	¥2800	300×250 ＊写真集
N94-248	シンフォニー　水・風・森	栗田貞多男	クレオ	¥2800	300×230 ＊写真集
N94-249	人力地球縦断—MTB とカヌーと徒歩で北極圏から南極へ	九里徳泰	山と溪谷社	¥1900	A5
N94-250	水源の森は都市の森	銀河書房／編	銀河書房	¥1500	四六判
N94-251	スイス・風と光の小径へ	小谷　明／文・写真	東京書籍	¥1600	A5
N94-252	スイス紀行—湖と森とメルヒェンの国	中塚　裕／写真　鈴木光子／文	クレオ	¥2990	A4
N94-253	スイス四季暦　春・夏	松永尚三／文　さかもとふさ／絵	東京書籍	¥1600	A5
N94-254	スイス四季暦　秋・冬	松永尚三／文　さかもとふさ／絵	東京書籍	¥1600	A5
N94-255	四姑娘山群・1992 年夏の記録	広島山の会四姑娘山登山隊・RCC 中国放送報道隊・四姑娘山周辺トレキッング隊／編	広島山の会	¥3500	B5変
N94-256	スキー場はもういらない	藤原　信／編・著	緑風出版	¥2884	四六判
N94-257	すぐ役立つ四季の山—西日本 70 コース	岳人編集部／編	東京新聞出版局	¥1500	四六判
N94-258	すぐ役立つ山の花学	小野木三郎	東京新聞出版局	¥1500	四六判
N94-259	スコット　南極探検日記	ロバート・スコット／著　中田　修／訳	オセアニア出版	¥6000	A5
N94-260	スパンティーク全員登頂—不揃いのクライマー16人のヒマラヤ 7027 m	神奈川ヒマラヤ登山隊 1992／編	神奈川ヒマラヤ登山隊 1992	¥2700	A4変
N94-261	聖なる山河を行く	大岡　信	日本文芸社	¥1700	四六判
N94-262	聖なる響—西チベット少数民族の祈り	加藤　敬	平河出版社	¥5500	190×260 ＊写真集
N94-263	聖なるものへの旅—インド・ネパール	立川武蔵	人文書院	¥2266	四六判

N94-264	世界最悪の旅	A．チェリー=ガラード／著　戸井十月／訳	小学館	¥1500	四六判
N94-265	世界の自然遺産　屋久島	田川日出夫	日本放送出版協会	¥ 980	B6
N94-266	1992 桑頂抗沙峰登山隊報告	桑頂抗沙峰登山隊1992／編	桑頂抗沙峰登山隊 1992		B5
N94-267	全国森のキャンプ場ガイド	森林レクリエーション研究会／編	山と溪谷社	¥1700	B6
N94-268	全国環境事情—平成５年版	環境庁長官官房総務課環境調査官／編	ぎょうせい	¥4600	A5
N94-269	続・ふるさとの山歩き—広島県と周辺の山々	山本一隆	中国新聞社	¥1500	A5
N94-270	続・わが白山連峰	長崎幸雄	山路書房	非売品	B6
N94-271	空から見た信州の道	信濃毎日新聞社／企画・編	信濃毎日新聞社	¥16000	380
N94-272	それぞれの山—日高山脈への再訪	北大山の会／編	北大山の会		A5
N94-273	大興安嶺をゆく	奥山茂彦	人文書院	¥2500	A5
N94-274	大自然を語る—自然と環境と生命	須藤志成幸・卯木達朗・布施英明・関根和伯・宮下正次・都丸十九一・栗林夏樹・八木原圀明／著	上毛新聞社		B6
N94-275	大雪山　旭岳	鈴木良策	東方出版	¥3800	B4変 ＊写真集
N94-276	大雪山自然ハンドブック—雄大な植物群と北方系動物を探る	成田新太郎／編	自由国民社	¥1300	新書判
N94-277	大山—ブナの森から	山田敏和	今井書店	¥5000	270×290 ＊写真集
N94-278	大地が語る信州の４億年	信州大学「信州の４億年」編集委員会／編	郷土出版社	¥1600	四六判
N94-279	高尾・陣馬	登山地図編集部／編	日地出版	¥1100	四六判
N94-280	高尾・陣馬わくわくハイク	ぐるーぷあずまいちげ＋１／編	のんぶる舎	¥1300	四六判
N94-281	岳への思慕断ちがたく—穂高に逝った佐々木平氏を偲んで	星稜登高会／編	星稜登高会	¥2000	A5
N94-282	蓼科　霧ケ峰	昭文社／編	昭文社	¥1250	四六判
N94-283	立山・黒部	石坂久忠	日地出版	¥1100	四六判
N94-284	立山自然ハンドブック—原生のままの自然を楽しむ	石坂久忠／編	自由国民社	¥1300	新書判
N94-285	立山道を歩く—美女平・称名滝・弥陀ケ原	富山県ナチュラリスト協会／編	北日本新聞社	¥1700	A5
N94-286	旅のメモリー	長久　豊・長久正子	東方出版	¥3800	250×260
N94-287	W.A.C.関係所蔵図書目録	大迫町立山岳博物館／編	大迫町立山岳博物館		B5
N94-288	ダム・堰と湖水の景観	広瀬利雄・竹林征三／編・著	山海堂	¥5980	A5

N94-289	タライのうた—ネパール・タルー族の村めぐり	秋田吉祥	東研出版	¥1900	四六判
N94-290	誰も行かない　日本一の風景・水景色	宮嶋康彦	宮嶋康彦	¥2200	290
N94-291	丹後を歩く—京都の伝説全4巻	福田　晃・真下　厚・小林幸夫／著	淡交社	¥1200	B6
N94-292	丹沢—ブナは訴える	神奈川新聞社編集局／編	神奈川新聞社	¥1500	A4
N94-293	丹沢山塊	奥野幸道	日地出版	¥1100	四六判
N94-294	丹沢の林道を考える—'93丹沢シンポジウム	丹沢ドン会／企画・編	夢工房	¥ 500	A5
N94-295	單獨行（復刻版）—加藤文太郎遺稿集	加藤文太郎	浜坂町役場		230
N94-296	地球環境問題とは何か	米本昌平	岩波書店	¥ 620	新書判
N94-297	地球環境を考える	渡辺　正／編　石　弘之・鈴木英夫・鈴木基之／著	丸善	¥1648	A5
N94-298	地球の歩き方39　中国—西安とシルクロード	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1580	A5
N94-299	地球の歩き方40　中国—チベット	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1580	A5
N94-300	千島縦断	北海道新聞社／編	北海道新聞社	¥2520	220×183
N94-301	地図記号のうつりかわり—地形図図式・記号の変遷	建設省国土地理院／監	日本地図センター	¥2500	A4
N94-302	地図の遊び方	今尾恵介	けやき出版	¥1400	四六判
N94-303	地図のワンダーランド	堀　淳一	小学館	¥1500	四六判
N94-304	地図利用マニュアル—学習者の発達段階に応じた地図指導の手引き	日本地図センター／編	日本地図センター		B5
N94-305	秩父・奥多摩のキャンプ場と公共の宿	金子　玲／編	幹書房	¥1300	255×210
N94-306	知的登山のススメ—山を読んで書く楽しみ	浅野孝一	山と溪谷社	¥980	新書判
N94-307	千葉ぶらぶら20選	ちば山遊人／編	七賢出版	¥1400	B6
N94-308	西蔵回廊—カイラス巡礼	夢枕　獏／文　佐藤秀明／写真	東京書籍	¥4900	A4
N94-309	チベット—天の大地	野町和嘉	集英社	¥5800	280×290 *写真集
N94-310	チベット永遠の書	T．イリオン／著　林　陽／訳	徳間書店	¥1600	四六判
N94-311	チベット偽装の十年	木村肥佐生／著　スコット・ベリー／編　三浦順子／訳	中央公論社	¥2600	A5変
N94-312	チベット高原の盟主ニェンチェンタンラ	東北大学山の会／編	第一法規出版	¥2800	A5
N94-313	チベット逍遙—カイラス・マナサロワール紀行	大隅智弘	東研出版	¥2300	四六判
N94-314	チベット世界—極限の高地	松本栄一／写真　色川大吉・山折哲雄／文	小学館	¥7800	A4 *新装版

N94-315	チベットのこころ	山際素男	三一書房	¥2100	四六判
N94-316	チベットの地底王国シャンバラの謎	秋月菜央	二見書房	¥ 850	170
N94-317	西蔵漂泊（下）—チベットに魅せられた十人の日本人	江本嘉伸	山と溪谷社	¥3000	A5
N94-318	地名表記の手引き	教科書研究センター／編	ぎょうせい	¥2800	A5
N94-319	地名レッドデータブック	金井弘夫／編	アボック社出版局	¥92000	270
N94-320	中央アルプス—宝剣・木曽駒ケ岳	中村至伸	ほおずき書籍 星雲社／発売	¥1300	170
N94-321	中央本線各駅登山	山村正光	山と溪谷社	¥1600	A5
N94-322	中近東・エジプト・トルコ	日本交通公社出版事業局／編	日本交通公社出版事業局	¥1240	四六判
N94-323	中国・四国の山	山と溪谷社／編	山と溪谷社	¥1600	B6 ＊改訂版
N94-324	中国登山の手引き—第三版	山森欣一／編	日本ヒマラヤ協会	¥3500	B5
N94-325	中南米の山と旅—秋田の山男	荘司昭夫／編	荘司昭夫		A5
N94-326	鳥海	加藤謙治	みちのく書房	¥3800	A4 ＊写真集
N94-327	長江有情	田中芳樹・井上祐美子／著　柏木久育／写真	徳間書店	¥2500	190×220
N94-328	朝鮮奥地紀行　2	I. バード／著　朴尚得／訳	平凡社	¥3090	B6変 ＊東洋文庫
N94-329	チョモランマ・カンシュン谷周辺の地形	明治大学チョモランマ峰遠征隊・学術班／編	明治大学チョモランマ峰遠征隊	¥ 800	B5
N94-330	チロル・パノラマ展望	H.C. ベラン・小谷　明・塚本哲也／著	新潮社	¥1400	220×170
N94-331	チンギス・ハーンの軌跡	ティム・セヴェリン／著　松田忠徳／訳	三五館	¥2400	四六判
N94-332	『沈黙の春』の世界—レイチェル・カーソンを語り継ぐ	原　強	かもがわ出版	¥1900	四六判
N94-333	梅池自然園　花の旅	石原敏行／写真・解説	ボタニカルアート	¥1200	B6変
N94-334	月の山，ゴリラの山—中央アフリカ・バチンコ登山	敷島悦朗	山と溪谷社	¥1700	B6
N94-335	剣岳　遙かなり	村山謙三	角川書店	¥1700	四六判
N94-336	徒然の山	石井貞男	随想舎	¥1854	四六判
N94-337	出会い触れ合い写心旅ネパール	岩崎　勇	光村印刷	¥2000	200×220 ＊写真集
N94-338	低山逍遙の真髄	浅野孝一	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N94-339	定本　信州百峠	井出孫六・市川健夫／監修	郷土出版社	¥11000	A4
N94-340	徹底ガイド「沿線別」温泉と山遊び　首都圏版	浅野孝一	学習研究社	¥ 980	B6

N94-341	出羽三山と日本人の精神文化	松田義幸／編	ぺりかん社	¥1900	四六判
N94-342	天山カシカール峰（6347m）登頂の記録	山岡人志	山岡人志	非売品	B5
N94-343	天山に逝く—追悼　西堀秀二・井上　誠・伊東昌彦	天山に逝く刊行委員会／編	天山に逝く刊行委員会	非売品	A5
N94-344	天山のかなた—ユーラシアと日本人	山田信夫	山田先生著作刊行会　阿吽社／発売	¥3200	A5
N94-345	ドイツ四季暦　春／夏	池内　紀／文　喜多木ノ実／画	東京書籍	¥1500	A5
N94-346	ドイツの森番たち	広瀬　隆／文　橋口譲二／撮影	集英社	¥1800	四六判
N94-347	東亜同文書院・中国調査旅行記録第1巻中国との出会い	藤田佳久／編・著	愛知大学／発行　大明堂／発売	¥2800	A5
N94-348	東海さわやかハイキング	愛知山岳会／編	七賢出版	¥1400	四六判
N94-349	東海自然歩道—日帰りハイキング①高尾山—奥三河	武村岳男	山と渓谷社	¥1500	A5
N94-350	東海自然歩道ウォークガイド	日本万歩クラブ／編	日本万歩クラブ　学習研究社／発売	¥1500	A5
N94-351	東京巨樹探訪—いのちの声を聞くとき	平松純宏	けやき出版	¥1800	A5変 ＊写真集
N94-352	東京近郊　日帰りハイキング	地図の本編集部／編	日地出版	¥ 810	B6
N94-353	東京周辺自然ウォーク100選	大宅堅一	主婦と生活社	¥1000	A5
N94-354	東京周辺の沢'94	白山書房／編	白山書房	¥1950	四六判
N94-355	東京のんびり20選	はむら自然友の会／編	七賢出版	¥1400	B6
N94-356	東京付近の沢	関本快哉他／著	白山書房	¥1850	四六判 ＊増補版
N94-357	峠の道路史—道の今昔と峠のロマンを訪ねて	野村和正	山海堂	¥3800	AB判
N94-358	峠の村へ—山里の履歴書	飯田辰彦	ＮＴＴ出版	¥2200	四六判
N94-359	遠き狩人たちの八ヶ岳	堤　　隆	ほおずき書籍	¥2500	四六判
N94-360	東部カラコルム	日本ヒマラヤ協会／編	日本ヒマラヤ協会	¥2000	B5
N94-361	登山医学14	日本登山医学研究会／編	日本登山医学研究会	¥3000	B5
N94-362	登山と人生	藤平正夫	富山県教育委員会		B6
N94-363	登山・ハイキングバス時刻表	書苑新社	書苑新社	¥1200	B6
N94-364	DOSTYK TIENSHAN —1992天山登頂の記録	瀬木紀彦／編	飛騨山岳会天山登山隊		B5

N94-365	栃木の日帰りハイキング	小杉国夫／文・写真　下野新聞社／編	下野新聞社	¥2000	A5
N94-366	野鳥（とり）たちの誌（うた）	風馬　賢	けやき出版	¥2000	菊判変 ＊写真集
N94-367	十和田・八幡平・三陸海岸	昭文社	昭文社	¥1200	四六判
N94-368	名古屋からの山なみ—東山スカイタワー基点	日本山岳会東海支部／編	中日新聞本社	¥2000	220 ＊改定版
N94-369	名古屋発女性と中高年の山歩き—アルプスの名峰からハイキングコースまで	荻須昭大	風媒社	¥1380	210
N94-370	名古屋ワンデイ・ハイキング	日本交通公社出版事業局／編	日本交通公社出版事業局	¥1200	A5
N94-371	ナショナル・トラストの国—イギリスの自然と文化	藤田治彦	淡交社	¥2700	B5
N94-372	七時雨の風	七時雨の自然と語らう会／編	白山書房	¥1500	A5
N94-373	ナムチャバルワ初登頂	岡野敏之／編	読売新聞社	¥6000	300 ＊写真集
N94-374	南極大陸—上	白川義員	小学館	¥39000	A3 ＊写真集
N94-375	南極大陸—下　永遠の時空	白川義員	小学館	¥39000	A3 ＊写真集
N94-376	南極点	ローアル・アムンセン／著　中田　修／訳	朝日新聞社	¥ 950	文庫判
N94-377	南極の四季	神沼克伊	新潮社	¥1100	四六判
N94-378	南極の自然誌	サンフォード·A.モス／著　青柳昌宏／訳	どうぶつ社	¥3090	A5
N94-379	南極100年—地球上のパラダイスをめざして	神沼克伊	ほるぷ出版	¥1500	A5
N94-380	南湖大山登山報告書（1994.4/29-5/8）	台湾・高峰遍歴隊'94／編	台湾・高峰遍歴隊'94		270
N94-381	新潟滝と渓谷を行く	伊東敬一	新潟日報事業社出版部	¥1600	210
N94-382	2時間登頂の山	森田秀巳／編	山と渓谷社	¥1600	A5 ＊改訂版
N94-383	日本アルプスの四季	山岳写真同人	東京新聞出版局	¥3900	247×260 ＊写真集
N94-384	日本が消したパプアニューギニアの森	清水靖子	明石書店	¥2060	四六判
N94-385	日本300名山ガイド（東日本編）	市川静子・岡田敏夫・岡部紀正・川越はじめ・広澤和嘉・小林玻璃三／著	新ハイキング社	¥1600	A5
N94-386	日本300名山ガイド（西日本編）	市川静子・岡田敏夫・岡部紀正・川越はじめ・広澤和嘉／著	新ハイキング社	¥1600	A5
N94-387	日本自然地図—絵でみる	同朋舎出版	同朋舎出版	¥2980	B4

N94-388	日本植物分類学文献総目録 Ⅰ累積版 Ⅱ索引版	金井弘夫／編・著	アボック出版局	¥100000	B5
N94-389	日本スキーツアールート集	北田紘一／編	山と渓谷社	¥2500	B5
N94-390	日本大地図帳	平凡社	平凡社	¥22000	430
N94-391	日本の高山植物—ポケット図鑑	青山潤三	成美堂	¥1300	A6
N94-392	日本の自然1 北海道	小畷 尚・他	岩波書店	¥4000	270
N94-393	日本の自然4 中部	野上道男他／編	岩波書店	¥4000	270
N94-394	日本の自然'94年版	朝日新聞社／編	朝日新聞社	¥3400	B5
N94-395	日本の樹木	加藤僖重／解説 会田民雄／写真	成美堂出版	¥1300	A6
N94-396	日本の『創造力』—近代・現代を開花させた470人	牧野 昇・竹内 均／監 富田 仁／責任編集 日本放送協会／編	日本放送協会	¥5800	四六判
N94-397	日本の大自然11 西表国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	280
N94-398	日本の大自然14 大山隠岐国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	280
N94-399	日本の大自然16 秩父多摩国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	280
N94-400	日本の大自然17 支笏湖洞爺湖国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	280
N94-401	日本の大自然18 中部山岳国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	280
N94-402	日本の大自然19 日光国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	280
N94-403	日本の大自然20 磐梯朝日国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	280
N94-404	日本の名随筆—別巻46 地図	堀 淳一／編	作品社	¥1800	四六判
N94-405	日本百名山・登山ガイド	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1600	A5 *改訂版
N94-406	日本糞虫記	塚本珪一	青土社	¥1800	四六判
N94-407	日本列島野鳥map—関東甲信越の野鳥	北隆館／編	北隆館	¥2500	260×220
N94-408	日本列島野鳥map—西日本の野鳥	北隆館／編	北隆館	¥2500	260×220
N94-409	入笠山歳時記—山荘暮らしの花鳥風月	大沢謙一	MBC 21／発行 東京経済／発売	¥1500	四六判
N94-410	ニュージーランド紀行	原田淳一郎	彩流社	¥2000	B6
N94-411	ネイチュア・フィーリング	日本自然保護協会／編・監	平凡社	¥2060	四六判
N94-412	熱帯雨林の彼方へ	カレン・テイ・ヤマシタ／著 風間賢二／訳	白水社	¥2600	四六判
N94-413	熱帯雨林の社会経済学	クリス・C.パーク／著 犬井 正／訳	農林統計協会	¥2500	A5
N94-414	ネパール—ヒマラヤ山麓の旅	藤本亜樹雄	近代文芸社	¥1300	四六判

N94-415	ネパールの地域開発構想をさぐる	地域活性化研究センター／編	野外科学出版会		A5
N94-416	ネパール・ヒマラヤ登山報告書	北海道大学ワンダーフォーゲル部・OB会／著	同会		B5
N94-417	NORTH JAPAN ALPS	岩佐浩幸	岩佐浩幸	¥1000	B5変 ＊写真集
N94-418	野湯＆秘湯100選	野口悦男	学習研究社	¥1500	A5
N94-419	ハイキングガイド　ふくしまの低山50	奥田　博	歴史春秋社	¥1600	四六版
N94-420	白山・石動修験の宗教民族学的研究	由谷裕哉	岩田書院	¥8137	A5
N94-421	白山麓・出作りの研究—牛首村民の行方	山口隆治	桂書房	¥3090	A5
N94-422	白馬・鹿島槍	白馬登高会	日地出版	¥1100	四六判
N94-423	白馬の自然	土田勝義／編・著	信濃毎日新聞社	¥2500	A5
N94-424	箱根と富士山麓	旅行作家塾編集部／編	旅行作家塾　現代旅行社／発売	¥1500	210
N94-425	初めて行く人のための屋久島の旅Q＆A	小田原直子	八重岳書房	¥ 820	四六判
N94-426	長谷川恒男—虚空の登山者	佐瀬　稔	山と溪谷社	¥1800	四六判
N94-427	八十歳はまだ現役	脇坂順一	山と溪谷社	¥1700	B6
N94-428	八幡平の四季	高橋喜平／写真・文	岩手日報社	¥2200	190×220 ＊写真集
N94-429	八甲田山	一戸義孝	栃の葉書房	¥3200	186×256 ＊写真集
N94-430	初登山—初期山岳著作集	今西錦司／著　斎藤清明／編	ナカニシヤ出版	¥2800	四六判
N94-431	花の美ケ原高原	田中豊雄／著　長野県探花会／編	ほおずき書籍　星雲社／発売	¥1000	新書判
N94-432	花の写真の撮り方	平野隆久	成美堂出版	¥1300	A5
N94-433	花の仙丈ケ岳	田中豊雄	ほおずき書籍　星雲社／発売	¥1000	新書判
N94-434	花のヒマラヤ	吉田外司夫	平凡社	¥4950	A4変 ＊写真集
N94-435	花の山旅—東北・北海道	石橋睦美・梅沢　俊／編	山と溪谷社	¥1800	A5
N94-436	母なる大地　アフリカ	川上緑桜／写真	東方出版	¥2980	A4変 ＊写真集
N94-437	早池峰の植物	大迫町立山岳博物館／編　奥山春季／監	岩手県大迫町	¥13000	A4
N94-438	遙かなるパミール	1992年たらっぺ山の会パミール登山隊	福田　靖		B5
N94-439	遙かなるチベット—河口慧海の足跡を追って	根深　誠	山と溪谷社	¥2600	A5
N94-440	はるかなるブナの森—葛根田原生林	八幡平の葛根田ブナ原生林を守る会／編	八幡平の葛根田ブナ原生林を守る会	¥1800	四六判
N94-441	パルナシウスは天に舞う—神々の遣いが棲む所へ，インド-ヒマラヤ紀行	新部公亮	エムティ出版	¥1500	B6

N94-442	ハロー　オーロラ	和泉雅子	文藝春秋	¥1900	200×223
N94-443	ピアリー　北極点	ロバート・ピアリー／著 中田　修／訳	オセアニア出版	¥6000	A5
N94-444	日帰り一泊で楽しめる東京周辺渓流釣り場ガイド	渓流フィッシング編集部	山と渓谷社	¥1600	A5
N94-445	秘境アラビア探検史—上	R.H. キールナン／著 岩永　博／訳	法政大学出版局	¥2884	四六判
N94-446	秘境アラビア探検史—下	R.H. キールナン／著 岩永　博／訳	法政大学出版局	¥2987	四六判
N94-447	英彦山信仰史の研究	広渡正利	文献出版	¥11000	A5
N94-448	英彦山年番日記	広渡正利・福岡古文書を読む会／校訂	文献出版	¥10000	A5
N94-449	ひこさんの花—英彦山自然観察シリーズ	崎山欽一郎	西日本新聞社	¥1500	B6
N94-450	日高山脈の山々	梅沢　俊・菅原靖彦／著	北海道新聞社	¥2200	B6 ＊増補改訂版
N94-451	ひと味違う名古屋からの山旅	西山秀夫／編	七賢出版	¥1400	四六判
N94-452	ひとり山旅の記	丸山修身	岳書房	¥2300	B6変
N94-453	ヒマラヤからのメッセージ—ヒマラヤには人生の原点があった	助安由吉	エイト社	¥1000	B6
N94-454	ヒマラヤ・サバイバル—登山戦略論	原　真	悠々社	¥2500	B6変
N94-455	ヒマラヤ山河誌	諏訪多栄蔵／著　雁部貞夫・薬師義美／編	ナカニシヤ出版	¥7500	菊判
N94-456	ヒマラヤ登山日本隊遭難の記録—1952～1993	山森欣一／編	日本ヒマラヤ協会		B5
N94-457	ヒマラヤの見える学校で—ネパールの村教師滞在記	田中千聖	山と渓谷社	¥ 980	新書判
N94-458	ヒマラヤはどこから来たか	木崎甲子郎	中央公論社	¥ 680	新書判
N94-459	ヒマラヤ文献目録(新版)	薬師義美／編	白水社	¥58000	B5
N94-460	兵庫自然史ハイキング	地球団体研究会大阪支部兵庫教師グループ／編	創元社	¥1500	B6
N94-461	ひょうごのアウトドア	神戸新聞総合出版センター／編	神戸新聞総合出版センター	¥1600	210
N94-462	広島県の山野草　春・初夏	比婆科学教育振興会／編	中国新聞社	¥2500	四六判
N94-463	広島県の山野草　夏・秋	比婆科学教育振興会／編	中国新聞社	¥2500	四六判
N94-464	びわこグリーンハイク	滋賀植物同好会／編	京都新聞社	¥1200	四六判
N94-465	フィンランドの森の友だち	津村　喬・高野和子／著	岩波書店	¥2200	四六判
N94-466	ブータン—変貌するヒマラヤの仏教王国	今枝由郎	大東出版社	¥2500	四六判
N94-467	富士山	大山行男	そしえて	¥1800	200×230 ＊写真集

N94-468	富士山自然大図鑑	杉野孝雄／編・著	静岡新聞社	¥3900	B5
N94-469	富士山大地図―絵でみる	同朋舎出版	同朋舎出版	¥2980	B4
N94-470	富士山の謎―ニッポン不思議発見3	上村信太郎／編	KKベストセラーズ	¥480	文庫判
N94-471	富士讃歌―紅陽会写真集	紅陽会	文一総合出版	¥2000	200×230
N94-472	富士登山ハンドブック―富士山の自然を楽しむために	富士自然動物園協会／編	自由国民社	¥1500	B6 ＊改訂新版
N94-473	富士は生きている	静岡新聞社／編	静岡新聞社	¥1600	A5
N94-474	ブナ林―白山の四季Ⅱ	上馬康生／写真	十月社	¥2200	四六判
N94-475	ブナ林に生きる―山人の四季	太田　威	平凡社	¥2900	A5
N94-476	冬北海道	薗部　澄	日本カメラ社	¥5200	290×230 ＊写真集
N94-477	ブラジル辺境紀行―血も涙も乾く土地	高野　悠	日本放送出版協会	¥1200	B6
N94-478	フランシス(フランク)・キングドン・ウォード―東チベットの植物探検家	金子民雄／編	小林書店	¥2060	A5
N94-479	故郷の再生の道―荒廃する山と村を考える	野添憲治	御茶の水書房	¥1648	四六判
N94-480	分県登山ガイド3 宮城県の山	早川輝雄	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-481	分県登山ガイド9 群馬県の山	太田ハイキングクラブ	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-482	分県登山ガイド11 千葉県の山	中西俊明・植草勝久・佐久間勉／著	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-483	分県登山ガイド12 東京都の山	桑子　登・紀村朋子・平田謙一・岩浪和俊／著	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-484	分県登山ガイド35 徳島県の山	徳島県勤労者山岳連盟	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-485	分県登山ガイド36 香川県の山	藤沢義憲	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-486	分県登山ガイド37 愛媛県の山	石川道夫・伊藤玉男・丹下一彦・豊田康二・新山隆朝他／著	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-487	分県登山ガイド38 高知県の山	大森義彦・森田南海男・長谷川雅彦・山岡　遵／著	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-488	分県登山ガイド39 福岡県の山	五十嵐賢・日野和道／著	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-489	分県登山ガイド40 佐賀県の山	内田益満・柴田芳夫／著	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-490	分県登山ガイド41 長崎県の山	井上　晋・山野辺捷雄／著	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-491	分県登山ガイド42 熊本県の山	吉川　満	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-492	分県登山ガイド43 大分県の山	藤田晴一	山と渓谷社	¥1750	A5

N94-493	分県登山ガイド44 宮崎県の山	猪須克己・小林　勉・甲斐賢一・田尻よしこ・高見恵子／著	山と渓谷社	¥1750	A5
N94-494	文明と環境3　火山噴火と環境・文明	町田　洋・森脇　広／著	思文閣出版	¥2300	200
N94-495	辺境の旅から	金子民雄	古今書院	¥2060	210×160
N94-496	冒険家に学ぶアトドア・モノ選び	宮沢芳樹・加藤次郎／著	双葉社	¥1500	210
N94-497	冒険から世界は広がる	三浦雄一郎	ＮＴＴ出版	¥1500	四六判
N94-498	法政大学山岳部の七〇年	五十島一晃／編・著	法政大学体育会山岳部　山想会		B5
N94-499	北米グリーンウッドの森で	藤咲多恵	主婦と生活社	¥1500	四六判
N94-500	北米大陸の野生	ピーター・マシーセン／著　早川麻百合／訳	東京書籍	¥3200	四六判
N94-501	ポケット　木の実　草の実	橋本郁三	家の光協会	¥1000	A6変
N94-502	ポケット　山野草	久志博信・会田民雄／著	家の光協会	¥1000	A6変
N94-503	穂高連峰を歩く—山小屋の主人がガイドする	鈴木昇己／技術解説　内田　修／写真・文	山と渓谷社	¥1800	210
N94-504	北海道　山菜実用図鑑	山岸　喬・山岸敦子	北海道新聞社	¥2200	四六判
N94-505	北海道静内川—自然観察記録集	浜田良平	光村印刷	¥1500	200×220 ＊写真集
N94-506	北海道・自然のなりたち	石城謙吉・福田正己／編	北海道大学図書刊行会	¥1854	B6
N94-507	北海道夏山ガイド4—日高山脈の山々	梅沢　俊・菅原靖彦／著	北海道新聞社	¥2200	四六判
N94-508	北海道の山	山岳図書編集部／編	山と渓谷社	¥1400	四六判 ＊改訂版
N94-509	北海道の山を滑る—画文集	熊谷　樫	白山書房	¥1800	四六判
N94-510	北海道山の花図鑑—札幌市・藻岩・円山・八剣山	梅沢　俊	北海道新聞社	¥2200	B6
N94-511	北海道　野生動物の痕跡を読む—フィールド・ウォッチングガイド	エコ・ネットワーク／編	北海道新聞社	¥2300	菊判変
N94-512	マイカー登山ベスト30	与呉日出夫	七賢出版株式会社中部事業部	¥1400	四六判
N94-513	マイカー登山ベスト周遊コース「東京周辺」	森田秀巳／編	山と渓谷社	¥1500	A5
N94-514	Mt. Fuji—富士山	大山行男	キュウ・フォト・インターナショナル　そしえて／発売	¥1800	200×230 ＊写真集
N94-515	マクリーンの森	ノーマン・マクリーン／著　渡辺利雄／訳	集英社	¥1700	四六判
N94-516	マゼラン海峡ヤッホー	はんがい哲郎	新風舎	¥1500	四六判
N94-517	マタギ—森と狩人の記録	田口洋美	慶友社	¥3914	A5
N94-518	松本　上高地	昭文社／編	昭文社	¥1150	四六判

N94-519	守れ権現（改訂版）	太田　敬	金星堂		A5
N94-520	ミシシッピ紀行	猿谷　要	文藝春秋	¥1800	四六判
N94-521	緑からの伝言—森林と自然環境	岩田　洋・関根一昭／文 新井靖雄／写真	自費出版	¥1800	A5
N94-522	緑と風の中で	須佐美康治	光村印刷	¥2500	200×220
N94-523	緑と環境のはなし	「緑と環境のはなし」編集委員会／編	技報堂出版	¥1854	B6
N94-524	緑の時代　山は語る	岐阜新聞社編集局／編	岐阜新聞社出版局	¥2200	A5
N94-525	緑の世界史　上	クライブ・ポンティング／著　石　弘之・京都大学環境史研究会／訳	朝日新聞社	¥1650	四六判
N94-526	緑の世界史　下	クライブ・ポンティング／著　石　弘之・京都大学環境史研究会／訳	朝日新聞社	¥1600	四六判
N94-527	南方熊楠高野山登山行奇譚	田中宏和	白地社	¥1200	四六版
N94-528	南アルプス	山岳図書編集部／編	山と渓谷社	¥1300	四六判
N94-529	南千島探検始末記	ワシリー・ゴロウニン／著　徳力真太郎／訳	同時代社	¥2100	A5
N94-530	南鳥島特別航路	池澤夏樹	新潮社	¥ 400	文庫判
N94-531	宮崎の野鳥	宮崎県環境保健部／企画・編	日本野鳥の会宮崎支部 鉱脈社／発売	¥1500	新書判
N94-532	夢幻の山旅	西木正明	中央公論社	¥1800	四六判
N94-533	虫と花の寓話	串田孫一	東京新聞出版局	¥1200	四六判
N94-534	ムスタンの真実—NHK「やらせ」現場からの証言	小松健一	リベルタ出版	¥1900	B6
N94-535	Menthosa 6443 m 登山報告書—インドヒマラヤ登山隊1993	インドヒマラヤ登山隊／編	日本山岳会東海支部		B5
N94-536	もうひとつのチベット行—ダライ・ラマとケルサンに会ったよ	後藤ふたば	山と渓谷社	¥1700	四六判
N94-537	物語　日本の渓谷	大藪　宏	山と渓谷社	¥1600	A5
N94-538	森からの警告	畑　正憲・C.W.ニコル／著	ソニーマガジンズ	¥ 480	160
N94-539	森からの手紙	田淵義雄	小学館	¥ 760	SL判
N94-540	森と暮らす，森に学ぶ—八ケ岳倶楽部	柳生　博	講談社	¥1500	A5
N94-541	森と林と人と	岐阜県林業センター	岐阜新聞社出版局	¥1000	A5
N94-542	森と文明	ジョン・パーリン／著 安田喜憲・鶴見精二／訳	晶文社	¥4700	A5
N94-543	森にかよう道—知床から屋久島まで	内山　節	新潮社	¥1000	四六判
N94-544	森に訊け	橋本克彦	講談社	¥ 740	文庫判
N94-545	森の色—春から夏	水越　武	朝日新聞社	¥2200	A5変

N94-546	森の形　森の仕事—お椀から建築まで　第三次木の文明へのプロローグ	稲本　正／文　岡崎良一／写真	世界文化社	¥2500	A5
N94-547	森の動物の100不思議	日本林業技術協会	東京書籍	¥1200	B6
N94-548	森の博物館	稲本　正	小学館	¥1950	A5
N94-549	森の標本箱	KNACK／作	小学館	¥1600	B5
N94-550	森のファンタジー	加藤芳明	光村印刷	¥1000	180×190
N94-551	森のめぐみ—熊野の四季を生きる	宇江敏勝	岩波書店	¥ 620	新書判
N94-552	森は生きている	富山和子	講談社	¥1300	A5
N94-553	森は生きている—神垣の里の四季	田沢康三郎／著 福士　論／写真・解説	大和出版社平内町	¥1550	290×300
N94-554	森はよみがえる	石城謙吉	講談社	¥ 700	新書判
N94-555	森を知ろう，森を楽しもう—森林彩時記	北村昌美	小学館	¥ 800	DL判
N94-556	森を楽しむ	上野英世／著	上野英世	非売品	B6
N94-557	森を楽しむ	上野英世／文・写真	淡交社	¥2000	A5
N94-558	森を継ぐもの —Forest Hand Book	C.W.ニコル・山野忠彦・高橋延清他／著	KDDクリエイティブ	¥1600	A5
N94-559	モンゴル・アルタイの夏—1992年モンゴル・アルタイ登山報告書	酒田ヒマラヤ研究会／編	酒田ヒマラヤ研究会	¥2000	四六判
N94-560	モンゴル草原　サイシンガ家の人々	木村哲行	葦書房	¥1500	B6
N94-561	野外生活	大海　淳／撮影・文	オリジン社　主婦の友社／発売	¥1400	150
N94-562	野外における危険な生物	日本自然保護協会／編・監	平凡社	¥2060	四六判
N94-563	屋久島—7000年の記憶	三井純夫	南日本新聞社 同社開発センター／発売	¥3800	288×220 ＊写真集
N94-564	役立ち100の登山用語	野村　仁	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N94-565	焼跡派の山歩き—私の山行ノートより	安藤正義	自由現代社	¥1800	四六判
N94-566	やさしい山の歩き方—四季折々の自然に親しむ山歩きの基本	スタジオ・ビーイング／編	長岡書店	¥ 980	四六判
N94-567	野生動物の痕跡を読む—北海道	エコ・ネットワーク／編	北海道新聞社	¥2300	菊判変
N94-568	野鳥観察	札幌市教育委員会文化資料室／編	北海道新聞社	¥1540	四六判
N94-569	野鳥山河	山田一夫	光村印刷	¥2900	240×250 ＊写真集
N94-570	野鳥風色	吉野俊幸／写真　中島芳栄／書	文一総合出版	¥2000	200×230 ＊写真集
N94-571	野鳥をよむ	松田道生	アテネ書房	¥1500	四六判
N94-572	山歩きの本—週末に楽しむ	樋口　等／編・著	大栄出版	¥1400	四六判

N94-573	山からの富士発見	峰広敬一	東京新聞出版局	¥3900	250×260 ＊写真集
N94-574	山小屋の主人（オヤジ）がガイドする　中央アルプスを歩く	津野祐次	山と溪谷社	¥1800	A5
N94-575	山路の貌—幻想のキャンバス	磯　重吉	光村印刷	¥1500	200×220 ＊写真集
N94-576	山城三十山	日本山岳会京都支部／編・著	ナカニシヤ出版	¥1900	四六判
N94-577	山と森の生活誌	遠藤ケイ	日本放送出版協会	¥1300	B6
N94-578	山の神	ネリー・ナウマン／著 野村伸一・桧枝陽一郎／訳	言叢社	¥7950	A5
N94-579	山の気象と救急法	飯田睦治郎・桜井博幸／著	東京新聞出版局	¥1400	四六判
N94-580	山の四季	北大山の会／編	北大山の会	¥2500	B6 ＊歌集
N94-581	山の写真の撮り方	中西俊明	成美堂出版	¥1300	A5
N94-582	山の高さ—第２版	鈴木弘道	日本測量協会	¥2300	四六判
N94-583	山の民物語—医王山西南麓の史・資料集	中村健二／編・著	北国新聞社	¥3500	B5
N94-584	山の道具Ｑ＆Ａ100	今井泰博・西原彰一	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N94-585	山の博物誌—ザ・マウンテンズ・オブ・カリフォルニア	ジョン・ミューア／著 小林勇次／訳	立風書房	¥2000	四六判
N94-586	山の文学紀行（復刻）	福田宏年	沖積舎	¥3000	四六判
N94-587	山の歴史景観—紀伊山地	中野栄治	古今書院	¥3296	A5
N94-588	山を歩けば	共同通信社／編	共同通信社	¥1600	四六判
N94-589	山を訪ねて—会津の日向山・日翳山	森澤堅次	歴史春秋社	¥1600	B6
N94-590	槍穂・高岳	百瀬斐敏	日地出版	¥1100	四六判
N94-591	やわやわ登るまいか	小高巌雄	山路書房		A5
N94-592	山原（やんばる）の自然—亜熱帯の森	湊　和雄	平凡社	¥3800	B5 ＊写真集
N94-593	やんばるの森—輝く沖縄のいきものたち	久高将和／写真　日本野鳥の会やんばる支部／編	東洋館出版社	¥4200	320×270
N94-594	勇攀高峯—アムネマチン未踏ルートに挑む	1993山梨県山岳連盟阿尼瑪卿峰登山隊派遣実行委員会／編	山梨県山岳連盟		B5
N94-595	遊歩百山８春のコース集	森林書房／編	森林書房	¥1200	B5
N94-596	遊歩百山９夏のコース集	森林書房／編	森林書房	¥1200	B5
N94-597	遊歩百山10秋のコース集	森林書房／編	森林書房	¥1200	B5
N94-598	ユーラシアの遠い道	野町和嘉	新潮社	¥2400	A5
N94-599	雪国　花　春	伊藤嘉治	エルテ出版	¥4000	216×289
N94-600	雪の谷　山の声	高見和成	悠々社	¥2500	四六判
N94-601	40歳からのアウトドアライフ１—山歩き自然観察編	山岡寛人	労働旬報社	¥1500	四六判

N94-602	40歳からのアウトドアライフ2—街・里山自然観察編	山岡寛人	労働旬報社	¥1500	四六判
N94-603	雷鳥	高木清和	山と溪谷社	¥2000	200×220 ＊写真集
N94-604	らいちょう—厳しい自然の中に生きる立山の雷鳥	若林　繁	光村印刷	¥4000	240×250 ＊写真集
N94-605	Life—いのちの物語り	福田幸広	青菁社	¥1500	四六変 ＊写真集
N94-606	羅臼—知床の人びと	甲斐崎圭	マガジンハウス	¥1300	四六判
N94-607	リバー　オデッセイ	田渕義雄・ドン・ロバーツ／著	晶文社	¥2900	B5
N94-608	両神	三宅　修・川添修司・渡辺千昭／著	両神観光協会	¥2000	220×200 ＊写真集
N94-609	林野庁解体—疲弊する一山村から	植村武司	日本経済評論社	¥1854	四六判
N94-610	黎明の北アルプス	はまみつお	郷土出版社	¥1600	四六判
N94-611	レクイエム　小林基子さん	山ぼうしの会／編	山ぼうしの会	非売品	A5変
N94-612	ロッキー山脈—北米大陸の屋根	J.A.クラウリス／写真　ジョン・ガルト／文　ベースボール・マガジン社／編・訳	ベースボール・マガジン社	¥6000	A4
N94-613	わがシュプールII—片桐匡のスキー人生	片桐　匡	銀河書房	¥2200	A5
N94-614	わが人生のシュプール	猪谷千春	ベースボール・マガジン社	¥2800	A5
N94-615	わが聖地放浪—カイラスに死なず	色川大吉	小学館	¥1600	四六判
N94-616	わが野生のワイオミング	マーガレット&オラウス・ミューリー／著　広子・ハートレー／訳	宝島社	¥2000	四六判
N94-617	わが山，わが人生	藤原　功／著	藤原　功　山と溪谷社／発売	¥1800	四六判
N94-618	わたしの北の川—源流・悠流のドラマ	堀　淳一	北海道新聞社	¥1800	A5
N94-619	私のヒマラヤ紀行	茂市久美子	恒文社	¥1800	四六判
N94-620	私は森の案内人	田中惣次	創森社	¥1500	四六判

山岳図書目録——英語　1992年

No.	書　名	著　者	発行所	発行地
E 92-072	Ancient Futures	Norberg-Hodge, Helena	Oxford Univ. Press	New Delhi
E 92-073	Andalusian Rock Climbs, Including Tenerife	Craggs, Chris	Cicerone Press	London
E 92-074	Avalanche Safety for Skiers and Climbers 〈2nd ed.〉	Daffern, Tony	Diadem Books	London
E 92-075	Bibliography of Colorado Mountain Ascents 1977-1990	Kramarsac, Joseph D.	Priv. Published	
E 92-076	The Butterflies of Sikkim Himalaya and Their Natural History	Haribal, Meena	Sikkim Nature Conservation Foundation	Gantok
E 92-077	The Cairngorms, Lochnagar and the Mounth	Watson, Adam	S.M.T.	
E 92-078	Chair Ladder and the South Coast	Hannigan, Des	Climber's Club	
E 92-079	Climbing Back : The Story of Mark Wellman, Yosemite's Incredible Paraplegic Ranger, Who Climbed El Capitan and Half Dome	Wellman, Mark & Flinn, John	WRS Publishimg	Waco, Texas
E 92-080	The Grand Controversy : The Pioneer Climbs in the Teton Range and the Controversial 1st Ascent of Grand Teton	Bonny, Orrin H. & Lorraine G.	AAC Press	New York
E 92-081	A Guide to Mountaineering in China	Chinese Mountaineering Association	C.M.A.	Beijin
E 92-082	In the High Mountains 〈English ed.〉	Zsigmondy, Emil	Ernest Press	London
E 92-083	Mountain Everest Massif : Climbing Guide Mountaineering Atlas	Kielkowski, Jan	Explo Publishers	Gliwice, Poland
E 92-084	Mount McKinley Climber's Handbook	Randall, Glenn	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 92-085	The Mountains of Ireland	Dillon, Paddy	Cicerone Press	London
E 92-086	The Mountains of Wales	Rees, Ioan B.	Univ. of Wales Press	
E 92-087	Water People	Simpson, Joe	Abacus	London

山岳図書目録——英語　1993年

E 93-001	The Ala Dag, Climbs and Treks in Turkey's Crimson Mountains	Tüzel, Ö. B.	Cicerone Press	London
E 93-002	Alfred Gregory's Everest	Gregory, Alfred	Constable	London
E 93-003	Altitude-Rated Places : A Medical Atlas	Moomey, Blake	McNaughton & Gunn	New Orleans
E 93-004	Among Mountains	Crumley, Jim	Mainstream	Edinburgh
E 93-005	The Ascent : Ten Men and Two Women on the Brink of an Abyss	Long, Jeff	Headline Features	
E 93-006	The Ascent of Everest 〈New Edition〉	Hunt, John	Hodder & Stoughton	London
E 93-007	Avalanche Handbook 〈2nd Ed.〉	McClung, David & Shaerer, Peter	Mountaineers	Seattle
E 93-008	Ballooning Over Everest	Dickinson, Leo	Jonathan Cape	London
E 93-009	Banff-Assiniboine : A Beautiful World	Beers, Don	Highline Publishing	Calgary, Alberta
E 93-010	The Best of Ascent : 25 Years of the Mountaineering Experience	Ed. by Roper, Steve & Steck, Allen	Siera Club Books Diadem Books	San Francisco London
E 93-011	Bernese Oberland : Selected Climbs	Ed. by Swindin, Les	Alpine Club	London
E 93-012	Beyond the Limits : A Woman's Triumph on Everest	Allison, Staey with Carlin, Peter	Little, Brown & Company	Boston New York Toronto London
E 93-013	Beyond Risk : Conversations with Climbers	O'Connell, Nicholas	Mountaineers Diadem Books	Seattle London
E 93-014	The Black Cloud : Scottish Mountain Misadventures 1928-1966	Thompson, I.D.S.	Ernest Press	London
E 93-015	Blind Corners : Adventures on Seven Continents	Tabin, Geoffrey	ICS Books	Merrillville, Indiana
E 93-016	Breaking Loose	Cook, Dave	Ernest Press	London
E 93-017	Britain's Highest Peaks : The Complete Illustrated Route Guide	Ashcroft, Jeremy	David & Charles	Newton Abbot
E 93-018	Central Asia : A Traveller's Companion	Hopkirk, Kathlean	John Murray	London
E 93-019	Chronicles of the Doon Valley : An Environmental Expose	Thadhani, Prem K.	Indus Publishing Co.	New Delhi
E 93-020	Climbing Anchors : How to Rock Climb	Long, John	Chockstone Press	Evergreen, Colorado

E 93-021	Climbing Mount Everest-The Bibliography : The Literature and History of Climbing the World's Highest Mountain	Compiled by Salked, Audrey & Boyle, John	Sixways Publishing	Clevedon, Avon
E 93-022	Cloud Dancers : Portraits of North American Mountaineers	Ed. by Waterman, Jonathan	AAC Press	Golden, Colorado
E 93-023	Colorado Front Range Crags		Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 93-024	Countdown to Rescue	Maslen-Jones, Bob	Ernest Press	London
E 93-025	Exploring the Lakeland Fells : 32 Moutain Walks Complete with Plan & Relief Maps	Lawton, Tom	Ward Lock	
E 93-026	Flowers of the Western Himalayas	Dang, Rupin	Indus Publishing Co.	New Delhi
E 93-027	From the Black Forest to Tibet : One Woman's Mountain	Healy, Trudy	Vantage Press	New York
E 93-028	Galen Rowell's Vision : The Art of Adventure Photography	Rowell, Galen	Siera Club Books	San Francisco
E 93-029	The Great Himalayan Traverse : Kanchendzonga to Karakoram	Chamoli, S.P.	Vikas	New Delhi
E 93-030	Hands of a Climbers : A Life of Colin Kirkus	Dean, Steve	Ernest Press	London
E 93-031	High Himalaya Unknown Valleys	Kapadia, Harish	Indus Publishing Co.	New Delhi
E 93-032	The High Mountains of the Alps Vol.1 : The 4000m Peaks 〈English Ed.〉	Dumler, H. & Burkhardt, Willi P./Tr. by Carruthers, Tim	Diadem Books Mountaineers	London Seattle
E 93-033	The High Mountains of Britain and Ireland : A Guide for Mountain Walkers Vol.1 The Munros and Tops and other 3000ft Peaks 〈Revised〉	Butterfield, Irvine	Diadem Books	London
E 93-034	The Himalayas	Barua, Shankar	Luster Press	New Delhi
E 93-035	The Himalayas : Ecology and Environment Vol.2 〈1992-93〉	Himalayan Environmental Trust	H.E.T.	
E 93-036	Hire of Himal : An Anthropological Study of the Sherpas of Nepal Himalayan Region	Kunwar, Ramesh Raj	Nirala Publications	

E 93-037	Hold and Hights : The Foundations of Mountaineering	Unsworth, Walt	Hodder & Stoughton Mountaineers	London Seattle
E 93-038	Hypoxia and Molecular Medicine	Ed. by Sutton, J.R., Houston, C.S. & Coates, G.	Queen City Printer Inc.	Burlington, Vermont
E 93-039	In the Shadow of Denali : Life and Death on Alaska's Mt. McKinley	Waterman, Jonathan	Bantam Doubleday Dell Publishing Group	New York
E 93-040	Knots for Climbers 〈How to Rock Climb Series〉	Luebben, Craig	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 93-041	Menlove	Perrin, Jim	Ernest Press	London
E 93-042	Mixed Emotions : Mountaineering Writings of Greg Child	Child, Greg	Mountaineers	Seattle
E 93-043	Modern Rock Climbing : Sport Climbing and Top Roping Beyond the Basics	Skinner, Tod & McMullen, John	ICS Books	Merrillville, Indiana
E 93-044	Mount Everest : The Best Writing and Pictures from 70 Years of Endeavour	Ed. by Gillman, Peter	Little Brown & Co.	Boston
E 93-045	Mount Everest Massif : Monograph-Guide-Chronicle	Kielkowski, Yan	Explo Publishers	Gliwice, Poland
E 93-046	Mount Logan Map : Research & Reference Forio	Holdsworth,G.& Sawer, B.	Arctic Institute of North America	Calgary, Alberta
E 93-047	Mount McKinley : Icy Crown of North America	Becky, Fred	Mountaineers	Seattle
E 93-048	Mountaineering in Patagonia	Kearny, Alan	Cloudcap	Seattle
E 93-049	Munro's Fables	Hutchison,G.& Tyler,C.	Tacit	
E 93-050	Nepal-The Western Region : A Travelling Companion for Travellers, Trekkers and Climbers	Lindenfelser, Matthew	Tiwari's Pilgrims Book House	Kathmandu
E 93-051	Nols Wilderness Mountaineering	Powers, Phil	Stack-pole Book	Harrisburg, PA

E93-052	Northern Highlands : Rock & Ice Climbs 〈Vol.1 Knoydart to An Teallach〉 〈Vol.2 Strathfarrar to Sheltland〉	Ed. by Everett, Roger	SMC	
E93-053	Nothing So Simple as Climbing	Dutton, G.J.F.	Diadem Books	London
E93-054	Obata's Yosemite	Driesbock, J.T. & Landauer, S.	Yosemite Association	
E93-055	On the Edge of Europe : Mountaineering in the Caucasus	Salkeld, Audrey & Bermudez, Jose Luis	Mountaineers Hodder & Stougton	Seattle London
E93-056	On the Edge of Silence : A Mountain Anthology	Compiled by Selwood, Mary-Jane	Springbank Press	
E93-057	On Foot in Snowdonia : The Best Hill Walks and Scrambles from Cadair Idris to the Carneddau	Allen, Bob	Michael Joseph	
E93-058	On Peak Rock : A Guide to Selected Rock Climbs on 100 Peak District Outcrops	Ed. by Dawson, Carl	BMC	
E93-059	Pakistan Trekking Guide	Shaw, Isabel & Ben	The Guide Book Co.	Hongkong
E93-060	Peaks of Glory : Climbing the World's Highest Mountains 〈English Ed.〉	Ed. by Ardito, Stefano	Swan Hill Press	Shrewbury
E93-061	Performance Rock Climbing	Goddard, D. & Newmann, U.	Stackpole Books	Harrisburg, PA
E93-062	Personal Growth Through Adventure	Hopkins, D. & Putnam, R.	David Fulton Publishers	London
E93-063	Polar Dreams : The Saga of First Solo Jurney	Thayer, Hrelen	Simon & Schuster	
E93-064	Race Against Time : British North Geomagnetic Pole Expedition 1992	Hempleman-Adams, David	The Self Publishing Assoc./ Hempleman-Adams	
E93-065	Red Rocks Select : 500 Selected Routes in the Red Rocks of Nevada	Swain, Todd	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E93-066	The Reverend A.E. Robertson : His Life, Munsus and Photographs	Drammond, P. & Mitchell, I.	Ernest Press	London
E93-067	Rock Climbing in Oman	McDonald, R.A.	Apex Publ.	London
E93-068	Rocy Mountain National Park : The Climber's Guide	Gillet, Bernard	Earthbound Press	

E 93-069	The SAS 〈Special Air Service〉 Survival Handbook 〈repr.〉	Wiseman, John	Harvill	London
E 93-070	Scott and Amundsen 〈repr.〉	Huntford, Roland	Weidenfeld	
E 93-071	Selected Climbs in the Cascades	Nelson, Jim & Potterfield, Peter	Mountaineers	Seattle
E 93-072	Shadows on the Wasteland : Crossing Antarctica with Ranulph Fiennes	Stroud, Mike	Jonathan Cape	London
E 93-073	Sierra Classics : The 100 Best Climbs in the High Sierra	Mognier, J. & Fiddler, C.	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 93-074	Stories off the Wall	Roskelly, John	Mountaineers	Seattle
E 93-075	Tahquitz & Suicide	Vogel, R. & Gaines, B.	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 93-076	Talus : A History of the Dartmouth Mountaineering Club	Eagle, Dean	Peter Randall	Hanover
E 93-077	This Game of Ghosts : The Sequel to Touching the Void	Simpson, Joe	Jonathan Cape	London
E 93-078	Tight Rope : The Fun of Climbing	Gray, Dennis	Ernest Press	London
E 93-079	The Undiscovered Country : The Reason We Climb	Bartlett, Phil	Ernest Press	London
E 93-080	Walks & Climbs in the Pyrenees 〈3rd ed.〉	Reynolds, Kev	Cicerone Press	London
E 93-081	Walks in Julian Alps	Brown, Simon	Cicerone Press	London
E 93-082	We Aspired : The Last Innocent Americans	Sinclair, Pete	Utah State Univ. Press	Logan, Utah
E 93-083	Whensoever : 50 years of the RAF Mountain Rescue Service 1943-1993	Card, Frank	Ernest Press	London
E 93-084	Yankee Rock & Ice : A History of Climbing in the Northeastern United States	Waterman, Guy & Laura	Stackpole Books	Harrisburg, PA
E 93-085	Yosemite Climbs : Big Walls	Ed. by Reid, Don	Chockstone Press	Evergreen, Colorado

山岳図書目録——英語　1994年

E 94-001	Aconcagua : A Climbing Guide	Secor, R.J.	Mountaineers	Seattle
E 94-002	Alps 4000 : 75 Peaks in 52 Days	Moran, Martin	David & Charles	Newton Abbot

E 94-003	Altitude Illness : Prevention and Treatment	Bezruchka, Stephen 〈Ed. by O'Neil, Maureen〉	Mountaineers Cordee	Seattle London
E 94-004	Another Wilderness : New Outdoor Writing by Women	Ed. by Rogers, Susan F.	Seal Press	
E 94-005	Arka Tagh : The Mysterious Mountains	Holgate, William	Ernest Press	London
E 94-006	At the Rising of the Moon	Somers, Dermot	Baton Wicks	London
E 94-007	Ben Nevis : Rock and Ice Climbs	Richardson, S., Walker, A. & Clothier, R.	S.M.C.	
E 94-008	The Blue Moutains : A Guide to Selected Rock-climbings 〈Including Tarana〉	Law, Michael	Wild Publications	South Yarra
E 94-009	The Burgess Book of Lies	Burgess, Adrian & Alan	Cloudcap	Seattle
E 94-010	Camp 4 : Recollections of a Yosemite Rock Climber	Roper, Steve	Mountaineers	Seattle
E 94-011	The Canadian Rockies	Richards, Craig	Sawback Press	
E 94-012	Canadian Summits : Selected from the Canadian Alpine Journal 1907-1994	Ed. by Sandford, R.W. & Peter, G.	Alpine Club of Canada	Canmore, Alberta
E 94-013	Catalogue of the Himalayan Literature 〈3rd ed.〉	Ed. by Yakushi, Yoshimi	Hakusuisha	Tokyo
E 94-014	Central Asia : A Traveler's Companion	Hopkirk, P.	John Murray	London
E 94-015	Climbing and Hiking in the Wind River Mountains 〈2nd ed.〉	Kelsey, Joe	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 94-016	Climbing in the Magic Islands : A Climbing and Hiking Guide to the Lofoten Island of Norway	Webster, Ed.	Nord Norsk Klatreskole	Henningsvaer, Norway
E 94-017	Conserving Natural Value	Rolston, Ⅲ, Holmes	Columbia Univ. Press	New York
E 94-018	Dawson's Guide to Colorado's Fourteeners Vol.1 : The Northern Peaks	Dawson Ⅲ, Louis W.	Blue Clover Press	
E 94-019	A Dry Ship to the Mountains : Down the Volga & Across the Caucasus in My Father's Footseps	Farson, Daniel	Michael Joseph	
E 94-020	Ecology of Polar Casis	Svoboda & Freedman	Captus Univ. Press	

E 94-021	Environmental Protection of the Himalaya : A Mountaineer's View	Ed. by Ali, Aamir	Indus Publishing Co.	New Delhi
E 94-022	Everest Calling : Ascent of the Dark Side : The Mallory-Irvine Ridge	Siggins, Lorna	Mainstream	Edinburgh
E 94-023	Exploring the Far North West of Scotland : A Walker's Guide to the Hills, Glens and Coastline of Wester Rock & Sutherland	Gilbert, Richard	Cordee	London
E 94-024	Exotic Rock : The Travel Guide for Rock Climbers	Lightner, Jr, Sam	by Auther	Jackson, Wyoming
E 94-025	The Gunks Guide 〈3rd ed.〉	Swain, Todd	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 94-026	A Hard Day's Summer : Six Classic North Faces Solo	Hargreaves, Alison	Hodder & Stoughton	London
E 94-027	Heel and Toe : The Climbs of Greater Vedauwoo, Wyoming	Harper, Skip & Kelman, Rob	Heel and Toe Publishers	Fort Collins, Colorado
E 94-028	Heroic Climbs : A Celebration of World Mountaineering	Ed. by Bonington, Chris & Salkeld, Audrey	Mountaineers	Seattle
E 94-029	High Altitude : Illness and Wellness	Houston, Charles	ICS Books	Merrillvill, Indiana
E 94-030	The Hillwalker's Manual	Birkett, Bill	Cicerone Press	London
E 94-031	Himalaya : Alpine Style	Fanshawe, A. & Venables, S.	Hodder & Stoughton	London
E 94-032	Himalayan Buddhist Villages	Ed. by Crook, J.H. & Osmaston, H.A.	Univ. of Bristol	Bristol
E 94-033	Hold the Heights : The Foundations of Mountaineering	Unsworth, Walt	Mountaineers Hodder & Stoughton	Seattle London
E 94-034	100 Walks in the French Alps	Marsh, Terry	Hodder & Stoughton	London
E 94-035	An Illustrated Guide to the Packhorse Bridges of the Lake District	Hartwell, Michael	Ernest·Press	London
E 94-036	The Illustrated Library of the Earth : Mountains	Ed. by Ives, J.D.	Rodale Press	Emmaus
E 94-037	In Search of Limits : Climbing the Alpine 4000 Metre Peaks	Bles, Mark	Hodder & Stoughton	London
E 94-038	Joshua Tree : Sport Climbs	Vogel, Randy	Chockstone Press	Evergreen, Colorado

E 94-039	Kangchenjunga Ascent from East : Indo-Japanese Venture	Singh, Huskam	Offsetters	New Delhi
E 94-040	K2 : Dreams and Reality	Haberl, Jim	Tantalus Publishing	Vancouver, BC
E 94-041	Lahoul : The Mistery Land in the Himalayas	Shahni, Nath	Indus Pub.	New Delhi
E 94-042	Lighting Out	Duane, Daniel	Greywolf Press	St. Paul, Minnessota
E 94-043	Llanberis Pass	Williams, Paul	Climber's Club	London
E 94-044	Lou Whittaker : Memoirs of a Mountain Guide	Whittaker, Lou with Gabbard, Andrea	Mountaineers	Seattle
E 94-045	The Love of Mountain is Best : Climbs and Travels from K2 to Kathmandu	Bates, R.H.	Peter Randall	
E 94-046	Lowland Outcrops	Prentice, Tom & Nicoll, Grahame	S.M.C.	
E 94-047	Lundy	Harrison, Paul & Gibson, Gray	Climber's Club	London
E 94-048	Mountain Delight	Aitken, Bill	English Book Depot	Dehra Dun
E 94-049	Mountaineering : Catalogue of the Graham Brown and Lloyd Collections in the National Library of Scotland		National Library of Scotland	
E 94-050	Mountaineering in the Andes : A Sourcebook for Climbers 〈2nd.ed.〉	Neate, Jill	Expedition Advisory Center, Royal Geographic Soc.	London
E 94-051	Mountaineering Women : Stories by Early Climbers	Ed. by Mazel, David	Texas A & M Univ. Press	Austin, Texas
E 94-052	Mountain Environments and Geographic Information Systems	Ed. by Price, M.F. & Heywood, D.I.	Taylor & Francis	
E 94-053	The Mountains of Turkey	Smith, Karl	Cicerone Press	London
E 94-054	The Nanda Devi Affair	Aitken, Bill	Penguin Books	New Delhi
E 94-055	No Place to Fall : Superalpinism in the High Himalaya	Saunders, Victor	Hodder & Stoughton	London
E 94-056	Northeast Outcrops : Including the Aberdeen, Moray & Banff Sea Cliffs, Deeside, Glen Clova & the Angus Quarries	Compiled by Morrison, Neil	S.M.C.	

E 94-057	On Secret Service East of Constantinople	Hopkirk, Peter	John Murray	London
E 94-058	On Sight 1995 : The Australian Climbing Calender	Carter, Simon	On Sight Photography	Natimuk, Victoria, Australia
E 94-059	On Top of the World : The 1st British Woman to Climb Everest	Stephens, Rebecca	Mcmillan	London
E 94-060	Orogenic Zones : The First Five Years of the International Festival of Mountaineering Literature	Compiled by Gifford, T. & Smith, R.	Betton Hall	Wekefield, W. Yorkshire
E 94-061	Over the Himalaya	Ohmori, Koichiro	Diadem Books	London
E 94-062	Performance Guide for Climbers : I Hate to Train	Prichard, Nancy	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 94-063	Queen Maud Land : Antartica	Tollefsen, Ivar Erik	Himmet Mortensen Bokforlag	Norway
E 94-064	Rafting Down the Mystic Brahmaputra	Chamori, S.P.	Vikas	New Delhi
E 94-065	Rain in the Mountains : Notes from the Himalayas	Bond, Ruskin	Viking	New Delhi
E 94-066	Rock'n Road : Rock Climbing Areas in North America	Toura, Tim	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 94-067	Selected Rock Climbs in Belgium & Luxembourg	Craggs, Chris	Cicerone Press	London
E 94-068	Shadows on the Wasteland : Crossing Antacrtica with Ranulph Fiennes	Stroud, Mike	The Overlook Press	Wood Stock, New York
E 94-069	Short Walks in the Lake District : 60 Walks for Short Days, Wet days-and with the Family	Allen, Bob	Michael Joseph	
E 94-070	Splits of the Air	Diemberger, Kurt/Tr. by Salkeld, Audrey	Mountaineers Hodder & Stoughton	Seattle London
E 94-071	Staying Found, the Complete Map and Compass Handbook 〈2nd. ed.〉	Fleming, June	Mountaineers	Seattle
E 94-072	Stone Crusade : A Historical Guide to Bouldering in America	Sherman, John	American. Alp. Club	Golden, Colorado
E 94-073	Summits & Icefields : Alpine Ski Tour in the Rockies and Columbia Mountains	Scott, Chic	Rocky Mountain Books	Calgary, Alberta

E 94-074	This Game of Ghosts	Simpson, Joe	Mountaineers Jonathan Cape	Seattle London
E 94-075	Tibet Handbook : A Pilgrimage Guide	Chan, Victor	Moon Publications Inc.	Chico, California
E 94-076	Trekking in the Caucasus	Kolomiets, Yury & Sovyev, Aleksey	Cicerone Press	London
E 94-077	Trekking in Russia and Central Asia : Traveler's Guide	Maier, Frith	Mountaineers Cordee	Seattle London
E 94-078	Treks and Climbs in the Wadi Rum, Jordan 〈Revised 2nd ed.〉	Howard, Tony	Cicerone Press	London
E 94-079	Victoria : A Guide to the Selected Rockclimbs at Arapiles, the Grampians and Mt. Buffalo	Baxter, Chris & Tempest, Glenn	Wild Publications	South Yarra
E 94-080	Walking in the High Tatras 〈Slovakia & Poland〉 : Including the Western Tatras in Poland and the White Tatras in Slovakia	Saunders,Colin & Narozna, Renata	Cicerone Press	London
E 94-081	Walking the Lakeland Round	Lawton, Tom	Ward Lock	
E 94-082	Walking the Watershed	Hewitt, Dave	Tacit	
E 94-083	Waterfall Ice : Climbs in the Canadian Rockies	Josephson, Joe	Rocky Mountain Books	Calgary, Alberta
E 94-084	Wolfgang Güllich : A Life in the Vertical	Hepp, Tilmann	Boulder Ed.	
E 94-085	Women of the World : Women Travelers and Explorers	Stefoff, Rebecca	Oxford Univ. Press	Oxford, New York
E 94-086	Yosemite Climbs : Free Climbs	Reid, Don	Chockstone Press	Evergreen, Colorado

山岳図書目録——ドイツ語　1991年

No.	書　名	著　者	発行所	発行地
G 91-039	Weitwanderwege zwischen Montblanc und Monte Viso	Böhne, Henning	Bruckmann Verlag	München

山岳図書目録——ドイツ語　1992年

G 92-037	Alpen-Initiative 〈Es kocht in den Alpen〉	Limmat Verlag	Limmat Verlag	Zürich
G 92-038	Bergsteiger-Schriftsteller-Wissenschaftler 〈Ausgewählte Schriften〉	Maduschka, Leo	Verlag J. Berg	München

G 92-039	Wanderführer Graubünden	Gansner, Hans Peter	Terra Grischuna	Chur
G 92-040	Wanderungen zu den schönsten Naturschutzgebieten	Auf der Maur, Franz und Brigitte	Ott Verlag	Thun

山岳図書目録——ドイツ語　1993年

G 93-001	Alpenglühn〈Auf Trans ALPedes-Spuren von Wien nach Nizza〉	Frischknecht, Jürg und andre	Rotpunktverlag	Zürich
G 93-002	Alpine Alltagskultur zwischen Beharrung und Wandel	Arnold Niederer	Verlag Paul Haupt	Bern
G 93-003	Berner Alpen 2 SAC-Clubführer	Jürg Müller	SAC-Verlag	Bern
G 93-004	Berg '94	D.O.A.V.u. A.Südtirol	D.O.A.V.u. A.Südtirol	München, Innsbruck, Bozen
G 93-005	Bergrestaurants am Höhenweg	Spillmann Verlag	Spillmann Verlag	Zürich
G 93-006	Die bleichen Berge	Niedermayr, Walter	Edition Raetia	Bozen
G 93-007	Bündner Alpen 5 Bernina gruppe	René Matossi	SAC-Verlag	Bern
G 93-008	Gipfel des Ruhms Stefano Ardito	Rosenheimer Verlag		Rosenheim
G 93-009	Gleitschirmfliegen	Robert Bösch	Stürtz Verlag	Würzburg
G 93-010	Gletscher, Schnee und Eis	Schweizerischer Gletscherkommission	Verlag Schweizer Lexikon, Mengis u. Ziehr	Luzern
G 93-011	Jura plaisir	Jürg von Känel	Edition Filidor	Reichenbach
G 93-012	Klettern im Schweizer Granit	Swen Holst ; Barbara Herrmann	Panico Alpenverlag	Köngen
G 93-013	Im Licht der Berge	Burger, Rudolf	Eiche Verlag	Burg
G 93-014	Naturkundlicher Höhenweg im Maderanertal	Arbeitsgruppe Naturkundliche Höhenwege Uri	Arbeitsgruppe N.H.Uri	Altdorf
G 93-015	Neue Alpin-Zeitschrift in Grossbritannien		Mountain Review	Grossbritannien
G 93-016	Salbit erleben!	Jürg von Känel ; Marcel Bircher ; Jürg Berger	Edition Filidor	Reichenbach
G 93-017	Skitouren Schweiz	Daniel Anker ; Pius Fähndrich	Steiger Verlag	Innsbruck
G 93-018	Sport 93	Hugo Steinegger	Habegger Verlag	Bern

G 93-019	Towards New Horizon 〈John Haller (1927-1984)〉	Schwarzenbach, Fritz H.	Verlag der Fachvereine an den schweizerische Hochschulen und Techniken und S.S.A.F.	Zürich
G 93-020	Verzeichnis der Schweizer Privatenhütten	Niederöst, A. und H.	Niederöst	Schöftland
G 93-021	Walliser Alpen 3 SAC-Clubführer	Maurice Brandt	SAC-Verlag	Bern
G 93-022	Walliser Alpen 4 SAC-Clubführer	Maurice Brandt	SAC-Verlag	Bern
G 93-023	Walliser Alpen 5 SAC-Clubführer	Maurice Brandt	SAC-Verlag	Bern

山岳図書目録——ドイツ語　1994年

G 94-001	Alpine Skitouren, Band 4, Waadt-Freiburg-Berner Alpen	Anker, Daniel ; Labande, François ; Schnegg, Ralph	SAC-Verlag	Bern
G 94-002	Atmung im Hochgebirge 〈Aus [Leben heisst atmen]〉	Schweizer Spende für Tuberkulose-und Lungenkranke	S.S.für T.u.L. 〈Atmung im Hochgebirge〉, Postfach	Bern
G 94-003	Berner Alpen 3 〈Bietschhorn-, Lötschentaler Breithorn-Aletschhorngruppe〉	Blum, Christoph	SAC-Verlag	Bern
G 94-004	Bianca-eine Herausforderung	Renk, Willi	Frieling Verlag	Berlin-Steglitz
G 94-005	Bündner Alpen 3 Avers 〈San Bernardino bis Septimer〉	Hunziker, Manfred	SAC-Verlag	Bern
G 94-006	Einfalte Delineation aller Gemeinden gemeiner dreyen Bünden	Sererhard, Nicolin	Verein Bündner Kulturforschung, Chur	Schiers
G 94-007	Erwanderte Heimat	Auf der Maur, Franz und Brigitte	Ott Verlag	Thun
G 94-008	Everest 〈70 Jahre menschliches Wagnis〉	Gillman, Peter	BERG Verlag	München
G 94-009	Ihre Ferien-Karte	Naturfreunde Schweiz	Naturfreunde Schweiz	Bern
G 94-010	Gleitschirm, Swing (Kalender 1995)	Bösch, Robert	Swing	Rehetobel
G 94-011	Guida delle Alpi Ticinesi 4 〈Dal Passo del San Gottardo al Pizzo di Claro〉	Brenna, Giuseppe	SAC-Verlag	Bern

G 94-012	Hochtouren im Wallis 〈vom Trient zum Nufenenpass〉	Biner, Hermann	SAC-Verlag	Bern
G 94-013	Pablo. Ein Strahler auf extremen Wegen	Membrini, Paul und Charly Bieler	Verlag Bündner Monatsblatt	Chur
G 94-014	40 Panoramawanderungen	Auf der Maur, Franz und Brigitte	Werd Verlag	Zürich
G 94-015	Schweiz extrem (Kalk-Calcaire)	von Känel, Jürg	Filidor-Verlag	Reichenbach
G 94-016	Sicherheit und Risiko in Fels und Eis	Schubert, Pit	Bergverlag Rother	München
G 94-017	Walliser Alpen 6 〈Vom Simplon zum Nufenenpass (Gonerli)〉	Brandt, Maurice	SAC-Verlag	Bern
G 94-018	Walser. Geschichten vom Leben zwischen den Bergen	Donatsch, Peter	Verlag Bündner Monatsblatt	Chur
G 94-019	Wanderkarte 1：50,000 TMR 〈Tour Monte Rosa〉	Kümmerli+Frey und Walliser Wanderwege	Kümmerli Frey	
G 94-020	Im Zeichen des Wanderns	Schweizer Wanderwege	Schweizer Wanderwege	Riehen
G 94-021	Zeitschrift Bergsteiger 60 jährig-eine rüstige Jubilarin	Verlag F.Bruckmann	Verlag F. Bruckmann	München

山岳図書目録——フランス語　1991年

No.	書　名	著　者	発行所	発行地
F 91-094	Passions du risque Collection Traversées dirigée par Pascal Dibie	David Le Breton	Editions A.M. Métailié	

山岳図書目録——フランス語　1992年

F 92-066	La mémoire des paysages. Parc National du Mercantour	Nadia Loury- Guigan	Editions Glénat	

山岳図書目録——フランス語　1993年

F 93-001	Alpes	François Labande, Michel Ferrer, Jeremy Balcam	Editions de Faucompret	
F 93-002	L'Alpinisme un jeu?	David Belden	Editions Aroura	
F 93-003	Altitude et longitudes ou"Le fauteuil flottant"	Jean Puiseux	Editions Glénat	
F 93-004	Un autre Népal	Henri Sigayret	Editeur Oros	

F 93-005	Les cahiers d'entrainement de la F.F.M.E.	Ouvrage collectif	Editeur F.F.M.E.	
F 93-006	Cartographie 4000 ans d'aventures et de passion	Thierry Lasalle	Editions IGN-NATHAN	
F 93-007	Les cols du Parc de la Vanoise	Pascal Urard	Editions Glénat	
F 93-008	Contes et nouvelles de l'envers	Jean Marie Jeudy	Editions Glénat	
F 93-009	La Croisière Verte Mission Radeau des Cimes, Guyane 89	Tripp	Editions Glénat	
F 93-010	En campant sur l'Alpe	Maria Jelek	Editions Hoëbeke	
F 93-011	Encordé avec des Ombres	Joe Simpson	Editions Glénat	
F 93-012	Les Esprits de l'Eau	Joe Simpson	Editions Glénat	
F 93-013	Et les cairns marchent	Jean Daniel Robert	le Milieu du Jour,	Paris
F 93-014	Faire sa trace···Loin des pistes	Jacques Rouillard	Editions D.M.I.	
F 93-015	Les guides des grands sommets	Pascal Sombardier-Pascal Tanguy	Editions Glénat	
F 93-016	Les Hautes Routes d'antan	Daniel Chalonge	Editions Karen Chalonge	
F 93-017	Hommes, Dieux et Montagnes des Himalayas	Gausser- Olschak- Bührer-Gruschke	Editions Glénant	
F 93-018	Les lacs d'Azur	Richard Wacongne	Editions Glénat	
F 93-019	Manuel " Premiers secours en montagne"		Editions France-Seléction	Aubervilliers
F 93-020	Les maquereaux des cimes blanches	Maurice Chappaz	Edition Zoë	
F 93-021	Les moissons de lumière	François Virot	Editions de l'Envol	
F 93-022	Ötzi, la momie des glaciers	Françoise Rey	Editions Glénat	
F 93-023	Parcours photographique 1976/1994	David Belden	Editions Aroura	
F 93-024	Les Parois du Destin	J. Asselin	Editions Glénat	
F 93-025	Photographes et carnets de voyage	Bruce Chatwin	Editions Grasset	
F 93-026	Les plus belles randonnées des Pyrénées, entre Garonne et Méditerranée	Jean-François Devaud	Editions Glénat	
F 93-027	Les plus belles randonnées en Haute Savoie	Pierre Millon	Editions Glénat	
F 93-028	Des prises sous la neige	David Harris	Editions Glénat	

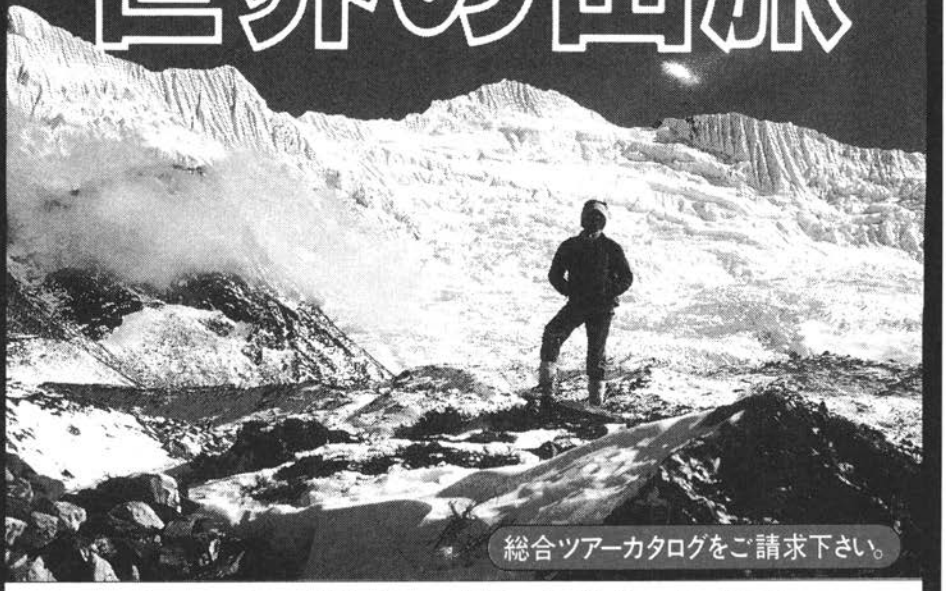
F 93-029	Pyrénées paysannes	Jacques Valat et Marcellin Bérod	Editions Milas	Toulouse
F 93-030	Les 4000 mètres des Alpes	H. Dumler et W.-P. Burkhardt	Editions Arthaud	Paris
F 93-031	Les randonnées du parc de la Chartreuse	Alain Rougier-Pascal Urard	Editions Glénat	
F 93-032	Les randonnées du vertige	Pierre Millon	Editions Glénat	
F 93-033	Réganel ou la montagne à vaches	Roger Canac	Editions Glénat	
F 93-034	Remontées	Jean Daniel Robert	Editions le Méridien	Paris
F 93-035	Savoie, Haute-Savoie, le Grand Guide	Charles Maly	Editions Glénat	Grenoble
F 93-036	Tourbillons dans l'Eau d'Olle	Christine Hacques	Editions PUG, collection 〈Montagnes〉	Grenoble
F 93-037	Les vacances du lundi	Théophile Gautier	Editions Champ Vallon	
F 93-038	Une vallée insolite : Chamonix, le Mont-Blanc, la Savoie. Histoire des origines à 1860	Roger Couvert du Crest	Editions La Lézard	
F 93-039	Une victoire sur l'Himalaya	Bernard Pierre	Editions Presses Pocket	Paris
F 93-040	Viollet-le-Duc et la montagne	Ouvrage collectif, sous la direction de Lise Grenier et l'égide de la Caisse Nationale des Monuments Historiques	Editions Glénat	

山岳図書目録——フランス語　1994年

F 94-001	Archives de Savoie	Jacques Borgé et Nicolas Viasnoff	Editions Michele Trinckvel	
F 94-002	Aventures voyages Montagne et Mer	René Neplaz		
F 94-003	150 randonnées à raquettes dans les Alpes du Sud	Jean-François Dao	Editions Didier Richard	Grenoble
F 94-004	150 randonnées à raquettes en Isère	Pierre Pardon	Editions Didier Richard	Grenoble
F 94-005	52 balades en famille autour d'Aix-en-Provence	Jean Reynaud	Editions Didier Richard	Grenoble
F 94-006	Esteterel, Espace sauvage de la Côte d'Azur	Robert de Madron	Editions du Cabri	Breil
F 94-007	Le Grand livre des Noeuds	Peter Owen	Editions Solar	Paris

F 94-008	Hommes, Dieux et Montagnes des Himalayas	A.Gansser, B.Olschak, E.Buhrer, A.Gruschke	Editions Glênat	Grenoble
F 94-009	Parcours à travers la documentation régionale des Alpes Occidentales	Communauté de travail des Alpes Occidentales	Bibliothèque Cantonale, Mme Brigitte Waridel,	Lausanne
F 94-010	Pays du Mont-Blanc	Jean-Marie Jeudy	Editions Didier Richard	Grenoble
F 94-011	Portraits en altitude	Aline Luque, Photographies de J. Gaumy, A. Legrainet O. Pellissier	Editions Creaphis	Paris
F 94-012	Pyrénées, 1000 ascensions, II du Somport au Vignemale (Voies normales et escalades faciles)	Miguel Angulo	Editions Elkar Donostia	Baiona
F 94-013	Randonnées pedestres dans le Tarn		Editions Edisud	Aix-en-Provence
F 94-014	Randonnées pedestres en Basse-Maurienne	Jean-Yves Reffet et Michel Salyn	Editions Edisud	Aix-en-Provence
F 94-015	Secours en montagne	Philippe Poulet, Christophe Raylat	Editions Didier Richard	Grenoble
F 94-016	70 via ferrata des Alpes françaises aux Dolomite	Gérard Papandréou	Editions Didier Richard	Grenoble
F 94-017	Le Tour de la Coume Ouarnède en 24 Cavites, Spéléoguide NO 1	S. Boyer et J. Flandin, Spélunca librairie	Editions GAP	
F 94-018	Trekking au Nepal	Antoine d'Abbundo	Editions Olizane	Genève
F 94-019	Trekking en Himalaya, Nepal	S. Armington	Editions Lonely Planet Publications	Paris
F 94-020	Zoom sur les gorges de l'Ardèche	J.-M. Metzger	Editions Edisud	Aix-en-Provence

世界の山旅



総合ツアーカタログをご請求下さい。

トレッキングからエクスペディションまで。

ALPINE TOUR

アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、
ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、
アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、
アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地域への
主催ツアーやインフォメーションを用意しております。
もちろん日本国内の山旅も企画しております。
トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための
航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとに
ご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録一般旅行業第490号　日本旅行業協会正会員　IATA公認代理店

アルパインツアーサービス株式会社

東　京	〒105	東京都港区新橋2-13-8(新橋東和ビル5階)	☎03(3503)1911(代表)
名古屋	〒450	名古屋市中村区名駅3-23-6(第2千福ビル8階)	☎052(581)3211(代表)
大　阪	〒550	大阪市西区靱本町1-5-18(本町天祥ビル9階)	☎06 (444)3033(代表)
広　島	〒730	広島市中区小町2-28(小町ハイツ5階)	☎082(542)1660(代表)
福　岡	〒810	福岡市中央区舞鶴1-2-8(セントラルビル5階)	☎092(715)1557(代表)
仙　台	〒980	仙台市青葉区一番町2-3-20(第3日本オフィスビル7階)	☎022(265)4611(代表)
札　幌	〒060	札幌市東区北9条東2丁目 北海道地区総代理店 ㈱りんゆう観光	☎011(711)7106(代表)

講談社MOOK
週刊現代

東京に美味佳肴アリ

東京うまいもの屋

'96

【全店地図付き】地域別・五十音順、わかりやすい索引付き



●食通の定番「東京うまいもの屋」。96年度版はさらにスケールアップして
過去最高の700店を料理別に収録!

700

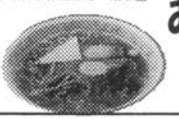
好評発売中!

〈巻頭特集〉これは便利だ!駅から5分、ランチからデートまで、駅別選りすぐり140店

「駅から5分!」の人気のお店



鍋料理、和食・懐石・割烹、ラーメン、ギョーザ、冷やし中華、魚介料理、ふぐ料理、郷土料理、飲み処・味処、ピアホール、BAR、寿司、どんぶり、そば・うどん、おでん、焼き鳥、てんぷら・天丼、うなぎ、焼き肉、ステーキ、すき焼き・しゃぶしゃぶ、洋食、カレー、韓国料理、台湾料理、中国料理、フランス料理、イタリア料理、世界の伝統料理、食べ放題



おいしい得情報が満載です。

■B5判/オールカラー
■定価1700円(税込)

講談社

軽く、コンパクトなテントのことなら

ARAI TENT

㈱アライテント

〒175 東京都板橋区赤塚5-13-7 Tel.03(3939)6481

アルファ米

お湯を注いで15分、
ホカホカのご飯ができあがり

姉妹品 アルファ赤飯

装備を
へらせ

時間を
かせげ



お求めは全国有名スポーツ用品店で……

尾西食品株式会社

本社 東京都港区三田4－15－36 メゾン・ド・聖坂内
TEL 03－3452－4020 FAX 03－3456－3783
大阪 大阪市淀川区新高1－15－41
TEL 06－391－5995 FAX 06－396－6156

旅するあなたのサポート隊

パッケージツアー、グループ・トレッキング等は 西遊旅行 が、格安航空券は キャラバンデスク が、皆様のお手伝いをいたします。

秘境の地へ
世界の山々へ



ネパールではカトマンズ連絡事務所の社員が、皆様のお世話をいたします。





トレッキング部門は、JAI・HIMAL TREK-KING が、一般観光部門は SAIYU・TRAVEL がそれぞれ皆様のお手伝いをいたします。スタッフは日本語も話せますので、お気軽にご利用下さい。



～ 地球の果てまでお手伝い ～

ディスカウント航空券の専門相談室

CARAVAN DESK SAIYU TRAVEL

キャラバンデスク

東京☎03-3237-8384㈹

大阪☎06-362-6060㈹

…… シルクロード・秘境旅行・トレッキング・海外登山のパイオニア ……

運輸大臣登録一般旅行業第607号

JAI HIMAL TREKKING SAIYU TRAVEL

ロイヤルネパール航空
旅客代理店

株式会社 西遊旅行（さいゆうりょこう）

本　　社　〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1 岩波書店アネックス５F
☎ 03(3237)1391㈹ FAX 03(3237)1396

キャラバンデスク東京（格安航空券の専門デスクです）（住所同上）
☎ 03(3237)8384㈹ FAX 03(3237)0638

大阪営業所　〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル５F
☎ 06 (367) 1391㈹ FAX 06 (367) 1966

キャラバンデスク大阪 ☎ 06 (362) 6060（住所・FAX 同上）

カトマンズ連絡事務所 P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
（JAI HIMAL TREKKING） ☎ 224248, 221707（アンナプルナホテル並び）

Grandking


グランドキングGK-40
ディルゴルGTX

あなたの翼になりたい。

靴ヒモをきゅっと結べばもう、はいていることさえ忘れそう。それでいてフィールドに踏み出せば大地をしっかりつかんでいる。歩くほどに、足ばかりか、全身が、そして心までも軽くなる。そんなシューズをつくることは、とどのつまり"心地よさ"の科学なんだ。

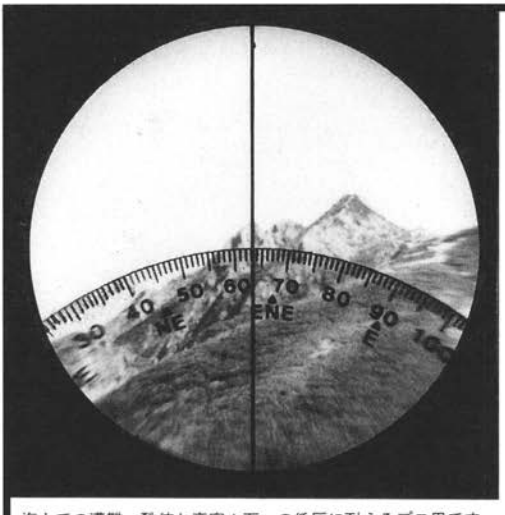
水への抵抗　Water Resistance　GORE-TEX®, SPORIA®
水にあふれた大地を闊歩する、そんなとき水を遮り、なおかつ蒸れない、そんな素材が靴を型どり快適さを維持します。

フィット　The Fit　オリジナルラスト(木型)
個性的な日本人の足、幅広も甲高も日本人にあったラスト(木型)の開発で丁寧につつみます。

衝撃吸収　Shock Absorb　PORON®
グランドキングはヤワな靴ではありません。衝撃を吸収するPORON®インソールと、ガードカウンターとがバランスよく組み合わされ、全体の強度を高め、ヘビーユースに耐えられます。これが、グランドキングの仕様です。

Caravan

製造・販売 ■ キャラバン 株式会社 〒170 東京都豊島区巣鴨1-25-7 ☎03-3944-2331代・大阪☎06-866-0505代

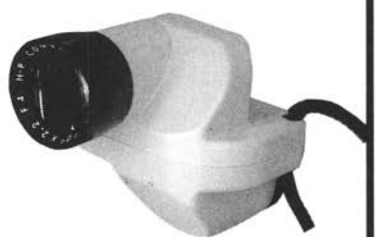


手のひらサイズの高精度方位鏡
ハイアイポイント
コンパスグラス HB-3

自信を持って山に行こう！
山座同定 迷走脱出に力強い味方です。

広視界10°高倍率の明るい視界内に見える目標がそのまま正しい磁気方位です。完全水密 耐圧水深50m 耐高度1万m 耐寒−25° 軽量78g水面浮上 フォーカスフリー 方位自動追尾

つや消し黒	¥17,000	LED照明付	¥19,800
黄橙色メタリック	¥18,000	(消費税別) 送料	¥600

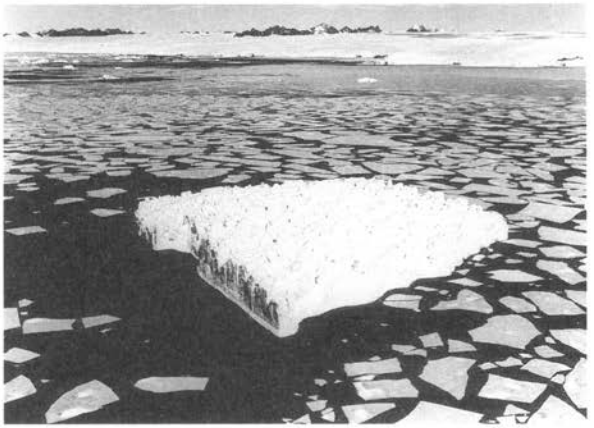


海上での遭難、酷使と高空1万mの低圧に耐えるプロ用です。
その信頼と精度を山の行動と安全にお使い下さい。
カタログ代無料、電話　FAX　葉書でどうぞ。

東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
株式会社　石神井計器製作所
電話03-3928-5411　FAX03-3928-5411

コンパスグラスは狙った目標を絶対に逃がしません。

95年度日本芸術大賞受賞。
白川義員のカメラアイは、称賛をもって迎えられた。



下巻「永遠の時空」より

『南極大陸』は氏の永遠のテーマである〝地球再発見による人間性回復へ〟を結実させた白川芸術の極点ともいうべき写真集です。前人未踏の南極大陸一周撮影を達成、最高峰ヴィンソン・マッシフ山の登頂にも成功するなど、数々の世界初を刻みつつ、地上に唯一残された無垢の大陸の全貌を完璧に捉えました。

白川義員作品集

南極大陸

ANTARCTICA 全2巻・小学館

上巻 超絶の天然
下巻 永遠の時空

好評発売中
定価(各)39,000円(税込)
A3判／カラー128ページ／解説44ページ
地図4ページ／総176ページ／ケース入り

最美の世界をめざした、
熱く激しい魂の軌跡がいま明かされる。
『南極大陸』の撮影秘話。

南極撮影・12万キロ

前人未到、大陸一周に賭けた21年間の記録

白川義員



95年度日本芸術大賞を受賞した空前絶後の写真集『南極大陸』。決死の撮影に賭けた写真家白川義員の21年におよぶ迫真の撮影秘話が明かされる。

好評発売中／定価1,700円(税込) 四六判／232ページ 小学館

M·KATAGIRI SINCE 1914 TOKYO JAPAN

山と山スキーの専門店

クレッターザック
キスリング
夏冬用テント
イギリス、オーストリア・
オリジナルセーター

片桐

〒113 東京都文京区湯島3－38－9

Tel 03(3831) 1 7 9 4
FAX 03(3831) 6 6 8 0

信頼されて70年

山とスキー用品専門店

TAKAHASHI

山友社 たかはし

四谷本店 〒160 四谷1－20 相田ビル TEL (3351)7432・1912

実業之日本社の山と旅の本

＊定価はすべて消費税込みです。

山は魔術師 —私の山岳写真—
田淵行男　B5判函入／定価4500円

車窓の山旅・中央線から見える山
山村正光　A5変型判／定価1960円

関東百山 —100の山へのガイド・エッセイ—
浅野孝一・打田鉄一・楠目高明・横山厚夫
A5変型判／定価1850円

一日の山・中央線私の山旅
横山厚夫　A5変型判／定価2000円

展望の山旅(正)(続)(続々)
藤本一美・田代博
A5変型判／定価(正)1960円(続)(続々)2000円

カメラの山旅 —山の写真とカメラハイク12カ月—
川口邦雄　A5変型判／定価2000円

甲斐の山旅・甲州百山
蜂谷緑・小俣光雄・山村正光
A5変型判／定価1900円

雲取山に生きる
新井信太郎　A5変型判／定価1750円

富士の見える山小屋
工藤隆雄　A5変型判／定価1900円

花の山旅・日本アルプス
新妻喜永　A5変型判／定価2200円

スケッチの山旅12カ月
山里寿男　A5変型判／定価2400円

黒部の山賊 —アルプスの怪—
伊藤正一　B6判／定価1200円

イタリヤところどころ —光の国の歴史・美術散歩—
西本晃二　四六判／定価1650円

ブルーガイド・ワールド

⑪スイス　定価1400円
⑯ヨーロッパ・アルプス　定価1400円
㉔ネパール・ヒマラヤ・トレッキング　定価1800円
㉜アラスカ　定価1200円
㉝ニュージーランド　定価1200円

●ご注文はもよりの書店へお願いします。品切れの場合でも、書店へご依頼になれば取り寄せてくれます。
●書店に遠くご不便の方は小社に送料(冊数に関係なく一律300円)を加算してご送金下さればお送りします。(前金制・切手代用一割増)
〒104 東京都中央区銀座1-3-9／振替00110-6-326

日本山岳会創立90周年記念キャンペーン

この機会に、「山の文化的遺産」をぜひお揃え下さい！

《日本山岳会企画編集商品特別頒布》

①覆刻日本の山岳名著
日本山岳会企画・編集　大修館書店発行
18点22冊＋解題書＋特別資料セット
定価195,700円
会員特別割引価格 176,130円

②新選覆刻日本の山岳名著
日本山岳会企画・編集　大修館書店発行
20点29冊＋解題書＋特別資料セット
定価180,250円
会員特別割引価格 162,225円

③日本山岳会「会報」第一集
日本山岳会企画・編集　大修館書店発行
覆刻合本1号～100号（昭和5年～15年）
頒価12,360円
会員特別割引価格 11,124円

④日本山岳会「会報」第二集
日本山岳会企画・編集　大修館書店発行
覆刻合本101号～200号（昭和16年～昭和33年）
頒価14,420円
会員特別割引価格 12,978円

⑤図説百科山岳の世界
N.ディーレンファース 他著　西堀栄三郎・宮下啓三 監訳　大修館書店発行
定価18,540円
会員特別割引価格 16,686円

＊①の山岳名著セットには③が、②の山岳名著セットには④が含まれています。

【会員特別割引価格実施期間】　1996年3月末まで
【申込・問合せ先】　日本山岳会事務局（電話03-3261-4433）
【申込方法】　振替用紙に商品名・部数・金額・住所・氏名・会員番号を明記の上、直接事務局へお申込み下さい。
＊それぞれ部数僅少につき申込順に送付致しますが、品切れの場合はご容赦下さい。

大修館書店
〒101　東京都千代田区神田錦町3-24　電話03-3294-2221

平凡社・山と旅の本

《東洋文庫》

186 秋山記行・夜職草　鈴木牧之／宮栄二 校注
『北越雪譜』の著者による信越秋山郷探訪記。併せて『笛場山記行』自叙伝『夜職草』を収録。●定価2,884円（税込）

240 日本奥地紀行　イサベラ・バード／高梨健吉 訳
明治初期の日本を、東京から北海道まで旅したイギリス女性の克明な記録。本邦初訳。●定価2,884円（税込）

472 江戸温泉紀行　板坂耀子 編
江戸後期の有馬・熱海・箱根・草津、今はなき湯倉などの温泉町の様子をいきいきと描く。●定価2,369円（税込）

544・550 日本旅行日記《全2巻》　アーネスト・サトウ／庄田元男 訳
サトウの残した膨大な日記から、日本旅行にかかわる部分を抄出。●定価1＝2,781円・2＝2,884円（税込）

555・558・560 東洋紀行《全3巻》　G.クライトナー／大林太良 監修　小谷裕幸・森田明 訳
19世紀後半、知られざる東アジア調査行の記。揺れ動くアジアを活写。●定価1・2＝各3,090円／3＝2,884円（税込）

572・573 朝鮮奥地紀行《全2巻》　イサベラ・バード／朴尚得 訳
「日本奥地紀行」につづくアジア紀行。朝鮮史のなかでも重要な一九世紀末の実態を記録。●定価1・2＝2,884円／2＝3,090円（税込）

578 セイロン島誌　ロバート・ノックス／濱屋悦次 訳
十七世紀虜囚英国船員による記録。二〇年に及ぶ現地生活で見聞した当時のセイロン島の姿を克明に語る。●定価3,090円（税込）

586 日本アルプス登攀日記　ウォルター・ウェストン／三井嘉雄 訳
日本近代登山の父ウェストンが山に携行し、日々の出来事を書きとめたフィールド・ノートの翻訳。●定価2,781円（税込）

鹿野忠雄　台湾に魅せられたナチュラリスト　山崎柄根
戦前、台湾にとりつかれ優れた学問的足跡を遺した男の劇的な生涯。日本エッセイスト・クラブ賞受賞。●定価2,700円（税込）

〒152　東京都目黒区碑文谷5-16-19／☎03-5721-1234／振替00180-0-29639

全国各地の美味・珍味を満載。
取り寄せて味わうもよし、
贈り物にもよしの、
便利な産直ガイド。

北海道から沖縄まで、代表的な名産と珍味を都道府県別に紹介。好物・おいしいものを取り寄せたいとき、お中元、お歳暮などの贈答用のカタログとして、旅先での買物、おみやげのガイドとして、いろいろに活用できる便利な一冊。

全国 名産・珍味 うまいもの



￥1,500

●全国のうまいもの180を厳選して紹介！

北海道＝天然貝柱・新巻鮭／青森＝八戸するめ／秋田＝きりたんぽ／岩手＝卵めん／宮城＝白石温麺／山形＝牛肉さくらんぼ漬／福島＝天然なめこ／新潟＝献上鮑／富山＝鱒ずし／石川＝ごり佃煮／福井＝小鯛ささ漬／栃木＝揚巻湯波／群馬＝水沢うどん／茨城＝だるま納豆／千葉＝鮒すずめ焼／埼玉＝岩茸／東京＝くさや／神奈川＝梅花はんぺん／山梨＝ブドウ酒／長野＝馬さし／静岡＝マスクメロン／愛知＝八丁味噌／岐阜＝筏ばえ／滋賀＝鮒ずし／京都＝西京味噌／大阪＝塩昆布／奈良＝三輪そうめん／和歌山＝ほろほろ鳥くんせい／兵庫＝いかなご佃煮／広島＝広島かき／鳥取＝松葉がに／島根＝出雲そば／山口＝ふく一夜干／香川＝さぬき手打うどん／徳島＝すだち／高知＝酒盗／愛媛＝五色そうめん／福岡＝明太子／佐賀＝わらすぼ／長崎＝からすみ／大分＝かぼす／熊本＝辛子れんこん／宮崎＝焼やまめ／鹿児島＝さつま揚／沖縄＝パパイヤ漬　他多数

富士書店　東京都文京区本郷４丁目１-14
電話03-3814-0498

藪をこぎ、沢をつめ、岩を攀じて頂を踏む

雪の山の声

高見和成著　●定価2500円

「広島山の会」を舞台に、黒部の谷・ヒマラヤの高峰を駆け抜けてきたトップ・クライマー初のドキュメント。伯耆大山からの自力生還と心優しき勇者たちとの交遊録をも収める。

原　真の海外登山三部作　●定価各2500円

ヒマラヤ・サバイバル

——登山戦略論

海外の山やトレッキングを目指す人の必携書。同時に、教育界やビジネス社会へのヒントにあふれている。

還らざる者たち——極限にきらめく生と死

世界の高峰を舞台に描く山岳風雲録。自らの登山を通して極限状況の人間を鮮やかに活写。

頂上の旗〔新版〕——生と死のあるところ

登山界の論客による辛口エッセイと文明論。旧版に黒澤明、今西錦司論等17編を増補。

遠く高く——大西　宏遺稿集

エベレスト登頂、北極点踏破。南極行直前にナムチャバルワに逝く。探検への想いと葛藤を、幼少期からの膨大な日記と記録でつづる。　定価6500円

未知なる山・未知なる極地

●西堀榮三郎選集第2巻　定価3500円

（定価は全て税込）

悠々社

〒162 東京都新宿区神楽坂6-58 佐藤ビル2F
TEL 03－5261－0052　FAX 03－5261－0054

よりよきテントの最高峰を めざすヨシダテント！

1978年　植村直己北極点単独旅行
1978年　日本大学北極点遠征隊
1981年　植村直己冬期エベレスト登山隊
1981年　明治大学エベレスト登山隊
1981年　早稲田大学K2登山隊
1984年　第26次南極観測隊
1985年　和泉雅子北極点遠征隊
1985年　第27次南極観測隊
1987年　風間深志北極点遠征隊
1988年　日本テレビ〝チョモランマ〟報道隊
1989年　和泉雅子北極点遠征隊
1989年　大韓民国北極点遠征隊



小さな店の大きな自信！

株式会社
ヨシダテント

〒167　東京都杉並区桃井1-3-3
☎03(3399)2548・FAX03(3395)4655

山岳名著選集

実際のドラマチックな体験をもとに、世界屈指のアルピニストたちが綴った感動の物語。　〈各巻A5判〉

ダウラギリ登頂
マックス・アイゼリン　著／横川文雄　訳　定価1545円

エヴェレスト登頂記
ジェームス・アルマン　著／丹部節雄　訳　定価2575円

パミール —シルクロードの城塞—
田村俊介　編著　定価2575円

遙かなる天山 —天山に魅せられた探検家セミョーノフ伝—
A・アルダン・セミョーノフ　著／田村俊介　訳　定価2575円

"遠い頂"ヌプツェ —北西峰初登頂の記録—
登歩渓流会　編著　定価2575円

プモ・リ —世界で最も美しい山—
ゲルハルト・レンザー　著／織方郁映、橋本　信　共訳　定価2575円

アムネマチン初登頂
土越山岳協会　編著　定価2472円

スイスの山々 —SAC山案内人の体験記—
オレル・フュスリ社　編／岡沢祐吉　訳　定価1957円

北アルプス白馬讃歌 —山案内60年の回想—
大谷定雄　著　定価1957円

ナンガ・パルバート回想 —闘いと勝利—
カール・M・ヘルリッヒコッファー　著／岡沢祐吉　訳　定価1957円

氷山雪嶺二千年 —中国登山史話—
周　正　著／譚佐強・田川常雄　共訳　定価2266円

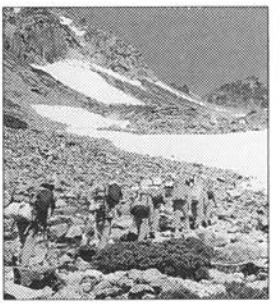
スイス —山案内人の手帳より
岡沢祐吉　著　定価2266円

写真集　北米大陸の屋根

ロッキー山脈

アラスカからニューメキシコ州までうねる分水界——。大自然と野生動物の秘境、ロッキー山脈の魅力を探る写真集。

J・A・クラウリス＝写真／ジョン・ガルト＝文／B4判上製／定価6,000円（税込）



豪華写真集

天山

アムネマチン

中国新疆人民出版社　編
ベースボール・マガジン社　訳
A4判変型上製／定価7107円

中国登山ハンドブック

上越山岳協会　編／中国人民体育出版社　監修
A5判
定価1854円

山登りのための体力トレーニング

窪田　登　著
新書判／定価855円

●不朽の名著、復刻なる！

湖底幻影

■造本・体裁
●第1巻　背三つ目綴り（225×153㍉）マット入り
●第2巻・第3巻　A4変型判上製カバー装（287×210㍉）

明治34年、北魚沼郡長の発金による銀山探検隊が組織された。学問と産業開発の両面より、それぞれの専門家32名、案内人と人夫を含む総勢58名。その際の記録が「銀山平探検記」となって結実したのであった。それをそのまま復刻したのが第一巻。わかりやすい現代文にしたものが第二巻、第三巻には諸家の貴重な周辺登山紀行を集録。よって、湖底に沈んだ銀山への鎮魂となす！

全3巻
小島六郎　監修
定価2800円

山岳研究会

登山ハンドブック・シリーズ

各巻A5判

- 登山教本　定価1009円
- 世界の山岳　定価1009円
- 山の心　定価1009円
- 山の自然科学　定価1009円
- 山の資料　定価1009円

体育・スポーツ総合出版
株式会社 ベースボール・マガジン社
〒101東京都千代田区三崎町3-10-10☎03(3238)0181※宅配も可(送料380円)

A4判横見開きに展開する
ヨーロッパ・アルプスの大展望！

パノラマアルプス

藤田弘基 写真集

◎A4判上製短辺綴じ
◎総96ページ（カラー80ページ）
◎定価4,900円（税込）

モン・ブラン山群、ヴァリス山群、
ベルナー・オーバーラント山群、
ベルニナ山群、ドロミテ山群、ホーエ。
タウエルン山群の六つの山群にある
夜明けから日没までの荘厳な風景を、
A4判横見開きのパノラマで収録。



山と自然を愛する人々へ贈る、珠玉のエッセイ

わが山と旅
秋谷 豊 著
抒情詩人が綴る、詩と山の50年。詩16篇収録。
●2,800円

緑の牧歌
太田愛人 著
農への回帰、野に生きることの素晴らしさ。
●2,800円

私のヒマラヤ紀行
茂市久美子 著
童話作家が描くヒマラヤ・トレッキング紀行。
●1,800円

もう登らない山
串田孫一 著
もう登らない山だからこそ、真の姿が見えてくる。
●2,800円

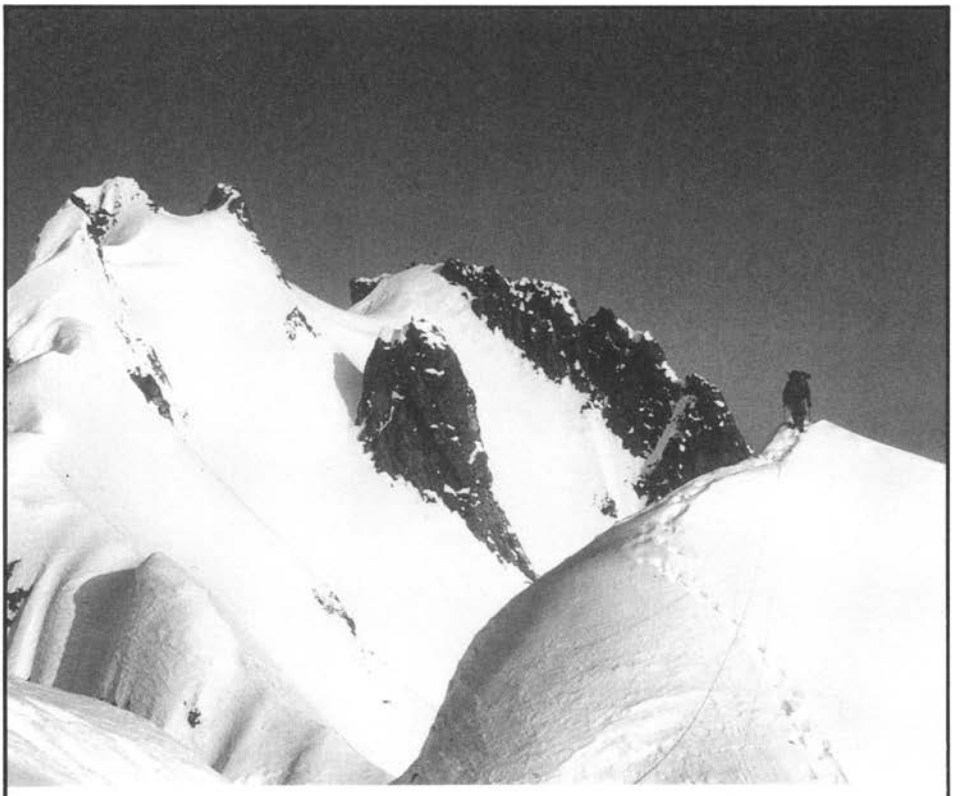
高原の花物語
手塚宗求 著
霧ヶ峰高原の山小屋主人が綴る珠玉のエッセイ。
●2,800円

息子と行く山
北原節子 著
幼い息子とともに高原の風に吹かれて歩いた日々。
●2,800円

新編・邂逅の山
手塚宗求 著
山の生活者として幾星霜。一人の精神の形成史。
●2,800円

雲をつかむ話
三宅 修 著
山岳写真家ならではの視点で語る、山との対話。
●2,800円

恒文社 〒101東京都千代田区三崎町3-10-10
●お近くの書店でお求めください。●着払い宅配便のご注文は、直接小社へ。（宅配料380円）☎03-3238-0181



SINCE 1975

mont-bell

FUNCTION IS BEAUTY

苛酷な自然状況においてこそ、
最大限に能力を発揮する
モンベル アルパインクロージング。

モンベル

本　　社●大阪市西区新町1-33-20 〒550 ☎06-531-4761代
東京営業所●東京都渋谷区恵比寿南1-18-6 〒150 ☎03-3760-2131代

YAMA-KEI VIDEO COLLECTION

深田久弥の日本百名山

ビデオ版《全20巻》

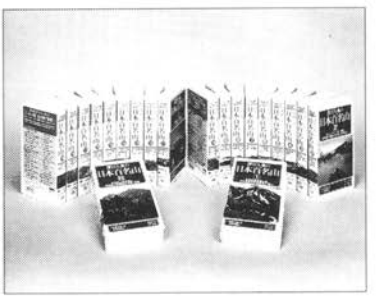
空撮と地上映像に登山地図を加えて構成した、見て楽しむ日本百名山

人気沸騰の「日本百名山」30万本突破!!
語り=相川 浩・深沢彩子　音楽=元道俊哉
企画・製作・発行・販売=山と溪谷社　映像提供=NHK
制作協力=㈱NHKクリエイティブ　㈱ウォーク

●税込価格各2800円●税込セット価格56000円
カラー各55分 VHS Hi-Fi STEREO

❶利尻岳・羅臼岳・斜里岳・阿寒岳・大雪山
❷トムラウシ・十勝岳・幌尻岳・後方羊蹄山・岩木山
❸八甲田山・八幡平・岩手山・早池峰・鳥海山
❹月山・朝日岳・蔵王山・飯豊山・吾妻山
❺安達太良山・磐梯山・会津駒ヶ岳・那須岳・魚沼駒ヶ岳
❻平ヶ岳・巻機山・燧岳・至仏山・谷川岳
❼雨飾山・苗場山・妙高山・火打山・高妻山
❽男体山・奥白根山・皇海山・武尊山・赤城山
❾草津白根山・四阿山・浅間山・筑波山・白馬岳
❿五竜岳・鹿島槍岳・剣岳・立山・薬師岳
⓫黒部五郎岳・黒岳・鷲羽岳・槍ヶ岳・穂高岳
⓬常念岳・笠ヶ岳・焼岳・乗鞍岳・御嶽
⓭美ヶ原・霧ヶ峰・蓼科山・八ヶ岳・両神山
⓮雲取山・甲武信岳・金峰山・瑞牆山・大菩薩岳
⓯丹沢山・富士山・天城山・木曽駒ヶ岳・空木岳
⓰恵那山・甲斐駒ヶ岳・仙丈岳・鳳凰山・北岳
⓱間ノ岳・塩見岳・悪沢岳・赤石岳・聖岳
⓲光岳・白山・荒島岳・伊吹山・大台ヶ原山
⓳大峰山・大山・剣山・石鎚山・九重山
⓴祖母山・阿蘇山・霧島山・開聞岳・宮ノ浦岳

中高年層をはじめ多くの登山者のバイブルとなっている作家深田久弥著『日本百名山』のビデオ版。このビデオは、ＮＨＫ衛星第２テレビで放映したもののノーカット版（未公開映像も収録）。空撮と地上映像に登山地図をも加えて構成したもので、各々の山の特徴がひと目でわかります。



〒105 東京都港区芝大門1-1-33　山と溪谷社　☎03(3436)4055《営業部》　振替口座 00180-6-60249

坂本直行の本

わたしの草と木の絵本 1,800円

雪原の足あと 3,914円

原野から見た山 4,300円

山・原野・牧場 1,800円

淡彩絵はがき
1集(再版)カラー8枚 800円
2、3、4集 カラー6枚 各 600円

島田 巽

山稜の読書家 4,017円

山・人・本 2,472円

三田幸夫

わが登高行 上 3,914円
下 4,635円

小谷隆一

山なみ帖 3,296円

山崎安治

登山史の発掘 2,575円

登山史の周辺 3,914円

織内信彦

快晴の山 2,575円

加藤泰安

森林・草原・氷河 2,575円

藤島敏男

山に忘れたパイプ 3,296円

望月達夫

折々の山 1,957円

忘れえぬ山の人びと 1,957円

渡辺公平

山は満員 2,266円

初見一雄

すこし昔の話 1,236円

伊藤秀五郎

北の山 続篇 2,781円

山の風物詩 1,442円

渡辺兵力

山旅の足音 1,442円

川崎精雄ほか

静かなる山 正 1,751円
続 1,854円

望月・岡田 共著

藪山迚歴 1,545円

山田・横山 共著

青空と輝く残雪の山々 1,339円

木南金太郎

日本の山登り記 1,545円

小方全弘

続ブータン感傷旅行 1,545円

グリンデルヴァルトの山案内人
ブラーヴァン 3,914円

カンチェンジュンガ縦走
カンチ登山隊 5,150円

遥かなる未踏の尾根
東海支部隊 4,944円

ナンダ・デヴィ縦走1976
デヴィ登山隊 4,017円

山の絵はがき

さわのひとし

山の便り(カラー6枚) 1,000円

エッチング(モノクロ8枚) 1,000円

センチメンタル(モノクロ8枚) 1,200円

足立源一郎

山の絵(カラー12枚) 1,200円

山の本 茗渓堂
〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1
電話 03-3291-9442 FAX 03-3295-2043
振替口座 00180-2-24723



編集後記

＊『山岳』第九十年の編集を終え、ほっとしている。記念号としては、やや軽いとの批判もあろうが、理事交代の年で準備不足もありご容赦をお願いしたい。内容的には従来の『山岳』の編集方針を踏襲し、記念特集として、巻頭で渡辺兵力さんに、山岳会創立から九十年の歩みと、百年に向けての展望を、お願いした。また婦人懇談会の足跡を振りかえり、将来への道を探る形の座談会は、一部の人しか知らない記録、業績を掘り起こし良いものになった。本誌制作の大詰めで今西壽雄元会長の訃報に接した。浪速高校山岳部のお話を、ご覧頂けなかったのが残念だ。ご冥福をお祈りする。

＊海外遠征の記録も日本山岳会のマカルー東稜、日大隊のエベレスト北東稜、愛知学院大のエベレット・サウスピラーという三つの新ルートからの登頂記録は、山岳会創立九十年に相応しいものであったと思う。本誌の編集を終えて、原稿を寄せられた皆様、編集制作にご協力頂いた方々に、心からの感謝と御礼を申しあげたい。

＊編集委員として高遠宏さん、関塚貞亨さん、南川金一さんの昨年までの三人の委員に残って頂いた。新しい委員は河西瑛一郎さん、松沢節夫さん、大学院で言語学を専攻中の吉田雅子さんと、途中から大関義明さんの参加があった。編集委員ではないが、図書室の田村典子さんには、内外の原典、史実について、チェックと調査の両面から助力を頂いた。吉田さんの校正段階での貴重な指摘とともに啓発されることが多く、感謝したい。ところで『山岳』の記事、記録は、その時の山岳会の状態を反映するものであり、今後とも会員各位のご協力をお願いいたします。

（田辺寿）

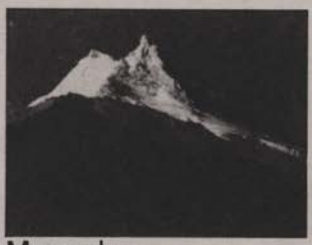
山岳　第九十年（通巻一四八号）
一九九六年一月十六日発行
価三五〇〇円
発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二）
電話　東京三二六一局四四三三番
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九
発行人　村木潤次郎
編集人　田辺寿
印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　東京三二九一局九四四二番
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七三三

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

ATLAS TREK

ビギナーのための冒険旅行から、未知の魅力を秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、それぞれのニーズにお応えし、新しいユニークな手づくりの旅をコーディネイトします。



Manaslu



Sagalmatha



Nanda Devi



Qomolangma



Kangchenjunga



Namcha Barwa

☆世界各地、日本の名峰へのトレックツアー、各種手配旅行、国内外航空券を取扱っております。

●お問合わせ・お申込みは…

運輸大臣登録一般旅行業第1167号

株式会社アトラストレック

〈東京〉**03-3341-0030**代
東京都新宿区三栄町23番地

〈大阪〉**06-341-9600**代
大阪府北区堂島2丁目3番33号, 4F

〈北海道地区総代理店〉**株式会社ノマド**
011-261-2639代
札幌市中央区南2条西6丁目－関ビル6F
運輸大臣登録一般旅行業代理店業第8618号

トレックなんでも相談

東日本地区 ☎0120-088482
西日本地区 ☎0120-884808
北海道地区 ☎0120-665-665

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol.90

1995